木花開耶姫の御同胞に附加することになつたらしいのである。山を三人の姉妹の神の座とする思想は、起りが自然であつたか、又は由つて來るところが久しいのか、少くとも伊豆の一國に特有の口碑でなく、又宗像三女神の古傳にも限られてゐなかつた。例へば陸中の早地峰・六角牛・石神の三山に於ては、大昔三人の處女がこの地に來り宿し、夜の間に妹の胸の上に降つた花の枝を、姉が窃かに取つて我が胸の上に載せ、それを驗にして最高の峰を得たといふ「夢取替」とよく似た話があることを「遠野物語」には錄してゐる。沖繩の古記には本島と久米島と八重山の萬年青岳と、この三所の神が同胞であつたと傳へてゐる。從つて「萬葉集」に詠じたのと全然別種なる三山の爭ひの物語も、嘗てはこの國には行はれてゐたのかも知れぬが、一たび公認の文獻がこれと比照せられることになると、それが假令輕々しい臆説であらうとも、他の民間の傳承は何れもこれに押され、次第に日蔭のものになつてしまふことは、昔も今日と異なる所がなかつたのである。而も文字の教育が社會のただ一部分に限られてゐる間は、古來の口碑はそれと交渉なく、なほ久しく併存することを得たかと思ふのは、既に一旦大山祇命説が成立つた以上は、如何に間違へても到底發生しやうのない奇怪な異傳が今以て諸國の僻村には一致して行はれてゐることである。靈山に屢々女人の結界を設け、これを侵さうとした比丘尼などが罰せられて石に化したといふ遺跡の存するのも、必ずしも佛法の教理又は必要ばかりではこれを説明することが出來ぬ。或はその山の姿を見る里方には、古來美人を產せず、產すれば必ず不幸を見ると言つたり、甚だしきは神、殊に壯齡の男子の山に入つて汚い事をするのを喜びたまふといふが如き、粗野なる言ひ傳へをさへ信じてゐる者があるのは、寧ろその根源の更に年久しいことを推測せしめる。所謂雅俗都鄙の解釋の隔絶してゐることは、特に山神に關する傳承に於て、その最も極端な例を見ることは事實であるが、さりとてこれに由つて日本に初めから二通りの信仰があつたものと迄は推論し難い。越前あちちの山の昔語りとして、古く知られてゐた山中分娩の奇事の如きは、一方には各地の獵人の祕傳の卷物にはその委曲を記し、更に他の一方には多くの記錄文藝の趣向となつて發達してゐる。これは固より神代史の磐長姫の與り知るところではなかつたけれども、而も磐神の名を以て山靈を呼びかける習はしは古かつた故に、これを木花開耶姫の御姉の如く説明するやうになつたのも自然である。

【參考】山の人生　柳田國男　〔柳田(國)〕

病草紙（やまひのさうし）　繪卷　【解説】名古屋關戸守彦氏藏一卷。鼻頭の黑き男、不眠症の女、風病の男、小舌のある男、肛門のない男、男女兩性の人、目のかすむ男、齒の搖ぐ男、肛門の數多ある男、毛虱に苦しむ男、霍亂の女、頭のあがらぬ法師、息の臭い女、居眠りする男、顏にあざある女の十五段に白子の摸寫圖を併せて十六段一卷をなしてをり、他に掛軸で侏儒と脊中高き男の二段が同家に藏されてゐる。この外に原富太郎氏藏白子、益田男爵藏鷲に眼をつゝかせる女、村山龍平氏藏惡夢に襲はれる男の三圖が知られてゐる。「餓鬼草紙」や「地獄草紙」（各別項）と等しく、詞は寂蓮、繪は土佐光長の筆と傳へられてゐるがこれも亦明かでない。その畫致から見れば、等しく藤原末葉か鎌倉の最初頭を下らぬ繪佛師一派の製作と思はれる。而して「地獄」や「餓鬼」ほどに直接宗教的の意味があつて畫いたものか否かは詳かでないが、世に厭はしき病氣の數々を畫き列ねて、醜惡の態を現はしてゐるところに、また等しく當時のこの方面に對する注意と興味のほどが窺はれるのみならず、人間の病相と云ふが如きはまた自ら六道や三世因果の思想を背景としてゐるものとも思はれ、且つはこれ等の描寫樣式も頗る近似してゐるので、「地獄」「餓鬼」「病」の三草紙の如きは、六道繪として互に關聯する製作であらうとの説も出てゐる。もとより「餓鬼」や「地獄」などに比べて異色もあるが、醜惡の諸相に見る機微を捕へて、巧みに狀景を活寫する點に於ても、とにかく相匹敵すべき製作である。〔田中(一)〕

病草紙（關戸守彦氏藏）

山姥（やまうば）　「鬼女物の諸曲」を見よ。

山姥（やまうば）　傳説　【解説】説話に出て來る山姥と、我々の傳説が保存してゐることが、先づ最初に注意せられる。前者の有名なのは牛方山姥、それから西洋の赤頭巾を思はせる「天道さん金の綱」といふ話などであるが、奥州では瓜子姫の勁敵をも、アマノジヤクといふ代りに山母としたものが多い。何れも兇暴でやたらに人を食ひ、又殘虐に處罰せられてゐる。鬼婆の異名としか考へられないものばかりである。ところが傳説の方で、昔或る山に山姥が住んでゐたと言ふ場合には、大抵は物懐かしい記憶が主になつて、それは怖ろしい化性などとは推測し得ないのを常としてゐる。ちやうど諸曲の「山姥」が「紅葉狩」の鬼女と大よそ同じ舞臺で舞つてゐるにも拘はらず、これを親類緣故のある者とは見られないのと同じであつた。信州は今でも山姥の故郷にふさはしく、これに關する無數の傳説をやゝ漠然と保存してゐるが、試みにこの地方の故老に山姥とはどんなものかと問へば、妖怪とは答へる者が少さうに思ふ。大體に年の暮の寒くなつた頃に、彼女は山から出て來るものの如く考へられ、年取りの晩の飾り木の中にも、荒神松の代りに山姥の松といふのが立てられ、その名の起りは既に忘れてゐる。所々の由緒ある暮の市には、必ず最後に山姥が買物に來るといひ、又山姥が小さな德利を携へて、二斗の酒を買ひに來たといひ、それを疑はずに量つて賣つて遣つた家が、その後繁昌したといふ話なども傳はつてゐる。九州四國の山に近い里でも、或は山姥から貰つたといふ精巧な雛子を、重寶にしてゐる舊家があつたり、又は

山中に入つて山姥の緒つぐねといふ物を拾つて來たら、それが俵藤太の物語にもあるやうに、取れども盡きぬ絲卷であつたといふ話もある。東海道の各地にも山姥が訪問して來たといふ話を、口碑に有つてゐる舊家は多い。その用向きは、ただ草臥れたから休むといふ【解説】能の「山姥」に基づく。これを材として正德二年七月大阪竹本座に上場された近松門左衛門作の操淨瑠璃「山姥四季英」（變化）の中で演じたもの等が著はれてゐる。次いで天明五年十一月桐座「四天王大江山入」（後出）に至つて、座で中村富十郎が、「道行山姥」（七變化）を演じたのや、安永九年七月市村座で二代瀨川菊之丞が「山姥四季英」（變化）の中で演じたもの等が著はれてゐる。次いで天明五年十一月桐座「四天王大江山入」（後出）に至つて、役三津五郎）の山巡り、山賤笊藏實は卜部季國（市川男女藏）と怪童丸（二役中四郎）との力競べなど、「四天王大江山入」に殆ど同じ。

【邯鄲菊蝶】長唄　變化物　〔通稱〕「足曳の山姥」「冬の山姥」〔初演〕文化六年四月中村座「秋葉權現廻船話」第二番目大切〔作詞〕二代瀨川如皐〔立唄〕富士田千藏〔作曲〕九代杵

何れもこれに押され、次第に日蔭のものになつてしまふことは、昔も今日と異なる所がなかつたのである。而も文字の教育が社會のまだ一部分に限られてゐる間は、古來の口碑はそれと交渉なく、なほ久しく併存することを得たかと思ふのは、既に一旦大山祇命說が成立つた以上は、如何に間違へても到底發生しやうのない奇怪な異傳が今以て諸國の僻村には一致して行はれてゐることである。靈山に屢々女人の結界を設け、これを侵さうとした比丘尼などが罰せられて石に化したといふ遺跡の存するのも、必ずしも佛法の敎理又は必要ばかりではこれを說明することが出來ぬ。或はその山の姿を見る里方には、古來美人を產せず、產すれば必ず不幸を見ると言つたり、

病草紙 やまひのさうし 繪卷【解說】名古屋關戶守彥氏藏一卷。鼻頭の黑き男、不眠症の女、風病の男、小舌のある男、肛門のない男、男女兩性の人、目のかすむ男、齒の搖く男、肛門の數多ある男、毛虱に苦しむ男、癲亂の女、頭のあがらぬ法師、息の臭い女、居眠りする男、顏にあざある女の十五段に白子の摸寫圖を併せて十六段一卷をなしてをり、他に掛軸で侏儒と脊中高き男の二段が同家に藏されてゐる。この外に原富太郎氏藏白子、益田男爵藏鶏に眼をつゝかせる女、村山龍平氏藏惡夢に襲はれる男の三圖が知られてゐる。「餓鬼草紙」や「地獄草紙」（各別項）と等しく、詞は寂蓮、繪は土佐光長の筆と傳へられてゐるがこれも亦明かでない。その畫致から見れば、等しく藤原末葉か

彥氏藏）

背景としてゐるものとも思はれ、且つはこれ等の描寫樣式も頗る近似してゐるので、「地獄」「餓鬼」「病」の三草紙の如きは、六道繪として互に關聯する製作であらうとの說も出てゐる。もとより「餓鬼」や「地獄」などに比べて異つた特色もあるが、醜惡の諸相に見る機微を捕へて、巧みに狀景を活寫する點に於ても、とにかく相匹敵すべき製作である。【田中（一）】

あつた信州には今でも山姥の故郷にふさはしく、これに關する無數の傳說をやゝ漠然と保存してゐるが、試みにこの地方の故老に山姥とはどんなものかと問へば、妖怪とは答へる者が少さうに思ふ。大體に年の暮の寒くなつた頃に、彼女は山から出て來るものの如く考へられ、年取りの晩の飾り木の中にも、荒神松の代りに山姥の松といふのが立てられ、その名の起りは既に忘れてゐる。所々の由緒ある暮の市には、必ず最後に山姥が買物に來るといひ、又山姥が小さな德利を携へて、二斗の酒を買ひに來たといひ、それを疑はずに量つて賣つて遣つた家が、その後繁昌したといふ話なども傳はつてゐる。九州四國の山に近い里でも、或は山姥から貰つたといふ精巧な帷子を、重寶にしてゐる舊家があつたり、又は

山中に入つて山姥の緒つぐねといふ物を拾つて來たら、それが俵藤太の物語にもあるやうに、取れども盡きぬ絲卷であつたといふ話もある。東海道の各地にも山姥が訪問して來たといふ話を、口碑に有つてゐる舊家は多い。その用向きは、ただ草臥れたから休むといふのもあつたが、大抵は臼とか鍋とかいふ道具を借りに來たといつて、現にその品物が今でもあつたり、又は家の娘が機を織つてゐる窓に近よつて、助言をしたとか勞苦を助けたとかいふので、そのことは既に山姥の能の詞章の中にもあるから、近頃に始まつた俗信でもないのである。今一つのしをらしい傳說は、山姥自らが山中で布を織り、又深山で兒を產んで、それを育てて山々の主にしたといふことである。「臥雲日件錄」（別項）にはその說が筆錄せられ、又國々にも似た說があつて、この風聞もさほど空なものでなかつた。遠江の秋葉の奥山の古傳は、緣起の中にも述べられてゐるが、阿波の劍山々麓にも山姥の子育て岩などと稱して子を連れて出て來るといふ靈地が所々にある。さうして食はれたとか襲はれたとかいふ說は少いのである。所謂食はず女房が男を風呂桶に入れて擔いですた〳〵山へ還つたといふのは昔話の方であるが、これにもなほ平和なる婚姻交通の名殘を留めてゐる。阪田金時の生ひ立ちに關する傳說は、近世書册に錄されて急に展開してしまつたが、木曾にも足柄にも前からさういふ話があつたものとすると、これが又大體に口で傳へてゐる各地の山の昔話とも一致するのである。姥といふ語のために今日の木花開耶姫信仰と全く二つの分れたものになりかゝつてゐるが、これも亦以前の日本人の山を崇敬し、又感謝した習慣の名殘であることは、ほぼ確かであり、同時に又この傳承の精細なる討究によつて、昔話といふものの傳說と異なる重要點を明かにする事が出來ると思ふ。【柳田（國）】

山姥 やまうば 所作事【解說】能の「山姥」に基づく。これを材として正德二年七月大阪竹本座に上場された近松門左衞門作の操淨瑠璃「嫗山姥」（別項）の第四段目切が、後の山姥物の原據である。【諸本】日本歌謠集成（第九・十卷）・歌謠音曲集（日本名著全集）・日本音曲全集（第一・三・八・九卷）・舞踊劇集（日本戲曲全集）等所收。【沿革】歌舞伎では能の「山姥」によつて早くから行はれ、「落葉集」（元祿十七年刊）にも「山姥」は見えてゐるが、就中、寶永四年

四天王大江山入（錦繪）

十一月大阪篠塚座の「百魔山姥」で、篠塚庄松の演じた山姥の所作が名高い。「嫗山姥」によつたものでは享保八年十一月江戶市村座で、二代三條勘太郎の山姥で演じたのが古く、豐後節では、寶曆十二年七月、同座の富本節「繰殿軒漏月」が古い。富本の「山姥」は俗に「二人金時」と呼ばれ、二代瀨川菊之丞の傾城姿の山姥が市村龜藏と中村助五郎との金時を相手にしての所作であつた。長唄では寶曆六年中村座で中村富十郎が、「道行山姥」（七變化）を演じたのや、安永九年七月市村座で二代瀨川菊之丞が「山姥四季英」（變化）の中で演じたもの等が著はれてゐる。次いで天明五年十一月桐座の常磐津節「四天王大江山入」（後出）に至つて、山姥としての形式を備へ、その後の山姥物の基礎となり、豐後諸流に長唄に種々作られたが、多く顧見世狂言に上演された。左に代表作で且つ傳存する曲を擧げる。

【四天王大江山入】常磐津【通稱】「古山姥」「遠近の山姥」【初演】天明五年十一月桐座「男山娘源氏」第二番目【作詞】瀨川如皐【太夫】常磐津兼太夫【作曲】鳥羽屋里長。下の卷の曲のみ傳存。【振附】二代西川扇藏【內容】足柄山の溪邊に御幸之助（二代市川門之助）と初音姫（三代瀨川菊之丞）とが大江山衣洗の見得から色模樣があり、源賴光（二代坂東三津五郎）は山賤李右衞門（五代市川團十郎）に案內されて、山路に分け入る。山姥（二役菊之丞）は怪童丸（二役門之助）に山めぐりの所作を見せ、又李右衞門の所望で廓の仕形話をする。怪童丸と山賤との力競べがあり、そこに賴光が來て怪童丸を召抱へ、坂田の金時と名乘らせる。李右衞門實は足柄山神の化現となる。

【母育雪間鶯】富本【通稱】「山姥」「三津五郎山姥」【初演】文化二年十一月「清和源氏二代將」第二番目大切【作詞】櫻田治助【太夫】二代富本豐前太夫【作曲】鳥羽屋里長【振附】藤間勘十郎。曲のみ傳存。清元にも移調されて現存。【內容】源賴光（三代坂東三津五郎）と花園姫（五代岩井半四郎）との色模樣から、山姥（二役三津五郎）の山巡り、山賤斧藏實は卜部季國（市川男女藏）と怪童丸（二役半四郎）との力競べなど、「四天王大江山入」に殆ど同じ。

【郡鄙園菊蝶】長唄變化物【通稱】「足曳の山姥」【初演】文化六年四月中村座「秋葉權現廻船話」第二番目大切【作詞】二代瀨川如皐【立唄】富士田千藏【作曲】九代杵屋六左衞門。曲のみ傳存。【振附】市山七十郎【內容】山姥（三代瀨川仙女）の山巡り、怪童丸（四代瀨川路考）の子供遊びの振等趣向は同じであるが山賤は出ない。二代菊之丞三十七回忌追善所作で「山姥四季英」（前出）の補作に過ぎないが、豐後諸流のものと比べて異色ある作。

【月花茲友鳥】清元【通稱】山姥【初演】文政六年十一月、市村座「大和大和花山櫰」第一番目四立目【作詞】二代櫻田治助【太夫】清元延壽太夫【作曲】清元齋兵衞【振附】松本五郎市。曲・振ともに傳存。【內容】「母育雪間鶯」の換骨奪胎で大體の段取は同じである。山姥（三代坂東三津五郎）・怪童丸（五代岩井半四郎）・山櫰（七代市川團十郎）。

【新荷雪間の市川】常磐津【通稱】「新山姥」【初演】嘉永元年十一月河原崎座「東都內裡花良門」第二番目大切【作詞】篠田瑾助【太夫】四代常磐津文字太夫【作曲】五代岸澤式佐【振附】五代西川扇藏。曲・振とも傳存。【內容】「母育雪間鶯」の摸倣に過ぎないが、曲が非常に面白く出來てゐるのと、「山姥」としての集大成ともいふべき完全さを持つてゐるので、山姥物中最も著名であり、且つ最も上演度數の多いものである。山姥（八代市川團十郎）・怪童丸（四代市川小團次）・山賤（四代坂東彥三郎）。

【參考】劇代集二代櫻田左交〇近世邦樂年表（長

唄・常磐津・富本・清元）○山姥物の系統秋蕉芳美（人間と舞臺三ノ六）○常磐津「山姥」の型（舊歌舞伎七七ノ八○）　〔秋葉〕

山岸荷葉（やまぎしかえふ）　小說家　【本名】惣次郎【閲歷】明治九年一月二十九日、東京日本橋區通油町に生る。東京專門學校に學び、坪内逍遙に師事した。後尾崎紅葉の門に入つて荷葉の號を受け、明治三十年頃より「早稲田文學」「文藝倶樂部」「新著月刊」、後に「新小說」、讀賣新聞等に小說を發表した。大正に入るまで長短百餘篇の創作があるが、何れも硯友社風の都會文學で、特にその親昵する下町生活を描き、花柳梨園を題材とせる作品も多く、「紺暖簾」「金蒔繪」「女判任官」等は著名である。脚本の試作二三の外に、「モンナ・ヴンナ」の飜譯及び土肥春曙と共譯の「ハムレット」がある。ともに川上音二郎等に依つて上演された。明治末葉以來、丸見屋商店に入つて演藝界との關係深く、また巖谷一六に書を學び、遂にかがのやの書流に一家を成した。　〔水木〕

山口定雄（やまぐちさだを）　俳優【本名】吉村定光【生歿】文久元年阿波國德島に生れ、明治四十年十月一日信州飯田若松座出演中歿す。享年四十七。【墓所】東京市大森區池上本門寺【閲歷】はじめ片岡我童（九代片岡仁左衞門）門下の片岡我若といふ中二階級の女方だつたが、後、石本一雄の壯士芝居の一座に加はつて山口定雄と改めた。その後自ら座長となつて山口一座を組織し、名古屋より東上、明治二十五年七月、猿若町市村座に「明治裁判辯護譽」及び「大地震尾濃實記」を上演した。爾來、新富町の深野座、赤坂の演伎座等に於て「成田利生壯士廼荒行」「實錄先代萩」「金廼世界廻百圓」等の新奇な諸狂言と、或は「本朝二十四孝」「三國妖婦傳」等の電氣應用のけれんを演じて人氣を博した。さうして東京に確實な地盤を得た後、伊井蓉峰（別項）と合同して市村座に「法衣屋お熊」「大評判」「都新聞笠森團子」「都新聞評判小僧」等を演じた。が、その頃よりして自己の藝風の漸く後進と相容れなくなつたのを知り、座員の一部を率ゐて東京を去り、晩年は地方をのみ巡業してあるいた。而もその間、たま〳〵京都の歌舞伎座で「雪月花」の道行の忠信の宙乘より落ち、不具の身となつたが、押してなほ巡業をつづけ、娘定子を女優として成功させるために苦心した。明治三十九年、定子が都新聞の俳優人氣投票に當選するや、久々にて上京、九月一日より東京座でその披露興行をしたが、再び東京を去り、その後岐阜で中風症に罹り、遂に信州飯田に於て歿するや、直ちに明治四十年十二月、故人と關係の深かつた伊井蓉峰・河合武雄・深澤恒造等は定子を輔けて市村座に追善興行を行つた。高田實・藤澤淺二郎・佐藤歲三等も口上にだけ出場した。　〔久保田〕

山口栞（やまぐちのしをり）　語學書　三卷三册【著者】東條義門【刊行】天保七年。文政三年の藤井高尚の序あり。【成立】著者の跋に依れば、文政の初めに稿成り、天保四年に出版しようと思つて補削した。當時「詞の通路」（別項）を手に入れ、これと重複してゐるところは削つたと云ふ。【諸本】刊本は三册であるが、外に寫本で二册のものがある。その奥附に「文政元年十一月十五日」とある。これが初稿本である。

【内容】主として活用に就いての研究である。上卷には、「言語音聲の轉ずるに凡そ三つの差別ある事」、誤り易い活用へさんせん、せしとし、るるこらるる等）。活用が時代に依つて變化してゐる事（古くは四段活用であつたものが、後下二段又は上二段活用になつてゐるなど）等を記し、次に五十音圖の各行に亙つて、その行に活用する動詞の活用について論じ、加行と佐行とを上卷に、多行から和行までを中卷に收めてゐる。下卷には、形狀言（今の形容詞）の活用・轉聲及び漢文の訓に於ける用言の活用について論じてゐる。【價値】活用研究の大綱は「詞八衢」（別項）に於て組織立てられた。が、微細な點については不十分な點が少くなかつた。本書はその缺を補ひ、誤りを正したものであつて、義門の活用研究の代表的著書である。特に注目すべきは形狀言の活用についての研究であつて、形容詞の活用については、「御國詞活用抄」「脚結抄」「活語斷續譜」「詞八衢」（各別項）等にも少しづつ見えてはゐるが、いづれも甚だ不十分なものであつた。然るに東條義門は形容詞の活用を究めて、完全な活用形を見出し、これを「友鏡」（「てにをは紐鏡」參照）及び「和語說略圖」（別項）に圖示したが、本書に於てその詳細な研究を發表した。上卷及び中卷に於ける動詞の活用の研究も優れたものであるが、上記の理由に依り、下卷は國語學史上特に注目すべきものである。

【影響】本書は「和語說略圖」「活語雜話」（別項）「活語指南」（別項）等と共に、一部の國語研究者に頗る重要視せられ、活用の研究に多大の影響を與へた。

【參考】山口栞初稿と當時の批評安藤正次（國學院雜誌一五ノ六）　〔龜田〕

山口振（やまぐちぶり）　歌謠　【名稱】歌の起句を以て名付けた。【出典】「琴歌譜」（別項）に一首出づ。【歌詞】譜を附した歌詞を分り易く書き改めると次の如くなる。

山口　大菅原を（一字補ふ）、牛は踏めや、
牛は踏む（一字補ふ）、猪は踏むとも（一字補ふ）、
民な踏みそね

純然たる旋頭歌形式の歌で、二段に分つて奏せられたのである。　〔藤田〕

山崎學派（やまざきがくは）　「漢學」を見よ。

山崎紫紅（やまざきしこう）　劇作家・詩人【本名】小三【閲歷】明治八年三月三日、横濱戸部町に生れ、普通教育以外學歷はない。初め詩に志し、文庫派の詩人として起ち、「明星」にも發表したが、三十八年三月處女戲曲「上杉謙信」を公にし、翌月眞砂座で、伊井蓉峰・村田正雄等に依つて上演されてからこれを契機として脚本制作に轉じ、「日蓮雨乞」「桶狹間」（明星、三十八年）、「甕破柴田」「佐良佐良越」（明星、三十九年）と矢繼早やに創作し、三十九年には處女脚本集「七つ桔梗」が出版された。四十一年三月には「歌舞伎物語」（別項）、四十二年一月には、「破戒會我」（別項）が市川左團次等に依つて明治座に上演され、次いで「底倉の湯」も同座に上演された。四十四年帝國劇場が設立されるや、彼の脚本「賴朝」が懸賞に當選して、その初開場の舞臺を飾つた。その他左團次一派の爲に執筆せる「松永彈正」「劍工」「平相國」「勢平家物語」及び「千利休」（片岡仁左衞門）、「初白髪」（中村歌右衞門）、「甕破柴田」（市川八百藏）等がある。關東大震災前後より、劇壇に對する熱情が次第に稀薄になり、新脚本制作も僅少になつて行つた。併しこれは、彼が横濱市會議員・横濱取引所理事・神奈川縣會議長等になり、俗務繁多なのにも原因する。【著作】「七つ桔梗」（明治三十九年）、「史劇十二曲」（明治四十一年）、「史劇十種」（大正三年）等の脚本集の外に、「日蓮」

にかがのやの書流に一家を成した。【水木】

山口定雄（やまぐちさだを）　俳優【本名】吉村定光【生歿】文久元年阿波國德島に生れ、明治四十年十月一日信州飯田若松座出演中歿す。享年四十七。【墓所】東京市大森區池上本門寺【閲歴】はじめ片岡我童（九代片岡仁左衞門）門下の片岡我若といふ中二階級の女方だつたが、後、石本一雄の壯士芝居の一座に加はつて山口定雄と改めた。その後自ら座長となつて山口一座を組織し、名古屋より東上、明治二十五年七月、猿若町市村座に「明治裁判辯護譽」及び「大地震尾濃實記」を上演した。爾來、新富町の深野座、赤坂の演伎座等に於て「成田利生壯士廼花行」「實錄先代萩」「金廼世界廻百圓」等の新奇な諸狂言と、或は「本朝二十四孝」「大日蓮」等の詩集がある。

【作風】全體的傾向としては「史劇十二曲」「史劇十種」の序文に「劇壇の進展に對して漸進主義・階段主義・議論よりも實行主義」とある如く、複雜極まる劇界に於ては、空想的な論議は愼まなければならぬ。そして、漸進的に改革・向上を企畫すべきだと主張する。それ故にその作品には、生硬な野心も浮薄な阿諛もない。卽ち内容は新奇ではあるが質實であり、形式は華麗で歌舞伎的であるが新鮮である。この點が劇界から歡迎された原因をなしてゐる。而も從來の歌舞伎作者に見られなかつた心理描寫（殊に女性）にも成功し、詩趣の横溢と優雅な氣韻とは新歌舞伎とも稱すべき一種の作風を創成した。【尾澤】

【參考】歌舞伎物語を觀て 小山内薫（演劇新聲）

山崎與次兵衞壽の門松（やまざきよじべゑことぶきのかどまつ）　淨瑠璃　三段　世話物【作者】近松門左衞門【初演】享保三年正月二日より竹本座（寶曆板「外題年鑑」）【諸本】七行四十三丁本、山本・吉川・鱗形屋板。七行四十四丁本、山本九兵衞板（富松蘿摩正本）。諸種の近松淨瑠璃集所收。【題材】山崎與次兵衞といふ人物は「落葉集」卷四、古來中興當流踊歌百番の中の第一番に「東妻受け出す山崎與次兵衞云々」と見えてゐるが、この山崎與次兵衞については二説ある。一は攝州河邊郡山本村の豪家坂上與次右衞門の替名であるとする「みをつくし」の説で、他は淀屋辰五郎をモデルとしたのだとする「傳奇作書」に於ける西澤一鳳の説である。一鳳の説は恐らく「元正間記」に據つたのであらうが、牽强附會に過ぎる感があつて、「みをつくし」に從ふべきであらう。

【梗概】【上卷】零落した難波屋與平が新町で全盛の太夫藤屋吾妻を心密かに見染めて懊惱憔悴する。吾妻は與平の誠に心から感謝するが、既に山崎の與次兵衞といふ深く契つた男のあることを打明け、戀は受けられぬが客となつて自分を招んでくれとて小判十兩を與へる。與平は吾妻の意氣に感激發奮し、その十兩を資本に江戸に下り、更生せん事を約して廓を出づる際、與次兵衞と見誤られてその戀敵葉屋彦介に襲はれ、これに傷を負はせて立ち去る。【中卷】與次兵衞は、男の一分から與平の罪を身に引受けて父淨閑の許に監禁される。これを知つた吾妻は廓を抜け出して訪ね來り、與次兵衞の妻お菊に會つて、萬一の場合は自分も共に死ぬ覺悟なる事を告げる。そこへ淨閑が立ち出で、枡落しに託して與次兵衞を逃がせとお菊に勸める。吾妻の心情に深く同情せるお菊は、舅の意を酌み、折からの夜に乘じて與次兵衞・吾妻を落す。【下卷】ロが「與次兵衞吾妻道行」で、與次兵衞は心勞のため發狂し、吾妻はこれを介抱しながら諸所をさまよふ。大切が新町廓の場で、江戸に下つた與平が大金を儲けて歸り、吾妻を身請けして與次兵衞に添はせ、與次兵衞も正氣にかへる。

【解說】任俠的な與平は、近松の他の世話物に類を見ない頗る異彩に富んだ人物で、この人物が作中の重要な地位を占めてゐる。かゝる點が、後に享保十年正月二日より豐竹座上場の「昔來萬石通」を經て、寬延二年七月二十四日より竹本座興行の「關取の靈麥名取の放駒双蝶々曲輪日記」（別項）と改作されて男達物と展開するに至つた。中卷の將棊の段及び枡落しの段は作者の慣用手段ながら、慈父淨閑がよく描かれてゐる。この淨閑を片岡仁左衞門が明治四十四年一月歌舞伎座で演じたが、以來再三繰返されてゐる。本作が歌舞伎に改作されたものには、享保七年十二月大阪嵐三右衞門座興行の「山崎與次兵衞半中節」、同八年正月京都八重桐座二の替り狂言の「けいせい山崎通」（「山崎與次兵衞半中節」と同一。德川文藝類聚第七所收）、同十七年十二月、大阪嵐三右衞門座上場の「山崎與次兵衞夢合（めあはせ）」等がある。

【參考】近松傑作全集卷之一 解題 水谷不倒〇大近松全集第五卷解說 木谷蓬吟　〇近松全集第十一卷解題 藤井乙男　〇近松名作集（日本名著全集）下解題 黒木勘藏　〇京阪歌舞伎年代記（歌舞伎連載）伊原敏郎〇演藝書報（五ノ二、二五ノ二）〇歌舞伎（二ノ一一）【高野（正）】

山路愛山（やまぢあいざん）　史論家【本名】彌吉【生歿】元治元年十二月江戸に生れ、大正六年三月十五日歿す。享年五十四。【閲歷】幼時、母を喪つたので、その靜岡居住時代には、祖母の手一つで養育せられた。祖先には幕府の天文方山路彌左衞門重任などを持ち、學者的な遺傳を承けたと見えて、少年時代から秀才の名があつた。最初、靜岡縣警察の雇吏となつて自活し、二十二年、東京に遊學して東洋英和學校に入り、卒業後遠州袋井驛で、基督教の傳道に從つた。その文筆に優れてゐたところから、二十五年、雜誌「護教」主筆となり、次いで國民新聞記者となるに及び、漸くその名を中央文壇に知らるゝに至つた。當時續々その史論・文學論を「國民之友」その他に發表し、民友社の「十二文豪」（別項）公刊の擧があつた時、「荻生徂徠」「新井白石」を公けにし、別に「讀史論集」も出てゐる。以上は何れも日清戰役以前に成つた著作である。その國民新聞に關係した時代、或は古代日本史について高山樗牛と論戰し、或は功利主義の立場から高踏派の思想を評して北村透谷と論じ合つたこともある。三十二年、聘せられて信濃毎日新聞主筆となり、傍ら地方青年のために講演して衆望をあつめた。その後再び上京、斯波貞吉等と共に國家社會黨を結成し、マルクス主義の堺利彦と階級鬪爭說に關する論戰を交へ、社會改良的國家社會主義を主張する等華々しい社會活動を示した。その後、「國民雜誌」を創刊し、次いで「獨立評論」を獨力で出すに及び、その特色ある史論は世の注目を惹いた。「獨立評論」は晩年まで發行を續け、時論に、史傳史論に、日記に、隨筆に、行くところとして可ならざるなき概を示した。著作は等身の多きに及んでゐるが、大正四年に公けにした「德川家康」その他、「現代金權史」「豐太閤」（各別項）「源頼朝」「足利尊氏」などが特に有名である。晩年に於ける數年間は、特に「日本國民史」を書くために非常の努力をつづけ、各時代に亙つて史料蒐集及び整理に熱中し、大體の準備は既に出來てゐたのであつたが、僅かに古代史研究の一部を「獨立評論」に發表したのみで遂に世を去つた。【著書】前記の外に「西鄉隆盛」「勝海舟」「岩崎彌太郎」「孔子論」「支那思想史」「伊達騷動記」「現代富豪論」「愛山文集」「加藤清正」「武家時代史論」「社會主義管見」「基督教評論」があり、山路愛山選集三卷（萬里閣）がある。

【批評】彼の史論の立場は經濟決定論に近く、その意味に於て、後來の唯物史觀派の先驅をなすものであるが、彼等ほど偏狹で淺薄でなく、理解に富んで蘊蓄も深い。滾々と流れて盡きざるが如き筆致の中に、批評家の稱して「愛山獨創の見解」となすものが、燦然と閃めた。高田實・藤澤淺二郎・佐藤歲三等も口上にだけ出場した。【久保田】

山口栞（やまぐちのしをり）　語學書　三卷三册【著者】東條義門【刊行】天保七年。文政三年の藤井高尙の序あり。【成立】著者の跋に依れば、文政の初めに稿成り、天保四年に出版しようと思つて補削した。當時「詞の通路」（別項）を手に入れ、これと重複してゐるところは削つたと云ふ。【諸本】刊本は三册であるが、外に寫本で二册のものがある。その奥附に「文政元年十一月十五日」とある。これが初稿本である。

【内容】主として活用に就いての研究である。上卷には、「言語音聲の轉ずるに凡そ三つの差別ある事」、誤り易い活用（さんごせん、せしごし）これを「友鏡」（「てにをは紐鏡」參照）及び「和語說略圖」（別項）に圖示したが、本書に於てその詳細な研究を發表した。上卷及び中卷に於ける動詞の活用の研究も優れたものであるが、上記の理由に依り、下卷は國語學史上特に注目すべきものである。

【影響】本書は「和語說略圖」「活語雜話」（別項）「活語指南」（別項）等と共に、一部の國語研究者に頗る重要視せられ、活用の研究に多大の影響を與へた。

【參考】山口栞初稿と當時の批評 安藤正次（國學院雜誌一五ノ六）

山口振（やまぐちちぶり）　歌謠【名稱】歌の起句を以て名付けた。【出典】「琴歌譜」（別項）に一首出づ。【歌詞】譜を附した歌詞を分り易く「破戒曾我」（別項）が市川左團次等に依つて明治座に上演され、次いで「底倉の湯」も同座に上演された。四十四年帝國劇場が設立されるや、彼の脚本「頼朝」が懸賞に當選して、その初開場の舞臺を飾つた。その他左團次一派の爲に執筆せる「松永彈正」「劍工」「平相國」「勢平家物語」及び「千利休」（片岡仁左衞門）、「初白髪」（中村歌右衞門）、「甕破柴田」（市川八百藏）等がある。關東大震災前後より、劇壇に對する熱情が次第に稀薄になり、新脚本制作も僅少になつて行つた。併しこれは、彼が横濱市會議員・横濱取引所理事・神奈川縣會議長等になり、俗務繁多なのにも原因する。【著作】「七つ桔梗」（明治三十九年）、「史劇十二曲」（明治四十一年）「史劇十種」（大正三年）等の脚本集の外に、「日蓮」

いてゐる。ただそれ餘りに獨創的であるが故に、獨斷的だと感ぜしめる點も多々ないではないが、これは愛山の缺陷ではなくて、寧ろ長所として誇つてよいところであらう。晩年の著作は、濫作に過ぎて平凡に墮したが、通觀すれば、彼こそは「生れたる史論家」として明治文壇の第一流であつた。〔高須〕

山路の露　物語（やまぢのつゆ）　一卷　【作者】世尊寺伊行の作と傳へられてゐるが、伊行は近衞帝頃の人、「源氏物語奥入」（別項）の著者であるから、作者に擬せられたのであらう。「群書一覽」も、既に「二條家には用ひざるものなり」と、この說を疑つてゐるし、別に根據もない。また「風葉集」以後の成立と考へれば、時代もあはないから、今未詳とする。【名稱】文中、薫大將の歌に、「思ひやれ山路の露にそぼちきてまたわけ歸る曉の袖」とあるのによる。【成立】藤原長親の「源氏小鏡」は、將軍勝定院義持に奉つたものであるが、「その後山路の露といふ物を人の作りて尋ねあひて對面し給へりと作りて侍り、それは五十四帖の外なればこれにはなし」と記してゐるのは、續編としての「山路の露」の最初に見える文獻である。同時に「色葉集」や「風葉集」に全く見えないことから考へると、鎌倉後期、晩くとも南北朝初期までの成立と見なければなるまい。【諸本】「桐隱隨筆」に、「冷泉爲綱卿の仰に御本には山路の露の卷無レ之不レ被レ用レ之云々」とあるやうに、源氏の寫本に加へられたものを見ない。獨立して宮内省圖書寮・前田侯爵家に藏せられてゐる。版本では「源氏」の附屬として慶安三年・承應三年・萬治三年・寛文六年等に刊行された。京都府立圖書館に無刊記本一卷があるのは、單獨に刊行されたものであらう。續群書類從物語部所收。【梗概】薫大將は、見失つた浮舟の行方をきゝつけて、小君を使に度々文をやる。浮舟は洛北小野の庵で專念に道を行ひすましてゐる。或る時大將は少しのわづらひの後、小君に手紙を託する。取次の君は、小君のあまり度々來るのを哀れんで、終に手引をする。浮舟は先づ母上のことを尋ねるので、小君は「あなたがお失せになつてから、母上は御歎きに心もたがひ危かつたが、大將に慰められて、どうにかしづまられた。私はあなたの行方を聞いた時、母上に申上げやうと思つたが、大將から固く止められてゐるので」と云ふ。浮舟は母上宛の文を託して、母上に一度會ひたいと云ふ。大將は小君から姫の文を取り上げて見るに戀しさはいやまさり、次の日、終に小君を伴つて姫を訪ねる。丁度行ひ果てた姫が、美しい月に見とれてゐるのを、大將はつと寄つて袖を引きよせる。姫はただ泣くばかりで、ほのかにまぎらはさうとする。翌朝空しく歸つた大將からの手紙に、尼の勸めに從つて返事だけはするのであつた。大將は右近を呼んで事情を話し、母上への文をひそかに屆けさせる。驚いた母君は、初瀨詣にこと寄せて、右近達と小野を訪ね、姫に會つて、この里を出てくれとかきくどくけれども、浮舟はきかない。右近は大將にこの樣子を報告する。一方、匂の宮は式部卿の姫君にも暫くは通つてゐたが、浮舟の姉の對の君を愛してゐる。大將は、左大臣兼內大臣となり、北の方なる女二の宮は懷姙する。浮舟の方には、折につけて文を送るが、終に小野から出てくれさうにもない。また大將は、この事の洩れるのを恐れて、中の君と對面しても浮舟のことは云はないでゐた。

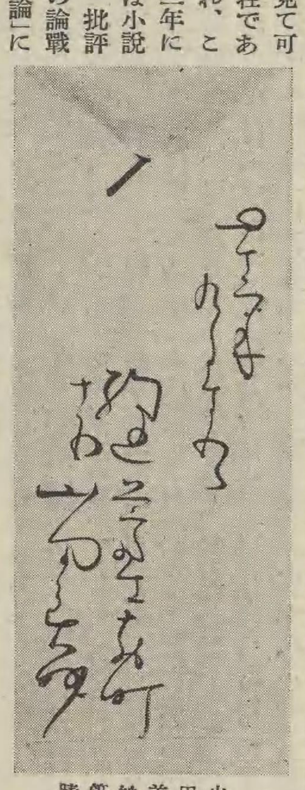
【構想】序に述べてゐるやうに、源氏物語「夢浮橋」を承け繼いで書いたもので、浮舟の卷の後日譚になつてゐる。しかし薫・浮舟二人の運命は、未解決のまゝに筆を擱いてゐる。獨立した物語でもなく、後世に影響するほどのこともない。文章を初め純粹の擬古物語であつて一步も前進するところはない。ただ巧みな擬古性と、よく纏まつてゐるのを見るべきであらう。

【參考】近古小說解題平出鏗二郎○鎌倉時代の小說　野村八良（岩波講座日本文學）○鎌倉時代書目解說山岸德平（同上）　〔永積〕

山田美妙

山田美妙（やまだびめう）　【本名】武太郎　【別號】樵耕蛙船、又は美妙齋美妙。一時は二世曲亭馬琴、晩年に往々飛影（生）と變名した。【生歿】明治元年七月八日東京神田柳町に生れ、明治四十三年十月二十四日本鄕駒込上富士前町に歿す。享年四十三。【墓所】東京染井墓地【家系】父吉雄は舊南部藩、神官の出であるが志を立てて劍を千葉周作に學ぶ。維新後地方の警察部長を勤め、又祖父吉風と共に和歌を好くしたといふ。母よし子は、海保氏（本姓海老名氏）。【閱歷】美妙は四歳から六歳までは祖母と母の手で育てられた。明治六年寺小屋に入り、七年私立烏森校に移り、八年公立巴學校に轉じてこゝに五年間在學したが、いつも學力は優等であつた。十歳までに學校の課程の外に、「四書」「五經」「日本外史」「十八史略」「文章軌範」「古文眞寶」等を讀んだ。これより先、家藏の和書並に伯父に就いて和學を修めたが、この年の秋、法然師といふ僧に就いて和歌を學んだ。又好んで「太平記」及び「平家物語」を誦した。十二年秋小學卒業、翌年一月東京府第二中學に入つたが、學課を怠つて和漢文學と繪畫三昧で暮した。又小說の嗜好漸く深く大方の草紙物語を讀んでゐた。この頃から漢詩と英語を特に勉强した。尾崎紅葉（別項）と親交を結んだのは、この中學に於てであつた。十四年一篇の復讐物語を作つて學友に示したが、これが小說執筆の最初であるといふ。十七年六月大學豫備門に入る。こゝで中學以來一時途絕えてゐた紅葉との交情が復活し、二人は漢詩や小說などの文學談に耽つた。紅葉は一九・三馬崇拜であり、美妙は馬琴と西洋小說に心醉してゐた。二人は文學熱の高まるにつれて、ただ漫談では納まらなくなつた。卽ち翌十八年二月、紅葉等と共に硯友社（別項）を起し、「我樂多文庫」（別項）といふ廻覽雜誌を出した。美妙は馬琴張り七五調の「竪琴草紙」を連載した。十九年には、美妙の編輯で紅葉・九華と三人の合作に成る「新體詞選」（別項）を出し、續いて美妙一人で「新體詞華少年麥」といふ新體詩集を出した外、「我樂多文庫」に「嘲戒小說天狗」といふ小說を書いたが、それは美妙の言文一致小說の最初の試みであつた。かくて美妙は硯友社の中でも一步先んじて文壇の人となつた。この年、美妙は學科の面白くないのと教師と喧嘩したことから豫備門をやめた。二十年には、早くも新創刊の婦人雜誌「いらつめ」（別項）に關係して、盛んに小說や新體詩や批評を載せた。中でも「風琴調一節」は未完の

幼稚な作であるが、序文に於て美妙の言文一致の由來を說いてゐる點で注意すべきものである。この年十一月、讀賣新聞に言文一致の時代小說「武藏野」(別項)を發表するや、文壇に多大な衝動を與へ、小說家としての美妙の名が一躍重きをなすに至つた。續いて二十一年「女學雜誌」「國民之友」にも小說・雜文・批評などを寄稿し、處女小說集「夏木立」(別項)を出すに及んで一層名聲を博した。同年冬、金港堂に聘されて「都の花」(別項)を主宰し、文壇的生活の全盛時代に入つた。だがこの時金港堂入りを硯友社の諸友殊に紅葉に話さなかつたので、その怒りを買つて絕交された。これは美妙の生涯から見て可なり大きな犧牲であつた。ともあれ、この年から二十三年にかけて、美妙は小說に、新體詩に、批評に、言文一致の論戰に、「日本韻文論」に華々しい天才的な活躍振りを示し、押しも押されもせぬ新興文壇の第一人者として先輩坪内逍遙(別項)と比肩する勢ひであつた。二十二年一月「國民之友」に「胡蝶」(別項)を發表した。これは全盛時代の人氣に名殘りを告げる最後の火花であつた。二十三年二月「都の花」を去つて改進新聞に入り、間もなく國民新聞に關係したが、もう二十四年頃には、既にその聲價は紅葉・露伴(別項)と代謝してゐた。美妙は自分の天分が詩人たるにあると感じ、新體詩に力を入れたが(「新調韻文青年唱歌集」)、氣の多い彼は、又語學の研究や辭典編纂に手を伸し、「日本大辭書」を脫稿出版した(二十五・二十六年)。また彼は演劇研究にも手を染め、數篇の脚本も出版したが殆ど反響はなかつた。この前後から美妙の生活は一年毎に逆境に入つた。二十八年小說「阿千代」の發表と共に小說界に復活しかけたが、間もなく所謂稻舟事件なるもののために世間から甚しく誤解されて益々同情を失つた。それでも屈せず年々小說の新作を發表して三十年以後に及び、流石に老練な描寫に筆の冴えを示しはしたが、胸中の悶々から大酒となり、一時好んで比律賓の亡命客等と交つて不平を吐いたりしてゐた。紅葉とは、その生前交際を恢復したが、美妙の晩年は前半生に比して實に悲慘なものであつた。



山田美妙筆蹟

山田美妙

日本鄉駒込上富士前町に歿す。享年四十三。【墓所】東京染井墓地【家系】父吉雄は舊南部藩、神官の出であるが志を立てて劍を千葉周作に學ぶ。維新後地方の警察部長を勤め、又祖父吉風と共に和歌を好くしたといふ。母よし子は、海保氏(本姓海老名氏)。【閱歷】美妙は四歲から六歲までは祖母と母の手で育てられた。明治六年寺小屋に入り、七年私立烏森校に移り、八年公立巴學校に轉じてこゝに五年間在學したが、いつも學力は優等であつた。十歲までに學校の課程の外に、「四書五經」の素讀を了へ、十一歲から十四歲までは、漢學者依田學海の門に入つて漢文學を修めた。十五歲の時、父の命で、「日本外史」の講義を聽いたが、その時の筆記帳が今殘つてゐる。十六

のであらう。

倭片假字反切義解（やまとかたかなはんせつぎげ）【藤田】學書　一卷一册　【著者】藤原長親　【成立】未詳　【諸本】刊本では群書類從卷四九五に收められ、寫本では林崎文庫の勤思堂舊藏本がある。類從本とは相當異同があつて、この方が善本のやうである。【内容】五十音に解説を加へたもので、その序には漢字或び假名の性質

性質、假名の字源等について專ら説いた最古の書である。その所説は簡單であるが要を得たもので、江戸時代に於ける假名の起原・沿革の研究、音韻的研究に頗る大きな影響を與へたものである。【龜田】

倭假名在原系圖（やまとがなありはらけいづ）　淨瑠璃時代物　五段　【作者】淺田一鳥・浪岡鯨兒・並木素柳・豐竹甚六　【初演】寶曆二年十二月七

見せてその守護に心を碎く。行平の赦免狀を持つて金剛太郎はその兄須磨兵衞を訪れる。兵衞は義を重んじ、その狀は開かなかつたが、太郎を流人の中に忍び込ませて行平を負ひ出させる。松風は流石に行平の跡を追ふ。【三段】（道行花ぐもり）業平は二條后を助けて三河國まで落ちて來る。（明神社前）二人が非人

多い。明治十八年卑くも「我樂多文庫」に「二幅對美少年姿」（七五調）の一篇を掲げてゐ、十九年には「新體詞選」（別項）「新體詞華少年姿」を公にしてゐる。「新體詞選」中の作も、「少年姿」中の作も、大體七五調で、内容も幼稚極まるものであつて西洋詩の影響などは見えず、ただ若々しい可憐な詩魂が懸命に努力してゐるのが見える。だが二十年「以良都女」に詩を載せ始むるに及んで長足の進歩を見せ、西洋詩の飜譯と共にその影響も見えてゐる。二十年から二十四五年頃迄が新體詩の方に於ても美妙の最も活躍した時代である。「日本韻文論」を書いて、西洋詩の知識を基礎に、日本韻文の詩格・語調・韻脚等を研究し、統一された新體詩の形式を生み出さうと努力する一方、その實例として、盛んに各種の韻律、五七・八六・五七五・七七・五五・三三等で詩を作つて「以良都女」「國民之友」「國民新聞」等に發表した。美妙の詩は、律格の自由なだけ、用語内容とも自由で一定の型に入つてゐなかつたので、幾分無雜の觀があるが、新體詩の先驅者たる赤門派の人々よりは、遙かに藝術的香氣に富んでゐる。口語詩・童謡、ともに試みて多少の成功を收め、軍歌・譯詩には優れた手腕を見せてゐる。「青年唱歌集」（別項）「雨の日ぐらし」「明治文庫」の美妙集などには、この頃の代表作が皆收められてゐる。彼は往々貧者の生活などを題材にしたが、これは社會意識の鋭敏なためではなくて、悲歌は祝歌より永い生命をもつといふ觀念から出てゐる。小説家として全盛時代が去ると共に、詩人としての努力も忘れられた形になり、その後小説家として復活はしたが、詩人としての復活は遂に見られなかつた。だが、今日彼の韻律上の試みが、透谷・鐵幹・泡鳴・醉茗（各別項）等に與へた影響を見て、詩壇の天才的先驅者だつたことが分る。【辭書の編纂者として】　美妙はその詮索好きの癖から様々な辭書編纂の仕事に着手した。「萬國人名辭書」「日本同地名辭書」「日本大辭書」「大辭典」（未完）などがその所産である。「日本大辭書」の如きは、辭書編纂の體例を定めた點、言語の音調を一定した點、解義の精密周到の點で、當時二十五歳の一青年の著作としては甚だ賞讃すべきものがある。だがこの種の仕事が、小説家・詩人としての美妙に拂はせた犧牲は大きかつた。【柳田（泉）】

山田流（やまだりう）　「八橋流」を見よ。

倭歌（やまとうた）　「倭舞」を見よ。

大和繪（やまとゑ）　繪畫　【解説】日本の事物を畫いた繪の謂ひであるが、後には日本畫の描法上の一樣式乃至一流派の名に轉用せらるるに至つた。用語例としては藤原時代の頃から散見してをり、當時これに對して支那の事物を畫いたものを「から繪」と言つた。平安朝の初め唐制摸倣の盛んな間は、宮廷の障屏畫も例へば荒海・昆明池兩障子・賢聖障子等すべて表だつたものは唐繪であつたが、その間にも漸次日本の風物を取り入るゝやうになり、殊に延喜・天曆前後からは、著しく大和繪の領域が開拓されたのであつて、貴族の邸宅に用ふる障屏畫を初め、机上に繰り擴げる繪卷物（別項）、貴族達が筆のすさびに畫く小品畫の紙繪等には、日本の事物を畫くことが最も盛んであつた。而してこれ等の大和繪はその描法の淵源を唐繪に辿り得るが、支那と日本とのおのづからなる題材上の相異に併せて描法も漸次唐繪から獨立した日本固有の一樣式を達成して行くのであつて、例へば引目鉤鼻（別項）の如き、吹拔屋臺法の如き、蓋し皆大和繪固有の描法に外ならない。かくの如き大和繪の古作としては、「源氏物語繪卷」（別項）や扇面寫經（裝飾經參照）、法華經册子の下繪等を擧げる事が出來るであらう。これ等は主として日本風俗殊に貴族の生活を中心としたもので、その描寫表現とも極めて優雅で物靜かな情趣に富んでゐるのが特色である。而して大和繪は他面和歌と結合して「歌繪」（筆手參照）を達成し、更に草假名等と結合して「あしで繪」（別項）を達成したのであつて、大和繪はこの方面に於て風俗畫以外風景描寫としても、特殊な領域を開拓したものと云ふべきである。而して直接支那の脈を引いた唐繪が主として專門繪師の特技を要するものであつたのに對して、大和繪は題材關係等から貴族の素人作家の携はつた場合が少くなかつた。併し又唐繪に練達した專門繪師乃至繪佛師が、日本の事物を畫く事も勿論多かつたらしい。かゝる場合は大和繪と雖もその描法は寧ろ流暢で、豁達な表現に富む唐繪風の描寫に傾くのであつて、かくの如き唐繪風の描寫を見るべき大和繪の遺品としては、「信貴山緣起」「伴大納言繪卷」（各別項）等を第一に擧げなければならない。而して大和繪に於けるこの唐風と和風との兩樣式は、鎌倉時代に入つてやがて渾融され、これがおのづから土佐家一派（土佐派參照）の傳統を形成して行くのである。勿論唐繪自體は專業の繪師乃至繪佛師によつて承け繼がれて長く足利時代まで存續してゐるが、併し足利時代に入つて別に宋元の水墨や骨法を主とする所謂「漢畫」が勃興するに及んでは、これ等の唐繪・大和繪は、共に古典的な描法の一系統として總括され、兩者を引き括めて廣義の大和繪の概念を形造るに至るのである。廣義の大和繪としては、要するに唐朝の繪畫から穠雅優美な日本趣味の樣式を化成したものを指すのであつて、敎王護國寺（東寺）の山水屏風の如き藤原時代の唐繪の作例と雖も、皆この意味で大和繪に含まれるのである。【田中（一）】

大和踊（やまとをどり）　踊歌　【名義】「糸竹初心集」に「大和踊」とも、「吉野の山」とも記してゐる。「紙鳶」「大奴佐」等にも「吉野の山」と記して歌詞を出してゐる。大和國から起つた踊歌であらうか。【解説】歌詞は「吉野の山を雪かと見れば、雪ではあらで、ヤコレノ、花の吹雪よの、ヤアコレノ」といふのが元歌で、「紙鳶」には六首、「大奴佐」には七首替歌を掲げてゐる。そのうち「是から見れば近江が見ゆる、笠買うてたもれ、やあこれの、近江菅笠を、やあこれの」は近江踊の歌を用ひたもので、踊は早く亡んで、吉野の山の歌のみ行はれたで。「西鶴置土産」卷五の文章などによると、甚だ意氣な歌として一般に喜ばれたやうで、一節切・箏・三味線などにのせて歌はれた。「吉原流行小歌惣まくり」の「一節切」と題する歌の中には、この「吉野の山」も入つてゐる。早く享保頃の「吟曲古今大全」にも「吉野」と題して、「大奴佐」と大方同じ歌を出し、下つて「歌曲時習考」では、「吉野の山」の歌、ただ一首だけを收めてゐるが、何れも近江踊の古曲を傳來したもので、本調子の曲である。現在も地唄として傳へられ、箏は半雲井、三味線は三下りとなつてゐる。歌詞は「吉野の山」の歌と「紙鳶」「大奴佐」等に見える「龍田の川を、錦かと見れば、錦ではあらで、やあこれの、紅葉しがらみよの、やあこれの」とを用ひる。曲は古曲のまゝかどうか明かでないが、古きを多く受けついだも

のであらう。

倭片假字反切義解 やまとかたかなはんせつぎげ

〔藤田〕

學書　一卷一册　【著者】藤原長親　【成立】未詳　【諸本】刊本では群書類從卷四九五に收められ、寫本では林崎文庫の勤思堂舊藏本がある。類從本とは相當異同があつて、この方が善本のやうである。　【內容】五十音に解說を加へたもので、その序には漢字及び假名の性質や起原を說いてゐる。これによると、我が上古には漢字はなく、應神天皇の朝に儒教が傳はつて初めて文字が傳はつた。卽ち眞字がこれである。眞字から假字が出來た。さて天地萬物は本來は名がないが、强ひて名を作り、それに從つて文字を作つた。而して萬物の名の義を以て眞字とし、音を以て假字とした。假字は天平勝寶年中に吉備眞備が我が國に通用する假字四十五字を取り、これに同音五字を加へ、漢字の扁傍點畫を省いて片假字を作り、縱に五字を列ね、橫に十字を列ねて五十字を作つたのである。後弘仁・天長の頃、弘法大師が女童のために草體の字を作つた。四十七字の以呂波がこれである（以上序文）。次に本文に於ては、（一）假字反切音義（五十音圖の十行五段について、喉・舌・牙・齒・脣及び宮・商・角・徵・羽を註す）。（二）假字反切口訣（「上父字行レ竪、下母字行レ橫、其隅生二子字一」「橫行歸二父字一竪行歸二母字一、其歸生二子字一」の二項を記す）。（三）假字音義方位（五十音の十行を宮・商・角・徵・羽に配し、これに喉・舌・牙・齒・脣の別、淸濁の有無、發音を胸からするか腹からするか、及びその音が脾、肺、心、肝、腎のいづれが司るかを註す）。（四）倭片假字書解（片假字の字源を記す）。（五）考伊呂波字書解（以呂波の字源を記す）。以上の五項に就いて記してゐる。

【價値】本書は假名の起原・沿革、その音韻の性質、假名の字源等について專ら說いた最古の書である。その所說は簡單であるが要を得たもので、江戶時代に於ける假名の起原・沿革の研究、音韻的研究に頗る大きな影響を與へたものである。

〔龜田〕

倭假名在原系圖 やまとがなありはらけいづ

時代物　五段　【作者】淺田一鳥・浪岡鯨兒・並木素柳・豐竹甚六　【初演】寶曆二年十二月七日、豐竹座。　【題材】謠曲から材を得た行平と松風・村雨との戀物語に、惟喬・惟仁兩親王の御位爭ひの後日を結び附けた。先行作としては「行平磯馴松」に最も影響された所が多い。

【梗概】〔初段〕（大內）淸和天皇の御宇、逆意ある橘副純（ひろずみ）は外戚の威を着て事每に橫暴。業平は御劍紛失の咎に依つて須磨へ流されてゐる兄行平の赦免を願つたが副純一黨の者に拒まれる。（內侍所）副純は二條后に心を懸けて事を莞立てようとするので、業平は不義を裝つて后をお連れして身を隱す。大內からは密かに行平の赦免狀が下るので、業平は金剛太郎を須磨へ下す。后の侍女で桂金吾の妻かほよは、后に成り濟まして副純の兵に奪はれて行く。（副純館）かほよは后の在家を問はれて雪の中で折檻される。業平の臣秦藏人（かほよの兄）と桂金吾とは、偶々塀の外に差掛つてその聲を聞きつけ、金吾は妻を助けて走り、藏人は軍兵を追ひ散らす。〔二段〕（糺の森）副純は三河の領主坪坂丹內兵衞をして業平と后とを討たしめ、又須磨兵衞と黑塚平馬とに行平を殺させようとする。須磨兵衞は諫言の無益なのを悟つて承引する。（須磨）流人の番人須磨兵衞は何かと行平を大切にし、娘松風を侍かせて置く。平馬の妻村雨は夫に引きかへ行平に恩ある者の娘なので、行平を戀するとかんの子百松は禁斷の杜若の花を折つて殺される事になる。隣家の藏人は自分の子を身代りに立ててやる。間もなく后・業平の詮議に坪坂丹內兵衞が來る。藏人は仲二の娘小糸を后の身代りに立てようとするが仲二に依つて破られてしまふ。突然金吾が妻かほよを后に仕立てて出る。今度は仲二が保證するので坪坂は欺かれて歸る。藏人・金吾の二人は、仲二を糺さんと詰め寄る。仲二の挾箱から意外にも天子の裝束が現はれ、仲二こそ御位爭ひに負けて、叡山に入寂したと思はれてゐた惟喬親王と判る。流石の親王も一子百松を助けられた恩義と、その忠義に感じてのことであつた。かくて親王は小糸を業平に贈り、自分は百松と共に出家して廻國に出る。〔四段〕（壬生村）奴の蘭平は主人行平の狂亂を慰めるため、東寺前の水茶屋の女房おりくが美人なので、松風の代りに雇ひに來る。良人與茂作は松風の兄と云ふ事にして附添ふ。（行平館）おりくが松風を裝うて來るので行平は大に喜ぶ。折柄罪人が遁げ出したので、若年ながら勇力ある蘭平の一子繁藏が跡を追ふ。蘭平は息子の事のみ氣遣つて仰せを疎かにしたので、行平は怒つて刀を抜く。と、刃物を見た蘭平は狂氣となりたわいなく踊り出す。そして刀を納めれば忽ち正氣附く。これが蘭平の奇病である。おりくと與茂作とは行平のまどろむを見て刺し殺さうとするので、蘭平が詮議して見ると、彼は幼少の折別れた弟であつた。そこで蘭平は自分が伴義兼の子義雄であると名乘り、父の仇を報ぜんため奴となつて入り込み、奇病を裝つて既に在原の系圖も盜んで置いた事を明かす。併し與茂作は實は行平の重臣で、蘭平の正體を發くための計略であつた。（奧庭）大勢が蘭平を取卷く。繁藏も主行平の恩を思つて親の前に繩を持つて現はれる。父は子の繩にかゝり、系圖を渡して更にその功を加へさせる。行平は蘭平を助け、副純から染殿皇后を奪ひ來る事を命ずる。蘭平は以前の奴として狂亂を裝つて出て行く。〔五段〕（副純館）おりく・村雨等の女達は、花籠を持つて副純を見舞に來て、密かに蘭平の働きを助ける。（聖護院門前）行平が待つ所へ蘭平は染殿を負うて歸つて來る。此處に蘭平親子は目出度く伴の家を立てる事となり、惡人共は業平・金剛太郎等の武力に依つて平げられた。かくて副純は須磨へ流罪と決し、平馬は妻村雨の功にめでて命を助けられる。

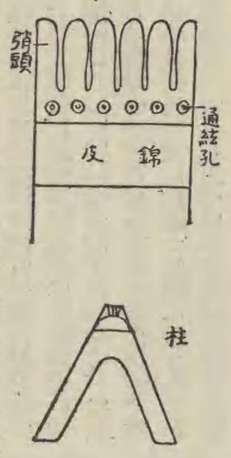
【解說】本曲は松風・村雨と、惟喬・惟仁位爭ひの兩說話を含むものであるから、勿論これ等二系統の諸作に關係はあるが、その脚色振りを見ると、ただこの兩說話を表面的に借りたに過ぎなくなつてゐる。構想は全くこの頃のお家物・叛逆物式の定型であつて、世界は王代であつても盛られた精神は時代物のそれである。而してその構想は決して優れたものではなくて、隨所に不統一が氣附かれる。部分的に見て最も趣向を凝らしたのが、三段目切「瀧の小川」の場と、四段目中「行平館」の場とであ

いことは明かである。何となれば弓には共鳴裝置がないから、これを並べて彈じただけでは殆ど明瞭な音が出ない（今日南洋土人及び蠻人が弓を鳴らして樂器ミするのは、その一部を口に咥へて、口腔で共鳴させるのである）。即ち弓絃の一種の樂器、即ち琴が存在したといふに過ぎない。

これ即ち倭琴の原形を指したものである。この樂器はその絃の掛け留め方が支那のものと大に異なり、一端が恰も琵琶の尾に似てゐるから、又これを鵜飼の尾琴とも稱せられた。これを倭琴の和琴又は日本琴と書いてヤマトゴト又はワゴンと呼ぶのは後世のことである。これを和琴と記したのは、「續日本紀」元正天皇養老五年正月の條に「和琴師正七位下大忌田寸廣田」とあるのが初めらしい。又平安朝に至つて神琴とも呼んだことは「文德實錄」嘉祥三年九月の條に「神琴師」といふ名が見えてゐるので分る。昔はこの樂器は祭祀に用ひたり又は軍旅に用ひたりした外に、家庭に於ても用ひたらしい。而して歌の伴奏を主としてゐたが、又獨奏的樂器にも用ひられたらしく、その他古天皇から天武天皇頃までの間に、外國輸入の音樂の影響を受けてこれ等の古樂器の構造及び奏法の上に大改革が行はれ、古代の琴は今日用ひられてゐるやうな形及び大きさの倭琴となつたもののやうである。今日でも正倉院に幾存する奈良時代の倭琴は、その形が今日の樂等の國風樂を奏するに用ひられ、寺院樂と共に小異である。倭琴は主として神樂のものと大同小異である。倭琴は主として神樂のものと大同小異である。倭琴は主として神樂のものと大同

【參考】近世邦樂年表（義太夫節之部）○歌舞伎細見五ノ四（飯塚友一郎）　【鐫見】

やまとごと　樂器　【名稱】倭琴・和琴・日本琴とも書く。【異稱】鳴尾琴・天詔琴・東琴・神琴　【性質・構造】我が國の古代に存在した琴で、その後改造されて今日まで神樂その他の祭祀樂に用ひられてゐるところの琴。中古及び近世に用ひられるものは凡て六絃であるが、古代には稀に七絃又は八絃のものもあつたらしく、その事が「古事記」等に記されてゐる。しかし古代に於ても普通は六絃であつた。その大きさは中古及び近世に於ては凡そ長さ六尺四五寸、幅七寸内外であるが、古代のものは遙かに小型であつて、凡そ四尺内外のものが多く用ひられたらしい。「出雲風土記」の飯石郡の琴引山の條に、「大神の御琴あり。



琴軋の圖

陸國風土記」には、榛を以て琴を作ることが記してあり、「日本書紀」繼體天皇紀、春日皇女の御歌の中には、竹を以て琴を作ることが記してある。併し天武天皇以後になると、支那文化の影響を受けてこれを桐で作るやうになつた。そのことは「萬葉集」第五に、「大伴淡等謹狀梧桐日本琴一面、對島結石山桐孫枝也」と書いてあるのを見て分る。今日は凡て桐を以て作る。併し奈良朝頃では一般に檜を以て作つてゐたらしく、正倉院の御物中にある和琴胴のものである。　【沿革】琴は神代から大和民族の間に行はれてゐた。その頃には天鳥琴又は天詔琴・天沼琴などと稱へてゐた。その制は分らないが、要するに倭琴の原形であつたらしい。「御鎭座本記」や「本朝事始」などの書には、天照大神が天岩屋に籠らせ給うた時に金鵄命が弓六張を並べて彈じたのが倭琴の起原であると記してあるが、この二書は中世以後の僞撰で信を置くことは出來ない。天岩屋の前で琴を彈じたといふことは、「古事記」にも「日本書紀」にも書いてないし、又假にその時琴が彈かれたにしても、弓六張を並べて彈じたのでなで分る。昔はこの樂器は祭祀に用ひたり又は軍旅に用ひたりした外に、家庭に於ても用ひたらしい。而して歌の伴奏を主としてゐたが、又獨奏的樂器にも用ひられたらしく、その他この琴を彈じて、神託を乞ふやうな場合も多く、この琴の音に和して神の御詔が告げられるといふ所からこれを天詔琴とも呼んだ。推古天皇から天武天皇頃までの間に、外國輸入音樂の影響を受けてこれ等の古樂器の構造及び奏法の上に大改革が行はれ、古代の琴は今日用ひられてゐるやうな形及び大きさの倭琴となつたもののやうである。今日でも正倉院に殘存する奈良時代の倭琴は、その形が今日のものと大同小異である。倭琴は主として神樂等の國風樂を奏するに用ひられ、寺院樂とは沒交涉のものであるが、奈良朝から平安朝の初めに於て、神佛混合の甚しかつた時代には、倭琴も寺院に於て用ひられたものと見え、正倉院の御物中には、裏板に東大寺・東寺・綱索堂等の銘ある倭琴が存在してゐる。

【參考】樂家錄（第七卷）阿部季尙　○體源抄（第八卷）豐原統秋　○日本音樂講話田邊尙雄　○日本音樂之研究同上　○日本音樂史同上（日本風俗史講座）　○日本音樂史考東儀季治　○正倉院御物樂器調査報告帝室博物館編　【田邊】

大和時代文學（やまとじだいぶんがく）　【名義】原始時代より奈良時代までを指すのであつて、この間政治文化の中心たる帝都が、主として大和國内に置かれたのでかく稱する。又上代文學の名稱も一般に行はれてゐる。【時代區分】この時代の國文學は未だ文字のなかつた時代に始まり、記錄發達時代を經て記載文學時代に入り、貴族文學の擡頭期に及んでゐる。この間に經過した年代は極めて長いのであるから、これを何期かに區分することが出來る。漢字が初めて我が國に傳はつたのは極めて古いが、これを使用して國事を記錄するに至るまでには、かなり長い年代を經たのであつて、現存する文獻からいへば、推古朝のものを最古とする。從つて上代文學は、文獻の遺存する推古朝を界として、それ以前を傳唱文學時代とし、それ以後を記載文學時代とすることが出來る。前者は民族的文學の時代であつて「古事記」「日本書紀」（各別項）などに見える神話・傳說及び歌謠によつて代表せられ、後者は文學的自覺が起つた時代であつて、「萬葉集」（別項）によつて代表せられる。これを文學思潮の方面から言へば、前者は神祇崇拜の固有思想が文學の中心であつた時代であり、後者は儒敎並に佛敎の思想が漸く浸潤した時代である。尤も前期は更に二分して推古天皇以降齊明天皇以前を第一期とし、近江飛鳥藤原時代を第二期とすることが出來、後期も亦天平の隆盛期を界として二分し、これを第三期・第四期とすることが出來る。併し今は煩雜を避けるために、前後の二期に區別しておく。

前期は國民的自覺期であつて、從來區々に傳唱せられた神話傳說は、國家統一の精神によつて集成せられ、こゝに始めて國史編纂の企てがあつたが、文學の方面では、これ迄の國民的抒情詩が個人的抒情詩としての和歌となつて、急速度の發達を遂げた時代である。而して後期は前期に起つた國史編纂の機運を嗣いで、「古事記」「日本書紀」の如き史籍が、次々に成り、又漢詩・漢文も漸く隆盛になつたが、殊にこの時代の文學を代表するものは、「萬葉集」の和歌である。

【沿革】【傳唱文學時代】原始時代の民族は、驚異の感情を起す總ての現象の起因を、超人間的存在即ち神や精靈のなす所と考へると共に、あらゆる事象を人間と同樣に生命並に靈魂を有するものと信じた。我が民族が太古に語り傳へた神話は、かくの如き想像力によつて、自然や人生の諸現象を說明した一種の物語である。神話に次いで發生した民族的物語は傳說である。これは著しい歷史的な事件を回顧する心情から生れたものであつて、それには遠き昔の史實が反映してゐる。而して傳說は上は神話に接續し、下は歷史物語に接觸してゐるが、神話・傳說の間には、なほ遊離的に介在する多種多樣の說話がある。說話は神話の性質を失つた短い物語であつて、多くは獨立的に發生したのであるが、何かの機會（主として地名・俚諺・慣習・禁制などの起原を說ある。傳唱時代の文學は、最初は全く文字のなかつた太古に、民衆の間から生れて口々に傳承せられ、民族の統一が成るに從つて、徐々に集成せられたが、更にこれが文字に記されて固定したのは奈良時代である。從つてこの時代の文學の文獻としての成立は、記載文學時代に屬するが、その發生は上古にあるから、これを傳唱文學時代のものとして考察するのが當然である。尤も傳唱文學時代は、極めて長い年代に亙つて居り、且つ全く文字の備はらなかつたのは、凡そ開化天皇頃までであつて、崇神天皇以後には、多少文字を使用した痕跡があり、更に仁德天皇以後には、幼稚ながらも記錄を作ることが行はれたやうであるから、漢籍が初めて朝廷に傳來し、漢文の講習が始まつたと傳へられる應神天皇朝を界として、前後の二期に區分することが出來る。

卽ち前期はその末頃に至つて文字の使用が始まつたが、文學は未だ口から耳に傳へられた時代であり、後期（應神天皇より崇峻天皇に至る十八代凡そ三百年間）は記錄の方法が漸く發達の途に就き、文學の一部が文書で傳へられたのであらうと想像せられる時代であつて、謂はば記載文學時代への過渡期である。次に記載文學時代は、文學が主として文字に寫された時代であつて、現存する上代の文獻は悉くこの時代に成つたのである。この時代は傳唱文學時代に比すれば、年數は短いが文學の發達は極めて著しいから、これを更に幾つかの時期に區分することが出來る。試みにやゝ大きく前期・後期に分つならば、前期は推古天皇朝に始まり、近江飛鳥時代を經て藤原時代（持統・文武兩帝の御代）に至るまでの十代百十五年間であり、後期は奈良時代の七代七十五年間である。傳唱時代の文學は、最初は全く文字のなかつた太古に、民衆の間から生れて口々に傳承せられ、民族の統一が成るに從つて、徐々に集成せられたが、更にこれが文字に記されて固定したのは奈良時代である。從つてこの時代の文學の文獻としての成立は、記載文學時代に屬するが、その發生は上古にあるから、これを傳唱文學時代のものとして考察するのが當然である。尤も傳唱文學時代は、極めて長い年代に亙つて居り、且つ全く文字の備はらなかつたのは、凡そ開化天皇頃までであつて、崇神天皇以後には、多少文字を使用した痕跡があり、更に仁德天皇以後には、幼稚ながらも記錄を作ることが行はれたやうであるから、漢籍が初めて朝廷に傳來し、漢文の講習が始まつたと傳へられる應神天皇朝を界として、前後の二期に區分することが出來る。

卽ち前期はその末頃に至つて文字の使用が始まつたが、文學は未だ口から耳に傳へられた時代であり、後期（應神天皇より崇峻天皇に至る十八代凡そ三百年間）は記錄の方法が漸く發達の途に就き、文學の一部が文書で傳へられたのであらうと想像せられる時代であつて、謂はば記載文學時代への過渡期である。次に記載文學時代は、文學が主として文字に寫された時代であつて、現存する上代の文獻は悉くこの時代に成つたのである。この時代は傳唱文學時代に比すれば、年數は短いが文學の發達は極めて著しいから、これを更に幾つかの時期に區分することが出來る。試みにやゝ大きく前期・後期に分つならば、前期は推古天皇朝に始まり、近江飛鳥時代を經て藤原時代（持統・文武兩帝の御代）に至るまでの十代百十五年間であり、後期は奈良時代の七代七十五年間である。尤も前期は更に二分して推古天皇以降齊明天皇以前を第一期とし、近江飛鳥藤原時代を第二期とすることが出來、後期も亦天平の隆盛期を界として二分し、これを第三期・第四期とすることが出來る。併し今は煩雜を避けるために、前後の二期に區別しておく。

前期は國民的自覺期であつて、從來區々に傳唱せられた神話傳說は、國家統一の精神によつて集成せられ、こゝに始めて國史編纂の企てがあつたが、文學の方面では、これ迄の國民的抒情詩が個人的抒情詩としての和歌となつて、急速度の發達を遂げた時代である。而して後期は前期に起つた國史編纂の機運を嗣いで、「古事記」「日本書紀」の如き史籍が、次々に成り、又漢詩・漢文も漸く隆盛になつたが、殊にこの時代の文學を代表するものは、「萬葉集」の和歌である。

【沿革】【傳唱文學時代】原始時代の民族は、驚異の感情を起す總ての現象の起因を、超人間的存在即ち神や精靈のなす所と考へると共に、あらゆる事象を人間と同樣に生命並に靈魂を有するものと信じた。我が民族が太古に語り傳へた神話は、かくの如き想像力によつて、自然や人生の諸現象を說明した一種の物語である。神話に次いで發生した民族的物語は傳說である。これは著しい歷史的な事件を回顧する心情から生れたものであつて、それには遠き昔の史實が反映してゐる。而して傳說は上は神話に接續し、下は歷史物語に接觸してゐるが、神話・傳說の間には、なほ遊離的に介在する多種多樣の說話がある。說話は神話の性質を失つた短い物語であつて、多くは獨立的に發生したのであるが、何かの機會（主

でゐる。上古の歌謠も亦、民衆の間から生れたものであつて、もとは集團生活に於て共通の感情を叙べたものであるが、何かの因緣によつて神話や傳説中に挿入せられ、神や英雄が詠んだものとして、後世に傳唱せられたのである。而してこれ等の歌謠は、時代を經る間に漸次彫琢を經たのであつて、これが神話傳説と共に國史に記載せられた時には、既に原形を失ふほどに變化したものも少くなからう。以上擧げた神話・傳説・説話・歌謠(各別項)は悉く上代民族の共通の性情を發揮してゐるのであつて、その内容は神を對象として居り、總ての事象を神話化してゐる所に特徴があるのであるが、後の文學の如く個性の現はれたものはない。而して神話傳説は上古の叙事文學であり、歌謠は抒情文學であつて、この二種は後の國文學の母胎となつたのである。

〔記載文學時代〕(前期) この時期の初めに國家觀念の發達があり、延いては國民的自覺が勃興した爲めに、國民文學は從來の渾沌とした民族的文學の域を脱して、種々の部門に分れてそれ〴〵發展の途に就くやうになつた。現存する最古の文獻は、聖德太子の憲法十七條、佛典の註疏、外交文書、金石文などであるが、これ等が作られた推古朝は國民文學の黎明期であつて、未だ純然たる文學的作品は現はれなかつた。併し當時はこれ等の遺文を見ても、又聖德太子が蘇我馬子と共に國史を編纂せられた事に鑑みても、國家の發達に伴ふ國民の自覺が起つたことは明白である。次いで舒明・皇極・孝德・齊明四帝の御代は、推古朝に發達した文物制度を承けて、社會各般の文化が著しく發展すると共に、文學の方面に漸〳〵個人の作品が多く現はれたことは、「萬葉集」に、舒明天皇朝以後漸次歌數が增加してゐるのを見て明かである。次いで近江朝(天智・弘文二帝の頃)になると、大陸文學を摸倣した漢詩の流行を見たが、和歌は歌謠の域から脱却して形式は愈々整頓し、額田女王の如き特色ある歌人を見るに至つた。抒情的詩歌が發達の途についた近江朝には、纏まつた集もあつたかと思はれるが、不幸にして壬申の大亂に湮滅して傳はらない。壬申の亂後は即ち飛鳥淨御原宮時代であつて、皇室の尊嚴が愈々加はると共に、國民精神統一の機運が大に起り、その結果として上古以來區々に傳承せられた神話傳説を統一結集して、經國の大本とすべき國史撰定の企てが起つた。即ち天武天皇は川島皇子以下諸王諸臣に詔して國史の編纂に着手せしめられ、又別に天皇親ら稗田阿禮に命じて帝皇日繼及び先代の舊辭を誦み習はしめ給うた。かくて天武天皇は二つの修史事業を企て給うたが、天皇の崩御によつて共に中絶した。次いで持統天皇の御代には、國史編纂の資料とする目的を以て、名族十八氏に命じてその家の纂紀を奉らしめられたが、これは散佚して後世に傳はらない。尤も延曆十九年に撰上した「高橋氏文」(別項)は、傳來の舊記を基として記したものであることは明かであるから、これによつて纂紀の大體を想像することが出來る。さて天武・持統兩帝の御代に興つた修史の御遺志は、その後歷朝に亙つて繼承せられ、後の奈良時代の初期に至つて、「古事記」「日本書紀」となつて完成を告げた。天武天皇朝に起つた國家的精神は、抒情文學方面にも刺戟を與へて、藤原朝に至つて和歌は國民的思想感情を高唱するやうになつた。而して藤原朝の和歌を代表する者は柿本人麿(別項)である。人麿は從來漸く整齊せられた和歌の形式を完成すると共に、國民的抒情詩を作つて、後世から典型的歌人として仰慕せられた。人麿の和歌には、傳統的な神と國家の觀念が强調せられてゐるが、また一面には一個人としてのさま〴〵な感情をも詠んで、奈良時代の個性表現時代の先驅となつてゐる。散文は漢字の使用法に熟達するにつれて、種々の形式並に文體が行はれるやうになつた。推古朝の遺文中には、純粹の漢文の外に漢字を以て國語を混へ記した和漢混用文があつたが、その後國語の記載法は益々發達して純國文を綴り得るやうになつた。祝詞や宣命の記載法が發達したのは、この時代の末頃であらう。祝詞(別項)はもと言靈信仰から發生した一種の宗教文學である。從つて原始的な祝詞は既に傳唱文學時代にあつたが、それ等は殆ど後世に傳はらずして、記載文學時代の制作に係るもの二十七篇が、「祝詞式」(別項)に收錄せられて現存してゐる。「祝詞式」以外のものでは「古記」の別記に採られた中臣壽詞(別項)の一篇も亦上代のものである。「祝詞式」の諸篇の多くは、奈良時代から平安時代初期にかけて作られたのであつて、既に一種の擬古體となつてゐるが、最も古いものと思はれる數篇は、近江朝若しくは藤原朝に成立したらしく、本來の面目をよく保存してゐる。上代の祝詞として最も見るべきは、これ等の數篇である。次に宣命は祝詞の系統を引いた叙事的抒情文學であつて、その形式は「公式令」に規定せられてゐる。併し「日本書紀」に收められたものは漢譯せられてゐて、國文で記された最古のものは、「續日本紀」所收の文武天皇即位の時の宣命以下の六十餘篇である。從つて現存する宣命は後期に屬せしめるのが妥當である。要するに推古朝から藤原朝に至る百十餘年間は、國家の發達に伴うて國民的自覺が起つた時代であつて、當時の國文學には國家的思想と國民的思想感情が强調せられてゐる。この傾向を承けて更に個人的に自覺して個性を表現するやうになつたのは後期奈良時代である。

(後期) 後期即ち奈良時代は、外來文明が益々盛んに傳來すると共に、一方では奈良奠都が國民の思想上に大なる刺戟を與へ、學問文藝は愈々發達して上代文學史上の黄金時代となつた。その初期には天武天皇の修史の御遺志を紹いで、元明天皇の和銅五年には太安萬侶の手に成つた「古事記」三卷(別項)が撰進せられ、翌六年には畿内七道諸國にその國の「風土記」(別項)を撰上すべき詔を下され、更に和銅七年には、紀清人・三宅藤麻呂の兩人に國史撰錄の詔があつた。次いで元正天皇の養老四年には、これより先、舍人親王等が勅を奉じて編纂中であつた「日本書紀」(別項)三十卷並に系圖一卷が獻上せられ、こゝに始めて大規模の國史の完成を告げたのである。「古事記」は國文を主として漢文脈を交へ、「日本書紀」は純漢文で書かれ、「風土記」は或は國文を主とし、或は純漢文を用ひ、或は兩者を混用するなど、國々によつてその文體を異にしてゐる。かくて奈良時代には各種の文體を自由に綴るやうになつたのであるが、文學的作品として最も價値のあるのは、素朴な上代の物語をその儘に傳へた「古事記」である。「風土記」は地方色の豐かな古老の所傳を地誌と共に記したもので、「古事記」「日本書紀」の内容と大に趣を異にしてゐるが、なほ後者が上古の諸傳説を國

家思想によつて統一し、集成してゐるのに對して、前者が地方的に分散してゐる民間傳説を地方別に記した所に著しい相異がある。奈良時代は國民的自覺が愈々盛んになつた時であつて、文學の方面には、自國の文學を支那文學と對等の位置に引上げようとする機運が起つた。即ち奈良時代の前期には、人麿・赤人等

系統を引いたもので、形式内容に共通するところが多い。而して祝詞が天つ神の語として宣るのに對して、宣命が現つ神なる天皇の勅命を宣るものとなつてゐる點、及び祝詞が善言吉辭の言靈の活動によつて國家皇室の繁榮を祈請するのに對して、宣命は敎訓的な語によつて國民を善導しようとしてゐる點などに

良時代の説話文學には、大體二つの系統のものがある。一は上古の神婚説話の系統を引いて、新たに支那の「遊仙窟」「列仙傳」などの影響を受けて發生した神仙説話であつて、「萬葉集」「懷風藻」「風土記」などに散見する。他の一は佛敎上の敎訓や奇談などを中心とする佛敎説話であつて、「日本靈異記」(別項)に百十二

のであるが、誕生の初めより姫宮と世に言ひなして育てられたのである。(切、三草河原)吉備の國彦とその妹敷妙が姫のお伴をして筑紫へ下らんと船を待つところに、筑波の長脚等西國よりお迎の船と僞つて漕ぎ來り、姫を奪ひ去るが、姫は忽ち雄叫びして男にかへり、夷どもを海中に投げ込む。〔第二〕(口、御垣の

家觀念の發達かあり、延いては國民的自覺が勃興した爲めに、國民文學は從來の渾沌とした民族的文學の域を脫して、種々の部門に分れてそれ〴〵發展の途に就くやうになつた。現存する最古の文獻は、聖德太子の憲法十七條、佛典の註疏、外交文書、金石文などであるが、これ等が作られた推古朝は國民文學の黎明期であつて、未だ純然たる文學的作品は現はれなかつた。併し當時はこれ等の遺文を見ても、又聖德太子が蘇我馬子と共に國史を編纂せられた事に鑑みても、國家の發達に伴ふ國民の自覺が起つたことは明白である。次いで舒明・皇極・孝德・齊明四帝の御代は、推古朝に發達した文物制度を承けて、社會各般の文化が著しく發展すると共に、文學の方面に漸く個人の作品が多く現はれたことは、「萬葉集」の和歌に次いで、貴重な國文學は宣命（別項）である。宣命は既に述べたやうに、祝詞の事業を企て給うたが、天皇の崩御によつて共に中絶した。次いで持統天皇の御代には、國史編纂の資料とする目的を以て、名族十八氏に命じてその家の纂紀を奉らしめられたが、これは散佚して後世に傳はらない。尤も延曆十九年に撰上した「高橋氏文」（別項）は、傳來の舊記を基として記したものであることは明かであるから、これによつて纂紀の大體を想像することが出來る。さて天武・持統兩帝の御代に興つた修史の御遺志は、その後歷朝に亙つて繼承せられ、後の奈良時代の初期に至つて、「古事記」「日本書紀」となつて完成を告げた。天武天皇朝に起つた國家的精神は、抒情文學方面にも刺戟を與へて、藤原朝に至つて和歌は國民的思想感情を高唱するやうになつた。而して藤原朝の和歌を代表する者は柿本

家思想によつて統一し、集成してゐるのに對して、前者が地方的に分散してゐる民間傳說を地方別に記した所に著しい相異がある。奈良時代は國民的自覺が愈々盛んになつた時であつて、文學の方面には、自國の文學を支那文學と對等の位置に引上げようとする機運が起つた。卽ち奈良時代の前期には、人麿・赤人等の跡を繼いで、山上憶良・大伴旅人・高橋蟲麿（各別項）の如き傑出した歌人が續々現はれて、題材表現內容などが著しく展開すると共に、各々その特質を發揮して上代和歌の最盛期を現出した。國文學が初めて個性に目覺めたのはこの時代である。次いで後期には大伴家持・坂上郎女・湯原王（各別項）の如き歌人が現はれて個性は愈々鮮明になり、形式內容共に漢文學の感化を受けて著しく複雜になり、また優美纖細になつた。當時の歌人は主として都會生活を營んだ貴族階級に屬する人々であるから、その趣味は著しく貴族化して變化に乏しくなり、また一面には外來文藝思想の感化を受けて、悲觀的傾向を帶びるやうになつた。かくて奈良時代の和歌は末期に近づくに從つて、素朴な上代文學の特質を失つて貴族的文學となると共に、都鄙の文學の懸隔は漸く著しくなり、又目で味ふ文學と耳に聽く文學とは別々の途を辿るやうになつた。奈良時代に古歌謠を一定の譜によつて謠つたことは、最近世に知られた近衞家の一「琴歌譜」（別項）の遺存によつて證せられるが、短歌を實地に諸ふ時の形式は、佛足石歌體（別項）に認めることが出來る。かの神樂・催馬樂（別項）などの如き諸物が成立したのも亦、この時代である。「萬葉集」の和歌に次いで、貴重な國文學は宣命（別項）である。宣命は既に述べたやうに、祝詞の系統を引いたもので、形式內容に共通するところが多い。而して祝詞が天つ神の語として宣るのに對して、宣命が現つ神なる天皇の勅命を宣るものとなつてゐる點、及び祝詞が善言吉辭の言靈の活動によつて國家皇室の繁榮を祈請するのに對して、宣命は敎訓的な語によつて國民を善導しようとしてゐる點などに時代の推移に伴ふ變遷が窺はれる。なほ宣命の文體は祝詞に比して著しく散文的になつて居り、內容は事柄に應じて變化するものであるから、定型に嵌まつた祝詞と異つて自由な發達を遂げることが出來た。而して宣命は奈良時代の末に近づくに從つて、儒佛思想を多量に取入れ、文體も漢文を混用し、用語も外來語を多く用ひるやうになつて、後の和漢混淆文の源泉をこゝに見るのである。奈良時代は漢文學の興隆期であつて、宮廷に於ては四時の公宴に、群臣をして詩を上らしめられ、又貴族の間にも醵集賦詩の風が流行したから、詩文の大家が續々輩出した。それ等の人々の作詩は、六朝古詩を典型としたものであつて五言詩が多く、又文章は四六駢儷體を模範として頗りに美辭麗句を連ねたもので、未だ自由に思想感情を表現してゐない。この頃はまた支那の文人の詩文集に倣つて詩の撰集や家集を編むことも行はれたやうであるが、殆ど散佚して今は天平勝寶三年に成つた「懷風藻」（別項）一卷を存するのみである。この外、當時の詩は少數ではあるが、「萬葉集」の歌序や後の「經國集」などに散見し、又文章は「古事記」の序、「懷風藻」の序並に「詩家傳」、「常陸風土記」「萬葉集」の歌序などにその面目を傳へてゐる。最後に上古の傳說說話の系統を引いて現はれた說話文學に就いて一言して置く。奈良時代の說話文學には、大體二つの系統のものがある。一は上古の神婚說話の系統を引いて、新たに支那の「遊仙窟」「列仙傳」などの影響を受けて發生した神仙說話であつて、「萬葉集」「懷風藻」「風土記」などに散見する。他の一は佛敎上の敎訓や奇談などを中心とする佛敎說話であつて、「日本靈異記」（別項）に百十二話を收錄してゐる。この二種の說話文學は、共に國文學に新しい要素を加へて、平安時代の物語類の源流となつた點に於て、特に注意すべきものである。【次田】

【參考】上代國文學の研究 武田祐吉〇神と神を祭る者との文學 同上〇上代日本文學の研究 久松潛一〇上代文學の研究 倉野憲司〇文學序說 土井光知〇古代研究（國文學篇） 折口信夫

大和路仲太夫（やまとぢなかだいぶ）「豐後節」を見よ。

日本武尊吾妻鑑（やまとたけのみことあづまかがみ）淨瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衞門

【興行】享保五年十一月四日より竹本座（寶曆板「外題年鑑」）【諸本】七行八十八丁本、山本九兵衞板。十二行二十八丁本、奥付缺。近松世話淨瑠璃（帝國文庫）、諸種の近松全集所收。

【題材】「日本書紀」卷第七に據つて脚色したもの。

【梗概】〔第一〕（大序、高穴穗の宮）景行天皇の御代、筑紫の八十（やそ）の梟帥（たける）の使阿蘇の蹴速（くまはや）、坂東の外濱（そとのはま）の忍熊（おしくま）の使筑波の長脚（ながあし）が、同時に來貢し、それ〴〵皇女神寶（かむたから）姬を申し請けたしと奏する。天皇叡慮を惱ませられ、兎に角、競馬に勝ちたる方に與ふべしとの宣旨あつたが、その勝負の結果、姬は梟帥の妻と定まる。（中、姬宮寢殿）天皇密かに行幸あり、姬に向つてこの度の好機を逸せず梟帥を閨の中にて誅伐せよと命ぜられる。姬は實は第二皇子なのであるが、誕生の初めより姬宮と世に言ひなして育てられたのである。（切、三草河原）吉備の國彥とその妹敷妙が姬のお伴をして筑紫へ下らんと船を待つところに、筑波の長脚等西國よりお迎の船と僞つて漕ぎ來り、姬を奪ひ去るが、姬は忽ち雄叫（たけび）びして男にかへり、夷どもを海中に投げ込む。【第二】（口、御垣の里）姬の一行は途中で手に入れた梟帥の密書により、姬の兄大碓の皇子が梟帥方に內通して姬が男なる事を密告せるを知り、その裏を掻くために姬と敷妙と服裝を換へる。そこへ梟帥方より厚化粧で變裝せる荒男達が待上臈と稱して出迎へるが、國彥がこれ等を斷る滑稽がある。とど彼等は奥なる姬が眞の女なるを確めて不審を晴らし、婚禮の行列は無事城內に入る。（切、城內姬宮寢所）尊と國彥とは敷妙に梟帥が通ひ來らば寢入りし折を待つて刺し殺せと言ひ含めるが、豫て尊と言ひ交せる敷妙は梟帥と寢るを肯んぜず、こゝに尊と敷妙の濡事がある。やがて梟帥が通ひ來り、敷妙と共に閨に入るが、敷妙は梟帥を討ち損じてその刃に斃れる。かくて城中の騷動となつたが、尊は國彥と力を協せて遂に梟帥を刺す。死に臨んで梟帥は日本武尊の尊號を尊に奉る。〔第三〕（口、內裏）大碓の皇子は惡行の罪により佐渡が島に流される事になつたが、國彥の兄武彥が皇子と乳兄弟の故を以て强ひて赦免を願つたので、皇子は一時武彥に預けられることとなる。（切、吉備の武彥館）武彥は皇子の惡行を矯めんため、古襤褸に着かへさせて木割り米踏みをさせるが、皇子は武彥の妻朧月に挑む等依然惡心が止みさうもないので、武彥は親子夫婦で諫止せんと、先づ我が子田鶴若を殺す。この有樣に皇子は始めて

山に入れば、不思議や曾て見たことのない貴人の住家に出會し、見れば邸内には、父母もわたくしに實つてゐる。父母に與へ子類が枝も出會し、見れば邸内には、父母もわたくしに實つてゐる。父母に與へ

たいと思つてその家に熟願して貰ひ受け、家に歸つて父母を悦ばせ、柑子と思つたものが、出して見ると、鏡かと思つたものが、怒ち小判に變つて居り、こゝに置くと、柑子と

圍まれるが、十束の劍の靈威により逆に敵を苦しめ、遂に忍熊の首を獲て迎への軍勢と共に凱陣される。

【解說】事件が前半と後半とに別れてゐて、その間に緊密な因果關係を缺いてゐる。隨つて全體として見るときは敍事的であつて戲曲的ではない。趣向としては前半に面白味があらう。本作は寬保元年十月八日より京の中村粂太郎座に於て上演された。

【參考】大近松全集第十二卷解說木谷蓬吟〇近松全集第十二卷解題藤井乙男　〇京阪歌舞伎年代記伊原敏郎（歌舞伎連載）　（高野（正））

大和綴（やまとと）　書誌學　【解說】册子本（別項）の綴ぢ方の一つで、本の表紙の背からすこし離れた處に、上下二箇所に縱に二つづつ孔を穿ち、その二つの孔に糸又は紐を通して結

年十二月創刊、博文館。翌二十二年十二月第十三號を以て廢刊。【編輯者】當時新進の廣津柳浪（別項）が主となつて編輯した。【解說】金港堂の「都の花」（別項）、春陽堂の「小說叢錦」（別項）に次いで現はれた文藝雜誌である。小說は何れも連載もので、柳浪の外、矢崎嵯峨の屋（別項）・三木愛花・須藤南翠（別項）・小金井喜美子、その他の人々が執筆した。（齋藤（昌））

大倭二十四孝（やまとにじふしかう）　假名草子　二十四卷十二册　【作者】淺井了意。但し名を記してないが、「元祿五目錄」の作者附に了意とあるのを證とする。【名稱】「日本二十四孝」とも書く。【諸本】寬文五年正月、洛陽書林積德堂の刊記あるのが初版で、その後（延寶頃）江戸鱗形屋で複刻した。この複刻は插繪が菱川師宣らしく、外題は同訓ではあるが「日本二十

もほぼ同じく、古書の中より孝子の話を蒐集し、これを二十四孝傳に擬したのである。その人名は次の如く、總目錄に記してある。

（第一）序品、（第二）孝皇御門の御事、（第三）市守長者の事、（第四）業太夫の事、（第五）周防內侍の事、（第六）木村朝治の事、（第七）狹白の事、（第八）平櫻子の事、（第九）佐藤ふぢ王の事、（第十）緣覺上人の事、（第十一）壬生金壽の事、（第十二）高橋種次の事、（第十三）熱田緣栄女の事、（第十四）山口秋道の事、（第十五）三保干壽丸の事、（第十六）清原實元の事、（第十七）山名玉松の事、（第十八）木幡藤榮の事、（第十九）照田姬の事、（第二十）二宮花滿の事、（第二十一）蒐の紐の事、

與へることが出來ず、愛ひに閉されて木幡の

日本二十四孝（笹野堅氏藏）

山に入れば、不思議や曾て見たことのない貴人の住家に出會し、見れば邸內には見事な柑子類が枝もたわゝに實つてゐる。父母に與へたいと思つてその家に歎願して貰ひ受け、家に歸つて父母を悅ばせ、籠から出して親の前に置くと、柑子と思つたものが、忽ち小判に變つて居り、これから富み榮えて果ては仙人となる。「市守長者」「福萬長者」もこの類の話である。なほこの說話が、六段本やお伽草子の單行本として刊行されたものが若干ある。「佐藤ふぢ王」「市守長者物語」「千世能姬」等の如きがその例である。（水谷）

倭姬皇后（やまとひめくわうごう）　歌人　【本名】倭姬王（やまとのおほきみ）。「日本書紀」天智天皇の卷に、かく記してある。「萬葉集」卷二には「太后」「倭太后（やまとのおほきさき）」と二樣に記してある。【生歿】未詳　【閱歷】「書紀」天智七年二月の條に、「二月丙辰朔戊寅（七日）、立二古人大兄皇子女、倭姬王一爲二皇后一」とある。御母は不明。古人大兄皇子は、舒明天皇と法提郎媛との間の御子で、天智帝には異腹の兄君にあたる。御二人の間には御子はなかつた。これ以外に信憑すべき記載はない。

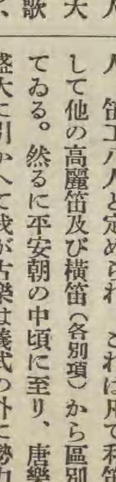
法提郎媛
三十四代 舒明天皇 ― 古人大兄皇子 ― 倭姬王
三十五代 皇極天皇
三十八代 天智天皇

【作品】すべて「萬葉集」（卷二）に出てゐる。卷二挽歌部の第七首以下三首の短歌、二首を隔てた次にある長歌。總計長歌一首、短歌三首。皆天智天皇の御崩御に關した作のみで、前二首が天皇の御重態の時の歌、第三首が崩御の折の作。長歌は崩御後の作である。皇后は崩御關係以外の歌も勿論作られたことと思はれるのに、それが無いのは御作が散佚したものであらう。

【作風】「萬葉集」に殘つてゐるものに就いて考ふれば、皇后の御歌風は、極めて眞實味に富んでゐる。眞實と云ふよりは眞率―天眞のまゝと云ふ姿が深くわれ等を動かす。崩御後の長歌「鯨魚取り近江の海を沖避けて漕ぎくる船」の長歌は、簡單な對句を入れてある外殆ど何等の修飾を用ひず、心の悲しみをありのまゝ吐露してある。讀む者は、ありのまゝなるが故に、皇后の悲しみがよく理解され、十分にそれに同感出來るのである。又女性の歌に珍しく歌柄の大樣で、豐かな調のあることに注意すべきである。

和笛（やまとぶえ）　樂器　【異稱】（森本）日本笛・太笛（ふとぶえ）・神樂笛（かぐらぶえ）・神笛（かみぶえ）・長笛（ながぶえ）。【性質・構造】笛の一種。管を水平にして吹く。歌口は管の側面にあつて他の指孔と並んでゐる。我が國古來の笛を改造したもので、主として神樂の伴奏に用ひる。管の長さ一尺五寸（或は一尺四寸七分）、管の內徑は尾端に於て三分八厘、肉の厚さ一分ばかり、竹を以て作り、歌口及び指孔のある所を除き、他の部分は管を樺を以て卷く。指孔は六個あり、皆特殊なる孔名を持つてゐる。卽ち尾端に近いものから順に第一孔を干（かん）、第二孔を五（ご）、第三孔を上（しやう）、第四孔を夕（せき）、第五孔を中（ちう）、第六孔を六（りく）と呼ぶ。又尾端より一尺三寸四分ばかりのところ（頭端より一寸餘の所）に、唐木を以て節（ふし）の形をしたものを作つてこれを嵌め込んで置く。これは竹の節に枝が生じた形を摸したものであるが、その狀は蟬がとまつてゐる態に似てゐるので、普通にこれを蟬と呼んでゐる。笛の頭端は閉塞してある。これを吹くには右手の無名指で第一孔を、その中指で第二孔を、その食指で第三孔を、左手の無名指で第四孔を、その中指で第五孔を、その食指で第六孔を按ずるのである。それで筒音（卽ち凡ての孔を塞ぐ）は黃鐘、第一孔を開けば壹越、第二孔を開けば平調、第三孔を開けば勝絕、第四孔を開けば双調、第五孔を開けば黃鐘、第六孔を開けば神仙の音が出る。笛の譜は指孔の名を書き列ねるのであるが、その旋律を覺え易くするために、「唱歌」と稱へるものを添へて用ひるのである。これはタチツテト及びラリルレロ、また孔を打つ時にはハヒフヘホ等の語を組合せて一種の唱詞を作り、これをその旋律に合せて唄ひ、又これを記して以て笛の譜とする。獨奏の場合もあり、また和琴と合奏する場合もあり、歌の伴奏として用ひる場合もある。

【沿革】我が國の古代には橫吹の笛が用ひられてゐたが、その名稱は一般に單に「ふえ」と呼ばれてゐた。天照大神の天岩窟に籠らせ給うた時に天鈿女命が天香久山の竹を採り、その節間を切つて風穴を彫つて笛を作つたといふ說があるが（この說は頗る疑はしい）、兎に角上古からこの種の笛の存してゐたことは確かである。人皇の代となつては、繼體天皇七年九月に勾大兄皇子が春日皇女と歌唱し給ふ時、妃の答歌に、「こもりくの、泊瀨の河ゆ、流れ來る竹の、くみ竹よ竹本方をば琴に作り、末をば笛につくり吹きなす云々」とあり、また同二十四年十月、毛野臣朝鮮より召され、對馬にて死し、送葬の時、その妻歌つて曰く「牧方ゆ、笛吹きのぼる。近江のや、毛野の稚子、笛ふきのぼる云々」とあるのを見ても、笛が多く行はれてゐたことが知られる。また「常陸風土記」行方郡の條に、崇神天皇の時、東夷の荒賊を征するために建借間命を遣はされた時、船中にて七日七夜、天の鳥琴・天の鳥笛を奏し、枠島曲を歌つて敵を油斷せしめ、遂に勝を得たといふことが記してあるが、この天の鳥笛も我が上代の笛を指した美稱で、鳥の囀る如く美しい音を出す笛といふ意味のものであつたらしい。併しこれ等の上古の笛は、今日一つも殘存してゐないから、その制は分らない。推古天皇頃から續々と支那及び朝鮮の樂器が輸入されるに及び、これ等の進步した製作法に依る樂器を摸倣して上古の樂器の改造を行ひ、かくして今日見る如き和笛を生ずるに至つたものらしい。「日本書紀」天武天皇十四年五月戊午の詔に曰く、「凡そ諸の歌男歌女、笛吹者は已の子孫に傳へて歌笛を傳へしめよ」と。この歌笛とは歌及び笛といふことで、この笛が和笛のことであるのは明かである。次いで文武天皇の「大寶令」の中には、笛師二人、笛生六人、笛工八人と定められ、これは凡て和笛として他の高麗笛及び橫笛（各別項）から區別してゐる。然るに平安朝の中頃に至り、唐樂の盛大に引かへて我が古樂は儀式の外に勢力がなくなり、和笛を熱心に學ぶ者が少なくつて來たと見えて、「延喜式」の雅樂寮の條には「凡そ諸樂橫笛師等、和笛を解せざれば任用するを得ず」と規定してある。かく迄にして和笛を奬勵し、漸くにしてその命脈を繫いでゐたのである。然るに堀河天皇の頃になるとその衰微一層甚だしく、當時和笛を正しく吹奏し



得る者は行綱ただ一人となつてしまひ、行綱歿後には、清仲は不十分ながらその後を繼いだ。併し幸にしてこれは我が皇室に於かせられて、最も重儀たる神樂の主要樂器であるために、滅亡する憂ひはなく、かくして今日に傳へられてゐるのである。近代に於ては和笛は西園寺家より出でたる四辻家に傳はり、四辻權大納言季繼卿を以て中興の祖とし、以來四辻家にその統を傳へてゐる。樂人としては大神氏がこれを傳へてゐるが、それはいづれも四辻家からその傳を受けるのである。德川四代將軍頃の名人安藝守大神景治及び近江守大神景福は孰れも四辻季繼卿より學び、又五代將軍頃の安藝守大神景明・出羽守大神景廣・近江守大神景元・但馬守大神景剩は、孰れも季繼卿の息公理卿からその傳を受けてゐる。今日に於ては大神氏の後胤たる山井氏がその正系を受けてゐる。

【名器】和笛の名器として知られたものは少く、「振吟要錄」には、太笛名物として「葵二（有栖川殿の器）と「千歲」（大神景光所持の器）との二つが揭げられてある。この「千歲」は今も我が皇室の御物として宮內省式部職に保管されてゐる。これは後醍醐天皇の御師範たりし大神景光の祕藏品で、子孫に傳へられてゐたが、近代に至りて彦根中將井伊直亮の手に入り、それより公物として獻上され、それが裏辻家に入り、裏辻中將公愛から皇室に獻上されたものである。

【參考】樂家錄（卷十二・十六）○續教訓抄（卷十一上）〔田邊〕

倭舞（やまとまひ）　古代歌舞【名稱】大和國から出た風俗歌舞であるからかく稱するとも、外來樂に對して本邦固有の歌舞といふ意味であるとも云ふ。歌の方のみを倭歌（やまとうた）とも云ふ。

【沿革】古い起原のものであらうが、寶龜元年三月由義宮で歌垣の行はれた際、宮人の倭舞を奏したのが、國史に見える初見である（續日本紀、稱德卷）。平安時代では、宮中及び諸社の儀式に用ひられた。その事は、「貞觀儀式」「延喜式」、下つて「北山抄」「江家次第」等に見えてゐる。大嘗祭の午の日には、舞人十人が共に舞ひ、歌人も亦十人あつて、琴師二人、笛工一人が伴奏した。舞人は內舍人より出で、田舞・久米舞等と共に奏せられたのである。巳の日には先づ倭舞を奏し、次に風俗を奏する例であつた。諸社に於ては、二月十一日の春日祭・園韓神祭・平野祭、十二月の鎭魂祭等には、倭舞を善くする舍人四人を遣はして祭に參せしめ、神主も舞ひ、又舍人達も二人づつ相舞に舞つた。伊勢太神宮の倭舞に就いては、早く「皇太神宮儀式帳」にも、屢々祭事に倭舞が用ひられ、就中直會（なほらひ）倭舞の奏せられた事を記してゐる。卽ち倭舞は御饌（みけ）歌としても用ひられたのである。「延喜式」にも、六月、月次祭に太神宮で饗饌の倭舞の奏せられたことを記した。その他、諸社では春日祭に、倭舞を直會殿で奏し、宮中に於ても、「江家次第」の大嘗會の條には、和舞に「於二舞臺北一舞二解齋樂一」とも註して倭舞は解齋（あげ）直會樂であつた。「類聚三代格」所載の弘仁十年の太政官符によれば、雅樂師のうち、舞師四人で、そのうち、倭舞が一人あり、宮中で倭舞を內舍人達に敎授してゐたことが分る。かくて年々行はれて來たが、室町時代應仁の亂の頃に至つて絕えたのを、延享五年十一月二十日の大嘗祭の午の日に再興せられた（續史愚抄）。これは、春日神社の社司富田家に、倭舞その他の神樂の古譜が傳へられたのに據つたものであるが、更に元治元年に至つて富田氏の盡力により、春日祭でもこれが再興せられた（明治三年刊やまづら）。爾後宮中でも、十二月の鎭魂祭の日に奏せられ、諸社でも行はれて、今日に至つてゐる。

【歌詞】平安時代に用ひられた歌詞は、「古今集」卷二十の大歌所御歌の中に、古き倭舞の歌として

楚結ふ（しそこゆ）葛城山に降る雪の間なく時なくおもほゆるかな

と云ふ歌が出てゐる。葛城山と云ふ大和の地名の詠み込まれてゐる所が倭舞の名の謂であると解せられてゐる。これは平安朝以前より傳はる大歌の一で、大歌所で倭舞師によつて敎習せられ、宮中諸社で用ひられたものであらう。「嘉良喜隨筆」には、古書によつて和琴の歌と題し、「古今集」の倭舞の歌に和琴の譜を附したものを揭げ、「ハヤク歌フ」と記してゐる。卽ち、倭舞の歌は早調子であつて、和琴の譜もこゝに見ることが出來る。古本「東遊」の裏書に、倭歌と題して僧正遍照の五節舞姬を見て詠んだ「天つ風」の歌を出し、「世に大歌と稱す、その歌最も多し、唯一首を稱す、その音の同じきに依つてなり」と註したのも、「東遊」と共に諸社で用ひられた倭舞歌であらうか。然らば後世には倭舞歌には種々の和歌を取り用ひて、同じ曲節で歌つたものと見える。現今再興の倭舞は、和琴を省き、笏拍子・篳篥・笛の伴奏で、小忌衣を付け、歌人二人、舞人四人、樂器各一人によつて行はれる。舞の歌を一歌とし、二歌は、

宮人の腰にさしたる楠葉を我取り持ちて萬代や經む

と云ふ歌である。「倭舞歌大嘗會午ノ日幷鎭魂祭奉仕之」三拍子」と題したこの歌の譜本も存してゐる。伊勢皇太神宮所用の歌は、「建久內宮年中行事」に宮司倭舞時歌三首、神主舞時、祭使舞時、寮官舞時の歌各一首が見えてゐる。祭使舞時の歌は、

大宮の戶かげに來居る沖の鳥それを見て空の荒騰飛びかけるめり

と云ふ形であるが、他は何れも純然たる短歌體の歌で、これが倭舞歌の一般形式である。なほ宮中の神樂歌の大前張の宮人を、「梁塵後抄」には倭舞歌と記してゐる。これは「古語拾遺」によれば、皇太神宮で終夜宴樂の時に歌つた歌であるらしいから、矢張り伊勢皇太神宮所用の直會（なほらひ）倭舞の歌と見るべきであらうか。前述の例の如く、倭舞の歌に、「宮人の」と云ふ發語を持つ歌が散見するのは、この宮人の歌より出でたものかと思はれる（伊勢神歌參照）。春日神社では、古くより、二月・十一月の春日祭に、

野も山も雪は降れるを神垣にのみ一花（ひとはな）梅は咲けり

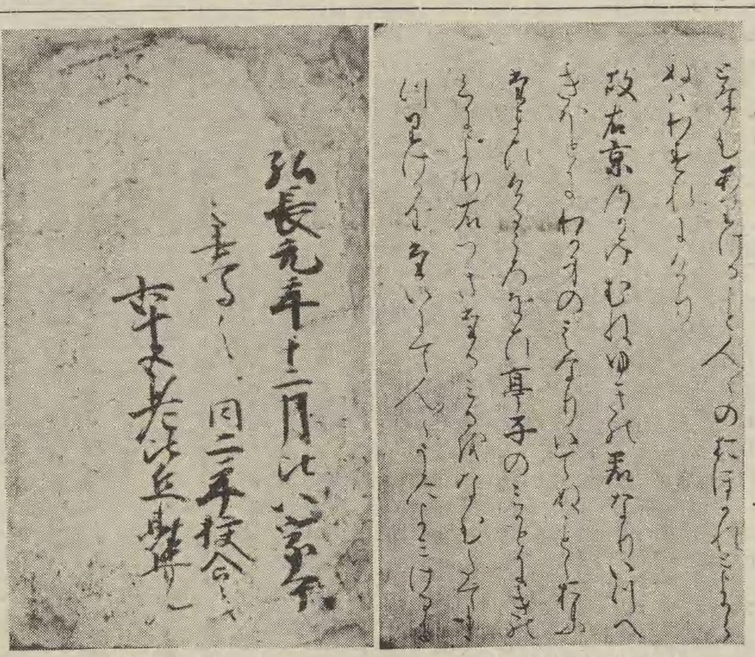
と云ふ歌を傳へて歌ひ來つた。かくて元治元年の倭舞が再興された時、この歌を梅枝と題して最初に置き、以下新古種々の歌を取り交ぜて新しい歌舞を組織した。これは同社の社司富田光春の所作で、「倭舞歌譜」（明治三年刊）はその歌詞を錄し、來由につき註を附した書である。更に「やまづら」（明治三年刊）を同時に刊行して、倭舞の由來・儀式・故實等につき、同社の古記や古傳を錄して說明した。富田家に傳はる古文書も紹介せられてゐる。更に富田光春は、倭舞御巫子舞と云ふ神樂の新作をなし、同社の御田植祭の神事歌に做つて歌詞を制定し、雅樂師と共力して世に普及を計つた。

この目的のもとに、「藤のしなひ」（明治七年刊）が刊行せられ、「神代俳優倭歌舞」の如き寫本となつて世に行はれたのであるが、古き倭舞とは全く異なつたものである。この他、熊野神社にも獨特の倭舞歌が傳誦せられ、恐らく鎌倉時代頃のものかと云ふ（「日本歌謠史」に歌七首を出す。かやうに諸社で專へられる歌もあるやうな傳本も發見されてゐない。次に賀茂眞淵は、「大和物語直解」に於て「萬葉集」を引き、「國はいづこにもあれ、都べをさして大和といひけん事、後までも傳へいへれば、山城の都をさしても大和とはいひつらん」と云つて、「大和物語」とは「伊勢物語」に對して、都物語といふ心であると解したが、いかがであるとも云ふ。伊勢物語に對して爾云ともいへり。之を尋ぬべし」と、その「大和物語抄」に云つてゐる。井上文雄は「冠註」に於て、「大和河內つくしみちのくつの國しなのなど國々のことどもをも書たれば日本の物かたりといへる意にてしか名つけしなるべし」と云つてゐる。また荷田春都は「冠註」に於て、「はやう天曆の比何人かなど云へど、こは條々異にて、古なる、後なる、交れり。その古を云ふ時は、その折に從ひて、今の左大臣など書くこと常なれば、是も時をさすに由なし。云々」とて、「袋草紙」の說に反對し、さて圓融・花山・一條の初めつ方に亙る時代に成立せしものと斷定した。井上文雄は「冠註」に於て、「はやう天曆の比何人か

この目的のもとに、「藤のしなひ」（明治七年刊）が刊行せられ、「神代俳優倭歌舞」の如き寫本となつて世に行はれたのであるが、古き倭舞とは全く異なつたものである。この他、熊野神社にも獨特の倭舞歌が傳誦せられ、恐らく鎌倉時代頃のものかと云ふ（「日本歌謡史」に歌七首を出す）。かやうに諸社で傳へられる歌もなほ多い事であらうが、その來由・時代を考ることは不可能である。

（藤田）

大和物語（やまとものがたり）　物語　【作者】季吟の「抄」に「作者の説も一方ならず、あるは在原滋春の所作なり、あるは花山院の御作り物語とも申つたへて侍り」とて、兩説について批評を下し、滋春の作り置きし原作に、花山の院が加筆し給ひ、始めてこの物語が成立したのであるとて兩説を折衷した。しかし「袋草紙」にも、「作者不審」とある如く、滋春の作となす根據は未だ甚だ薄弱である。尤もこの書の體裁の上から見て、滋春に關係ある人の作ではないかとの推定が、藤岡作太郎博士によつて提出されたが、これも確かな説ではない。次に花山院の御作となす説は、一條兼良の「歌林良材」に見え、また花山院御作の由の奥書を有する古寫本もある。季吟は「抄」に於て、花山院の佛教を信じ給へる御境遇より推して、「これらの文體を見るに、かの帝の御心ありてもや、かく物せさせたまへるならんとこそ愚意におしはかられ侍れ」と云つてゐる。しかしこの論據も未だ薄弱であつて、作者は要するに不明といふより外はあるまい。【名稱】大和といふ名稱の由來については諸説がある。先づ「袋草紙」は「其名目和語由歟」と云ひ、また北村季吟は「我がひのもとのことばをもて、やまとうたの道によりたる古事共をかきあつめたるゆゑなるべし。又やまとものがたりは、伊勢物語に對して爾云ともいへり。之を尋ぬべし」と、その「大和物語抄」に云つてゐる。井上文雄は「冠註」に於て、「大和河内つくしみちのくつの國しなのなど國々のことどもをも書たれば日本の物かたりといへる意にてしか名つけしなるべし」と云つてゐる。また荷田春



前田家本大和物語

同　上（奥書）

あるやうな傳本も發見されてゐない。次に賀茂眞淵は、「大和物語直解」に於て「萬葉集」を引き、「國はいづこにもあれ、都べをさして大和といひけん事、後までも傳へいへれば、山城の都をさしても大和とはいひつらん」と云つて、「大和物語」とは「伊勢物語」に對して、都物語といふ心であると解したが、いかがであらう。清輔・季吟・文雄等の説も、やはり臆説に過ぎないが、支那のことを書いた物語に對して、我が日本の物語といふ程の意に取つたのは、蓋し穩當のことであらう。

【成立】「袋草紙」には、「作者不審、先朱雀院御時天曆（慶イ）始事歟、先帝延喜御宇也、大キオホイモウチキミト號スハ貞信公也、右兼盛幷檜垣嫗等歌也」と見えてゐる。季吟は右兼盛以下の人々が、花山院の天慶頃の人であるのみならず、清愼公（小野宮左大臣）をこの物語に今の左大臣といふも、天慶年中に左府に任じたれば、以て時代を推定する根據となし得べしとしてゐる。然るに賀茂眞淵は、「直解」に於て、清輔の時代すら、なほ作れる人は知らずといふ狀態であつたから、まして後の説は信ずるに足らずと述べ、「さて此書に先帝とあるを、延喜の御代とし、太政大臣とあるを貞信公とし、今の左大臣といふを小野宮殿とするにつけて、天曆などの頃に出こし滿は、「今の京の事おほかれど、はた大和の國にて有りしことをも書きたれば、大和と名づけたるものと見ゆ」と云つたといふ由を「群書一覽」「冠註」等に引いてゐる。然るに「大和物語」には、大和のみならず、攝津・河内・筑紫、その他の國々の説話があるのみならず、「伊勢物語」のやうに、卷頭第一に大和の國の説話の

事」の條に、「大和物語」の本文の一節をあげ、「大和物語の諸本かくの如し」と云つてゐる。又藤原清輔の「袋草紙」卷二に「大和物語、和歌二百七十首(この中連歌三首、但し本々不同)」とあるから、室町時代は勿論、平安朝末期に於ても、異本對立の混亂狀態であつたらしい。現存諸本には、類從本系統と北村季吟の抄本系統との二大系統が存してゐるが、これが相互に錯亂してゐて、傳來のあとを尋ねることは頗る困難である。季吟の抄に、「このものがたり本の差異おほし。六條家の本、二條家の本、其ほかあまたかはり侍り」と云つて、たしかに二つの系統の異本を見てゐるらしい。木崎雅興は、「大和物語虛靜抄」に「六條家本といふものあるよしなれどいまだ見出侍らず」と云つてゐる。安永の頃已に見出すことの出來なかつた本であるらしい。季吟の「抄」には、六條家の本文を二ケ所に抄記してゐる。現存諸本中、これに近い本文を有するのは、御巫清勇氏所藏の本である。六條家の本は、和歌二百七十首を有するにすぎない(袋草紙)のに、流布本は二百八十餘首ある。六條家の人々の手によつて成された物語註・歌書などに、「六和物語」の本文が引用されてゐるのを、「抄」の本文に比較すると、可なりの相違がある。文雄の「冠註」に引ける古寫本の本文及び御巫氏藏の本の本文は、「抄」の本文と著しく異つて、これが六條家本、又はそれに近い本ではないかと想像されるが、はつきりとは云へない。次に二條家本といふのは、藤岡博士が「國文學全史平安朝篇」に於て、「北村季吟の抄は定家自筆の本に從へりといふ。すなはち二條家の本にして、蓋しその原本は現に前田侯爵家の祕藏にかゝるものならんか」と云はれた。が、所謂二條家本といふのは、前田家本の寫しに屬する系統の本ではなくて、むしろ三條西家藏の古寫本及びその系統の本をさすのであらう。前田家本は、奥に「弘長元年十二月比以家本令書寫之、同二年校合、六十五老比丘 融覺」とあり、更に前大納言爲家の眞蹟疑ひなきものであるといふ源通村の跋がある。帝國大學國文學研究室所藏の「大和物語抄」の刊本に筆者不詳の書入があるが、その所々に爲氏卿本として本文の一部を校合してゐるが、これ三條西家藏の傳爲氏筆本と同じものである。季吟が「大和物語抄」(別項)の本文としたのは定家自筆本の轉寫本である。この事は、「明月記」寛喜三年八月十八日の條に見えてゐるが、これが果して定家自らの識語であるか、「明月記」の記事によつて、何人かが僞作した跋文であるかは不明である。季吟の見た本は、その定家自筆本を、永享三年十月、可なり嚴密な態度で書寫した本であつた。現存の本の中で、この系統の本で最も古いものは、近衞家藏の一本と甘露寺親長自筆の本とである。この系統の本には、如上の奥書の前に宇多法皇の御略歷が加へられてゐる。奥書の次に、「またあるほんによのつねのほかなりしことくはゝれり(下略)」とて、「いまはむかしふたりしてひとりの女をよばひけり云々」の說話と、その他三つの說話とをのせてゐる。これは「平中物語」から轉載したものである。國文大觀・日本文學全書・國文叢書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

【內容】この書は物語とは云ふけれども、全篇を通じて一貫した筋があるのではなく、ただ和歌を主とした片々たる說話百七十三篇(流布本)を集錄したものである。書中にあらはれる人物は、宇多天皇、陽成天皇の皇子元良親王、宇多天皇の皇子敦慶親王、源清蔭・平兼盛・小野好古・藤原朝忠・源宗于・藤原兼輔・平定文・藤原仲平・源保光等、その他多數に及び、女子には、桂皇女、藤原千兼の妻、監の命婦、後蔭中將の女、三條御息所、宗于の女、中興の女等多數である。場所も單に京中の事に止まらず、諸國の事に亙つてゐる。事件は大抵寬平の頃から天曆の頃までに及び、「後撰集」時代の歌人の情話である。その體裁は極めて「伊勢物語」に類似してゐる。然るにこの物語は、上下二卷のうち、下卷の初め二三葉を界として、前半は專ら和歌を主とする詞書の延長のやうなものであり、後半は說話を主とした說話集のやうな形になつてゐる。而して前半は、大抵事實のまゝを記したやうにも思へるが、中には勅撰集と同じ和歌の作者を異にしたやうな場合もある。これ等は故意に改めたのではなくて、事實の誤傳をそのまゝに記したのであらう(藤岡博士)と云はれてゐるが、恐らくさうであらう。後半はかゝる近代の人物に關する說話のみならず、古書又は傳說に材料を求め、これに多少の修飾を施してゐるやうである。例へば津の國菟原乙女の傳說、猿澤の池に投じたる采女の傳說、淺香山影さへ見ゆると詠みし采女の傳說等は「萬葉集」により、大和國葛城郡に住む男女の話、在中將と二條の后の話、在中將の物見に出でたる話等は、本文に「これ等は物語にて、世にある事どもなり」とある如く「伊勢物語」に據つたのである。また姨捨山の傳說、難波の葦刈の傳說は、當時行はれた口碑に據つたものであり、和歌をもとにして說話を作り出したやうなのもある。

【史的地位】本書は、「伊勢物語」に次いであらはれ、歌を學ぶものの必ず見るべきものとされた(顯昭)。「伊勢物語」と同樣な形式になつてゐるが、前者のやうに一貫した氣分がある譯ではない。個々の說話を順序なく雜然と輯錄したにすぎない。打聞又は雜纂の性質を持つてゐる。從つて「伊勢物語」のやうに、作者の個性がはつきりとしてはゐない。また文章も「土佐日記」「伊勢物語」のやうな簡潔と詩趣がなく、飽く迄も平板な記述又は說明である。併しこの傾向は、抒情詩が「伊勢物語」の如き抒情詩的散文となり、やがて宮廷の物語文學に展開して行く過渡期の傾向で、文學史的には意義がある。「伊勢物語」の記事が、この物語に於て、飽く迄も物語的性質のものとして擴大され、敷衍されて行くが如きは、その一例である。この雜纂的性質は、「今昔物語」(別項)に類し、後世の「唐物語」「宇治拾遺物語」「古今著聞集」(各別項)等共通するのである。

【參考】大和物語抄北村季吟○大和物語補翼 伴蒿蹊○大和物語首書○大和物語直解 賀茂眞淵○冠註大和物語 井上文雄○大和物語纂註(一名大和物語錦繡抄)前田夏蔭○大和物語追考○大和物語別勘○大和物語虛靜抄 木崎雅興

(國文註釋全書) 【池田】

大和物語抄 やまとものがたりせう

【著者】北村季吟【成立】卷末の跋に、「壬辰十月中旬、洛下拾穗」とあるから、承應元年に成つたものであらう。翌二年癸巳仲夏吉日、大阪心齋橋筋順慶町、柏原屋與左衞門刊。

【內容】先づ本文を示し、次に語句を摘出して解釋を施してゐる。時々異本との校合もしてゐる。卷首に漢文の序があつて、その終りに「昭陽大荒落如月日 洛陽後學源杏儒澤、臺子

小廬室之墨池」とある。次に、「大和物語」についての一般的知識、例へば諸本・作者・成立年代・題號等について考證してゐる。諸本については、六條家・二條家の本があること、この抄は定家自筆の本を寫せる本をもととしたこと等をのべ、作者については、在原滋春が最初に書きたるものに、花山の院が加筆し給へるものならんとて、種々考證して辨じてゐる。成立年代も、一時代に成れるものにあらずと云ひ、題號につきては清輔が「袋草紙」の說を引き、我が日の本の言葉をもて、やまとうたの道によりたる古ごとどもを書き集めたる故なるべしと云つてゐる。註は古き勘物をもとし、これに自說を加へたものである。奥に宇多法皇の御略歷を附し、更に「本奥書云、寛喜三年八月十四日辛未時於北邊蓬屋終書寫之功閑居徒然之餘也目盲手振不成字推量而染筆計也即校畢當初書寫物以無落字爲一得耄及之後已落數行書入之可恥可悲」「或本奥書云、此一帖以京極黄門自筆之本不違一字誂人令書之但落字等繁多追而猶可加勘校者也、永享三年十月日、權少僧都在判」「又或本奥書云、延德二年六月十一日以　禁裏御本令書寫頗可爲證本者歟則校合畢」とある。これは季吟の用ひた定家自筆本の寫しにあつた奥書である。その次に、「またある本によのつねのほかなりしことくはゝれり。そのてにをはなど、いさゝか、おぼつかなきところなどもあれど、たぐへる本を見侍らねば、あらためきこえんよしもなし。さすがにすてがたき事どもなれば、ことにびだりにかきつらね侍る」とあつて、「いまはむかしふたりして云々」の說話と、「おなじおとこ、しれる人のもとに云々」の說話と、「西の京ろく條わたりに云々」の說話とを載せ、さ

て壬辰十月中旬とある跋を書き連ねてゐる。

【價値】「大和物語」の註は、古き寫本に勘物として、或は裏書として傳はつてゐたものの外にはない。この「抄」は非常にすぐれた新說であると云ふ譯でもないが、古說を集成し、大體に於て穩健な考を加へてゐる。「たゞわがかなしくすめるめのわらはなどのかつ又心のなぐさめばかりにせし事に云々」と著者は斷つてゐるが、「大和物語」研究者の必ず參考すべき書であらう。

【池田】

大和物語直解（やまとものがたりちよくかい）

註釋書　三卷【著者】賀茂眞淵【成立】上卷の巻首の序に、「寶曆十年の冬人々つどひてよみける時に賀茂眞淵しるす」とあり、下卷の奥に、「寶曆十年七月よりたまたま集りてひとわたりよみておなじ十二月の八日によみはてつ。一月に三度よたびなんよみける也。もとの注のあしきをば、おほくけしつ云々」とある。これによると、賀茂眞淵が、諸本を校合し、舊註などの非を正し、新說を加へたのである。さて眞淵の稿本は、村田春海の所持する所であつたが、源躬弦によつて寫され、寬政五年九月にその功を了つた。直解といふ名は、眞淵の稿本にあつたのではなく、躬弦が、「いちはやくことの意を思ひとかんれうにとてし給へるなれば、しばらく大倭物語直解となんこれか名をはおほせにける」と云つてゐるによつて理由が分る。稿本に最も近いと思はれる田島本（井上頴圀自筆書入本に見ゆ）には、凡例なく、「大和物語抄」とも、「大和物語打聞」とも記してゐたらしい。これは季吟の「抄」を併せたる故で、想ふに「打聞」はこの書の初めの名であつたらう。すべて成立に關する事情は、卷頭にある源躬弦の凡例に詳しい。この書は寫本のまゝで傳へられたが、清水濱臣は、これを版にしようと計畫した。自筆で全部を書寫し、頭に自說を加へ、版下としようとしたらしく、その本はこの稿筆者が藏してゐる。「賀茂眞淵全集」（吉川弘文館）第四に收められてゐる。これは井上賴圀舊藏の本によつたのである。【諸本】井上賴圀舊藏（無窮會文庫藏）の本には、「明治丁丑四月以田島本略校上卷自半迄下卷清原博見略校　權正敎正　賴圀」とあり、濱臣・保孝等の考もあはせてある。この稿筆者所藏の清水濱臣自筆本は、「文化九年十月　上旬會岡田眞澄木村定良前田垂穗光幸參中村光房于敝廬對讀卒業聊標記僻案了　泊泊主人」とある。なほ轉寫本が各所に傳はつてゐるが、さして珍らしいものはない。【解說】この書は、季吟の「抄」「首書」等の說のあやまりを正し、自說を加へたもので、著作の性格が著しく現はれてゐる。先づ序に於て、「大和物語」の名稱が、「伊勢物語」に對して附せられたものにあらざること、むしろ山城の都にこの事を書きたる都物語の義なること、大和と云つても、山城の都の意なることを、「萬葉集」の歌によつてこれを例證した。次に作者につきて、季吟の「抄」に反對し、人名又は官名の稱呼によつて時代を推定すること能はざる由を述べ、圓融・花山・一條の、初めつ方の御時までのものと斷じた。かつ又「伊勢物語」と比較して、「いせ物語は天曆なとの比に書しとはみゆれと、文の樣いにしへにならひて少くて心こもりみやひかにして、物あつし。このやまとは詞多してよわくをかしき古言もつたなきもましれり」と云ひ、「伊勢物語」の中に出でたる記事を敷衍して書けるものは、いよ〳〵つたなく惡しといひ、奈良の帝・人麿など書きしは時代を知らぬ人の仕業なりと論じた。また上代にさかのぼるに從つて、文章が簡潔であるが、「大和」は、文章の簡繁よりして「源氏物語」と「伊勢物語」との間であると斷じ、「枕草紙」に、古物語を列擧せる條に、「大和」を先きとせざる事實を引いて、「大和」の成立が古きものにあらざることを斷定した。最後に「大和物語」は敎訓の文にあらざることを說き、文學と道德との關係について彼の意見をのべてゐる。以上は序に見える說であるが、本文は一節づつ切りて示し、次に語句の解釋を加へた。說は時に奇拔に走ることもあるが、詳細をきはめ、傾聽すべきものが多い。後世「大和物語」を說くものは、「抄」と共にこの書を參考しないものはない。

【池田】

大和屋甚兵衞（やまとやじんべゑ）

俳優　【初名】釣川辰之助　【生歿】寶永元年（一三六四）一月十日歿す。享年不詳。【法名】高德院宗玄日躰　【閱歷】大阪道頓堀の劇場の名代（興行主）で、且つ俳優を兼ねた。元祿二年冬、京都の萬太夫座へ聘せられ、同十一年には隣りの早雲座の座元だつたが、同十四年冬大阪へ歸り、岩井半四郎を座元とする自分の劇場へ出たが、翌年冬、又京都の早雲座に上つた。【藝風】和事が本領で、當り藝は「こんくわい」「椀久」「六方」（各別項）などがあり、最も踊がよく出來たが、俗受けのした割に技倆は伴はなかつたらしい。

【附記】元祿期の名女方水木辰之助（別項）は彼が甥である。而して實子大和屋藤吉が、寶永元年十一月二代を襲ぎ、三代は二代水木辰之助が延享四年十一月に襲名した。また大阪に於ける大和屋甚兵衞の名代は化政度まで濱芝居に傳存せられた。

【伊原・秋葉】

清男氏所藏の本である。六條家の本は、和歌二百七十首を有するにすぎない（袋草紙）のに、流布本は二百八十餘首ある。六條家の人々の手によつて成された物語註・歌書などに、「六和物語」の本文が引用されてゐるのを、「抄」の本文に比校すると、可なりの相違がある。文雄の「冠註」に引ける古寫本の本文及び御巫氏藏の本の本文は、「抄」の本文と著しく異つて、これが六條家本、又はそれに近い本ではないかと想像されるが、はつきりとは云へない。次に二條家本といふのは、藤岡博士が「國文學全史平安朝篇」に於て、「北村季吟の抄は定家自筆の本に從へりといふ。すなはち二條家の本にして、蓋しその原本は現に前田侯爵家の祕藏にかゝるものならんか」と云はれた。が、この系統の本で最も古いものは、近衞家藏の一本と甘露寺親長自筆の本とである。この系統の本には、如上の奥書の前に宇多法皇の御略歷が加へられてゐる。奥書の次に、「またあるほんによのつねのほかなりしことくはゝれり（下略）」とて、「いまはむかしふたりしてひとりの女をよはひけり云々」の說話と、その他三つの說話とをのせてゐる。これは「平中物語」から轉載したものである。國文大觀・日本文學全書・國文叢書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

【內容】この書は物語とは云ふけれども、全篇を通じて一貫した筋があるのではなく、ただ和歌を主とした片々たる說話百七十三篇（流布本）を集錄したものである。書中にあらはれたのでにはなくて事實の說傳をそのまゝに記したのであらう（藤岡博士）と云はれてゐるが、恐らくさうであらう。後半はかゝる近代の人物に關する說話のみならず、古書又は傳說に材料を求め、これに多少の修飾を施してゐるやうである。例へば津の國菟原乙女の傳說、猿澤の池に投じたる采女の傳說、淺香山影さへ見ゆると詠みし采女の傳說等は「萬葉集」により、大和國葛城郡に住む男女の話、在中將の物見に出でたる話等は、本文に「これ等は物語にて、世にある事どもなり」とある如く「伊勢物語」に據つたのである。また姨捨山の傳說、難波の葦刈の傳說は、當時行はれた口碑に據つたものであり、和歌をもとにして說話を作り出したやうなのもある。

【參考】大和物語抄北村季吟○大和物語補翼　伴蒿蹊○大和物語首書○大和物語直解　賀茂眞淵○冠註大和物語　井上文雄○大和物語纂註（一名大和物語錦繡抄）前田夏蔭○大和物語追考○大和物語別勘○大和物語虛靜抄　木崎雅興

（國文註釋全書）

【池田】

大和物語抄（やまとものがたりせう）

註釋書　六卷六冊【著者】北村季吟【成立】卷末の跋に、「壬辰十月中旬、洛下拾穗」とあるから、承應元年に成つたものであらう。翌二年癸巳仲夏吉日、大阪心齋橋筋順慶町、柏原屋與左衞門刊。

【內容】先づ本文を示し、次に語句を摘出して解釋を施してゐる。時々異本との校合もしてゐる。卷首に漢文の序があつて、その終りに「昭陽大荒落如月日　洛陽後學源杏僊滑、亳子著聞集」（各別項）等共通するのである。

山中集（やまなかしふ） 俳諧集 一冊 【撰者】岩田涼菟【本稱】諸俳諧山中集 【名義】涼菟が加賀の山中温泉に遊んだ時の收穫を集めたものであるからの題號である。【刊行】元祿十七年仲春【諸本】舊開珍書百種所收【内容】元祿十六年の秋、涼菟が乙由・里臼と共に加賀の山中温泉に遊んだ時、山中その他で卷いた七卷の歌仙を主とし、それに各地で得た自他の發句等を併せて一集としたものである。涼菟等は、金澤・小松・安宅・大聖寺・山中・汐越・三國・細呂木・福井・敦賀・彦根等を廻り、それから柏原・關ヶ原・大垣・鳴海を經て名古屋に入り、十一月伊勢に歸庵したのである。七卷の歌仙は金城と題する涼菟・萬子・北枝・里臼・從吾・牧童・乙由等九吟、淺野河と題する涼菟・牧童・南甫・北枝・從吾等五吟、山中吟と題する里臼・乙由・涼菟等三吟、新月と題する乙由・涼菟・里臼・自笑・水音等五吟、重陽と題する三國昨嚢・琴之・播東・水音・涼菟等五吟、醫王山興行と題する厚爲・涼菟・乙由・里臼・桃妖等九吟、入湯舍りと題する涼菟・桃妖・里臼・北枝・乙由等五吟である。發句は百十五句あつて、初めに山中温泉に於ける自他の作（その最初に特に奥の細道旅行の時の芭蕉・曾良の句を据えてゐる）、次いで山中名物の猿に因んで千疋猿、その他二十三種の猿を詠んだ自他の作があり、以下は旅行各地に於ての自他の作である。但しこの中に三ツ物三章がある。かくて卷末に「追加、涼菟が歸庵を賀す」と題する反朱・涼菟・芳本・里臼・乙由等十一吟の歌仙がある。卷頭に支考の序がある。【價値】連句本位のもので、當時に於ける涼菟・乙由の連句の風調を知るに好資料となるものである。當時は伊勢風（別項）の萌芽期と云ふべき時で、まだ甚しく平俗に傾いてはゐないけれども、既にその傾きを持つことは十分に看取される。それは連句のみならず發句を通じても見られる。なほ涼菟・乙由の旅行吟に於ける技倆の如何を知り得るものである事は云ふまでもないが、その中に挿んである猿の發句は、千疋猿十九句その他の二十三種の猿は各一句で、これは思ひつきの珍しい趣向として注目もされるが、又物數寄に過ぎる嫌ひがないでもない。兎に角、涼菟・乙由を考へるには逸すべからざる集である。【附說】同じく「山中集」と題する同名異書がある。これは芭蕉が「奥の細道」行脚の時、山中温泉で北枝・曾良・芭蕉の三人で三吟歌仙を卷いた時、芭蕉が指導し改刪し批評したのを北枝が筆記して置いた草稿が傳存し、これを金澤の俳人可大が天保十年八月に「山中集」と題して板行したものである。該歌仙は、北枝の「馬かりて燕追行別れかな」の發句で始まるもので、「卯辰集」（別項）に「元祿二の秋、翁をおくりて山中温泉に遊ぶ。三兩吟」と前書して收め、俗に燕歌仙と呼ばれるものであるが、「山中集」のものには「曾良餞。翁直しの一卷」と前書があり、芭蕉の改刪評語は、芭蕉及び蕉風の連句の眞諦を理解するに重要な一資料となるものである。兩集を比べて見ると、「卯辰集」に收めるものは、芭蕉の改刪を經た方のものである。

（志田）

山中平九郎（やまなかへいくらう） 俳優 【俳號】仙家【生歿】寛永九年生れ、享保九年（一七二四）五月十五日歿。享年八十三。【法名】冷山院壽仙【墓所】江戸下谷竹町常在寺【閲歷】初めは立役だつたが、元祿二年、中村座で時平大臣に扮し、これから實惡に轉じ、殊に公家惡を專らにした。同十年二月、初代團十郎が「暫」（別項）を演じた時、相手の太宰大貳をつとめて名聲を擧げた。【藝風】痩肉で背高く見え、大音でセリフの言ひほどきが上手だつた。公家惡の外には、鬼女・怨靈など、恐ろしく凄みのあるものを得意とした。彼が鬼女の演出に工夫を凝すべく、自宅に於てその隈取を試みるや、妻女がこれを見て失心したといふ有名な話が傳へられてゐる。【附記】女婿に「色惡」の創始者といはれる水木竹十郎（後に中山竹十郎）があつたが、享保六年九月十七日歿した。而して二代平九郎の名は、初代の門下山中藤三郎が享保十五年十一月に襲ぎ、三代は四代澤村長十郎の門下澤村澤藏が天明元年十一月に襲いだが、ともに平凡な俳優だつた。

（伊原・秋葉）

山中問答（やまなかもんだふ） 俳論 一冊 【著者】立花北枝【名義】元祿二年秋、芭蕉が「奥の細道」（別項）の旅行で金澤へ來た時、北枝が芭蕉を案内して山中温泉に到り、その時北枝の問に對する芭蕉の答を記したものであるからである。【成立】本文は元祿二年秋、附錄は同五年春。【刊行】年時の知られるものがないので明かでないが、序の代りに乙也の書簡が掲げてあつて、この乙也が明治五年に六十四歳で歿した正風庵乙也であるならば、刊行の大體の年時は考へられる譯であり、書の仕立も江戸末期頃かと思はれる。【由來】也同の跋によると、也同が壯年の頃、或る人の所持する遺稿を寫し得てから几上を離さずにゐた處、一日秋江・鷺村などが來てこれを見、上梓したいと乞ふので、乞の儘に任せたものである。【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）・蕉門俳話文集（俳書大系）所收。【内容】本文は、俳諧大意と題する部と道理と理窟との二種ある事と題する部との二部から成り、俳諧大意に於ては、俳道に志ある者の心得としては自然に隨順すべき事や、不易流行の見や、俳諧に古人なき事や、誹俳の二字とも用ひて捨てぬ事などが說かれて居り、道理と理窟との二種ある事に於ては、理窟を離れて俳諧の道理に遊ぶべき事や、虚實の事や、俳諧の俗談平話はただの俗談平話にあらぬ事や、さび・しをり・細みと風雅との關係や、その他連句上の主要な點々などが說かれてあつて、これ等をその儘に筆錄したものである。末尾に元祿二年己巳秋、金城北枝誌と記してある。附錄は附錄北枝叟考とあつて、附方八方自他傳と標題されてゐるものである。その内容は、連句に於ける自の句（主觀の句）と他の句（客觀の句）を如何に組合すべきかに就いて、組合さるべき各種の場合を三句渡りとして例句を擧げて說き、自他の配りとあしらひ方を示したものである。末尾に、元祿五年春翠臺北枝とある。最初にある北枝叟考なる標題は上梓に際して出板者の附したものであらう事は云ふまでもないが、なほ附方八方自他傳そのものも、上梓に際して附錄したものであらう。それはこの自他傳が白雄の「俳諧寂莖」に聯句自他の事として殆どその儘取られてゐたり、鷗里の「三四考」にも收められてゐたりする點からさう思はれる。【價値】「山中問答」は、芭蕉の俳諧上の眞諦の知られる點に於て、最も基本的な資料となるものの一つである。それと共に、芭蕉が「奥の細道」行脚までに又該行脚に於て、如何なる見解、どこまでの見解を持つてゐたかを知るべき屈竟のものである。附錄の附方自他傳は、本書以外でも見られるものではあるが、兎に角他に俳論の見られない北枝の技術方面の俳論として見られる唯一のものとして價値多きものである。

（志田）

山之井（やまのゐ） 俳諧季寄 初版大本再版横本 五卷五册【著者】北村季吟【名義】自跋に、「ある人の披見にいれしに、たゞに名のなきはいと物のさうざうしく敷心ちなんするを、を

も擧げて自らの手本ともしたのが、貞德の知る所となり、公にすべきことを勸められ、更に添刪を施して纏めあげたものである。白露の「誹論」（別項）によると、本書はもと大本四卷で世に出されたが、後これを增補し、又別に五卷目を附錄して前のと同じ山之井の題號で出したとある。今正保四年本を見得ぬので確かな

（誤である）【諸本】貞門俳諧集（俳書大系）に再版本が收められてゐる。【内容】俳諧に用ひる四季の詞を集めて解說し、發句の作例を附したものが本文で、末に季吟自身の作の年中日々之發句を附錄したものである。四季の詞は「元日」以下「歲暮」まで百十餘の詞を春夏秋冬の四部に分つて掲げ、各吟の貞室及び貞室の親友池田正式（まさのり）に對する好意及び間接ながら貞室・正式が不和の關係となつた重賴（しげより）（別項）に對する反對の意向の見られる事である。正保三年の正式の「郡山」及び貞室の「氷室守」は正保二年の重賴の「毛吹草」（別項）に對する共同的非難書であるが、本書には「氷室守」中の非難說を穩健な態度ながら

する厚爲・凉菟・乙由・里臼・桃妖等九吟、入湯舎りと題する凉菟・桃妖・里臼・北枝・乙由等五吟である。發句は百十五句あつて、初めに山中温泉に於ける自他の作（その最初に特に興の細道旅行の時の芭蕉・曾良の句を据えてゐる）、次いで山中名物の猿に因んで千疋猿、その他二十三種の猿を詠んだ自他の作があり、以下は旅行各地に於ての自他の作である。但しこの中に三ツ物三章がある。かくて巻末に「追加、凉菟が歸庵を賀す」と題する反朱・凉菟・芦本・里臼・乙由等十一吟の歌仙がある。巻頭に支考の序がある。【價値】連句本位のもので、當時に於ける凉菟・乙由の連句の風調を知るに好資料となるものである。當時は伊勢風（別項）の萌芽期と云ふべき時で、まだ甚しく平俗に

おくりて山中温泉に遊ぶ。三興吟」と前書して收め、俗に燕歌仙と呼ばれるものであるが、「山中集」のものには「曾良餞。翁直しの一巻」と前書があり、芭蕉の改刪評語は、芭蕉及び蕉風の連句の眞諦を理解するに重要な一資料となるものである。兩集を比べて見ると、「卯辰集」に收めるものは、芭蕉の改刪を經た方のものである。

【志田】

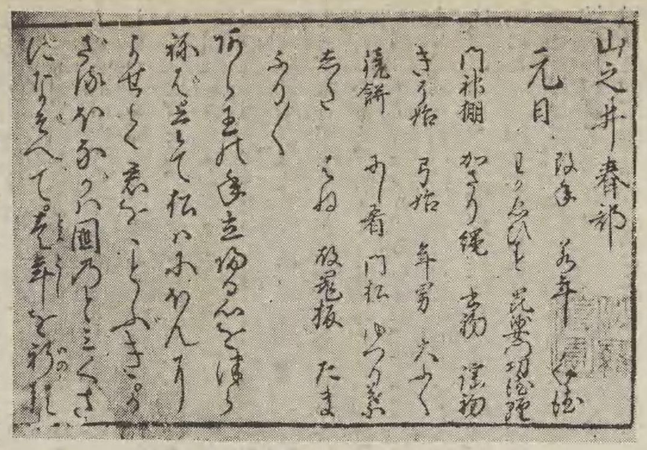
山中平九郎（やまなかへいくらう）　俳優　【俳號】仙家【生歿】寛永九年生れ、享保九年（一七二四）五月十五日歿。享年八十三。【法名】冷山院壽仙　【墓所】江戸下谷竹町常在寺　【閲歴】初めは立役だつたが、元祿二年、中村座で時平大臣に扮し、これから實惡に轉じ、殊に公家惡を專らにした。同十年二月、初代團十郎

を案内して山中温泉に到り、その時北枝の問に對する芭蕉の答を記したものであるからである。【成立】本文は元祿二年秋、附錄は同五年春。【刊行】年時の知られるものがないので明かでないが、序の代りに乙也の書簡が掲げてあつて、この乙也が明治五年に六十四歳で歿した正風庵乙也であるならば、刊行の大體の年時は考へられる譯であり、書の仕立も江戸末期頃かと思はれる。【由來】也同の跋によると、也同が壯年の頃、或る人の所持する遺稿を寫し得てから几上を離さずにゐた處、一日秋江・鶯村などが來てこれを見、上梓したいと乞ふので、乞の儘に任せたものである。【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）・舊聞俳話文集（俳書大系）所收。【内容】本文は、俳諧大意と

に、元祿五年春翠臺北枝とある。最初にある北枝叟考なる標題は上梓に際して出板者の附したものであらう事は云ふまでもないが、なほ附方八方自他傳そのものも、上梓に際して附錄したものであらう。それはこの自他傳が白雄の「俳諧寂莖」に聯句自他の事として殆どその儘取られてゐたり、鴎里の「三四考」にも收められてゐたりする點からさう思はれる。【價値】「山中問答」は、芭蕉の俳諧上の眞諦の知られる點に於て、最も基本的な資料となるものの一つである。それと共に、芭蕉が「奥の細道」行脚までに又該行脚に於て、如何なる見解、どこまでの見解を持つてゐたかを知るべき屈竟のものである。附錄の附方自他傳は、本書以外でも見られるものではあるが、兎に

角他に俳論の見られない北枝の技術方面の俳論として見られる唯一のものとして價値多きものである。

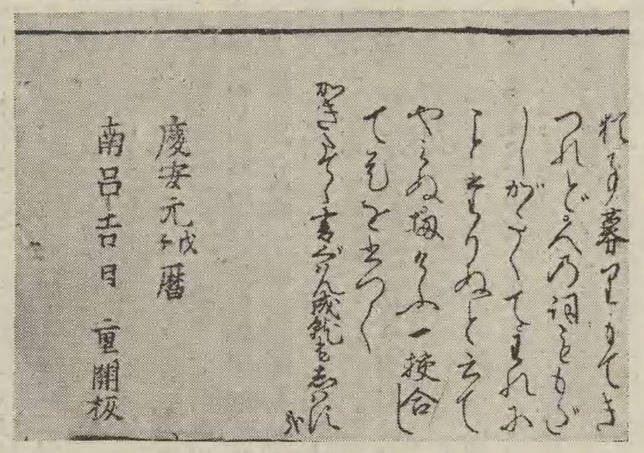
【志田】



慶安板山之井（松宇文庫藏）

山之井（やまのゐ）　俳諧季寄　初版大本再版横本　五巻五册【著者】北村季吟【名義】自跋に、「ある人の披見にいれしに、たゞに名のなきはいと物のさうざうしく敷心ちなんするを、をのれが淺き心にまかせにたれば、山の井とつけよといへり」とあるので、名義は明かであるが、こゝに「ある人」とあるのは貞室であつて、それは貞室の「玉海集」（別項）によつて知られる。【成立】正保三年十二月【由來】季寄の部の結文及び自跋によると、よろづの道は修行によつて至るのであるが、俳諧はわけて造次顚沛にも詠み習はねばならぬといふ或る人（貞德か貞室かであらう）の言葉に從ひ、四時に亙る叙述を試みて、後のための題目とし、例句を

も擧げて自らの手本ともしたのが、貞德の知る所となり、公にすべきことを勸められ、更に添刪を施して纏めあげたものである。白露の「誹論」（別項）によると、本書はもと大本四巻で世に出されたが、後これを增補し、又別に五巻目を附錄して前のと同じ山之井の題號で出したとある。今正保四年本を見得ぬので確かな事は云へぬけれども、季寄の部四巻の終りに正保甲戌一陽天（甲戌は丙戌の誤であらうし、一陽



山之井（刊記）

天は冬至の義か）とあり、第五巻の年中日々之發句の終りにある自跋に附した發句も、「かきたてゝ書ぐはん成就のしはす哉」といふ句なので、四巻目までと五巻目とは同時に成つたものやうに思はれるから、白露のいふところは推測による誤ではあるまいかと考へられる。【刊行】正保四年初版。慶安元年八月再版（阿誰軒の「誹諧書籍目錄」に正保五年正月とするは誤である）【諸本】貞門俳諧集（俳書大系）に再版本が收められてゐる。

【内容】俳諧に用ひる四季の詞を集めて解説し、發句の作例を附したものが本文で、末に季吟自身の作の年中日々之發句を附錄したものである。四季の詞は「元日」以下「歳暮」まで百十餘の詞を春夏秋冬の四部に分つて掲げ、各の詞を解説すると共に、時に附句に用ひられる場合の注意をも附説し、各の詞の下に類語や用語を註し、「應筑波」（別項）その他、當時世に名のあつた集や、貞德・貞室二家の句帳の中から例句となるべきものを採つて作例として添へてある。そして各の詞の解説の中には、作例として擧げた發句に詠まれてゐる事を取り込んでもある。又項目として擧げた季の詞は百十餘ではあるが、その下に註した類語には別立せしめ得るものが多いのであるから、實際は季の詞が千三百以上もあるのである。季吟の年中日々之發句は、正月より十二月に至る月分けにすると共に日を追うて排列した四百五十餘句の發句である。【價値・批評】本書は季の詞のみを集めた獨立の季寄書として最初のものである。季吟は寛文三年に同じ季寄の書ながら、普通の歳時記式のものである「增山の井」（別項）を著はしてゐるが、本書はそれとは違つて、優麗な雅文體の文で文學的に記述したもので、季寄書で同時に一種の隨筆文學的な著作として特色あるものである。なほ本書に於て特に注意される事は、季吟は初め貞室に學び、後に貞德の直門となり、又後には貞室と善からずなつたのであるが、本書の年中日々之發句や以下述べる點から見て、本書は貞室と不和にならない前、貞德の直門となつて間もない時期の著作と考へられ、季吟の貞室及び貞室の親友池田正式（まさのり）に對する好意及び間接ながら貞室・正式が不和の關係となつた重頼（しげより）（別項）に對する反對の意向の見られる事である。正保三年の正式の「郡山」及び貞室の「氷室守」は正保二年の重頼の「毛吹草」（別項）に對する共同的非難書であるが、本書には「氷室守」中の非難説を穩健な態度ながらに取り込んで左袒して居り、書名の名づけ親も書の上では「或人」と云つておぼめかしてあるが、貞德に乞はずに特に貞室に乞うたといふ事も意味ありげであり、特に正式がその「郡山」に、「毛吹草」に入選しなかつた自讃句二十一句を公表して居り、その約半數の十句が本書に例句として採用されてゐるので、以上の點々は、季吟の貞室に對する加擔聲援と、重頼に對する皮肉反對とを間接な形に於て表明したものと云へるのである。なほ附錄とした年中日々之發句は、連歌師の方にある先例を俳諧の方で襲うたものとして注意されると共に、季吟早期の俳句の纏まつた數の見られるものとして價値ある資料である。

【志田】

山彦（やまびこ）　小説　【作者】鈴木三重吉【發表】明治四十一年、「ホトヽギス」。【刊行】同四十五年六月、短篇集「お三津さん」に採錄。後、三重吉全集第五巻（千鳥）に收む。明治大正文學全集所收。

【梗概】「城下見に行こ十三里、炭積んでゆこ十三里、と唄に謡ふといふ十三里を、城下の泊りからとぼ〳〵と、三里は雨に濡れて來た」。この山の中の淡名屋は、姉の緣づいてゐる家で、今は炭燒を手廣にやつてゐるが、ずつと昔は尼子氏の一族で、この里切つての舊家である。姉の連合ひは、山を見廻りに奥山へ行つて留守であつたが、こゝのお爺さんと姉と

が大喜びで迎へてくれた。殊に姉の喜びやうは格別である。舊家らしく大構への屋造りで、屋敷内には祖先の鎧を祀つたといふ祠などもあつた。或る日寢かされてゐる奥の間の戸棚の天井から古い手紙の束を見つけた。それは女の文で、どれにも、「ちゑより、こひしき〳〵民さま」とある。民さまといふのはこの家の誰かであるらしい。文面は男が手紙を見てくれない怨み言を述べたもので、その中には病床にあつて記したものらしく、戀ひ死に死ぬるともあつた。蟲が喰つてぼろ〳〵になつてしまつた切端の中には、男の家には祟りがあつて女は育たぬ。嫁に來た者は二十七になると死ぬといふ噂も書いてある。翌日偶然この家の墓のある山へ上つて見て驚いた。二十七で死んだ嫁が三人もあるではないか。そんなことがある筈はないと思ひながら、姉のことが氣にかゝる。民さまとは誰のことか、お爺さんにきけばわかるであらうが、言ひ出しにくゝて話さず、姉にもそのことはとう〳〵いはずにしまつた。丁度十五夜でその夜は月が殊によく、姉と二人、月を見ながら膳を並べたが、不意に明日は歸ると言ひ出したので、姉は心細げに、「ほんとにあした歸る氣か」と縋りよつて來た。その瞼には見る〳〵涙がにじみ出た。

【解說】作者の第二作で、又その出世作でもあつた。この作は筋といふものが殆どなく、あつたにしてもそれは附りとも云ふべきで、散文詩とも見るべき美しい筆觸で、この山の家に於ける姉を中心としての生活の描寫にある。一字一句をも苟くもしない表現上の異常な苦心と、それを裏附ける淸麗優艶なリリシズムとは、讀者を作者獨特の唯美主義的な世界の中へ誘ひ込まずには置かない。この作の構想は作者の空想のうちに成つたといふが、筆致は素朴で、リアルである。又瞑想的で、ふかく氣分を愛し、しかも十分感覺的な筆觸は、後年この作者が進んだ方向を、早くもはつきりと示してゐる。その空想は、そのこまやかな表現によつて、よく具象化されてゐる。なほこの作で感ずることは、漱石と鏡花との影響である。漱石は常に淡々と筆をはこぶ。だがこの作品に於ける作者は、虹色の絹糸にも似たこまやかに霑はしてゐることを見遁すことは出來ない。

【江口】

空谷傳聲集（やまびこしふ）　歌集　一卷三册

【作者】古岳幽眞【刊行】文久三年。齋藤拙堂・近藤芳樹・佐々木春夫等の序がある。【諸本】近代諸家集（國歌大系）所收。【內容】上春部、中夏秋部、下冬雜部。その他に「古岳庵の歌集を見て」と題し、七十八家の和歌と四十家の賛詩が加へられてゐる。

【作風】幽眞は幕末の歌人で、宣長門の加納諸平の學統をうけてゐる。しかし歌調は全然鈴屋派を脫化したものと云つてよく、初め高野山上で佛學を修めたが、下山後は多く紀の川の畔に庵居して、全くの脫俗生活を續けた。明治九年寂したのであるが、幕末歌人一般に共通する自由な詠風の外、彼の生活の反映が歌集の中にも求められ得る。

北山の雪なほさむしまどの外の春は梅よりあくるなりけり

窓のこのいさゝむら竹吹風の音のよろしき夏は來にけり

調べが暢び切つて更に佶屈の跡を見ない。その靜閑の心境そのまゝの表出と見られる。庵居の生活の樣の偲ばるゝ作が多く、又梅を詠んだ作が多いのは、庵の附近に梅林があつた爲めであらう。

【齋藤（淸）】

山彦册子（やまびこざうし）　語學書　三卷三册

【著者】橘守部【別名】難語考【刊行】天保二年十一月。天保二年正月門人某序及び同年五月門人某の序。【諸本】橘守部全集卷八所收。【內容】序文に本書の成立を記して、『この書は、わが池の庵の大人（守部）につきて、その學ぶ輩、おのがじし疑はしきふし〴〵を、こゝかしことひよりてし、み答へなるが、はやく一つに集りて、おの〳〵かきかはしつつ見しほどに、誰が名づくともなく、とし比「難語考」となんよびならはしける（中略）。こたび版にえらせて（弟子達が）わかちあへむとす。もとよりうひ學びの輩の問ひ言にて、難語のみにもあらざりければ、大人は「山彦册子」と負せて給ひにけり云々』と。が、これは世間に對する辯解で、實際は弟子達の質問に答へたと認められるものもあるが、多くは著者が「日本書紀」「古事記」「萬葉」「古今」「伊勢」「源氏」等を註釋したり講義したりして行くうち、語釋に於て新說として自信のあるものを、問答體で書いたものである。三卷を通して五十音順に排列し、約二百二十五の語についての說を載せてゐる。なほ本書は三册とも初編としてあるが、二編は世に出てゐない。但し「鐘の響」（別項）は本書の續編とも見るべきものである。

【價値】守部の學問は、大體前後二期に區別せられるが（守部參照）、前期は專ら古典の註釋に力を注ぎ、後期は古道の闡明に努めてゐる。守部が研究し註解した古典は、その數頗る多く、その註釋書は、それ〴〵すぐれた點を有つてゐるが、それ等の註釋書に於ける新說を集めたものが、本書及び「鐘の響」である。從つて本書は、斷片的な研究ではあるが、同時に守部の註釋學の精髓であつて、著者のこの方面の研究の深さと廣さを示すものとして、守部の著書中、最も注意すべきものの一つである。（鐘の響參照）

【龜田】

山伏（やまぶし）「修驗道」を見よ。

山鵐鵐轉破瓜（やまほとときすけごろのみつぼみ）「拜壽仁王參」（をがみすずたにわうさん）を見よ。

山村暮鳥（やまむらぼてう）　詩人　【本名】土田八九十　【別名】木暮流星・木暮馬村等。【生歿】明治十七年一月群馬縣群馬郡堤ケ岡村に生れ、大正十三年十二月八日茨城縣東茨城郡磯濱町海岸大洗の假寓にて病歿（肺結核）、享年四十一【閱歷】十六歳で小學校代用教員となつたが、當時每夜前橋市まで七里の道を往復して牧師チャベルに英語を學んだ。女官教師ウオオルより深く精神的に動かされて基督教徒となつた。一度ウオオルと共に青森にゆき、ついで東京に出て築地の聖三一神學校に入學した。後明治三十九年から四十年にかけて相馬御風・前田林外等の雜誌「白百合」（別項）等に關係した。この頃は木暮流星の名によつて短歌をもつて立たうとした。同四十三年人見東明等の自由詩社（別項）に加はつて短歌から長詩に移り、同年二月發行の「自然と印象」第九集に「航海の前夜」を發表して以來、山村暮鳥と改號した。室生犀星・萩原朔太郎等の人魚詩社に加はつて、雜誌「卓上噴水」の同人ともなつた。大正二年五月、詩集「三人の處女」を、同四年十二月、詩集「聖三稜玻璃」を出版し、その後はドストエフスキイの研究と飜譯とに力を注いだ。次いで大正七年十一月、詩集「風は草木にささやいた」を日日社から出版し、これ等に據つて一流を構成したかとも思はれる。「口宣案」によると、延寶五年十二月十二日受領して相模掾を名乘り、貞享頃、更に重ねて土佐掾を受領し、藤原房正と改めた。但し「日本鑒來山」（繪入十七行本）によると、「山本土佐掾藤原孝勝」とある。角太夫節の流行期はかなり長年月に亙つてゐるが、元祿中頃

して、專ら人道主義詩風への完成に力めた。

【著作】前記の詩集の外に、童謠集「よしきり」及び童話・創作・飜譯等がある。

【北原】

山村流（やまむらりう）　舞踊流派　【名稱】流祖の姓に據る。【解說】大阪に發生したところの舞踊の一流派で、地唄につれて舞ふ優婉閑雅な舞踊で、維新前後に俳優山村友五郎が、在

が、多く五段の形式を整へてゐる。正本に大體三種の別がある。（一）延寶天和時代。十七行前後で、多く繪入本。（二）元祿年代。十行位。（三）元祿後。八行位。享保度の再版もある。右の中（二）が稽古本として出版された點は、宇治加賀掾（別項）の稽古本刊行と共に注目さるべきである。

水漫游拾遺」「佐渡島日記」等に「石井飛驒掾淸行」の名が傳へられてゐるが、山本飛驒掾と同人か否か判らない。要するに彼は機巧の細工人であり、淨瑠璃の作者であり、座元であり、人形操師であつたらしい。元祿末には京都で宇治河内といふ淨瑠璃操芝居の名代を持ち、京都長樂寺の開帳場や今宮のお旅所で、一時

さんにもいはれがあるであらうが、言ひ出しにくゝて話さず、姉にもそのことはとう〳〵いはずにしまつた。丁度十五夜でその夜は月が殊によく、姉と二人、月を見ながら膳を並べたが、不意に明日は歸ると言ひ出したので、姉は心細げに、「ほんとにあした歸る氣か」と縋りよつて來た。その瞼には見る〳〵涙がにじみ出た。

【解說】作者の第二作で、又その出世作でもあつた。この作は筋といふものが殆どなく、あつたにしてもそれは附りとも云ふべきで、散文詩とも見るべき美しい筆觸で、この山の家に於ける姉を中心としての生活の描寫にある。一字一句をも苟くもしない表現上の異常な苦心と、それを裏附ける清麗優艷なリリシズムとは、讀者を作者獨特の唯美主義的な世界の

家の賛詩が加へられてゐる。

【作風】幽眞は幕末の歌人で、宣長門の加納諸平の學統をうけてゐる。しかし歌調は全然鈴屋派を脫化したものと云つてよく、初め高野山上で佛學を修めたが、下山後は多く紀の川の畔に庵居して、全くの脫俗生活を續けた。明治九年寂したのであるが、幕末歌人一般に共通する自由な詠風の外、彼の生活の反映が歌集の中にも求められ得る。

北山の雪なほさむしまどの外の春は梅よりあくるなりけり

窓のこのいさゝむら竹吹風の音のよろしき夏は來にけり

調べが暢び切つて更に佶屈の跡を見ない。その靜閑の心境そのまゝの表出と見られる。庵

められるものもあるが、多くは著者が「日本書紀」「古事記」「萬葉」「古今」「伊勢」「源氏」等を註釋したり講義したりして行くうち、語釋に於て新說として自信のあるものを、問答體で書いたものである。三卷を通して五十音順に排列し、約二百二十五の語についての說を載せてゐる。なほ本書は三册とも初編としてあるが、二編は世に出てゐない。但し「鐘の響」（別項）は本書の續編とも見るべきものである。

【價値】守部の學問は、大體前後二期に區別せられるが（守部參照）、前期は專ら古典の註釋に力を注ぎ、後期は古道の闡明に努めてゐる。守部が研究し註解した古典は、その數頗る多く、その註釋書は、それ〴〵すぐれた點を有つてゐるが、それ等の註釋書に於ける新說を

徒となつた。一度ウヰオルと共に靑森にゆき、ついで東京に出て築地の聖三一神學校に入學した。後明治三十九年から四十年にかけて相馬御風・前田林外等の雜誌「白百合」（別項）等に關係した。この頃は木暮流星の名によつて短歌をもつて立たうとした。同四十三年人見東明等の自由詩社（別項）に加はつて短歌から長詩に移り、同年二月發行の「自然と印象」第九集に「航海の前夜」を發表して以來、山村暮鳥と改號した。室生犀星・萩原朔太郎等の人魚詩社に加はつて、雜誌「卓上噴水」の同人ともなつた。大正二年五月、詩集「三人の處女」を、同四年十二月、詩集「聖三稜玻璃」を出版し、その後はドストエフスキイの研究と飜譯とに力を注いだ。次いで大正七年十一月、詩集「風は草木にささやいた」を日日社から出版

して、專ら人道主義詩風への完成に力めた。

【著作】前記の詩集の外に、童謠集「よしきり」及び童話・創作・飜譯等がある。（北原）

山村流（やまむらりう）　舞踊流派【名稱】流祖の姓に據る。【解說】大阪に發生したところの舞踊の一流派で、地唄につれて舞ふ優婉閑雅な舞踊で、維新前後に俳優山村友五郎が、在原檢校と提携して大成したものである。斯道愛好者の殊に愛惜するに拘らず、目下は衰へつつある。（小寺）

【參考】わが六大舞踊派の特質　坪內逍遙（逍遙選集卷三、〇山村流倉滿南北（演藝畫報昭和三ノ四）

山本角太夫（やまもとかくだいふ）　淨瑠璃太夫【本名】未詳。但し山本は或は本姓か。【別名】山本相模掾藤原吉勝。山本土佐掾藤原房正。また孝勝ともいふ。【生歿】未詳【閱歷】貞享元祿の頃、京都で嘉太夫節（宇治加賀掾參照）と共に並び稱された淨瑠璃太夫で開帳のある場合など、大抵その附近で興行したといふ。音曲上の傳統も生涯の經歷も全く明瞭を缺いてゐるが、署名のある正本から推考して、寬文末年から寶永年中まで生命のあつた淨瑠璃節である。恰も古淨瑠璃時代の末期に當り、脚色上の一轉機として機巧應用の演出が試みられ、大阪の伊藤出羽掾等と共に、その流行を成した一人であつて、彼の作は殊に南京絲操を盛んに利用した。早い頃は大阪の操芝居に活躍したと傳へられるが、然らば、或はその頃山本飛驒掾（別項）の指導もあつたかと思はれる。また角太夫門から岡本文彌（文彌節參照）や都太夫一中を産んだ點を考へると、彼を虎屋源太夫、又はその門伊勢島宮內門とする說も幾分首肯せられぬではない。卽ち音曲の上に宮內を、構想上の關係に於て飛驒を師と

し、これ等に據つて一流を構成したかとも思はれる。「口宣案」によると、延寶五年十二月十二日受領して相模掾を名乘り、貞享頃、更に重ねて土佐掾を受領し、藤原房正と改めた。但し「日本鑒萊山」（繪入十七行本）によると、「山本土佐掾藤原孝勝」とある。角太夫節の流行期はかなり長年月に亙つてゐるが、元祿中頃から以後の角太夫を二代と見ようとする說もある。

【曲名・曲風】「外題年鑑」に傳へる番數は四十を算へ、又實際はそれ以上であつたらうが、現存するものは、その半ばに滿たぬやうである。題材は神佛の靈驗談を主として、說經節の系統をうけてゐるものも相當ある。その他金平淨瑠璃（別項）を移したものなどがある。これ等の演出には機巧や絲操の活用が大きな作用をなすので、この點からも飛驒との關係が想像される。靈驗物として「善光寺」は最も有名であり、機巧や絲操應用の作として「信田妻」（別項）は代表的な傑作といへる。「善光寺」（延寶六年）は、信濃國善光寺の緣起の形式である。釋迦が東天竺ひしやり國に說法してゐた時、その國の月蓋長者が娘の難病から釋迦に諭されて如來の信者となつたに始まり、如來三傳と共に、長者も百濟の聖明王と生れて大唐に佛法を弘め、次に本朝に信濃國本田善光と生れ、大殿の甥がお家橫領を謀る時、佛力を得て主を救ひ、終に善光寺を建立して如來をこゝに安置するといふ筋である。如來を負つて虛空を走るところなどが見せ場であつたやうである。正本の作者として壯年時代の近松も關係したであらうと思はれる。「日本鑒萊山」には、津打治兵衞の名が發見される。開帳場等に出張する時は、短縮して語つたらしい

が、多く五段の形式を整へてゐる。正本に大體三種の別がある。（一）延寶天和時代。十七行前後で、多く繪入本。（二）元祿年代。十行位。（三）元祿後。八行位。享保度の再版もある。右の中（二）が稽古本として出版された點は、宇治加賀掾（別項）の稽古本刊行と共に注目さるべきである。

【門弟】當時、山本を名乘る彼の門葉と思はれる太夫は相當に多いが、中にも山本治太夫は、後松本と改めて一流をたてた。都太夫一中（別項）・岡本文彌（文彌節參照）なども角太夫門と傳へる。松本治太夫は、初名は菅野傳彌、都太夫一中の門との傳へもある。元祿年代の京都に流行した太夫で、治太夫節といはれてゐた。但し角太夫又は播磨の語り物等を多く語つたので新作は餘りなかつたらしく、「外題年鑑」に傳へられた外題は十に滿たぬ。「石川五右衞門」（釜淵双級巴參照）は最も有名である。

【參考】竹豐故事一樂〇外題年鑑同上〇聲曲類纂　齋藤月岑〇攝陽奇觀（卷二十一）〇繪入淨瑠璃史　水谷不倒　【守隱】

山本土佐掾（やまもとさのじょう）「山本角太夫」を見よ。

山本飛驒掾（やまもとひだのじょう）　淨瑠璃作者・操師・人形細工人【本名】彌三五郎【生歿】未詳【閱歷】おやま五郎兵衞の子として京に生れたらしい。機巧細工に長じ、水學の術を得、寬文三年の頃、竹田近江芝居、伊藤出羽芝居などに出て、機巧人形の元祖、細工人であつたことは確かである。その工夫になる機關（しかけ）からくり細工を禁延の叡覽に供へ、元祿十三年十一月二十五日、人形細工人として受領し、山本飛驒掾源清賢と號した。その翌年元祿十四年、再び雨龍の細工を禁延に差上げ、山本河內掾に重官を任ぜられた（棠大門屋敷）。なほ「南水漫游拾遺」「佐渡島日記」等に「石井飛驒掾清行」の名が傳へられてゐるが、山本飛驒掾と同人か否か判らない。要するに彼は機巧の細工人であり、淨瑠璃の作者であり、座元であり、人形操師であつたらしい。元祿末には京都で宇治河內といふ淨瑠璃操芝居の名代を持ち、京都長樂寺の開帳場や今宮のお旅所で、一時的に淨瑠璃操芝居を興行してゐた。享保十七年に江戶に興行してゐたことは、「江戶砂子」で確かであらう。眼にのみ訴へる見世物的の機巧が大阪に飽かれたのが、享保の中葉からである。機巧人形派の山本角太夫芝居一派が凋落し、伊藤出羽芝居が享保十七年十二月「前內裏島都遷」を最後として斷絶したのは、藝としての人形の擡頭を物語るもので、飛驒もこの機運に先だち、寶永五年四月、出羽芝居を離れて江戶へ下つた。延享二年五月六日に江戶堺町豐竹肥前掾へ、大阪の操師二代の出羽が下つた時、座元肥前掾が過料處分を受けたので、これを機會に肥前掾は引退し、その記念句集「かくれんぼ」を刊行したが、その中に「浪花古飛驒掾」の語が見えるところから考へて、その刊行期延享二年五月には飛驒掾は故人であることは知られるが、これ以上のことは全く傳はらない。

【作者としての飛驒】山本飛驒掾の淨瑠璃は、何種あるか知らぬが、最も早いものでは、「山本彌三五郎作」の署名ある「息女四天王（むすめしてんわう）」（正本屋藤九郎繪入細字本刊行）がある。この作は珍らしい「三部作」で、彼はこれを「三日淨瑠璃」と稱してゐる。三日續きの淨瑠璃で、初日がこの「息女四天王」、二日目が「前髮四天王」、三日目が「よめとり四天王」で、この「三日淨瑠璃」を續けた全大名題が「元服四天王」といふ。淨

瑠璃では嘗て聞かざる一形式である。奥附に年月を缺いてゐるので、上演の年代は知られないが、飛驒掾受領前であるから元祿十三年以前であることは明かで、興行は飛驒の他の淨瑠璃と同じく出羽芝居らしい。その他「都三十三間堂棟由來」「山枡太夫」の二篇には、山本河内掾と署名し、「和合之名號」（題簽には「あたご將軍地藏」）の奥附に「上るり作者　源淸賢」と記されてゐる（前島春三著近代國文學の研究）。その他元祿末年の「勝尾寺開帳」（正本屋仁兵衞）、同「文七一周忌」（正本屋藤九郎）の二正本は手妻太夫の代表作として見ることが出來る。ともに、「作者山本飛驒掾」とあり、傍題簽に、「文七一周忌」には「御細工人京ニテ重テ受領名山本河内掾御綸旨二通双戴」とあり、「勝尾寺開帳」には、「重テ任河内掾ニ口宣二通双戴」とあれば、共に元祿十四年以後元祿末の刊行であらう。この作二篇とも、「太夫信濃掾藤原信勝」「手祥太夫飛驒掾」とある。信濃掾が何人であるか不詳だが、伊藤出羽の改名か岡本文彌の受領號かと思はるゝ。併し文彌の受領については傍證がない。

山本飛驒掾口上の圖（勝尾寺開帳）

【藝歷】手妻太夫として、恐らく京都に根據を持ち、初めは竹田近江の芝居で、機巧技師の位置にあつたらしく、後、伊藤出羽芝居の人となり、更に出羽芝居の座元となつた。自ら人形遣として舞臺にも立ち、近松の「重井筒」にも「つゝむ袂の飛驒掾、ふたつ遣ひの手妻にも」とあるが、片手で一人づつ二個の人形を遣つたことが判る。仕掛のない碁盤の上で、機關があるやうに遣つて手妻人形といつた所から見ると、然らば飛驒の手妻人形とは、片手づつ兩方で遣ふ片手人形である。首ばかりの人形に手足を附けた外に、飛驒の片手人形は、操の系統に大きな發達の根幹を與へてゐる。古來の辰松流の差込遣以外に、飛驒の片手人形は、背後から片手を入れたらしい。これは正に、後の三人遣ひの原始形を證明してゐる。そしてこの飛驒の流れを汲んだものが、竹本座の吉田三郎兵衞・吉田文三郎（別項）で、享保十九年「薦屋道滿大內鑑」で三人遣ひに到達したので、今日の三人遣ひは山本飛驒掾の片手人形から系統を引いてゐる。卽ち人形操は傀儡子から興つて、山本飛驒掾を中興の祖とし、吉田文三郎（別項）が完成したといふことになる。（操・操座參照）　〔石割〕

山本有三（やまもとゆうざう）　戲曲家・小說家【本名】勇造【閱歷】明治二十年七月二十七日栃木縣栃木町に生る。父は元宇都宮の藩士、維新後裁判所の書記などを勤め、後、呉服商となつた。當時小學教育を終るや一時東京に丁稚奉公に出されたが、攻學の志抑へ難く、遂に逃げ歸つた。併し父と衝突して再び上京、編入試驗をうけて神田中學に入學し、その後、變則の學歷を續けつつ、第一高等學校を經て帝大獨逸文學科を卒業した。その後數箇月、井上正夫の新派劇に關係したが、感ずるところあつて幕內生活と絶緣、早稻田大學に教鞭をとつたが、七年間でやめ、爾來專ら創作上の精進を續けてゐる。一年一作主義など稱される位な寡作家で、常に構想に腐心、容易に筆をとらず、彫身鏤骨、ために益々その聲價を高からしめ、その藝術家生活の嚴格さ、藝術的良心の强烈さは、文壇の一異彩である。菊池寬（別項）と並んで劇壇二大雙璧としての流行時代を作つたことがあり、その後も寡作ながら、孜々として精進し、最近は小說家としての名聲が高い。

山本有三

【作品】山本有三戲曲集一卷（新潮社）○日本戲曲全集現代篇（春陽堂）。【戲曲】海彦山彦○津村教授○生命の冠○嬰兒殺し○同志の人々○阪崎出羽守（別項）○指鹿緣起○熊谷蓮生坊○女親○女中の病氣○父親○嘉門と七郎右衞門○西鄕と大久保○スサノオの命○女人哀詞等。【小說】生きとし生けるもの○波○風○女の一生等。外にストリンドベリー、シュニッツレル等の飜譯幾篇かもある。彼の戲曲の多くは幾度か大劇場に演出されて、好評を博したものが多い。

【作風】あくまで眞摯で格調正しく、而もヒューメンな感情に溢れ、まさしく堂々と戲曲の大道を行く。取材は主として理想と現實との相剋を描き、常に人間性に對する深い洞察と人生の精神的調和の世界への强烈な思慕を以て貫かれてゐるものであるが、殊にその描寫の精細、舞臺技巧の緊密、一筆一畫も忽せにしない藝術的表現への努力は、必ず一作をして渾然たる完成品とせずにはおかず、而も自ら溢れて來る眞摯なる風格は、多くの讀者の尊敬と魅力とを感ぜしめるのである。又それでゐて、一面、彼の傑作中の傑作と稱される「海彦山彦」の如き、その他「大磯通ひ」、唯一のシナリオ「雪」の如き、詩味掬すべきものをもつてゐる。　〔關口〕

山本露葉（やまもとろえふ）　詩人【本名】三郎【生歿】明治十二年二月三日、東京下谷根岸に生れ、昭和三年二月歿す。享年五十。【閱歷】早稻田專門學校文科出身。初め三山と號して「文庫」等に詩を投書してゐたが、後「明星」その他に發表した。明治三十年代に活躍した詩人で、雜誌「もしほ草紙」を發行したこともあり、又「モザイク」の同人でもあつた。詩の外に、いくつかの短篇の創作もあつた。兒玉花外・前田林外等と親しかつたが、明治四十

年代に入つては、何時とはなく詩壇に遠ざかつてしまつた。【作品】花外・枯柳（山田）と三人合著の「風月萬象」（明治三十三年）及び醉茗・花外と三人合著の「わか草」（同年）等の外に、「小山水」「明治詩集」等にも作があり、あやめ會の一人であつたから「あやめ草」「豐旗雲」にも載つてゐる。　〔河井〕

墮した所もある。が、兎に角、當時の文壇に於て心理小說要求の聲が嚴しかつた時の作品として注目すべきものであつた。篇中の人物はそれ〴〵性格描寫の上にも手拔かりがなく、その背景をなす田園描寫は手に入つたものである。「ありのすさび」（別項）と共に、宙外の出世作とされたのは當然である。　〔高須〕

曆四年（五十三歲）、致仕して城南前津（名古屋市中區下前津町）に隱棲した。その祖父時英は野双と號して季吟に俳諧を學び、父時衡も一水の號があつて貞門風の俳諧をやつた。也有も俳論で、その俳諧に關する見識を窺ふべき好資料である）○短綆錄（寶曆七年成稿。支考の五論と十論との比較論）○小革籠（別項）○美南無壽比（安永四年成。曉臺系の事紅の問に答へた俳論）○野夫談（寶曆十二年成。太宰春臺の「赤穗四十六士論」を駁したもの）○蘿隱編（漢詩文集）○蘿窓集（歌集）○行々

年代に入つては、何時とはなく詩壇に遠ざかつてしまつた。【作品】花外・枯柳（山田）と三人合著の「風月萬象」（明治三十三年）及び醉茗・花外と三人合著の「わか草」（同年）等の外に、「小山水」「明治詩集」等にも作があり、あやめ會の一人であつたから「あやめ草」「豐旗雲」にも載つてゐる。　〔河井〕

闇のうつゝ　やみのうつゝ　小説　【作者】後藤宙外　【發表】明治二十九年四月、「新小說」。【刊行】創作集「裾野」に所收。

【梗概】惡番頭のために產を失つた青山の家にお磯・お米の姉妹がゐて、馬追ひにまで零落したが、彼女等は家運恢復に懸命であつた。折柄喜多見といふ生絲商人とお磯との間に戀が成立しお磯は前途に一道の光を認めたが、思ひがけなくも喜多見は變心して他の女を妻に迎へたので、お磯は激怒し、或る時、喜多見が銀行へ行くのを待ち受けて、その薄情を責めた。が、喜多見の態度は極めて冷かであつたので、その無情を怨み、雷鳴烈しい一夜、喜多見に逢つて不意に斬り付けた。お磯は殺人未遂で投獄され、滿期出獄すると甲府の料理屋で酌婦を勤め、後、鰍澤で小料理屋を始めた。折柄善助といふ男に嫁してゐたお米も姑と折合が惡いので、玆へ來て姉の手助けをした。當時お米は姉の切なる勸めで金のある瀧澤といふ男に身を任せたが、善助のことが思ひ切れず、二人の男の間に立つて惱みぬいた末、投身自殺し、善助もそのあとを追うて縊死した。續く不幸にお磯は世をはかなみ、死んだ妹を羨みつつ、わびしい日を送つた。

【批評】勝氣なお磯が、家運を挽回しようとあせる心、その境遇の變化につれて動きゆく心を克明に描いて成功してゐるが、特に說明に墮した所もある。が、兎に角、當時の文壇に於て心理小說要求の聲が嘗しかつた時の作品として注目すべきものであつた。篇中の人物はそれ〴〵性格描寫の上にも手拔かりがなく、その背景をなす田園描寫は手に入つたものである。「ありのすさび」（別項）と共に、宙外の出世作とされたのは當然である。　〔高須〕

闇の杯盤　やみのはいばん　詩集　【著者】岩野泡鳴　【刊行】明治四十一年四月、有倫堂。泡鳴全集第九卷所收。【解說】泡鳴の詩集中最も特色あるもので、彼の自然主義的表象詩即ちその自我的なる自然主義を示した詩集となすことが出來る。その表題は同名の詩から附したものと思はれ、その「闇の杯盤」といふ一小詩も「闇の杯盤　闇を盛りて　吾は底なき淵に沈む」の句で始まり、彼にしては技巧の勝つた詩だが、「月と猫」の如き可憐な小詩に彼のいふ表象的即ち象徵的心意の微妙な表白を見ることが出來る。　〔川路〕

也有　やゆう　俳人　【姓名】橫井氏。幼名辰之丞、又市郎平。名は時般、又並明・順寧。通稱孫右衞門　【別號】永言齋・素分・蓼花巷・野又・紫隱里・紫江・蠖丸・野有・不羨庵・蘿隱・暮水・知雨亭・半掃庵　【生歿】元祿十五年九月四日生れ、天明三年（一七八三）六月十六日前津に歿す。享年八十二。【法名】並明院殿朝雲暮水大禪定門　【墓所】尾張海部郡八開村藤ケ瀨西音寺　【家系】橫井家の祖掃部助時永は北條高時の二男時行の後裔で、時永の第四子時朝から時孝・時元・時英・時衡・時般と跡を嗣いだ。時朝以來尾張侯に仕へて、代々その重臣であつた。　【閱歷】也有は享保十二年（二十六歲）、家督を相續して祿千石を食み、寬保元年大番頭を兼ねて間もなく二百石の加增を受け、寶曆四年（五十三歲）、致仕して城南前津（名古屋市中區下前津町）に隱棲した。その祖父時英は野双と號して季吟に俳諧を學び、父時衡も一水の號があつて貞門風の俳諧をやつた。也有もそれ等の家庭的感化で俳諧趣味を養はれたらしく、いつとなくこの道に遊ぶ事となつた。自ら「誰有て師とし友なふ人もなく、獨りぼつぼつ彼や此やの草紙などを開き見て、漸く五七五の運びを覺えたるに似たれど」（的なし）と言つてゐる。定まつた師といふものはゐなかつたやうであるが、支考門の反喬舍武藤巴雀や六々庵太田巴靜（別項）等には屢々點を乞ひ推敲を受けた。初め俳號を素分といひ、又祖父野双の號に因んで蓼花巷野又ともいつた。後又を有と改め、更に寶曆八九年頃也有と改めた。前津に隱棲後は蘿隱・知雨亭・半掃庵等と號し、悠遊自適の生活を送り、天壽を全うして終つた。【編著】也有全集（俳諧文庫）がある。

橫井也有（石原金一氏藏）

也有自畫贊（志田義秀氏藏）

○管見草（寶曆七年稿、同十一年再稿。也有の隨筆俳論で、その俳諧に關する見識を窺ふべき好資料である）○短綆錄（寶曆七年成稿。支考の五論と十論との比較論）○小革籠（別項）○美南無壽比（安永四年成。曉臺系の事紅の間に答へた俳論）○野夫談（寶曆十二年成。太宰春臺の「赤穗四十六士論」を駁したもの）○蘿隱編（漢詩文集）○蘿窓集（歌集）○行々子（狂歌集）○蘿葉集（別項）○蟻塚集（明和七年、也有の門人文樵が蘿葉集の後集として編した句集）○鶉衣（別項）○的なし（「裏顏やどちらの露も間に合はず」の句についての論）○けにのろみ（俳話）等。他に二三の雜著がある。

【人物・俳風】元來多才多能の人で、武道を初め平家・謠曲・書畫・詩歌・俳諧・狂歌往くとして可ならざるはなかつた。就中俳諧の文章は彼の最も名を成した所で、「鶉衣」（別項）一篇のために、彼の名は後世に傳へられたと言つてよい。彼の俳諧は、巴雀・巴靜等に教を乞うた關係から、自然美濃風（別項）の影響を受ける事が多かつた譯であるが、也有はその性格的にも徒に雅言艷詞を用ひて高雅を衒ふやうな事を好まなかつた。彼が平素家格の高きに矜らないで、極めて平民的であつた事によつても、この傾向は察せられる。隨つて支考の所謂俗談平話說に多く左袒し、曉臺一派の優艷典雅を旨とする風調には餘り同意しなかつた。併し同じ支考の說でも、「管見草」に論じてゐる如く、專ら「續五論」を推して「十

圖（勝尾寺開帳）

ることが出來る。ともに、「作者山本飛驒掾」とあり、傍題簽に、「文七一周忌」には「御細工人京ニテ重テ受領名山本河內掾御綸旨二通双戴」とあり、「勝尾寺開帳」には、「重テ任河內掾ニ口宣二通双戴」とあれば、共に元祿十四年以後元祿末の刊行であらう。この作二篇とも、「太夫信濃掾藤原信勝」「手祥太夫飛驒掾」とある。信濃掾が何人であるか不詳だが、伊藤出羽の改名か岡本文彌の受領號かと思はるゝ。併し文彌の受領については傍證がない。づつ兩方で遣ふ片手人形である。首ばかりの人形に手足を附けた外に、飛驒の片手人形は、操の系統に大きな發達の根幹を與へてゐる。古來の辰松流の差込遣以外に、飛驒の片手人形は、背後から片手を入れたらしい。これは正に、後の三人遣ひの原始形を證明してゐる。そしてこの飛驒の流れを汲んだものが、竹本座の吉田三郎兵衞・吉田文三郎（別項）で、享保十九年「鷹屋遖滿大內鑑」で三人遣ひに到達し

敷箇月、井上正夫の新派劇に關係したが、感ずるところあつて幕內生活と絕緣、早稻田大學に敎鞭をとつたが、七年間でやめ、爾來專ら創作上の精進を續けてゐる。一年一作主義など稱される位な寡作家で、常に構想に腐心、容易に筆をとらず、彫身鏤骨、ために益々その聲價を高からしめ、その藝術家生活の嚴格さ、藝術的良心の强烈さは、文壇の一異彩である。菊池寬（別項）と並んで劇壇二大雙璧としての流行時代を作つたことがあり、その後も寡作ながら、孜々として精進し、最近は小說家としての名聲が高い。

【作品】山本有三戲曲集一卷（新潮社）○日本戲曲全集現代篇（春陽堂）。【戲曲】海彥山彥○津

た。その後

ら溢れて來る眞摯なる風格は、多くの識者の尊敬と魅力とを感ぜしめるのである。又それでゐて、一面、彼の傑作中の傑作と稱される「海彥山彥」の如き、その他「大磯通ひ」、唯一のシナリオ「雪」の如き、詩味掬すべきものをもつてゐる。　〔關口〕

山本露葉　やまもとろえふ　詩人　【本名】三郎　【生歿】明治十二年二月三日、東京下谷根岸に生れ、昭和三年二月歿す。享年五十。【閱歷】早稻田專門學校文科出身。初め三山と號して「文庫」等に詩を投書してゐたが、後「明星」その他に發表した。明治三十年代に活躍した詩人で、雜誌「もしほ草紙」を發行したことなどもあり、又「モザイク」の同人でもあつた。詩の外に、いくつかの短篇の創作もあつた。兒玉花外・前田林外等と親しかつたが、明治四十

論」を駁し、「五論は俳諧のためにして、十論は俳諧繁昌のため也」と喝破し、後年に於ける支考の宣傳的態度を難じてゐる。そこに彼の清高な人格の反映も見られるが、また「詩の三百も思無邪の三字を出ず」と言つてゐる通り、繁瑣な言說を厭ふ所も多かつた。彼に取つては、俳諧は畢竟日常生活を趣味的に和げるもの、風塵の中に餘裕ある境地を見出せば足るのである。隨つて彼には人事の中から洒脫な滑稽味を見出したやうな句が多い。かの彼の作として名高い「晝顏やどちらの露も間に合はず」が、ただやをはに變へただけで「武玉川」（別項）に出てゐるのによつても、彼の雜俳的趣味が窺はれる。彼は又「風雅を以て家業を妨ぐべからず」（示先以辭）と言つた。彼は決して多感な詩人ではない。飽くまで平靜と溫和とを失はなかつた。文を行り句を作るに奇才縱橫の趣はあつたが、その詩境に自己を沒却し陶醉する事は出來なかつた。自ら成る詩ではなく求めて作られた文である。隨つて彼の作は詩的燃燒が足りず迫眞力がない。かの巧妙比類のない文章に於ても、やゝもすれば纖細な技巧のみが露はれ過ぎて、渾然とした自然の氣品に乏しい。要するに彼の藝術は、俗に墮しない程度で能く輕妙な才を發揮してゐる點に、その特色と價値とを認むべきであらう。【史的地位】從來彼は太祇（別項）と共に天明新調に至る過渡期を代表する人物として說かれてゐるが、彼は寧ろ曉臺等の革新運動とは反對の地位にあつたので、その作風から言へば決して天明調の先驅者などと言ふ事は出來ない。實際彼がただ俳諧の作品だけを殘してゐたのなら、やゝ滑稽の才に富む平凡な俳人として多く世に喧傳される事はなかつたであらう。ただ彼の俳文が輕妙洒脫を喜ぶ當時の好尙に最も投じた爲めに、名聲一時に布いたのである。若し彼の全作品から「鶉衣」一篇を除いたならば、彼の文學史的存在の意味は、殆どなくなると言つても過言ではなからう。【門流】也有は、自ら俳諧の專門家として立たなかつたから、門人といふものは別になかつた。內藤東甫・堀田六林・庵原楚巾等は最も親しかつたが、みな友人關係である。ただ石原文樵は也有の家臣であつたから門人同樣に仕へ、也有の歿後追善集「夢の蹤」を撰び、又藁塚を建てたり、句集を編したりした。【頭原】【參考】江戶文學研究　藤井乙男　○校註　鶉衣附錄（武笠三　○也有研究石田元季（校訂註釋鶉衣所載）

彌生の花淺草祭　やよひのはなあさくさまつり　「三社祭」を見よ。

槍踊　やりをどり　所作事　【解說】所作事の中で、謠曲・幸若舞曲等の影響を全く享けず、歌舞伎獨特の地に發したもので、古いのは丹前（別項）と槍踊とが、その尤なるものである。槍踊は大名行列の槍を振る動作から思ひついて創始されたものであつて、普通長い鳥毛の槍を持つて踊るのが主であるが、花槍を用ひる場合もある。【沿革】「役者大鑑」によると、元祿期に道外方として名を得た金澤五平次が延寶頃に演じたのに始まる。次いでこれを見習つて演じたもので名高いのは、若女方水木辰之助と立役大和屋甚兵衞とである。殊に辰之助が元祿八年冬、江戶市村座に初下りして演じた時、寶井其角に「煤はきや諸人がまねる槍をどり」とよまれて、その譽を殘した。また若女方筒井吉十郎が寶永元年冬、江戶中村座へ下つて來て、二本鳥毛の槍踊を勤めて好評を博した。その後、槍踊は頓に流行し、瀨川菊之丞・尾上菊五郎・佐野川市松等、これを能くしたが、寶曆期に至つては獨立してよりも他の所作事と取合せて行はれるやうになり、まづ元文五年十一月、江戶市村座で「丹前」に取合せられ、次いで「男道成寺」や變化物（別項）等の中の所作に取入れられた。その後、多種多樣のものが生れたが、その多くは「丹前物」又は「奴踊」の中に取入れられ、嘗て流行した槍踊も、それ自身として獨立したものは今日に傳存せず、僅かに「丹前」や「奴踊」などの中に、その俤を傳へてゐるに過ぎない。【形式】槍を振る扮裝は奴姿・若衆姿・女姿の三種で、立役で勤める時は、創始者の五平治以來、多く奴姿であり、女方はその初期以來、多く若衆姿であるが、後年女姿も生れ、二種が行はれた。【傳來】奴姿としては「小原女」（別項）や「大津繪奴」（後出）に、若衆姿としては「高砂丹前」（丹前參照）に、又女姿としては同じく「高砂丹前」と「花車」（後出）等に傳へられてゐる。【主要種目】門出京人形（長唄、變化物。槍踊。寶曆五年九月、市村座。中村粂太郎所演）○雛祭神路桃（長唄、變化物。槍踊（亂拍子）。同八年三月、市村座。中村富十郎所演）○寒紅梅行列丹前（長唄。槍踊。同十一年十一月、中村座。芳澤五郎・市川武十郎所演）○稚子勇鑓踊（長唄。明和四年五月、市村座。市村吉五郎所演）○大鳥毛嫩綠（長唄、槍踊。同五年十一月、市村座。二代佐野川市松所演）○渡初鵲丹前（長唄、五人槍踊。同六年九月、中村座。澤村鶴藏外四人所演）○初歌舞妓女花鎗（長唄、槍踊。安永元年九月、中村座。四代岩井半四郎所演）○三人形吾嬬風俗（長唄、二本槍踊。同五年十一月、中村座。二代嵐三五郎所演）○大津繪姿花（長唄、槍持ち奴。同七年二月、市村座。大谷永助所演）○室鷺鳥毛生先（長唄、槍踊。天明元年十一月、森田座。坂東三田八所演）○道行對花鑓（長唄、槍持ち二人奴。同四年四月、森田座。四代松本幸四郎・三枡德三郎所演）○三國一松伊達鑓（長唄。同四年十一月、中村座。三代佐野川市松所演）○女夫松高砂丹前（長唄。通稱、高砂丹前、又は高砂。別丹前參照）○花車岩井屋（長唄。通稱花車、花車槍踊。寬政四年十一月、河原崎座。岩井粂三郎（五代半四郎）所演）○奉掛色浮世圖畫（長唄。通稱、小原女。一名、黑木賣。別項小原女參照）○四季詠寄三大字（長唄と常磐津との掛合、變化物、鷺娘のうち槍踊。文化十年三月、中村座。三代坂東三津五郎所演）○其九繪彩四季櫻（常磐津、變化物、槍持奴、文化十二年三月、中村座。三代中村歌右衞門所演）○歌へすゞ〳〵餘波大津畫（長唄。變化物。槍持奴。通稱、關三の奴、又は大津繪奴。文政九年九月、中村座。二代關三十郎所演）○曾我祭武藏攝物（長唄。行列奴（二人槍踊）。天保二年五月、河原崎座。七代市川團十郎・三代澤村源之助（五代岩十郎）所演）○連方良玆大津繪（長唄と富本との掛合、變化物、槍持二人奴。安政元年七月、中村座。中村鶴藏（三代仲藏）・中村芝雀所演）○採筆惠の大津繪（長唄と常磐津との掛合、變化物、槍持三人奴。同四年十月、森田座。中村福助（四代芝翫）・中村延雀・市川九藏（七代團藏）所演）○三五月須磨寫繪（清元。松風村雨と槍持奴（鍋屋臺の趣向）。寬延元年七月、市村座。市村竹松（坂東家橘）所演）○（丹前參照）。

【參考】劇代集　二代櫻田左交　○近世邦樂年表　○江戶近世舞踊史　九重左近　○日本歌謠集成（卷九）　【秋葉】

遣句　やりく　連歌・俳諧　【解說】連歌と俳諧とにより時代によつて多少意義が變遷してゐる。遣句といふ稱は、良基の「知連抄」に見えるのが最も古からうが、同書のいふ所では、長連歌に於て、むづかしき前句が出て附け惱

む時、前句の中の多少の語に緣を求めて輕々と言ひのけ局面を打開する附句を云ひ、これが連歌に於ける早い頃の普通の意義である。例へば「六田のよどぢさては大和路」といふ前句に對して、宗砌が「我が國は神の七代をはじめにて」と附けた如きは著名な一例で、他の一般の附句と異なり、前句との間に緊密な關係

鑓の權三重帷子　やりのごんざかさねかたびら　淨瑠璃　二段　世話物　【作者】近松門左衞門　【興行】享保二年八月二十二日より竹本座（寶曆板「外題年鑑」）　【諸本】七行四十九丁本、山本九兵衞板。十行二十五丁本、鶴屋喜右衞門板。諸種の近松淨瑠璃集所收。　【題材】享保二年七月十七日夜、松江藩茶道役正井宗味が大坂

させよとの趣なれば、御兩人の中にてこの榮ある奉公を致されては如何にと慫慂する。伴之丞はこれに對して高慢な放言をするが、權三は謙讓な挨拶をする。（淺香市之進宅）權三は師匠の留守宅に女房おさゐを訪れて眞の臺子の傳授を懇願する。以前から權三を見込んで居つたおさゐはよき機と、條件として長女

帶を締めてゐるのを見て、生來の妬情抑へ難く、これを奪つて庭へ拋り、代りに己が帶を解いて投げ與へたところ、權三は餘りの事に憤激し、これをも庭へ拋つたのを伴之丞に不義の證據として持ち去られる事になつてゐる。おさゐの性格については種々の說があるが、その描寫には確かに讀み足りないところがあ

む時、前句の中の多少の語に縁を求めて輕々と言ひのけ局面を打開する附句を云ひ、これが連歌に於ける早い頃の普通の意義である。例へば「六田のよどぢさては大和路」といふ前句に對して、宗砌が「我が國は神の七代をはじめにて」と附けた如きは著名な一例で、他の一般の附句と異なり、前句との間に緊密な關係を持たず、意想外な事象を接合するものが多く、上手の人が時に試みて却つてその名を成した場合が多い。江南矢島小林庵に於ける何木百韻に、「下もえや飛火の野守いそぐらむ」に「あらはれぬべく戀ぞなりゆく」と宗長の附けたのは、遣句にして秀逸にも勝るとの評を得たが如きはそれである。然るに心敬以下の人々の說を錄したといふ「花實見葉集」には、遣句の體として前句に言ひ掛けるものとし、例へば「入れば涼しき夏山の陰」に、「さやかなる尾上の松の夕日影」の如き、夕日影入りて夏山は涼しきと、前句へ言ひ還る類を擧げてある。「知連抄」にはかゝる類は懸句と稱して區別してあるので、「見葉集」の說は誤れるか、或は一時かゝる類を遣句として取扱つたか明かでない。江戸中期の「連歌提要」には、「むづかしき前句、或は指合多く附にくきところを、そとあしらひ、地連歌の中にも輕々と附やりたるをいふ」と云つてあるが、これが後の連歌及び俳諧に於て一般に云ふところの遣句で、寶曆の早川宗順の「俳諧名目抄」にも、「前句甚だむづかしき句、又は付んとすれば打越の心あしく、打越をよろしくすれば付る事もならぬやうなる時、只少しばかり寄せて流し遣る事なり。句の巧みになきをいふにはあらず。不巧の人は遣句は得せぬものと昔より申しあへりとなり」と云つてある。

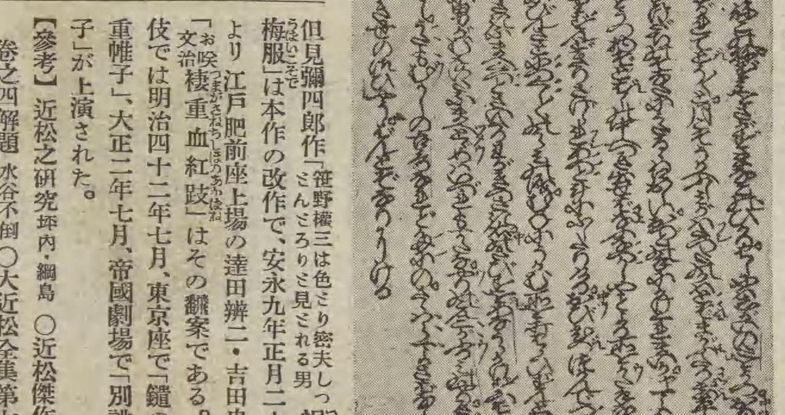
〔福井〕

鑓の權三重帷子 やりのごんざかさねかたびら

淨瑠璃 二段 世話物 【作者】近松門左衞門 【興行】享保二年八月二十二日より竹本座(寶曆板「外題年鑑」) 【諸本】七行四十九丁本、山本九兵衞板。十行二十五丁本、鶴屋喜右衞門板。諸種の近松淨瑠璃集所收。 【題材】享保二年七月十七日夜、松江藩茶道役正井宗味が大阪高麗橋で妻敵なる同藩近習中小姓池田文次及び姦婦とよを討ち取つた。この事は「月堂見聞集」や「攝陽落穗集」に詳しいが、大阪の眞中で起つた椿事なので、早速京大阪の五芝居ともこれを脚色して興行し、又これを綴つた浮世草子「女敵高麗茶碗」「亂脛三本鑓」「雲州松江の鱸」(各別項)等が引續いて板行された。「女敵高麗茶碗」の序に「難波の芝居に八つの櫓先をあらそひ、盆替りの間もなく、場所の動目を驚かし、實や好色橋辨慶とは、近松門左が思ひつき、浮世は夢の浮橋と、吾妻三八が趣向の外題也」とある。これによると、竹本座では先づ「好色橋辨慶」の外題を掲げて宣傳し、後、この事件の主人公を俗謠で知られた鑓の權三に假託して趣向を立て、外題を改めて一箇月餘の後になつて始めて上場したものらしい。十行本の丁付が「はし辨」となつてゐるのは、以上の想像を裏書するものと思はれる。鑓の權三は古く「落葉集」卷之五祇園町踊の唄歌の中に見えてゐる人物である。

【梗概】〔上卷〕(濱の宮馬場)表小姓笹野權三が朋輩川側伴之丞と共に馬術を競つてゐる所へ、茶道役淺香市之進の舅岩木忠太兵衞がやつて來て、この度東の家老より御狀あり、若殿御祝言の悅の振舞に近くお國にて眞の臺子の茶の湯を催されるが、市之進は江戸詰の留守中故、弟子の中にて眞の臺子傳授の者に勤めさせよとの趣なれば、御兩人の中にてこの榮ある奉公を致されては如何にと慫慂する。伴之丞はこれに對して高慢な放言をするが、權三は謙讓な挨拶をする。(淺香市之進宅)權三は師匠の留守宅に女房おさゐを訪れて眞の臺子の傳授を懇願する。以前から權三を見込んで居つたおさゐはよき機と、條件として長女との婚約を切望し、その應諾を得るや夜中密かに數寄屋に誘ひ、傳授の繪圖卷物を披見せしめる。その夜、豫ておさゐに戀慕せる伴之丞がおさゐを口說き、併せて傳授をも得んと庭内に忍び込んだが、この有樣を目擊して不義の密會と做し、證據を摑んで委を隱す。〔下卷〕(權三おさゐ道行)圖らずも不義者となり果てた二人は、故郷を後に駈落し、諸方流浪の末、暫らく伏見の里に忍ぶ事となる。(岩木忠太兵衞玄關前)市之進は歸國するや、直ちに女敵討に出で立つ事となり、先づ舅忠太兵衞を訪れて別れの盃を交す。ところへおさゐの弟甚平が伴之丞の首を提げて歸り來つたので、一同門出の吉左右よしと喜び勇み、甚平も助太刀として共に出發する。(伏見京橋)七月中旬、軒々に切子燈籠の點る頃、京橋北の橋詰で市之進・甚平に行き逢つた權三・おさゐは、豫て期せし事とて潔く市之進の手にかゝる。時に權三は二十五、おさゐは三十七。

【構想】數寄屋にておさゐ・權三會合の際、豫て權三にお雪なる情人のある事を知つてゐたおさゐは、權三がお雪から贈られた比翼紋の帶を締めてゐるのを見て、生來の妬情抑へ難く、これを奪つて庭へ拋り、代りに己が帶を解いて投げ與へたところ、權三は餘りの事に憤激し、これをも庭へ拋つたのを伴之丞に不義の證據として持ち去られる事になつてゐる。おさゐの性格については種々の說があるが、その描寫には確かに喰ひ足りないところがある。併しそれをもつと突込んで、純粹の姦通劇にして了ふ事はその筋に對して遠慮しなければならなかつたのであらう。 【影響】延享四年二月十三日より豐竹座興行の淺田一鳥・



鑓の權三重帷子(十行本)

但見彌四郎作「笹野權三は色こり密夫しつ 裾重紅梅服」は本作の改作で、安永九年正月二十五日より江戸肥前座上場の達田辨二・吉田鬼眼作「お吠文治 棲重血紅跡」はその飜案である。歌舞伎では明治四十二年七月、東京座で「鑓の權三重帷子」、大正二年七月、帝國劇場で「別誂重帷子」が上演された。

【參考】近松之研究 坪内・綱島 ○近松傑作全集 卷之四解題 水谷不倒 ○大近松全集第七卷解說 木谷蓬吟 ○近松名作集下解題 黒木勘藏 ○近松全集第十一卷解題 藤井乙男 ○おさい藤村作

隙酔する事は出來なかつた。自ら成る詩ではなく求めて作られた文である。隨つて彼の作は詩的燃燒が足りず迫眞力がない。かの巧妙比類のない文章に於ても、やゝもすれば纖細な技巧のみが露はれ過ぎて、渾然とした自然の氣品に乏しい。要するに彼の藝術は、俗に墮しない程度で能く輕妙な才を發揮してゐる點に、その特色と價値とを認むべきであらう。 【史的地位】從來彼は太祇(別項)と共に天明新調に至る過渡期を代表する人物として說かれてゐるが、彼は寧ろ曉臺等の革新運動とは反對の地位にあつたので、その作風から言へば決して天明調の先驅者などと言ふ事は出來ない。實際彼がただ俳諧の作品だけを殘してゐたのなら、やゝ滑稽の才に富む平凡な俳人として多く世に喧傳される事はなかつたであら

舞伎獨特の地に發したもので、古いのは丹前(別項)と槍踊とが、その尤なるものである。槍踊は大名行列の槍を振る動作から思ひついて創始されたものであつて、普通長い鳥毛の槍を持つて踊るのが主であるが、花槍を用ひる場合もある。 【沿革】「役者大鑑」によると、元祿期に道外方として名を得た金澤五平次が延寶頃に演じたのに始まる。次いでこれを見習つて演じたもので名高いのは、若女方水木辰之助と立役大和屋甚兵衞とである。殊に辰之助が元祿八年冬、江戸市村座に初下りして演じた時、寶井其角に「煤はきや諸人がまねる槍をどり」とよまれて、その譽を殘した。また若女方筒井吉十郎が寶永元年冬、江戸中村座へ下つて來て、二本鳥毛の槍踊を勤めて好評を博した。その後、槍踊は頓に流行し、瀨川菊

丹前」と「花車」(後出)等に傳へられてゐる。 【主要種目】門出京人形(長唄、變化物、槍踊。寶曆五年九月、市村座。中村粂太郎所演)○雛祭神路桃(長唄、變化物、槍踊(亂拍子)、同八年三月、市村座。中村富十郎所演)○寒紅梅行列丹前(長唄、槍踊。同十一年十一月、中村座。芳澤五郎・市川武十郎所演)○稚子勇鑓踊(長唄。明和四年五月、市村座。市村吉五郎所演) ○大鳥毛嫩綠(長唄、槍踊。同五年十一月、市村座。二代佐野川市松所演)○渡初鵲丹前(長唄、五人槍踊。同六年九月、中村座。澤村鶴藏外四人所演)○初歌舞妓女花鎗(長唄、槍踊。安永元年九月、中村座。四代岩井半四郎所演)○三人形吾嬬風俗(長唄、二本槍踊。同五年十一月、中村座。二代嵐三五郎所演)○大津繪娑花(長唄、槍持ち奴。同七年二月、市村座。大谷永助所演)○宝鬘鳥毛生先(長唄、槍踊。天明元年十一

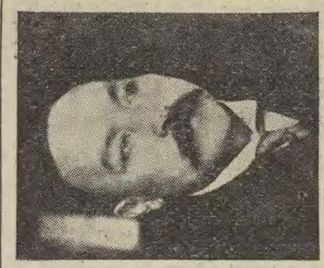
津繪(長唄)と富本との掛合、變化物、槍持三人奴。政元年七月、中村座。中村鶴藏(三代仙藏)・中村芝雀所演)○採筆惠の大津繪(長唄と常磐津との掛合、變化物、槍持三人奴。同四年十月、森田座。中村福助(四代芝翫)・中村延雀・市川九藏(七代團藏)所演)○三五月須磨寫繪(清元。松風村雨と槍持奴(踊屋臺の趣向)。寬延元年七月、市村座。市村竹松(坂東家橘)所演)。(丹前參照)。

【參考】劇代集・二代櫻田左交 ○近世邦樂年表○江戸近世舞踊史・九重左近 ○日本歌謠集成(卷九)(秋葉)

遣句 やりく

連歌・俳諧 【解說】連歌と俳諧とにより時代によつて多少意義が變遷してゐる。遣句といふ稱は、良基の「知連抄」に見えるのが最も古からうが、同書のいふ所では、長連歌に於て、むづかしき前句が出て附け惱

離れ、牧師・京都帝大講師、京都及び早稲田大學の圖書館長等を勤めた。【著作】明治十八年十月、家藏版詩集「十二の石塚」を處女作として、詩集「半月集」の外に「書物語」並に「ヨヘレスの言」「京都叢書」



月牛　淺湯

四十八卷の校訂編纂がある。

【批評】半月は中西梅花（別項）とひとしく生來詩人の氣質があつたが、その才能の育成を施す精進の氣力を缺く性癖も一方に强かつた爲め、遂に詩人としては大成せずして已んだ。「十二の石塚」は新體詩創成以來、最初の個人詩集といふ點で注目される。措辭技巧も古文雅語を驅使して巧みであり、「新體詩鈔」（別項）の作者等に優るものがあつたが、彼等の如き創造精神に缺くところあつた爲め、一種の陳腐さと清新さとが併存してゐる觀があつた。「半月集」卷頭の「天地初發」なども、「創成記」によつて天地創造を歌つたもので、その起句數行の如きは、特に彼が全作中での出色のものであつた。が、彼は統一と均齊といふ點に缺くるところ多かつた爲め、折角の佳句も灾ぎなる思慮なき拙句のために傷けられてしまふ場合が少からずあつた。

【參考】明治文學史　岩城準太郎　○明治大正詩史　日夏耿之介　【日夏】

唯一神道　しゅいつしんとう　【名義】吉田家の唱へたる神道。吉田家は卜部家で、その祖平麿伊豆より出で、神祇官の卜部（神祇の四姓參照）となり、子孫神祇に關係し、後姓を吉田と云ふ。吉田家には歷代人物が出で、遂に一家の神道を立てた。これを唯一神道と名づけたのである。唯一は、佛教の「唯有一乘法」（法華）の如き語に基づくと云ひ、また「孝德紀」の「帝道唯一」の語に基づくとも云はれる。併し彼の徒は、「唯一は神明の直傳、一氣開闢の本書の和歌の部のみの古鈔本を藏し、宮内省圖書寮に藏せる桂宮御藏本は、大正五年珍書同好會で覆刻印行せられ、大正十二年刊行の「增訂藥塵祕抄」所載、佐木信綱博士編「梁塵愚案」には本書五種が入つて居り、「確證はないが、ただ製作年代はその頃と見て差支へあるまい。教說が、春・夏・秋・冬・別・戀・無常等に排列したやうである。この今樣は何れも實際に歌はれたものと考へるよりも、寧ろ「和漢朗詠集」の朗詠に得た所が多い。部立は記さないが、和歌や朗詠を詠じた歌が多い。就中その取材や歌詞は、寧ろ自然や人情を歌つたものも若干あるが、

（藏家爵侯川德）詞繪等頓來破

に一切の繫縛を睽離し盡すその人に「不留房」の名を假託してあるので、またこの繪卷は「不留房繪詞」とも云はれてゐる。詞書の中には、「心も裂裟も破來頓等、憂き身も人も破來頓等」などとしきりに破來頓等を語尾に繰り返してあるが、これは從來「ぶひとんとん〳〵」或は「ぶひとんとん〳〵」の意味に讀まれてゐた。然るにこれは、「やれことんとう」と訓ずべきで、中世盛んに行はれた囃子の言葉であるといふ說が出て、殆どこれが定說となつた。全卷を通じて繪三段、第一段不留房出家のところ、第二段名聞家が妻子に苦しめらるゝところ、第三段極樂往生のところである。その描寫は穩かで、優雅なが

ら筆致やゝ固くして畫趣に動的なところが乏しい。この畫の筆者は南北朝頃の飛驒守惟久と傳へられてをり、確證はないが、ただ製作年代としてはその頃と見て差支へあるまい。教說の「增訂藥塵祕抄」所載、佐木信綱博士編「梁塵愚案」には本書五種が入つて居り、「確證はないが、ただ製作年代としてはその頃と見て差支へあるまい。教說の「增訂藥塵祕抄」所載、佐木信綱博士編「梁塵愚案」には本書五種が入つて居り、「確證はないが、ただ製作年代としてはその頃と見て差支へあるまい。教說

破來頓等繪詞　やぶれことんとうえことば　繪卷【解說】尾張德川侯所藏一卷。全卷を通じて厭離穢土往生極樂の教說が主になつてゐる。「三界四州いづれのものか夢ならざる」と觀じて、遂

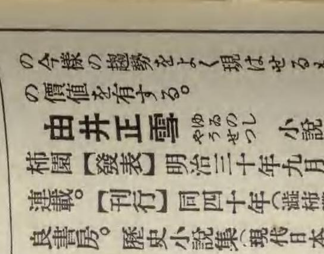
（岡崎正治）

（國語と國文學　二ニ）

やれ旅籠　つゞらふし　隨筆　一卷【著者】未詳【諸本】隨筆文學選叢第九卷所收。【解說】江戸吉原町の名妓高雄・薄雲の像、高尾所持の盃、高尾筆奉納色紙、高尾の墓、其角の句碑、其角自畫讀軸物、蕪寺家長卿の碑、櫂現社前の碑、繫舟松の碑、飛鳥山碑等二十二則の記事に、多くの摸圖を加へた書である。「寸錦雜綴」（別項）に類してゐる。序跋もなく、刊年も未詳である。但し卷尾に「梧桐亭藏梓」とあるのみ。（和田）

野郎評判記　やろうひょうばんき　「好色本」を見よ。

八幡前　やはたまえ　能狂言【別名】八幡鍛【梗概】八幡山下に住む有德人が、獨り娘に藝に達した者を聟にしようとその由を高札に打つ。すると近所の某が、聟になりたいといふので知人に藝を習ふことになる。知人は先づ鳥を射る事にならうが當るまい。當らなくて翔ぶ鳥ばかり神も嬉しくおぼすらん八幡の前に鳥射立



人が笑つた時一首浮かんだと言つて、「いかばかり神も嬉しくおぼすらん八幡の前に鳥射立てたり」と言へば、この間八幡に造營の事があつて鳥居が立つたことであるから、聟入が濟まうと教へる。某は、そのやうな長い事は一人では覺えられぬと言ふので、知人は身共も見物にまぎれてゐて、歌の句の頭字を一寸言はうといふ事になる。愈々その場に至り、某は豫定の如く射損じ、皆々に笑はれる。知人は今だ、一首浮かうだと言へといふのを、某は石が浮かうだと言ふ。又教へられてやつと一首浮かうだと言ひ、一句々々言直しともかくも四句までは教へられるが、條りの事に知人も呆れて逃げてしまふので、五句が出ず、泥龜を射立てたと言つて大恥をかく。

【解說】大藏流では、玄惠法師の作と傳へられる。寬正五年四月紀河原勸進能の番組にも、「八幡之前」と見えてゐる。確實な手掛りといふべきは、曲中の、最近八幡に造作の事があつたといふ文句であるが、果して何時の事をさしてゐるものであらうか。（福田）

湯淺半月　ゆあさはんげつ　詩人【本名】吉郎【閱歷】安政五年二月、群馬縣安中に生れた。舊板倉藩士。同志社に學び、歐米に遊ぶこと前後三回、希伯來語・英文學・圖書學等を修め、和歌を高崎正風等に、洋畫を淺井忠に、平家琵琶を藤村性譽檢校に、狂言を茂山千五郎に就いて習得した。ドクトル・オブ・フィロソフィーの學位がある。「十二の石塚」（別項）によつて詩壇に出で、二十年代より三十年代初期にわたつて詩作があつたが、その頃から詩壇を

月牛　淺湯

の外に「書物語」並に「ヨヘレスの言」「京都叢書」四十八卷の校訂編纂がある。

【批評】半月は中西梅花（別項）とひとしく生來詩人の氣質があつたが、その才能の育成を施す精進の氣力を缺く性癖も一方に强かつた爲め、遂に詩人としては大成せずして已んだ。「十二の石塚」は新體詩創成以來、最初の個人詩集といふ點で注目される。措辭技巧も古文雅語を驅使して巧みであり、「新體詩鈔」（別項）の作者等に優るものがあつたが、彼等の如き創造精神に缺くところあつた爲め、一種の陳腐さと清新さとが併存してゐる觀があつた。「半月集」卷頭の「天地初發」なども、「創成記」によつて天地創造を歌つたもので、その起句數行の如きは、特に彼が全作中での出色のものであつた。が、彼は統一と均齊といふ點に缺くるところ多かつた爲め、折角の佳句も灾ぎなる思慮なき拙句のために傷けられてしまふ場合が少からずあつた。

【參考】明治文學史　岩城準太郎　○明治大正詩史　日夏耿之介　【日夏】

唯一神道　しゅいつしんとう　【名義】吉田家の唱へたる神道。吉田家は卜部家で、その祖平麿伊豆より出で、神祇官の卜部（神祇の四姓參照）となり、子孫神祇に關係し、後姓を吉田と云ふ。吉田家には歷代人物が出で、遂に一家の神道を立てた。これを唯一神道と名づけたのである。唯一は、佛教の「唯有一乘法」（法華）の如き語に基づくと云ひ、また「孝德紀」の「帝道唯一」の語に基づくとも云はれる。併し彼の徒は、「唯一は神明の直傳、一氣開闢の

唯心房集　ゆいしんぼうしゅう　短歌　今樣集　一卷【著者】唯心房寂念【諸本】名古屋關戸家に

（川侯爵家藏）

の名を假託してあるので、またこの繪卷は「不留房繪詞」とも云はれてゐる。詞書の中には、「心も袈裟も破來頓等、憂き身も人も破來頓等」などとしきりに破來頓等を語尾に繰り返してゐるが、これは從來「拂ひとん〳〵」或は「祓ひとん〳〵」の

現前の碑、摩耗松の碑、和鳥山碑等二十二則の記事に、多くの摸圖を加へた書である。「寸錦雜綴」（別項）に類してゐる。序跋もなく、刊年も未詳である。但し卷尾に「梧桐亭藏梓」とあるのみ。

〔和田〕

野郎評判記 やらうひやうばんき

「好色本」を見よ。

八幡前 やはたのまへ

能狂言 【別名】八幡聟（やはたむこ）

【格式】內神文濟相傳の部（大藏流）。

【梗概】八幡山下に住む有德人が、獨り娘に一藝に達した者を聟にしようとその由を高札に打つ。すると近所の某が、聟になりたいといふので知人に藝を習ふことになる。知人は先づ弓が得意な事にせよ、さうすれば浮鳥（うきどり）が翔鳥（かりどり）を射る事にならうが當るまい。當らなくて人が笑つた時一首浮かんだと言つて、「いかばかり神も嬉しくおぼすらん八幡の前に鳥射立

ゆ

湯淺半月 ゆあさはんげつ

詩人 【本名】吉郎（よしを）

【閲歷】安政五年二月、群馬縣安中に生れた。舊板倉藩士。同志社に學び、歐米に遊ぶこと前後三回、希伯來語・英文學・圖書學等を修め、和歌を高崎正風等に、洋畫を淺井忠に、平家琵琶を藤村性禪檢校に、狂言を茂山千五郎に就いて習得した。ドクトル・オブ・フイロソフィーの學位がある。「十二の石塚」（別項）によつて詩壇に出で、二十年代より三十年代初期にわたつて詩作があつたが、その頃から詩壇を

の作者等に優るものがあつたが、彼等の如き創造精神に缺くところあつた爲め、一種の陳腐さと清新さとが併存してゐる觀があつた。「半月集」卷頭の「天地初發」なども、「創成記」によつて天地創造を歌つたもので、その起句數行の如きは、特に彼が全作中での出色のものであつた。が、彼は統一と均齊といふ點に缺くるところ多かつた爲め、折角の佳句も次ぎなる思慮なき拙句のために傷けられてしまふ場合が少からずあつた。

【參考】明治文學史岩城準太郎 ○明治大正詩史

〔日夏〕

唯一神道 ゆいいつしんたう

日夏耿之介

神道 【名義】吉田家の唱へたる神道。吉田家は卽ち卜部家で、その祖平麿伊豆より出で、神祇官の卜部（神祇の四姓參照）となり、子孫神祇に關係し、後姓

を吉田と云ふ。吉田家には歷代人物が出で、遂に一家の神道を立てた。これを唯一神道と名づけたのである。唯一は、佛敎の「唯有一乘法」（法華）の如き語に基づくと云ひ、また「孝德紀」の「帝道唯一」の語に基づくとも云はれる。併し彼の徒は、「唯一は神明の直傳、一氣開闢の一法也」（名法要集）と云ふ風に說いてゐる。

【思想】この神道は、當時佛敎的神道弘く行はれ、天下の神社は多く佛寺の管下に歸したのを遺憾に思つて起したので、自ら元本宗源神道と云つたのである。これを解して「元とは、陰陽不測の元元を明かす、本とは一念未生の本本を明かす。宗とは一氣未分の元神を明かす。故に萬法純一の元初に歸す。是れを宗と云ふ。源とは和光同塵の神化を明かす。故に一切利生の本基を開く。是れを源といふ。吾國開闢以來の唯一神道是れ也」（名法要集）と。

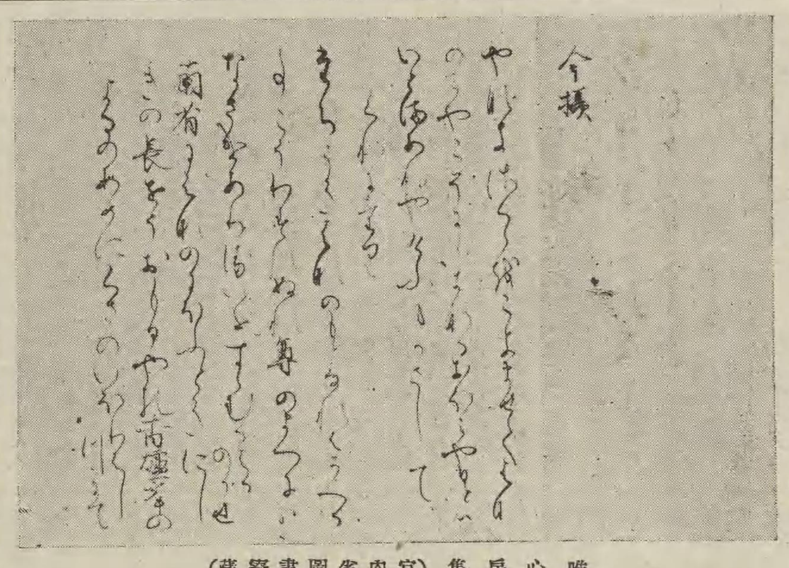
【批評】かくて唯一神道は、儒佛や道敎から離れ、宗源神道を立たせることを主張せるも、その內容は多く儒佛に基づいてゐる。そこで曰く、「大織冠仰に云はく、吾が唯一神道は、天地を以つて書籍となし、日月を以つて證明となすと。是れ則ち純一無雜の密意也。故に儒釋道の三敎を要すべからざる也。然かも此の如くなりと雖も、唯一の潤色の爲に、神道の光華の爲に、廣く三敎の才學を存し、專ら吾が道の淵源を極むるは、亦妨げんや」（名法要集）と。以てその神道の儀式まで、佛敎による所が少くない（この點「鹽尻」參照）。ただこの神道が本地垂迹（別項）に反し、神本佛迹の思想を說きたるは注目に値する。【影響】唯一神道は吉田兼倶以後、神道界に大なる勢力を得、神道の宗家を以て目せられ、神道の本願寺と稱せられるに至つた。

〔田中（義）〕

唯心房集 ゆゐしんばうしふ

短歌 今樣集 一卷

【著者】唯心房寂念 【諸本】名古屋關戶家に本書の和歌の部のみの古鈔本を藏し、宮內省圖書寮に藏せる桂宮舊御藏本は、大正五年珍書同好會で覆刻印行せられ、大正十二年刊行の「增訂梁塵祕抄」所載、佐佐木信綱博士編「梁塵後錄」には本書の今樣五十首が入つて居り、



唯心房集（宮內省圖書寮藏）

を歌つたものも若干あるが、寧ろ自然や人情を詠じた歌が多い。就中その取材や歌詞は、和歌や朗詠に得た所が多い。部立は記さないが、春・夏・秋・冬・別・戀・無常等に排列したやうである。この今樣は何れも實際に歌はれたものと考へるよりも、寧ろ「和漢朗詠集」の朗詠に於ける如く、歌はれる用に供したものか、或はただ自らの雅懷を述べたに止まると見る方が妥當である。但し次に記す歌の第一歌の如きは、「和漢朗詠集」の句をそのまゝ訓み下したもので、「梁塵祕抄」の四句神歌にも入つてゐるから、實際に歌はれ、世に行はれたものと思はれる。或は必ずしも寂念の自作とは限らずに、世に行はれた今樣の愛誦句を收錄したものかも知れぬ。又第二歌の如きも、類似の句法を「梁塵祕抄」に多く見出すことが出來るもので、これも世に流行の今樣を收めたものであらうか。

【歌詞】一二を擧げると、

池の涼しき汀には　夏の影こそなかりけれ　木高き松を吹く風の　聲も秋ぞ聞ゆなる

開くに尊き山の名は　靈鷲鷄足天台山　文殊のいますなる淸凉山　眞言弘まる高野の山

【價値】今樣の作を、かく多數に殘してゐる歌人は他にはない。慈鎭の「拾玉集」にも今樣四首の出てゐることが從來世に知られてゐたのみである。又その作の中には優れた歌が多い。寂念は天台聲明の道場たる大原に住んでゐたから、今樣に風懷を託するやうになつたのであらう。兎も角も本書は、平安朝末の今樣の趨勢をよく現はせるものとして多大の價値を有する。

〔藤田〕

由井正雪 ゆゐのしやうせつ

小說 【作者】塚原渋柿園 【發表】明治三十年九月、東京日日新聞連載。【刊行】同四十年（渋柿叢書第一卷）、左久良書房。歷史小說集（現代日本文學全集）所收。

【梗概】駿州靜岡の紺屋の子、由井龜之助は少年時代に太閤記や太平記などを讀んで、功名心に燃え、叛逆の意志をいだく。その後、軍學者として江戶牛込に門戶を張り、敎を乞ふもの三千人に上つたので、いよ〳〵叛逆に手を伸ばすことになり、先づ覘ひを附けたのが紀伊大納言賴宣である。賴宣が豪放壯快な人物で、幕府からとかく猜疑の眼で見られやすかつたのを利用した正雪は、久能山東照宮修覆の役目で、靜岡に來てゐた同家の家老牧野兵庫を手に入れる。當時駿州の農民は、旱魃・饑饉・重稅に苦しんでゐたので、安居村の三四郎が三十四ヶ村を代表して、舊主賴宣の家老たる牧野兵庫に縋り、苛稅を免れようとした。時の城代酒井山城守は兵庫の言を聽かず、却つて三四郎以下百數十人を捕へ、三四郎を磔刑にしようとする。處刑の日、兵庫は酒井の非道を怒つて處刑を中止させようとしたが、矢來の外でそれを押し留めた浪人があつた。それが由井正雪で、彼は兵庫を自邸へ連れて行き、言葉巧みに兵庫を說き伏せる。その後、兵庫は三四郎を助けた廉で幕府から逼塞を命ぜられたと聞くと、正雪は兵庫の思慮に乏しい點を利用して賴宣との間を割き、同志の一人をして賴宣との接近を計らしめたが、賴宣がその手に乘らぬので、正雪は兵庫を煽動して紀伊大納言家を幕府に讒誣せしめた。若しそれで幕府が賴宣を疑ひ、賴宣が失脚すれば

天下の大亂となる。その處に附け入らうといふのが、正雪の策略であつた。一方、正雪は曾て自分の愛弟子だつた三四郎の妹お宮を利用して、紀州家の樣子を探らせる。幕府が賴宣の一身を處斷しようとした時、紀州家の忠臣安藤直次が出て、幕府の疑ひを解き、賴宣が安全になつたので、正雪は一度は失望したが、彼は不屈だ。更に巨額の金を撒いて一萬餘の同志を募り、江戸・駿府・紀州の間を往來する。その江戸滯留中に京都にゐた牧野兵庫その他の同志が、島原にて大金を消費し、折角正雪が朝廷に接近して勤王の大旆を飜さうと計つた計畫も、大方駄目になつた上、兵庫も自滅した。正雪はあせり出す。賴宣に會つて天下の形勢を說き、煽動しようとしたが相手にされない。そのうちに正雪はひどく金に窮し、それが原因で丸橋忠彌の口から債主へ祕密が洩れ、到頭江戸燒討ちのことも成らず、正雪は靜岡で自殺するに至つた。紀州家はほつと安堵の胸を撫で下したのである。

【批評】空想と史實を大膽に取り交ぜて正雪の事蹟を小說化し、それに牧野兵庫等の情事も附け加へた。構圖が老巧であり、また規模も大きいが手を擴げ過ぎて、部分的に出來不出來があり、筋にも作爲の跡が見える。性格描寫でも、正雪を初め賴宣・直次・忠彌等の人物は、大體よく描かれてゐるが、肝腎の牧野兵庫は無理があり、また三四郎の妹のお宮を非凡化した爲め、人間味を薄くしたことなども缺點と云へるが、しかし澁柿園のすぐれた力作の一篇であることは爭へない。〔千葉・高須〕

唯美主義（ゆゐびしゆぎ）　藝術論〔英〕Aestheticism.〔佛〕Esthétisme.【解說】耽美主義とも謂ふ。美的直觀（觀照）の認識論的意義を究明する汎美主義、又は汎美論（別項）と區別すべきである。一般に唯美主義の名稱乃至意義は特に十九世紀中葉以後興つた實際の文學乃至繪畫上の主張となり、他方積極的な主張者として、又主張の實現者としてのオスカア・ワイルドの如き特異な文人が出現すると共に、文學上の「人生のための藝術」と「藝術のための藝術」兩者間の論議が、十九世紀の唯物的、自然主義的文明乃至生活態度に對する反動として盛んに行はれるに至つて、唯美主義或は藝術至上論の意義が表面に押し出されて來たのであるが、大體に於て生活態度に於ける享樂主義、美の理論として感覺主義乃至形式主義は、唯美主義の生活態度なり、又その理論的主張の素地を作すものと見るべきで、從つて唯美主義的なる生活、或はそれに近似する主張は、古い文明の世紀の間にも見出し得べきである。一般的に謂ふならば、美を以て最高の價値乃至人生唯一の目的であるとする態度を云ひ、從つて現實生活に於てもこの美の實現乃至生活の藝術化を行ふといふところに唯美主義の理論的歸結があり、こゝで所謂美とは寧ろ官能的美であり、藝術の美であるから、生活に於ては、勢ひ享樂的な、或は官能的な生活態度としてあらはれる。生活上の道德的諸條件をも藝術化するといふ徹底的な唯美主義者及びその主張を、英國のオスカア・ワイルドの生活及び彼の諸作及び論文に見ることが出來るが、美を無上の理想とする理論上の先驅は、ラファエル前派の畫家達、佛蘭西の詩人ボードレール、文人ユイスマンス、或は英國の詩人スウィンバーン、モーリス、ペーター等である。彼等の主張の特色を擧げるならば、（一）美は道德的規準の外にありとする。（二）官能的感覺的側面、卽ち直觀的側面に美乃至藝術の意味の重點を置く。（三）形式主義である。（四）卑俗を排し、貴族的高踏的である。（五）意力よりも理智を尊ぶ。（六）自然的であることよりも人工的技巧的であることを尊ぶ。（七）一般的よりも特殊的異常を悅ぶ。これ等の主張を知るに足る代表的著作は、前記ワイルドの小說「ドリアン・グレイの肖像」、ユイスマンスの「ア・ルブール」であつて、特に前者の主人公の生活態度乃至生活感は、恐らくワイルドの抱懷した思想を如實に語るものであらう。我が國では谷崎潤一郎の初期の作品の中にその近似のものを見出すことが出來る。〔村田〕

唯物論的美學（ゆゐぶつろんてきびがく）　「社會學的美學」を見よ。

幽遠隨筆（いうゑんずゐひつ）　隨筆　二卷　【著者】入江昌喜　【刊行】安永三年　【解說】近世の俗語俚言の所據を古代の草紙・物語・歌集等に考證し、おもひなし・ぞめく・あやかる・だてら・きもつぶすの類の詞の古意を示し、又和歌俳諧談を交へ、所々に自家の小品文・和歌・俳句を挿んである。考說には僻見も交つてゐるやうであるが、語學文學の研究家に參考の料とはなる。甲午七夕（安永三年）丹叟の題辭及び自序がある。

【著者小傳】幼名半二郎、號は白澤老人、又は獅子童。通稱は榎並屋五郎兵衞。大阪の賈人である。文學を好み俳句に長じた。隱居後高津に住して幽遠窟と稱し、國學に精進した。寬政十二年八月歿す。享年七十五。「萬葉類葉抄」「異名分類抄」「久保之取蛇尾」等の著述がある。〔和田〕

遊翁（いうおう）　「幸典」（きかうでん）を見よ。

夕顏（ゆふがほ）　「源氏物語物の譜曲」を見よ。

遊戲（いうぎ）　風俗【總說】香・茶等の諸種の遊戲に關して說明し、また各種遊戲に關する書籍を類聚してあるものには、正續群書類從遊戲部・古事類苑遊戲部・嬉遊笑覽・類聚近世風俗志・雜藝叢等がその主なるものである。

【茶道】茶道に就いて略說したものには、近くは水野翠香氏著の「茶道と香道」（家庭百科全書第五篇）、「舊儀十六式圖譜」（裝飾）の抹茶席飾・前茶席飾及びその解說、今泉雄作・小森彥次兩氏著の「茶道及び香道」（日本風俗史講座）等がある。喫茶の源流に關しては、僧榮西の「喫茶養生記」（群書類從三六八）、僧玄慧の「喫茶往來」（同上）、三谷宗鎭の「和漢茶誌」「茶譜」、前田夏蔭の「木芽（このめ）說」、黑川眞道の「日本喫茶史料」（茶道寶鑑附錄）等に詳かである。茶道に就いては、紹鷗の「袋棚記」（續群書類從五六八）「茶湯百首」（同上）、千利休の「臺子かざり樣之記」（同上）「客之次第」（同上）、古織部の「茶道祕傳」（同五七〇）「喫茶雜話」（同上）「南方錄」、默々齋主人の「茶道筌蹄」「貞要集」「草人木」「茶道正傳集」、山田宗徧編の「茶道便蒙抄」「茶道要錄」、藤村庸軒說・久須美素庵編の「茶話指月集」「同別集」、珍阿の「茶道早合點」（日本教育文庫衞生及遊戲篇）「茶式花月集」等がある。茶器には、能阿彌の「君臺觀左右帳記」（群書類從三六一）、林宗二の「茶器名物集」（續書類從五六九）、尾形乾山の「古今名物類聚」三篇、湖月翁の「茶家醉古集」「辨玉集」、菊木嘉保の「萬寶全書」、宮崎幸麿編の「茶道寶鑑」、今泉雄作の「日本陶瓷史」「茶器の見方」、小森彥次の「高麗茶碗と瀨戶の茶入」等がある。又茶人に關しては「茶之湯六宗匠傳」「茶人系傳」「茶人大系譜」、鈴木政通の「古今茶人系譜」「古今茶人花押藪」等があり、茶湯に關する古人のことを記したものに、久保利世の「長閑堂記」（續群書類從五六七）、沂松茂矩の「茶湯古事談」等がある。また前茶には、大典禪師の「茶經詳說」、上田秋成の「清風瑣言」、田能村竹田の「竹田莊泡茶決」、賣茶東牛の「前茶綺言」（日本教育文庫衞生及遊戲篇）、大枝芳流の「煎茶仕用集」、今村了庵の「前茶圖式」、深田精一の「木石居前茶訣」「前茶早指南」「前茶略說」等流活花口傳」「正風遠州流插花獨稽古」「挿花さくらの香」（未生流）、曉鐘成の「生花早滿奈比」等がある。【圍碁】圍碁に關する書二三を擧げると、「圍碁式」（群書類從三六〇）「圍碁口傳」（同上）、秋山正廣の「新撰碁經大全」、本因坊元丈の「古碁樞機」、船橋元美の「碁經衆妙」等がある。【將棊】將棊に關する書には、本因坊丈

ためにする所の心身の勢力の自由な發動であり、これは常に心身に快を與へる。この點からして美又は藝術の翫賞的創造的方面を說明する諸說を遊戲說といふ。その二三をあげれば、（一）スペンサー說。遊戲の本質は生活が直接に要求しない餘剩勢力（エネルギー）の自由な發現である。かくして美的快感の非現實がないから常に遊戲は藝術ではない。遊戲が幻覺化される時、それ〴〵の感官的形式に從つて繪畫・音樂等の藝術が生ずるとして、美意識活動との性質的類似を說く。以上藝術と遊戲との類似を以て藝術の發生を說き、或はその意識活動の性質と一致せしめんとすることは困難である。（藝術の起源・遊戲本能參照）

作の一篇であることは爭へない。（千葉・高須）

唯美主義（ゆいびしゅぎ）藝術論（英）Aestheticism.（佛）Esthétisme.【附說】耽美主義と訳すも可。美的直觀（觀照）の認識論的意義を究明して美又は藝術の獨自的性質に說き及ぼし、藝術創造の初源的發現を遊戲本能（別項參照）から說く。同じく生活維持の作用と直接に結合しない、目的なき、活動の快感と美的快感との類似を認めるものにグラント・アレン、シラー、ワラシェク等がある（生理學的美學、人類學的美學參照。（一）シラー說。美の假象性に關聯して遊戲衝動を說く。彼によれば人間には二つの要求がある。（1）現實に向ふ欲求、（2）假象（別項）に向はんとする欲求。前者は生活の要求で、後者は遊戲の欲求。而して遊戲せんとする心の特徴は自由であり、無礙な活動であり、生活餘利力の奔出である。この欲求の存するところには常に現實よりも自由な境地があり、現實實在よりも優越する傾きがある。かくして假象は少くとも現實そのままでなく優越すると說く。（三）グローセ說（人類學的美學參照。グロースの遊戲說（同）の見解に制限を加へ、美的活動との差異點を說いてゐる。藝術活動は自己目的的活動で直接な感情價値を有つてゐる。併し遊戲は快感をその活動過程の中に有する點に於てこれと似てゐるが、必ずしも無目的的ではない。生活の實行實現過程の手段として活動するといふ（遊戲本能參照。（三）ランゲ說（幻覺說參照）。遊戲は人間の自由意志的活動で、快感性を有する點で藝術と似てゐる。實際的關心による快感ではない。併し遊戲には意識的自己錯覺があるが、一般に遊戲は目的的結果實現のためでなく、活動することそれ自身の興味のために爲す所の心身の勢力の自由な發動である。これは常に心身に快を與へる。この點から遊戲と藝術の類似を以て藝術の發生を說き、或はその感官的形式に從つて繪畫・音樂等の藝術が生ずるとして、美意識活動との性質的類似を說く。以上藝術と遊戲との類似を以て藝術の發生を說き、或はその意識活動の性質と一致せしめんとすることは困難である。（藝術の起源・遊戲本能參照）

【參考】深田康算全集第三卷）〔村田〕

有機美（いきびしゅぎ）美學【解說】觀念論的美學では美を合目的性の上から說くことから、美の如き美に對して積極的價値をおかない。ハルトマンの如きも、感官的快適もしくは無意識形式美とか、數學的量的形式が與へる美とかいふ如きは非有機物の美として、形式上合目的的法則を有するが、その內容として合目的性を有せぬものとして、積極的の合目的美の如きものと區別する。即ち有機體が與へる形式美は、その內容に於て積極的合目的的法則を有するといふ點で眞の美的假象である（美的階段參照）。フォルケルト美學に於てもこの假象の世界を有機的統一を持つ世界であるとし、有機的統一の原理を擧げて美的規範としたる（美的規範參照）。なほ美的假象・美的合目的性を見よ。〔村田〕

遊戲本能（ゆうぎほんのう）美學（獨）Spiel-triebe.【解說】藝術活動の本質、或は藝術の起原を遊戲衝動から說明しようとする說は、既にプラトーに覗はれ、シラー、グロース、グローセに見られる（遊戲說參照）。モイマンは遊戲と藝術的活動との相異點を擧げてゐる。（一）藝術的活動は存續的作品を產出し、作品

は生活の外にありとする。（二）官能的感覺的美は道德的規準の外にありとする。（三）官能的感覺的美は生活及びその主張を、英國のオスカア・ワイルドの外、ラファエル前派の藝家達、佛蘭西の詩人ボードレール、文人ユイスマンス、或は英國の詩人スウィンバーン、モーリス、ペーター等である。彼等の主張の特色を顯げるならば、（一）美は

夕顏（ゆうがお）「源氏物語」の「夕顏」を見よ。

遊翁（ゆうおう）「幸田露伴」を見よ。

寬政十二年八月歿す。享年七十五。「萬葉類葉抄」「異名分類抄」「久保之取蛇尾」等の著述がある。〔和田〕

夕顏（ゆうがお）「源氏物語」の「夕顏」を見よ。

遊翁（ゆうおう）「幸田露伴」を見よ。

唯美主義（ゆいびしゅぎ）藝術論（英）Aestheticism.（佛）Esthétisme.【附說】耽美主義と訳すも可。美的直觀（觀照）の認識論的意義を究明して美又は藝術の獨自的性質に說き及ぼし、藝術創造の初源的發現的性質に說き及ぼし、藝術創造の初源的發現を遊戲本能（別項參照）から說く。同じく生活維持の作用と直接に結合しない、目的なき、活動の快感と美的快感との類似を認めるものにグラント・アレン、シラー、ワラシェク等がある（生理學的美學、人類學的美學參照。（一）シラー說。美の假象性に關聯して遊戲衝動を說く。彼によれば人間には二つの要求がある。（1）現實に向ふ欲求、（2）假象（別項）に向はんとする欲求。前者は生活の要求で、後者は遊戲の欲求。而して遊戲せんとする心の特徴は自由であり、無礙な活動であり、生活餘利力の奔出である。この欲求の存するところには常に現實よりも自由な境地があり、現實實在よりも優越する傾きがある。かくして假象は少くとも現實そのままでなく優越すると說く。（三）グローセ說（人類學的美學參照。グロースの遊戲說（同）の見解に制限を加へ、美的活動との差異點を說いてゐる。藝術活動は自己目的的活動で直接な感情價値を有つてゐる。併し遊戲は快感をその活動過程の中に有する點に於てこれと似てゐるが、必ずしも無目的的ではない。生活の實行實現過程の手段として活動するといふ（遊戲本能參照。（三）ランゲ說（幻覺說參照）。遊戲は人間の自由意志的活動で、快感性を有する點で藝術と似てゐる。實際的關心による快感ではない。併し遊戲には意識的自己錯覺があるが、一般に遊戲は目的的結果實現のためでなく、活動することそれ自身の興味のために爲す所の心身の勢力の自由な發動である。これは常に心身に快を與へる。この點から遊戲と藝術の類似を以て藝術の發生を說き、或はその感官的形式に從つて繪畫・音樂等の藝術が生ずるとして、美意識活動との性質的類似を說く。以上藝術と遊戲との類似を以て藝術の發生を說き、或はその意識活動の性質と一致せしめんとすることは困難である。（藝術の起源・遊戲本能參照）

【參考】深田康算全集第三卷）〔村田〕

有機美（いきびしゅぎ）美學【解說】觀念論的美學では美を合目的性の上から說くことから、美の如き美に對して積極的價値をおかない。ハルトマンの如きも、感官的快適もしくは無意識形式美とか、數學的量的形式が與へる美とかいふ如きは非有機物の美として、形式上合目的的法則を有するが、その內容として合目的性を有せぬものとして、積極的の合目的美の如きものと區別する。即ち有機體が與へる形式美は、その內容に於て積極的合目的的法則を有するといふ點で眞の美的假象である（美的階段參照）。フォルケルト美學に於てもこの假象の世界を有機的統一を持つ世界であるとし、有機的統一の原理を擧げて美的規範としたる（美的規範參照）。なほ美的假象・美的合目的性を見よ。〔村田〕

遊戲本能（ゆうぎほんのう）美學（獨）Spiel-triebe.【解說】藝術活動の本質、或は藝術の起原を遊戲衝動から說明しようとする說は、既にプラトーに覗はれ、シラー、グロース、グローセに見られる（遊戲說參照）。モイマンは遊戲と藝術的活動との相異點を擧げてゐる。（一）藝術的活動は存續的作品を產出し、作品

のための目的的活動である。遊戯には生産はない。(二)遊戯は一時的な氣晴し、娯樂である。藝術活動は藝術家にとつて生活任務である。(三)藝術創作に於ては作家は技術・材料・手段等によつて制約されて作品を創るが故、實際的に一つの人間的勞作である。グロースは遊戯が無目的活動であると解釋されることに反對するが、併しヒルンも云ふ如く、藝術活動に於ては何かが作られ、何物かが存續するのである。【村田】

結城孫三郎（ゆふきまごさぶらう）「說經淨瑠璃」を見よ。

遊京漫錄（いうきやうまんろく）隨筆　二卷　【著者】清水濱臣　【諸本】百家說林正編所收。【解說】文政三年二月から九月まで著者が上方に旅行した時の紀行を上卷とし、旅中諸地方で見聞した雜話を「旅路の打聞」と題し、下卷としてある。下卷は卽ち隨筆で、大和宇智川佛像・有馬溫泉寺法華經・萬葉集莫賣圓隣解・眞宇平家物語・行基式目・蓮如上人子守歌・古抄本三十六人集・豐崎文庫尙書・和名抄古抄本・荒木田麗女著述目錄・類聚名義抄・石川年足朝臣の墓誌・養和の帝のあやしの傳等、又大洲の大男・難波の夜發・大湊の烈女・多田の奇童・白髮炯の恠・西扇屋花紫等、雅俗さまざまの記事を收めてゐる。前半は讀書家の參考に資すべきこと多きは言ふまでもないが、後半の奇聞も能文家の筆のさえを見せて面白い。自序一篇がある。【和田】

夕霧（ゆふぎり）所作事　淨瑠璃物　【解說】大阪新町の扇屋夕霧は、全盛をうたはれた太夫であつたが、延寶六年正月六日に二十七歳で歿した。大阪ではこの噂で持ちきつてゐたが、同地荒木與次兵衞座では早速これを仕組み、翌二月三日初日で、「夕霧名殘の正月」と題して演じた。伊左衞門に扮した坂田藤十郎の傾城買の仕打が大出來で大喝采を博し、これが實に藤十郎の出世藝でもあつた。この夕霧劇は同年內に四度繰返し、その後年忌々々に夕霧劇を演じ、藤十郎は生涯に十八度も同種の劇を演じたと傳へる。その後、操淨瑠璃にも、歌舞伎にも種々作られたが、就中、寶永七年七月（一說に正德元年頃）大阪竹本座上場の近松門左衞門作「夕霧阿波鳴渡」（別項）の上卷吉田屋の段が、後の歌舞伎や淨瑠璃の夕霧物の原作である。又この吉田屋の段の詞章を殆どそのまゝ流用し、夕霧伊左衞門の口說の後に、夕霧の身請を簡略に附加して一段物に纏めたのが、宮古路豐後掾の正本「夕霧阿波鳴渡」で、後の豐後諸流の夕霧物の原據である。更に後世（現行も）の「ゆかりの月」入りの吉田屋の手本となつたのは宮薗節の「伊左衞門夕霧ゆかりの月見」で、豐後諸流はもとより、義太夫節の「廓文章」（安永九年作か）でさへ、その詞章は勿論、曲節までこれを利用して作つてゐるのである。【沿革】豐後節系統の夕霧物では、享保二十年二月江戸中村座で、一中節と宮古路節との掛合で演じた「夕霧吾妻の關路」が最も古い。次いで元文四年春大阪大西芝居で、宮古路豐後掾が「女夫鶴現の床」を語つてをり、江戸でも元文から寬延に亙つて宮古路節や一中節の夕霧物は數種あるが、常磐津節では寶曆五年九月市村座所演の「夕霧阿波鳴渡」が古く、富本節では同三年七月中村座所演のが古い。これ等の夕霧物の詞章には、まだ「ゆかりの月」が挿入されてゐないが、一說には長唄の「ゆかりの月」（寶曆七年正月刊、「女里爾壽豐年藏」所收）が既に用ひられてゐたともいふ。「ゆかりの月」が取入れた代表作は、その後に出來た「其扇屋浮名戀風」（後出）と「春夜障子梅」（後出）とである。爾來、常磐津には「文紙衣姿不二屋」（寬政五年二月中村座）や富本には「文紙子風やとくらん」（安永七年二月市村座）「ちゞゆかりの月」（天明七年十一月中村座）「今樣冬籠廓水仙」（寬政七年正月都座）等が現はれたが、享保以降のこれ等夕霧物は殆ど或る狂言中の一齣をなし、役名の如きも曾我十郎、又は團三郎、その他新田義貞・武部源左衞門等が、劇中劇の形式、或は今樣の役人として、假に伊左衞門・夕ぎりとなつて演ずるもので、後世の如き全く獨立したものではなかつた。これが現行の「ゆかりの月」挿入の吉田屋、卽ち「廓文章」の如く變つたのは、前述の如く京阪に於て、宮薗節によつて演じられたのが最初であるが、義太夫節でこれを江戸で演じたのは文化二年閏八月中村座所演の「太夫暫由緣月視」（竹本河內太夫の一世一代）が最初で、藤屋伊左衞門（三代坂東三津五郎）・扇屋夕霧（四代瀨川路考）等で演じた。「廓文章」の名題では、文化五年十月中村座所演が初めで、又竹本と豐後節との掛合では文化十一年十一月中村座所演の「夕霧廓文章」が初めであり、三方掛合では明治六年十一月村山座所演の「廓文章」が初めであつた。爾後、地方の何流に限らず、名題は殆ど「廓文章」に一定されて今日に及んでゐる。而して現行の「廓文章」は義太夫を中心に、夕霧の出からは常磐津或は清元と掛合になるのが普通である。【內容】師走の末つ方、九軒の吉田屋は嘉例の餅搗で賑かである。扇屋の夕霧に深く馴染んで遂に勘當された藤屋伊左衞門が、冬編笠に紙衣を着け尾羽打ち枯らした見すぼらしい姿でこの家を訪れる。亭主喜左衞門が喜び迎へて內へ請じ入れる。炬燵に身を暖めて吉田屋夫婦の好遇を喜んだ伊左衞門はやがて夕霧が事を尋ねるが、病中ながら阿波大盡に身請されるので隣座敷で大盡と會つてゐると聞き、怒つて悶え泣く所へ、病に惱み戀に泣く夕霧が出て來て、煩うて痩に死ぬ身であつたと口說く。伊左衞門は一時、萬歲傾城と夕霧を罵つたが、その眞情が分つて心も解ける。此處へ藤屋の親元が勘當を許し、夕霧の身代金八百兩が運ばれる。近頃では二人の口說へ幇間が搦むのが型になつてゐる。代表曲を次に擧げる。

夕霧　（三代三津五郎所演）

【春夜障子梅】富本　【角書】夕ぎり伊左衞門　【通稱】「障子梅」「夕霧」。【初演】天明四年閏正月二十八日初日、森田座「初暦閒曾我」第一番目大詰。【作詞】寶田壽來　【作曲】佐々木市四郎　【振附】二代藤間勘兵衞　【傳來】曲のみ傳存。富本節名曲の一。【役割】扇子屋伊左衞門（四代松本幸四郎）、同女房おやす（芳澤五郎市）等。

因みに後清元節にそのまゝ移調されて現に行はれてゐる。

【其扇屋浮名戀風】常磐津　【角書】夕ぎり伊左衞門　【通稱】夕霧　【初演】寬政二年六月市村座「四季房おかな（四代芳澤あやめ）、傾城夕霧（三枡德次郎）、吉田屋喜左衞門（市川幾藏）、同女房おやす（芳澤五郎市）等。

因みに後清元節にそのまゝ移調されて現に行はれてゐる。

【其扇屋浮名戀風】常磐津　【角書】夕ぎり伊左衞門　【通稱】夕霧　【初演】寬政二年六月市村座「四季

璃集所收。【題材】大阪新町扇屋の遊女夕霧は「みをつくし」にその傳が詳しく、又西鶴の「一代男」や「二代男」にも出てゐる名妓であるが、その延寶六年正月六日二十七歳を以て歿するや、翌二月三日から大阪の荒木與次兵衞座で「夕霧名殘の正月」といふ追善劇が行はれた。その時、坂田藤十郎の伊左衞門の傾城買左衞門の母妙順から使があり、嫁夕霧を請出して家に迎へ取るとの知らせに一同悅びの聲を揚げる。

【構想】本作には敵役といふものがなく、隨つて筋の劇的な展開といふ點から見れば頗る單調であるが、併し全體を蔽うてゐる甘美な感傷的哀調は、本作をして一篇の抒情詩たらし

佐藤一齋と問答の事等を收めてゐる。按ずるに著者の隨筆は、この二年の筆のみに止まらなかつたであらう。併し今はこの外のものは傳はらない。

【著者小傳】川路聖謨は、德川幕府末期の名吏で、初名彌吉、後三右衞門、出仕の後左衞門尉と稱した。諸文を歷て大坂町奉行となり、更

物語・行基式目・建如上人子守歌・古抄本三十六人集・豐崎文庫尚書・和名抄古抄本・荒木田麗女著述目錄・類聚名義抄・石川年足朝臣の墓誌・養和の帝のあやしの傳等、又大洲の大男・難波の夜發・大湊の烈女・多田の奇童・白髪炯の悼・西扇屋花紫等、雅俗さまざまの記事を收めてゐる。前半は讀書家の參考に資すべきこと多きは言ふまでもないが、後半の奇聞も能文家の筆のさえを見せて面白い。自序一篇がある。

（和田）

夕霧（ゆふぎり）所作事　淨瑠璃物【解說】大阪新町の扇屋夕霧は、全盛をうたはれた太夫であつたが、延寶六年正月六日に二十七歳で歿した。大阪ではこの噂で持ちきつてゐたが、同地荒木與次兵衞座では早速これを仕組み、翌二月三日初日で、「夕霧名殘の正月」と題し

（安永七年二月市村座所演）

のまゝ流用し、夕霧伊左衞門の口說の後に、夕霧の身請を簡略に附加して一段物に纏めたのが、宮古路豐後掾の正本「夕霧阿波鳴渡」で、後の豐後諸流の夕霧物の原據である。更に後世（現行も）の「ゆかりの月」入りの吉田屋の手本となつたのは宮薗節の「伊左衞門夕ぎりゆかりの月見」で、豐後諸流はもとより、義太夫節の「廓文章」（安永九年作か）でさへ、その詞章は勿論、曲節までこれを利用して作つてゐるのである。

【沿革】豐後節系統の夕霧物では、享保二十年二月江戸中村座で、一中節と宮古路節との掛

霧物は殆ど或る狂言中の一齣をなし、役名の如きも曾我十郎、又は團三郎、その他新田義貞・武部源左衞門等が、劇中劇の形式、或は今様の役人として、假に伊左衞門・夕ぎりとなつて演ずるもので、後世の如き全く獨立したものではなかつた。これが現行の「ゆかりの月」挿入の吉田屋、即ち「廓文章」の如く變つたのは、前述の如く京阪に於て、宮薗節によつて演じられたのが最初であるが、義太夫節でこれを江戸で演じたのは文化二年閏八月中村座所演の「太夫暫由緣月視」（竹本河内太夫の一世一代）「ゆかりの月」（天明七年十一月中村座）「今様冬籠廓水仙」（寬政七年正月都座）等が現はれたが、享保以降のこれ等夕ねるが、病中ながら阿波大盡に身請されるので隣座敷で大盡と會つてゐると聞き、怒つて悶え泣く所へ、病に惱み戀に泣く夕霧が出て來て、煩うて疾に死ぬ身であつたと口說く。伊左衞門は一時、萬歲傾城と夕霧を罵つたが、その眞情が分つて心も解ける。此處へ藤屋の親元が勘當を許し、夕霧の身代金八百兩が運ばれる。近頃では二人の口說へ幇間が搦むのが型になつてゐる。代表曲を次に擧げる。

【春夜障子梅】富本（角書）夕ぎり伊左衞門【通稱】「障子梅」「夕霧」。【初演】天明四年閏正月二十八日初日、森田座「初暦閒曾我」第一番目大詰。【作詞】寶田壽來【太夫】富本齋宮太夫【作曲】佐々木市四郎【振附】二代藤間勘兵衞【傳來】曲のみ傳存。富本節名曲の一。

【役割】扇子屋伊左衞門（四代松本幸四郎）、同女房おます（芳澤五郎市）等。

因みに後淸元節にそのまゝ移調されて現に行はれてゐる。

【其扇屋浮名戀風】（そのおうぎやうきなのこひかぜ）常磐津（角書）夕ぎり伊左衞門【通稱】「風流彩色扇」（ふうりうさいしきあふぎ）冬「阿波鳴渡」【作詞】增山金八【太夫】二代常磐津兼太夫【作曲】岸澤式佐【振附】二代西川扇藏【傳來】曲のみ傳存。

【役割】藤屋伊左衞門（三代澤村宗十郎）、扇屋夕霧（中山富三郎）、吉田屋喜左衞門（中島和田右衞門）、同女房おます（瀨川璋吉）。

【諸本】常磐津・富本正本。日本歌謠集成卷十・歌謠音曲集（日本名著全集）・日本音曲全集（三・九・一三）・舞踊劇集（日本戲曲全集）・世話狂言傑作集第八卷所收。

【參考】劇代集二代櫻田左交○近世邦樂年表○江戸時代音樂通解 町田博三○廓文章の沿革 町田博三（演藝畫報六ノ一二○夕霧の變遷秋葉芳美（人間と舞臺三ノ一二○演劇評論小宮豐隆○舞臺觀察手引草 杉贋阿彌○歌舞伎圖說 守隨憲治・秋葉芳美共編○淸元研究 忍頂寺務（秋葉）

夕霧阿波鳴渡（ゆふぎりあはのなると）淨瑠璃 三段 世話物【作者】近松門左衞門【興行】竹本座。明和板「外題年鑑」に、寶永七年七月二十四日の初日としてあるが、正德元年秋板行の「鸚鵡が袖」に見えず、翌二年九月板行の「鸚哥が蘭」に初めて見えて居り、且つ本作の最後に、「扇屋夕霧憂ひ却つて悦びを語り傳へて三十五年」とあるから、夕霧歿後の三十五年目正德二年正月の興行と推定されてゐる。【諸本】八・九行三十丁本、七兵衞・喜右衞門板。八行三十六丁本、山本九兵衞板。諸種の近松淨瑠璃集所收。【題材】大阪新町扇屋の遊女夕霧は「みをつくし」にその傳が詳しく、又西鶴の「二代男」や「二代男」にも出てゐる名妓であるが、その延寶六年正月六日二十七歳を以て歿するや、翌二月三日から大阪の荒木與次兵衞座で「夕霧名殘の正月」といふ追善劇が行はれた。その時、坂田藤十郎の伊左衞門の傾城買が非常な大出來で、これが藤十郎の當り藝となり、彼の一生の間にこの狂言が十八度も繰り返された。この外にも、貞享元年に近松作の「夕霧七年忌」が上演せられ、淨瑠璃の方では、貞享三年五月同じく近松作の「三世相」（夕霧三世相・遊君三世相・夕霧追善物語）が竹本座で興行された。本作は「夕霧名殘の正月」に據つたものらしい。

【梗概】（上之卷）（吉田屋）大阪新町扇屋の遊女夕霧は藤屋伊左衞門と深く契つて子までも儲けたが、伊左衞門が勘當となつたので、その子を伊左衞門と張合つた阿波の侍平岡左近に塗りつけて引取らせる。夫婦の間に子のない左近は深くこれを寵愛し、妻の雪も亦夕霧を乳母として家に迎へようと、小姓奏に身を變して吉田屋に到り、夕霧を招き身請の手管を決める。（中之卷）（平岡左近寓居）身請されることになつた夕霧が吉田屋喜左衞門に伴はれて左近方に赴く際、伊左衞門はその駕籠昇となつて共に入り込み、密かに親子の對面をする。この有樣を窺ひ見た左近は怒つて親子三人を追ひ拂ふ。喜左衞門は已むなく、悲しみに沈む夕霧を勞はりながら扇屋へ連れ歸る。（下之卷）（扇屋）夕霧は傷心の餘り病重くなり、既に命旦夕に迫る。そこへ伊左衞門親子が「相の山」を謠ひながら扇屋の表口に來り、蔭ながら今生の別を惜しむ。折から伊左衞門の母妙順から使があり、嫁夕霧を請出して家に迎へ取るとの知らせに一同悅びの聲を揚げる。

【構想】本作には敵役といふものがなく、隨つて筋の劇的な展開といふ點から見れば頗る單調であるが、併し全體を蔽うてゐる甘美な感傷的哀調は、本作をして一篇の抒情詩たらしめてゐる。編笠に紙衣姿の伊左衞門は、恐らく藤十郎の面影を偲ばしめたものであらう。

【影響】改作物には寬延四年四月二十五日より豐竹座上場の「浪花文章夕霧塚」、明和五年六月一日より竹本座上場の「傾城阿波の鳴門」（別項）があるが、何れも原作の面影を止めぬ改惡の甚だしいものである。安永九年に作られた「廓文章」は原作の趣を傳へたもので、操にも歌舞伎にも今日に至るまで屢々繰返されてゐる。この外、豐後節に「夕霧阿波鳴渡」、富本節に「春夜障子梅」、常磐津に「其扇屋浮名戀風」がある。

（高野（正））

【參考】近松世話淨瑠璃詳解 高野辰之○近松傑作全集卷之一 解題 水谷不倒○大近松全集第十卷 解說 木谷蓬吟○近松名作集下 解題 黑木勘藏○近松全集第九卷 解題 藤井乙男

夕霧阿波鳴渡（ゆふぎりあはのなると）淨瑠璃 三段 世話物【作者】近松門左衞門【興行】竹本座。明和板「外題年鑑」に、寶永七年七月二十四日の初日としてあるが、正德元年秋板行の「鸚鵡が袖」に見えず、翌二年九月板行の「鸚哥が蘭」に初めて見えて居り、且つ本作の最後に、「扇屋夕霧憂ひ却つて悦びを語り傳へて三十五年」とあるから、夕霧歿後の三十五年目正德二年正月の興行と推定されてゐる。【諸本】八・九行三十丁本、七兵衞・喜右衞門板。八行三十六丁本、山本九兵衞板。諸種の近松淨瑠璃集所收。【題材】大阪新町扇屋の遊女夕霧は「みをつくし」にその傳が詳しく、又西鶴の「二代男」や「二代男」にも出てゐる名妓であるが、その延寶六年正月六日二十七歳を以て歿するや、翌二月三日から大阪の荒木與次兵衞座で「夕霧名殘の正月」といふ追善劇が行はれた。その時、坂田藤十郎の伊左衞門の傾城買が非常な大出來で、これが藤十郎の當り藝となり、彼の一生の間にこの狂言が十八度も繰り返された。この外にも、貞享元年に近松作の「夕霧七年忌」が上演せられ、淨瑠璃の方では、貞享三年五月同じく近松作の「三世相」（夕霧三世相・遊君三世相・夕霧追善物語）が竹本座で興行された。本作は「夕霧名殘の正月」に據つたものらしい。

【梗概】（上之卷）（吉田屋）大阪新町扇屋の遊女夕霧は藤屋伊左衞門と深く契つて子までも儲けたが、伊左衞門が勘當となつたので、その子を伊左衞門と張合つた阿波の侍平岡左近に塗りつけて引取らせる。夫婦の間に子のない左近は深くこれを寵愛し、妻の雪も亦夕霧を乳母として家に迎へようと、小姓奏に身を變して吉田屋に到り、夕霧を招き身請の手管を決める。（中之卷）（平岡左近寓居）身請されることになつた夕霧が吉田屋喜左衞門に伴はれて左近方に赴く際、伊左衞門はその駕籠昇となつて共に入り込み、密かに親子の對面をする。この有樣を窺ひ見た左近は怒つて親子三人を追ひ拂ふ。喜左衞門は已むなく、悲しみに沈む夕霧を勞はりながら扇屋へ連れ歸る。（下之卷）（扇屋）夕霧は傷心の餘り病重くなり、既に命旦夕に迫る。そこへ伊左衞門親子が「相の山」を謠ひながら扇屋の表口に來り、蔭ながら今生の別を惜しむ。折から伊左衞門の母妙順から使があり、嫁夕霧を請出して家に迎へ取るとの知らせに一同悅びの聲を揚げる。

【構想】本作には敵役といふものがなく、隨つて筋の劇的な展開といふ點から見れば頗る單調であるが、併し全體を蔽うてゐる甘美な感傷的哀調は、本作をして一篇の抒情詩たらしめてゐる。編笠に紙衣姿の伊左衞門は、恐らく藤十郎の面影を偲ばしめたものであらう。

【影響】改作物には寬延四年四月二十五日より豐竹座上場の「浪花文章夕霧塚」、明和五年六月一日より竹本座上場の「傾城阿波の鳴門」（別項）があるが、何れも原作の面影を止めぬ改惡の甚だしいものである。安永九年に作られた「廓文章」は原作の趣を傳へたもので、操にも歌舞伎にも今日に至るまで屢々繰返されてゐる。この外、豐後節に「夕霧阿波鳴渡」、富本節に「春夜障子梅」、常磐津に「其扇屋浮名戀風」がある。

【參考】近松世話淨瑠璃詳解 高野辰之○近松傑作全集卷之一 解題 水谷不倒○大近松全集第十卷 解說 木谷蓬吟○近松名作集下 解題 黑木勘藏○近松全集第九卷 解題 藤井乙男

夕霧追善物語（ゆふぎりつゐぜんものがたり）「三世相」を見よ。

遊君三世相（いうくんさんぜさう）「三世相」を見よ。

遊藝園隨筆（いうげいゑんずひつ）隨筆 一卷【著者】川路聖謨【諸本】百家說林續編・日本隨筆大成卷五所收。【解說】天保七・八の兩年、著者が幕府勤役中に見聞した事や感じた事二十八條を記した小册子で、誠恪謹愼を以て勤仕の心掛とするために、この書を見て自ら諫めようとする趣が卷頭の一條に述べてある。當時の老中大久保加賀守の事、大鹽平八郎暴擧の事、寶曆の頃三絃の名手原武太夫の事、佐藤一齋と問答の事等を收めてゐる。按ずるに著者の隨筆は、この二年の筆のみに止まらなかつたであらう。併し今はこの外のものは傳はらない。

【著者小傳】川路聖謨（としあき）は、德川幕府末期の名吏で、初名彌吉、後三右衞門、出仕の後左衞門尉と稱した。諸役を歷て大阪町奉行となり、更に勘定奉行となつた。天保六年、江戸町奉行脇坂氏を輔け、仙石家の疑獄を斷じて名譽を得た。嘉永六年、露國使節と折衝してこれを退去せしめた。その後西城留守居に遷り、安政の獄に坐して罷められた。明治元年三月十五日、世事の非なるを見て憤死した。享年七十二。大正元年從四位を贈られた。

（和田）

幽玄（いうげん）文學論【解說】幽玄の語は本來漢語であり、その原義は物の本質的生命的なるものを指したのであらう。唐の駱賓王の「螢火賦」に、「委性命兮幽玄、任物理兮推遷」（文體明辨卷五所收）とあり、又「臨濟錄」に「佛法幽玄」とあるのを見ても、理性的なものに對する生命的なものであり、流動するものに對する不易的本質的のものであつたのである。併し日本に入つて、日本文學論の重要な理念となるまでには、幾度かの意味の變遷があつたが、大體これを四期に分ち得る。（第一）平安時代の文獻では、「古今集」眞名序に「或事關神異、或興入幽玄」とあるのが初めであらう。併し眞名序の成立には多少異見もあるので、天慶八年撰とある「忠岑十體」の中の高情體の說明に、「此體詞雖風流、義入幽玄」とあるのが注意される。「作文大體」に餘情幽玄體として擧げた「蘭薰宛嵐攜紫後、蓬萊洞月照霜中」を「此等誠幽玄體也」と評したり、又「續千字文」

に「術藝極幽玄、請情儆元白」とあるのは漢詩の批評であるが、幽玄の用ひられた資料として重要なものである。歌の批評では顯輔家歌合に、「見渡せばもみぢにけらし露霜に誰すむ宿のつま梨の木ぞ」を、判者の基俊が「詞雖擬古質之體、義似通幽玄之境」と言つたなどが古いのであるが、前の「忠岑十體」と文意が類似してゐる。これ等平安時代の後期までの文獻に見られる幽玄は、神祕的な意やたけ高い意をさしてゐるやうであるが、意味は必ずしも明瞭でない點がある上に、未だ文學論の基調となるまでに至つてゐない。〔第二〕幽玄が日本文學論や歌論の理念の中心となつてきたのは、餘情としての幽玄論である。これの見られるのは平安後期以後で、餘情の意味と幽玄とが結びついてからであらう。この餘情としての幽玄も「作文大體」に餘情幽玄體とあるから、必ずしも歌論の方の新しい創造ではないであらうが、保守的の公任が「和歌九品」に「餘りの心」といつてから、基俊等に次第に意識されてきて、それを成立したのが俊成である。俊成のみならず西行や長明に於てもこの餘情としての幽玄が文學の最高理念となつたのである。この餘情といふのは、長明の「無名抄」にも、言葉の外の景氣とある如く、知的意味以外にその表現を通して見られる氣分情調的内容ともいふべきものである。それは定家の有心體に於ける心と同樣な氣分象徴的性質をさすのであるが、餘情といふ語が示す如く、餘情の外に情を豫想してゐる所に、定家の理想とした「有心」よりも素材的なものをなほ重んじてゐるのである。さうして俊成によれば餘情としての幽玄は、その象徴内容に於て「たけ高し」「遠白し」等の大きな美と、「心細し」「委さび」等の纖細な美との調和した靜寂美を重んじてゐる。この點に於て、定家の有心が象徴内容として妖艶美を重んじたのと相違する。且つ幽玄の展開に於ても、餘情を重んずる象徴的傾向は一貫して變らないが、象徴内容に於ては變化が見られる。〔第三〕歌論に於ては室町時代に至つて定家の歌風を崇拜した正徹は、定家の有心をそのまゝ幽玄の意味に解したので、幽玄の象徴内容としての氣分情調を艶なる花やかなるものと解し、能樂の世阿彌も正徹とほぼ同樣に解した。〔第四〕正徹門の心敬は、幽玄の象徴内容を心の艶なるものとした爲めに、平淡にして心の深い境地と解したので、幽玄が「冷えさび」の意味となつた。これは同じく能樂に於ける禪竹の幽玄の解釋と同樣であつた。心敬や禪竹の幽玄の解釋が中世文學理念としての幽玄の最後の到達點であつて、この點、近世に於ける芭蕉の俳諧の中心の理念である「さび」と近づくのである。かくて文學理念としての幽玄が餘情を重んじ、氣分象徴的であることは一貫した性質であるが、象徴内容は靜寂・艶麗・平淡といふやうな變化があるのである。

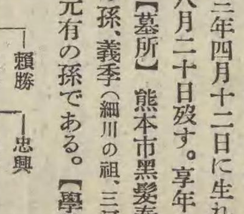
【影響・價値】幽玄は上代の素樸美、中古の調和美に對して、中世の文學理念の中心をなすものであつて、中世の詩歌・小說・戲曲・隨筆等のみならず、中世の藝術・文化・生活を貫いて流れる精神である。中世に於て幽玄が尊重されたのは、上代・中古以來の文學理念の展開の必然的結果として、象徴美としての幽玄が中心となつたのであらうが、一方に中世に於て宗教的影響が著しかつたこと、個性よりも型を重んじ、傳統を尊重したことにも關係があるであらう。さうして幽玄は日本的な思考法としての直觀的態度を根柢とするために、中世のみならず、近世に於ても芭蕉俳諧の根柢となり、小說等に於ける通や「いき」等の中にも流れてゐる。明治以後に於ても文學のみならず、文化や生活の根柢に幽玄的なるものが流れてゐる。進んでは日本文學や民族生活を貫いて民族精神の重要な一要素として存するのである。幽玄の史的價値の大きいとともに美的性質の上から見ても複雜性と純粹性とを併せ有し、壯美と優美とを調和統一せしめてゐる點ですぐれた價値を有するものである。

【參考】國文學を流れる三の精神（久松潛一〔上代日本文學の研究〕）○國文學體系垣内松三編○歌道の幽玄と世阿彌の幽玄（能勢朝次〔潮音昭和三ノ四〕）○幽玄美思潮の深化（齋藏清徳〔國語と國文學昭和三ノ一〇、〇幽玄の妖艶化と平淡化（久松潛一〔國語と國文學昭和五ノ一一・一二〕）〔久松〕

輶軒小錄（いうけんせうろく）　隨筆　一卷　【著者】伊藤長胤（東涯）【解說】本書の自序に、「昔、漢の楊子雲、四方言語の異同をあつめ、輶軒絕代語と云ふ。輶軒と云ふは使の車なり。皇華の使四方へ出で行くに、其國々の詞をきくに依りて、その書に名付けたるなり。予幼にして先子に侍り、四方の士の來り集まるに、其國々の山林・丘陵・草木・鳥獸の奇異珍怪なるを物語するを聞き覺えて、書き記し、又予が世に及びて聞きたる事、予自ら至り見るところ、先後を辨へず書き集めて、輶軒小錄と云ひて、後世子孫の見聞に備ふと云ふこと爾り」と。以て書名の來るところと内容を推知することが出來る。壺碑之事、草生水・火井之事、鹽井之事、越山鵜之事等四十四件を錄し、大體に地理・歷史・碑文に係る事が多い。まゝ挿圖がある。久しく寫本で傳はつた爲めに誤字を交へることが多く、近年活字刊本が出たけれども、なほ完本と言ふことの出來ないのを憾みとする。

【和田】

幽齋（いうさい）　歌人　【姓名】細川氏。但し初めは三淵氏、細川氏の養子となる。晩年長岡を領するに及び、長岡氏と改めた。通稱は萬吉或は與一郎、諱は藤孝。官職の上から細川兵部大輔と稱した。【法號】玄旨。それを以て徹宗玄旨とか玄旨法印など呼ばれてゐる。【生歿】天文三年四月十二日に生れ、慶長十五年（一六一〇）八月二十日歿す。享年七十七【法名】泰勝院【墓所】熊本市黑髮泰勝寺【家系】源義清の孫、義季（細川の祖、三河國細川庄に在り）の後、元有の孫である。【學統】三條西



實枝・同實世に學んだ。門下は甚だ多いが、主なる者に、中院通勝・智仁親王・烏丸光廣・三條西實條・島津義久・松永貞德・木下長嘯子等がある。【閱歷】天文三年、三淵伊賀守晴員（晴貞說は誤か）の第二子として岡崎の父の別墅で生れたと云ふのが一般說である。併し實は將軍義晴の四男であつて、愛妾萬松院に生ませたもの、萬松院がその一子をつれて三淵伊賀守に嫁したので、表面伊賀守の子になつてゐると云ふ異說にも捨て難いものがある。特に五六歲の時、義晴の命で細川播磨守元常の養子となり、八九歲で義晴の小姓に拔擢されたなどは、早く兩人間に特殊關係があつた事を肯定せしむるに足る。天文十五年（十三歲）義輝將軍宣下。義輝より藤の字を與へられ、藤

孝と名乘る。同十六年父と共に義晴に從ひ、北白川城に入り、翌年歸洛す（十九年義晴覺去）。同二十一年（十九歲）三月江州觀音寺城にて「武備百人一首和歌」を詠ず。四月從五位下兵部大輔、同二十二年七月義輝に從ひ、江州朽木谷城して玄旨と號し、田邊城に隱栖した。同十一年（五十歲）安土城に秀吉に謁してその配下となり、後、秀吉のために轉戰。同十三年十月從二位。法印。同十五年秀吉の島津征討に從ひ、四月出立筑紫に到る。「九州道の記」成る。同十六年一月聚落第行幸に歌會を總裁す。同十八年秀吉の小田原征討に從ひ七月病を得て歸

衆妙集（別項）○細川幽齋家集五卷（寫。元祿版の「衆妙集」に同じ）○九州道の記一卷（群書類從卷三三八所收。天正十五年四月二十一日田邊城出立、山陰道の水陸兩路により翌月二十五日箱根に着し、更に七月四日出立して二十三日難波に着した紀行。秀吉の島津征討に從軍した時もの。舊跡に對する興味の外、地方々々で所望されて詠んだ發句も出て居り、

一卷（寫）○細川幽齋弓馬聞書一卷（寫）○名所類字和歌集四卷（寫。類字小名寄とも）○幽齋公歌集三卷松岡元義編（明治四十三年刊。一卷略傳、二卷和歌・紀行・發句、三卷狂歌を輯めてゐる。活字本中、幽齋の作を最も多く收め得たものである）。

【人物・作風】義晴の妾腹とすら噂される身ながら、信長・秀吉・家康と三代に仕へ通したと

いであらうが、保守的の公任が一和歌九品」に「餘りの心」といつてから、基俊等に次第に意識されてきて、それを成立したのが俊成である。俊成のみならず西行や長明に於てもこの餘情としての幽玄が文學の最高理念となつたのである。この餘情といふのは、長明の「無名抄」にも、言葉の外の景氣とある如く、知的意味以外にその表現を通して見られる氣分情調的内容ともいふべきものである。それは定家の有心體に於ける心と同樣な氣分象徴的性質をさすのであるが、餘情といふ語が示す如く、餘情の外に情を豫想してゐる所に、定家の理想とした「有心」よりも素材的なものをなほ重んじてゐるのである。さうして俊成によれば餘情としての幽玄は、その象徴内容に於て「たけ高し」「遠白し」等の大きな美と、「心細し」

諧の中心の理念である「さび」と近づくのである。かくて文學理念としての幽玄が餘情を重んじ、氣分象徴的であることは一貫した性質であるが、象徴内容は靜寂・艶麗・平淡といふやうな變化があるのである。

【影響・價値】幽玄は上代の素樸美、中古の調和美に對して、中世の文學理念の中心をなすものであつて、中世の詩歌・小説・戯曲・隋筆等のみならず、中世の藝術・文化・生活を貫いて流れる精神である。中世に於て幽玄が尊重されたのは、上代・中古以來の文學理念の展開の必然的結果として、象徴美としての幽玄が中心となつたのであらうが、一方に中世に於て宗教的影響が著しかつたこと、個性よりも型を重んじ、傳統を尊重したことにも關係があるであらう。さうして幽玄は日本的な思考法

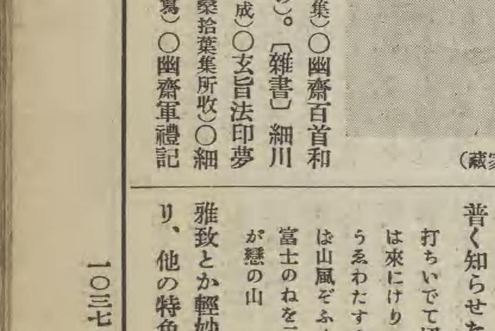
伊藤長胤(東涯)【解説】本書の自序に、「昔、漢の楊子雲、四方言語の異同をあつめ、輶軒絶代語と云ふ。輶軒と云ふは使の車なり。皇華の使四方へ出で行くに、其國々の詞をきくに依りて、その書に名付けたるなり。予幼にして先子に侍り、四方の士の來り集まるに、其國々の山林・丘陵・草木・鳥獣の奇異珍怪なるを物語するを聞き覺えて、書き記し、又予が世に及びて聞きたる事、予自ら至り見るところ、先後を辨へず書き集めて、輶軒小錄と云ひて、後世子孫の見聞に備ふと云ふこと爾り」と。以て書名の來るところと内容を推知することが出來る。壺碑之事・草生水・火井之事、鹽井之事、越山鵜之事等四十四件を錄し、大體に地理・歴史・碑文に係る事が多い。まゝ挿圖がある。久しく寫本で傳はつた爲めに誤字

細川幽齋（南禪寺天授庵蔵）

孝と名乘る。同十六年父と共に義晴に從ひ、北白川城に入り、翌年歸洛す(十九年義晴薨去)。同二十一年(十九歳)三月江州觀音寺城にて「武備百人一首和歌」を詠ず。四月從五位下兵部大輔、同二十二年七月義輝に從ひ、江州朽木谷城に移る。翌年養父逝去。永祿元年(二十五歳)九月義輝に從ひ歸洛。同六年(三十歳)十一月忠興を生む。同八年一月義輝弑せられ、弟覺慶を奉じて近江に走る。翌年覺慶を還俗して義昭と號せしめ、足利再興を計る。同十一年信長その擧に贊し、義昭を奉じて九月入京した。元龜元年(三十七歳)叛軍三好一黨征服のため、攝津に下る。同二年岐阜に入り、信長に謁す。「大原野千句」成る。同三年十二月實枝より「古今傳授」を受く。義昭、信長に恨を持つを諫む。天正元年(四十歳)七月桂川以西に封ぜられ、長岡氏を稱した。義昭は諫言を容れず、信長を討たんとして戰敗れ剃髪した。同四年大阪に一向徒を攻む。再度「古今傳授」を受く。これより數年間諸所に轉戰。同八年從四位下侍從。八月丹後を平定し、封ぜられて田邊城に入る。同十年、信長、光秀に弑せらるゝや、卽日薙髪して玄旨と號し、田邊城に隱栖した。同十一年(五十歳)安土城に秀吉に謁してその配下となり、後、秀吉のために轉戰。同十三年十月從二位。法印。同十五年秀吉の島津征討に從ひ、四月出立筑紫に到る。「九州道の記」成る。同十六年一月聚落第行幸に歌會を總裁す。同十八年秀吉の小田原征討に從ひ七月病を得て歸城。「東國陣道之記」成る。元祿元年(五十九歳)朝鮮征伐のため名護屋に下り、翌年薩摩に到る。慶長元年(六十三歳)伏見城にて朝鮮使節と詩の贈答をなす。爾來文事を以て仕ふる所が多い。同四年九條宮に「古今集」を講じた。同五年七月三成のために田邊城を包圍されたが、後陽成天皇「古今傳授」の湮滅を憂ひ給ひ、九月圍を解かしむ。幽齋龜山城に隱栖。同八年(七十歳)家康將軍宣下。幽齋は家康より故實者として遇され、衣笠山下の庵居に使節屢々到る。「細川幽齋書札抄」成る。同九年關が原の報を聞いて高野山に登る。同十二年「室町家式」を編して家康に贈呈し、豐後小倉(實子忠興小倉城主たり)に下向した。同十四年十月上洛。同十五年八月三條車屋町の館にて逝去。遺骨を南禪寺の天授庵と小倉の泰勝院とに分葬した。明治三十五年十一月、その遺功により正二位を贈られた。

【著作】【歌學書】幽齋翁聞書(和歌受用とも)(別項)○耳底記(別項)○細川幽齋聞書全集五卷(延寶六年刊、「聞書」に「枕詞燭明抄」三卷を增加したもの。明和七年に再版の二册本もある)○歌口傳心得(寫。八條智仁親王に奉つた消息文の歌話)。【註釋書】玄旨法印和歌注書(寫。王朝時代の歌百七十八首の略註)○百人一首抄三卷(寫)○伊勢閑疑抄五卷(寫)○歌仙難解抄三卷(寫)○新古今鈔四卷(寫)○詠歌大概抄六卷(別項)。【歌文集】

衆妙集(別項)○細川幽齋家集五卷(寫。元祿版の「衆妙集」に同じ)○九州道の記一卷(群書類從卷三三八所收。天正十五年四月二十一日田邊城出立、山陰道の水陸兩路により翌月二十五日箱根に着し、更に七月四日出立して二十三日難波に着した紀行。秀吉の島津征討に從軍した時もの。舊跡に對する興味の外、地方々々で所望されて詠んだ發句も出て居り、「衆妙集」の中にもある)○東國陣道の記一卷(群書類從卷三三九所收。天正十八年二月二十九日熱田の陣を發し、三月中旬小田原に着し、更に關東を巡り七月十五日出立、木曾路を經て歸洛した紀行。小田原征討に從ひ、病のため途中より歸つた折の。「衆妙集」に入る)○細川玄旨十五首一卷(寫記事。圖書寮藏)○四吟百首の中一卷(續群書類從卷三九七。明



細川幽齋筆懷紙（細川侯爵家蔵）

一卷(寫)○細川幽齋弓馬聞書一卷(寫)○名所類字和歌集四卷(寫。類字小名寄とも)○幽齋公歌集三卷(松岡元義編、明治四十三年刊。一卷略傳、二卷和歌・紀行・發句、三卷狂歌を輯めてゐる。活字本中、幽齋の作を最も多く收め得たものである)。

【人物・作風】義晴の妾腹とすら噂される身ながら、信長・秀吉・家康と三代に仕へ通したといふ一事、既に多くの興味を喚らせる。而も一主君のために殉じない點を以て、彼は非難されてゐない。「常山紀談」の逸話などの報じてゐるやうに、彼には春日のやうな穩健の精神と、海のやうな寬大な氣象とがあつた。彼の逸話は十數の諸册によつて傳へられてゐるが、その多くは、彼の驕貴な情味と洒脱の態度に關してゐる。勿論、「古今傳授」(歌道傳授參照)を受け、近世歌學の祖たるには、それだけの天稟もあつたには相違ないが、彼に於ては好運と云ふやうなものも考へられぬではない。而も多くの門下を集め、多くの祖述者を遺した所以のものは、懸つて彼の溫和眞摯の性格、宏博な趣味教養の上に出づると言つてよい。田邊城の包圍を受けた時、後陽成天皇が勅使前田玄以・烏丸光廣を遣はし給ひ、身を全うし得た逸話は、傳授思想の上から見て興味ある事實と云ふに過ぎないが、幽齋の名を普く知らせた點には勘からず役立つてゐる。

打ちいでて國見をすれば山がすみうら浪すぎて春は來にけり
うゑわたすふもとのさなへ一かたになびくと見れば山風ぞふく
富士のねを二十ばかりはかさぬとも麓にや見むわが戀の山

雅致とか輕妙とか云ふ評語が、最も當つて居り、他の特色には乏しい。發句(別項)などに

【參考】Wundt : *Völkerpsychologie.* Bd. I. II.　〔村田〕

遊女記（ゆうじょき）　風俗書　一卷　【作者】大江匡房【名稱】遊女の本據地及び遊女の生活等を記したのでかく題した。【成立】未詳。但し「傀儡子記」「看牛記」「傀儡子記」「洛陽田樂記」「孤媚記」等、匡房の他の多くの著作から推測するに、恐らく寛治（一〇八七）以降のものであらうか。【諸本】群書類從一三元・朝野群載卷三所收。但し類從本は誤脫が多い。なほ朝野群載本は史籍集覽第十八冊にも收められてゐる。【內容】「傀儡子記」（別項）などと同樣に、漢文で記された遊女に關する書である。內容はまづ最初に、遊女は江口・神崎・蟹島等に群棲し、「蓋天下第一之樂地也」と記してゐる。江口の遊女は觀音（觀音は誤か）が祖で、その後に中君・小馬・白女・主殿などが錚々たる者である。蟹島は宮城が祖で、如意・香爐・孔雀・三枚などが著者であり、神崎は河狐姬（河滿姬ともが最も長者で、孤蘇・宮子・力奈・力命・万奈などが等は何れも美人である。この外に住吉や廣田社や天王寺等にもゐるが、上は卿相から下は庶民に至るまで、床笫を接し、慈愛を施し、或は妻妾になされる者もあるなどとも記してゐる。又遠長が小觀音を寵し、賴通が中君を賞したことなどをも記してゐる。【價値】社會史、若しくは風俗史等の資料となる「七十一番歌合」の第三十番なる立君・辻君の如きも亦この遊女の變じたものであらうが、それ等と相對比し、又傀儡子などと共に觀察する時は、興味ある資料となる。文章としては「傀儡子記」その他と等しく、推敲の餘に成つたものではない。（傀儡子記參照）　〔山岸〕

有職鎌倉山（ゆうそくかまくらやま）　淨瑠璃　八段

（獨）Beseelung.【解說】知覺的對象に生命を與へる作用である。美的想像（美的空想參照）の重要な一面で二つの場合が區別される。（一）本來生命あるものの形象（動物その他）に主觀的生命的意義を與へる場合。（二）本來生命なきものの形象（植物その他）に主觀的形式と主觀關係が象徵的關係にあるといふ意味で、感情移入說はこの作用を說明するものである。（感情移入、感情移入說、擬人化參照）

案內で妓樓に出かける。通り者は一向厚遇され、彼に野暮と笑はれた息子は、部屋持の遊女と面白く遊ぶ樣子。通り者はこれを見て面白からず、歸りをいそぐ。隣座敷には平の馴染の遊女が漸く來り、いろ〳〵語るうち、夜はいつか白んで明けの鐘がなる。

【構想】通を街ぶ客がふられ、おとなしい嫌味のない客がもてると云ふ類型的の洒落本の構想であるが、場面々々の描寫が簡にして要を得、如何にも江戶つ子らしい作品である。【史的地位】無叢は明和七年刊と斷じてあるが、同年刊「辰巳之園」（別項）もやゝこれと構想が似て筆致の複雜な點から見て、この書の方が早い刊行ではないかと思はれる。兎に角この書は洒落本としての評判が最も高く、これを以て江戶洒落本の祖の如く江戶時代から言はれたのである。勿論これより前に「跖婦人傳」「異素六帖」（別項）もあるが、共に脚色に乏しく小說より狂文に近い。從つて本書が江戶時代に於ける本格的寫實的洒落本の祖と云ふ說は今日に於ても肯定してよからう。　〔山崎〕

有情化（ゆうじょうわし）　美學（英）Animation.

たとへば綾羅錦繡の如きもので、異質の絲を混へてはならぬ如く、その用語には細心の注意を要する事を辯じてゐる如き、その他きすがに首肯すべき言說があるのである。【價値】戰國時代から德川初世にかけて、博識第一の稱があつた幽齋の歌學は、この書や「耳底記」（別項）等によつて知る事が出來るのである。

【梗概】小春の頃、柳橋で通人ぶつた三十男、二十ばかりの息子風の男と出逢つた。息子は本所の伯父の見舞に行くと云ふのを、强ひて正燈寺の紅葉見に誘ひ、そこより船に乘る。その男は息子に見えを張つて盛んに通を振りまはすけれど、直ぐ化けの皮がはがれて行く。漸く山谷堀から上つて茶屋に行き、馴染らしい顏つきをするが、先方からは一向相手にされない。折柄馴染客平も來り、皆々若い者の

遊子方言（いうしかたげん）　洒落本　一冊　【作者】田舍老人多田爺【名稱】「楊子方言」のもぢり、遊子は旅人の義ではなく遊客の意。【刊行】明和初年。朝倉無聲は「中古風俗志附錄」及び「虛實馬鹿話」に依つて明和七年と斷じてゐる。【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本大系第一卷所收。【題材】書中、河東或は河東さんと敬見するのは、當時人氣のあつた河東節の家元四代十寸見河東（菓子屋芳屋）である。

【梗概】小春の頃、柳橋で通人ぶつた三十男、二十ばかりの息子風の男と出逢つた。息子は本所の伯父の見舞に行くと云ふのを、强ひて正燈寺の紅葉見に誘ひ、そこより船に乘る。その男は息子に見えを張つて盛んに通を振りまはすけれど、直ぐ化けの皮がはがれて行く。漸く山谷堀から上つて茶屋に行き、馴染らしい顏つきをするが、先方からは一向相手にされない。折柄馴染客平も來り、皆々若い者の案內で妓樓に出かける。通り者は一向厚遇され、彼に野暮と笑はれた息子は、部屋持の遊女と面白く遊ぶ樣子。通り者はこれを見て面白からず、歸りをいそぐ。隣座敷には平の馴染の遊女が漸く來り、いろ〳〵語るうち、夜はいつか白んで明けの鐘がなる。

【構想】通を街ぶ客がふられ、おとなしい嫌味のない客がもてると云ふ類型的の洒落本の構想であるが、場面々々の描寫が簡にして要を得、如何にも江戶つ子らしい作品である。【史的地位】無叢は明和七年刊と斷じてあるが、同年刊「辰巳之園」（別項）もやゝこれと構想が似て筆致の複雜な點から見て、この書の方が早い刊行ではないかと思はれる。兎に角この書は洒落本としての評判が最も高く、これを以て江戶洒落本の祖の如く江戶時代から言はれたのである。勿論これより前に「跖婦人傳」「異素六帖」（別項）もあるが、共に脚色に乏しく小說より狂文に近い。從つて本書が江戶時代に於ける本格的寫實的洒落本の祖と云ふ說は今日に於ても肯定してよからう。　〔山崎〕

有情化（ゆうじょうわし）　美學（英）Animation.

（獨）Beseelung.【解說】知覺的對象に生命を與へる作用である。美的想像（美的空想參照）の重要な一面で二つの場合が區別される。（一）本來生命あるものの形象（動物その他）に主觀的生命的意義を與へる場合。（二）本來生命なきものの形象（植物その他）に主觀的形式と主觀關係が象徵的關係にあるといふ意味で、感情移入說はこの作用を說明するものである。（感情移入、感情移入說、擬人化參照）

有職鎌倉山（ゆうそくかまくらやま）　淨瑠璃　八段

時代物【作者】當事助・中村魚眼【興行】寬政元年六月二十二日正本刊行。同年八月十五日より北堀江座興行。【題材】天明四年三月二十四日、佐野善左衞門政言、江戶城中桔梗の間に於て、時の老中田沼意次の子若年寄田沼意知を斬つて、四月三日切腹を命ぜられ、これが原因で田沼の沒落した事件を、北條時頼時代物に書きかへたもの。【梗概】時頼を討ち亡ぼし、先祖三浦の義盛が根かぶを倒して天下を握らうとする謀計を知つて、君と國とを救ふために身を犧牲にした大忠臣として脚色されてゐる。これは佐野の死後、「世直大明神」とまで、時の人に追慕されたのを、作者はこゝを狙つたものと思はれる。戲曲としての系統上から見れば、「北條時頼記」

律上字餘りの肯定さるべきことを論じ、歌は音の歌の可及的避くべきことを論じつつも、字餘り、句つて採るべきものがある。　〔齋藤（清）〕

【參考】鹽尻・玉かつま・笈埃隨筆・甲子夜話・常山紀談・雜州府志・二十一代集後談・消閑雜記・舟州三家物語・戴恩記・年山紀聞・北窓瑣談・細川幽齋行狀・岡森法印葬禮記・扶桑拾葉集系圖・漆鞠譜・野史・細川幽齋・池邊義象・偉人幽齋・池邊藤園

幽齋翁聞書（ゆうさいおきなききがき）　歌論書　二卷　【著者】細川幽齋述・佐方宗佐筆錄【刊行】寬永二年萬屋右衞門の版本が普通流布してゐる。有賀長伯の跋に廣澤長孝が飛鳥井雅章の祕藏の書を寫し梓にしたが、從文錯簡があり、又いつか板も失せ、印本が尠くなつたので、長孝自筆の本で校合し版行するに至つたと書かれてゐる。帝國圖書館藏の「耳底記」別錄の寫本は、この書とほぼ同一である。【內容】上卷には宗佐の序文の次に目次があり、（二）題の歌の事より（二九）名所の歌の事までを說き、下卷は（二〇）歌に必ずきゐる所有事より（四一）色紙書樣の事までの解で、長伯の跋文がついてゐる。心詞何を先とすべきや、歌程拍子の事、詞ふとみほそみといふ事等の條は歌の本質にふれてをり、代々集所見心持の條等に於ては、歌の歷史觀に論及してゐるが、本歌取やうの事、歌合の歌、歌病、字餘り、贈答の歌、六義、十體、留りのこと、よゝむまじき詞の事等、ごく一般的な歌のしきたりや作法を主として述べたもの、而も一詠歌大概・「八雲御抄」・「無名抄」・「明月記」・「近來風體抄」（各別項）・「詠林良材集」・「和歌庭訓抄」等の歌書や定家等の歌合の判詞等を多く引用し、獨創の見とみるべきものには乏しい。が宇餘り

を試き、下卷は(一〇)歌に必すきる所有事より(四一)色紙書樣の事までの解で、長伯の跋文がついてゐる。心詞何を先とすべきや、歌程拍子の事、詞ふとみほそみといふ事等の條は歌の本質にふれてをり、代々集所見心持の條等に於ては、歌の歷史觀に論及してゐるが、本歌取やうの事、歌合の歌、歌病、字餘り、贈答の歌、六義、十體、留りのこと、よむまじき詞の事等、ごく一般的な歌のしきたりや作法を主として述べたもの、而も「詠歌大概」「八雲御抄」「無名抄」「明月記」「近來風體抄」(各別項)「歌林良材集」「和歌庭訓抄」等の歌書や定家等の歌合の判詞等を多く引用し、獨創の見とみるべきものには乏しい。が字餘りの歌の可及的避くべきことを論じつつも、音律上字餘りの肯定さるべきことを論じ、歌は小說より狂文に近い。從つて本書が江戶時代に於ける本格的寫實的洒落本の祖と云ふ說は今日に於ても肯定してよからう。〔山崎〕

有情化(いうじやうくわ) 美學〔英〕Animation.〔獨〕Beseelung.【解說】知覺的對象に生命を與へる作用である。美的想像(美的空想參照)の重要な一面で二つの場合が區別される。(一)元來生命あるものの形象(動物その他)に主觀的觀念聯合の過程から一定の感情內容を與へる場合。キリスト敎藝術に於ける羊・魚の如く。(二)本來生命なきものの形象(植物その他)に生命的意義を與へる場合。この場合に客觀的形式と主觀關係が象徵的關係にあるといふ意味で、感情移入說はこの作用を說明するものである。(感情移入・感情移入說・擬人化參照)〔山岸〕

有職鎌倉山(いうしよくかまくらやま) 淨瑠璃 八段【時代物】【作者】菅專助・中村魚眼【興行】寬政元年六月二十二日正本刊行。同年八月十五日より北堀江座興行。【題材】天明四年三月二十四日、佐野善左衞門政言、江戶城中桔梗の間に於て、時の老中田沼意次の子若年寄田沼意知を斬つて、四月三日切腹を命ぜられ、これが原因で田沼の沒落した事件を、北條時頼時代の世界として脚色したもの。主要人物中佐野源左衞門經世は佐野善左衞門政言、叔父佐野源藤太經景は政言の一族佐野龜之助、三浦若狹前司泰村は田沼意次、三浦荒次郎義高は田沼意知に當て、佐野の忠臣勇助は政言の用人で彼の切腹後その遺族に忠實に仕へた安田忠左衞門、藪田毒庵は將軍家治の病床に侍して問題を起した日向東庵、大工與五作は意知の築地の別邸の普請を命ぜられて縊死したといふ大工某などに當ててあるらしい。尤もこれより先、田沼事件を脚色したものに、奈河七五三助作の「稻光田每月(いなびかりたごとのつき)」がある。天明四年八月大阪中座で興行された歌舞伎狂言で、曾我の仇討の中へ作り込んであり、工藤祐經を意次、犬坊丸を意知、曾我祐信を佐野に當ててある。

【梗概】〔一册〕(鶴が岡八幡社頭の段)文永元年鎌倉の大將軍宗尊親王の御代參として、北條時頼が鶴が岡八幡宮へ參詣通夜の時、隨行の三浦若狹前司泰村は、鳥居附近で佐野經世から佐野家の重寶楯無しの鎧を詐取して經世の叔父源藤太經景に與へ、星月夜の上屋敷の普請の責任を負はせる。それは間每を板返しとする設計で、玆に北條時頼等を請じて謀殺し、天下を握らうとの企である。經景は腹心の大工與五作に工事を命ずる。〔二册〕(泰村館毒酒の段)泰村は與五作に普請成就の褒美の金子を與へた上に盃を取らせると苦悶を始める。迎へに來てゐた女房は、その殘りを飮んで共に死なうとする。泰村の妻萩の井が出て夫を苦諫すると、泰村は怒つて妻の口を割つて毒酒を注ぐ。かくして陰謀露顯の口を絕たうとしたが、實は經景と與五作が心を合せて泰村の計畫の裏を掻いて置いたので、失敗に終る。〔三册〕(鷹野の段)江の島附近で將軍家催しの鷹野に、經世は功を三浦荒次郎に讓つて、楯無しの鎧の返還を懇願したが、却つて散々の侮辱を受けて無念骨髓に徹する。その上、荒次郎が落して行つた密書によつて三浦父子の陰謀を知り、心中深く決するものあつて去る。〔四册〕(扇が谷經世屋敷の段)鷹野から歸宅した經世は、口實を設けて妻の玉笹を離別し、母と共に舅勘解由新左衞門の許へ引取らせる。(大下馬先の段)その翌日の拂曉、經世は三浦荒次郎のお供をして來た熊田軍八に大下馬先で會ひ、鷹野で拾つた密書に、重代の菊一文字を質入して調へた五百金を添へて渡し、三浦の一味と見せて荒次郎に城內で會見の執成しを乞ひ、軍八は金に目がくれ委細呑み込んで登城する。追跡して來た家來の勇助に、經世は本心を明かして後事を託し城內に入る。勇助が去りかねてゐる間に、門內騷がしく、源左衞門が三浦殿を討ち留めたと呼ばはる聲。秋田城之介義景が物蔭から現はれて、源左衞門は國家を治むる大忠臣、跡目の願ひは身共が請合つたといふ。勇助は拜舞して本國へ飛ぶ。〔五册〕(松枝經世留守邸の段)上州松枝の經世の本邸は、勇助の父船橋軍次兵衞と嫁のお袖が留守を預かつてゐる。お袖が氏神詣の間に、その父藪田毒庵は無賴漢彌藤次を僞上使に仕立てて來て、軍次兵衞をたばからうとしたが失敗したので、夕闇に乘じて軍次兵衞に深手を負はせて去る。お袖が歸ると相前後して鎌倉から勇助が到着し、主人の一大事を告げる。軍次兵衞は一切を勇助に託し、お袖と共に鎌倉に向はせて己れは絕命する。〔六册〕(經世切腹の段)松葉が谷の秋田城之介の邸に預けられてゐた經世は、百日目に愈々切腹を仰付けられた。城之介の取計らひで、舅の新左衞門と勇助とはその席に列する事が出來、別室に控へてゐた妻は、經世の切腹と同時に男子を產み落す。〔七册〕(佐野隱れ家の段)經世の遺族等は、佐野の渡に世を忍び、勇助夫婦の力でその日を送るうち、經世の遺子梅之助は五歲になつた。勇助は早く跡目相續の出來るやうにと心を碎いてゐる。或る雪の日に、例の毒庵は泰村の手先となつて來て、願人坊主に扮裝させた彌藤次に、經世双傷の顚末をちよんがれで語らせ、一夜の止宿を强請させる(鉢の木の飜案)。それから娘のお袖を、或は欺き或は脅迫して、勇助を殺さうといろ〳〵手を盡したが、却つて勇助・お袖等の働きで、二人の惡人は殺される。〔八・九册〕泰村は伜の荒次郎が刺殺された後も、なほ謀叛の計畫は止めない。城之介義景はその證據を握るために苦心し、ために一時執權の職を失つて蟄居を命ぜられたこともあつたが、遂に謀叛の確證を抑へて泰村を取拂ひ、梅之助は三浦の本城攻撃に從軍したといふ理由で、亡父の跡目相續を許される。【構想】實說では、佐野が意知を斬つた原因は鷹狩の憤恚、系圖の意恨等によるといはれてゐるが、本曲でも亦これ等の私怨による事柄を双傷の原因とし、潤色して仕組まれてゐるが、それよりは、時の將軍宗尊親王及び北條時頼を討ち亡ぼし、先祖三浦の義盛が恨みを晴らして天下を握らうとする謀計を知つて、君と國とを救ふために身を犧牲にした大忠臣として脚色されてゐる。これは佐野の死後、「世直大明神」とまで、時の人に追慕されたので、作者はこゝを狙つたものと思はれる。戯曲としての系統上から見れば、「北條時頼記」(別項)の飜案と見るべきであつて、曲中の人物も大同小異なるために、實說には緣故のない人物も澤山出てゐる。而して泰村の驕慢暴逆を描かうとするに急なる餘り、當然作の主人公と見られるべき經世は、表面に出て活動することが少いやうに仕組まれてゐるのは物足らぬ。【影響】一種の際物で、而も勝れてゐなかつた爲めであらうか、操芝居では文政九年二月稻荷の文樂座で繰返されてゐるだけである。歌舞伎では、寬政二年五月十一日から江戶の市村座で演じられた。〔黑木〕

遊妓憲卵角文字(いうぎよのまことたまごのかくもじ) 「玉子の角文字」を見よ。

遊女評判記(いうぢよひやうばんき) 「好色本」を見よ。

有聲音(いうせいおん) 「子音」を見よ。

誘說文(いうぜいぶん) 修辭學【性質】文章の種類の一。讀者を動かして我が意思に從はしむるを目的とするもので、議論文の一と見ることもできる。【作法】誘說文は議論文(別項)に比して更に多くの情的分子が加はつて來る。卽ちこの文種は人をしてただ納得させるばかりでなく、更にその通り實行しようといふ意思を起させなくてはならぬ。それがために事象・事理を明かにした上、これに是非善惡の論斷を與へて、然る後に滿腔の熱意を籠めて、自說に從ふべきを說き勸めるやうにするのである。〔武島〕

有職故實（いうそくこじつ）【解說】有職故實學の全般に亙つて、その概要を知らうとするには、「古事類苑」文學部卷二、二十五有職學の條、林森太郎著「有職故實」、その他二三の講義錄に揭載せられた講義がある位のもので、まだ統一的總括的記述の擧ぐべきものがない。辭典に加藤貞次郎著「有職故實辭典」が一つあるが、これは簡略ながら頗る要を得たものである。參考とすべきものには、「古事類苑」（歲事部・官位部・法律部・兵事部・武技部・禮式部・服飾部・飮食部・居處部・器用部・遊戲部）「古今要覽稿」「武家名目抄」「倭名類聚抄」「倭訓栞」「類聚名物考」等の外、「新野問答」「松竹問答」「貞丈雜記」（別項）「四季艸」「安齋叢書」「安齋隨筆」「安齋小說」「蒼梧漫筆」「筆の御靈」「後松日記」「柳葊雜筆」等の雜著及び「考古界」「考古學雜誌」「風俗志林」「有職」「好古類纂」「風俗研究」等、斯道の專門雜誌所載の論文等がある。また斯道各方面の研究及び研究資料は、正續群書類從（官職部・律令部・公事部・裝束部・管絃部・蹴鞠部・鷹部・遊戲部・飮食部・武家部）「故實叢書」「丹鶴叢書」「百家說林」「百家叢說」「日本隨筆大成」等に蒐聚されてゐる。今その重要なものを分類して見ると次の如くである。【公事】西宮記・北山抄・江家次第・雲圖抄・建武年中行事・禁祕抄・名目鈔・世俗淺深祕抄・大嘗會便蒙・大嘗會儀式具釋・禮儀類典・公事根源（禮法・年中行事・騎・蹴鞠各項）。【內裏】大內裏圖考證・禁腋祕抄・鳳闕見聞圖說・拾芥抄（「大內裏」の條參照）。【官職】官職祕抄・職原抄・職原抄通考・職原抄假名抄・侍中群要・官職浮說式問・源氏官職故實祕抄・冠位通考（官職・法制の條參照）。【裝束】雅亮裝束抄・助無智祕抄・飾抄・次將裝束抄・後照念院殿裝束抄・三條家裝束抄・逍遙院殿裝束抄・物具裝束抄・桃花蕊葉・胡曹抄・海人藻芥・法中裝束抄・法體裝束抄・女官飾抄・裝束圖式・裝束集成・冠帽圖會・裝束織文圖會・織文圖會・服飾圖解・裝束着用圖・禮服着用圖・女官裝束着用次第・近代女房裝束抄・服飾管見・服飾漫語・裝束色彙・羽倉考・裝束要領抄・枕草子裝束撮要抄（服飾參照）。【武家禮法】今川大双紙・宗五大双紙・三議一統大双紙（「禮法」の條參照）。【武技】騎射祕抄・犬追物類鏡・犬追物圖說・流鏑馬次第・笠懸開書・笠掛記（「武技」の條參照）。【武具】本朝軍器考・中古甲冑製作辨・集古十種・武器考證・軍用記・鎧着用次第・尙古鎧色一覽・愚得隨筆及附考・五武器談・兵義器談・刀劍問答（「武具」の條參照）。【石村】

雄長老

雄長老（ゆうちやうらう）【道號】英甫【生歿】生年未詳。慶長七年（一六〇二）九月十六日歿す。【墓所】京都建仁寺塔中如是院【閱歷】若州の豪族武田氏の出。建仁寺塔中如是院に住し、天正十四年入つて同寺の長老となつた。正しくは永雄長老といふべきを、世人略して雄長老と呼んだ。好んで狂歌を詠じ、「雄長老狂歌百首」がある。又文祿頃「新撰狂歌集」（別項）を撰んで刊行したが、これが恐らく狂歌撰集の最初の刊本であらう。永雄の父は細川幽齋の姉で宮川尼と呼び、武田家沒落後、永雄は寄邊なき母を如是院に引取つて孝養を盡した。この宮川尼も亦、和歌・狂歌を善くした。或る時朝家普請の料に幽齋が本國より多くの米を取寄せたが、その米が餘つたので、宮川尼の許へ米百石を贈るから大津まで請取りに來れと言ひ送つた返事に、「御普請の役にも立たぬこの尼が百の石をばいかで引くべき」と詠じたとの事である。【野崎】

祐天小僧（いうてんこぞう）「遠山櫻天保日記」を見よ。

友梅（いうばい）禪僧【姓名】源氏。諱は友梅、字は雪村・幻空【生歿】正應三年生れ、正平元年（一三〇六）十二月二日寂す。享年五十七。【學統】友梅は夙く鎌倉建長寺に入り、一山一寧に從ひ、後京都の建仁寺で參禪の暇に世書を讀み、殊に莊子に通じてゐた。十八歲の時、支那に渡つて、元曳端・虛谷陵・東嶼海・晦機熙の諸禪師に謁し、後周遊して佛儒の學問を究め、支那に留まること二十餘年、得る所甚大であつた。【閱歷】友梅は越後白鳥の人、少時から建長寺の一山一寧に侍し、苦學してゐたがやゝ長じて得度受戒し、京都の建仁寺に留まつて參學に努め、十八歲の時、支那に渡つて二十四年間彼の地に留まつた。渡支の初めに當り、元の世宗は日本を侵略せんとしたが、水軍利なく、續いて仁宗相繼いで先志を成さんとした。この時、日本人の故を以て捕へられて獄に投ぜられ、後西蜀に移された。而して十年の後、長安に召し還され、留まること三年、東歸の途に就かうとした時、文宗の卽位があり、詔を受けて鑒徵寺住持となり、開堂說法し、特に文宗から寶覺眞空禪師の號を賜うた。後間もなく住持を辭し、諸名刹を巡遊して元德元年の夏歸朝した。時に四十歲、鎌倉に母を呼んで起居を共にして孝養をつくした。後建長寺玉雲菴に入つてゐたが、信濃諏訪の慈雲寺の請に應じて同寺に赴き、後に德雲寺の開山祖となり、その翌年には京都西禪寺に住した。それから豐後の萬壽寺に住して二年の後、再び京に上り、栂尾に退居してゐた。ところが播磨の法雲寺の請に依り、これが開山祖となつた。足利尊氏より京都萬壽寺に請ぜられてこゝに一ケ年、程なく清水の清住院に退居した。併し貞和元年の春には朝命を受けて建仁寺に住したが、翌年寂した。【著作】語錄二卷○岷峨集四卷。【人物】友梅は溫和な風格のうちにも、嚴然とした强い意志を持つた人である。卽ち支那に於て敵國人なるの故を以て捕へられ、獄に投ぜられた時、少しも恐るゝことなく刑官が刃を加ふるも、怡然として「乾坤無地卓孤節、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風」と佛光禪師の偈を誦したといふ。刑官はその立派な態度に感服し、ために朝廷に奏上した。これに依つて宥されて道名を高くした。獄中、佛光禪師の韻に次して五首を成してゐる。卽ちその一に、「百城煙水一枝笻、觸目無非是幻空、童子曾參無厭足、鑊湯爐炭起淸風」と。この頃西蜀に竄されたが、詩を以て志を述べてゐる。以てその性格が想像されるであらう。【參考】岷峨集○雪村和尙行道記○延寶傳燈錄○本朝高僧傳【鷲尾】

優美（いうび）美學【獨】Das Anmutige, Die Anmut.【解說】感官的快感のみを美的對象內容とする美的樣態。優しい感を與へる美的內包。狹義の「美」。【學說】ハルトゥマン（Hartmann）によれば、假象に於て可憐にして愛すべき弱いものが入つた樣態が優美であるよりに、「美しい魂」が幾分躊躇して形式に從つて現はれると峻嚴の優美となり、レーニの繪の如く、形式への歸依が十分でないと柔和の優美となる。この兩者を峻嚴並に柔和の優美（Das herbe und weiche Anmutige）といふ。第六に世間の若い女の裝飾に見らるゝやうに、優美を意識したものが優雅の優美（Das

つて、女や無邪氣さの美がその例である。フイッシャー（Th. Vischer）によれば、醜に關係せずに直接純粹に作用する美が優美である。その意味で、それは又純粹美であるともいへる。ジーベック（Siebeck）によれば、優美は完全な限定をもつ美で、隨つて大きさの要素をもたぬ樣態である。その中に感官的な快適が

よると講筵・學校・撰集・書籍等の章を設けて述べ、なほ附錄として御法令・日光御緣起等について記したものと思はれる。【植松・岩淵】

有朋堂文庫（いうほうだうぶんこ）叢書　百二十册（第一・二輯各六十册）・總索引解題書一册【監修】上田萬年・關根正直・藤井乙男【校訂者】石川核・落合東郭・鈴木暢幸・忠見慶造・塚本哲三・明【刊行】大正十一年六月、アルス。【內容】作詩・譯詩・散文詩譯、並に回想的自註が附してある。「自畫像」の章に明治四十一年から大正四年まで八年間の未だ單行本に收めぬ新作を集めた。「有明集」（別項）以後の彼は用語に口語を選び、晦澁の難を避けて平明を事とし、新詩境を志したが、それ等は殆ど悉く失敗に

照今院殿葬束抄・三條家葬束抄・道遙院殿葬束抄・後鷹司殿葬束抄・龍寶院葬束抄・助無智秘抄・飾抄・衣服葬束抄・後宇多院葬送記・後深心院葬送記・後深心院葬送抄・後深心院葬送次第・後深心院葬送抄・後深心院葬送抄・後深心院葬送抄

飜譯で、上田敏（別項）に次ぐ價値がある。併しながら、その特色とするところは、「豹の血」小曲八篇の象徴手法の的確と莊重と複雜性とを以て、柔軟な雅語と簡勁の漢語とを巧みに織り成し、藤村も晩翠も泣菫も全く歌はなかつた心性の苦惱・哀樂を、近代的感覺性の光輝を放ちつつ有明獨自のスタイルにて完成した。「白羊宮」と「有明集」とに於て、新體詩の詩型美は最極點に到達した。【日夏】

ユーモア「滑稽美」を見よ。

又樂庵示蒙話　隨筆　二卷

【著者】栗原信充。號、又樂庵。【諸本】寫本は稀である。日本隨筆大成卷九所收。【内容】武家の服飾・甲冑・兵器等の考說と、自己の見聞・感想とを錄したもの。千利休が山陵の石塔を取つて己れの所有としたと云ふ傳說の妄を辨じ、太宰春臺が茶人を疾んだ事を難じ、大德寺黃梅院の向春庵に於ける茶會の樣を記した條もある。卷一に馬乘袴以下十三條、卷二に三州別處の若杉氏以下十七條を收めてゐる。挿圖が一二ある。序跋はない。【和田】

遊婦里會談　洒落本　一册【作者】蓬萊山人歸橋【畫工】無署名【名稱】卷末の廣告には東西南北と角書がある。遊里怪談のもぢり。【刊行】安永九年【諸本】洒落本集成所收【題材】馬遊が新宿の遊里で枕さがしに遭ふ條に、「こゐつ品川なら猶だが、この土地じやア馬か知らぬ」とあるは、當時品川に猫の怪談があつたのを採つたのであらう。「想山著聞奇集」に、品川の遊女が燈油をなめる說話が出てゐる。【梗概】歸橋の家に集つた東方の船臥、西方の馬遊、南方の隣波、北方の郭子の四人が、各々遊里に關する話をする。先づ隣波が品川の話を始める。隣波の友人吉が品川へ行き、秋篠の妹女郎の荻野に馴染んだが、待遇がよくないので隣波に面白く遊ばせてくれと頼んだ。そこで兩人は連れ立つて行き、姉女郎の秋篠を買つたが、兩女共に面白くない顏をしてゐてぶあしらひである。隣波はうんと啖呵を切つて歸つたが、その噂が人々に傳はり、隣波が秋篠に振られたと云ふ評判が高くなつた。そこで復讐を思ひつき、二十日ほど減食し、蒼ざめた顏をして登樓し、陰氣に遊んだ。秋篠も氣の毒に思つて慰めた。やがて彼女が別の部屋に行つた隙を見、珠數と櫛の葉と毛髮とを殘して急いで歸つた。後で秋篠はこれを發見し、驚いて卒倒する。亡靈と枕を交したと神經に病み、だん〳〵病氣となつた。隣波も可哀相になり、人を賴んで實を告げ、今はほんとの色客になつた。そこで郭子が吉原逢木屋金扇の身請の話を始める。金扇には里曉と云ふ色客がある。今度旅人の次郎兵衞と云ふのが金扇を身請けすると言ひ出した。そこで金扇は里曉と相談し、二百兩の手金を工面して里曉も身請けすると言ひ出し、先方は千二百兩、里曉は千五百兩と競つた。金扇は是非次郎兵衞の所へ行くと言ひ、樓主は里曉の方へ行けと言ひ、双方聞かぬので、遂に身請話は中止になつた。金扇は改めて次郎兵衞に今度の達引に金を遣つたからと、快く金を出させ、里曉に二百兩返した上、なほ二百兩許り餘した。次に馬遊が新宿の話を始めた。幇の中で待つてゐたが遊女が來ぬ。そのうち忍んでやつて來た女が、客の寢息をうかがふ樣子、わざと眠つたふりをしてゐると、枕もとの紙入を引出して一兩二分を盜み、床の間の花活の中に入れて又出て行つた。その後で飛び起き、花活の中に在つた金銀を悉く取り出し、遊女が來た折、急用にかこつけ急ぎ歸つた。駕籠の中で數へて見れば、十三兩二分二朱あつた。次は船臥の番になつたが、いつか皆睡くなつて四人とも寢てしまひ、夢に四軒に遊び、冷遇されて怒り出し、散々罵倒してゐるうちに歸橋に起された。【構想】遊客が各遊里の穿ちを語る趣向は、蓋し當時の通人間に行はれた事實であらう。それを寫實的に描いたものと推定される。但し後に出た京傳の「古契三娼」（別項）の如く銳利精細でないのは、兩作者の天分と創作態度の差異から已むを得ないのである。【影響】「古契三娼」に三人の遊女上りが、各々自分の勤めた遊里の物語りをする趣向は、確かに本篇に暗示を得たものと考へられる。【山崎】

遊離說話　「世界大擴布說話」を見よ。

雄略天皇　歌人【御諱】大泊瀨皇子、又、後には大泊瀨稚武天皇。諡して雄略天皇と申す。「萬葉集」卷一卷頭の標目には「泊瀨朝倉宮御宇天皇」と記す。【生歿】御生誕の年は不明。崩御は雄略朝第二十三年（一一三九年）八月七日。實算は不明。【御陵】河内國南河内郡高鷲村なる丹比高鷲原陵【御系圖】第十九代允恭天皇の第五子、第二十代安康天皇（允恭帝の第二子とも第三子とも云ふ）の御弟。御母は忍坂大中姫。【閲歷】「古事記」と「日本書紀」によつて傳へが違ふが、それを取捨して記すと、大泊瀨皇子の幼時、眉輪王が父の仇なる安康天皇を弑した。よつて皇子は、「古事記」によれば、御兄黒日子王及び白日子王のもとに到つて安康帝の讐を報いん事を勸められたが、二兄が躊躇されるのを見て怒つてこれを殺された。眉輪王は葛城圓に投じた（書紀によれば少し異る。即ち大泊瀨皇子は先づ白彦皇子に、次に坂合黒彦皇子に向つて、安康帝のために眉輪王に對して報讐せん事を勸め迫られた。黒彦皇子亦、大泊瀨皇子の亂暴が身命に迫らんことを怖れ、眉輪王とはかつて共に逃げて葛城圓のもとに投じた）。大泊瀨皇子は兵を擧げて眉輪王と葛城圓を討滅し、父帝の仇を報ぜられた。かくして後、市邊押磐皇子をも殺して皇位の競爭者を絶滅し、皇紀千百十一年の十一月、大和の泊瀨の朝倉宮に即位して、第二十一代の皇位に登られた。即位後殖産の事に御留意あらせられ、就中蠶業の事には最も腐心されて吳國から工女を求め、國内の秦氏をして絹布を作らしむる等、莫大の努力を盡して好成績を擧げられた。その他大藏を新設して宮用と國家の用とを分つなど、治績大にあがり、治世二十三年にして崩御された。【作品】「古事記」九首、「日本書紀」三首、「萬葉集」に一首載つてゐる。記と紀は、所載歌のうち二首が重複して出て居り、全部長歌である。然るにこの記・紀の十首は、果して雄略帝の御製か否か分らない。何故なら「古事記」の天皇が葛城山で猪に逢うて榛の木の上に逃げ上られた時に歌はれたと云ふ「やすみしし我が大君の云云」の歌は、「書紀」では天皇の舍人の作となつてゐて御製ではない。また「古事記」の天皇が泊瀨の槻の大木の下で宴飲した時に歌はれたと云ふ「水灌ぐ臣のをとめ云云」の御製は、「琴歌譜」の一說では葛城の大臣の女が歌つた歌となつてゐる。故に十首の全部或は一部は眞實の御製でなく、記・紀の編纂者が雄略天皇一代の物語を書き綴る折に、必要に應じて當時世に存してゐた歌謠を御製として取り用ひたものではあるまいか。一方、歌の數が

條もある。卷一に馬乘袴以下十三條、卷二に三州別處の若杉氏以下十七條を收めてゐる。挿圖が一二ある。序跋はない。　〔和田〕

遊婦里會談（ゆふりくわいだん）　洒落本　一册【作者】蓬萊山人歸橋【畫工】無署名【名稱】卷末の廣告には東西南北と角書がある。遊里怪談のもぢり。【刊行】安永九年【諸本】洒落本集成所收【題材】馬遊が新宿の遊里で枕さがしに遭ふ條に、「こゐつ品川なら猫だが、この土地じやア馬か知らぬ」とあるは、當時品川に猫の怪談があつたのを採つたのであらう。「想山著聞奇集」に、品川の遊女が燈油をなめる說話が出てゐる。

【梗概】歸橋の家に集つた東方の船臥、西方の馬遊、南方の鄭子の四人が、各々遊里に關する話をする。先づ隣波が品川の話と云ふ色容がある。今度旅人の次郎兵衞と云ふのが金扇を身請けすると言ひ出した。そこで金扇は里曉と相談し、二百兩の手金を工面して里曉も身請けすると言ひ出し、先方は千二百兩、里曉は千五百兩と競つた。金扇は是非次郎兵衞の所へ行くと言ひ、樓主は里曉の方へ行けと言ひ、双方聞かぬので、遂に身請話は中止になつた。金扇は改めて次郎兵衞に今度の達引に金を遣つたからと、快く金を出させ、里曉に二百兩返した上、なほ二百兩許り餘した。次に馬遊が新宿の話を始めた。帳の中で待つてゐたが遊女が來ぬ。そのうち忍んでやつて來た女が、客の寢息をうかがふ樣子、わざと眠つたふりをしてゐると、枕もとの紙入を引出して一兩二分を盜み、床の間の花活の中に入れて又出て行つた。その後で飛瀨皇子又後には大泊瀨稚武天皇。諡して雄略天皇と申す。【萬葉集】卷一卷頭の標目には「泊瀨朝倉宮御宇天皇」と記す。【生歿】御生誕の年は不明。崩御は雄略朝第二十三年（一一三九年）八月七日。壽算は不明。【御陵】河內國南河內郡高鷲村なる丹比高鷲原陵【御系圖】第十九代允恭天皇の第五子、第二十代安康天皇（允恭帝の第二子とも第三子とも云ふ）の御弟。御母は忍坂大中姫。【閱歷】「古事記」と「日本書紀」によつて傳へが違ふが、それを取捨して記すと、大泊瀨皇子の幼時、眉輪王が父の仇なる安康天皇を弑した。よつて皇子は、「古事記」によれば、御兄黑日子王及び白日子王のもとに到つて安康帝の讐を報いん事を勸められたが、二兄が躊躇されるのを見て怒つてこれを殺された。眉輪王は葛城圓に投

他の天皇に比べて甚だ多數なのも、この天皇が有名な天皇であるが故に、多數の歌謠が假託せられたと見るべきであらう。この點は神武天皇・仁德天皇の如きにもあてはまるものである。故に記・紀所載の雄略帝の御製は、どこ迄これを信じていゝかわからぬ。「萬葉集」開卷第一に載する御製は、「萬葉集」が記・紀の如き目的とは違つて純粹な歌書として編輯されたもの故、天皇の御製も比較的信用して良いかと思はれる。記・紀所載の十首は、內容の單純なる事、表現に譬喩や序詞の多く用ひてある事等、記・紀の歌謠に共通の特色で格別の相違も見えない。「萬葉集」のは偶々それが第一卷の卷頭にあるために、古來甚だ注目され、それにつれて歌人としての雄略帝の御名も廣く知られてゐる。　〔森本〕

油煙齋貞柳（ゆえんさいていりう）　狂歌師【姓名】永田良因。後、言因又は宗伯。諱は信乘、通稱は善八【別號】由緣齋・精靈洞・霜露軒・珍果亭・圓果亭・助榮亭・生軒・長生亭・遊魚子・放曠子【生歿】承應三年大阪に生れ、享保十九年（一二三九四）八月十五日歿す。享年八十一。【墓所】大阪下寺町光傳寺【閱歷】大阪船場南御堂前繼屋町の宮中御用菓子司で鯛屋山城掾と云ふ。父貞因は通稱榎並善右衞門、號を白石齋と呼び、松永貞德（別項）の門に入つて俳諧を能くし、又狂歌にも堪能であつた。貞柳の弟貞峨、通稱榎並喜右衞門は、戲曲界に名高い紀海音（別項）で、叔父榎並清左衞門は花實庵貞富と號し、狂歌に名高かつた。貞柳は初め父に就いて俳諧・狂歌を學び、後、山城男山豐藏坊の主僧豐藏坊信海（別項）に就いて所謂無心體の狂歌を習得し、終に一派を立つるに至つた。享保九年三月近隣より出火し、貞柳の家も類燒したので、高津に菩提庵といふ別業を營み、剃髮して同所に閑居し、狂歌を專門とする傍ら茶事を翫んでゐたが、同十五年に大和の古梅園より圓形の墨を禁廷へ獻納すると聞き、「月ならで雲の上まですみのぼる　是はいかなるゆえんなるらん」と詠んだのが叡聞に達し、油煙齋の號を賜はつた。これより貞柳の名は益々世間に喧傳されて、終に狂歌中興の祖と仰がれるに至つた。從來狂歌を專門とする人はなかつたが、貞柳出て始めて職業的狂歌師が出來た。歿後二十五年を經て門人一本亭芙蓉花が、清水寺西門に建てた貞柳翁碑銘が今なほ存してゐる。辭世「百居ても同じ浮世におなじ花月はまん丸雪は白砂」。【著書】狂歌家づと一册（享保十四年）○續家づと一册（同十六年）○油煙齋置土產一册（同十九年）○狂歌机の塵一册（同二十年）○狂歌拾遺家づと一册（寶曆八年）【門弟】貞柳の門人は一千人に餘つたと傳へられてゐるが、就中桃緣齋貞佐・栗柯亭木端（各別項）は鐵中の錚々たるもので、貞佐は貞右を經て丸派の淵源となり、木端は林端を經て栗派の根本となり、この外、雪緣齋一好・如雲舍紫笛（別項）・一本亭芙蓉花（別項）・隨古齋雪亭等は、いづれもその高足であつた。

油煙齋貞柳

【參考】貞柳傳　仙果亭著（寬政二年）　〔野崎〕

由佳里の梅（ゆかりのうめ）　人情本　三編九册【作者】鼻山人【畫工】歌川芳藤【名稱】廓中餘情と角書がある。再版本は「春色由緣の梅」と改題。【刊行】天保元年。天保十二年再版。【諸本】人情本傑作集下卷（帝國文庫）所收。【題材】鼻山人の凡例に「傾城虎の卷・二筋道等の糟粕を振つて書。故に文花其倣傚するにひとし」とある。「傾城虎の卷」は田螺金魚作の「契情買虎之卷」（別項）の事、「二筋道」は一世梅暮里谷峨作の「傾城買二筋道」（別項）を意味する。共に人情本の起原をなす洒落本と稱せられるものである。爲永春水（別項）の初編序に依れば、「文永堂の主人が此書を持參し端書をせよと請はれた」とあるが、故意に鼻山人の序を除き、自己の序のみで再版したのは、當時人情本の祖として盛名あつたのを利用し、一見自作の如く思はしむる例の春水の惡手段と認められる。第三編卷上、花園の情人伊三郎に妹女郎花山・花咲が花園の苦衷を說くところに、奥座敷で夕霧伊左衞門の淨瑠璃の文句が聞える趣向は、洒落本「雙床滿久羅」（寬政元年）を採つたのであり、伊三郎方の番頭が其夕と號して花園の客となつてをり、最後に打明ける趣向は、洒落本「錦の裏」（寬政三年）より脫化したのである。その他洒落本の文句をそのまゝ借用してある所が散見される。

【梗概】或る山里に淋しく暮す母子がある。夫は以前里見家の家來であり、仔細あつて浪人してゐたが、既に死んで了つたので、後家は娘お浪を相手に辛うじてその日を送つてゐた。母の名をおやをといつた。おやをの實弟は無賴漢で、時々來ては姉をいたぶる。お浪の姉は吉原で今舞鶴屋の花園と呼ばるゝ全盛である。この二人の侘しい暮しに同情し、折々慰めに來て金など置いて行く若者がある。それは兩國柳橋の質商伊勢屋の若息子伊三郎で、放蕩のため勘當されてこの田舍に來てゐた。母はかゝる婿がほしいと思ひ、お浪も憎からず思つてゐるが、今は身分が違ふので何とも言ひ出さぬ。然るに伊三郎は父が病氣で勘當を許されて歸ることになる。母子の者は落膽する。母おやをは大病となつて四五日の間に死んでしまつた。伊三郎も見捨て難く葬送を營んでやり、お浪を妻に貰つて歸宅した。伊三郎の父も死去したので、そのまゝ後を繼いだ。一方、舞鶴屋花園の許へ初會であがつた客がある。それは伊三郎であつた。伊三郎は花園にお浪の樣子など話して聞かせ、ただ慰めに來たのだからと淸く歸つた。四五日して又伊三郎が來た。花園は伊三郎が、自分の母や妹に盡してくれた深切に眞實の戀を盡す。伊三郎も初めは單に哀れな母子に同情して來たのであつたが、女の眞情にほだされる。お浪は姑の慈光と睦じく暮してゐたが、この頃伊三郎の廓通ひが烈しいので、樣子を探ると姉花園へ通ふと知り、密かに花園へ手紙をやり、切れてくれと賴む。花園は妹が伊三郎と結婚してゐることを知つて大に驚き、何も知らさずにゐた伊三郎に恨を言つて愛想づかしをした。伊三郎も最初は怒つたが、お浪の手紙を見せられて一言もない。伊三郎は歸宅してから大病に罹り、お浪や母慈光の手厚い看護も效が見えない。花園は妹への義理で一旦は遠ざかるが、月に一二度はきつと訪ねて來ると言ふ伊三郎の約束を信じ、鬱々と暮してゐたが、伊三郎からの消息はちつともない。そこへ伊三郎の友人と云ふ孝次郎から伊三郎は大病で死んだと告げられ、一時は絕え入る許り悲歎に沈んだが、孝次郎の親切に引かされ、いつか深く馴染むやうになり、身請されるこ

集」に一首重複して出て居り、全部長歌である。然るにこの記・紀の十首は、果して雄略帝の御製か否か分らない。何故なら「古事記」の天皇が葛城山で猪に逢うて樫の木の上に逃げ上られた時に歌はれたと云ふ「やすみしし我が大君の云云」の歌は、「書紀」では天皇の舍人の作となつてゐて御製ではない。また「古事記」の天皇が泊瀨の槻の大木の下で宴飮した時に歌はれたと云ふ「水漬く臣のをとめ云云」の御製は、「琴歌譜」の一說では葛城の大臣の女が歌つた歌となつてゐる。故に十首の全部或は一部は眞實の御製でなく、記・紀の編纂者が雄略天皇一代の物語を書き綴る折に、必要に應じて當時世に存してゐた歌謠を御製として取り用ひたものではあるまいか。一方、歌の數が

とに決つた。ところが、外の客から伊三郎は全快したと聞かされ、花園は眞偽を別ちかねて獨り悶える。折も折、伊三郎が不意にやつて來たが、花園は病んで出ない。伊三郎が「姉妹を女房と妾にしては世間の笑ひ物、花園に良緣でもあつたら世話しよう。今夜が廓の見をさめと思つて來た」といふので、花園も漸く出て來た。そして孝次郎の親も元は里見家の家老で、千葉孝左衞門と云ひ、孝次郎と花園とは許嫁であつたことが分る。そして孝次郎は伊三郎の母慈光が昔勤めてゐた主家であつた。併し孝次郎が廓通ひを始めた裏面の理由は、里見家の重寶白牡丹の香爐が紛失したのを父親に代つて探りに來たのであつたが、而もその重寶は伊勢屋に質入してあつたので、容易く主家へ納める事が出來た。慈光の三十年前の懺悔話によれば、孝次郎は彼女が千葉家へ奉公中、孝左衞門に愛されて出來た子を奥方の實子とした者で、直ぐ奉公から下つて伊勢屋に緣づいたのであつた。卽ち伊三郎と孝次郎は異父の兄弟であつた。かくて花園は孝次郎とめでたく結婚し、千葉家・伊勢屋兩家は舊に倍して睦じく往來した。後、花園は惡緣の身に纏へるに驚き、舅孝左衞門死去の後、暇を乞ひ、尼となつて貞操尼と言つた。

【解說】鼻山人の作は人情本の型に入らず、人物の行動に人間らしい描寫が見え、面白い所がある。伊三郎の性格、花園の戀の變遷などそれである。併し大局から見れば時代の束縛は免れず、强ひて勸善懲惡にしたり、孝次郎が重寶をさがしに遊里に入り込むなど、脚本めいた構想である。ただ部分的に洒落本と人情本との過渡期に屬する自由な描寫の見えるのが、この作者の特徴である。

【山崎】

所緣の藤波（ゆかりのふぢなみ）　人情本　二編六册

【作者】前編十返舍一九。後編三世十返舍一九（三亭春馬）。この三世一九を作者とすることに就いてはやゝ疑問がある。最初二世一九を襲名した絲井鳳助卽ち十字亭三九は、天保七年亡命し、次の三世一九卽ち九返舍一八は、嘉永四年歿して居り、本書刊年の安政六年には何れも文壇にはゐないのであるが、暫く後者の遺稿として置く。【書工】溪齋英泉。【角書】內題に風雪玄話とある。【刊行】前編文政四年、後編安政六年　【諸本】人情本傑作集下卷（帝國文庫）所收。【題材】おりさ・丹松の姉弟が不幸の境遇に陷ちて、あらゆる人々に苛酷に取扱はれる一節は、安壽姬・津志王丸の境遇に似通ふと後編序に斷つてある。明かに山椒太夫の說話に據つたのである。

【梗概】鎌倉の鄕、雪の下に藤浪屋丹六と云へる問屋があつた。四十二歲で妻に死別し、姉おりさ、弟丹松と云ふ二人の子を相手に暮してゐた。その親戚に靑原屋武惣治と云ふ豪家があつたが、老年で多病なので、萬事丹六が世話するうち、武惣治の後妻おかちに口說かれて遂に通じた。間もなく武惣治は病死したのでおかちは丹六方へ來た。丹六は急に財產家となつたが、彼も病死した。おかちは丹六の子を實子同樣に愛してゐたが、急に態度が變つて二人を憎み出した。おかちには武惣治との間に一人娘おふりがあつたが、畠山家に武家奉公するうち殿に愛されて中老となつてゐた。さて丹六は生前手代喜代七をおりさと結婚させ、跡をつがせる豫定であり、二人も夙く戀し合ふ仲だつた。そこで喜代七を京都へ仕入れにやり、その辛抱を見屆けてから定める事となつてゐた。然るに喜代七は京都で三笠屋祖平と云ふ定宿にゐるうち、元方の問屋に誘はれて祇園町の千歲に登樓し、玉照と云ふ遊女に逢つて迷ひ始め、仕入金を殘らず消費した。今更鎌倉には歸られず、玉照に打明けて遂に心中と決心し、日まで定めた。宿屋の主人がこれを知り、喜代七を宥めすかして歸國させた。祖平から仔細を報告した手紙があるので、喜代七の不都合現はれ、後家おちかは大に怒つて逐ひ出した。喜代七は父の許へ歸つて來た。一方その以前殿の寵に誇つた中老おふりは、讒言に逢ひ、永のお暇となつて歸宅してゐたが、喜代七の面影が殿に似てゐるので戀しさに耐へかね、跡を慕つて家出し、喜代七方に行き、押掛け女房となつた。おかちも已むを得ず二人を夫婦にし、邪魔になるおりさと丹松を苛酷に待遇すること前と同樣で、また番頭段兵衞と通じて亂行になつた。段兵衞は又おふりを挑むけれど、彼女は喜代七に操を守つて拒む。姉弟二人は繼母の虐待に耐へず、遂に家出し、海に投身せんとして旅僧に救はれた。けれども七里ケ濱に投身した噂も喜代七とおりさの間を疑ひ責めた一人なので、これも妄念に責められて苦しみ、遂に病死した。おかちは全く懺悔して尼となつた。段兵衞は心面白からず思ひ、召仕の女おしまと通じて金を持つて逃げた。玉照は情死すべき日に喜代七が來ぬので一時は煩悶したが、或る九州の大名の家老職を勤める武士に寵せられ、身請けされて本妻となつたが、夫が病死し、世繼がなくて親戚に家を奪はれようとしたので、その訴訟のために鎌倉に來り、或る日丹松の働く姿を見、事情を聞いて同情して養子にした。彼女の働きでおりさを喜代七の妻に配し、一家めでたく富み榮えた。

【解說】過渡期の人情本の一で、寫實的の對話もなく、單に筋を說明すると云ふ合卷本の叙法をそのまゝ用ひてある。丹六の二人の遺兒が薄命なのも、丹六の不義の戀に起因すると云ふ着想で、因果應報の理を免れぬと云ふ讀本・合卷本の慣用的手段である。ただ主人公喜代七の性格が、功利的な意氣地のない運命に漂ふまゝの弱い人物になり切つてゐる點に、やゝ面白い所がある。

【山崎】

雪（ゆき）**打**（うち）　能狂言　【別名】雪打合（ゆきうちあひ）　【格式】中習（和泉流）。

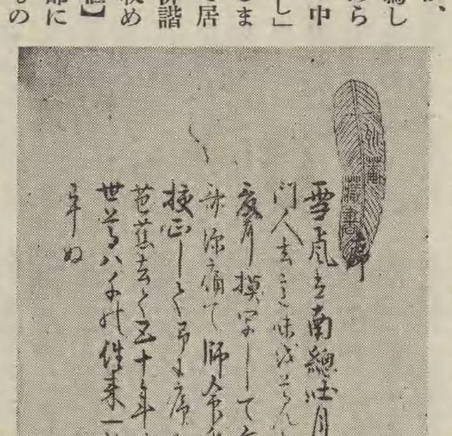
【梗概】寺の門前に住む某が、隣りの家の子供と雪を掃く事から口論して住持に訴へるが、聞き入れないで却つて子供の言ひ分を取上げるので、某はその子供の母が住持と懇なので加勢なさるのだと言ひ、また子供と雪打になる。その騷ぎに子供の母が出て來て、御坊樣は此處にゐながら、見てゐて加勢をして下さらぬのか、平生いとしいの可愛いのと言ふは誰が事ぞと言ふので、住持も女を制しながら、やはり女と共に子供に加勢して雪を打合ふ。某は、其處な女と御坊とは女夫ぢやと言つて逃げ入りながら罵る。

【解說】子供が、住持と後家との隱し子である事になつてゐる本もある。寬正五年の京都糺河原勸進猿樂日記に「ワラウチ」とあるのは、「ゆきうち」を「わらうち」に誤寫したものであらう。ワラウチは藁打であるから、繩綯の狂言であらうなどといふ說は、後人が附會した妄說である。

【藏田】

雪おろし（ゆきおろし）　俳諧書　一册　寫　【著者】大島蓼太　【名稱】俳諧雪おろし　【成立・由來】自序によれば蓼太が寶曆元年九月下旬上總の吐月亭に遊んだ折、偶々「江戶廿歌仙」（別項）の評を乞はれて物語つたのを、主人が筆まめに書き留めたものであるといふ。併し素より蓼太（別項）が豫て「江戶廿歌仙」に對して論難しようとの志があつた事は明かで、この

考】大島蓼太【名稱】俳諧雪おろし【成立・由來】自序によれば蓼太が寶暦元年九月下旬上總の吐月亭に遊んだ折、偶々「江戸廿歌仙」（別項）の評を乞はれて物語つたのを、主人が筆まめに書き留めたものであるといふ。併し素より蓼太（別項）が豫て「江戸廿歌仙」に對して論難しようとの志があつた事は明かで、この機に託して筆を執つたものであらう。而も遂にこれを上梓しないで、寫本としてのみ行はせた事も、彼が故らに江戸座（別項）との正面衝突を避けようとする老獪の意に出たものと思はれる。なほ本書序文に、寶暦二年・明和五年等と識したものもあるが、それはそれ〴〵後年筆寫した年代に從つたものであらう。【諸本】俳書大系の中興俳話文集に、「雪おろし」から「誹諧三十棒」に至るまでの論爭書が收められて居り、また「雪おろし」は俳諧文庫の續俳諧論集にも收められてゐる。【内容・價値】「江戸廿歌仙」の殆ど全部にわたつて論難を加へたもので、先づ「延寶廿歌仙」（別項）を蕉風の花だとする非を論じ、拍子附を評し、禁句を擧げ、その間に自家の識見を仄めかさうとしたもので、さすがに雪門中興たるの力量を見るべく、敵の弱點を能くとらへた所が少くない。【影響】本書が一度世に傳はるや、江戸座の人々は勿論默つては居れなかつた。先づ砂岡雁宕は寶暦の初め、「蓼すり古義」を著はしてこれを駁し、明和八年に至つて遂に公に出版された。因つて同年直ちに蓼太門の三級亭魚汶は、「遲八剞劂」を刊行してこれに應じ、翌九年雁宕は再び「一字般若」を出して返答した。又往昔員閒・談林の論戰に第三者として批評を試みた者があつたやうに、この激戰に對しても横槍を入れた者があつた。即ち明和八年刊の「誹諧三十棒」、明和九年序の寫本（書名不詳）等で、前者は止笑といふ匿名で蓼太と雁宕との論爭を役者評判記の體裁に倣つて批評し、後者は唫花廊主人といふ者が三人の客の問に答へる體でこの論爭を批判したものである。併し何れもその論が偏してゐて、公平な立場を保つてゐるとは言へない。要するにこの論戰は、雁宕側の力足らずして蓼太に壓せられた觀があつたが、とにかく寶暦初年から明和末年に至る長い間、俳壇に大きなセンセーションを起した事件として注目すべきである。〔類原〕


雪おろし序文（松宇文庫藏）

雪女五枚羽子板（ゆきをんなごまいはごいた）

三段　時代物　【作者】近松門左衞門　【興行】明和板「外題年鑑」に寶永二年七月十四日より竹本座としてあるが、作中に正月の景物行事が盛んに織り込んであるので、盆興行とは受取り難く、疑問の餘地がある。【諸本】八行六十丁本、山本九兵衞板。十・十一・十二行三十三丁本、山本九兵衞板。諸種の近松淨瑠璃集所收。【題材】赤松滿祐が將軍足利義敎を自邸に請じて、「鵜飼」の能上覽の場に於て弑した事件を題材とし、當時歌舞伎で評判になつた嵐三右衞門の「藤内樂車」の所作及び芳澤あやめの「文作系圖」の言ひ立て等の趣向を取入れたもの。「藤内だんじり出端」の歌は、「松の落葉」卷三に載つて居り、また「文作系圖」については「役者色茶湯」に、「六年以前卯のかほみせ、かるも座へ大坂から上らんとした時、ゑぼし大紋に似せ男となつてむこ入して、けいづをとはれでるまゝのもんさく、けいづめづらしうはなけれども」とある。これは寶永七年十一月、京夷屋座で「稻荷長者世繼丸」上演の時の事であるが、「めづらしうはなけれども」とあるから、それ迄に屢々行はれた事が明かである。

【梗概】〔上之卷〕赤沼入道とその子赤沼判官逆心を抱き、先づ嘗て私恩を施した奥小姓一色大炊之介とその情人小田卷に、管領斯波義將の家來で笛の名人藤内太郎が預る足利家の寶笛小水龍を切折らせんと謀り、次いで節分の夜將軍義敎を自邸に招き、初春の厄拂ひに託して將軍の印判を詐取し、又藤内の情人の侍女中川を欺いて義敎の腰刀を盜ませた上罪に陷れて雪中に凍死せしめる。忠臣斯波義將は小水龍の奇瑞並に雪女となつて現はれた中川の幽靈の告によつて將軍の難を知り、藤内を引連れ急遽赤沼の館に到り、言葉を盡して將軍を諫めたが聽かれず、勘氣を蒙つて立ち去る。途中、山崎の關戸の院に着くや朋輩細川勝秀が後より追ひ來り、共に時節を待つて惡人を滅さうと誓ふ。〔中之卷〕藤内の弟二郎は小鼓の名手、一三郎は大鼓の妙手で共に浪人暮し、初春の祝儀に鼓を打つて町々を廻り、本阿彌の邸前に來かゝり、互に身の上の述懷より、二郎は斯波に就いて高名せん、三郎はいや赤沼に仕へて立身せんと言ひ募り、互に爭つた後三郎は何處ともなく立ち去る。折柄塀内より羽子板の音が聞え來るので、二郎はこれに拍子を合せて鼓を打つたのが緣となり、本阿彌の一人娘玉椿に導かれて邸内に入る。そこへ三郎が引返し來り、兄の樣子を窺はんと邸内に忍び入り、出來心から床の間の一腰を盜んで行方を晦す。ところがその嫌疑が二郎にかゝり、棒を持つた下人達に取卷かれて我が家へ護送される。妻小晒は悲しみ嘆き、身を賣つて僅かに夫の縄目の恥を救ふ。賣られた小晒は途中で月代を剃つて男子の姿とされ、斯波義將の身替りとなつて豫て彼と許嫁の間なる古川櫓頭清氏の息女琵琶の君の許へ送られる。姫の兄氏連は赤沼黨であるが、この義將を怪しみ、その系圖を尋ねたところ、小晒は口から出任せの「もんさく系圖」を言ひ立てて逃れる。一方、二郎は義將が敵古川に堺入したと聞いて義將の身を氣遣ひ、古川の館に來つて義將に對面すれば、圖らずも我が女房であつたので驚き且つ喜ぶ。その夜氏連は新に召抱へた三郎並に密かに都より下向せる赤沼判官等と謀り、義將の寢所を襲ふが、二郎夫婦が力を合せて追ひ散らし、三郎を生捕りにする。〔下之卷〕義敎は畠山小將監及びその郎等なる太鼓の名人藤内四郎を伴として都を落ちのび、「源義敎公道行」となり、甕の原に着くが、こゝで赤沼父子が吉野山に立て籠れるを斯波・細川が攻め寄せるといふ事を聞き、急いでその陣に赴く。かくて藤内太郎・二郎、

東方の實子とした者であつた。即ち伊三郎と孝次郎は異父の兄弟であつた。かくて花園は孝次郎とめでたく結婚し、千葉家・伊勢屋兩家は舊に倍して睦じく往來した。後、花園は惡緣の身に纏へるに驚き、舅孝左衞門死去の後、暇を乞ひ、尼となつて貞操尼と言つた。

【解說】鼻山人の作は人情本の型に入らず、人物の行動に人間らしい描寫が見え、面白い所がある。伊三郎の性格、花園の戀の變遷などそれである。併し大局から見れば時代の束縛は免れず、强ひて勸善懲惡にしたり、孝次郎が重寶をさがしに遊里に入り込むなど、脚本めいた構想である。ただ部分的に洒落本と人情本との過渡期に屬する自由な描寫の見えるのが、この作者の特徴である。〔山崎〕

おりさ、弟丹松と云ふ二人の子を相手に暮してゐた。その親戚に青原屋武惣治と云ふ豪家があつたが、老年で多病なので、萬事丹六が世話するうち、武惣治の後妻おかちに口說かれて遂に通じた。間もなく武惣治は病死したのでおかちは丹六方へ來た。丹六は急に財產家となつたが、彼も病死した。おかちは丹六の子を寶子同樣に愛してゐたが、急に態度が變つて二人を憎み出した。おかちには武惣治との間に一人娘おふりがあつたが、畠山家に武家奉公するうち殿に愛されて中老となつてゐた。さて丹六は生前手代喜代七をおりさと結婚させ、跡をつがせる豫定であり、二人も夙く戀し合ふ仲だつた。そこで喜代七を京都へ仕入れにやり、その辛抱を見屆けてから定める事となつてゐた。然るに喜代七は京都で三笠

操を守つて拒む。姉弟二人は繼母の虐待に耐へず、遂に家出し、海に投身せんとして旅僧に救はれた。けれども七里ケ濱に投身した噂高く、おかちは良心に責められて惱み、又おふりも喜代七とおりさの間を疑ひ責めた一人なので、これも妄念に責められて苦しみ、遂に病死した。おかちは全く懺悔して尼となつた。段兵衞は心面白からず思ひ、召仕の女おしまと通じて金を持つて逃げた。玉照は情死すべき日に喜代七が來ぬので一時は煩悶したが、或る九州の大名の家老職を勤める武士に寵せられ、身請けされて本妻となつたが、夫が病死し、世繼がなくて親戚に家を奪はれようとしたので、その訴訟のために鎌倉に來り、或る日丹松の働く姿を見、事情を聞いて同情して養子にした。彼女の働きでおりさを喜代七の

る。その騷ぎに子供の母が出て來て、御坊樣は此處にゐながら、見てゐて加勢をして下さらぬのか、平生いとしいの可愛いのと言ふは誰が事ぞと言ふので、住持も女を制しながら、やはり女と共に子供に加勢して雪を打合ふ。某は、其處な女と御坊とは女夫ぢやと言つて逃げ入りながら罵る。

【解說】子供が、住持と後家との隱し子である事になつてゐる本もある。寬正五年の京都糺河原勸進能の折、三日目に演ぜられた。「糺河原勸進猿樂日記」に「ワラウチ」とあるのは、「ゆきうち」を「わらうち」に誤寫したものであらう。ワラウチは藁打であるから、繩綯の狂言であらうなどといふ說は、後人が附會した妄說である。〔藤田〕

雪おろし（ゆきおろし）

俳論書　一册　寫　【著

今は既に悔悟せる三郎・四郎・大炊之介實は五郎等五人の兄弟各々その得意とする笛・小鼓・大鼓・太鼓・棒を働かしての奮戰、中川の幽靈雪女の助け、斯波・細川の忠戰により逆臣滅んで、皆々目出度き春を祝ふ。

【解說】本作は「聲曲類纂」に、近松時代物三傑作の一としてある。一人の主人公を中心とせず、藤內五人の兄弟を立役としてそれ〴〵皆縱橫に活躍せしめ、又各卷頭に「藤內樂車」の所作を据ゑたのを初めとし、松囃し・厄拂ひ・雪女・大黑舞・追羽子・もんさく系圖・笛・小鼓・大鼓・太鼓・棒等の趣向を取入れる等、場面の變化に富んだ專ら舞臺效果本位の賑かな作であるが、而も全體が整然と纏まつてゐて、確かに近松時代物中異色あるものである。三段形式を時代物に試みた點よりしても、近松はある抱負をもつて本作の筆を採つたのではないかと想像される。

【參考】近松之研究坪內・綱島編○近松傑作全集卷之四解題水谷不倒○近松名作集上解題黑木勤藏○近松全集第七卷解題藤井乙男○大近松全集第十二卷解說木谷蓬吟　〔高野(正)〕

雪の魚（ゆきのうを）　隨筆　三卷　寫【著者】觀湖（美作の人。傳未詳）【名稱】卷初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをはりの穢汚なきをうらやみて」本書の題號としたものと見える。【解說】編者が多年諸國に巡遊して、見聞した奇事・異蹟を輯錄したもので、概ね記實ではあるけれど、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を挿む。上卷に雪の魚・野馬・山上の雷・雷獸・朽御門・白雨の鎌・猩々の毛等五十三項。中卷に曲玉・同連環・江口の君堂・大物橋・八幡鐘・獅子頭鼈・道通等六十三項。下卷に高砂の松・人麿祠・石寶殿・島村蟹・宇都宮鐵塔婆・古鏡・小草のあは等五十二項を收めてゐる。文政十一年著者の序がある。　〔和田〕

幸典（ゆきのり）　歌人【姓名】海野氏、又滋野氏。通稱は源兵衞。【號】游翁・柳園【生歿】寬政元年江戶に生れ、嘉永元年（一五〇八）十一月十一日歿す。享年六十。【法名】花月院好山游翁居士【墓所】東京早稻田宗參寺【閱歷】信濃の人、滋野小太郎仲次の末孫である。初めは松江藩に仕へてゐたが、早く世を逃れ、剃髮して游翁と號した。「うれしきは我身なりけり月花にあそぶ翁と世にはいはれて」は、その時の歌である。別に柳園と號したのは、庭に古い柳が一本あつたからである。【著書】天言活用○天言活用圖（安良麻之）○五十音口訣○ただごと歌の辨○歌のしらべの事○贈香川景樹書○類題現存歌選○游翁隨筆○柳園家集。【業績】幸典は、早くより廬庵（別項）の風を慕ひ、その門人前場默軒に入門の名簿を送つて學問を尋ねてゐた。夙に「ただごと歌の辨」の歌學書を著はしてゐる。又、技巧を斥け、調を重しとする桂園の說に共鳴し、「歌のしらべの事」の一書を著はし、歌のしらべは概念的に說明し得るものではなく、自ら悟るものであることを述べてゐる。晚年には景樹の歌論に一層深く感じ入り、「響」についての獨自の說を立てて景樹に送つた。天保十二年、景樹の歿する二年ほど前、幸典五十三歲の時のことである。一方幸典は、文法を深く學び、新しい敎授法を以て、門弟に動詞の活用、てにをはなどを說いた。小林歌城が匿名で書いた「宣長幸典を詰る」の一文は、その敎授法を揶揄してゐるのである。この文法の方面では、幸典は宣長を思慕し、思慕の延長として一時は皇學にも手を染めてゐた。晚年には專ら作歌につとめた。門弟が頗る多い。門下千家尊孫・半井梧庵は、それ〴〵幸典の敎を傳へた文法に關する著述をしてゐる。また門下前田利保は文法書の外に、多くの歌學書を出して幸典の說を傳へてゐる。　〔鍾田〕

雪姬（ゆきひめ）　「祇園祭禮信仰記」を見よ。

行平（ゆきひら）　歌人【姓】在原【別號】在納言【歿年】「公卿補任」によれば寬平五年薨、七十六歲とあるが、「本朝皇胤紹運錄」には寬平七年薨、八十二歲とある。仁和三年（一五四七）の上表文には七十に及ぶとあるから、寬平五年（一五五三）七十六歲說に從ふべきか。【家系】阿保親王の第二子（三代實錄。或る說長子）。母は桓武天皇の皇女伊登內親王。兄弟に仲平・守平・業平があり、子に遠瞻・友于及び女子一人がある。天長三年、親王は上表して御兄高岳親王の御子が既に王號を停めて姓を賜はつてゐるのに倣ひ、仲平以下にも姓を賜はらんことを乞ひ、在原姓を賜はつた。【閱歷】承和七年藏人に任じ、翌年從五位下に叙せられ、侍從・左兵衞佐・右近衞少將・內舍人・內匠頭・左京大夫・信濃守・大藏大輔・備前權守・左兵衞督・備中守を歷任して貞觀十二年參議に任じ、次いで左衞門督・藏人頭を兼ね、別當となり、貞觀十五年從三位に叙せられ、太宰權帥に任じた。當時對馬の食糧は九州から海漕してゐたが、海上は危險であり、費用も莫大であつたので、行平は壹岐から油その他の貢を九州に納めてゐたのを廢し、壹岐島民には壹岐の水田を耕し、その收穫を對馬に送らしめ、九州から對馬に送つたものと、壹岐から九州に送つたものとを相殺する事を建議して許された。又肥前松浦郡庇羅・值嘉の兩鄉を二郡として獨立させ、これを值嘉島として新に島司郡令をおき、以て收稅を圓滑ならしめる事をも建議して許された（三代實錄貞觀十八年三月）。その後、治部卿・備中守・近江守を兼ね、元慶六年、中納言に進み、八年正三位に陞り、民部卿を兼ねたが、三月二十一日上表して民部卿を免ぜられんことを乞うたが許されなかつた（三代實錄）。仁和元年按察使を兼ねたが、老齡職に堪へないとの故を以て、三年正月以來三度上表して骸骨を乞ひ、四月遂に許された。「古今集」卷十八に「田村（文德天皇）の御時に事にあたりて、津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮の內に侍りける人につかはしける。わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ」とあり、「源氏物語」に「おはすべき所は行平の中納言の藻鹽たれつゝ侘びける家居近き

歌仙切　在原行平（福岡子爵舊藏）

巻之四解題水谷不倒〇近松名作集上解題黒木勘藏〇近松全集第七巻解題藤井乙男〇大近松全集第十二巻解説　木谷蓬吟　【高野(正)】

雪の魚　隨筆　三巻　寫【著者】觀湖(美作の人。傳未詳)【名稱】卷初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをはりの穢汚なきをうらやみて」一本書の題號としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、見聞した奇事・異蹟を輯錄したもので、概ね記實ではあるけれど、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を挿む。上卷に雪の魚・野馬・山上の雷・雷獸・朽御門・白雨の鎌・猩々の毛等五十三項。中卷に曲玉・同連環・江口の君堂・大物橋・八幡鐘・獅子頭鐙・道通等六十三項。下卷に高砂の松・人麿

學問を尋ねてゐた。夙に「ただごと歌の辨」の歌學書を著はしてゐる。又、技巧を斥け、調を重しとする桂園の説に共鳴し、「歌のしらべの事」の一書を著はし、歌のしらべは概念的に説明し得るものではなく、自ら悟るものであることを述べてゐる。晩年には景樹の歌論に一層深く感じ入り、「響」についての獨自の説を立てて景樹に送つた。天保十二年、景樹の歿する二年ほど前、幸典五十三歳の時のことである。一方幸典は、文法を深く學び、新しい教授法を以て、門弟に動詞の活用、てにをはなどを説いた。小林歌城が匿名で書いた「宣長幸典を詰る」の一文は、その教授法を揶揄してゐるのである。この文法の方面では、幸典は宣長を思慕し、思慕の延長として一時は皇

岳親王の御子が既に王號を停めて姓を賜はつてゐるのに倣ひ、仲平以下にも姓を賜はらんことを乞ひ、在原姓を賜はつた。【閲歴】承和七年藏人に任じ、翌年從五位下に叙せられ、侍從・左兵衞佐・右近衞少將・因幡守・兵部大輔・中務大輔・左馬頭・播磨守・内匠頭・左京大夫・信濃守・大藏大輔・備前權守・左兵衞督・備中守を歴任して貞觀十二年參議に任じ、次いで左衞門督・藏人頭を兼ね、別當となり、貞觀十五年從三位に叙せられ、太宰權帥に任じた。當時對馬の食糧は九州から海漕してゐたが、海上は危險であり、費用も莫大であつたので、行平は壹

行平原作（福岡子爵舊藏）

わたりなり」とあつて、須磨の卷は行平をモデルにしたのだとさへいはれてゐる。又謠曲「松風」は行平貶謫中のことを題材としてをり、後の文學に影響することの多い人物である。「後撰集」卷十五に河原左大臣との贈答歌があり、「拾芥抄」によると奬學院が行平の進言によつて設けられたことがわかる。【作品】勅撰集に入る歌は古今集四首、後撰集三首、その他に凡そ三首ある。

【歌風】　客觀の美を克明によむ傾向がある。「八雲御抄」に「昔の在納言は春のきる霞の衣、涙の瀧とよめり」と記させ給うてゐる。

【參考】三代實錄〇宇多天皇實錄(寛平五年七月)〇古今集目錄〇公卿補任　〇大日本史(九〇・一一九)　【西下】

行平磯馴松　「倭假名在原系圖」を見よ。

行平物語　「松風村雨」を見よ。

行文　漢學者【姓】背奈公。「懷風藻」に背奈ノ王と記したのは誤であらう。鹿持雅澄は「續日本紀」を引いて、「天平十九年辛亥正六位下背奈ノ福信外正七位下背奈大山等八人賜ニ背奈ノ王ノ姓一云云とある。故に行文の時はまだ背奈ノ王とは稱してゐなかつた」と言つてゐる。【生歿】神龜年中に歿す。享年六十二。【閲歴・人物】養老年中に明經第二博士となつた。同五年正月の詔に、「文人武士國家ノ重、醫ト方術古今斯崇云云」とあつた時、當時正七位上明經第二博士であつた行文は、絁十五匹、絲十五絇、布三十反、鍬二十口を賜はつた。又神龜四年十二月には正六位上から從五位下を授けられたことが「續日本紀」に見えてゐる。「懷風藻」には從五位下大學ノ助と見え六十二に卒したと記してゐる。「懷風藻」に詩二首と「萬葉集」に短歌一首を見るのみで、その他の資料に乏しい。　【山岸】

雪丸げ　俳諧集　上下二册【編者】周德の奥書によると、叔父河合曾良の遺稿を周德が整理したものである。【名義】題號は卷頭にある芭蕉の吟、「君火をたけよきもの見せん雪丸げ」より取つたものであらう。【刊行】元文二年【諸本】原本は今日では稀覯の方で安永四年の再版本が行はれてゐる。芭蕉翁七部餘錄・七部集總覽篇(俳文學大系)所收。【内容】元祿二年の春、芭蕉が「奥の細道」(別項)の行脚に出ない前の塔山旅居の七吟歌仙や諸家の發句、次に行脚に出て後の行脚中に成つた八卷の歌仙、裏移まで七句のもの一、二十句のもの一、三句物四、表四句までのもの四、外に芭蕉その他諸家の發句がある。右の外、卷首に芭蕉の「雪丸げ」の吟及び深川八貧の發句があり、卷尾に芭蕉の笠張の前書文を持つ句がある。なほ安永本には卷尾に芭蕉松島獨吟歌仙があるが、これは元文本にはないものではあるまいか。集中の發句は凡て七十句あつて、うち芭蕉の句が四十六句ある。【價値】「奥の細道」の行脚中の那須・須賀川・大石田・新庄・羽黒山本坊・鶴岡・酒田・直江津その他に於ける芭蕉及びその土地々々の人々の作を知るには唯一の書である。殊に曾良は同行脚の同伴者で、その遺稿であるから内容は最も信頼すべきものである。ただ問題になるのは卷尾に附せられた芭蕉の松島獨吟歌仙で、該歌仙は、安永二年に須賀川の晋流が曾良の手跡といふものによつて板行したが、幽嘯の「松島五歌儀考」その他には、芭蕉の作とする事の疑はれてゐるものである。　【萩原】

雪見御幸繪卷　繪卷　【解説】東京美術學校所藏一卷。白河院が小野の雪見に御幸の物語を畫いたもので、この物語は「著聞集」や「十訓抄」にも載せられてをり、本卷はそれ等と大同小異のものであるが、前の方は少し缺けてゐる。話の筋は或る雪の朝白河院が小野の雪見に皇太后を訪ねんと思ひ立たれたので、隨身の一人がこれを小野に急報ずる。不意のこととて打出の裝束も足らぬ始末ながら、皇太后は雪見の人が家に入られることもあるまいとて打騷ぐ樣子もない。果して院は庭で雪を眺めて還御になつたが、その後、この日のもてなしの御禮に、美濃國の一所を御領として差上げたので、皇太后はこれをかの隨身に預けたといふのである。今は畫の順序がやゝ亂れ、畫面も傷んでゐるが、描寫纖麗、情趣も濃やかである。「西行物語繪卷」(別項)などと等しく、土佐經隆筆と傳へられてゐるが、「西行物語」ほど纖秀とも言ひ難く、畫致から見ても、やゝ下つて鎌倉末期の製作と思はれる。　【田中(一)】

雪見御行繪卷（東京美術學校藏）

遊行柳　「草木精魂物の諸曲」を見よ。

行義　故實家【姓】松岡氏【歿年】嘉永元年七月晦日歿。【墓所】東京府下目黒祐天寺【家系】辰方(別項)の長男、家學を繼いで故實に精しかつた。【著書】甲冑着用圖一帖(天保十年七月成。嘉永元年十一月刊。鎧・腹卷・胴丸・當世具足・下腹卷・小具足の體・雜兵・後世雜兵の風を大きく圖したもので、下腹卷着用の體の外は、いづれも前後二枚宛總計十七圖で皆着色してある。近世武裝の大體を知るに便なるもの。卷尾に甲冑の體制、製作の沿革大要を記してある)〇水干考一卷(天保十三年成。引用の記事はその子明義の纂輯に係る)〇汗衫考一卷〇細長考一卷(嘉永元年三月成)〇後松日記(別項)〇手綱染樣考〇續類聚儀式等。

ゆく雲　詩集　【著者】兒玉花外　【刊行】明治三十九年一月、隆文館。【解説】花外の代表的詩集で、卷頭の「馬上哀吟」を初め通計四十一篇を收む。その内十六篇は「花外詩集」より轉載。詩作年代は三十一年作の「雛の歌」より三十八年作の「血歌」に終つてゐる。「闇中田鼠に告る歌」は集中の力作で當時世評にも上つたもの、「馬上哀吟」も亦一部青年の間には傳誦された作である。「雛の歌」は最初「東京獨立雜誌」に發表されたので、花外が出發點を示すものとして色調が鮮明である。その他「蝶賣娘」「支那パイプ賣」「紡績工女」「小囚」「空饅賣」などの題材は、皆花外の特色を示すもので、勞働者階級を扱つた作品である。大部分は七五調であるが、漢語脈から來た現代語を多く用ひてゐる。花外は詩の形式など

に餘り囚はれたくない方であつたから、勢ひ無造作に表現したといふ點もあつた。（兒玉花外參照）〔河井〕

愈愚隨筆（ゆぐずるひつ） 隨筆 十二卷 【著者】劉有鄰（傳未詳） 【刊行】延寶元年 【解說】人事・世事及び天地間の森羅萬象に係る簡明の知識を幼蒙などに與へようとする目的で、支那の羣籍から要文を摘抄したもので、一種の事彙の如き書である。ただ意に任せて錄し、前後の序次もないので「隨筆」と名づけたとある。併し下の類別を立ててほぼ秩序を整へてゐる。卽ち卷一に天文（日以下天五氣地五味の二十二目）、地理（東西以下錦江の六十四目）、卷二に人倫（幼敏類十一目、孝子類八目、身體類四十七目、字義類十一目、察智類八目、忠臣類四目、讎過類十四目）、卷三に人倫（仙術類八十一目、釋敎類四十五目）、卷四に人倫（理學類四十五目、雜錄三十三目）、卷五に人倫雜錄（八十九目）、卷六に人倫女之部（貞女類十八目、賢女類十五目、寄女類七目、寵妾類十三目、妬婦類九目、頑婦類六目、淫婦類七目、雜錄十一目）、卷七に食服類（三十一目）、詩文書籍類（四十六目）、卷八に器財類（百九目）、卷九に鳥類（四十目）、獸類（三十三目）、卷十に獸類（八十五目）、卷十一に蟲類（四十九目）、魚類（十六目）、卷十二に草木類（六十二目）、鬼神類（二十三目）を載せ、每條に所據の漢籍名を示してゐる。左傳・史記・漢書・南史・北史・綱鑑・太平御覽・三綱行實・性理大全・理學類編・博物志・草木子・五雜俎・瑯邪代醉編・搜神記・山海經・佛祖統記・祖庭事苑・事文類聚・鶴林玉露等數十部に及んでゐる。寬文十二年伊氏玄節の序がある。 【和田】

ゆく春（ゆくはる） 詩集 【著者】薄田泣菫 【刊行】明治三十四年十月、金尾文淵堂。【解說】著者の第二詩集で、「沙彌がうたへる歌」「あゝ杜國」絕句十篇、「南畝の人」小引、「石彫獅子の賦」等を代表作とする。大體前者の傾向をそのまゝ展開せしめたもので、著者の詩風は既に確實に表はれてゐるが、表現と內容との間隙に大なる妨げがあり、詩語驅使の妙以上になほ實感を與へるものが少い。 【日夏】

弓削皇子（ゆげのみこ） 歌人 【生歿】文武天皇の第三年（一三五九年）七月薨去（續日本紀）。 【家系】「書紀」天武天皇の條に、「次妃大江皇女、生二長皇子與一弓削皇子一。」とある。大江皇女は天智帝の皇女であるから、弓削皇子は母方から言へば天智帝の孫、父方から云へば甥に當つてゐる。紀皇女（きのひめみこ）を甚だ戀して居られた樣子が、その作品から窺はれるが、結婚に到らずしてやんだものか、諸書にその記載がない。他に正式の妻子はなかつたやうである。 【閱歷】「書紀」持統天皇の第七年の條に、「春正月辛卯朔壬辰（註、二日）……淨廣貳授（ヲグ）二皇子長與（トニ）一皇子弓削一」とある外、官位經歷共に知れ難い。 【作品】凡て「萬葉集」に出づ。卷二相聞部に、持統天皇の吉野行幸に從駕した皇子から額田王におくつた一首。「弓削皇子思二紀皇女一御歌」四首。卷三雜歌部に「弓削皇子遊二吉野一時御歌」一首。卷八夏雜歌部に一首。卷八秋相聞部に一首。計八首。內容によつて分けると、紀皇女を思ふ四首とそれと同動因から作られたと見るべき卷八相聞部の一首、計五首の戀歌と殘り三首の紀皇女に無關係の歌とに分かれる。 【作風】何か沈痛な、もの悲しい調子が、人の胸を靜かに濕（うるほ）さしめる。「秋萩の上に置きたる白露の消（け）かもしなまし戀ひつつあらずは」（卷八）の如き、その代表的なものである。その悲しみの心が中臣宅守・茅上娘子（なかとみのやかもり・ちがみのをとめ）（各別項）の贈答歌のやうな强烈な嘆きとなつて現はれてゐず、ほつそりした嘆き、靜やかな寂しみの表現をとつて現はされてゐる事も亦、見逃してはならぬその作風の特色である。 〔森本〕

湯島詣（ゆしままうで） 小說 【作者】泉鏡花 【發表・刊行】明治三十二年十一月、春陽堂。鏡花全集第四卷・明治大正文學全集・現代日本文學全集所收。 【梗概】文學士神月梓は、玉司子爵の令孃龍子に想はれ、學資を貢がれた恩義からその婿となつた。然るに龍子は永年海外に育ち、名譽心が强く、見識のひどく高い女なので、梓は新婚早々から失望しなければならなかつた。或る朝、彼は平素信仰する湯島天神に朝詣の際、ふとしたことから藝妓蝶吉と深く相識るやうになつた。二人の仲は離れられぬ關係になり、あまつさへ蝶吉は梓の兒を宿したが、殘酷な周圍から强ひられて墮胎した。梓は女の無智を憐み、愛情にも惹かされたが、思ひ切つて身を退き、子爵家を出て獨り谷中の寺にかくれた。一方蝶吉は、橫戀慕の男の無體な惡戲から抱主に手ひどく折檻されるので、前後を忘れ、梓を慕つて家を飛び出したが、途中交番で捕はれる。梓もその日、散步の歸途、不意に警官に不審訊問をされ、蝶吉の尋ねてゐた男と分つて交番まで連れて行かれる。行つて見ると蝶吉は、侮辱を受けたと見え、取亂した姿で打倒れてゐた。梓は心に深く決し、やがて蝶吉を抱いて彼は大川へ俥を走らせた。地位も名譽も一切を擲つて、ただ眞實の愛のために、彼等は身を投じてしまつたのである。

【解說】作者の女性觀に就いては、「通夜物語」（別項）の解說中にも述べて置いたが、本書の女主人公蝶吉も亦その代表的人物である。この作品に見られる戀愛至上主義、卽ち形式主義に對する自由主義、貴族主義に對する反抗等は、何れも浪漫派の作者の本質を證するものである。 〔以上水上・平松〕

【附記】この作は、この作者の外の有名な諸作のやうに、東京に於て直接に脚色上演されなかつたが、作の筋や趣向は、屢々厚顏無恥な脚色者達によつて無斷剽竊され、或は燒き直された。明治四十一年六月、東京明治座にて上演された「みじか夜」の如き最も露骨なその一例である。この脚色の中心人物たる文學士小栗某と藝妓米香とは、とりも直さず神月梓と蝶吉で、それを圍繞する人物も、ただ高田實と藤澤のために新しく設けた原田某といふ米香の兄と、北上某といふ華族の息子との外は、皆それ〴〵「湯島詣」の中の人物になぞらへてある。明治四十一年頃にはかうした不道德な事が、まだ平氣で行はれてゐた。 〔以上久保田〕

融通念佛緣起（ゆづうねんぶつえんぎ） 繪卷 【解說】融通念佛の開祖良忍上人一期布敎の物語に併せて同宗興隆の事蹟を畫いたもので、鎌倉末葉の正和三年に作製されたのを初めとして、以後南北朝から足利時代にかけて盛んに行はるゝに至つた。殊に南北朝の康應明德の交同宗の良鎭上人が勸進して全國六十餘州に頒布せんことを企て、これを上梓して上下二卷の版本を作製したことは宗旨普及の方便としても注目すべく、又我が國版畫の發達の上にも劃期的な事業と云はねばならぬ。この版本

讓狀（ゆづりじやう） 古文書 【解說】動產・不動產を他に讓り渡す證文。後日の證據とし、兼ねて第三者の妨を防ぐためのものである。普通は自筆で書き、年號月日を記す。尤も文體は當事者に依り、官府體・往來體・假名文等色々である。而して讓與の目的物は、初めの方に特記するか或は本文中に書き、差出書は讓主

（滅寺涼清）趣縁佛念通融

ゆずのつ

ゆずる

融通念佛縁起【解說】

融通念佛の開祖良忍上人一期の行業の物語に併せて、まだ年號で行はれてゐた。明治四十一年頃にはかうした不道德な事が、まだ年號で行はれてゐた。明治四十一年頃にはかうした不道德な事

由豆流【姓名・歌人】

本姓朝田。名は由豆流又弓弦と書す。通稱弥太郎。伊勢國朝田村に生れ、弘化三年二五〇六閏五月十日江戸に歿す。享年五十八【法名】遊林院

湯津爪櫛【成立】【内容】

安政四年【内容】五十嵐篤好【成立】嵯峨清涼寺本に於て書寫し、同寺本と校合して言靈說を承けて事柄を明にし、且つ古書の說を參照（次節參照）

融通念佛縁起【解說】

融通念佛の開祖良忍上人一期の行業の物語に併せて、まだ年號で行はれてゐた。明治四十一年頃にはかうした不道德な事

ゆく春【著者】【解說】

【著者】薄田泣菫　【解說】金尾文淵堂【明治三十四年十月】

【刊行】

【刊行】明治三十四年十月　金尾文淵堂　【解說】薄田泣菫　【著者】詩集

【作風】

【作風】何かしら沈痛な、人の悲しい調子が、人の女に無關係の眺めとに分かれる。

由豆流

國學者・歌人【姓名・号】由豆流（ゆづる）　元阿花押　康曆三年正月十三日　所載然讓狀也、仍爲後日、讓狀如件、

心、各別於有實證者、讓與所帶不可有知行之由、可有違亂焉、自餘於兄弟子等者、別於讓與者不可加扶持、直元有別

安藝國吉田庄地頭職分事、嫡子治部大輔康房所讓與也、但越後守直元弃女子等各別於讓與者不可有違亂焉、自餘於兄弟子等者、別於讓與者不可加扶持、直元有別

【解說】動產・不動產讓狀（ゆづりぶみ）

古文書

足利時代の應永二十四年の奥書ある小林寺本の遺品として明應元年に成阿彌陀佛あざ各一軀を造立し、一年に美濃守勅使が奉加した大型の奥書あり、又も古くは念佛寺本が盛んに行はれて、これに次いでは、

【成立】【著者】

【著者】湯津爪櫛　【成立】寛正四年から同六年の間に融鏡上人の勸進によつて作製されたもので、署名により、恐らく融鏡上人の著作であらう。

【内容】

【内容】五十嵐篤好

仕して昨夜の不思議な御夢想を物語らうとすると、丁度大庭平太景義が同候して夢合せをした。一番には東山から八重雲を分けて登る旭を君が戴きとられ、二番には淨衣に立烏帽子、漆沓といふ装で君が相模八鮫ケ嶽に登り、四方へ七足づつ歩んだ後、北に向つて微笑まれ、三番には左に鬼界ケ島を右に繋土ケ濱をまた君の前に景義が酒餚を供へ、四番には君の左右の袖に三本の疎小松を育てられる夢であつた。一番は征夷大將軍と仰がれるべき、二番は七難即滅七福即生、北條を憑んだ立たるべき、三番は君の知行し給はぬ國もなき瑞相で、四番は君と安達と六郎との長壽並の夢合せであつた。〔島津〕

占夢南柯後記 ゆめあはせなんかのちのき

讀本 八巻十冊【作者】曲亭馬琴【畫工】葛飾北齋【名稱】外題に三七全傳第二編（前帙）、三七全傳第三編（後帙）と有書がある。「三七全傳南柯夢」（別號の續編）後日譚の形を取つて「南柯後記」と名づけた。又占夢に就いては後候に夢合せの由來を誌して「人間萬事皆非夢者丙吝是爲」とある。【成立】「南柯夢」が頗る好評であつたので、板元木蘭堂榎本平吉がその續編を請うて、これを作らせたのである。馬琴は後候の附言に、今歳をめて二帙とするものは書肆の所爲だと言つてゐる。【刊行】文化八年【諸本】江戸版の外に、大阪群玉堂河内屋茂兵衛板の後刷本がある。柚珍稽古文庫・馬琴傑作集（帝國文庫・國民文庫・讀本集（日本名著全集）・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）等所收。【題材】正編「南柯夢」と同樣に、淨瑠璃に作られた御伽草子の「長町女腹切」（別項）に作られた花牛七の精話を題材とした。これは夙く近松門左衛門の

弓八幡 ゆみはちまん

「神事物の諸曲」を見よ。

夢合せ ゆめあはせ

幸若舞曲 二巻（三十六番の一）（慶應義塾圖書館目錄には數へず）【作者】未詳【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）。新群書類從第八（舞曲部）所收。【題材】平治物。祝言の曲。「源平盛衰記」（巻十八）と同材。「平治物語」（巻三）には、繩繩源五盛安の夢語りとし、「曾我物語」（巻二）には、盛長が夢を平權守景延が合せる事としてある。【梗概】安達盛長が、早曉兵衛佐頼朝の館に出仕して昨夜の不思議な御夢想を物語らうとすると、丁度大庭平太景義が同候して夢合せをした。一番には東山から八重雲を分けて登る旭を君が戴きとられ、二番には淨衣に立烏帽子、漆沓といふ装で君が相模八鮫ケ嶽に登り、四方へ七足づつ歩んだ後、北に向つて微笑まれ、三番には左に鬼界ケ島を右に繋土ケ濱をまた君の前に景義が酒餚を供へ、四番には君の左右の袖に三本の疎小松を育てられる夢であつた。一番は征夷大將軍と仰がれるべき、二番は七難即滅七福即生、北條を憑んだ立たるべき、三番は君の知行し給はぬ國もなき瑞相で、四番は君と安達と六郎との長壽並の夢合せであつた。〔島津〕

占夢南柯後記 ゆめあはせなんかのちのき

讀本 八巻十冊【作者】曲亭馬琴【畫工】葛飾北齋【名稱】外題に三七全傳第二編（前帙）、三七全傳第三編（後帙）と有書がある。「三七全傳南柯夢」（別號の續編）後日譚の形を取つて「南柯後記」と名づけた。又占夢に就いては後候に夢合せの由來を誌して「人間萬事皆非夢者丙吝是爲」とある。【成立】「南柯夢」が頗る好評であつたので、板元木蘭堂榎本平吉がその續編を請うて、これを作らせたのである。馬琴は後候の附言に、今歳をめて二帙とするものは書肆の所爲だと言つてゐる。【刊行】文化八年【諸本】江戸版の外に、大阪群玉堂河内屋茂兵衛板の後刷本がある。柚珍稽古文庫・馬琴傑作集（帝國文庫・國民文庫・讀本集（日本名著全集）・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）等所收。【題材】正編「南柯夢」と同樣に、淨瑠璃に作られた御伽草子の「長町女腹切」（別項）に作られた花牛七の精話を題材とした。これは夙く近松門左衛門の

湯立の舞 ゆのたてのまひ

舞踊【名稱】湯を沸き立たした時の舞の義。【解說】荒薦の上に大釜を置き、熱湯を沸かし、巫女が兩手に持つ笹を以て湯をかきまはし、我が身にふりかけ、かくて神がかりの狀態に入る時に行はれる舞で、巫女舞（別項）の一つである。「金槐集」に神祇部にある「里みこが、みゆたて笹の、そよに、なびき起き伏し、よしや世の中」の歌は、この舞を如實に語つてゐる。〔小寺〕

湯原王 ゆはらのおほきみ

歌人【別名】湯原王（ゆはらのおほきみ）と【生歿】不明。ただ「萬葉集」巻六の天平五年の部（巻六は、歌作の年によつて歌を區分排列してゐる事、この王の如きは稀である。巻三雜歌部に、芳野での作が一首、それにつづいて宴席での作二首。巻四に、姓名不明の娘子との相聞贈答歌が七首。全然不明の對手への歌が二首、打酒の歌が二首、鹿の歌が二首、蟋蟀の歌が二首。巻八秋雜歌部に、七夕の歌が二首。巻八秋相聞部に、娘子（四の娘子と同一人に違ひないに贈る歌が一首。總計十九首（全部短歌）。當時の皇族中、額田王を除いては最も多くその作の殘つてゐる方である。なは湯原王の作が「萬葉集」に殘つたのは、大伴家持が重んじた爲めと思はれる。「萬葉集」に湯原王の作の見えるのは、巻三・四・六・八で、いづれも家持の編纂にかゝつたと見られてゐる巻である。思ふに家持は、手許に在つた湯原王の歌のうち、雜歌に入れ得るものは巻三と巻六に、純粹な相聞戀情の歌は巻四に、四季の戀と見られるものは巻八秋相聞部へと、四季の季・雜歌と見得るものは巻八秋雜部に、四季の女・紀郎女（各別項）等、家持が己の周圍の人の笠の郎女を「萬葉集」（萬葉の巻三・四・六・八）に取り入れたものと思はれる。これは笠の郎女の分を作者別に「萬葉集」總て「萬葉集」に出づ。當時の皇族中、その閲歴行跡の傳はらないで作品のみ多數殘されてゐる事、この王の如きは稀である。巻三雜歌部に、芳野での作が一首、それにつづいて宴席での作二首。巻四に、姓名不明の娘子との相聞贈答歌が七首。全然不明の對手への歌が二首、打酒の歌が二首、鹿の歌が二首、蟋蟀の歌が二首。巻八秋雜歌部に、七夕の歌が二首。巻八秋相聞部に、娘子（四の娘子と同一人に違ひないに贈る歌が一首。總計十九首（全部短歌）。當時の皇族中、額田王を除いては最も多くその作の殘つてゐる方である。なは湯原王の作が「萬葉集」に殘つたのは、大伴家持が重んじた爲めと思はれる。「萬葉集」に湯原王の作の見えるのは、巻三・四・六・八で、いづれも家持の編纂にかゝつたと見られてゐる巻である。思ふに家持は、手許に在つた湯原王の歌のうち、雜歌に入れ得るものは巻三と巻六に、純粹な相聞戀情の歌は巻四に、四季の戀と見られるものは巻八秋相聞部へと、四季の季・雜歌と見得るものは巻八秋雜部に、四季の女・紀郎女（各別項）等、家持が己の周圍の人の笠の郎女を「萬葉集」（萬葉の巻三・四・六・八）に取り入れたものと思はれる。これは笠の郎女の分を作者別に「萬葉集」總て「萬葉集」に出づ。當時の皇族中、その閲歴行跡の傳はらないで作品のみ多數殘されてゐる事、この王の如きは稀である。巻三雜歌部に、芳野での作が一首、それにつづいて宴席での作二首。巻四に、姓名不明の娘子との相聞贈答歌が七首。全然不明の對手への歌が二首、打酒の歌が二首、鹿の歌が二首、蟋蟀の歌が二首。巻八秋雜歌部に、七夕の歌が二首。巻八秋相聞部に、娘子（四の娘子と同一人に違ひないに贈る歌が一首。總計十九首（全部短歌）。當時の皇族中、額田王を除いては最も多くその作の殘つてゐる方である。なは湯原王の作が「萬葉集」に殘つたのは、大伴家持が重んじた爲めと思はれる。「萬葉集」に湯原王の作の見えるのは、巻三・四・六・八で、いづれも家持の編纂にかゝつたと見られてゐる巻である。思ふに家持は、手許に在つた湯原王の歌のうち、雜歌に入れ得るものは巻三と巻六に、純粹な相聞戀情の歌は巻四に、四季の戀と見られるものは巻八秋相聞部へと、四季の季・雜歌と見得るものは巻八秋雜部に、四季の女・紀郎女（各別項）等、家持が己の周圍の人の笠の郎女を「萬葉集」（萬葉の巻三・四・六・八）に取り入れたものと思はれる。これは笠の郎女の分作を

る。かくて神がかりの狀態に入る時に行はれる舞で、巫女舞（別項）の一つである。「金槐集」神祇部にある「里みこが、み湯たて笹の、そよそよに、なびき起き伏し、よしや世の中」の歌は、この舞を如實に語つてゐる。【小寺】

湯原王　歌人　【別名】湯原王（ゆはらのおほきみ）とも。【生歿】不明。ただ「萬葉集」卷六の天平五年の部（卷六は、歌作の年によつて歌を區分排列す）に、その作があるから、天平の頃（聖武帝の御代）にその青壯年期を送られた事が分る。【閲歴】志貴皇子（別項）の御子である。「日本後紀」の記事によつて、湯原王に少くとも二人の御子があつた事と、その第二番の御子が壹志濃親王であつた事とが分る。「皇胤紹運錄」によると、御兄宮に白壁王（光仁天皇）と海上女王。

半七初花に通じ、續編として興味中心を狙ふに都合がよかつた。しかし内容は、情話を變へて武家階級の忠義を中心とする說話とし、刀の祟りによつて全篇の事件を因果の糸に繫いだ。恰も正編の楠の精の祟りに對するもので、凡て馬琴の理想を内容として新しい說話を組み立てたのである。【價値】馬琴自身も、序に、全く局を結んだものを續けても勞して功がないと言つてゐるが、完結した正編に强ひて筆を續けてゐるので趣向に無理が多い。又因果の關係は餘りに露骨であり、結末もあわたゞしく筆を收めてゐる。傑れた作とは言へない。

【參考】馬琴傑作集・讀本集・曲亭馬琴集等の解說

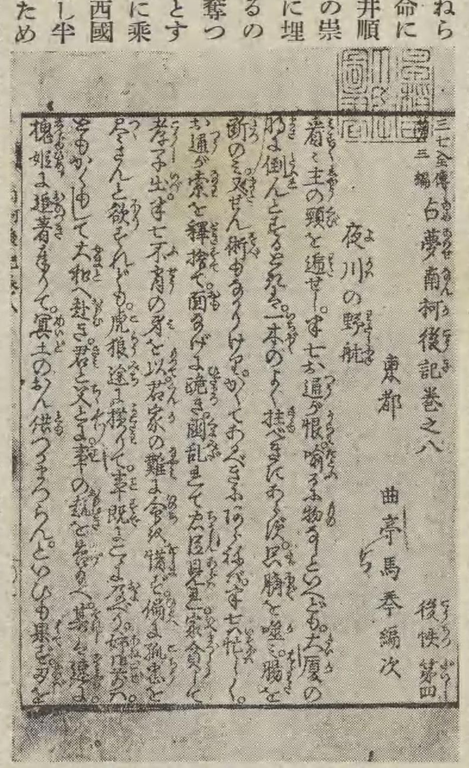
夢の代（ゆめのしろ）　雜書　十二卷　寫　【著者】山片芳秀　【成立】文政三年著者の自跋によると、本書の撰述はこの年より二十年前であつたが、その後塵事多端のため筆を擱き、文化年間に入つて失明して遂に續稿を果さず、さりとて誰に託すべきやうもないので、老病を冒して附錄を作るといふ趣である。然るにその附錄に相當するものは見えぬ。【内容】天文第一、地理第二、神代第三、歷代第四、制度第五、經濟第六、經論第七、雜書第八、異端第九、無鬼上第十、無鬼下第十一、雜論第十二の類門を立て、初學者の通識を擴充し、古來の迷信を破棄せしめる目的で、多くは著者の師中井竹山の所說を基礎とし、自家の新說をも披露してゐる。殊に、天文・地理の部に於て地動說を主張するなど、當時の俗衆を驚かしたことらしい。卷首に引用書約三百部の目を揭げ、次に例言十一則を記してゐる。卷尾に「山片芳達・山本義道・近藤秀實稿」とある。【著者小傳】山片芳秀。字は子蘭、號は蟠桃。通稱升屋小右衞門。播磨の人、大阪に出て富商升屋に仕へ、後その家を嗣いだ。儒學を中井竹山に受け、最も經濟に長じ、貨殖家を以て著はれた。文政四年歿。享年七十四。【和田】

夢結蝶鳥追（ゆめむすびてふにとりおひ）　脚本　五幕　世話物　【作者】二代河竹新七（默阿彌）　【名稱】俗に「雪駄直し長五郎」と呼ばれ、「蝶小蝶團鏡寫繪」「喜久富比翼蝶々」「花蝶姿繪合」「身重荷市大注連」等の名題に據つても上演せられた。【初演】安政三年三月江戸市村座。四代坂東彦三郎が坂東龜藏と改名、倅の竹三郎が五代彦三郎を襲名。

【役割】長五郎（龜藏）、源之丞（彦三郎）、下駄の市・梶井主膳（關三十郎）、おこよ・お長（菊五郎）等。

【諸本】默阿彌全集第一卷所收。【題材】講談に材料を仰ぎ脚色したもの。

【梗概】〔序幕〕山崎屋の養子與五郎は吉原藤屋の遊女吾妻と起請を取交はした深い仲であつたが、吾妻に執心の三原傳藏と山崎屋の娘お照に想を寄せる手代權九郎とは、浪人梶井主膳と共謀して呉服代の百兩を與五郎から騙り取る。そしてその百兩は吾妻身請の手金となり、傳藏宛にその證文が書かれるが、主膳は骨折賃の抵當としてその證文と、權九郎が與五郎宛に書いた百兩の借用證文とを預る。旗本の阿古木源之丞は、以前出入りの長五郎が雪駄直しとなつてゐるのに出逢ひ、想をかけた鳥追姿のおこよとの仲を取持つて貰ふ。おこよの父喜六は、長五郎の惡漢なのを氣遣ひ、梶井主膳の許へおこよを預ける。〔二幕〕お照は山崎屋を出された與五郎に、百兩餘りの價値ある三光の櫛を與へて身の明りを立てさせようと企てたが、長五郎のために殺される。駕籠屋甚兵衞は故主が歸參の叶ふ放駒の香合を見付けながら、その代金百兩の算段が出來ないところから死を覺悟したが、長五郎に留められ、三光の櫛を與へられる。一方山崎屋與次兵衞は熊坂お長と小手柄半次との美人局にかゝり、有金全部を取られる。〔三幕〕長五郎は主膳の家におこよと源之丞のゐることを知つて强請るが、主膳は嘗てお照を殺した時の庖丁を突き付けて刎ねつける。併し長五郎はその夜主膳が自分を殺さうとするのを知つて、半次と共に逆に主膳を殺し、序幕の二通の證文を大切なものとは知らず、金を包んで持ち歸る。お長は長五郎と通じ、邪魔な半次を殺したが、手下の訴人で召捕られ、長五郎だけは逃げる。〔四幕〕甚兵衞は三光の櫛を賣つた百兩を贋物の香合で道具屋善六に取られ、その櫛のためお照殺しの嫌疑で捕へられるが、會所で一緒になつたお長が自分の親と知り、お照殺しの罪を背負つて甚兵衞の繩目を解いた上、山崎屋から奪つた金の殘り七十兩を投げて遣る。長五郎は眞物の香合と知らず、善六から包みを奪つて甚兵衞の家へ逃げ



れ、又明和九年、近松半二・竹本三郎兵衞等の「京羽二重娘氣質」となり、歌舞伎にも數次演ぜられた事件であるが、馬琴は「女腹切」と「娘氣質」とに據つてゐる。又部分的には、福内鬼外の「忠信いろは實記」の六段目や、泰雲寺の白翁に法を求めたが、美貌故に許されず、顏を燒いたといふ了然尼の故事等に據つたものがある。

【梗概】天文十九年秋、赤根・蟻松兩家が浪速千日寺で半六敷浪の法會を營んだ時、今市全八郎の子全市は、今は半之進と改名してゐる半七を父の讐とねらひ、半之進が主命により嘗て先君續井順昭が米谷山の楠の祟りを鎭めるために埋めた寶劍を求めるのを知り、これを奪つて死地に陷れんとするが、劍は魔風に乘じ、光を放つて西國へ飛び去る。併し半之進は疑はれ、ために二男笠松平作は父に代つて切腹し、長男半七は許嫁園花と共に、寶劍を探ねて西國に赴き、圖らずも大内家に仕へてゐた姉お通が、續井家より嫁した槐姫に從つて陶晴賢の亂を逃れ來るに會し、遂に初花は姫の身代りとなつて殺される。然るにこれを狙ふ全介は、偶々主命により、婚家大内氏を援ける半之進から續井家の落胤であることを知り、擁せられて陶討伐の大將となる。

【構想】正編と構想を同じくする。半七お花の情話を借り來つたのは、原說話の輪廓を存し、

込み、そこで圖らずも甚兵衞の娘お關とその弟の浪市を、自分の胤を宿した女とその弟と知つたので、三原傳藏に賴まれて香合を盜んだのは自分の仕業だと書置き、眞物の香合と主膳から取つた二十兩を證文包みの儘渡して自害する。お長からの七十兩、長五郎からの二十兩、浪市の惠まれた十兩、それに傳藏宛の手付證文とで、甚兵衞の娘（お關の妹）の吾妻の身請も叶ひ、權九郎に騙り取られた百兩の證文で、與五郎の身の明りも立つと悅ぶ。折しも善六現はれ、香合を奪はうとして却つて百兩を落し、それで櫛を買ひ戻せば、甚兵衞の身に構ひなしと更に悅ぶ。〔五幕〕實の親が殿から預つて盜まれた爲め、命に拘はると聞いて狂氣した與五郎と、廓を抜けて來た吾妻の二人は、業平橋でおこよと源之丞に逢ふ。源之丞は長五郎の詮議から、非人の娘おこよとの仲が露顯の曉は家沒收と知つて、死なうとしたのであるが、おこよは守袋のお守から誠は武士の娘と分り、與五郎を追つて來た家來の口から、香合のことも吾妻の身請けも明かになり、二組の男女は手を執り合つて悅ぶ。

【解說】傳說上の情話を取扱つたものとしては、作者の代表作であり、又この年以來河原崎座より市村座に轉じ、約十年間世話物作者としての手腕を揮つたその第一作である點に興味が惹かれる。〔河竹〕

【參考】河竹默阿彌河竹繁俊〇續歌舞伎年代記

熊野（ゆや）「平家物の謠曲」を見よ。

踊躍念佛（ゆやくねんぶつ）「念佛踊」を見よ。

熊野物語（ゆやものがたり）「鬼一法眼三略卷」を見よ。

由良湊千軒長者（ゆらのみなとせんげんちやうじや）淨瑠璃　三段　お家物　【作者】竹田小出雲・二步軒・近松半二・北窓後一・竹本三郎兵衞・三好松洛　【興行】寶曆十一年五月十六日初日、竹本座。　【諸本】十行七十丁本（歌舞伎臺帳としては日本戲曲全集第二十六卷「續義太夫狂言時代物集」に同名のものを收む）。　【題材】直接「三莊太夫五人囃」（別項）に據つてゐる。

【梗概】〔初の卷〕（都鳥原の段）奥州の城主岩木判官政氏は、一族丹波の郡領大江時廉と共に國分寺造營の奉行として滯京し、島原の廓に入り浸つてゐる。岩木の家老藏之進は主家の息女安壽姫を伴ひ、政氏の遊情を諫めに來るが、聽かれないので、姫をその愛人元吉要之助に託して自ら大江を刺さうと決意する。政氏を毒害せんとした大江は、岩木の家寶珊瑚樹の寶劍の威德によつて失敗する。（松原の段）大江の命を受けた曲者が松蔭に臥してゐた怪非人から襤褸と面桶とを讓りうけて變裝し、廓歸りの政氏の乘物に近づいてこれを暗殺する。大江は密かに死體を己が乘物に移し、藏之進をして誤認してこれを襲はしめ、主殺しの罪人に陷れる。（奥州館の段）家老鬼柳一學は大江に內通して幼主對王丸を弑すべく命ぜられてゐたが、己が娘うは竹が忠臣藏之進と通じて一子民千代を儲け、不義の科を宥されてゐる所から返り忠をなし、對王を落して自殺する。北の方と安壽姫とは大江のために館を追はれ、要之助は跡を追ふ。〔中の卷〕（扇の橋の段）北の方・安壽・對王・要之助に追手がかゝる。騷ぎに紛れて獵師山岡權六は、母子三人を人買舟に賣り渡すが、岩木の後室と遺兒である事を知つて跡を追ふ。（後室館の段）主なき岩木の館では、對王の許嫁の幼い初姫が後室と呼ばれて、乳人うは竹の後見で公事訴訟を取さばいてゐる。主殺しの濡衣を被つて囚はれてゐる藏之進の正妻櫻戶が生さぬ仲の一子民千代を連れて夫の赦免を哀訴するが許されない。民千代を枷に櫻戶とうは竹との義理の立て合ひがある。幼い後室初姫に養子を迎へさせた上、藏之進を討たせようとして、大江の推薦で象潟權藤次なる中年男と初姫とが母子の盃事をするをかしみがある。うは竹は實子民千代を初姫に討たせようとするが、權藤次の妻が現はれて初姫を斬る。權藤次實は山岡權六で、初姫はその捨兒であり、曾て岩木政氏の暗殺者に襤褸と面桶を讓つた非人も亦彼であつた。（山の段）三莊太夫に賣られた安壽姫と對王丸とは、しのぶ・忘れ草と呼ばれて潮を汲み柴を刈る辛い勞働を强ひられてゐる。遊山に來た三莊太夫の娘おさんの遠目鏡に、姉弟を尋ね求める元吉要之助の姿が映る。彼はおさんが葬祭の日に都で見染めた若衆であつた。姉弟は「大江郡領時廉」と記した榜示を切るが、要之助はその罪を負うて由良三郎の繩にかゝる。（由良湊の段）姉弟と要之助とは、岩木の餘類として責められ、夜明けを待つて斬られる事になる。要之助の身の上を案じる娘おさんは、雪の庭に出て鷄が曉の刻をつくるのを止めようとするが、やがて自ら羽搏きして啼く。太夫の惡業が子に報うておさんは淺ましい鷄娘であつた。要之助は繩を脫して三莊太夫を斬り、誤つておさんをも殺すが、彼と太夫とは實の親子であり、且つ岩木政氏の下手人が太夫であつたことが判り、三莊太夫は悔悟の自殺を遂げる。上使と稱して太夫の首請取りに來てゐた非人姿の山岡權六も由良三郎を刺し、要之助と共に安壽・對王を護つて、北の方のゐる佐渡へ出發する。〔後の卷〕（道行追分奏）主從四人の道行。大江の討手を避けるため、山岡と對王とは安壽・要之助と袂を分つ。（質屋の段）藏之進は越後高田の質屋へ聟となつてゐるが、討手に追はれて來た安壽姫を葛籠の中に匿まひ、質物の地藏の木像とすり替へて危急を脫せしめる。女房の好意で路銀と佐渡への渡航の切手とを惠まれ、藏之進・要之助は姫に隨つて出發する。（栗の段）岩木の北の方は盲目となつて子を慕ひながら栗の鳥を追うてゐる。姫と對王との一行が落ち合ひ、親子主從六人打ち揃つて奥州へ向ふ。（大江館の段）櫻戶・うは竹と藏之進等は大江時廉を夜襲して討ち滅し、岩木の家は對王丸が相續する事となる。

【解說】所謂「五說經」の一として、一應固定した三莊太夫の傳說の、筋の上での大體の骨組を何等かの形で遺存しつつ、先行の諸義太夫淨瑠璃の近世的脚色の跡を襲ひ、しかも寶曆期操劇獨特の極端なる脚色偏重の態度を以て再創作したものであつて、佳作とは言ひ難いけれども、本曲と各時期の三莊太夫物の淨瑠璃とを比較することに依つて、淨瑠璃の史的展開の跡を具體的に看取することが出來る好材料の一つである。全曲の焦點は、中の卷の「由良湊の段」であり、就中「鷄娘」狂亂の個所は眼目の見せ場であるが、更に同じ卷の「後室館の段」の複雜極まる筋の構成と、煩瑣に過ぎる義理・人情の葛藤とも亦、これに次ぐ重點である。そして特にこの段に、享保以後の操劇極盛期が急速に下り坂に向ひつつあつた寶曆期の特性を看ることが出來る。また傳說の一定の原型が有する中世的特質を近世化しつつ、しかもその骨子のみを遺さうとする態度は、「三莊太夫五人囃」（別項）にも明かに見られ得るが、本曲に於ても、下の卷「質屋の段」に於ける地藏の木像のくだりなどがその適例

であつて、こゝでは身代りに於ける中世風の宗教的意義が、完全に抹殺されてゐるのを見ることが出來る。また所謂「栗の段」も、「五人囃」では夢の一場面として、先行作品に對する「挨拶」として取扱はれ、本曲に於ては義理・人情の相剋を其處に嵌め込むことによつて、古淨瑠璃の態度を一掃してゐるのを看る。なほ

の「オディッセイ」がその本據で、「百合若」の百合はユリシスの名から來てゐると推斷せられてゐる。若し然りとすれば、「天狗の內裏」（別項）の本據としてのイニードと共に、好一對をなす興味ある對照で、說話學上にも交通史上にも注目すべき資料である。素材上、構想上から見て舞曲中頗る異色ある作品である。

八萬餘艘を率ゐて出發し、日本と支那との境ちくらが沖に迎擊したむくりの四萬艘と對陣すること三年、遂に敵を擊破し、四人の大將等を或は殺し或は捕へて凱旋したが、途中少憩をとるため玄界島に上陸してまどろむと、俄に逆心を起した乳母子の別府兄弟が百合若をその儘置き去りにして立ち歸り、北方には戰

合若を厚遇するのであつたが、身體に苔が蒸してゐるやうなので、苔丸と稱して別府に使はれてゐた百合若は、新年となつて筑紫の廳に大小名が別府を祝つて集まつた時、かの昔百合若が手馴れの鐵の弓矢の誰も引く者がないのを取つて弓勢を示し、在廳の人々を從へ、兄の別府の大夫を誅し、弟の別府のしんを流

したのであるが、おこよは守袋のお守から誤
は武士の娘と分り、與五郎を追つて來た家來
の口から、香合のことも吾妻の身請けも明か
になり、二組の男女は手を執り合つて悦ぶ。
【解説】傳説上の情話を取扱つたものとして
は、作者の代表作であり、又この年以來河原
崎座より市村座に轉じ、約十年間世話物作者
としての手腕を揮つたその第一作である點に
興味が惹かれる。【河竹】
【參考】河竹默阿彌河竹繁俊○續歌舞伎年代記
熊野（ゆや）「平家物の諸曲」を見よ。
踊躍念佛（ゆやくねんぶつ）「念佛踊」を見よ。
熊野物語（ゆやものがたり）「鬼一法眼三略卷」を見よ。
由良湊千軒長者（ゆらのみなとせんげんちやうじや）淨瑠璃　三段　お家物　【作者】竹田小出雲・二
步軒・近松半二・北窓後一・竹本三郎兵衞・三好

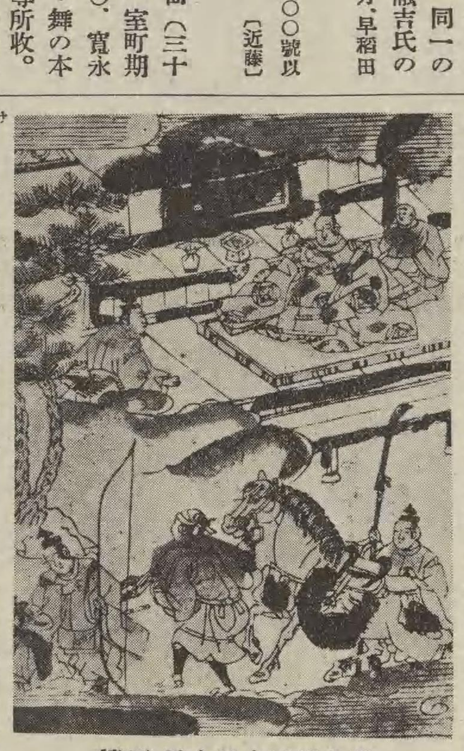
し、藏之進をして誤認してこれを襲はしめ、
主殺しの罪人に陷れる。（奥州館の段）家老
鬼柳一學は大江に内通して幼主對王丸を弑す
べく命ぜられてゐたが、已が娘うは竹が忠臣
藏之進と通じて一子民千代を儲け、不義の科
を宥されてゐる所から返り忠をなし、對王を
落して自殺する。北の方と安壽姫とは大江の
ために館を追はれ、要之助は跡を追ふ。（中の
卷）（扇の橋の段）北の方・安壽・對王・要之助
に追手がかゝる。騒ぎに紛れて獵師山岡權六
は、母子三人を人買舟に賣り渡すが、岩木の
後室と遺兒である事を知つて跡を追ふ。（後
室館の段）主なき岩木の館では、對王の許嫁
の幼い初姫が後室と呼ばれて、乳人うは竹の
後見で公事訴訟を取さばいてゐる。主殺しの
濡衣を被つて囚はれてゐる藏之進の正妻櫻戸

うて由良三郎の繩にかゝる。（由良湊の段）姉
弟と要之助とは、岩木の餘類として責められ、
夜明けを待つて斬られる事になる。要之助の
身の上を案じる娘おさんは、雪の庭に出て鷄
が曉の刻（とき）をつくるのを止めようとするが、やが
て自ら羽搏きして啼く。太夫の惡業が子に報
うておさんは淺ましい鷄娘であつた。要之助
は繩を脱して三莊太夫を斬り、誤つておさん
をも殺すが、彼と太夫とは實の親子であり、
且つ岩木政氏の下手人が太夫であつたことが
判り、三莊太夫は悔悟の自殺を遂げる。上使
と稱して太夫の首請取りに來てゐた非人姿の
山岡權六も由良三郎を刺し、要之助と共に安
壽・對王を護つて、北の方のゐる佐渡へ出發す
る。【後の卷】（道行追分姿）主從四人の道行。
大江の討手を避けるため、山岡と對王とは安

であつて、こゝでは身代りに於ける中世風の
宗教的意義が、完全に抹殺されてゐるのを見
ることが出來る。また所謂「粟の段」も、「五人
籠」では夢の一場面として、先行作品に對する
「挨拶」として取扱はれ、本曲に於ては義理・人
情の相剋を其處に嵌め込むことによつて、古
淨瑠璃の態度を一掃してゐるのを看る。なほ
本曲は屢々再演されると共に、歌舞伎にも移
され、「增補三莊太夫」その他の名題で今日大
歌舞伎に於ても稀に上演される。最近では大
正八年四月の明治座に原題のまゝで演ぜられ
た。また本曲と直接の關係はないが、同一の
題材を新しく脚色したものに、小寺融吉氏の
「安壽姫と厨子王丸」三幕（大正十年十月、早稻田
文學）がある。
【參考】歌舞伎細見○歌舞伎新報（一六〇〇號以
下）○新演藝・演藝畫報（大正八ノ五）【近藤】

百合若（ゆりわか）**大臣**（だいじん）「百合若大臣」を見よ。

百合若大臣（ゆりわかだいじん）幸若舞曲（三十
六番の一）二卷【作者】未詳【成立】室町期
【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）、寛永
整版本。舞の本（上田萬年博士校訂）・舞の本
（名著文庫）・新群書類從第八舞曲部等所收。
【題材】英雄譚。荒唐な分子も多く、異國的な
氣分もある。むくり退治の事件を取扱つてゐ
るのが珍らしい。史實としても應永二十六年
の外寇の事件もあり、「櫟章記」には伊豫の領
主三並氏の九代に百里の名が見え、その孫益
躬が、來襲した蒙古の賊主を射殺した功を傳
へ、又壹岐・豐後等にも本説話と類似の口碑を
存し、甲賀三郎の武勇傳説とも交涉あるらし
く、同時代の諸曲中にも「八劍」「御崎」「異國退
治」等の作があるのに見ても、内地發生の傳説
かも知れないが、坪内博士に從へばホーマー



寛永板百合若大臣（插畫）

の「オディッシイ」がその本據で、「百合若」の百
合はユリシスの名から來てゐると推斷せられ
てゐる。若し然りとすれば、「天狗の内裏」（別
項）の本據としてのイニードと共に、好一對を
なす興味ある對照で、説話學上にも交通史上
にも注目すべき資料である。素材上、構想上
から見て舞曲中頗る異色ある作品である。
【梗概】嵯峨天皇の御代左大臣きんみつの一
子で大和の初瀨寺の申子の百合若は、十七歳
で右大臣を嗣ぎ百合若大臣と呼ばれ、三條壬
生の大納言の女を妻に迎へた。時に大魔王他
化自在天が佛法護持の我が國を誑さうと、む
こ國のむくり四萬の兵船を調へ、りやうさう・
くわすい・とぶくも・はしるくも四人を大將と
して筑紫の博多に押寄せ、鐵砲・毒矢を以て攻
めかけたので、高天ケ原の神議により託宣を
蒙つた百合若が、弘仁七年二月八日、鐵の弓矢
を携へ三十萬騎の將として發足すると、賊は
その威に畏れて退却し、百合若は恩賞として
筑紫の國司に任ぜられた。その後、重ねて豐
後の國府にあつた百合若に、朝議の結果高麗・
百濟を經てむこ國へ攻め入るべき命が下り、
八萬餘艘を率ゐて出發し、日本と支那との境
ちくらが沖に迎撃したむくりの四萬艘と對陣
すること三年、遂に敵を擊破し、四人の大將等
を或は殺し或は捕へて凱旋したが、途中少憩
をとるため玄界島に上陸してまどろむと、俄
に逆心を起した乳母子の別府兄弟が百合若を
その儘置き去りにして立ち歸り、北方には戰
死と告げ、上洛して戰勝の有樣を言上した。
その結果九州の國司を獲た兄弟は、更に謀つ
て百合若の北方に艷書を贈つた。素より北方
は兄弟の逆意を悟つてゐたが、女性の身とて
爲すべき術なく、ただ明け暮れ、夫を氣遣ひ、形見の調
度・馬等を寺々に寄進し、鷹犬三十二匹を放つて鷹師も
去らしめたが、綠丸といふ角鷹は三日三夜を飛翔して
玄界島に到り、百合若の認めた木の葉の血書を齎し歸
つた。喜んだ北方は折返し紙筆を添へた紫硯を結ひ付
けて放つた處、鷹は重さに堪へず途中に命を落した。
百合若は、鳥の汀にその骸を見出して音信の
策の絶えた事を歎き悲しんだが、鷹の歸らな
いのを思ひ餘つた北方が、宇佐八幡に祈願を
籠めた驗か、いきの島人がこの島に漂着し、
百合若はそれを賴んで九州に歸つて來た。い
きの浦の釣人が稀代な男を伴つて來たとの噂
に、百合若とは知らぬ別府は召出して門脇の
翁に預けた。この翁は曩に百合若の北方が別
府の意に從はぬため、まんなうが池にふしづ
けにされようとした時、已が娘を身替りに立
てた事もあり、今又舊主と氣付かぬながら百
合若を厚遇するのであつたが、身體に苔が蒸
してゐるやうなので、苔丸と稱して別府に使
はれてゐた百合若は、新年となつて筑紫の廳
に大小名が別府を祝つて集まつた時、かの昔
百合若が手馴れの鐵の弓矢の誰も引く者がな
いのを取つて弓勢を示し、在廳の人々を從へ、
兄の別府の大夫を誅し、弟の別府のしんを流
し、夫婦はめでたく再會し、宇佐の宮を修理
し、上洛して日本の將軍と仰がれた。【影響】
寛文二年刊六段本「百合若大臣」、井上播磨掾
正本「百合若鷹」、近松作「百合若大臣野守鏡」
（別項）等がある。
【參考】近古小説解題○廣益俗説辨卷九○百
合若傳説の本源坪内逍遙（早稻田文學明治三九
ノ一）○壹岐の百合若傳説高野辰之（早稻田文
學明治四○ノ二）【島津】

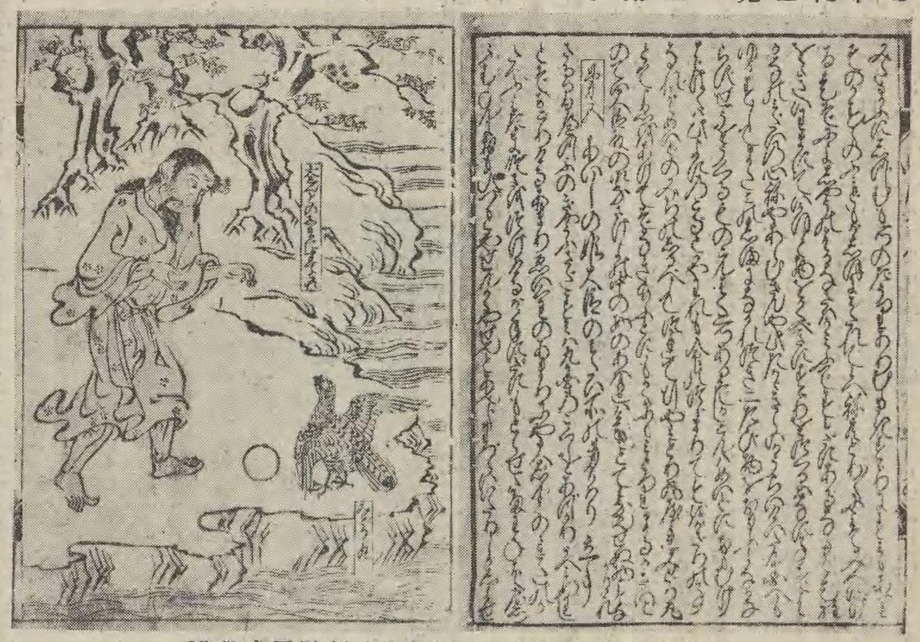
百合若大臣野守鏡（ゆりわかだいじんのもりのかがみ）淨瑠璃　五段　時代物【作者】近松門左衞門
【名稱】三段目切の鷹の子別れの條に、「鳴き
交したる鯱鷹（はしたか）の野守の鏡目には見て、手には
止らぬ妹脊の中」とあるによる。【興行】明和
板「外題年鑑」に寶永七年五月六日より竹本座
としてあるが、二段目の初めに「寅の年の奇特
に」とか、「去年は丑の年」といふ詞があり、且
つ諸所に正月當込みの詞章があるから、同年
正月の興行と推定される。【諸本】七・八行六
十八丁本、山本九兵衞板。七行八十二丁本、正
本屋仁兵衞板。諸種の近松全集所收。【題材】
幸若舞曲の「百合若大臣」（別項）を藍本とし
たもの。同題材の先行淨瑠璃では、寛文二年
二月板行の日暮小太夫の正本「ゆり若大臣」が
最も古く、天和・貞享頃板行の所屬不明の正本
「ゆり若大じん」（金平本全集所收）がこれに次ぐ
が、共に幸若舞曲と大同小異のものである。

いけれども、本曲と各時期の三莊太夫物の淨
瑠璃とを比較することに依つて、淨瑠璃の史
的展開の跡を具體的に看取することが出來る
好材料の一つである。全曲の焦點は、中の卷
の「由良湊の段」であり、就中「鷄娘」狂亂の個
所は眼目の見せ場であるが、更に同じ卷の「後
室館の段」の複雜極まる筋の構成と、煩瑣に過
ぎる義理・人情の葛藤とも亦、これに次ぐ重點
である。そして特にこの段に、享保以後の操
劇極盛期が急速に下り坂に向ひつつあつた寶
曆期の特性を看ることが出來る。また傳説の
一定の原型が有する中世的特質を近世化しつ
つ、しかもその骨子のみを遺さうとする態度
は、「三莊太夫五人嬪」（別項）にも明かに見ら
れ得るが、本曲に於ても、下の卷「質屋の段」
に於ける地藏の木像のくだりなどがその適例

元祿・寶永頃の板行と思はれる「ゆりわか高麗責」は、水からくり本位の金平式に改修されてゐる。何人の正本か明かでないが、「外題年鑑」では「百合若高麗攻」といふのが岡本文彌の語物の中に入れてある。この外、「外題年鑑」に井上播磨掾の正本「百合若靡」があるが未見。歌舞伎では元祿十年三月、江戸中村座で「一張弓勢三韓退治」、同十三年三の替りに、大阪竹島座で「今用ゆりわか」、京都龜屋座で「ゆり若唐船」が上演されたが、何れも詳しい事は不明。

【梗概】〔第一〕（紫宸殿南階）平城天皇の御宇、豐後の旗頭太宰太郎和田丸は蒙古征伐の勅命を受け、百合若大臣の稱を賜はり、且つ天香具山の香取丸・綠丸といふ雌雄の鷹の羽で矧いだ一對の鏑矢の中の甲矢を下され、又凱旋の上は禁中第一の美人立花と結婚する事を許される。香取丸・綠丸の一對の矢は、雌雄相慕つて所を別にして置いても、必ず一緒に廻り寄ると言ひ傳へられてゐるものである。（關戸の院）百合若は出陣の途中、關戸の院の牛頭天王に參拜し、靈夢によつて、軍奉行別府の雲足・雲住兄弟の逆心を知る。（秀主館）百合若の執權府内の太夫秀主の子市郎丸秀虎が主の命により、父の看病のため歸國したところ、秀主は不忠者と罵つて勘當する。秀虎は戰場での功名を誓つて出陣の途に上る。（和田の岬）秀虎が馳せ付けた時には、既に百合若等の船は遠く漕ぎ去つた後で、別府の船のみが今しも纜を解いてゐた所であつた。秀虎は喜んで大聲を揚げて喚んだが、別府等は嘲笑を殘して出帆する。〔第二〕（池田の宿）府内の大夫の嫡子惡文次秀景は、豐後濱の市の遊女松が枝に馴染みて親の勘當を受け、有馬に來つて松が枝は湯女となり、秀景は駕籠昇となつてゐたが、一日ふとした事から舊主百合若が蒙古の戰に討死し、その領國は別府兄弟に賜はつたといふことを耳にする。（有馬の湯）秀景は昔の武士に立ち還つて主家の再興を企てようと決心し、これを松が枝に相談した結果、その夜浴客の刀を窃取しようとしたところ、圖らずもその浴客は父秀主であつたので、こゝに父子舅嫁の不思議な邂逅をする。〔第三〕（景事「宮島八景」）市郎丸秀虎は百合若が遠島に生存してゐるとの風說を聞くや、その實否を確かめんと嚴島に參詣する。（玄海が島）百合若は蒙古より凱陣の途中この島に上陸し、假睡をしてゐる間に、豫てから野心を懷いて居つた別府兄弟に置き去りにされたのであつた。立花は別府兄弟から百合若戰死と聞かされ、悲歎のあまり都で焦れ死んだが、その魂魄が綠丸の乙矢に乘り移り、鷹の精靈と化してこの島に立花の姿を現はし、百合若と契つて一子還城丸を儲けて四年を過したが、そこへ秀虎が嚴島明神の冥助によつて百合若を迎へに來り、爰に還城丸父子と鷹の精靈たる立花との哀れな別離となる。折から別府の弟雲住が百合若討手の兵を引連れて來るが、忽ち百合若・秀虎のために引裂かれる。〔第四〕（別府の雲足館）松が枝は盲目の巫子となつて雲足に近づき、その心を許させるため、炭火を貯へてある穽に、それと知りながら陷つて大燒傷を負ふ。（花火山麓）雲足が松が枝に勸められる儘に遊山に出たところを、百合若・府内親子兄弟等力を協せて討取る。〔第五〕（御所）百合若は、還城丸・府内親子兄弟夫婦を伴ひ參内し、蒙古征伐の次第を奏聞し、それ〴〵恩賞に與る。

【構想】幸若舞曲との叙述の重複を避け、その裏を行かうとした所に作者の苦心の跡が見られるが、その結果却つて原作特有の浪漫的な味を著しく削いでしまつてゐる。新に設けられた趣向の如きも、多くは原據あるものに過ぎず頗る獨創性に乏しい。即ち二段目の有馬の湯女の松が枝は、「水木辰之助餞振舞」（別項）の有馬の藤を偲ばせ、三段目の秀虎が百合若と出會ふ場は俊寛・有王の面影があり、立花親子夫婦別れを惜しむ場は「信田妻」の子別れと同型であり、又四段目の松が枝の爲盲の趣向と一重の麥が文里の目の前に現はれ、切ない心をしみ〴〵と語るかと思へば、短夜の夢であつた。秋の夕暮、親里に歸つた一重は病が重るばかりである。やさしい母親の慰めも利き目がない。而も醫者の藥代が二十兩も溜り、色と慾とにかけた催促が手きびしい。一重も遂に文里を思ひ切り、醫者甫次に身を任せまし、首尾よく後妻に入り込む。かねて紀角



日暮小太夫正本「ゆりわか大臣」（帝國圖書館藏）

ゆりわか（高野辰之氏藏）

宵の程

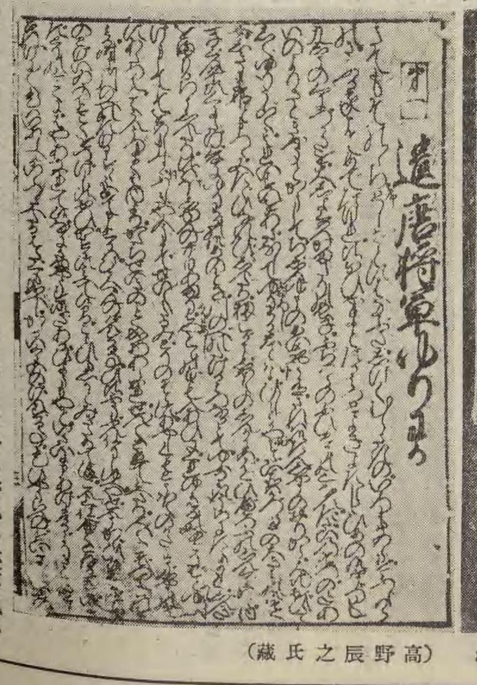
【石川（巖）】

よひのほど　洒落本　一册　【作者】梅暮里谷峨　【名稱】内題には、「二筋道三編宵の程」とある。即ち「傾城買二筋道」（別項）の第三編である。「宵の程」とあるは本書を冬夏秋春と分けてあるが、春の外皆夕暮を叙してあるところから來てゐる。【刊行】本書中、「三編つた。

を賜はり、且つ天香具山の香取丸・綠丸といふ雌雄の鷹の羽で矧いだ一對の鏑矢の中の甲矢を下され、又凱旋の上は禁中第一の美人立花と結婚する事を許される。香取丸・綠丸の一對の矢は、雌雄相慕つて所を別にして置いても、必ず一緒に廻り寄ると言ひ傳へられてゐるものである。(關戸の院)百合若は出陣の途中、關戸の院の牛頭天王に參拜し、靈夢によつて、軍奉行別府の雲足・雲住兄弟の逆心を知る。(秀主館)百合若の執權府内の太夫秀主の子市郎丸秀虎が主の命により、父の看病のため歸國したところ、秀主は不忠者と罵つて勘當する。秀虎は戰場での功名を誓つた所であつた。秀虎は喜んで大聲を揚げて喚んだが、別府等は嘲笑を殘して出帆する。(第二)(池田の宿)府内の大夫の嫡子惡文次秀景は、豐後濱の市の遊女松が枝に馴染みて親の勘當を受け、有馬に來つて松が枝は湯女となり、秀景は駕籠舁となつてゐたが、一日ふとした事から舊主百合若が蒙古の戰に討死し、

帝國圖書館藏)

れ死んだが、その魂魄が綠丸の乙矢に乘り移り、鷹の精靈と化してこの島に立花の姿を現はし、百合若と契つて一子還城丸を儲けて四年を過したが、そこへ秀虎が嚴島明神の冥助によつて百合若を迎へに來り、愛に還城丸父子と鷹の精靈たる立花との哀れな別離となる。折から別府の弟雲住が百合若討手の兵を引連れて來るが、忽ち百合若・秀虎のために引裂かれる。(第四)(別府の雲足館)松が枝は盲目の巫子となつて雲足に近づき、その心を許させるため、炭火を貯へてある穽に、それと知りながら陷つて大



(高野辰之氏藏)

か

れた趣向の如きも、多くは原據あるものに過ぎず頗る獨創性に乏しい。卽ち二段目の有馬の湯女の松が枝は、「水木辰之助錢振舞」(別項)の有馬の藤を偲ばせ、三段目の秀虎が百合若と出會ふ場は俊寛・有王の面影があり、立花親子夫婦別れを惜しむ場は「信田妻」の子別れと同型であり、又四段目の松が枝の僞盲の趣向は幸若舞曲「入鹿」の鎌足の僞盲を流用したものである。【影響】本作から出たものは、淨瑠璃に寬保二年三月三日より豐竹座興行の爲永太郎兵衞作「百合稚高麗軍記」があり、浮世草子に寶曆二年正月板行の其笑・瑞笑作「百合稚錦島」がある。また趣向としては、一段目關戸の院の夢の場は、「刈萱桑門筑紫帥」(別項)の學文路慈尊院の夢の場に取られ、「蘆屋道滿大内鑑」(別項)の葛の葉の子別れや「源平布引瀧」(別項)の松波檢校の僞盲も、本作がその原據をなしてゐる。

【參考】名著文庫解題關根正直 ○大近松全集第二卷解說木谷蓬吟 ○近松名作集上解題黑木勘藏 ○近松全集第九卷解題藤井乙男 ○江戸芝居年代記 ○京阪歌舞伎年代記 伊原敏郎(歌舞伎連載)

〔高野(正)〕

よ

夜嵐於衣花廼仇夢 よあらしおきぬはなのあだゆめ 小說

五編十五册 【著者】岡本勘造(起泉) 【畫工】永島孟齋 【刊行】明治十一年六月—十一月。後、明治文學名著全集卷十(東京堂)所收。

【梗概】お衣は、もと淺草鳥越の甚内橋邊に住む原田某の娘で、幼少の頃手品を習ひ、その藝名を鈴川小春と呼ばれ、寄席藝人として美人の評判が高かつた。十七の春、さる大名の妾に上つたが、その大名が間もなく死んでから、隣家の藥種問屋の若隱居紀角といふものに戀し、その妻お八重をかどはかし、表面は行方不明と見せかけ、實は人をもつて亡き者にし、首尾よく後妻に入り込む。かねて紀角と懇意で、媒妁に立つた御家人の勇次郎といふ男とも關係し、剩さへ紀角を毒殺しようとして、事は未遂に終つたが、その他不正の事實が發見されて離緣となつたのを幸ひ、情夫の勇次郎と同棲するうち、維新の兵亂となり、御家人であつた勇次郎は彰義隊に加はり、上野で戰死する。お衣の家は兵火に燒かれ、已むなく猿若町の知人の家に同居してゐるうち、同町の藝者になり、曾て妾時代に知り合つた藪醫者で、維新のどさくさまぎれに財産を掠へ、今では金貸を渡世にしてゐる小林金平に出會ひ、その妾となつたが、これも長くは辛抱が出來ず、その頃賣出しの役者嵐璃鶴に關係して、あひびきを續けてゐるうち、この事が金平の耳に入つたので、思案のあまり毒殺して不義の淫樂を丞にしてゐると、その事いつしか露顯し、お衣は斬罪となり、璃鶴も毒殺使嗾の嫌疑で一時未決として獄に繫がれ、毒殺の嫌疑は晴れたが、それを隱蔽した廉で、二年の刑を受けるに至つた。

【批評】本書は、「鳥追阿松海上新話」(別項)に次ぐ毒婦小說中の雄篇であつて、文章もこの頃の作としては相當に讀まれた。阿松に比してやゝ深刻さを加へてゐるお衣の點や、毒婦型の性格の描寫なども、可なり成功してゐるといつてよからう。この事件は當時人氣俳優が關係しただけに、世間に騷がれたものであつた。

宵の程 よひのほど 洒落本

一册 【作者】梅暮里谷峨 【名稱】內題には、「二筋道三編宵の程」とある。卽ち「傾城買二筋道」(別項)の第三編である。「宵の程」とあるは本書を冬夏秋春と分けてあるが、春の外皆夕暮を叙してあるところから來てゐる。【刊行】本書中、「三編は此申(寬政十二年は庚申)のとし」とある。【諸本】滑稽名作集上(帝國文庫)・洒落本大系第八卷等所收。【題材】一重が文里の夢に現はるゝ條は、「契情買虎之卷」(別項)の松田屋瀨川の亡靈が、愛人五郷の夢に現はるゝ構想を採つたのである。

【梗概】冬の夕暮、文里は遊女一重の事を忘れかね、鬱々として病氣になつたまゝ、貞操な女房お時の看護を受けて物思ひに沈んでゐる。お時は「一重さんと一緒に暮し、共々おまへを大事にする事が出來たら、どんなに嬉しいだらう」と言ふ。文里は妻子には濟まず、さうかと云つて一重と切れるのは嫌だし、可愛い子供の無邪氣な詞を聞いては自責の念に打たれ、ただ泣く許りである。親には勘當され、妻子には貧しい生活をさせてゐるにも拘らず、お時は一言も恨みを言はず、田舍で療養してゐる一重のことばかり心配してゐる優しい心に、文里は「もう一重の事なぞは思ひ切つた」と口では言ふ。夏の夕暮、ふと文里は三浦屋の格子に立つた。これを見つけた一重の朋輩は强ひて上にあがらせ、噂はただ一重の事ばかり。そこに來たのは新造八重梅、見れば見る程一重によく似てゐる。それが文里に愈々物思ひを增させる種となつた。そして意外にもその女は一重の妹である。妹の口から又病の篤い一重の噂が一しきり出る。夜更けてふと一重の妾が文里の目の前に現はれ、切ない心をしみ〴〵と語るかと思へば、短夜の夢であつた。秋の夕暮、親里に歸つた一重は病が重るばかりである。やさしい母親の慰めも利き目がない。而も醫者の藥代が二十兩も溜り、色と慾とにかけた催促が手きびしい。一重も遂に文里を思ひ切り、醫者痛飮に身を任せますと言ふ。春の日、文里も勘當を許され、めでたく妻子と共に親の許に引取られる。お時は一重の身の上を案じてゐる。そこへ作者谷峨、病氣全快した一重を連れ來る。親も一重の眞心に感じて同棲を許す。田舍醫者は一重を取られて立腹し、谷峨に向ひ、藥代の催促をする。谷峨はきれいに代價を拂つてやり、一家團欒して樂しく暮すやうになつた。

【構想】本篇に至り文里は紀國屋の息子、一重は三浦屋の遊女で、上總會我野在の出身である事が分つた。かく遊女や客の素性まで說明するに至つたのは、本格の洒落本に尠かつた事であり、やがて人情本への推移を示すものである。又文里とお時の佗び住居、お時の貞淑など、全く遊里を離れた描寫で、これも後世の人情本に現はるゝ手法である。しかもお時が一重と同棲を望み、結局その通りになつた結末など、人情本の典型をなす構想といはねばならぬ。最後に作者谷峨が現はれて、獨りいゝ役をさらつて行つて得意でゐるのも、作者の茶氣が見えて可笑しい。【影響】本篇が後世の人情本に特に影響してゐる事は、今更說く迄もない。本篇の總目錄に貧居の白雪、青樓の白雨、井里の初嵐、市中の春雨とあるのは、爲永春水の人情本の書名に似通ふものがある。卽ち「吾嬬の春雨」「田家の時雨」「難波の俄雨」の如きこれである。

〔山崎〕

餘韻（よゐん）　修辭學　【解說】要點・急所と思はれるところを叙して、餘意は讀者の推量・想像に任せる辭樣。又これを省筆法ともいふ。形式の短い文學ほど、この技巧が多く用ひられる。「伯牛疾あり。子之を問ふ。牖より其の手を執りて曰く、これ亡からん。命なる哉、斯の人にして斯の疾あるや。斯の人にして斯の疾あるや」「起きて見つ寢て見つ蚊帳の廣さかな」などがそれである。　〔武島〕

拗音（えうおん）　國語學　【解說】音の種類の一つ。「きゃ」「きゅ」「きょ」「しゃ」「ちゅ」「みょ」「ぎゃ」「びょ」又は「くゎ」「ぐゎ」の如く、ヤ行又はワ行の假名を他の假名の下に添へて表はす一音節の音をいふ。假名一字で表はし得る一音節の音を直音（ちよくおん）といふのに對する名稱である。ヤ行の假名を添へて表はすものをヤ行拗音、ワ行の假名を以てするものをワ行拗音といふ。拗音は清音にも濁音にも存する。現代語で普通に用ひられる拗音は、キャ、ギャ、シャ、ジャ、チャ、ヂャ、ニャ、ヒャ、ビャ、ピャ、ミャ、リャの各行とクヮ、グヮ、グッとであつて、ヤ行ではヤ・ユ・ヨ、ワ行ではワを添へて表はすもののみが行はれてゐるが（「しぇ」「ちぇ」の如くェを添へて表はすものも時に用ひられる）、古くは「くゎ」「ぐゎ」の如くヰ・エを添へて表はす拗音もあつた。拗音と云はれてゐるものの中には、次の三つの異つた種類の音節が一括されてゐる。（一）最初の子音の次に［j］（ヤ行音の子音）がある音節（キャ kja、ニュ njū、ヒョ hjō 等）。（二）最初の子音の次に［w］（ワ行音の子音）がある音節（クヮ kwa 等）。（三）［ʃ］［tʃ］［ʒ］［dʒ］で始まる音節（シャ ʃa、チャ tʃa、ジュ ʒū、デョ dʒo 等）。（一）（二）は、共に子音二つと母音とより成つたものであるが、（三）はその子音は直音（「シ」「ヂ」）の子音と同じである。しかし以上の三種は「口蓋的」であると云ふ點で一致する。（「口蓋的」なものとしては他にヤ行の子音があるが、これは普遍拗音の中には入れない）。

【國語史上の拗音】本來の日本語に於て、拗音があつたかどうかは不明である。もし上代のサ行音が、シャ・シ・シュ・シェ・ショ又はチャ・チ・チュ・チェ・チョと發音せられてゐたとすれば、勿論拗音であり、又奈良朝以往の文獻に於けるキケコ以下十二の假名の兩類のうちの一類が、二重母音又はōの如き母音を有するものであつたとすれば、これも拗音又はその類似音であるが、これ等は少くとも後には直音となつたか、さなくとも直音と考へられてゐた。漢字音には古くから各種のヤ行拗音やクヮ・クヰ・クェなどのワ行拗音があつて、漢字の正式の發音としてのみならず、日本語中に入つた漢語にも、その音が保存せられた。のみならず、平安朝以後に起つた iu eu 音の長母音化によつて、字音の kiu niu keu reu 等が kyū nyū kyō 等と拗音になつたと共に、純粹の國語の音も拗音化したものがある。「けふ」（今日）がキョーとなり、「めをと」（夫婦）ミョートとなつたなどその例である。また近來、西洋語の輸入によつて、これまで普通に用ひられなかつた拗音が用ひられるやうになつたものもある（「ツェッペリン」「シェクスピヤ」など）。かやうに、ヤ行拗音は、後世にいたつてむしろ勢力をましたに反して、ワ行拗音は、次第に直音に化する傾向があるので、クヰ・クェが室町時代に至つては全く滅びてキ・ケとなり、クヮは江戸時代から、次第にカとなり、現代に於ては、多數の方言に於て既に滅びてしまつた。

【拗音の表記法】拗音を表記するのに、古くから、普通の場合には「きや」「くわ」の如く、「や」「わ」を上の「き」「く」と同大に書いて各々の假名をそれ〴〵一音節に發音するものと區別がないが、特に拗音であることを明かにするため、「きゃ」「くゎ」の如く「や」「わ」を小書きしたり、又は「きや」「くわ」、「きゃ」「くゎ」等の如く記號を附したりすることが行はれてゐる。又ヤユヨ等と書く方式を唱へたものもある（新井白石の東音譜など）。極めて古くはヤ行の假名のかはりにア行の假名を用ひて「シア」「キア」の如く表記したこともある。（「文學研究」第二輯所載春日政治氏古訓攷談參照）

【備考】橘成員の「倭字古今通例全書」（別項）では、直音を、五十音圖の縱の相通、すなはち同じ段の中の相通（五音相通といはれる）とし、拗音を、五十音圖の橫の相通、すなはち同じ列の中の相通と解したが、それの誤用であつて從ふべきでない。

【參考】國語音聲學（神保格）○國語音聲學（同上）（國語科學講座）○日本音聲學（佐久間鼎）○和字正濫通妨抄（契沖）（契沖全集第七卷）○音韻史上より見たる「カ」「クヮ」の混同（新村出）（東方言語史叢考）　〔橋本〕

容顏美艷考（ようがんびえんかう）　風俗　二册　【著者】故並木正三遺稿、淺野高造補著。【本稱】當世化粧容顏美艷考。【解說】婦人の化粧法を書いたもので、まゝ風俗・調度を知るに足る浮世繪風の書を挿入してある。扇や粧山太夫の序、文化十一年一月のかなふ珉子の跋がある。乾の卷には、化粧の大意・春夏秋冬・花見舟行・燈火に向ふ時・能芝居行・顏見世踊行・練物等の場合の化粧法、また娘子・嫁子寮・母公（はゝ）・世帶女房・子持女房・腰元衆・下女方・てかけ・子達・尼公（あまこ）等の化粧法。坤の卷には、長き顏・丸顏・鼻の高い人・低い人・大きい目・ひがら目・たれ目の人・唇のあつい人・うば口の人・高頰の人・そばがす顏・菊石（みつうや）顏・色の黑い人・白い人・赤黑い人・赤顏の人・色の青い人・あぶら顏の人等の化粧法。また薄化粧・略の湯化粧・早化粧・湯化粧・かげの化粧・風呂の入樣・白粉の用ひ樣・眉ずみの事等が記してある。　〔石村〕

楊貴妃物語（やうきひものがたり）　御伽草子風　一卷　【成立】室町末、德川初世頃。【諸本】古板本は寬文三年板（本屋太兵衞新刊）。【題材】白樂天の「長恨歌」及び陳鴻の「長恨歌傳」で有名な支那說話に、熱田蓬萊の傳說、隨つて明神が假（かり）りに貴妃と現じて玄宗を迷はせ、その日本寇掠の計畫を挫いたと云ふ俗說の附會せられた口碑を主題としてゐる。【內容】唐の玄宗皇帝は楊貴妃に惑溺し、安祿山の亂を招き、貴妃は馬嵬（ばくわい）原で殺されたが、帝はその魂魄を方士に尋ねさせ、日本の蓬萊山卽ち尾張の熱田で熱田明神となつてゐる貴妃の靈に邂逅する物語。玄宗が白樂天を賓師として册き、又諫を容れられぬため隱遁した將軍司馬頠が、召還されて祿山を伐つ事等もある。

【附記】同名の三册本があるが、「長恨歌」の註釋書で別書の由が「延齡獵涉書目」に見えると「近古小說解題」に出てゐる。古淨瑠璃の「熱田大明神の御本地」（筑後代次虎之助の正本）も、この楊貴妃の本地傳說とは別である。　〔島津〕

【參考】廣益俗說辨（正編卷三神祇）井澤長秀

謠曲（えうきよく）　【名義】能樂（別項）の詞章を謠（うたひ）又は謠曲といふ。謠曲とは鄙曲・宴曲（各別項）等に列べて命名せられたものであらう。能樂の始祖を秦河勝（はたのかはかつ）とし、大和申樂の金春・觀世

容顏美艷考（ようがんびえんこう）　風俗一冊　【著者】故並木正三遺稿、淺野高造補著。【本稀】化粧（けしょう）世界（せかい）容顏美艷考【解說】婦人の化粧法を書いたもので、まゝ風俗・調度を知るに足る浮世繪風の畫を挿入してある。扇や粧山太夫の序、文化十一年二月のかなふ琴子の跋がある。乾の卷には、化粧の大意・春夏秋冬・花見・舟行・燈火に向ふ時・能芝居行・觀世踊行・狩物等の場合の化粧法、また振子・振子袋・惣（そう）公（こう）・世帶女房・子持女房・廣元衆・下女方・かけ子達・

【參考】國語音聲學（神保格○國語音聲學同上○國語科學講義○日本音聲學佐久間鼎○和字正濫通妨抄契沖（契沖全集第七卷）○音韻史上より見たる「カ」「クヮ」の混同新村出（東方言語史叢考）（橘本）

諸曲（しょきょく）　【名義】能樂（別項）の詞章を諸曲（各別項）又は諸曲といふ。諸曲とは謠曲・宴曲（各別項）等に列べて命名せられたものであらう。能樂の始祖を秦河勝（はたのかわかつ）とし、大和申樂の金春・觀世

貴妃（きひ）は馬嵬（ばかい）で殺されたが、帝はその魂魄を方士に尋ねさせ、日本の蓬萊山即ち尾張の熱田で熱田明神となつてゐる貴妃の靈に遭遇する物語。玄宗が白樂天を嘗（なめ）として册き、又諫を容れられぬため隱遁した將軍司馬頊が、召還されて滁山を伐つ事等もある。

【附記】同名の三册本があるが、「長恨歌」の註釋書で別書の由が「延齡嶽淺書目」に見えると「近古小說解題」に出てゐる。古淨瑠璃の「熱田大明神の御本地」（筑後掾次虎之助の正本）も、この楊貴妃の本地傳說とは別である。【島津】

【參考】廣益俗說辨（正編卷三神祇）井澤長秀

市井の男女を主人公とした曲も少くない。その主從・父子の關係を描いた「勇物（いさみもの）」（別項）、狂物（くるいもの）（別項）、夫婦關係を描いた「夫婦物（めおとものの）」（別項）などあるが、最も多いのは、子を失つた母の狂亂を描いた狂女物（別項）である。【異類說話】謠曲の主人公は、又天仙・鬼畜乃至草木の精魂にも及んでゐる。天人物・仙人物・天狗物・鳥獸物・草木精魂（各別項）等がそれである。【支那傳說】支那武人についても、「唐事物（からごとものの）」（別項）として、わが古武士に對すると同樣な親しみを以て取扱つてゐる。前項の仙人物も大抵支那傳說から出てゐる。

【出典】世話基說を題材としたものの外は、大抵先進文藝から出て居り、その文藝は遠く「古事記」「日本書紀」から起つてほぼ同時代の「義經記」「曾我物語」（各別項）に及んでゐる。その主なものを擧げれば、

「古事記・日本書紀・神皇正統記」逆矛・龍田・渡路・大蛇・玉井・三輪・草薙・吳服・氷室。「萬葉集」三山・船橋。「古今集」高砂・志賀・難波・葛子洗小町。「後撰集」檢垣。「貫之集」巖邊。「伊勢物語・髓林院・杜若・井筒・小鹽・右近・隅田川。「大和物語」蘆刈・采女・姨捨・求塚。「源氏物語」夕顏・半蔀・葵上・野宮・住吉詣・須磨源氏・玉鬘・浮舟・源氏供養。「今昔物語」（一角仙人）・昭君・田村・道成寺・（綛上）・善界・（蝉丸）。「宇治拾遺物語」「古今著聞集」養日龍神・養老。「十訓抄」大會。「擁書抄」雨月・江口・松山天狗。「平治物語」鞘長。「平家物語」鵺・頭政・木曾・乘平・巴・熊・藤戶・正尊・八島・祇王・佛原・俊寛・小督・雙盛・俊成忠度・忠度・知章・碇潛・千手・盛久・大原御幸・源大夫・鐵輪・土蜘蛛・羅生門・咸陽宮・盆上・蟬丸。「源平盛衰記」七騎落・敦盛・藤經・輝政・通盛・泰山府君・阿漕・國栖・葛城・高野物狂。「太平記」鱗形・墨風・白鼠・舍利・第六天・雷電・枕慈

方と親子の關係を持つ一些田教盛・梅王・松王の如きものの。この傾向のなほ一步進んだものには、前ジテを存命中の實、後ジテを誅の亡靈とした「砧」、ワキを領主に殺された漁夫の母、後ジテを殺された漁夫の亡靈とした「藤戶」などがある。これを特に夢幻的劇能といふ。「二段劇能」ワキ・シテともに同じ時代の現在人物で、兩者の間に深い劇的關係のあるもの、即ちシテに前後の出入がなく、後ジテに亡靈として現はれ出ないもの、換言すれば、單式能の劇的に發達した一幕物の劇とも見られるもの。例へば「鵜飼」「小町」「安宅」の如きもの。劇能ではワキは夢幻能に於けるが如き特殊な職能、觀衆を夢幻的境地に誘導する職責（能樂參照）を持たないので、ワキは却つて退化し、シテの從屬として發生したツレにその位地を讓つてゐるもの（實刈のワキはツレ女の從者）、又は全く消滅したもの（小袖曾我・三笑）もある。「二段劇能」一段劇能と同樣、登場人物がすべて現在人物で、且つその一人又はすべてが中入するもの、即ち二幕物の劇と同樣のもの。これにはシテ・ワキともに前後同じ人物である「鉢木」、シテの人物の前後變る「烏帽子折」（前は烏帽子屋主人、後は熊坂長範）、前後ともワキのない「夜討曾我」などがある。

【文の構造】多樣ではあるが、その間に自ら一定の方式があり、世阿彌は「能作書」に、基準的な構造を序一段、破三段、急一段の五段と し、次の如く述べてゐる。

作ミは種をはかやうにぶめ得て、さてなす所を定べし。まづ序破急に五段あり。序一段、破三段、

急一段なり。

開口人(ワキ)出でて、さし聲より(現行曲にはなし)、次第、一歌まで一段。これより破。さて爲手の出でて、一聲より一歌まで一段。

その後開口人と問答ありて、同音一謠一段。

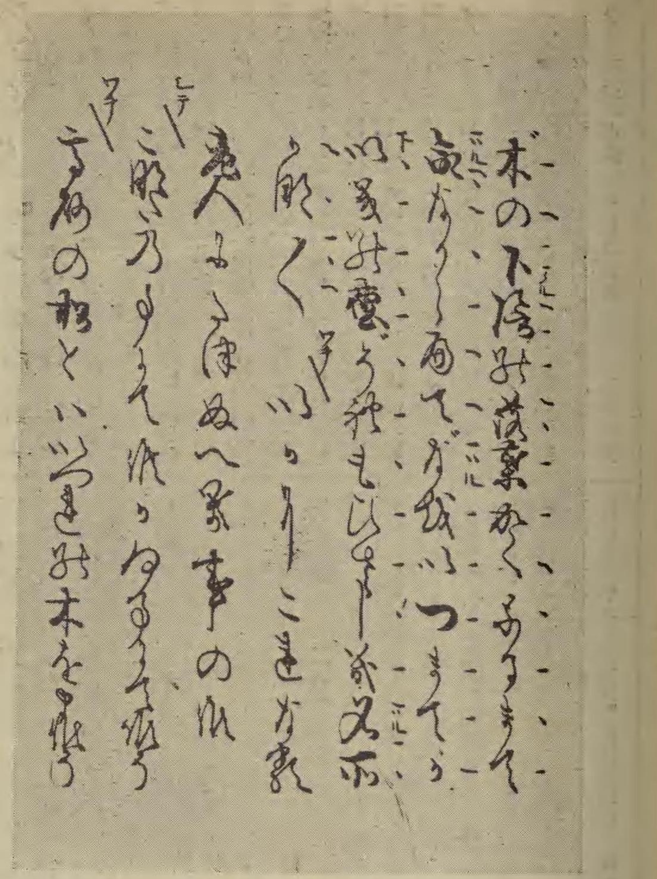
その後また曲舞にてもあれ、只謠にてもあれ、一音曲一段。

これより急、その後舞にても、働にても、或は早曲、切拍子などにて一段。

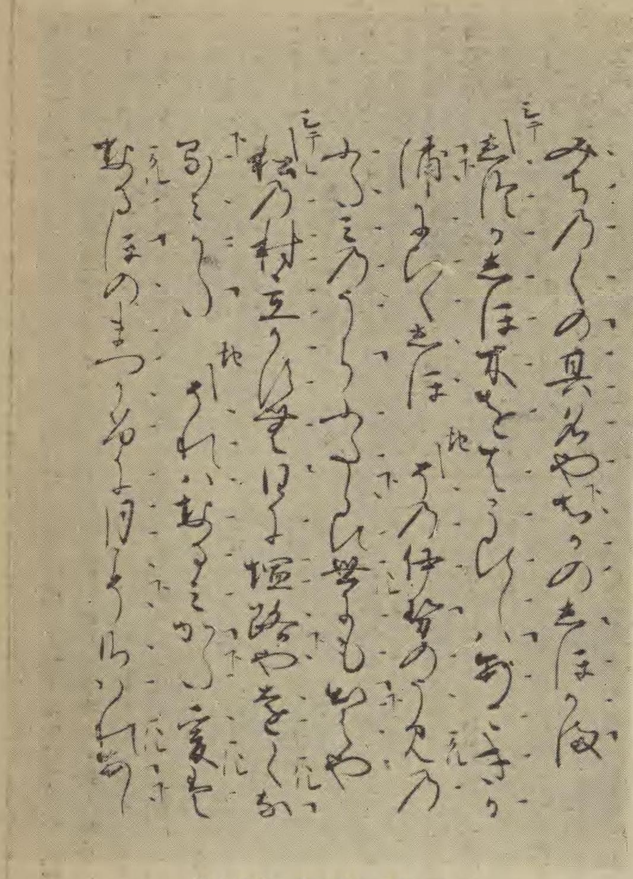
已上五段なり。

【章節の名目】 謠曲序破急五段を構成してゐる章節には、それ〴〵名目がある。その主なものを擧げれば、〔次第〕聲明道から出た名であるといふ(日本歌謠史)。序歌の心持をもつた一種の前奏樂と見るべきもので、一曲の氣分を醸成しようとするものである。七五七四の二句より成る。〔名乘〕主として、ワキが自己の身分・登場の目的を觀衆に紹介する詞で、多くは候文にて綴る。〔道行〕古く溯れば「伊勢物語」の東下りに始まり、「宴曲」「平家物語」の海道下りなどによつて形を整へて來たもので、謠曲の道行は、五文字を首とした七五調七八句から成り、綠語・掛詞等によつて叙景・抒情を加へながら旅程を述べ、舞臺轉換の用をなす(道行參照)。〔着ゼリフ〕道行によつて舞臺の轉換したことを一層明確ならしめるもので、大抵候文の短文から成る。〔一聲〕雜藝(別項)の一種から出た名であるが、謠曲詞章の一聲は、五七五七五の句から成り、多くは古歌を引いて舞臺の景趣又は自己の感慨を述べる。ワキ次第に對して大抵シテの登場した初めに謠ふ。〔二句〕シテ・ヅレのある場合、一聲の次に謠ふもので、七五調の二句から成り、一聲と内容の連絡したものが多い。〔サシ〕古くはサシ聲といひ、平曲(別項)から出た名である。破一段では序段の名乘と相對するものであるが、クセの前にも、後ジテの出にも、又一聲の前にも用ひられる。從つて内容はその時折に從つて異るが、その文は大體七五調を本格としてゐる。〔歌〕サシよりも七五調の正格なもので、その下音で謠ひ出すものを下歌、上音で謠ふものを上歌といふ。各段ともに用ひられ、これを以て一段落とするものが多い。〔掛合〕シテとワキ、シテとツレなどが對話問答する部分をいふ。通例破二段以下に用ひられ、その文體は候文・普通散文・律語調など樣々である。〔語〕掛合の一部であるが、シテ又はワキが長々と一曲の主題について物語る部分をいふ。文體は普通散文である。〔地謠〕シテ・ツレ・ワキなど、舞臺に立つ演出者以外の數人が同吟する部分で、これを地、同音又は同吟ともいふ。一曲中最初にある地謠を「初同」、次を「二の同」、その次を「三の同」などといふ。「初同」は大體正格な七五調で、「二の同」以下にはやゝ破格のものが多い。地謠には、地の文・叙事文も交つてゐるが、シテ・ワキ等の代辯と見るのが本體である。〔クリ〕クリ上げて謠ふといふ意であらう。通例クセの前のサシの上にあつて、クセの前提をなす。節がかりの散文が多い。〔クセ〕曲舞(別項)節で謠ふ部分で、世阿彌の説によれば、次第に始まつて次第で終る筈であるが、この形のものは殆どなく、普通クリ・サシ・クセ・クセ上の四節から成つてゐる。一曲の中心的材料について物語るもので、その内容は多樣であるが、すべて節がかりの散文を以て綴る。その演出法には「舞グセ」と「居グセ」との二種ある。〔ロンギ〕僧家に行はれた一種の宗論、論義から出た名目で、問答體になつてゐるのが普通である。節がかりの散文である。〔待謠〕後ジテの出現を待つ謠といふ意で、前ジテが中入し、狂言の間語(間參照)が濟んだ後、ワキの謠ふ上歌をいふ。即ちシテの前後姿をかへる夢幻能にのみ用ひられるものである。〔ワカ〕急段、舞の後に來るもので、この名目について、高野辰之博士は延年(別項)舞の若音兒の聲調の意であらうといふ(日本歌謠史)。その歌章は五七五七七の和歌又は和歌調のものが多い。〔キリ〕一曲の結末をなす部分で、通例叙事文の體をなしてゐる。

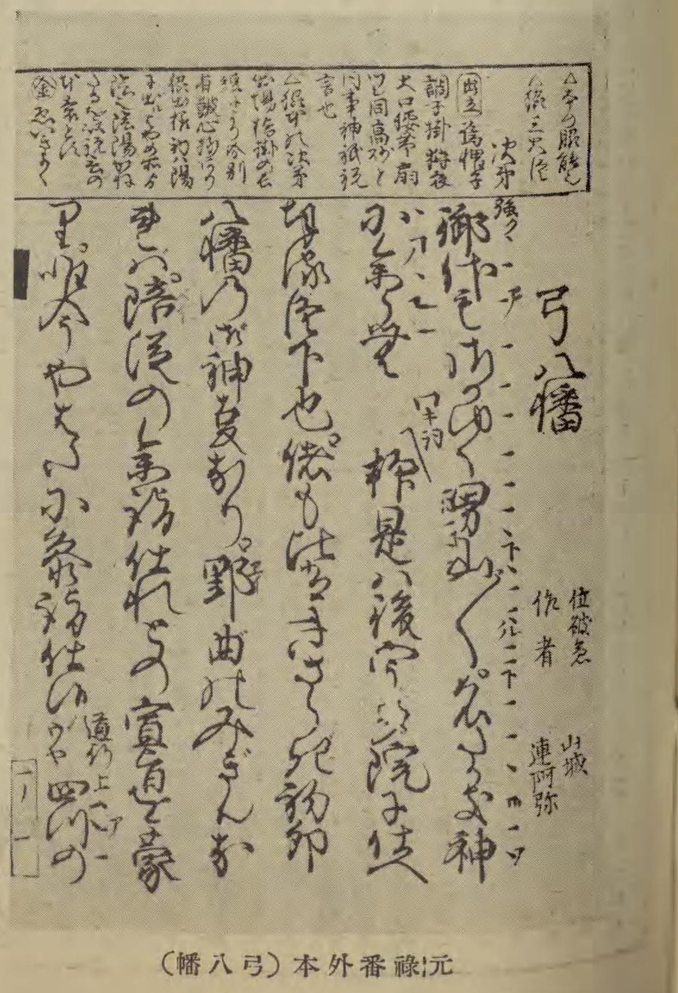
【思想】 能狂言(別項)が世相を諷刺して、人情の機微を穿ち、道德の缺陷を暴露してゐるのに對し、謠曲は理想派の文藝として、典雅な貴族的趣味の涵養に力め、堅固な國民道德の向上を計つてゐる。そして德川期に普及した我が國民道德は、主としてこゝに淵源してゐると思はれる。謠曲の高唱してゐる主な種目を擧げれば、(一)尊皇愛國。謠曲は常に幕府の保護を受けて來たものであるが、將軍を謳歌した曲は一もない。その神事物(別項)は皆皇室尊崇と國土讃美とを主題にしたもので、ワキが勅使・朝臣である場合には、天皇に代つて神德を享け、神官である場合には、我が國が神國であることを顯證するのである。國土讃美が寧ろ極端に走つて、例へば「春日龍神」が明惠上人の入唐渡天を引き留め、住吉明神が我が國の智慧を測らうとした「白樂天」を追ひ返してゐる如き、排外思想に及んだものもある。(二)忠君友愛。一般的祝言としては、ひたすら尊皇を旨として、一言も幕府のことを述べてゐないが、勿論、小さな主從關係を輕んじたのではない。「主從は三世の緣」(橘辨慶・朝長・春榮・仲光)といつて、主君の重んずべきことを力説し、「仲光」などは幼君を助けるために、我が子を身代りに殺してゐる。兄弟互ひに命を棄てて助け合はうとする「春榮」の如きその著例である。(三)親子愛。東西古今の文藝を通じて、謠曲ほど親子愛を讃美したものはなからう。數多い親子物の中でも、最も著しいのは、子の行方を尋ねる母の情愛を描いた狂女物(別項)で、男女の戀愛を否定した謠曲作者は、至純な感情をこの母性愛に求めようとしたものらしい。(四)戀愛否定。戰場に馳驅すべき武士にとつて恐るべきは、女であり戀である。女は五障三從の罪業深いものであるといひ(佛原・夕顏・誓願寺)、戀に惱んだものは、すべて死後地獄道に墜ちると説いてゐるのである。鬘物の多くはその樣を描いたものである。(五)技藝尊重。謠曲はまた、文學・音樂その他の技藝を尊重することが甚しい。歌人の吟詠を受ければ、草木も成佛し(杜若)、罪業の深い女人も歌を詠めば極樂に生れて菩薩となり(東北・江口)、管絃に執心であれば、八大龍王も浮び出で(絃上)、刀を鍛へようとすれば、明神も現はれてこれを助けるのである(小鍛冶)。(六)宗教思想。殆どすべての謠曲を彩るものは、佛教思想である。修羅道に墮ちた修羅物(別項)の主人公も、地獄道に沈んだ鬘物の主人公も、乃至非情の草木の精魂物(別項)も、皆旅僧の誦經回向によつて成佛すると結んでゐるのである。併しその思想は鎌倉期のもののやうな深刻な無常觀から出たものではない。觀世音を信じたが故に、鬼神を亡ぼすことが出來(田村)、阿彌陀如來を信じたが故に、親子再會することが出來た(柏崎)といふやうな、所願成



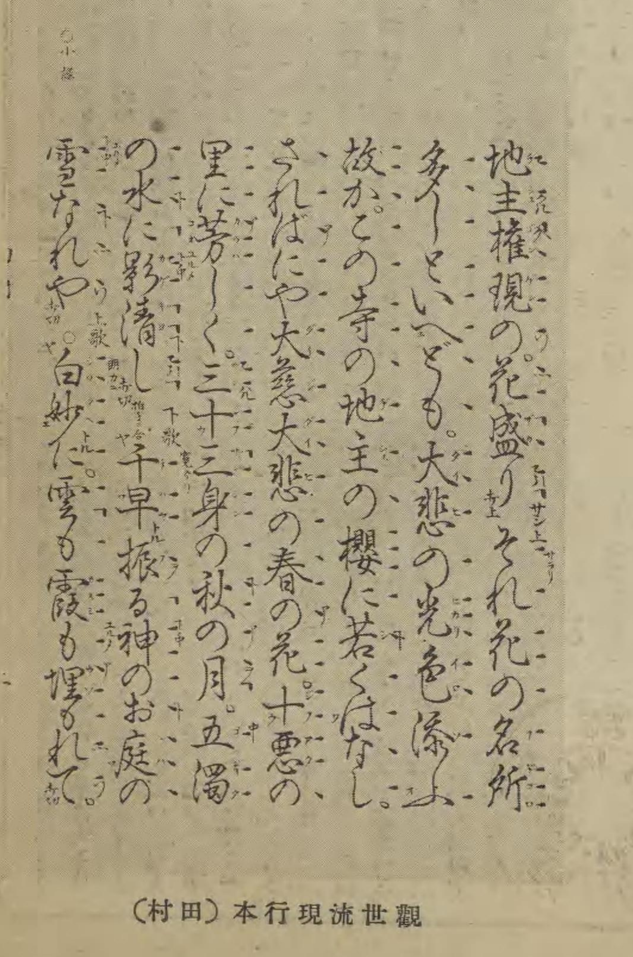
光悦本（高砂）



元和卯月本（松風）



元禄番外本（弓八幡）



観世流現行本（田村）

多くは候文にて綴る。〔道行〕古く溯れば「伊勢物語」の東下りに始まり、「宴曲」「平家物語」の海道下りなどによつて形を整へて來たもので、謡曲の道行は、五文字を首とした七五調七八句から成り、縁語・掛詞等によつて叙景・抒情を加へながら旅程を述べ、舞臺轉換の用をなす（道行參照）。〔着ゼリフ〕道行によつて舞臺の轉換したことを一層明確ならしめるもので、大抵候文の短文から成る。〔一聲〕雜藝（別項）の一種から出た名であるが、謡曲詞章の一聲は、五七五七五の句から成り、多くは古歌を引いて舞臺の景趣又は自己の感慨を述べる。ワキ次第に對して大抵シテの登場した初めに謡ふ。〔二句〕シテ・ヅレのある場合、一聲の次に謡ふもので、七五調の二句から成り、一聲と内容の連絡したものが多い。〔サシ〕古る地謡を「初同」、次を「二の同」、その次を「三の同」などといふ。「初同」は大體正格な七五調で、「二の同」以下にはやゝ破格のものが多い。地謡には、地の文・叙事文も交つてゐるが、シテ・ワキ等の代辯と見るのが本體である。〔クリ〕クリ上げて謡ふといふ意であらう。通例クセの前のサシの上にあつて、クセの前提をなす。節がかりの散文が多い。〔クセ〕曲舞（別項）節で謡ふ部分で、世阿彌の説によれば、次第に始まつて次第で終る筈であるが、この形のものは殆どなく、普通クリ・サシ・クセ上の四節から成つてゐる。一曲の中心的材料について物語るもので、その内容は多様であるが、すべて節がかりの散文を以て綴る。その演出法には「舞グセ」と「居グセ」との二種ある。〔ロンギ〕僧家に行はれた一種の宗論、

元和卯月本（松風）

元禄番外本（弓八幡）

観世流現行本（田村）

多くは候文にて綴る。〔道行〕古く溯れば「伊勢物語」の東下りに始まり、「宴曲」「平家物語」の海道下りなどによつて形を整へて來たもので、謡曲の道行は、五文字を首とした七五調七八句から成り、縁語・掛詞等によつて叙景・抒情を加へながら旅程を述べ、舞臺轉換の用をなす（道行參照）。〔着ゼリフ〕道行によつて舞臺の轉換したことを一層明確ならしめるもので、大抵候文の短文から成る。〔一聲〕雜藝（別項）の一種から出た名であるが、謡曲詞章の一聲は、五七五七五の句から成り、多くは古歌を引いて舞臺の景趣又は自己の感慨を述べる。ワキ次第に對して大抵シテの登場した初めに謡ふ。〔二句〕シテ・ヅレのある場合、一聲の次に謡ふもので、七五調の二句から成り、一聲と内容の連絡したものが多い。〔サシ〕古る地謡を「初同」、次を「二の同」、その次を「三の同」などといふ。「初同」は大體正格な七五調で、「二の同」以下にはやゝ破格のものが多い。地謡には、地の文・叙事文も交つてゐるが、シテ・ワキ等の代辯と見るのが本體である。〔クリ〕クリ上げて謡ふといふ意であらう。通例クセの前のサシの上にあつて、クセの前提をなす。節がかりの散文が多い。〔クセ〕曲舞（別項）節で謡ふ部分で、世阿彌の説によれば、次第に始まつて次第で終る筈であるが、この形のものは殆どなく、普通クリ・サシ・クセ上の四節から成つてゐる。一曲の中心的材料について物語るもので、その内容は多様であるが、すべて節がかりの散文を以て綴る。その演出法には「舞グセ」と「居グセ」との二種ある。〔ロンギ〕僧家に行はれた一種の宗論、

元禄番外本（弓八幡）

観世流現行本（田村）

多くは候文にて綴る。〔道行〕古く溯れば「伊勢物語」の東下りに始まり、「宴曲」「平家物語」の海道下りなどによつて形を整へて來たもので、謡曲の道行は、五文字を首とした七五調七八句から成り、縁語・掛詞等によつて叙景・抒情を加へながら旅程を述べ、舞臺轉換の用をなす（道行參照）。〔着ゼリフ〕道行によつて舞臺の轉換したことを一層明確ならしめるもので、大抵候文の短文から成る。〔一聲〕雜藝（別項）の一種から出た名であるが、謡曲詞章の一聲は、五七五七五の句から成り、多くは古歌を引いて舞臺の景趣又は自己の感慨を述べる。ワキ次第に對して大抵シテの登場した初めに謡ふ。〔二句〕シテ・ヅレのある場合、一聲の次に謡ふもので、七五調の二句から成り、一聲と内容の連絡したものが多い。〔サシ〕古る地謡を「初同」、次を「二の同」、その次を「三の同」などといふ。「初同」は大體正格な七五調で、「二の同」以下にはやゝ破格のものが多い。地謡には、地の文・叙事文も交つてゐるが、シテ・ワキ等の代辯と見るのが本體である。〔クリ〕クリ上げて謡ふといふ意であらう。通例クセの前のサシの上にあつて、クセの前提をなす。節がかりの散文が多い。〔クセ〕曲舞（別項）節で謡ふ部分で、世阿彌の説によれば、次第に始まつて次第で終る筈であるが、この形のものは殆どなく、普通クリ・サシ・クセ上の四節から成つてゐる。一曲の中心的材料について物語るもので、その内容は多様であるが、すべて節がかりの散文を以て綴る。その演出法には「舞グセ」と「居グセ」との二種ある。〔ロンギ〕僧家に行はれた一種の宗論、

元禄番外本（弓八幡）

観世流現行本（田村）

多くは候文にて綴る。〔道行〕古く溯れば「伊勢物語」の東下りに始まり、「宴曲」「平家物語」の海道下りなどによつて形を整へて來たもので、謡曲の道行は、五文字を首とした七五調七八句から成り、縁語・掛詞等によつて叙景・抒情を加へながら旅程を述べ、舞臺轉換の用をなす（道行參照）。〔着ゼリフ〕道行によつて舞臺の轉換したことを一層明確ならしめるもので、大抵候文の短文から成る。〔一聲〕雜藝（別項）の一種から出た名であるが、謡曲詞章の一聲は、五七五七五の句から成り、多くは古歌を引いて舞臺の景趣又は自己の感慨を述べる。ワキ次第に對して大抵シテの登場した初めに謡ふ。〔二句〕シテ・ヅレのある場合、一聲の次に謡ふもので、七五調の二句から成り、一聲と内容の連絡したものが多い。〔サシ〕古る地謡を「初同」、次を「二の同」、その次を「三の同」などといふ。「初同」は大體正格な七五調で、「二の同」以下にはやゝ破格のものが多い。地謡には、地の文・叙事文も交つてゐるが、シテ・ワキ等の代辯と見るのが本體である。〔クリ〕クリ上げて謡ふといふ意であらう。通例クセの前のサシの上にあつて、クセの前提をなす。節がかりの散文が多い。〔クセ〕曲舞（別項）節で謡ふ部分で、世阿彌の説によれば、次第に始まつて次第で終る筈であるが、この形のものは殆どなく、普通クリ・サシ・クセ上の四節から成つてゐる。一曲の中心的材料について物語るもので、その内容は多様であるが、すべて節がかりの散文を以て綴る。その演出法には「舞グセ」と「居グセ」との二種ある。〔ロンギ〕僧家に行はれた一種の宗論、

元禄番外本（弓八幡）

観世流現行本（田村）

多くは候文にて綴る。〔道行〕古く溯れば「伊勢物語」の東下りに始まり、「宴曲」「平家物語」の海道下りなどによつて形を整へて來たもので、謡曲の道行は、五文字を首とした七五調七八句から成り、縁語・掛詞等によつて叙景・抒情を加へながら旅程を述べ、舞臺轉換の用をなす（道行參照）。〔着ゼリフ〕道行によつて舞臺の轉換したことを一層明確ならしめるもので、大抵候文の短文から成る。〔一聲〕雜藝（別項）の一種から出た名であるが、謡曲詞章の一聲は、五七五七五の句から成り、多くは古歌を引いて舞臺の景趣又は自己の感慨を述べる。ワキ次第に對して大抵シテの登場した初めに謡ふ。〔二句〕シテ・ヅレのある場合、一聲の次に謡ふもので、七五調の二句から成り、一聲と内容の連絡したものが多い。〔サシ〕古る地謡を「初同」、次を「二の同」、その次を「三の同」などといふ。「初同」は大體正格な七五調で、「二の同」以下にはやゝ破格のものが多い。地謡には、地の文・叙事文も交つてゐるが、シテ・ワキ等の代辯と見るのが本體である。〔クリ〕クリ上げて謡ふといふ意であらう。通例クセの前のサシの上にあつて、クセの前提をなす。節がかりの散文が多い。〔クセ〕曲舞（別項）節で謡ふ部分で、世阿彌の説によれば、次第に始まつて次第で終る筈であるが、この形のものは殆どなく、普通クリ・サシ・クセ上の四節から成つてゐる。一曲の中心的材料について物語るもので、その内容は多様であるが、すべて節がかりの散文を以て綴る。その演出法には「舞グセ」と「居グセ」との二種ある。〔ロンギ〕僧家に行はれた一種の宗論、

元禄番外本（弓八幡）

観世流現行本（田村）

就の祈禱に外ならなかった。そしてこれは本地垂跡、神佛混淆の信仰によつて安易に受け入れられたのであつた。

【影響】謡曲の後生文藝に與へた影響は、極めて大きい。まづ室町期の幸若舞曲（別項）がこれと頗る密接な關係を持つて居り、「閑吟集」（別項）には、謡曲の歌章を收めたものが多い。

品を列擧する。（曲名の下の註は、曲名採取書目で（談儀）は「申樂談儀」、註文は「能本作者註文」（謡目錄）は「二百十番謡目錄」である）。

江波左衞門五郎（猿樂新座河内屋並の猿樂師、應永頃の人）。柏崎（原作世阿彌改作）。鵜飼（原作世阿彌改作）（以上談儀・謡目錄）。

井阿彌（應永頃の猿樂師）。通盛・丹後物狂（以上談

金春善德（閥歷不明）。吉備津宮（註文）。

竹田法印宗盛（竹田姓であるから金春座の人か）。善界（註文・謡目錄）。

外山又五郎吉廣（寶生座の人であらう）。唐船（謡目錄）。

金剛彌五郎　鳥追船・玄上（以上謡目錄）。

宮增（「能本作者註文」に、「脇之上手云々」とも。近江

角倉素庵の版行したのが最も古く、爾來頻りに出版せられて、現存のもの約六百種に上つてゐる。その主なものを次に擧げる。

【光悅本】慶長年間、角倉素庵の版行したもので、本阿彌光悅が本文を書いたといふ說により世に光悅本といふ。百番百册としたもののやうであるが、數種の異版がある（百番揃本）

就の祈禱に外ならなかつた。そしてこれは本地垂跡、神佛混淆の信仰によつて安易に受け入れられたのであつた。

【影響】謡曲の後生文藝に與へた影響は、極めて大きい。まづ室町期の幸若舞曲（別項）がこれと頗る密接な關係を持つて居り、「閑吟集」（別項）には、謡曲の歌章を收めたものが多い。德川期の淨瑠璃（別項）には、山本土佐掾・井上播磨掾・宇治加賀掾など皆謡曲を題材として居り、殊に近松門左衞門は最も著しく、その時代物には、謡曲の殆ど一曲をそのまゝ襲用してゐるものがある。歌舞伎（別項）の方は淨瑠璃に比べてやゝ少いが、「三番叟」「道成寺」「石橋」「隅田川」「羽衣」「安宅」など多く採り入れ、從つて劇場音樂である長唄・常磐津・清元（各別項）等にも影響した所が少くないが、殊に著しいのは、明治以降、歌舞伎・三絃樂・箏唄ともに、內容改善の聲が高まつた爲めに、本行物（別項）と稱して、謡曲を題材とする傾向の甚しくなつたことである。俳諧（別項）も亦謡曲に教へられたところが多く、その最も甚しいのは西山宗因で、松尾芭蕉はこれを利用することに妙を得てゐた。その他雜俳・川柳（各別項）もこれを詠んだものが少くない。浮世草子（別項）類では、井原西鶴はその引用利用が巧みで、あらはに謡曲を題名又は主材としたものがないが、その前後には假名草子にも、讀本にも、黃表紙にも、合卷（各別項）にも、「隅田川」「道成寺」「羽衣」「安宅」「邯鄲」「安達原」「鉢木」等を題材としたものが甚だ多い。（能樂參照）

【謡曲作者】謡曲は觀阿彌・世阿彌・金春禪竹・金春禪鳳（各別項）及びその他の能役者によつて作られたもので、素人の手に成つたものは極めて少い。別項四人以外の作者及びその作品を列擧する。（曲名の下の註は、曲名採取書目で（談儀）は「申樂談儀」、註文は「能本作者註文」（謡目錄）は「二百十番謡目錄」である）。

江波左衞門五郎（猿樂新座河內榎並の猿樂師、應永頃の人）。柏崎（原作世阿彌改作）・鵜飼（原作世阿彌改作）（以上談儀・謡目錄）。

井阿彌（應永頃の猿樂師）。通盛・丹後物狂（以上談儀・謡目錄）・靜（談儀）。

河上神主（和州十二大夫先祖、寶生十二五郎、「申樂談儀」に、十二權頭康次として見ゆ。世阿彌とほぼ同年輩の人）。源氏供養・朝比奈・文學・小手卷（以上註文）。

龜阿彌（「申樂談儀」に音曲の先祖と推賞してゐる。幼名龜夜叉後に喜阿彌といつた田樂師であらう）。女郎花（謡目錄）。

横尾光久（「申樂談儀」に素人といふ「謡目錄」に與江元久とあるは、この人であらう）。浮船（世阿彌節附）（談儀・謡目錄）。

觀世元雅（世阿彌の嫡男十郎、長祿三年十月九日六十五歲で歿す、法名大圓）。角田川・嚼法師・盛久・石橋（以上註文）。

觀世小次郎（音阿彌の七男信光、永正十三年七月七日八十歲餘で歿す、法名大雅宗松）。玉井・大蛇・胡蝶・遊行柳・船辨慶・羅生門・皇帝（謡目錄には「明王鏡」とある）・張良・龍虎（以上註文・謡目錄）。巴園・施世太子・保貞・飛賀美・九世戶・吉野天人・村山・三井寺前司・盛長・惟盛・愛宕・城太郎・らうとしや・高祖・富士・具忠・滿季・■井・韋馱天・二人御子・木船・けうぼう女（以上註文）・安宅・紅葉狩（以上謡目錄）

觀世彌次郎（觀世小次郎の嫡男長俊、天文十年五十歲で歿、法名心祐）。輪藏・葛城天狗・大社・正尊（謡目錄には「正俊」）・江ノ島（謡目錄には「鳴島」）（以上註文・謡目錄）・香椎・花軍・惟春・廣元・木玉・嚴島・みうへが嵩・師義・尊志・親任・降魔・千手・陵王・しうらう・岡崎・呂后・異國退治・長興寺・樒塚・老子（以上註文）。

金春善德（閱歷不明）。吉備津宮（註文）。

竹田法印宗盛（竹田姓であるから金春座の人か）。善界（註文・謡目錄）。

外山又五郎吉廣（寶生座の人であらう）。唐船（謡目錄）。

金剛彌五郎　鳥追船・女上（以上謡目錄）。

宮增（「能本作者註文」に、「脇之上手云々」とで。近江猿樂宮增座の人か。吉田東伍博士は文明年中親元記に見ゆる觀世座加入の日吉源四郎かといふ）。氷室・鞍馬天狗・浦島・元服曾我（以上註文・謡目錄）。錦戶・大木・小林・嘗丞相・調伏曾我・舞車（以上註文）・逆鉾・接待・大江山・烏帽折子（以上謡目錄）。

日吉安清（謡目錄に、「日吉四郎次郎安清、後佐阿彌、長祿二戊寅八月四日死、七十六歲」とで。六浦・殺生石・六月祓・藤・吉野天人・高野物狂・橋辨慶（以上謡目錄）。

音阿彌（觀世三郎元重とは別人らしい）。住吉（註文）

小田垣能登守（武人）。糰（註文・謡目錄）。

內藤左衞門（「能本作者註文」には「內藤藤左衞門、後には河內守と云」とで）。夕顏・俊成忠度・木靈浮舟（以上註文）・半藏（謡目錄）。

三條西實隆（實隆が謡曲を作つたことが一條兼良の「桃花老人申樂後證記」にも見える）。狹衣・常盤（以上註文）。

福來（閱歷不明）。待羅物狂。

近江能（能樂大成當時近江猿樂で演じてゐた古作であらう）。安達原・羊・放下僧・熊野參（以上註文）

【古謡本】謡本の原書としては、世阿彌自筆のものも、「松浦の能」「阿古耶松」（觀世宗家）「布留の能」（京都片山家）が殘つて居り、その後のものは、可なり多く現存してゐる。傳寫も夥しくから行はれ、觀世小次郎信光自筆のものも百册現存し（伊達伯爵家）、素人の間にも轉寫せられて、天文年間山科言繼も百餘篇を寫してゐる（言繼卿記）。刊行せられたのは、慶長年間角倉素庵の版行したのが最も古く、爾來頻りに出版せられて、現存のもの約六百種に上つてゐる。その主なものを次に擧げる。

【光悅本】慶長年間、角倉素庵の版行したもので、本阿彌光悅が本文を書いたといふ說により世に光悅本といふ。百番百册としたもののやうであるが、數種の異版がある（日本古典全集に國書寮本百番を、謡曲文庫に齋藤芳之助所藏本五十番を復製）。〔元和卯月本〕元和六年卯月、觀世左近太夫暮閑の奥書を以て版行したもの。一番綴百册と五番綴二十册と二種ある。〔寬永卯月本〕寬永六年卯月、同じく左近太夫暮閑の奥書を以て版行。半紙本と大半紙本とがある。〔明曆外百番〕明曆三年野田彌兵衞尉の版行したもので、奥書に「百番之外百番」で觀世暮閑の章句によつたとある。半紙本二十册。〔萬治山本本〕萬治二年山本長兵衞の版行したもので、每曲辭句の解釋を施す。觀世流內百番の本をなす。大形本二十册。〔貞享二百番外百番〕貞享三年林和泉掾の版行で、奥附に、「此百番者世間流布之板行二百番之外百番也」とある。小形本二十册。〔元祿三百番外百番〕元祿二年林和泉掾が貞享二百番外百番の續篇として版行したもの。小形本二十册（以上二百番、國民文庫の謡曲全集下卷に飜刻）。〔元祿四百番外百番〕元祿十一年江戶田方屋伊右衞門の出版で、奥附に「此百番于世上有之板行四百番之外百番也」とある。小形本二十册（國書刊行會から謡曲末百番を題して飜刻）。〔明和改正本〕明和二年觀世太夫元章が舊謡本の詞章及び節附を改訂して、江戶出雲寺和泉掾に版行せしめたもので、內外二百番習謡十番、計二百十册及び闌曲九册外二册。〔天保山本本〕天保十一年山本長兵衞の版行したもの。內百十

番外六十二番・別能二十八番あり、現行観世流謡本の底本である。半紙本四十一冊。

【研究書】能作書（世阿彌十六部集参照）○申樂談儀（別項）○能本作者註文　吉田兼持（能樂古典簡竹柯）○能本作者事、依、安寛・寛一作樂之典據御所望一書上、其後又此上、酒呂被二聞召合一、若也子し時大永四甲申年、孟夏上澣。吉田藏人兼持（能作者又時代）○二百十番謡目錄　觀世元章（明和年間、元章が謡本の改正を企てた時調査して、能作者ごとにその曲名を録けたもの）。

【註釋書・叢書】謡抄（豐臣秀次が五山の禪僧に命じて、金春流謡本百番を註釋せしめたもので、文祿四年成る。註釋書中最古のもの。十冊本又は二十冊本として版行せられた）○諷增抄（加藤繁齋が十五番を註釋したもの。寛文元年序）○法音抄（寒山僧寂空が謡曲中の佛語を解說したもの。正德四年版）○謡曲拾葉抄（天井貞忠が觀世流百一番を註解し、門弟忍鎧が增補して明和九年版行。註釋書中最も詳しいもの。國學院大學國文註釋全書に翻刻、丸岡桂校訂謡曲叢書にも曲名を五十音順に排列して翻刻）○謡曲組忘綴本二十卷（寶生流二百番を金澤藩儒の註釋したもの。昭和三年和田萬吉博士校訂、謡曲文庫でその一部を翻刻した）○謡曲通解一卷　大和田建樹註（明治二十五年博文館）○謡曲評釋九册　大和田建樹著（前書を增補し、曲名をいろは順に排列す）○觀世流改訂謡本解解　丸岡桂註（觀世流改訂謡本に附載す）○謡曲全集二卷　古谷知新校訂（國民文庫所收。四百番を收む）○校本謡曲叢書三卷　芳賀矢一・佐佐木信綱校註（博文館發行。五百數十番を收め、頭註を施す）○謡曲集二卷　野村八良校註（有明堂文庫所收。觀世流二百番に頭註を加ふ）○日本文學大系第二十・二十一卷の五流現行曲及び謡曲五十番に頭註を加ふ）○謡曲三百五十番集　野々村戒三編（日本名著全集所收）○謡曲大觀七卷　佐成謙太郎（別項）○四流對照謡曲二百番三卷（芳賀矢一校訂、金港堂發行。觀世・寶生・喜多・金剛の謡本を對照する）○古今諸曲解題　丸岡桂遺稿　〔佐成〕

【參考】謡曲の研究　瀨尾武次郎○謡曲大觀○謡曲辭典　鹽谷時順編　＝ B. H. Chamberlain : *The Classical Poetry of the Japan* 1880. ＝ M. Stopes : *Plays of Old Japan*, 1913. ＝ E. Fenollosa and Ezra Pound : *Noh or Accomplishment*, 1916. ＝ A. Waley : *The No Plays of Japan*, 1921. ＝ K. Florenz : *Geshichted. Japanischen Literatur*, 1960. ＝ N. Péri : *Etude sur le drame lyreque japonais*, 1909—1913.

謡曲拾葉抄（うたいきょくしゅうようしょう）　「謡曲」を見よ。

謡曲大觀（うたいきょくたいかん）　研究書　七册　【著者】佐成謙太郎　【刊行】昭和五年十月より六年十月に至る。明治書院。　【內容】本書は首卷・別卷各一册を加へて七册。第一卷より第五卷まで現行曲總數二百五十三番を五十音順に收めた。首卷は書誌・總說・細說より成る。書誌は面・裝束・狂言のものをも含む。）・作物（書誌・彩色・摺）・樂器・謠本等を寫し、總說には能樂の生成・大成・詞章・演出・價値・術語略解・現行曲一覽表を載せ、細說は「謡曲文檢成要の研究」と「謡曲引歌考」とに分れる。別卷には「蘭曲曲舞集」と「謡曲語句總覽」を載せ、曲舞集は四十六番を收めてある。各曲の記述方法は、最初の解說に於て能柄・人物・所・時・作者・梗概・出典・概評等を記し、口語の全釋を試みてある。本文は主として觀世流の現行謡本に依り、諸流間の相違又今昔の異同は、「考異」として曲の終りに記してある。なほ實際の舞臺面を現はすべく、各家元の祕書に依つて狂言詞やワキゼリフを挿入し、古書を參考としつつ揷繪の助を得て、型附・裝束等をも示した。而して更に親切な振假名を附して特殊な謡方を攷へてある。【價値】本書は能樂を知るに必要な總てを網羅してゐる點に於て一大特色がある。その精細なると明確なるとは誠に敬服に値する。古來の諸註釋や研究を集大成したばかりでなく、更に著者の深き造詣を以て、困難なる演出まで論述してゐるなど、諸曲研究書中の白眉である。　〔鷹見〕

謡曲評釋（うたいきょくひょうしゃく）　「謡曲」を見よ。

漾虛集（ようきょしゅう）　短篇物語集　【著者】夏目漱石　【刊行】明治三十九年五月、大倉書店。　漱石全集第二卷所收。　【內容】「倫敦塔」（別項）「カーライル博物館」「幻影の盾」（別項）「琴のそら音」「一夜」「薤露行」「趣味の遺傳」の七篇を收む。　【批評】著者の初期に於ける作風の特色の一なる浪漫的の調子が强く出てゐる。但し「カーライル博物館」の平明な調子は例外であり、「琴のそら音」と「趣味の遺傳」は寧ろ後年の長篇の先驅ともいふべき構想に重きを置いたものである。　〔野上〕

腰句（こしく）　「短歌」を見よ。

央宮樂（おうぐうがく）　雅樂舞曲　【名義】未央宮の樂の意か。　【性質】左方樂。新樂、中曲。黃鐘調曲に屬す。四帖、拍子各十二。舞があり四人で舞ふ。舞人は常裝束を着る。答舞には「綾切」を用ひる。　【沿革】唐樂らしいが起原不明。「敎訓抄」には仁明天皇立太子の時、林眞倉勅を奉じてこれを作るとあるが、これは恐らく改作であらう。　〔田邊〕

用言（ようげん）　文法　【解說】體言（別項）について敘述の務をなす品詞で、語尾變化を持つもの。この語尾變化を活用（別項）と云ふ。用言の名は體用、すなはちもと物の實體と功用と云ふ意義の對照から、動詞の如き、活動する意味を有する語をいつたが、この種の品詞は必ず活用を持つてゐたので、自ら活用ある品詞、卽ち用言と云ふ意味に解せらるゝやうになつた。　【種類】用言は動詞（別項）及び形容詞（別項）に分つ。動詞と形容詞とが、極めて多くの類似を持つてゐることは、わが國語の特徵である。一は狀態概念、一は特性概念を現はし、實體概念を現はす名詞に對するもの。兩者が共に體言の敘述をなすことが同一であるのみならず、共に活用に由つて體言の修飾をなし、形容詞が良行變格の語尾を取れば、動詞の連絡、動詞と同じく、又共に一定の用法に據じて、或は體言に準ぜられ、或は副詞の價値を取る。その異なるところは、（一）意義上「水澄む」といひ「水清し」と云ふ說く所は同じであるが、一は動的に說明し、一は靜的に說明する。動詞は流動的屬性を說き、形容詞は固定的屬性を說く。動詞の現はす內容は、時間的のもの、偶發的のもの、移動し變化するもの。形容詞の現はす內容は、超時間的のもの、持續的のもの、靜止し安定せるものである。（二）形式上動詞は語尾の母音をく」「ゆけ」と變るもの、若しくは「る」「れ」を添加するもの（見る」「見れ」の如き）、若しくはこれ等兩者を併用するもの（「起き」「起く」「起くる」「起くれ」の如きである。形容詞は「く」「し」「き」「けれ」の語尾を添加するものである。

【研究史】富士谷成章は用言を装といひ、これを事と狀とに分けた。鈴木朖は作用の詞と形狀の詞とに分ち、義門はこれを作用言と形狀言とに分けた。鈴木朖は作用の詞を更に四段活から轉生したものであらうと云ふ說を述べたものである。雅澄以前の學者で、記紀・萬葉の頃と平安朝以後とは、用言の活用で異るものがあることを說いた人はあるけれど、專ら現代語の活用を說いたものが多い。文法上の研究が進み、觀世彌次郎長俊、連々直談時、物語申趣、所注置如斯、又此上、酒呂被二聞召合一、若也子し時大永四甲申年、孟夏上澣。吉田藏人兼持（能作者又時代）在判（これある）。○二百十番謡目錄　觀世元章（明和年間、元章が謡本の改正を企てた時調査して、能作者ごとにその曲名を録けたもの）。

【註釋書・叢書】謡抄（豐臣秀次が五山の禪僧に命じて、金春流謡本百番を註釋せしめたもので、文祿四年成る。註釋書中最古のもの。十冊本又は二十冊本として版行せられた）○諷增抄（加藤繁齋が十五番を註釋したもの。寬

門弟忍鉾が增補して明和九年版行。註釋書中最も詳しいもの。國學院大學國文註釋全書に飜刻、丸岡桂校訂謠曲叢書にも曲名を五十音順に排列して飜刻）○謠言粗志寫本二十卷（寶生流二百番を金澤藩儒の註釋したもの。昭和三年和田萬吉博士校訂、謠曲文庫でその一部を飜刻した）○謠曲通解一卷 大和田建樹註（明治二十五年博文館）○謠曲評釋九册 大和田建樹著（前書を增補し、曲名をいろは順に排列す）○觀世流改訂謠本辭解 丸岡桂註（觀世流改訂謠本に附載す）○謠曲全集二卷古谷知新校訂（國民文庫所收。四百番を收む）○校謠曲叢書三卷芳賀矢一・佐佐木信綱校註（博文館發行。五百數十番を收め、頭註を施す）○謠曲集二卷野村八良校註（有朋堂文庫所收。觀世流二百番に頭註を加ふ）○日本文學大系第二十・二十一卷（五流現行曲及び廢曲五十番に頭註を加ふ）○謠曲三百五十番集野々村

年十月に至る。明治書院。【內容】本書は首卷・別卷各一册を加へて七册。第一卷より第五卷まで現行曲總數二百五十三番を五十音順に收めた。首卷は書譜・總說・細說より成る。書譜（彩色摺）は面・裝束（狂言のものをも含む）・作物・樂器・謠本等を寫し、總說には能樂の生成・大成・詞章・演出・價値・術語略解・現行曲一覽表を載せ、細說は「謠曲文構成要の研究」と「謠曲引歌考」とに分れる。別卷には「蘭曲曲舞集」と「謠曲語句總覽」を載せ、曲舞集は四十六番を收めてゐる。各曲の記述方法は、最初の解說に於て能柄・人物・所・時・作者・梗概・出典・概評等を記し、口語の全釋を試みてゐる。本文は主として觀世流の現行謠本に依り、諸流間の相違又今昔の異同は、「考異」として曲の終りに記してゐる。なほ實際の舞臺面を現は

特色の一なる浪漫的の調子が强く出てゐる。但し「カーライル博物館」の平明な調子は例外であり、「琴のそら音」と「趣味の遺傳」は寧ろ後年の長篇の先驅ともいふべき構想に重きを置いたものである。【野上】

腰句（えうく）「短歌」を見よ。

央宮樂（やうぐうらく） 雅樂舞曲 【名義】未央宮の樂の意か。【性質】左方樂。新樂、中曲。黃鐘調曲に屬す。四帖 拍子各十二。舞があり四人で舞ふ。舞人は常裝束を着る。答舞には「綾切」を用ひる。【沿革】唐樂らしいが起原不明。「敎訓抄」には仁明天皇立太子の時、林眞倉勅を奉じてこれを作るとあるが、これは恐らく改作であらう。【田邊】

用言（ようげん） 文法 【解說】體言（別項）について敘述の務をなす品詞で、語尾變化を持つ所は同じであるが、一は動的に說明し、一は靜的に說明する。動詞は流動的屬性を說き、形容詞は固定的屬性を說く。動詞の現はす內容は、時間的のもの、偶發的のもの、移動し變化するもの。形容詞の現はす內容は、超時間的のもの、持續的のもの、靜止し安定せるものである。（二）形式上）動詞は語尾の母音を變化して、例へば「行く」が「ゆか」「ゆき」「ゆく」「ゆけ」と變るもの、若しくは「る」「れ」を添加するもの（「見る」「見れ」の如き）、若しくはこれ等兩者を併用するもの（「起き」「起く」「起くる」「起くれ」の如き）であり、形容詞は「く」「し」「き」「けれ」の語尾を添加するものである。【研究史】富士谷成章は用言を裝といひ、これを事と狀とに分けた。鈴木朖は作用の詞と形狀の詞とに分ち、義門はこれを作用言と形狀

言と稱けた。富樫廣蔭は用言を詞と云ひ、これを說動用詞と說容體詞とに分けた。今日に於ては、普通に動詞と形容詞とに分つ。かくの如く名稱は學者によつて違ひ、又鈴木朖が「あり」「居り」を形容詞に入れた如き、語彙の所屬に多少の異同はあるが、その分類の根本に於ては、古今ほぼ一定してゐる。前述の如く、我が形容詞は、その意義及び形態上の差別を別として、文を構成する職能に於ては、〻動詞と何等擇ぶ所がない。印度歐羅巴語の動詞は、體言についての敘述に用ひ、言語中最も重要のものとして、動詞すなはち羅甸語の verbum と云ふ語が、「言語」と云ふ意味をさへ持つてゐるものであつたが、我が形容詞は、この意味に於てその位置を動詞と同じくし、彼の形容詞と同列に置くべきものでない。形容詞と云ふ名目は、はじめ西洋文典の摸倣に出で、その指すところも、西洋の adjective そのまゝで、國語の語性を無視したものであつたが、チャムブレンに至つて、初めて名は同じ形容詞を用ひて、その現はすところを、昔のいはゆる形狀言に引戻したのである。我が形容詞は、決して西洋のいはゆる形容詞と同じではない。これを並べて、用言の名目の下に置くことは、もつとも適當なる品詞的取扱である。【小林】

用言變格例（ようげんへんかくれい） 語學書 一卷 【著者】鹿持雅澄 【刊行】明治二十六年十二月 【內容】動詞の諸活用の原形を考究したものである。著者は四段活用を常格とし、他の凡ての活用を變格と云ふ。これはその研究の結果から云つたのである。さてかさたなはまらの七行は四段に活用するが、あやわの喉音三行は四段の活用はない。さて「恐る」「隱る」「忘る」「別る」「亂る」「流る」「留む」「果つ」「佐く」「重ぬ」「終ふ」「總ぶ」「覺む」「居う」等は、普通下二段活用であるが、古くは四段活用であつたと思はれ、「過ぐ」「興く」「生く」「落つ」「懲る」等も古くは四段に活いたと思はれる。佐行變格の「爲」は第一位（未然形）を「せ」と云ふが、これは四段活の「さ」から轉じたものであらう。「寄す」もこれと同じであらう。加行變格の「來」の第一位「こ」は「か」から轉じたもので、本來は四段活であつたであらう。また「着」「似」「煮」「見」「射」等一段活のうち、「着ける」の意を「ける」と云ふことがある。それは「來ける」を「ける」と云ふのと同格である。又「居」は「ゐ」と活いた事もあるやうであるから中二段にゐう、下二段にうゑと活いたのであらうか。なほ因に云ふべきは雅言で「る」に續く言は、あ韻、う韻及びお韻に限るやうである。い韻え韻から「る」につづくのは近世の俗言である。雅言でう韻の「くすつふむゆ」から「る」につづく詞は俗言では「きしちひみい」に轉じて「る」に續ける。（起くる—起きる。落つる—落ちる等）。また雅言でう韻から「る」に續ける詞を、俗言ではえ韻の「えけせてねへめえれる」に轉じて續ける（うる—える。かくる—かける。すつる—すてる等）。但し雅言にも、「える」「かける」「うせる」等の語があるが、それは「得而有」「懸而有」「失而有」の約言で、う韻がえ韻に轉じてしまつたのとは異なる。次に雅言でい韻から「る」に續けるのも稀には存する。「いさちる」「あらびる」等これである。又「はしる」は「する」「まじる」「まずる」等は、共に雅言であると云つてゐる。最後に國語は神の御口から傳はつたものであるから、人智を以て究め盡す事は困難であるとしてゐる。【價値】本書は下二段、上二段等を初め、その他の活用は大抵四段活から轉生したものであらう。而して四段活は、諸活用の根本であらうと云ふ說を述べたものである。雅澄以前の學者で、記紀・萬葉の頃と平安朝以後とは、用言の活用で異るものがあることを說いた人はあるけれど、專ら用言の諸活用を比較研究し、諸活用の根源の形を探つたのは、實に雅澄が最初である。その後に出た草野清民の「日本文法」（別項）、金澤庄三郎の「日本文法新論」（別項）、安藤正次の「古代國語の研究」等に於ける動詞の活用の原形についての諸研究も、その結論は何れもこの書と同じく四段活用を根源としてゐるのである。

【參考】日本動詞活用古形論 岡田次郎（帝國文學 四ノ三・五・六・七）【岡田】

腰鼓（えうこ）「鼓」を見よ。

用語大成（ようごたいせい） 語學書 一卷一册 【著者】八木立禮 【成立】嘉永四年九月稿成る。【刊行】寫本で傳はつてゐたが、歌文珍書保存會第四回頒布書に收めて明治四十三年刊行。【內容】詞のやちまたの總圖、ひもかゞみ、友かゞみ、玉だすき、かたばみ草などの諸圖は、互に利害得失がある故、語の活用や係結法や結辭の緣つて起る所などをも合せて詳しく知らしめん爲に作つたもので、本文は活用と係結の關係を示した四箇の圖から成つてゐる。第一圖は四段、一段（上二段、變格（カ行・サ行・ナ行）、中二段及び下二段の五種の活用とその係結を圖示してゐる。而して四段と變格は活用を五段にし（命令形を缺く）、各段を連用語、截斷語、連體語、承接語と命名してゐる（將然形には名稱を附してゐない）。他の一段、中二段、下二段は活用を四段にして將然形及び命令形を缺いてゐる。而して圖の左側の截斷語のところに「はも徒」、連體語のところに「ぞのや何」、承接語のところに「こそ」と係辭を註し、結辭は各活用形の下に註してある。例せば四段、一段、變格、中二段、下二段の各々の連體語の下に「かな・まで・に・を・より・なり・なる・なれ・か・ばかり」と記し、承接語の下に「ば・ど・ども」と記してある。第二圖は、良行四段一種（有り）、四段累有活（唉有）、一段累有活（居有）、下二段累有活（所見有）、變活累有活（爲有）、無名（て・つ・つる・つれ）、半過去之多利（而有）、現在之多利（登有）、連體之也（爾有）、截斷之也（有）、不之活（じ・ず・ぬ・ね）、無名（ざら・ざり・ざる・ざれ）、過去之活（き・し・しか）、無名（けら・けり・ける・けれ）とし、これを四段に分ち（過去之活のみは三段）、第一圖の如く係結の辭を註記してある。第三圖は、雜音活（く・し・き・けれ・さ・み・ら等）、自然（ま・み・む・め）、施爲（め・む・むる・むれ）、雜音累有活（から・かり・かる・かれ等）とし、係辭結辭を註記してゐる。第四圖は「ぬる・つる用格指掌之全圖」と題し、自然と施爲とに「ぬる」と「つる」とを分つた圖を擧げてゐる。外に體言四種と題して、有形體言（山・川等）、無形體言（心・年等）、用中體言（扇・紅葉等）、略中體言（瀧・歌等）と記し、解體古歌例として、「袖ひぢて云々」の歌を、文法的に解剖して示し、なほ五十音圖も擧げてゐる。【價値】本書の目的は序文に明記してゐる如く活用と係結の法を一目瞭然たらしめやうとするにある。併しその結果は、「詞八衢」（別項）「友鏡」「和語說略圖」（別項）等に比して異つてゐるのは、これ等の書には圖の傍に一括して記してあつた各活用形に接續する語を、活用形の下へ一々書き入れたと云ふに過ぎないの

で、研究としては何等進んで居らない。活用形に於て命令形を逸し、また將然形を屢々逸し、或は活用を誤つてゐることなど、却つて前記の諸書よりも劣つた點がある。ただ本書が前記の諸書よりも勝れてゐるのは、助動詞を動詞から分離した點にある。勿論助動詞の研究として見れば幾多の不備もあり、誤謬もあるが、一般の動詞とは同一に律すべきではない一群の活用語がある事に氣付いてゐることは注意するに足る。【龜田】

榕齋（ようさい）　儒者　【姓名】糸井翼。字は君鳳、通稱は九兵衛【閲歷】出羽秋田の人、山本北山の門人【著作】歸藝園鉏莠二卷（文化九年二月、江戸文刻堂板、松邨九山の「藝園鉏莠」を反駁した書）。【佐久】

用字格（ようじかく）　漢文作法書　四卷【著者】伊藤東涯【刊行】享保十九年【解説】漢文の布字法を類別して説明したものである。卷一には不用格四十六條、可字格二十七條。卷二には有字格二十二條、無字格十四條、莫字格十條、未字格十二條、之字格五條、欲字格十四條。卷三には、雖・其・與・非・所・使・爲・似・若・難・至等の諸格すべて八十條。卷四には不可・無不・不能・不復・不得・不敢・自・足・所以・雜格等すべて七十四條を説明してある。漢文作法の良書である。【附記】井狩總の「用字格辨正」といふ三卷の寫本がある。「用字格」の正誤である。【佐久】

樣式（やうしき）　美學　【英】Style.【獨】Stil.【解説】ギリシヤ語のStilusは卽ち筆を意味し、筆で書かれたもの、書體の意味をも含み、更に後には書かれた言葉の藝術的表現を意味するやうになつた。しかし現代の美學或は美術史上の概念とは可なり距りがある。中世期から少くともルネッサンスの美術家評傳を著はして有名なヴァザリでは、この語の代りにmaniera（吾々のいふところのマニール、卽ち類型的傳習的形式といふ語の源）の字を用ひた。美術史上殊に建築について樣式といふ事が云はれるやうになつたのはドイツの美術史家ウィンケルマン（1717—68）或はその頃からであるといふが、建築或は美術作品の外面的な個々の形式的特徴を云ひ現はす言葉として用ひられたのであつて、この作品の形式的特徴を規定する生産の內面性乃至生産そのものの全體的法則性の意味は與へられてゐなかつた。「ウィンケルマン以後の人に於て、初めてこの語は何か表現された美の內容と形式との種類とか段階の全般性といふ意味を持つやうになつた」（クラウゼ）。近世になつて藝術生産に關して天才とか獨創性（別項）、或は表現の內面的必然性が論ぜられ、或は作品の典型的形式を確定するものは何かといふ問題が論ぜられるやうになつて樣式概念は內面的に解釋され、その意味は深化した。かくしてフェヒネル以後の心理學的美學では、多樣雜多に現はれてゐる形式の中に、決定的に統一としてあるもの、考へられるもの、卽ち多くの形式における一般的なものを樣式とした。例へばフェヒネルによれば「樣式とは多くの性質の違つてゐる藝術品に對して、何か或る見地から見て共通な表現形式」である。故に、この定義に從へば、それは單に形式的統一を與へる手法（マニエル）といふ以上に、藝術價値の意味が含まれてゐる。一般に心理學的美學では、形式と內容との融合とか統一の上に美を理解し解釋するから、樣式の概念を規定するについても、個々のものの多樣の中にあつてそれ等を貫き、常に不變であるところの形式表現を認識することが基本になつてゐる。フォルケルトの定義「凡ての個々の差別の中にあつて、統一的な、常に不變に存在するところの藝術的形象の形式表現（フォルム・ダブレーザ）は、それが重要性と獨創性を示す限りに於て樣式である」。而してこのやうな不變な形式表現を確定する準據が、（一）時代・民族・文化の發展過程にありとされる場合、（二）個々の藝術家の差別にありとする場合、（三）藝術創作の心理の形成活動の型の差異にあるとされる場合等に從つて、それ〴〵歷史的樣式概念、個人的樣式概念、創作型樣式概念が區別されてゐる。然るに心理學的立場に於ては、樣式は單に外面的差異卽ち印象の近似性といふ點から分けて見た解釋にすぎない。卽ち樣式といふことは類型といふこと以上の深い意味に進んでをらぬ。そこで事物の認識の本質的基礎から、藝術の客觀的當爲から樣式概念を規定する試みが次に生じた。文化的社會に於ける藝術發展の法則理法を究めることを任務とした藝術社會學の如き、藝術の本質、當爲として樣式を理解するところのものである。或は作家の美的把握と形成の力とが現はされてゐる統一的表出手段の綜和であるとし、或は「美的作品の產出する諸要素（卽ち創造者の精神的個性と、製作の物理的材料）の特質によつて制約されたもの」（ウィタゼーク）と云ふやうに、樣式は藝術の本質的なところから理解されるに至り、藝術形成の諸原理の綜和、卽ち樣式といふ考に進んだのである。他面に於て創作の心理學的見地を離れ、視覺過程の發展として藝術を理解するフィドラアに於ては、「視」の發展の法則性、視の論理として理解される。或はウェルフリンの如く、時代の基礎的情調と情調とは、無關係な「視ること」に樣式を制約する根元を置く考へ、或はハーマンの如く、「樣式の本質は文化の實體の法則である」といふに至つては、美術史學を成立せしめる中心的概念にまで發展したと見るべきであらう。進んでチェレンの如く、吾々の世界觀と結合し、絕對者への關係を直觀することが樣式構成の根元であると云ふに至つては、樣式概念は既に形而上學的理解にまで達してゐる。現代の現象學的美學（別項）、特にオーデブレヒトに於ては、從來の一般の美學で云ふ樣式の概念卽ち雜多な作品の中に發見されるであらう「同一な形式的特徵」とか、「類型的定形性」（Typische-Formbestimmtheit）の意味と異なり、美的情調體驗そのものの本質の上から說明されることとなり、美意識の可能の問題は、同時に樣式は如何にして可能なるかの問題として、美學そのものの深い問題となつてゐる。卽ち（一）個的な形式上の多樣の中における一貫した統一的完成的な形式印象といふ意味から、（二）「藝術形成の內面的必然性の綜和」といふことになり、（三）遂に美意識そのものの可能性の問題に關聯して、更に美學的に意味が深められるに至つた。而して一般的に理解される（二）の見地からすれば、創造者個性の特色や生產を支配する諸條件に隨つて、具體的に個人樣式、或は時代の樣式等の區別が生ずる。次に樣式化といふやうな場合、普通は（一）の見地に於て形式が單に傳習により、摸倣によつて現實の對象が外面的に模樣化されることをいふのであるが、そしてその意味に於て、現實的形態の改變乃至消極的統一化が行はれることであるが、藝術の表現乃至形成に於ける獨創性、生產の必然性が考へられる限り、樣式化といふことは、單なる形式の模樣化といふことではなく、理想化卽ち高度の美的形式價値實現といふことになる。（理想化參照）

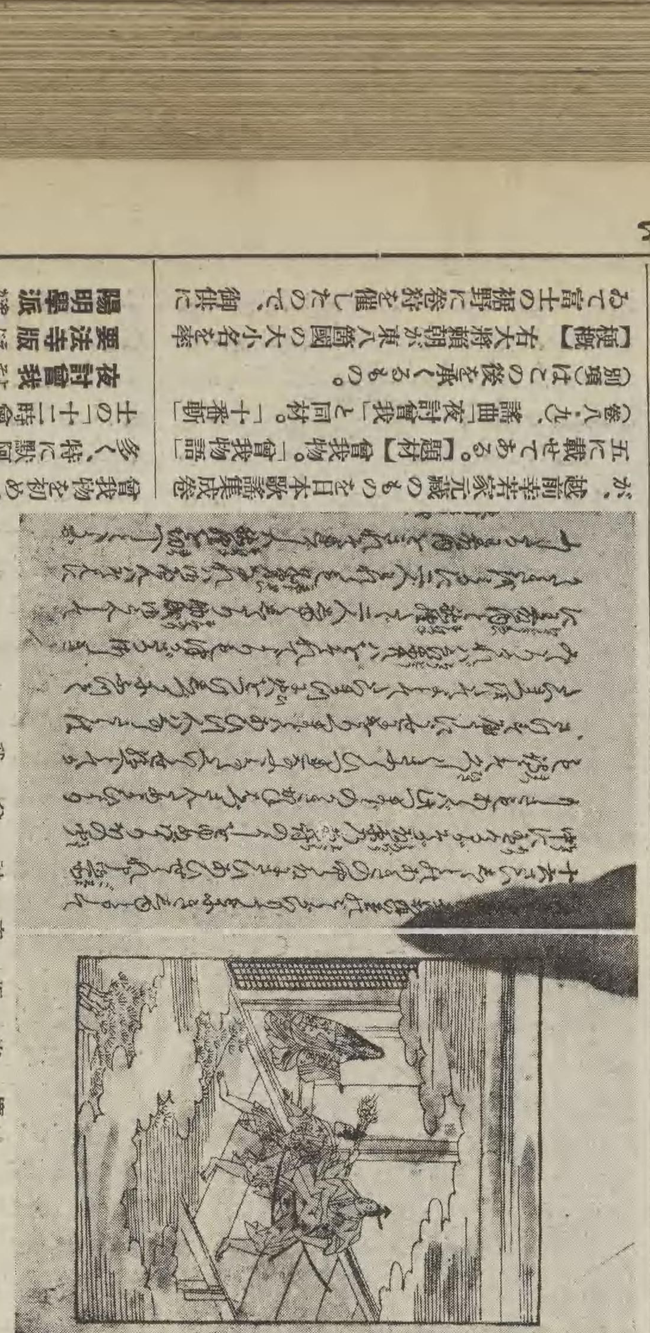
【參考】E. utitz; *Was ist Stil?* 1911.‖E. otto; *Was versteht man unter Stil?*

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしよくにんかがみ）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】近松門左衞門【興行】竹本座。明和板「外題年鑑」に、寶永二年三月二日の初日としてあるが、「操年代記」に、「其暮顏見世淨瑠璃といふを始め、用明天皇職人鑑」とあり、且つ又「心中二枚綿草紙」の

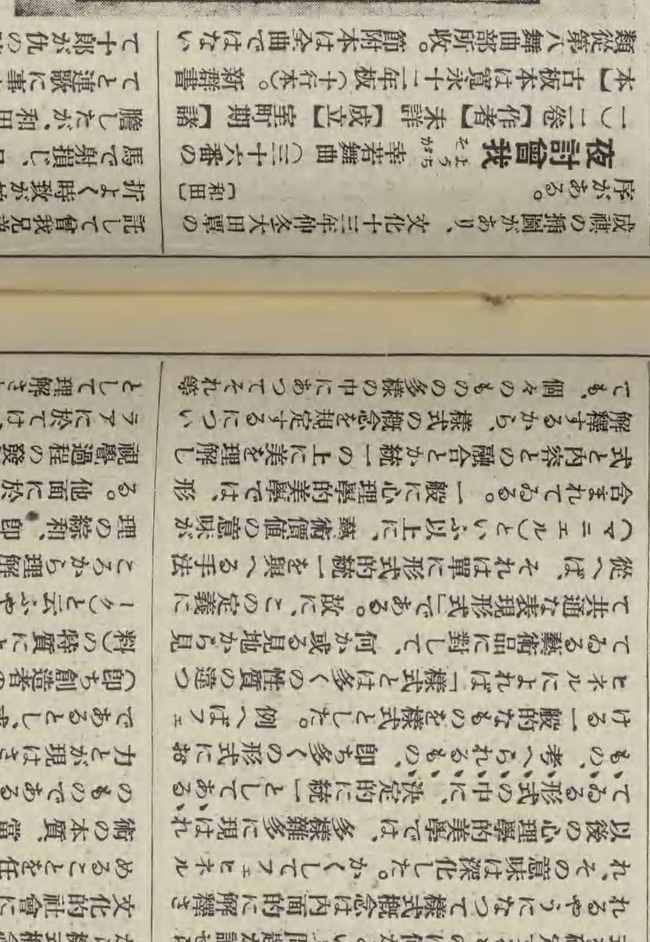
成祿の插圖があり、文化十三年仲冬大田覃の序がある。【和田】

夜討曾我（よるうちそが）　幸若舞曲（三十六番の一）二卷【作者】未詳【成立】室町期【諸本】古板本は寬永十二年板（十行本）。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないて十郎が仇の陣屋を窺ふと、祐經の子犬房に託して曾我兄弟は親の仇工藤祐經を狙つた。折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の落馬で射損じ、兄弟は拙き武運に自害せんと落膽したが、和田義盛・秩父重忠兩人に今宵を待てと連歌に事寄せて諫められた。日暮を待つ

巻三は路傍の並木外二十四條。巻四は女房男房の事以下十九條を收めてゐる。高千春・源



夜討曾我



十郎が、起前芳家元藏のものの日本歌謠集成巻

五に載せてある。【曾我物語】

貸我物語

多く、特に駄阿彌の「夜討曾我狩場曙」、櫻痴居士の「曾我物語」、鳥邊

要法寺版（えうほふじばん）　刊本の一。

陽明學派　貸我物語の諸本に見よ。

夜討曾我（よるうちそが）　貸我物語の諸本に見よ。

擁書漫筆（ようしょまんぴつ）　隨筆　四巻　【著者】高田與清（ともきよ）【名稱】擁書は漢の書齋を擁する藏書に富み、と號したところから本書の題名は生じた。【刊行】文化十四年【解說】歌人の詩歌に關する隨筆。巻一は齊明紀童謠等の古傳說、巻二は路傍の並木外二十四條、巻四は女房男房の事以下十九條、巻三は路傍の並木外二十四條を收めてゐる。高千春・源

卷八九、謠曲夜討曾我と同材。「十番斬」

五に載せてある。【曾我物語】

夜討曾我（よるうちそが）　右大將頼朝が東八箇國の大小名を催して富士の裾野に卷狩を催（もよほ）したので、御供に

【梗概】右大將頼朝が東八箇國の大小名を率ゐて富士の裾野に卷狩をした。其の夜、曾我十郎祐成と五郎時致とは、父の敵工藤祐經を討たんと、祐經の寢所を窺ふと、祐經が辯才巧みに由なき意趣見出されて呼び入れられ、祐經が辯才巧みに由なき意趣を、一刀に斬り捨てたく思つたが、弟と俱にせぬ殘念さにその儘にした。夜半、兄弟は主と生死を共にせんと請ふ鬼王・だん三郎に、母への名殘の文と形見の品とを託して故郷へ返し、仇の祐經が寢所に忍び入つたが、敵討の本意を得ると共に、遂に姫を得るといふ話、若舞曲「夜討曾我」は、これを脚色して、山路の曙に明天皇の御製を引用することなどは、卷八九、謠曲夜討曾我と同材。「十番斬」

擁書漫筆（ようしょまんぴつ）　隨筆　四巻　【著者】高田與清（ともきよ）【名稱】擁書は漢の書齋を擁する藏書に富み、と號したところから本書の題名は生じた。【刊行】文化十四年【解說】歌人の詩歌に關する隨筆。巻一は齊明紀童謠等の古傳說、巻二は路傍の並木外二十四條、巻四は女房男房の事以下十九條、巻三は路傍の並木外二十四條を收めてゐる。高千春・源

用捨箱（ようしゃばこ）　隨筆　三巻　【著者】柳亭種彦　【名稱】用捨箱の題名は、自序に「雨の日の徒然、軒の雫のほしく〳〵と拾ひ書したるを、とはかいやり給へとて用捨箱」とあるので分る。反古な、若しくは一つ二つも取所有ればとり、あ

ついての評判等を輯錄し、考古學者を益する卷以下十三條、だ以下九條、巻二は石山寺緣起靈驗事諸の事以下十九條、巻一は齊明紀童謠等の古傳說、巻二は路傍の並木外二十四條、巻四は女房男房の事以下十九條を收めてゐる。高千春・源

卷八九、謠曲夜討曾我と同材。「十番斬」

五に載せてある。【曾我物語】

夜討曾我（よるうちそが）　右大將頼朝が東八箇國の大小名を率ゐて富士の裾野に卷狩を催したので、御供に

【梗概】右大將頼朝が東八箇國の大小名を率ゐて富士の裾野に卷狩をした。其の夜、曾我十郎祐成と五郎時致とは、父の敵工藤祐經を討たんと、祐經の寢所を窺ふと、祐經が辯才巧みに由なき意趣見出されて呼び入れられ、祐經が辯才巧みに由なき意趣を、一刀に斬り捨てたく思つたが、弟と俱にせぬ殘念さにその儘にした。夜半、兄弟は主と生死を共にせんと請ふ鬼王・だん三郎に、母への名殘の文と形見の品とを託して故郷へ返し、仇の祐經が寢所に忍び入つたが、敵討の本意を得ると共に、遂に姫を得るといふ話、若舞曲「夜討曾我」は、これを脚色して、山路の曙に明天皇の御製を引用することなどは、卷八九、謠曲夜討曾我と同材。「十番斬」

擁書漫筆（ようしょまんぴつ）　隨筆　四巻　【著者】高田與清（ともきよ）【名稱】擁書は漢の書齋を擁する藏書に富み、と號したところから本書の題名は生じた。【刊行】文化十四年【解說】歌人の詩歌に關する隨筆。巻一は齊明紀童謠等の古傳說、巻二は路傍の並木外二十四條、巻四は女房男房の事以下十九條を收めてゐる。高千春・源

夜討曾我

十郎が、起前芳家元藏のものの日本歌謠集成巻

五に載せてある。【曾我物語】

貸我物語

多く、特に駄阿彌の「夜討曾我狩場曙」、櫻痴居士の「曾我物語」、鳥邊

要法寺版（えうほふじばん）　刊本の一。

陽明學派　貸我物語の諸本に見よ。

夜討曾我（よるうちそが）　貸我物語の諸本に見よ。

擁書漫筆（ようしょまんぴつ）　隨筆　四巻　【著者】高田與清（ともきよ）【名稱】擁書は漢の書齋を擁する藏書に富み、と號したところから本書の題名は生じた。【刊行】文化十四年【解說】歌人の詩歌に關する隨筆。巻一は齊明紀童謠等の古傳說、巻二は路傍の並木外二十四條、巻四は女房男房の事以下十九條を收めてゐる。高千春・源

用捨箱（ようしゃばこ）　隨筆　三巻　【著者】柳亭種彦　【名稱】用捨箱の題名は、自序に「雨の日の徒然、軒の雫のほしく〳〵と拾ひ書したるを、とはかいやり給へとて用捨箱」とあるので分る。反古な、若しくは一つ二つも取所有ればとり、あ

ついての評判等を輯錄し、考古學者を益する卷以下十三條、だ以下九條、巻二は石山寺緣起靈驗事諸の事以下十九條を收めてゐる。高千春・源

擁書漫筆（ようしょまんぴつ）　隨筆　四巻　【著者】高田與清（ともきよ）【名稱】擁書は漢の書齋を擁する藏書に富み、と號したところから本書の題名は生じた。【刊行】文化十四年【解說】歌人の詩歌に關する隨筆。巻一は齊明紀童謠等の古傳說、巻二は路傍の並木外二十四條、巻四は女房男房の事以下十九條を收めてゐる。高千春・源

用捨箱（ようしゃばこ）　隨筆　三巻　【著者】柳亭種彦　【名稱】用捨箱の題名は、自序に「雨の日の徒然、軒の雫のほしく〳〵と拾ひ書したるを、とはかいやり給へとて用捨箱」とあるので分る。反古な、若しくは一つ二つも取所有ればとり、あ

ついての評判等を輯錄し、考古學者を益する卷以下十三條、だ以下九條、巻二は石山寺緣起靈驗事諸の事以下十九條を收めてゐる。高千春・源

夜討曾我

十郎が、起前芳家元藏のものの日本歌謠集成巻

五に載せてある。【曾我物語】

貸我物語

多く、特に駄阿彌の「夜討曾我狩場曙」、櫻痴居士の「曾我物語」、鳥邊

要法寺版（えうほふじばん）　刊本の一。

陽明學派　貸我物語の諸本に見よ。

夜討曾我（よるうちそが）　貸我物語の諸本に見よ。

擁書漫筆（ようしょまんぴつ）　隨筆　四巻　【著者】高田與清（ともきよ）【名稱】擁書は漢の書齋を擁する藏書に富み、と號したところから本書の題名は生じた。【刊行】文化十四年【解說】歌人の詩歌に關する隨筆。巻一は齊明紀童謠等の古傳說、巻二は路傍の並木外二十四條、巻四は女房男房の事以下十九條を收めてゐる。高千春・源

用捨箱（ようしゃばこ）　隨筆　三巻　【著者】柳亭種彦　【名稱】用捨箱の題名は、自序に「雨の日の徒然、軒の雫のほしく〳〵と拾ひ書したるを、とはかいやり給へとて用捨箱」とあるので分る。反古な、若しくは一つ二つも取所有ればとり、あ

ついての評判等を輯錄し、考古學者を益する卷以下十三條、だ以下九條、巻二は石山寺緣起靈驗事諸の事以下十九條を收めてゐる。高千春・源

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

用明天皇職人鑑（ようめいてんわうしょくにんかがみ）　浄瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【刊行】竹本座　明和板外題に「寶永二乙酉年正月吉日」とあるが、記載に誤がある。【梗概】用明天皇の第二皇子聖徳太子は、父帝の病を平癒せんと、自ら守屋の像を彫刻して、四天王寺の建立を發願し、物部守屋を討つべく、軍勢を率ゐて河内に向ふ。守屋は、蘇我馬子と戰ひ、馬子の軍勢を悩ますが、聖徳太子の軍勢は、守屋の軍勢を破り、守屋を討取る。聖徳太子は、父帝の病平癒の祈願を果すと共に、四天王寺を建立して、父帝の菩提を弔ふ。

夜討曾我（よるうちそが）　一〇二巻　【作者】未詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十一年板行本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではない。

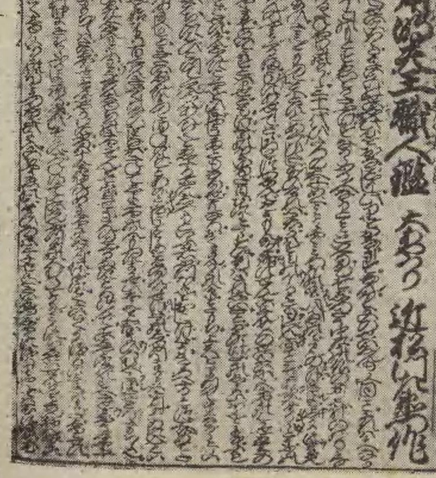
幸若（かうわか）　舞曲の一。兄弟は武運に自せんと落馬で射損じ、和田義盛・秩父重忠兩人に今背を待つ折よく時致が柏木原に見付けた時は祐成の仇工藤祐經を狙つた序がある。

この時、伊賀留田は魔法を以て豊後眞野の長者の娘玉世の姫が都檜隈岡の館に親王を招待する由を知り、かくと皇子に告ぐれば一同好機到れりと悦ぶ。（切、檜隈の岡館）親王と姫とが「職人盡し」の手業にこと寄せて、互の思を語り、やがて打連れて一間に入る。その夜、伊賀留田は魔法によつて親王の執權檢非違使勝舟と姫の傳百島太夫とを、爭鬪せしめ、その隙に乘じて山彦皇子の一味が親王と姫とを奪ひ去る。やがて心づいた勝舟と百島が辛うじて力を協せてこれを取戻すが、かく迄外道蔓るからは都住居も氣遣はしと姫は本國、親王は四國へ落ちることになる。〔第二〕（口、佐渡が島）勝舟の弟五位之介諸岩は勅勘を蒙つて佐渡へ流され、同國松浦の庄司が、下部となり海岸に出て耕作してゐる所へ花人親王の乘れる小舟が漂着し、互に不思議の邂逅に驚くが、親王から一伍一什の話を聞いた諸岩は、雁に託して、都なる妻の許へ、離別の手紙を送る。諸岩の妻は伊駒の宿禰の娘である。かくて諸岩は親王を助け、兄弟と僞つて庄司の館に連れ歸る。（切、松浦の庄司館）庄司の總領兵藤太は山彦皇子方に誘はれ、國内の流人共を語らひ一味にせんとする。豫て諸岩と言ひ交せる兵藤太の妹佐用姫は諸岩に功名させんと出陣を勸めるが、諸岩は實を告げて互の緣もこれ迄、若し夫婦となりたくば兄の首を取て、姫が都より懷姙して歸りたるを責める。折柄伊駒の宿禰が親王の執權檢非違使勝舟と稱して姫の御迎と申し入れる。親王の身の上心許なく密かに筑紫に下つた眞の勝舟がこれを知り、鹿島の事觸れとなつて廣庭に入り込

六段本やうめいてんわう（東大圖書館藏）

繪入細字本用明天王職人鑑

兵藤太法師は、靈夢を感じて海底より希代の釣鐘を波打際まで引揚げたが、それよりは一人の力に叶ひ難く往來の人々を勸進してゐる所へ、諸岩は賤の童・女童に寢せる花人親王・佐用姫と共に來り、互に奇遇を喜ぶ。親王は釣鐘の銘を見て、これは先帝の御時異朝より渡りしをその儘筑紫の海へ捨てられし祇園精舍の鐘であると禮拜する。そこへ眞野の長者が都より歸國の道中來合せ、その助力と親王の木遣によつて首尾よく鐘を引揚げる。（切、鐘供養の庭）鐘供養の場へ諸岩の離別した妻が室君となつて參詣に來り、夫の姿を見つけて走り寄り、種々と恨言を述べるが、諸岩は忠義のためあくまで離別と突き放す。女は戀慕執着の惡念から、遂に氣狂ひになり、鐘を引つかづいて失せる。そこへ豐國國師が弟子達と共に出で來り、仔細を聞いて弟子達諸共に祕法を盡して祈れば、鐘はおのづと躍つて鐘樓に引揚げられ、中から女が蛇體となつて顯れる。次が節事の「鐘入の段」となり、とど國師等の祈によつて大蛇は虚空に消える（謠曲「道成寺」の飜案）。〔第四〕（口、眞野の長者館）親王は長者に召抱へられて九州に渡り、山路と名乘る草刈童となつて仕へてゐたが、玉世の姫の繼母は外道の魔障を受けて性質一變し、姫を山彦皇子の妃に奉らんとみ、神託に事よせ、禍福を說いて長者の意を動かし、宿禰の化の皮を剝いて追拂ふ。（中、山路玉世の姫道行）滿月の夜、姫は山路の御供で、繼母に連れられて内山の月見堂に行く。（切、内山の月見堂）繼母は山路をして刈り調



繪入細字本用明天皇職人鑑（東大圖書館藏）

へしめた墮胎の藥草を無理無體に姫にのましたところ、變毒爲藥の佛法の奇蹟により却つて姫は玉の如き男兒を安產し、繼母は諸岩の妻の化身なる牛のために突き殺される。そこへ宿禰が勝舟に迫はれて遁れるが、折から姫の行方を尋ね來つた百島太夫に搦められる。〔第五〕（口、播磨の國）親王が妃・若宮・勝舟・

く、「社友會スル毎ニ其相示ス所ノ文ヲ採リコレヲ活字ニ印シ以テ同好ノ士ニ頒ツ讀ム者ヲシテ洋々ノ樂ヲ共ニセシメンコトヲ欲スレバナリ云々」と述べてゐる。洋々社は、明治八年大槻盤翁・那珂通高・黒川眞頼等が結んだ社交兼知識交換團體で、明六社が西洋臭味あるに對して、和漢臭・國粹趣味が多い。社員として

香椎を病んで小學を半途退學し、爾來獨學。同三十八年頃迄は不自由ながら、他に扶けられて步行することも出來たが、間もなく全然步行の自由を失つた。詩は十七八歲の頃より始め、同二十八年「ありやなしや佛も神も」（文庫）の一篇を發表してその天分を認められた。河井酔茗・伊良子清白・小鳥烏水・千葉龜雄（名

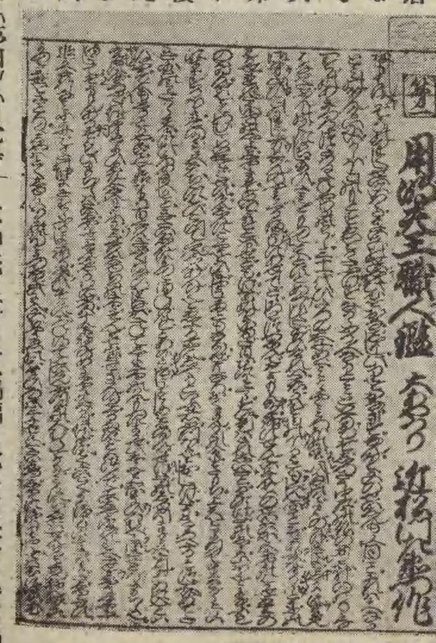
抒情詩といへば、悉く戀愛をうたつてゐる如く、彼の詩も亦戀愛の惱みから生れたものである。彼は動くことの出來ない人間であるから、その戀愛は却つて動いて止まない情感の表現となつて、空想・憧憬・焦躁が歌はれた。そして彼の歌ふ人間苦或は人間愛の背景は、いつも野・林・沼・江・堤又は筑波の山である。

舟の弟五位之介諸岩は勅勘を蒙つて佐渡へ流され、同國松浦の庄司が、下部となり海岸に出て耕作してゐる所へ花人親王の乘れる小舟が漂着し、互に不思議の邂逅に驚くが、親王から一伍一什の話を聞いた諸岩は、雁に託して、都なる妻の許へ、離別の手紙を送る。諸岩の妻は伊駒の宿禰の娘である。かくて諸岩は親王を助け、兄弟と偽つて庄司の館に連れ歸る。(切、松浦の庄司館)庄司の總領兵藤太は山彦皇子方に誘はれ、國内の流人共を語らひ一味にせんとする。豫て諸岩と言ひ

繪入細字本用明天王職人鑑

娘の手にかゝつて死ぬ。兵藤太は母の恩愛に感じ、發心して僧となる。(第三)(口、尾上の濱)播州尾上の濱に道心堅固に行ひ澄ませる

別と突き放す。女は戀慕執着の惡念から、遂に氣狂ひになり、鏡を引つかづいて失せる。そこへ豐國國師が弟子達と共に出で來り、仔細を聞いて弟子達諸共に祕法を盡して祈れば、鐘はおのづと躍つて鐘樓に引揚げられ、中から女が蛇體となつて顯れる。次が節事の「鐘入の段」となり、とど國師等の祈によつて大蛇は虛空に消える(謠曲「道成寺」の飜案)。(第四)(口、眞野の長者館)親王は長者に召抱へられて九州に渡り、山路と名乘る草刈童となつて仕へてゐたが、玉世の姫の繼母は外道の魔障を受けて性質一變し、姫を山彦皇子の妃に奉らんと


繪入細字本用明天王職人鑑

み、神託に事よせ、禍福を說いて長者の意を動かし、宿禰の化の皮を剝いて追拂ふ。(中、山路玉世の姫道行)滿月の夜、姫は山路の御供で、繼母に連れられて內山の月見堂に行く。(切、內山の月見堂)繼母は山路をして刈り調

(藏館書圖大東)鑑人職

へしめた墮胎の藥草を無理無體に姫にのましたところ、變毒爲藥の佛法の奇蹟により却つて姫は玉の如き男兒を安產し、繼母は諸岩の妻の化身なる牛のために突き殺される。そこへ宿禰が勝舟に追はれて遁れるが、折から姫の行方を尋ね來つた百島太夫に搦められる。(第五)(口、播磨の國)親王が妃・若宮・勝舟・長者・百島等と歸京の途中播磨の國へ着くや、諸岩・兵藤太入道諸卒を引具し來り、山彦皇子の一味が丹州大江山の麓に土城を築いて立て籠れる旨を注進する。(大切、大江山の麓)一同はこの度誕生の若宮卽ち聖德太子を大將に戴き、大江山の麓に押寄せて佛敵山彦皇子等を滅す。

【解說】竹田出雲が竹本筑後掾に代り、竹本座の座本となつて始めての興行に用ひられた淨瑠璃で、竹田芝居のからくりが應用され、出語り出遣ひ(操參照)が行はれ、人形の衣裳や道具建等も立派になり、頗る華やかに上演されたのであつた(外題年鑑・今昔操年代記・淨瑠璃譜等)。三段目の如きは筋の進行上、殆ど無關係であるが、ただ華やかな舞臺を出すために設けられたものであらう。この段は宇治加賀掾の正本「傾城つりがね草」に、その儘借用されてゐる。享保十七年四月一日より竹本座興行の「增補用明天皇職人鑑」は本作の增補改作である。

【參考】近松傑作全集卷之四解題水谷不倒○大近松全集第一卷解說木谷蓬吟○近松名作集(日本名著全集)上解題黑木勘藏○近松全集第七卷解題藤井乙男　(高野(正))

洋々社談(やうやうしやだん)　雜誌【刊行】明治八年四月創刊、十六年三月第九十六號にて廢刊。

【解說】洋々社の發表機關である。主旨に曰く、「社友會スル每ニ其相示ス所ノ文ヲ採リコレヲ活字ニ印シ以テ同好ノ士ニ頒ツ讀ム者ヲシテ洋々ノ樂ヲ共ニセシメンコトヲ欲スレバナリ云々」と述べてゐる。洋々社は、明治八年大槻盤翁・那珂通高・黑川眞賴等が結んだ社交兼知識交換團體で、明六社が西洋臭味あるに對して、和漢臭・國粹趣味が多い。社員として前後に名を署するものは、上記の數氏の外に西村茂樹(別項)・岡本監輔・伊藤圭介・飯島半十郎・井上哲次郎(別項)・依田學海(別項)・南部義籌・那珂通世・大槻文彥(別項)・小山朝弘・小中村淸矩(別項)・小永井八郎・榊原芳野(別項)・三橋惇・島田重禮・世良太一・坂谷素・木村正辭(別項)等がある。「明六雜誌」(別項)の進步的研究的なるに反し、「洋々社談」は保守的好事的分子が多く、且つ雜然として統一がない。啓蒙的役目も果してはゐるが、より以上に知識階級・學者階級の遊戲機關といふ感じがする。內容を分類すれば、歌學・考證・開化雜記・西洋雜事・史傳資料・經濟・詩歌・近世巷說等に及んでゐる。「明六雜誌」と同じく、明治初期文學の發達に間接の影響を與へてはゐるが、直接的影響を與へるほど文學的色彩の濃いものではなかつた。この雜誌に揭載された文學關係の主な記事を擧ぐれば、黑川眞賴の「言語文字改革の辨」、小中村淸矩の「文章論」、大槻文彥の「日本文法論」「印刷術史」、那珂通世の「古代文學」、西村茂樹の「西國理學の源流」、那珂通高の「演戲實傳」等である。(柳田(泉))

養老(やうらう)　「神事物の謠曲」を見よ。

横瀨夜雨(よこせやう)　詩人【本名】虎壽、幼名利根麿【生歿】明治十一年一月一日、常陸眞壁郡大寶村大字橫根に生れ、昭和九年二月十四日に歿す。享年五十七【閱歷】三歲の時

脊椎を病んで小學を半途退學し、爾來獨學。同三十八年頃迄は不自由ながら、他に扶けられて步行することも出來たが、間もなく全然步行の自由を失つた。詩は十七八歲の頃より始め、同二十八年「ありやなしや佛も神も」(文庫)の一篇を發表してその天分を認められた。河井醉茗・伊良子淸白・小鳥烏水・千葉龜雄(各別項)等と親交を結ぶ。詩は作る每に「文庫」(別項)に發表した。同四十年醉茗が「文庫」を退いて詩草社を起し、「詩人」を刊行するや、彼も同人となつたが、やがて詩作に遠ざかつた。又その頃「女子文壇」の詩文選評の任に當り、女流の文藝を指導した。大正七年の春妻多喜子を娶る。多喜子も亦文才あり。昭和年間に入り、彼は幾年かの沈默より復活して數卷の編述がある。同三年五月十九日東京會館に橫瀨夜雨・伊良子淸白誕生五十年祝賀會が開催され、全詩壇を擧げて兩氏の健在を祝福した。

【著作】明治三十二年刊の處女詩集「夕月」を初めとして、「花守」(別項)、「花守日記」(明治三十九年刊)、「二十八宿」(別項)「花守と二十八宿」(大正十年)等を主著とし、別に「夜雨集」「死のよろこび」「雪燈籠」「夜雨詩集」等の外、「近世毒婦傳」「明治初年の世相」「天狗騷ぎ」「太政官時代」等の編著がある。これ等は、その藏儲に係る明治初期の新聞雜誌による文明史的回顧の編纂書である。

【作風】彼の詩は殆ど七五の定型であつて、稀に五七の調があるに過ぎない。彼の七五調は溫雅であり、典麗であり、婉曲であり、幽遠である。用語も時に蒼古に偏することもあるが、概して適切である。彼の詩の特徵は、その個性に基いた哀調である。惻々人を動かすとは最も彼の詩に當てはまる評語であらう。抒情詩といへば、悉く戀愛をうたつてゐる如く、彼の詩も亦戀愛の惱みから生れたものである。彼は動くことの出來ない人間であるから、その戀愛は却つて動いて止まない情感の表現となつて、空想・憧憬・焦燥が歌はれた。そして彼の歌ふ人間苦或は人間愛の背景は、いつも野・林・沼・丘・堤又は筑波の山である。要するに彼の詩境はその境遇から生れた獨自のものだが、技巧手法は擬古派詩人や藤村・透谷(各別項)等から生じたものである。もと單純な哀情の流露であるが故に、再三繰返して存在性を失ふ事はいふ迄もない。畢竟一時期の雄であつたに止まる。西條八十(別項)の詩には、夜雨の影響と認むべき部分がある。

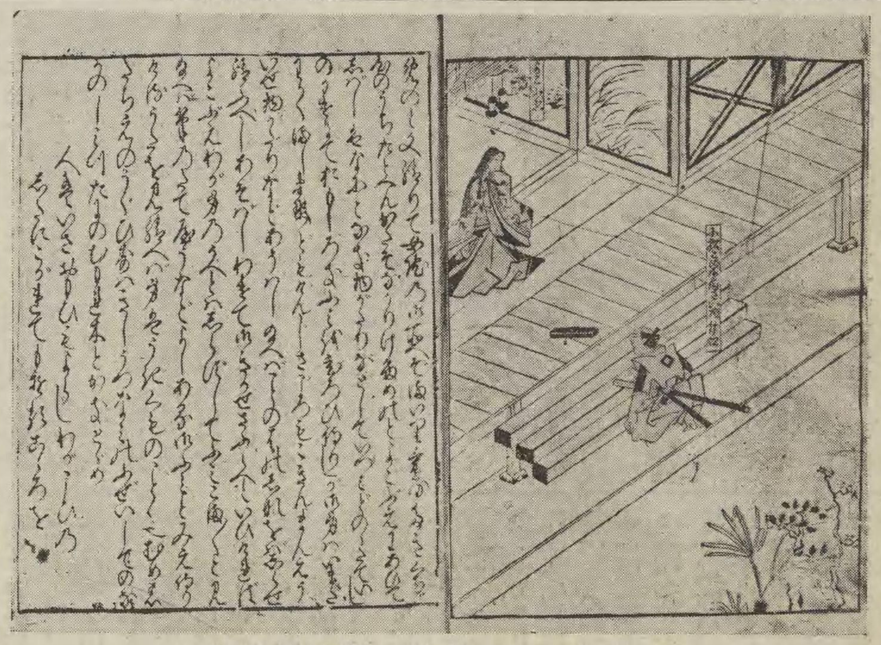
【參考】明治大正詩史日夏耿之介○雪燈籠の序河井醉茗

壽詞(よごと)　【名義】「よごと」は「よきことば」の義であつて、「ほぎごと」「祝言」と同義語である。普通には壽詞と記すけれども、上代の典籍には吉詞・吉事・賀辭・賀事などとも記し、また單に賀或は壽の文字を用ひた例もある。壽詞は祝詞(のりと)の一種であつて、文學の種類の名稱である。【起原】壽詞は祝詞(別項)と同じく、言靈信仰に基づく祝賀の詞であつて、その起原は太古にあるのであるが、現存する最古のものは淸寧紀に記されてゐる室壽(ろうず)の詞である。併し內容から云へば、記・紀に散見する「ほぎうた」や酒樂歌(さかほがひ)(各別項)の如きも一種の壽詞であるが、これ等は形の上から歌謠として取扱はれてゐる。文學史上に普通いふ所の壽詞は、「延喜式」第八卷祝詞式に收められた出雲國造神賀詞(別項)及び「古記」の別記に採錄せる中臣壽詞(別項)の二篇を代表的なものとするのである。【本質】出雲國造神賀詞は

その名の示す如く、天神の壽詞であり、中臣壽詞も亦「日本書紀」「舊事本紀」「神祇令」などに、天神之壽詞と稱へられてゐるのであつて、この二篇は共に神代の神語であると考へられてゐたのである。その内容は善言吉詞を連ねその言靈の活動によつて、御代の長久繁榮を祝ぐ(ことほぐ)ものであるから、壽詞は廣義の祝詞の中に含まれるのである。祝詞の古い時代のもの例へば大殿祭・御門祭・鎭火祭・大祓の如きは、神祇官・神宮殿などをほめたゝへる所の、稱辭から成るものであるから、上古の祝詞は寧ろ壽詞を根本として成立したと考へられる。從つて上古の祝詞は卽ち壽詞であるとも言ひ得るのであるが、やゝ後世の祝詞には神に祈禱する分子が多量に含まれてゐるから、これ等は自ら壽詞と區別せられるのである。純然たる壽詞の性質並に形式を備へてゐるものに、出雲國造神賀詞と中臣壽詞とがある。(祝詞・出雲國造神賀詞・中臣壽詞參照)

【參考】祝詞考 賀茂眞淵 ○祝詞講義 鈴木重胤 ○出雲國造神壽後釋 本居宣長 ○祝詞新講 次田潤 ○祝詞の研究 同上(神道講座) ○神と神を祭る者との文學 武田祐吉 ○玉勝間(卷一、中臣壽詞の條) 本居宣長(本居全集所收) ○中臣壽詞講義 鈴木重胤(國文註釋全書所收) 【次田】

横笛草紙(よこぶえのさうし) 御伽草子 (二十三篇の一)一卷 【別名】横笛瀧口の草紙 【成立】室町期か。【諸本】古板本は御伽草子本、明曆四年山田市良兵衞開板。御伽草子後編(今泉嘉山校)・御伽草紙(有朋堂文庫)・日本文學大系第十九卷等所收。【解說】戀愛物語。「平家物語」(卷十)に名高い齋藤瀧口時賴と建禮門院の雜司(ぞうし)横笛との情話を題材とした。門院の女房二人のうち、一人の刈藻(かるも)は越前前司盛次に嫁したとあり、嵯峨の往生院に行ひすましてゐる時賴が、心強く橫笛に會はないために、悲



橫笛瀧口の草紙 (明曆四年板)

嘆して千鳥が淵に入水した女の骸を鳥邊野で燒いて後、高野に登ることになつてゐる。【影響】高山樗牛作「瀧口入道」(別項)は、本書と同じ題材を取扱つた小說であるが、直接「平家」の原文から取材したものである。 【島津】

與謝野晶子(よさのあきこ) 歌人 【閱歷】明治十一年十二月七日、和泉國堺市甲斐町鳳宗七の三女として生れた。堺女學校を卒業後、明治三十三年雜誌「明星」の發行されるや、これ

與謝野晶子

に參加して、第一歌集「みだれ髪」を刊行、その秋與謝野寬に嫁した。同三十五年第二歌集「小扇」出版。その後、相ついで多くの歌集を刊行した。而して昭和四年出版「心の遠景」まで、歌集・詩歌集を刊行すること二十一種に及んでゐる。又大正元年、寬の跡を追うて歐洲に遊んだ。同十年文化學院設立と共にこれが學監となつた。【著書】【歌集】みだれ髪(別項)○小扇○戀衣(山川登美子・增田雅子と共著)○夢の華○舞姬(別項)○常夏○佐保姬○春泥集(別項)○青海波○夏より秋へ○さゝくら草○舞衣(以上三書詩歌集)○晶子新集○火の鳥○太陽と薔薇○草の夢○流星の道○瑠璃光○心の遠景○霧島の歌○滿蒙遊記(紀行及び歌集)【その他】○毒草(詩文集、寬と共著)○新譯源氏物語○新譯榮華物語○新譯徒然草○女子作文新講○女子の文○歌の作り方○晶子歌話。外に感想集十四種、童話二種、自筆歌集「明星抄」等がある。

【批評】初め、寬の詩歌集「紫」(別項)が刊行され、第一期の新詩社の短歌がほゞ完成された後をうけて、第一歌集「みだれ髪」が上梓され、寬の「東西南北」(別項)以後、新派和歌のために警鐘を鳴らし、一方、主として女性のために純正思想への戰を宣し、極めて少い女性思想家として後に重きをなす根ざしが、この時既に培はれてゐたと見て差支へない。新派和歌創業に寄與してゐるものは、第一・二歌集にあると見るべきで、第三集以後第八集「佐保姬」までは、一種の陶醉時代であり、雜誌「明星」「スバル」(各別項)その他に於て、驚くべき多數の作品を發表してゐる。そこには、あらゆる若き日の情操が燃えてゐた。次の「春泥集」以後「瑠璃光」に至る十歌集は、時にその歐羅巴・滿洲・內蒙古の旅行その他、外面からの變化はあつても、一方、思想上の推移と共に徂徊的な、やゝ退屈なものがあつた。 【內藤】

夜三遍月柳の橫櫛(よさのつきやなぎのよこぐし) 「柳の橫櫛」を見よ。

與謝野寬(よさのひろし) 詩人・歌人 【號】鐵幹(明治三十七年以後これを廢す)。【閱歷】明治六年二月二十六日、京都市外岡崎村(今の京都市岡崎町)に生れた。父は與謝野尙絅、西本願寺の僧で、法號を禮嚴(れいごん)といつた。儒學・國學・和歌に通じ、幕末から明治初期にかけて王事と公益とに勤めた。母は初枝、京都の人であつた。父母は太田垣蓮月尼と親交があつたといふ。寬は小學校に學ぶ傍ら、父母や兄から佛典・漢籍・國書の素讀を受けた(五歲)。明治十三年(八歲)、鹿兒島市名山小學校に轉じ、兼ねて同市舊藩塾「兵兒の社」に入り、また漢學塾に學んだ。同十四年父に從つて鹿兒島縣加治木町に在つて、父の「萬葉集」「古事記」「古今集」等の講筵に侍した。同十六年、京都に歸つて同市の漢學塾に學んだ。同年十月、西本願寺の僧、攝津遠里小野(おりをの)村の安藤氏の養子となる。同十九年養家を去つて岡山市の中學豫備門に入つた。また羅馬字會員ともなつた。同二十年、京都に歸り、同二十二年(十七歲)、

業に當つてその編輯主任となつた。同年七月詩歌集「東西南北」(別項)を刊行。ついで翌年一月、詩歌集「天地玄黃」(別項)を出した。同年新體詩の始唱者外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎・土井晩翠等と新體詩會を起し、また落合直文・佐佐木信綱・正岡子規・大町桂月・龜井雨江・武島羽衣等と新詩會を結んで合著詩集「毒草」(晶子合著)○櫻の葉○鴉と雨。【歌集】相聞○霧島の歌○與謝野寬短歌全集。【詩文集】埋木。【紀行】巴里より(紀行及び歌集)○滿蒙遊記。【譯詩集】リラの花。

【業績】その第一集「東西南北」の自序にも「詩を以て世に立つ者にあらず」と斷つてゐるし、今もなほ、「詩歌の改革を專門家の外に立つて

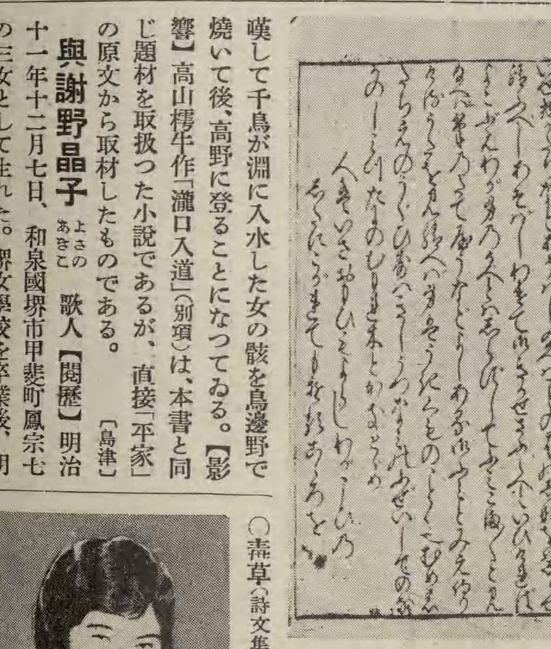
吉井勇(よしいいさむ) 歌人・劇作家 【閱歷】明治十九年十月八日東京市芝區高輪南町に生れた。父は伯爵吉井孝藏。鎌倉師範附屬小學校を經て、東京府立第一中學校を半途に退學して攻玉社中學に轉じた。卒業後は鎌倉に病を養ふこと一兩年、この間海洋への憧れを歌つて新詩社(別項)に加はり、詠草を「明星」に發表

雲國造神賀詞・中臣壽詞參照）

【參考】祝詞考 賀茂眞淵 ○祝詞講義 鈴木重胤 ○出雲國造神壽後釋 本居宣長 ○祝詞新講 次田潤 ○祝詞の研究 同上（神道講座）○神と神を祭る者との文學 武田祐吉 ○玉勝間（卷一、中臣壽詞の條）本居宣長（本居全集所收）○中臣壽詞講義 鈴木重胤（國文註釋全書所收）【次田】

横笛草紙（よこぶえのさうし） 御伽草子（二十三篇の一）一卷【別名】横笛瀧口の草紙【成立】室町期か。【諸本】古板本は御伽草子本、明曆四年山田市良兵衞開板。御伽草子後編（今泉嘉山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷等所收。【解說】戀愛物語。「平家物語」（卷十）に名高い齋藤瀧口時賴と建禮門院の雜司（ざふし）横笛との情話を題材とした。門院の女房二人のうち、一人の刈藻（かるも）は越前前司盛次に嫁して千鳥が淵に入水した女の骸を鳥邊野で燒いて後、高野に登ることになつてゐる。【影響】高山樗牛作「瀧口入道」（別項）は、本書と同じ題材を取扱つた小說であるが、直接「平家」の原文から取材したものである。【島津】

與謝野晶子（よさのあきこ） 歌人【閱歷】明治十一年十二月七日、和泉國堺市甲斐町鳳宗七の三女として生れた。堺女學校を卒業後、明治三十三年雜誌「明星」の發行されるや、これ



與謝野寬

に參加して、同年七月詩歌集「東西南北」（別項）を刊行。ついで翌年一月、詩歌集「天地玄黃」（別項）を出した。同年新體詩の始唱者外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎・土井晩翠等と新體詩會を起し、また落合直文・佐佐木信綱・正岡子規・大町桂月・鹽井雨江・武島羽衣等と新詩會を結んで合著詩集「この花」（別項）を刊行した。更に雜誌「中學新誌」に、將來、詩の口語に立脚すべき評論を發表し、自らも口語交りの詩及び短歌を試作した。同年再び韓國に渡つたが、同三十一年三月東京に歸り、八月、父禮嚴を失つた。同三十三年新詩社（別項）を創立し、四月「明星」（別項）を刊行。翌年（二十九歲）鳳晶子と結婚した。同年三月、詩歌集「鐵幹子」を誠進堂から、同年四月、詩歌集「紫」（別項）を新詩社から刊行した。同四十一年十一月、雜誌「明星」を百號で廢刊し、廢刊に際して尨大な終刊號を刊行して新例を示した。同四十二年一月、森鷗外と共に雜誌「スバル」（別項）を發行したが、その編輯は吉井勇・平野萬里・石川啄木・平出修等がこれに當つた。同四十三年三月、歌集「相聞」（別項）を明治書院から發刊した。同四十四年十一月、佛蘭西に遊學した。翌年六月、晶子の渡佛を待つて、共に歐洲諸國を巡遊し、大正二年二月歸朝した。同年雜誌「スバル」を廢刊。同九年、慶應義塾大學文學部教授となつた。同十年、西村伊作・石井柏亭・河崎夏子・與謝野晶子を加へ、文化學院を創立して學監の職に就いたが、後その職を辭した。同年十一月、雜誌「明星」を復活し、再びこれを主宰した。昭和元年、日本古典全集（別項）の編纂に參與した。また慶應義塾塾員に推薦された。同二年、「明星」を休刊した。【著作】【詩歌集】上記の外、

○毒草（晶子合著）○燃の葉○鴉と雨。【歌集】相聞○霧島の歌○與謝野寬短歌全集。【詩文集】埋木。【紀行】巴里より（紀行及び歌集）○滿蒙遊記。【譯詩集】リラの花。

【業績】その第一集「東西南北」の自序にも「詩を以て世に立つ者にあらず」と斷つてゐるし、今もなほ、「詩歌の改革を專門家の外に立つて唱道」したに過ぎないと自白してゐる。その生來の烈しい性情は、時に譏讓を越えた卑下に落ちることはあつても、これが素直に他人に通ずることは稀である。又一方、國語國文の研究者としての業績が相當に大きいとしても、その顯著なものはやはり詩歌の改革、殊に新派和歌運動のそれでなければならない。而も歌人としての技能は、その新派和歌運動からやゝ遠ざかつた後に至つて、深い冴えを見せて來たとも見られる。【內藤】

與謝蕪村（よぶそん） 評傳 一册【著者】大野洒竹【刊行】明治三十年九月、春陽堂。【解說】卷頭に、「蕪村時代俳諧年表」と題する享保元年から天明四年に至る略年表を掲げ、本文に入つては、芭蕉以前及び以後の俳風の變遷から說き起し、安永の復興、蕪村の生涯、蕪村の俳句・連句・俳文・俳論・繪畫・著書等、十一章に分つて論述してある。當時蕪村研究熱の起り來つたに對して現はれたもので、從來不明な點の多かつた蕪村に關して、その傳記及び資料の方面に於て寄與する所の多かつたものである。明治三十二年に刊行された正岡子規の「俳人蕪村」（別項）と共に、當時に於ける蕪村研究の二大權威ともいふべきもので、後年の蕪村研究を促進した先行書として價値あるものである。【伊藤】

良顯（よしあき） 「光海」を見よ。

吉井勇（よしゐいさむ） 歌人・劇作家【閱歷】明治十九年十月八日東京市芝區高輪南町に生れた。父は伯爵吉井孝藏。鎌倉師範附屬小學校を經て、東京府立第一中學校を半途に退學して攻玉社中學に轉じた。卒業後は鎌倉に病を養ふこと一兩年、この間海洋への憧れを歌つて新詩社（別項）に加はり、詠草を「明星」に發表し、後には「スバル」（各別項）の編輯にも携はつた。ついで早稻田大學の文科に學んだが、政治經濟科に移り、業を終へずして退學した。明治四十三年「酒ほがひ」の一卷を公にしてより歌壇の新星を以て唄はれ、その戀愛中心のロマンチシズムの世界は、當時青衿の徒の渴仰をうけた。「昨日まで」「片戀」「初戀」「黑髮集」「未練」「祇園歌集」「東京紅燈集」等の歌集これに續き、「旅情」「夜の心」「惡の華」を出した。明治四十二年以來、脚本にも筆を染め、木下杢太郎（別項）と共に「昴」の生んだ戲曲家として推されるに至つた。「河內屋與兵衞」「夢介と僧と」が、當時の新劇界の急先鋒たる自由劇場（別項）に上演され、その後「狂藝人」（別項）「俳諧亭句樂の死」等が研究劇團に上演されたばかりでなく、「燈籠物語」「解脫」等が左團次、「髑髏尼」が梅幸・菊五郎によつて上演された。戲曲集に「午後三時」「生靈」等がある。なほその才情は小說に於ても發揮され、初め「水莊記」「浴泉記」等、短歌を交へた傳奇譚を試みたが、以來情話的讀物に、また新聞連載の長篇小說に、相當の作品を殘し、中にも名あるものに「狂へる戀」「魔笛」等がある。大正三年、小山內薰（別項）等と雜誌「文藝復興」を出した。大正十五年五月、父の歿後、家督を繼ぎて襲爵。昭和四年六月雜誌「相聞」を創刊してこれを主宰し、後に「スバル」と改めた。

與謝野晶子の文○歌の作り方○晶子歌話。外に感想集十四種、童話二種、自筆歌集「明星

やゝ退屈なものがあつた。【內藤】

夜三廻月柳の横櫛（よさのつきやなぎのよこぐし） 「柳の横櫛」を見よ。

與謝野寬（よさのひろし） 詩人・歌人【號】鐵幹（明治三十七年以後これを廢す）。【閱歷】明治六年二月二十六日、京都市外岡崎村（今の京都市岡崎町）に生れた。父は與謝野尙絅、西本願寺の僧で、法號を禮嚴（れいごん）といつた。儒學・國學・和歌に通じ、幕末から明治初期にかけて王事と公益とに勤めた。母は初枝、京都の人であつた。父母は太田垣蓮月尼と親交があつたといふ。寬は小學校に學ぶ傍ら、父母や兄から佛典・漢籍・國書の素讀を受けた（五歲）。明治十三年（八歲）、鹿兒島市名山小學校に轉じ、兼ねて同市舊藩塾「兵兒の社」に入り、また漢學塾に學んだ。同十四年父に從つて鹿兒島縣加治

【批評】彼の歌は多分に艶冶の氣を含み、情痴の世界を歌ふに長じ、この方面にかけては獨自の情調、他の追隨を容さゞるものがあり、その京都祇園を主題とせるものには幾多の佳作をなしてゐる。彼の歌ひぶりは直線的で、その調子のよさは、讀者を魅するものがあるが、ともすれば單調に流れて迫力に乏しい。飜つて彼の戯曲を通覽するに、初期と後期にあつては、題材・手法共に大なる變化を來してゐるが、而も「昴」時代から終始一貫して舞臺上の情緒詩人たることに變りはない。「午後三時」を初めとした初期の一聯の作品は、異國情調や神祕怪異の色濃き若々しい浪漫劇であるが、なほ文字の詩と舞臺の詩とが混淆してゐる。戯曲家としての價値を完全に現はすものは、主として寄席藝人を描いた後期の市井劇である。淡彩の筆で精細な描寫をしながら、なほ詩的情感を十分に盛つてゐる。最近彼は林間都市に寂居して、その心境を詠ぜる歌に哀愁の情、胸を打つものがある。〔水木〕

吉植庄亮（よしうえしやうりやう）　歌人【別號】營て愛劍と號した。【閲歴】明治十七年四月三日千葉縣印旛郡本埜村に生れた。東京帝大法科經濟學部卒業、中央新聞文藝部を主宰し、後、政治部に轉じたが、退社して歸鄉し、印旛沼畔の廣い荒地の開墾に從事してゐる。中學二年の頃、歌に志して金子薫園の門に入り、その選で屢々「新聲」、つゞいて「新潮」に作を發表した。薫園を中心に白菊會（別項）起るや、その同人となつた。後薫園主宰の雜誌「光」に關係したが、現在「橄欖」に據つてゐる。自然にして無礙、これ彼が歌の姿で、田園の風物を詠ずるに得意である。【著作】歌集「寂光」「くさはら」「煙霞集」等。〔金子〕

吉江喬松（よしえたかまつ）　評論家【號】孤雁【閲歴】明治十三年九月、長野縣東筑摩郡鹽尻村に生れた。縣立松本中學を經て、東京專門學校文學部英文學科に學んだ。同三十九年同校卒業後、一時、國木田獨歩の主宰する近時畫報社に編輯記者を勤めた。その後、早稻田商業學校等に教へ、且つ早稻田大學文學部の講師となり、後に教授となつた。大正五年同大學留學生として佛蘭西に留學し、滿四ヶ年間滯在の後、同九年に歸朝し、早稻田大學に佛文學部を創設した。滯在中、坪内逍遙作「役の行者」（別項）を佛語に飜譯し、その地の劇團に上演せしめた。歸朝後それ等の功によつて佛國政府よりレジョン・ド・ノール勳章を授けられた。なほ彼はこれ等の飜譯の外に散文詩の創作をも發表し、文藝時評・文明批評・社會時評等に評論の筆を執つたが、近來は佛蘭西文學の專門的研究にかくれて、筆を執ることが少い。又昭和六年文學博士の學位を得た。【著作】論文集「純一生活」「愛と藝術」「近代文明と藝術」等があり、又「自然美論」があり、滯佛中の印象を集めた「佛蘭西印象記」一卷もある。その他飜譯小説にはゴリキー原作「三人」、ピエル・ロチ原作「氷島の水夫」、モウパッサン原作「水の上」及びメエテルリンク原作感想論文集「貧者の寶」等數多く、又英・佛名詩の飜譯などもある。【批評】最初彼は優れた自然美鑑賞によつて、隨筆小品感想の數々を公けにしてその文名を謳はれた。ウォズウォース、バーンズ、シエリイ、キーツ等の英國浪漫派の詩及びその思潮の研究紹介に努めた。やがてメエテルリンク等の作物と思想とに興味を抱き、遂に佛蘭西文學の研究に傾倒するに至つた。彼の思想傾向は、浪漫的な自然美鑑賞の立場から一轉して、單純生活の理想、人類愛とヒューマニティの高揚に向ひ、佛蘭西留學を境として社會思想的立場をとるに至つた。文藝批評の方法に關しても、純然たる新しき科學乃至社會科學の方法をもつてすることを主張してゐる。また所謂農民文藝・鄉土文藝についての新しき主張の論評もある。彼の文藝の諸部門、就中殊に近代詩についての理解と鑑賞との深さとその纖細な感受性とは、我が文藝社會にならぶものがなく、而も理論的方面の研究も周到なものがある。とは云へ、彼の生來の氣質は飽くまで直觀家型のそれであつて、論理家型ではない。〔武藤〕

良香（よしか）　漢詩人・漢學者【姓】都朝臣【名】言道。後、貞觀十四年五月七日、上奏して良香と改む。【生歿】承和元年に生れ、元慶三年（一五三九）に歿す。享年四十六。【家系】都朝臣は、崇神帝の皇子豐城入彦命五世の孫、多奇波世君から出た桑原臣を祖としてゐる。良香の父貞繼は、弘仁十三年に兄正五位下文章博士腹赤と共に上請して都宿禰の姓に改め、更に良香に至つて元慶元年十二月二十五日、朝臣の姓を賜はつた。【閲歴】青年の頃

腹赤
秋成―貞繼―良香（在中）

大學に入り、在學中に「辨藁猶論」（本朝文粹卷十二所收）を書いた。貞觀二年（二十七歳）文章生となり、續いて文章得業生となる。その後、安藝權少目となる。貞觀十年（三十五歳）正月、播磨の權大目となる。翌年對策に應じて及第した。十二年二月少内記、十四年四月掌渤海客使となる。翌年正月從五位下、大内記。十六年十月災害を被つた百姓に賑給を加ふる詔を書く。十七年二月文博博士となる。十八年二月越前の權介を兼ね、四月侍從となる。その後、歿するまで、彼の起草になる詔勅、勅符は甚だ多い。元慶三年二月、内記の職を諸才者に讓與せんと請ふの狀を上つた。同二十五日歿した。【著作】都氏文集（別項）○富士山記（本朝文粹卷第十二・群書類從卷一三五所收）○道場法師傳（本朝文粹卷第十二・群書類從卷六九所收）○應早速討二賊夷一事（朝野群載卷十二の勅符の條に載す）。【業績】環境の影響もあるが、天性博覽强記であつた。大學在學中已に「辨藁猶論」學生等の徒らに誇る者あるを難じた）を書いて名があつたが、對策に及第してから文章家としての名聲は更に高まつた。詩に關する逸事は羅城門上の「氷消浪洗二舊苔鬚一」や、竹生島に於ける「十二因緣心裏空」等によつて、その作が鬼神に通じたと傳へられる程である。當時渤海使裴璆（はいきう）は、良香が自「有都良香不盡、從來賓館又相尋」の句を殊に嘆稱したと言ふ。又興福寺の僧寛建法師が入唐求法をなすに際し、醍醐帝の勅命によつて良香の詩集一卷は、菅原道眞（三卷）、紀長谷雄（三卷）、橘廣相（二卷）等の詩集と共に唐に流布せしめられることとなつた。良香の詩豪として世に重んぜられた事を知るに足るであらう（扶桑略記卷二十四）。「扶桑略記」には、なほ良香は敏捷で腕力が優れてゐたと稱し、又常に貧困のために炊煙を絶つこともあつたと言ひ、後年には東寺の眞然僧正に從つて眞言の密教をも受け、學業を勤めつつ念佛を廢さなかつたと傳へてゐる（卷二十）。要するに良香は敏慧で氣概に富み、詩人としても、文人としても、博聞の智と天賦の才を以て一世に欽仰せられたものと思はれる。

【參考】文德實錄（卷四）○三代實錄（卷二十一・二十三・二十七・三十二・三十五）○扶桑略記（卷二十）○古今和歌集目錄○類聚符宣抄（卷九）○都氏文集○扶桑集○和漢朗詠集○新撰朗詠集○江談抄（卷一・四）○本朝文粹（卷二・三・四・八・九・十二）○古今和歌集（卷十）○十訓抄（第七・十）○本朝神社考（卷六）〔山岸〕

軒・風水翁・風水散人【生歿】延寶元年九月十五日名古屋に生れ、寶曆十一年（二四二一）四月二十六日歿す。享年八十九【閲歴】幸和の先は源氏、南北朝の時南朝に屬し、子孫伊勢の北畠氏に仕へたが、幸和の祖父幸勝、尾張侯に仕へ、東照宮の祠官となる。傳へて幸和に至る。幸和は元祿元年、家を嗣いで祠官となり、三卷一册本。四季・戀・哀傷・雜

說】奥書に、「此集は神道方吉川源十郎の遠つ親吉川惟足よめる所の歌也。竹内順孝ぬしのうつし置かれしを、息孝壽ぬしにかりえて寫し置くものなり。寬政四年きさらぎ中の十日、長秋しるす」とある寫本を竹柏園に藏してゐる。外題は「吉川惟足家集」、内題は「視吾

著はれた。【著書】服色部類三卷（天明二年八月成。式服の色目を諸書に徵して考證したもので、前篇は着御・制服・神事之服・喪服の四部、上は四季の部、下は雜・四季通用の部と分けてあつた）○百寮訓要抄別註十卷（天明四年成。内侍司の三條、僧侶官位の名目、勳位・年官・年爵・封戸・位田等を補つて、別に

林間都市に寂居して、その心境を詠ぜる歌に哀愁の情、胸を打つものがある。　〔水木〕

吉植庄亮（よしうえしやうりやう）　歌人　【別號】嘗て愛劍と號した。【閲歴】明治十七年四月三日千葉縣印旛郡本埜村に生れた。東京帝大法科經濟學部卒業、中央新聞文藝部を主宰し、後、政治部に轉じたが、退社して歸郷し、印旛沼畔の廣い荒地の開墾に從事してゐる。中學二年の頃、歌に志して金子薫園の門に入り、その選で屢々「新聲」、つゞいて「新潮」に作を發表した。薫園を中心に白菊會（別項）起るや、その同人となつた。後薫園主宰の雜誌「光」に關係したが、現在「橄欖」に據つてゐる。自然にして無瑕、これ彼が歌の姿で、田園の風物を詠ずるに得意である。【著作】歌集「寂光」「くさはら」「煙霞集」等。　〔金子〕

が少い。又昭和六年文學博士の學位を得た。【著作】論文集「純一生活」「愛と藝術」「近代文明と藝術」等があり、又「自然美論」があり、滯佛中の印象を集めた「佛蘭西印象記」一卷もある。その他飜譯小說にはゴリキー原作「三人」、ピエル・ロチ原作「氷島の水夫」、モウパッサン原作「水の上」及びメエテルリンク原作感想論文集「貧者の寶」等數多く、又英・佛名詩の飜譯などもある。【批評】最初彼は優れた自然美鑑賞によつて、隨筆小品感想の數々を公けにしてその文名を謳はれた。ウヮズウォース、バーンズ、シエリイ、キーツ等の英國浪漫派の詩及びその思潮の研究紹介に努めた。やがてメエテルリンク等の作物と思想とに興味を抱き、遂に佛蘭西文學の研究に傾倒するに至つた。彼の思想傾

【參考】文德實錄（卷四）○三代實錄（卷二十一・二十三・二十七・三十二・三十五）○扶桑略記（卷二十）○古今和歌集目錄○類聚符宣抄（卷九）○都氏文集○扶桑集○和漢朗詠集○新撰朗詠集○江談抄（卷一・四）○本朝文粹（卷二・三・四・八・九・十二）○古今和歌集（卷十）○十訓抄（第七・十）○本朝神社考（卷六）　〔山岸〕

是香（よしか）　神道家・歌學者　【姓】六人部（むとべ）氏　【號】葵舍・一翁　【歿年】文久三年（一八五三）十一月二十八日歿す。享年六十六。【閲歴】京都の人、六人部節香の子、山城乙訓郡向日神社の神職で、江戸に出て平田篤胤の門に入り、深く神道を研究し、名聲關西に鳴つた。孝明天皇その學を好ませ給ひ、毎月數回御前に於て進講せしめられた。晩年職を長男是房に讓つて、一翁と號し、京都三本木に神習舍を興し、徒を集めて皇學を敎授した。【著書】〔神道書〕顯幽順考論○順考神事傳○產須那社古傳抄○大祓天津菅問。〔歌書〕長歌玉琴（別項）○長謌箇廼木綿垂。

【業績】是香の學說は、その師篤胤の說を紹述し、更に西洋天文の說を參酌し、以て彼は宇宙の根本を明かにし、萬代の原理を發し、千古の疑惑を氷解し、千有餘年惑溺してゐた妖氣幻霧を一掃したと說いてゐるけれども、今日から見れば附會の說が少くないのは、當時にあつては已むを得ないものと云ふべきである。歌學の方では、歌格の研究家として小國重介・橘守部等によつて發達して來た歌格研究を集大成し、對句を以て歌格の中心となすと共に、和歌の構成を分解し說明した。

【參考】歌學者としての六人部是香　佐佐木信綱（歌學論叢所收）　〔田中（義）〕

幸和（よしかず）　神道家　【姓】吉見氏　【號】恭軒・風水翁・風水散人　【生歿】延寶元年九月十五日名古屋に生れ、寶曆十一年（一七六一）四月二十六日歿す。享年八十九　【閲歴】幸和の先は源氏、南北朝の時南朝に屬し、子孫伊勢の北畠氏に仕へたが、幸和の祖父幸勝、尾張侯に仕へ、東照宮の祠官となる。傳へて幸和に至る。幸和は元祿元年、家を嗣いで祠官となる。享保十三年九月、職をその子幸混に讓り、專ら學に努めた。「鹽尻」に、「初め山崎垂加翁に隨て神道を學び、其後正親町一位公通卿を拜して猶子の約あり。盡く神學及び有職の故實を傳ふ。又梨木三位鴨祐之公及び大祉の神官等に從て、猶社傳を索搜す。晩年に及び一見識を發し、五部書の僞作たる事を發明し、度會氏の作を破し、又卜部家の神道を非なりとす。其廣き事、擧てかぞへがたし。享保元文の頃大に世に名を高くす」と、簡單に幸和の立脚地を說明してゐる。【著書】宗廟社稷問答○五部書說辨○增益辨卜鈔俗解○神代正義○兩宮辨○難雜事記○國字辨○神代直說○風水集等。

【業績】彼は神道を以て天皇の道とし、世の學者の或は儒により、佛に習合し、理說を以て高上に說上げ、佛語を用ひ、虛誕に馳せ、奥祕口訣と稱して、證文なきは信ずべからずと主張し、古記實錄を以て考究し、僞作の神託、自作の古語、附會虛妄の說を用ふるを不可としてゐる。かくて彼の「五部書說辨」に說く所の如きは、その說、人をして敬服せしむるものも少くないが、全般の神道說としては、餘りに合理的に說かうとして却つて附會に陷つた嫌ひがある。　〔田中（義）〕

吉川惟足歌集（よしかはこれたりかしふ）　歌集　三卷　【作者】吉川惟足　【本名】視吾堂集　【解說】奥書に、「此集は神道方吉川源十郎の遠つ親吉川惟足よめる所の歌也。竹內順孝ぬしのうつし置かれしを、息孝壽ぬしにかりえて寫し置くものなり。寬政四年きさらぎ中の十日、長秋しるす」とある寫本を竹柏園に藏してゐる。外題は「吉川惟足家集」、內題は「視吾堂集」とあり、三卷一册本。四季・戀・哀傷・雜歌・羇旅・述懷等に部立してある。題詠の外、長い詞書を有する歌も散見して、その傳記を補ふことが出來る。神道家たる彼は、歌人としても一頭地を拔いてゐて、優れた作歌に富んでゐる。殊に四時の風物に懷を寄せた作に秀歌が多い。又道を詠じた歌が、思想家の作として、道歌的に陷つて居らぬのは前後に比が少い。これにも眞情の籠つた秀歌が多い。

梅の花來て見る人の袖ごとにうつせど盡きぬ匂なりけり

その外、「淸淨なれば內おのづから淸し」といふことを詠んだ歌に左の一首がある。

さよ嵐ふけゆくままに音絕えて空も心もすみわたるかな

【附記】會津藩士中野義都が、「吉川惟足歌集」の中より三十首を抄した書に、「視吾靈神和歌抄」一卷がある。　〔佐佐木〕

嘉樹（よしき）　故實家　【姓名】大塚氏。通稱市郎右衞門。字は子敏。敏卿。【號】蒼梧　【生歿】享保十六年生れ、享和三年（一八〇三）六月二十九日歿す。享年七十三　【墓所】江戸淺草本覺寺　【閲歴】幼より學を好み詩文をよくしたが、中年から我が國の紀傳を講習し、神原惟長に就いて律令を學び、終に有職故實を以て子弟に敎授するに至つた。又兼ねて性理の學に通じ、服栗齋・黑澤雉岡等と交はつた。故實の考證頗る的確、晩年に至つてその名一時に

著はれた。【著書】服色部類三卷（天明二年八月成。式服の色目を諸書に徵して考證したもので、前篇は着御・制服・神事之服・喪服の四部、上は四季の部、下は雜・四季通用の部と分けてあつた）○百寮訓要抄別註十卷（天明四年成。內侍司の三條、僧侶官位の名目、勳位・年官・年爵・封戶・位田等を補つて、別に一卷としてある）○校正裝束拾要抄二卷（寬政十年刊）○蒼梧隨筆八卷（別項）。この他、「紫古今異同考」の如き小篇が多い。帝國圖書館に小篇二十五種を集めて、大塚嘉樹著書として二册ほどのものもある。　〔石村〕

芳樹（よしき）　國學者　【姓名】近藤氏。通稱晋一郎。初め田中源吾。【號】寄居子庵　【生歿】享和元年五月、周防國岩淵に生れ、明治十三年二月二十九日歿す。享年八十。【墓所】東京靑山墓地　【閲歴】若くして本居大平に學び、更に山田以文に就いて律令・有職の學を受けた。後、毛利敬親侯に召されて明倫館の敎官となり、明治八年、宮內省に仕へて文學御用掛に任じた。【著作】薫風集一册（明治十一年刊）○寄居歌談五册（別項）○寄居百首（續日本歌學全書第十一編に收む）。

【批評】歌集として纏まつたものは世に出てゐないが、相當數多く歌を詠んでゐたことと思はれる。歌論に關しては「寄居歌談」にその面貌がよく現はれてゐる。「寄居百首」は、高貴の方よりの御希望で、その子が撰んで奉つたものの由であるが、單に平明といふだけに過ぎぬもので、歌論の優れたるには及ばぬ。彼の作風には調子にどこかゆつたりした所が見えるが、その感性は決して鋭くはない。官に仕へては利吏であつたかも知れぬが、作家としては修練だけの人で、創造的天分に乏しかつたやうに思はれる。　〔森・窪田〕

裴珎は、良香が自「有都良香不盡、從來賓館又相尋」の句を殊に嘆稱したと言ふ。又興福寺の僧寬建法師が入唐求法をなすに際し、醍醐帝の勅命によつて良香の詩集一卷は、菅原道眞（三卷）、紀長谷雄（三卷）、橘廣相（二卷）等の詩集と共に唐に流布せしめられることとなつた。良香の詩豪として世に重んぜられた事を知るに足るであらう（扶桑略記卷二十四）。「扶桑略記」には、なほ良香は敏捷で腕力が優れてゐたと稱し、又常に貧困のために炊煙を絕つこともあつたと言ひ、後年には東寺の眞然僧正に從つて眞言の密敎をも受け、學業を勤めつつ念佛を廢さなかつたと傳へてゐる（卷二十）。要するに良香は敏慧で氣概に富み、詩人としても、文人としても、博聞の智と天賦の才を以て一世に欽仰せられたものと思はれる。

都朝臣は、崇神帝の皇子豐城入彦命五世の孫、多奇波世君から出た桑原臣を祖としてゐる。良香の父貞繼は、弘仁十三年に兄正五位下文章博士腹赤と共に上請して都宿禰の姓に改め、更に良香に至つて元慶元年十二月二十五日、朝臣の姓を賜はつた。【閲歴】靑年の頃

腹赤
秋成―貞繼―良香―在中

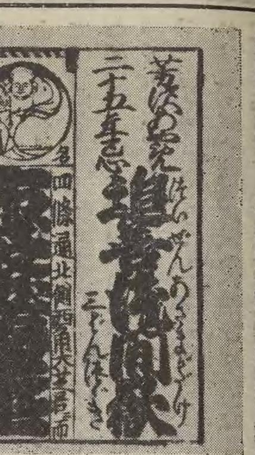
大學に入り、在學中に「辨藁猶論」（本朝文粹卷十二所收）を書いた。貞觀二年（二十七歲）文章生となり、續いて文章得業生となる。その後、安藝權少目となる。貞觀十年（三十五歲）正月、播磨の權大目となる。翌年對策に應じて及第した。十二年二月少內記、十四年四月掌渤海客使となる。翌年正月從五位下、大內記。十六年十月災害を被つた百姓に賑給を加ふる詔

義清（よしきよ）「六人黨」を見よ。

義言（よしとと）　歌學者【姓名】長野氏。通稱主馬。後、主膳。【號】桃舍【生歿】文化十二年に生れ、文久二年（二五二）八月二十七日歿す。享年四十八。【閲歴】義言は、伊勢國飯高郡瀧野村の長野次郎祐の弟である。天保十二年、近江國坂田郡志賀谷村の阿原忠之進の家族となつた。また出石藩の姦士仙石左京の子であるといふ説や、縉紳家の落胤といふ説などがある。和歌をよくするところから、京都に寓し、公卿の家に出入してゐたことがあつた。國學に精しく、正史・物語・歌書等に通じ、殊に語學に秀で、詠歌が巧みであつた。一日、國學を好むとの聞えがある彦根藩の世子直弼に面會を願つた。尾末町の邸に迎へられた義言は、直弼の意に適ひ、即座に直弼の師になることになつた。嘉永五年、藩主たる直弼に二十口俸で聘せられた。六年、弘道館國學方に任命され、安政四年には田祿百五十石を給されることになつた。この年、京都に上り、九條尚忠の臣島田正辰と交り、公武の間に立ち働いて幕府をして開港の勅許を得せしめんと計つた。幕府の内命を受けたのである。文久二年、正辰が浪士の兇手に斃れたので、遂に事は破れた。京都を遁れて彦根に歸つた義言は、木俣庵原等を擧げて藩政を統べしめ、自ら藩政の實權を握つた。この年五月、田祿百石を加賜された。同年八月二十四日、事に坐して禁錮、二十七日斬罪に處せられ、家名も斷絶した。【著書】歌の大武根○字音袖鏡○末分櫛○活語初の栞○和歌葉の枝折○楢の蔭葉○金花集○古今集委鏡○小倉百首委鏡○韻鏡還元鈔○韻鏡諸鈔正義○井伊家紹運圖○勝元振○古學答問錄○淡海舊跡考○皇典久多綿蚊屋野考○市邊忍齒別命山陵考○桃園歌集。【業績】本居宣長の學風を慕ひ、語學に精しく、「袖の鏡」「末分櫛」「初の栞」などの書を著はしてゐる。歌學・作歌の方面では、宣長といふより、寧ろ小澤蘆庵・藤井高尚の影響をうけてゐる。歌學書「歌の大武根」は、弘化二年、義言三十一歳の時、まだ彦根侯に仕官してゐない時に成つたものである。歌の根本は情であるとし、情は言葉のあやによつて初めて表現されるのだといふのが、その大旨である。直弼に、天地開闢、日月晝夜、顯幽明暗などについて質問され、「古學答問錄」を記してゐる。また彦根侯の命により、近江の事跡を探つて、「淡海舊跡考」を著はさうとした。併し坂田郡の部、一部分が成つただけであつた。家集には「桃園歌集」がある。【壁田】

よしこの節（よしこのぶし）　流行歌【名稱】「こりやまたよしこの、なんだべこしやらべこしやら」、或はただ「よしこのよしこの」などと囃したので、この名が出て來た。【解說】潮來節（別項）の變化したものと云ふ。飴賣が潮來節を歌ひ、右の如き囃子を附けて賣り歩いてより、自然に變化して、よしこの節と云ふ流行歌となり、世に擴まるに至つた。「守貞漫稿」に「文政三四年比より行れ、三都ともに專ら唄之。娼妓も專ら唄之。宴席に興ず。異章數多あり、無三長短一。左に記すを原歌とすべまゝよ三度笠よこちよにかむり、旅は道づれ世は情」と見え、名古屋には文政五年より流行した。「小歌志彙集」に「文政五壬午年冬よしこの節はやり來る、此歌どゝいつ已來の大はやりにて、のち〳〵いろ〳〵調子も替り節もかはりぬれど、此時はいまだ始りゆゑ、二上りのみにて乙酉年迄はやり、酉年に至て本調子になる」「文政八年乙酉年秋頃よりよしこの本調子にかはりて大に流行、後々に至りて、はやしによしこの〳〵とはやすこと廻り遠しとて、唯コノ〳〵とはやし、マダ〳〵とはやし、或はコリヤ〳〵といひ、又四疊半へお連申せなどいろ〳〵意氣なはやしになる」と見えて、歌には淨瑠璃長唄文句入、セリフ入、字餘り早口よしこの等、種々行はれたが、後には餘りにくどいと云ふので、元に返つた。三味線の手は、その時々で新手にかはつたと云ふ。文政五年の「浮れ草」にも、よしこの五首を出してゐるのによれば、上方でもその頃流行したのであるが、それは字餘り歌となつてゐる。江戸では天保の初めが、よしこの節より都々逸節への轉換期であつた。「假名文章娘節用」（天保二年）前編下卷に「これらがほんのよしこの〳〵」とあつて、後篇中卷では「ソレどゝいつどい〳〵なべだこちやら〳〵、丼鉢テ浮いた〳〵」と見えてゐる。上方では明治時代まで、このよしこの節が行はれてゐて、關東の都々逸節と同樣に新作が續々出で、撰者があり、披露會（開卷と云ふ）が催され、撰集の書は數々刊行せられた。かくて有力なる俗文學の一つとなつたが明治以後は全く都々逸節（別項）に壓倒せられて遂に亡び、新作も都々逸節として歌はれた。併し、一部には、未だ細々と殘存してをり、德島の盆踊歌は、よしこの節であると云ふ。よしこの節は形式内容等全く都々逸節と同樣であると云ふことが出來、この二つの流行歌は、潮來節より出でた双生兒である。上方では、江戸の都々逸坊扇歌作の歌を、よしこの節として歌ひ、且つこれを種々印行してゐるのでも、兩者の近似が察せられる。大阪の一荷堂半水、北六齋月庭、京都の楊柳園条（めう）兒等は、よしこのの有力な撰者で、「情歌花言集」（慶應二年、一荷堂）「浮禮唱歌玉葉集」（嘉永五年、楊柳園）「風流よしこの圖會」（北六齋）等が代表書である。（都々逸參照）【藤田】

芳澤あやめ（よしざわあやめ）　俳優【初代】【本姓】齋藤氏【通稱】橘屋權七【家號】橘屋【初名】綾之助・山下權七・吉澤あやめ【生歿】延寶元年に生れ、享保十四年（一三八九）七月十五日に歿す。享年五十七。【法名】覺月院宗顯【墓所】大阪谷町本照寺【閲歴】五歳で父を失ひ、幼時から道頓堀の色子に賣られ、丹波の鄉士橘屋五郎左衞門に寵せられ、その庇護と指導とが出世の緒となつた。初め口上いひの名手水島四郎兵衞の食客となり、初代嵐三右衞門に敎を乞ひ、若衆方から立役となつたが、更に女方に轉じて吉澤あやめといひ、後に吉の字を芳に改めた。元祿五年頃から殆ど京都に留まつて次第に名聲をあげ、同十一年頃には、荻野澤之丞・水木辰之助（別項）・袖崎歌流と共に女方の四天王といはれた。同十六年冬大阪に下つたが、この頃から愈々地藝の冴えを示し、寶永五年冬再び京都に上つた時は、全く女方の第一人者として比肩するものがなく、正德元年には極上上吉の位に進められた。同三年十一月江戸中村座に初下りして、女楠（菊水）役に譽れを取り、翌年冬歸京し、同六年に三ケ津物藝頭といふ在來の位附になかつた最高位に置かれた。然るに享保六年、芳澤權七と稱して立役に轉じたが、不評だつた爲めに、同八年春女方に復歸した。同年冬歸阪し、翌九年日本無雙、同十三年三ケ津極無類の位に置かれたが、やがて病を得て舞臺から姿を消した。妻は立役の名優山下京右衞門の妻の妹で、四人の男子を生み、長男



は二代あやめ、二男は二代京右衞門を襲いだ三代あやめで、いづれも名優として聞えた。【藝風】溫雅な面容で、あまえた口跡だが、藝のさまは全く女のやうで、姫・奥方・女房・傾城等、いづれにも適し、殊に傾城事に妙で、またおしなべて愁嘆事を最も得意とした。而して水木辰之助が所作事を長所としたに對し、彼は地藝を本領として、しかもそれを大成した。當り役に「淺間嶽」の傾城三浦、「善の綱」て重きをなした。【藝風】これも所作事よりは、地藝を得意とし、奥方・町女房・世話事・愁嘆事などに妙であつた。【四代】【初名】芳澤あやめ【俳名】香蒲。のち巴紅【生歿】寶曆五年生れ、文化七年（二四七〇）八月二十六日歿す。享年五十六。【法名】芳岸院巴紅日統【閲歴】三代あやめの子。明和八年冬色子より女方に進み、安永四年冬江戸に下つて學び、家業を顧みずに日夜著述にのみ耽つた。それがために家道漸次衰へて、終に大に零落するに至つた。天保四年家業をその子に讓り、下谷金杉に隱退して耽奇會を起し、常に知友を會してその愛翫した古器物及び圖書を鑑賞し、その圖寫したものを輯錄して「耽奇漫錄」二十卷（別項）を著はした。世の人これを「集古十種」（別項）に比した。

追善浅間嶽山役割番附（寶曆三年三月）

は二代あやめ、二男は二代京右衞門を襲いだ山下又太郎、三男は初代中村富十郎、四男は三代あやめで、いづれも名優として聞えた。【藝風】溫雅な面容で、あまえた口跡だが、藝のさまは全く女のやうで、姫・奥方・女房・傾城等、いづれにも適し、殊に傾城事に妙で、またおしなべて愁嘆事を最も得意とした。而して水木辰之助が所作事を長所としたに對し、彼は地藝を本領として、しかもそれを大成した。當り役に「淺間嶽」の傾城三浦、「善の綱」の傾城さんご、「嵯峨野原」の傾城高はし、「沖の石」のおさん、「丹波與作」の重の井、「女楠」の菊水と下女おたけ（大根演）、「難波咄」の義左衞門女房、「國姓爺」の和藤内母等がある。

【二代】【通稱】橘屋梅七【初名】芳澤崎（初め唉）之助【俳名】春水・四澤堂【生歿】元祿十五年に生れ、寶曆四年（一七五四）七月十八日京都で歿す。享年五十三。【法名】觀月院宗覺日心【閱歷】初代あやめの長男。享保二年十一月京都蛭子屋座で若衆方から女方に轉じ、同十四年冬二代を襲名。延享二年十一月、初めて江戸へ下り、市村座で、亡父の當り藝たる菊水役で「大根演」を演じた。それより江戸に留まること七年にして、寶曆二年冬上京したが、間もなく歿した。【藝風】風采も音聲もあがらず、俗衆に悦ばれなかつたが、舞臺に父の俤を存し、壯時は世話物を當てたが、後には女武道を得意とした。

【三代】【初名】芳澤萬代・芳澤崎之助（二代）【俳名】一鳳【家號】橘屋【生歿】享保五年に生れ、安永三年（一七七四）十月十八日に歿す。享年五十五【法名】一乘院宗芳日圓【閱歷】初代あやめの四男。享保十六年大阪で初舞臺。元文元年若女方となり、同二年冬京都で二代崎之助を襲ぎ、更に明和元年冬大阪で三代あやめを繼ぐ。爾來三都屈指の女方として重きをなした。【藝風】これも所作事よりは、地藝を得意とし、奥方・町女房・世話事・愁嘆事などに妙であつた。

【四代】【初名】芳澤あやめ【俳名】香蒲。のち巴紅【生歿】寶曆五年生れ、文化七年（一八一〇）八月二十六日歿す。享年五十六。【法名】芳岸院巴紅日統【閱歷】三代あやめの子。明和八年冬色子より女方に進み、安永四年冬江戸へ下り、伯父中村富十郎に庇護されて森田座に出勤。同七年冬、富十郎と共に大阪へ上り、文化四年冬京都であやめの名を襲ぎ、同六年養子崎之助が夭折したが、ついで翌年に自分も死んだ。二代いろはの名は、實子芳澤圓次郎（俳名友之）が襲いだ。【藝風】容貌美しく、狹斜風の意氣な女性に扮するのが得意で、姫の役や女武道の如きは嵌らなかつた。【附記】別にもう一人、四代あやめがある。それは二代あやめの門弟芳澤五郎市（元文二年―寛政四年）（橘屋春水、初名山下小式部、また山下市五郎）で、明和元年冬江戸で三代崎之助を繼ぎ、安永七年十一月江戸中村座で四代を襲名したものである。當時の襲名番附「役者男紫花二古今俳優家譜」（一名役者大系圖）等には、これを正しい四代となしてをり、後年いろはのあやめをして、五代としてゐる文獻もあるが、芳澤家では、この五郎市あやめを認めてゐないといふ說なので、今はこれに從ふ。【伊原・秋葉】

美成（よしげ）　雜學者【姓名】山崎氏。通稱長崎屋新兵衞、後に久作。字は久卿【號】北峰・好問堂・耐煩居・三養居【生歿】寛政九年生れ、安政三年（一八五六）七月二十日歿す。享年六十一。【墓所】江戸淺草松清町大松寺【閱歷】世々江戸下谷長者町の藥種商であつたが、幼より學を好み、小山田與清の門に入つて學び、家業を顧みずに日夜著述にのみ耽つた。それがために家道漸次衰へて、終に大に零落するに至つた。天保四年家業をその子に讓り、下谷金杉に隱退して耽奇會を起し、常に知友を會してその愛翫した古器物及び圖書を鑑賞し、その圖寫したものを輯錄して「耽奇漫錄」二十卷（別項）を著はした。世の人これを「集古十種」（別項）に比したとさへ傳へる。【著書】新吉原略記一卷（文政八年六月成。無石十種所收。もと吉原圖に添へた記事で、牛島の佛菴翁の講によつて書いたとのことである）○好問堂海錄二十卷（國書刊行會第四期所收。文政三年六月から天保八年二月に至る十八年間に群書渉獵の傍ら摘記した雜錄）○大江戸圖說集覽二卷（嘉永六年刊。寛永の圖を掲げ、神社・佛閣その他名所等の沿革を記したもの）○耽奇漫錄○三養雜記○世事百談（以上各別項）○文教溫故。その他數十種。【石村】

吉田絃二郎（よしだげんじらう）　小說家【本名】源次郎【閱歷】明治十九年十一月二十四日、佐賀縣神崎郡西郷村に生れた。父は藥作、舊鍋島藩士。彼はその次男。明治二十三年、父が酒造業に失敗して郷里を出で、長崎縣佐世保に轉住したので、小學教育はその地で受けた。父が屢々芝居に關係した爲め、彼は六七歳の頃からその方面に親しみ始めた。三十二年、長崎東山學院に入學、年餘にして退いたが、彼が後年の宗教的傾向はこのミッションで培はれた。次いで佐賀の工業學校に入つて機械學を專攻した。三十六年同校卒業後、一年ばかり佐世保の海軍工廠で働いた。この前後から漸く文學に親しみ、三十八年一月上京、神田國民英學會に入り、更に四月には早稻田大學英文科に入學した。在學中、一年志願兵として對馬要塞砲兵大隊に入り、見習士官に

嘯したので、この名が出て來た。【解說】潮來節（別項）の變化したものと云ふ。飴賣が潮來節を歌ひ、右の如き囃子を附けて賣り歩いてより、自然に變化して、よしこの節と云ふ流行歌となり、世に擴まるに至つた。「守貞漫稿」に「文政三四年比より行れ、三都ともに專ら唄之。娼妓も專ら唄之。宴席に興ず。異章數多あり、無三長短。左に記すを原歌とすべまよ三度笠よこちよにかむり、旅は道づれ世は情」と見え、名古屋には文政五年より流行した。「小歌志彙集」に「文政五壬午年冬よしこの節はやり來る、此歌どゝいつ已來の大はやりにて、のち〳〵いろ〳〵調子も替り節もかはり候へ共、此時はいまだ始りゆゑ、二上りのみにて乙酉年迄はやり、酉年に至て本調子になりこの節が行はれてゐて、關東の都々逸節と同様に新作が續々出で、撰集の書は數々刊行せられた。かくて有力なる俗文學の一つとなつたが明治以後は全く都々逸節（別項）に壓倒せられて遂に亡び、新作も都々逸節として歌はれた。併し、一部には、未だ細々と殘存してをり、德島の盆踊歌は、よしこの節であると云ふ。よしこの節は形式内容等全く都々逸節と同様であると云ふことが出來、この二つの流行歌は、潮來節より出でた双生兒である。上方では、江戸の都々逸坊扇歌作の歌を、よしこの節として歌ひ、且つこれを種々印行してゐるのでも、兩者の近似が察せられる。大阪の一荷堂半水、北六齋月庭、京都の楊柳園条（ぢょう）崎歌流と共に女方の四天王といはれた。同十六年冬大阪に下つたが、この頃から愈々地藝の冴えを示し、寶永五年冬再び京都に上つた時は、全く女方の第一人者として比肩するものがなく、正德元年には極上上吉の位に進められた。同三年十一月江戸中村座に初下りして、女楠（菊水）役に譽れを取り、翌年冬歸京し、同六年に三ケ津物藝頭といふ在來の位附になかつた最高位に置かれた。然るに享保六年、芳澤權七と稱して立役に轉じたが、不評だつた爲めに、同八年春女方に復歸した。同年冬歸阪し、翌九年日本無雙、同十三年三ケ津極無類の位に置かれたが、やがて病を得て舞臺から姿を消した。妻は立役の名優山下京右衞門の妻の妹で、四人の男子を生み、長男

なつた。卒業の前年(四十三年)秋には、文藝協會(別項)に入り、劇の實際研究に志したが、間もなく退會。卒業と同時に遞信局囑託となり、一方、芝三田ユニテリアン協會に入つて「六合雜誌」の編輯に從事した。その頃から大正初年にかけ、同誌に多くの創作・感想を發表したが、文壇への初舞臺は大正三年三月の「早稻田文學」に島村抱月の推薦によつて小說「磯ごよみ」を發表、大正六年、對馬時代(重砲兵大隊見習士官)に材を得た「島の秋」を發表以來、文名頓に上り、作家としての位置が確立された。大正五年九月より母校に教鞭をとつて英文學を講じた。昭和三年職を辭してよりは著作生活に入り、旅に過ごせる日も多かつた。初めは小說及び感想文を以て多くの讀者に喜ばれたが、昭和期に入り、戲曲に力を注ぎ「大谷刑部」「大阪城」「二條城の清正」など好評だつた。【著作】吉田絃二郎全集全十八卷(新潮社版)○現代日本文學全集第四十七卷(改造社版)○明治大正文學全集第三十九卷(春陽堂版)○現代長篇小說全集第十卷(新潮社版)○日本戲曲全集第四十四卷(春陽堂版)○新選吉田絃二郎集(改造社版)○吉田絃二郎傑作集(新潮文庫)○同詩感想集(同上)○孤獨なる女(新潮社長篇文庫)○生の悲劇○生命の微光○生くる日の限り○小鳥の來る日○光落日○雜草の中○草光る○柿丸と梨丸○芭蕉○砂に描く○一人步む○運命の秋○ダビテと子たち○山寒し○木に凭りて○靜かなる土○父○旅人○春來れば○大地の涯○生命の彼岸○わが詩わが旅○山家日記○靜夜曲等。【批評】彼は人生を死と悲哀と流轉との相に於て眺め、その底に微かな純情と人間味との閃きを求めて、これに救ひを見出さうとする。其處に彼の宗教的・理想派的態度があるが、それ等は彼の場合、强い意志的追求と云ふよりも情感的以上に多くを出ない。つまり咏嘆と情緒への陶醉、其處に一種、他に見るべからざる風格がある。併しかうした態度には、とともすれば客觀の諦視と把握とを怠り易い傾向を持つ。從つてその作品には正確なデッサンを缺いたのが多く、所詮はその濃かな抒情味を掬し味はるべきものである。そしてその抒情と餘韻とは詩のやうに切られた短章、同じ章句の重疊、對句的表現等の獨自のスタイルからも流れて來るやうに思はれる。〔片岡〕

吉田三郎兵衞(よしださぶろうべゑ)　人形遣【本名】未詳【歿年】延享四年(一七四七)三月十七日歿す。享年未詳、但し相當の老齡であつたらう。【閱歷】おやま人形辰松八郎兵衞(別項)と共に、貞享二年の竹本座の櫓揚げの當初から、竹本座に中心となつて働いた一人で、貞享二年二月から實に六十三年の久しきに亙り、竹本座のために盡した杜石であつて、後世の三人遣ひへの完成の橋渡しをした過渡期の名人である。されば本姓の「吉田」よりは、竹本三郎兵衞を以て呼ばれてゐた。竹田近江の「倒冠雜誌」に、「吉田三郎兵衞は立役人形を專らにして元祖山本飛驒掾に近寄人形の奧儀を極め其比よりの大立もの」とあるから、手妻人形から片手人形に移つた飛驒風の遣ひ方を三郎兵衞が習得してゐたことは明かである。三郎兵衞の遣つた役々は多からうが、判明してゐるのは、「曾根崎心中」のお初を辰松八郎兵衞、德兵衞を三郎兵衞が遣つた。また最初の「國姓爺合戰」の和藤內は三郎兵衞であつた。「世に秀たる人形、近き比までも役はなけれども惣樂屋の後見とて每日々々出勤しが」(倒冠雜誌)とあり、歿するまで、竹本座で惣後見を勤めてゐた事が分る。後の名人吉田文三郎(別項)はその實子である。〔石割〕

吉田松陰(よしだしょういん)　史傳【著者】德富蘇峰【刊行】明治二十六年十二月民友社。同四十一年十月增訂刊行。【內容】松陰の一生を叙した後、彼の國體論、帝國主義、彼の交友、書生としての彼、家庭に於ける彼を記述し、結論として皇室中心主義及び國民的自覺の必要に言及してゐる。【批評】本書は新史傳に先驅した點に於て大きな意義があつた。著者は在來の史傳に於けるが如き固定形式に囚はれないで、叙事の間に時々評論を加へ、叙事も亦成るべく精彩を加へることに力めた。殊に單なる志士傳ではなく、時代・環境を通してのみ人物を描かうとした着想が、今までにない新時代の史傳として讀まれた理由で、時代史論に於ても尖銳な意見があつた。今日から見ると、不滿の箇所がないではないが、當時にあつては著者の一佳作とせられたのも理由なきことではない。〔高須〕

好忠(よしただ)　歌人(中古三十六歌仙の一)【姓】曾根、曾禰とも書く。【通稱】曾丹(そたん)【家系】「新撰姓氏錄」には曾禰連、神饒速日命六世之後也とあるが、父祖は未詳。【閱歷】丹後掾であつたので、初めは曾丹後掾、又は曾丹後と稱せられ、後は略して曾丹といはれた。彼はやがて「そた」と略稱せられることを想像したといふ(袋草紙三)。寬和元年二月十三日圓融院の子の日の御遊が船岡に催され、歌人として召された能宣・兼盛・元輔・時文・重之などが衣冠にて畏つてゐると、烏帽子狩衣の賤しい姿をした好忠が現はれた。召もないのに來た事を咎められると、歌よみが召されると聞いて來た、我はこゝに召されてゐるものに決してゐるのは、「曾根崎心中」のお初を辰松八郎兵衞、德兵衞を三郎兵衞が遣つた。また最初の「國姓爺合戰」の和藤內は三郎兵衞であつた。「世に秀たる人形、近き比までも役はなけれども惣樂屋の後見とて每日々々出勤しが」(倒冠雜誌)とあり、歿するまで、竹本座で惣後見を勤めてゐた事が分る。後の名人吉田文三郎(別項)はその實子である。〔石割〕

吉田松陰(よしだしょういん)　史傳【著者】德富蘇峰【刊行】明治二十六年十二月民友社。同四十一年十月增訂刊行。【內容】松陰の一生を叙した後、彼の國體論、帝國主義、彼の交友、書生としての彼、家庭に於ける彼を記述し、結論として皇室中心主義及び國民的自覺の必要に言及してゐる。【批評】本書は新史傳に先驅した點に於て大きな意義があつた。著者は在來の史傳に於けるが如き固定形式に囚はれないで、叙事の間に時々評論を加へ、叙事も亦成るべく精彩を加へることに力めた。殊に單なる志士傳ではなく、時代・環境を通してのみ人物を描かうとした着想が、今までにない新時代の史傳として讀まれた理由で、時代史論に於ても尖銳な意見があつた。今日から見ると、不滿の箇所がないではないが、當時にあつては著者の一佳作とせられたのも理由なきことではない。〔高須〕

好忠(よしただ)　歌人(中古三十六歌仙の一)【姓】曾根、曾禰とも書く。【通稱】曾丹(そたん)【家系】「新撰姓氏錄」には曾禰連、神饒速日命六世之後也とあるが、父祖は未詳。【閱歷】丹後掾であつたので、初めは曾丹後掾、又は曾丹後と稱せられ、後は略して曾丹といはれた。彼はやがて「そた」と略稱せられることを想像したといふ(袋草紙三)。寬和元年二月十三日圓融院の子の日の御遊が船岡に催され、歌人として召された能宣・兼盛・元輔・時文・重之などが衣冠にて畏つてゐると、烏帽子狩衣の賤しい姿をした好忠が現はれた。召もないのに來た事を咎められると、歌よみが召されると聞いて來た、我はこゝに召されてゐるものに決して劣らないといつて、立ち去らうともしないので衣の領をとつて引き出されたといふ(今昔物語・少右記・大鏡)。家集には「圓融院の御子の日の日召しなくてまゐりたりとて、さいなまれて」とある。「新千載集」卷八、「夫木集」三十一に寬和二年殿上歌合の歌があるから、寬和の頃生存してゐたことがわかる。家集その他によれば順・能宣・重之・惠慶法師等と交りがあり、重之と共に但馬にあつたことが分る。歌人としての力量は認められながら社會的には不遇であつたであらう。【作品】家集「曾丹集」(別項)○勅撰集に入る歌は拾遺九、後拾遺九、詞花十七、新古今十六、新勅撰集以下凡そ三十八首、合計凡そ八十九首○私撰集に入るもの玄々集二、後葉集十、續詞花集七。【批評】彼は本來宮中に奉仕したい希望をもつてゐたが、志を達する事ができず、「一時にあはぬ身」「蓬の門に閉ぢられて」「名はよしたゞといふ甲斐もない」などと悲憤してゐる。その寂しさが歌を作る氣持を刺戟し、歌に自己を慰め、且つ不滅のものを後世に殘さうと考へさせた(家集の序)。彼の歌には動搖し易い心、傷つき易い心が伺はれるが、圓熟味や調和美は乏しい。彼は鋭い直觀をもつて對象をよくつかんでをり、清新なる叙景の歌にすぐれたものが多い。主觀の歌においても氣持を鮮明にとらへてをり、當時の人々が情緒を享樂的によんでゐるものとは、その趣を異にしてゐる。彼の題材は變化が多く、用語も豐富である。實感を忠實に生かした形容詞、俗語古語と思はれるもの、破格と思はれるもの等がある。長能は「鳴けやなけ蓬がそまのきり?」すぎ過ぎ行く秋はげにぞかなしき」の歌に於て

「狂惑ノヤツ也蓬が柚ト云フ亥ヤハアル」と評した如き例(袋草紙三)もある。形容詞に「さ」「み」を附してある氣持の深さを示さうとしたもの、第五句の末に至るまで直接描寫を行つたものがあり、全體として懸詞、强調の助詞等も多い。概して彼の歌は自由奔放な感じと新鮮な感じとを與へる。彼は直觀と經驗とに重心をおき、實感のまゝを自由によんでゐて

然沙汰止みとなつた。その後十六年を經た延享四年三月に父三郎兵衞を亡ひ、同六月に座本の竹田出雲(外記)が死去した。文三郎はこの虛に乘じて我意を募らせたので、座本出雲(子前軒)の意に叶はずとあつて、文三郎に暇を遣つたが、彼が芝居興行の準備に取掛つたので、竹本座側では手代の不調法と僞り和睦して解雇を取消した。五年後の寶暦二年には、

來、文三郎は近江に數次の交涉を行つて數々の橫暴を振舞つた。結局寶暦八年隱居を申出した上、翌九年閏七月四日文三郎・文吾の親子の者は、道頓堀嵐吉三郎芝居(名代九郎右衞門座卽ち中芝居)でいよ〳〵櫓揚げと決めたので、これを聞いた近江側は、嵐芝居の小屋主高津屋勘太郎に交涉して話を潰させ、翌五日太夫・三味線方・操方へ殘らず人を派して、文三郎へ

藝の完成を認められて以來、元文四年四月「ひらかな盛衰記」で巴御前・松右衞門・梅枝の三役を遣ひわけ、且つ梅枝で長さし金を遣ひ始め、延享二年七月「夏祭浪花鑑」では、初めて人形に帷子衣裳を用ひ、本泥本水を使用した。同四年十月「義經千本櫻」(別項)の源九郎狐の衣裳に、源氏車の模樣を用ひて今日の操・歌舞伎その型を殘し、我は幷の助、狐の

治大正文學全集第三十九卷（春陽堂版）○現代長篇小說全集第十卷（新潮社版）○日本戲曲全集第四十四卷（春陽堂版）○新選吉田絃二郎集（改造社版）○吉田絃二郎傑作集（新潮文庫）○同詩感想集（同上）○孤獨なる女（新潮社長篇文庫）○生の悲劇○生命の微光○生くる日の限り○小鳥の來る日○光落日○雜草の中○草光る○柿丸と梨丸○芭蕉○砂に描く○一人歩む○運命の秋○ダビテと子たち○山寒し○木に凭りて○靜かなる土○父○旅人○春來れば○大地の涯○生命の彼岸○わが詩わが旅○山家日記○靜夜曲等。

【批評】彼は人生を死と悲哀と流轉との相に於て眺め、その底に微かな純情と人間味との閃きを求めて、これに救ひを見出さうとする。「狂惑ノヤツ也遂ガ柚ト云フ妻ヤハアル」と評した如き例（袋草紙三）もある。形容詞に「さ」「み」を附してある氣持の深さを示さうとしたもの、第五句の末に至るまで直接描寫を行つたものがあり、全體として懸詞、强調の助詞等も多い。概して彼の歌は自由奔放な感じと新鮮な感じとを與へる。彼は直觀と經驗とに重心をおき、實感のまゝを自由によんでゐて固定的な點がない。そこに彼の純粹さが見え、「萬葉」の精神にも通ずるものを認めることができる。一面、彼は寂寥・不滿・焦躁等をも如實に味はつて、常に發展的な氣持をもつてをり、後の俊頼（別項）と通ずる精神をもつてゐると考へられる。

【參考】中古歌仙傳○百人一首一夕話○國文學全史平安朝篇○曾禰好忠に就いて（早川幾忠）（國語と國文學大正一五ノ一〇）○曾禰好忠の戀歌同上（同上大正一五ノ一二）○曾根好忠の地位同上（同上昭和二ノ八）○曾禰好忠の歌風同上（同上昭和五ノ一）

吉田文三郎 よしだぶんざぶらう 【西下】

未詳。幼名八之助。【殁年】寶曆十年（一四二〇）正月十九日歿す。享年未詳【法名】至誠院心譽回深宗雲居士【墓所】大阪千日前法善寺【閲歷】吉田三郎兵衞（別項）の實子で、享保二年二月「國姓爺後日合戰」の時に、經錦舍の人形を片手で出遣ひをしたのが、竹本座への初舞臺であつたが、父三郎兵衞が竹本座の柱石であつたから、幼い時から竹本座の樂屋へ出入し、父の頭取役を代行してゐた傍ら、父に就いて人形の技を學んだ。文三郎は獨立の念が頗りで、享保十六年に、大和彦太夫、作者長谷川千四を語らつて別に芝居興行を企てたが、父の異見と彦太夫の病死とにより、自然沙汰止みとなつた。その後十六年を經た延享四年三月に父三郎兵衞を亡ひ、同六月に座本の竹田出雲（外記）が死去した。文三郎はこの虚に乘じて我意を募らせたので、座本出雲（千前軒）の意に叶はずとあつて、文三郎に暇を遣つたが、彼が芝居興行の準備に取掛つたので、竹本座側では手代の不調法と僞り和睦して解雇を取消した。五年後の寶曆二年には、文三郎は座中の太夫間に不和のあるを幸ひ、竊かに芝居興行を企てたが、座本側の懷柔によつて挫折した。寶曆三年五月、「愛護若名歌勝閲」（別項）で舞臺一面の水船で、龍骨車の水からくり、舞臺技巧を盡したので、文三郎の名聲はいよ〳〵高くなつた。文三郎は獨立興行が思ふやうにならぬのに業を煮やし、せめてはとて、作者の班に自らを列せしめた。寬延元年八月の「假名手本忠臣藏」で、中日を過ぎた頃に、九段目の山科の由良之助の科をする間、節を延ばすことを此太夫に交渉したが纏まらず、遂に此太夫・島太夫等を興行中に休場させ、内匠太夫（大隅大掾）をして、新に山科を語らしめたなど、人形淨瑠璃の古今に亙つて、嘗てない事を敢行してゐるほどの權勢を揮つたが、なほ慊らず、この「忠臣藏」の時に一子八太郎を文吾と改名して重用し、寶曆元年には、「丹波與作」を自ら改作して、「戀女房染分手綱」と題して上演、作者名を吉田冠子と稱した。翌二年には「傾城反魂香」を人形本位に改作して「名筆傾城鑑」として上演した。文三郎としては鬱勃たる覇心を、こゝに求めて安全瓣を作つた。が、寶曆四年には、座本出雲（千前軒）が死んだので、竹本座の座本を竹田芝居の座本近江が兼攝した機に乘じて、文三郎は竹本座の萬端を己に一任せよと要求した。以來、文三郎は近江に數次の交涉を行つて數々の横暴を振舞つた。結局寶曆八年隱居を申出した上、翌九年閏七月四日文三郎・文吾の親子の者は、道頓堀嵐吉三郎芝居（名代九郎右衞門座卽ち中芝居）でいよ〳〵櫓揚げと決めたので、これを聞いた近江側は、嵐芝居の小屋主高津屋勘太郎に交涉して話を潰させ、翌五日太夫・三味線方・操方へ殘らず人を派して、文三郎へ加擔を切崩し、操方は「吉田」の姓を削らせ、文三郎・文吾の親子、弟大三郎、一家の彦三郎の四人を同時に絕緣した。この時近江は、白德齋の筆名で「倒冠雜誌」を刊行して文三郎との確執を公表した。かくて文三郎は飄然として京へ上り、文吾ばかりが同年九月に復座し、祖父竹本三郎兵衞の名に改め、「太平記菊水之卷」に出座し、父に倣つて作者の列にも加はつた。爾來文三郎は快々として樂しまず、遂に病歿した。

【業績】初舞臺の「國姓爺後日合戰」の經錦舍役で、手妻人形から出た山本飛驒掾風の片手人形を遣つてゐる。現在の三人遣ひはこの片手人形から發達したもので、それが文三郎の支配下にあつた竹本座の享保十九年の舞臺であつたとすると、啻に文三郎のために特筆するのみならず、飛驒・三郎兵衞・文三郎と傳來する「片手人形」の藝の傳統は、操の根幹として、操史上、特筆すべき一事である（人形參照）。そして文三郎の舞臺生活の眞の活動は、妙知燒の大阪大火後、豐竹座が大活動を初めた頃からで、その大火のあつた享保九年から寶曆九年までの三十六年間は、彼以前及びその後も、操はおやまと立役との專門に分かるゝに拘はらず、文三郎のみは、「兼ねた古今の名人」と許していゝ。享保九年七月「鼎軍談」に彼は時にあつては著者の一佳作とせられたのも理由なきことではない。

好忠 よしただ 【高須】

歌人（中古三十六歌仙の一）【姓】曾根、曾禰とも書く。【通稱】曾丹（そたん）【家系】「新撰姓氏錄」には曾禰連、神饒速日命六世之後也とあるが、父祖は未詳。【閲歷】丹後掾であつたので、初めは曾丹後掾、又は曾丹後と稱せられ、後は略して曾丹といはれた。彼はやがて「そた」と略稱せられることを想像したといふ（袋草紙三）。寬和元年二月十三日圓融院の子の日の御遊が船岡に催され、歌人として召された能宣・兼盛・元輔・時文・重之などが衣冠にて畏つてゐると、烏帽子狩衣の賤しい姿をした好忠が現はれた。召もないのに來た事を咎められると、歌よみが召されると聞いり、竹本座のために盡した柱石であつて、後世の三人遣ひへの完成の橋渡しをした過渡期の名人である。されば本姓の「吉田」よりは、竹本三郎兵衞を以て呼ばれてゐた。竹田近江の「倒冠雜誌」に、「吉田三郎兵衞は立役人形を專らにして元祖山本飛驒掾に近寄人形の奥儀を極め其比よりの大立もの」とあるから、手妻人形から片手人形に移つた飛驒風の遣ひ方を三郎兵衞が習得してゐたことは明かである。三郎兵衞の遣つた役々は多からうが、判明してゐるのは、「曾根崎心中」のお初を辰松八郎兵衞、德兵衞を三郎兵衞が遣つた。また最初の「國姓爺合戰」の和藤内は三郎兵衞であつた。「世に秀たる人形、近き比までも役はなけれども物樂屋の後見とて毎日々々出勤しが」（倒冠

を著はし、その事から義知と師弟の緣を斷つに至つた。子氏房は清光寺に墓を立てた人で生歿年月著書共に不明であるが、義俊も「其才實先生子矣（ニノルカナ）」と

船橋秀賢―中原職忠（もとただ）―植木悅
　　―平田內匠―壺井義知―壺井氏房（實子）
　　　　―多田義俊
　　　　―速水房常
　　　　―谷村光義
　　　　―德田良方
　　　　―渡邊康映
　　　　―伊藤忠宣

稱歎した人である。これ等門下の斯道開拓のためにつくしたことの多大なのは、後年塙門下が江戸で多大の貢獻をしたのに對比すべきものがある。

【閱歷】幼少から穎敏を以て知られた。十四歲の時父を失つたので、母方の壺井氏に養はれ、後、終にその氏を稱することとなつた。その後、大阪に出でて筒井吟龍軒（白雲老人）といふ有名な書家に就いて學んだのであるが、天稟の能書で、十八九歲の頃既に書を以て世に聞えた。延寶五年（二十一歲）より信州松本に在ること七年、次いで加州金澤に三年、その間、書を以て仕官を求めたけれども、いづれもその志を果すことが出來なかつた。然るに或る日「職原抄」を讀んで、天下の禮を學ぶには先づ官職を明かにする必要があることを知り、書を以て仕を求めるが如きは丈夫の志とすべきでないことを感得し、急に故鄉に歸つて、その事を一族に披露し、京に出でて始めて四辻宰相中將公韶卿の家に仕へて靑侍となつた。時に貞享二年（二十九歲）。伏原宣通卿に就いて古書の訓讀法を學んだが、晩學であるのを深く感じて日夜勉學に努め、また平田內匠に就いて、主として官職のことを學習した。然るに或る夏、土用乾の手傳ひをした時に、內匠が植木悅の著はした「職原抄大全」を祕書のやうに取扱ふのを見て、これを陋として師弟の關係を絕ち、爾來獨學で舊記を探り、深く斯學を講究した。三十二歲の時、初めて「裝束拾葉」二卷を著はし、三十四五歲頃には有職學者として世に認められ、門人も漸く出來て來た。元祿九年板「源氏男女裝束抄」に義知の名の韶政とあるのも、四辻公韶の一字を賜はつたものであらうと思はれるにつけても、その漸く人に重んぜられて來たことが分る。元祿十三年、公韶薨去の後間のない事でもあつたらうか、義知は四辻家で家令としようとしたのを辭退して遂に同家を去つた。門人も漸く增加し、堂上の公卿さへも來つて敎を聞くこととなつたが、生活は相當に苦しかつた（南嶺遺稿）。常に「政事要略」の著者惟宗允亮を崇拜した。又八條權中納言隆英卿の眷顧を蒙つて溫故の二字を賜はつたので、これを扁額にして揭げたといふ。後「職原抄辨疑私考」三卷を著はしてから、反對者も亦義知の識見の卓拔なのに服し、名聲益々高まり、終には禁裡仙洞までも聞え、享保十年には幕府より召し出され、斯道に關した下問に答へて大に面目を施したが、後十年を經て都で歿した。人物は方正謹直な君子人であつたといふ。

【著書】〔官職〕官職祕抄後附一卷（元祿十一年成る。同十三年正月刊。職原抄の原本とも謂ふべき官職祕抄を數本を以て校合し、それに位階之濫觴・位田・職田・封戶御給・令外官・百官略・百官略頌等一卷を後附したもの）○當時諸家官位昇進次第一卷（寶永五年成。初學の時、近世諸家昇進の次第を葉室顯重・園基勝から記して賜はつたもの）○官職浮說或問二卷（別項）○職原抄辨疑私考三卷（別項）○職原抄通考二十卷（別項）○職原抄假名抄七卷（假名書にて註釋したもの）○源氏官職故實祕抄七卷（別項）○位署式私考一卷（官位署名の書式に關する考證）○位署式難義私考一卷（位署式中の五節舞姬に關する記錄の拔萃をつけてある）○昔傳拾葉三卷○同提要一卷（寶永六年成。故實・考證に關する隨筆）○壺井抄一卷（記錄・國史等の雜說に關する問答體の部分を省いたもの）○直垂考一卷（別項）○裝束文飾抄二卷（式中の裝束の事を抄錄したもの）○衣冠圖會。「山城名勝志」には、大谷本願寺北側の岸上（俗に義經母と云ふ）にある舊墳であると云ふ。【學統】歌學は藤原定家門（俊成の指導をも受けた）、詩文は藤原親經に學ぶ。【閱歷】兼實の二男。兼實は古典に通じた有職家であつたと共に和歌の道にも優れてゐた。母は兼實の家司であり、從三位中宮亮藤原季行の女であつた。その家格は九條家に比して遙に劣るが、

雜辨一卷（官位令・職員令の綱領を示したもの）。【裝束】源氏男女裝束抄三卷（元祿九年刊。享保二年增補刊。連歌師月村齋宗碩の書を增補訂正し、門人渡邊康映が女官飾抄・曹抄・藻鹽草の三部中から、裝束の色目等を拔萃して添へたもの）○四位五位裝束略抄七卷（別項）○裝束要領抄中の男官裝束要領鈔の原本で、令の綱領を示したもの）。【裝束】源氏男女裝束抄三卷（元祿九年刊。享保二年增補刊。連歌師月村齋宗碩の書を增補訂正し、門人渡邊康映が女官飾抄・曹抄・藻鹽草の三部中から、裝束の色目等を拔萃して添へたもの）○四位五位裝束略抄二卷（

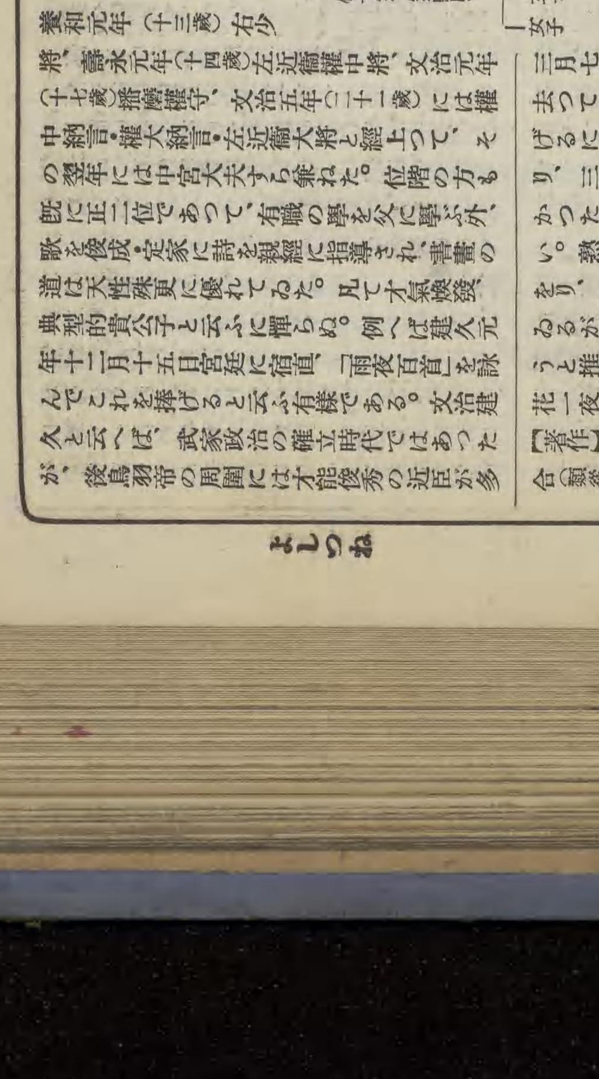
非常に深い意味を斯學研鑽の上に齎した。即ち口傳・祕傳以外に、有職學が前代文化の研究であり、國史・記錄の研究に依り、いよ〳〵その眞相を闡明してゆくものであることが明かにされたことであつた。これから地下の身でよく堂上の人の師となることが出來るやうになつたのである。實に近世有職學の端緒は、この人に依つて開かれたものであるといふも決して過言ではない。〔石村〕

良經 つねし 歌人【姓】藤原【通稱】後京極殿・中御門殿【號】式部史生・秋篠月清・南海漁父・西洞隱士【生歿】嘉應元年生れ、建永元年（一一八六）三月七日薨去。享年三十八【墓所】山城愛宕郡小松谷の要法寺内（山城志・都名所圖會）。「山城名勝志」には、大谷本願寺北側の岸上（谷に義經堂ミ云ふにある舊墳であると云ふ。【學統】歌學は藤原定家門（後成の指導をも受けた）、詩文は藤原親經に學ぶ。【閲歷】兼實の二男。兼實は古典に通じた有職家であつた と共に和歌の道にも優れてゐた。母は兼實の家司であり、從三位中宮亮藤原季行の女であつた。その家格は九條家に比して遙に劣るが、季行の歌も少數ではあるが「千載集」に出てゐる。良經は十一歳の年元服して從五位上に叙せられ、ついで侍從となつた。父は攝政、同五年には太政大臣となり、更に建久二年には關白にまで昇進したのであるが、良經の地位も順調に昇り、

藤原忠通
養和元年（十三歳）右少將、壽永元年（十四歳）左近衞權中將、文治元年（十七歳）權中納言・權大納言・左近衞大將と經上つて、その翌年には中宮大夫すら兼ねた。位階の方も既に正二位であつて、有職の學を父に學ぶ外、歌を後成・定家に詩を親經に指導され、書畫の典型的貴公子と云ふに憚らぬ。例へば建久元年十二月十五日宮廷に宿直、一雨夜百首を詠んでこれを捧げると云ふ有樣である。文治建久と云へば、武家政治の確立時代ではあつたが、後鳥羽帝の周圍には才能俊秀の近臣が多かつた。良經もその屈指の一人である。建久二年には能保の女を娶り、翌々年には長子道家を生んだ。建久四年の六百番歌合の張行は特に名高い。かくてその翌々年（二十七歳）內大臣に任ぜられたけれど、その翌年には父の關白を辭するに共に嘗し自らも屛居し、更に建久九年正月には、御讓位不滿意を稱へた理由で、土御門帝の御踐祚に際し、暫く大將の官をすら辭退した。これ兼實の勢力に對立してゐた通親派が、新帝の御卽位と共に外戚としてその勢力を加へたからである。併し良經の德望は自らに高く、正治元年（三十一歳）には右大臣として兵仗を賜はり、建仁二年父出家の後を嗣ぎ、三月七日、意外の呪詛が彼をこの世から奪ひ去つてしまつた。良經は自邸で曲水の宴を擧げるに就いて、帝の御臨幸をうくることとなり、三月六日まで宮廷に出仕して準備に忙しかつたが、その六日夜中に經息頓死したらしいと。熟寐中、剃殺されたとする記錄も存してゐるが、恐らく心臟麻痺性の急死であつたらうと推測される。一昨日までかけてたのみし櫻花一夜の夢の春の山かぜと定家は追弔した。

【著作】 秋篠月清集（別項）○後京極殿御自歌合（類從第二九、歌合部類拳に收む。すべて百番）○後京極殿御自歌合判（同上）○後京極殿三百首（類從三五七に收む。春・夏・秋・冬・雜の六部ミなり、各五十首宛。）【勅撰集中の作】千載集以下十四代集のすべてに亙つて選出され、「新古今」に八十首、その他、新勅撰・續後撰・續古今・新續古今の各集もそれ〳〵三十首前後に及ぶ詠を收めてゐる。【漢詩集】詩十體三卷（中御門攝政御集ミも云ふ。本朝書籍目錄に出づ。零本。）【記錄類】良經の漢文日記は「殿記」或は「殿槐」と略稱され多く散佚して傳はるところが少い。「改定史籍集覽別記」「歷代殘闕日記」に編入されてゐる。「後京極殿藤原良經公記」（正治二年十二月より翌三年四月に亙る）、類從第七四の「任太政大臣記」（永久元年十一月より翌月に亙る）、その他建久元年・同六年・建仁三年・同四年等殘存してゐる。【雜書】作庭記（類從三六二所收。造庭史に重要の典籍なるのみならず、當時の自然觀、禁忌心理等を知るに參考材料を供するところが多い）○新十二月往來（類從三九所收。十二ヶ月に亙り、每月二篇宛の書簡文例を示す。但し每篇五六行の短文に過ぎないで、「大間成帳」の中から除目關係の項を拔萃したものである。册數は五册物・十册物がある。）○除目大成抄（抄物でありて、論に關する書は別にないが、北詵の態度は千五百番歌合判、乃至自讚歌によつて覗ふことが出來、また新古今和歌集假名序も參照するに足る。

【作風】 後鳥羽院口傳に、良經の作には秀逸が多く、二三首の程度には證しきれないと云ふ意味のことがある。彼の作風は、しかく多方面に亙り、闊達自在であると云ふ類の評價は、


藤原忠通
一基實（九條祖）
一基房
一基家（母仁子、後鳥羽院后）
一良經（母盛子、女）
一良輔（母源家女）
一良平（母源家女）
一良通（母藤原家女）
一良經（母藤原家女）
一良綱（母源家女）
一良尹（母源家女）
一慈圓
一良快
一良嘉
一女子
一女子
一良恕（母信濃女）
一良覺（母源家女）
一良海
一女子
一女子
一女子

分を髣髴せしめる企圖に成功してゐる。(5)は新古今調の特色たる優艶と玄趣とをかねた取材の洗練された申分のない作である。

【影響】特に、良經の作がどうと云ふ譯にはゆかないが、所謂新古今調として後世に迎合され、影響を遺してゐるものの中には、慈圓や家隆・寂蓮等に比し、良經獨自の分子が多いのではないかと思ふ。〔齋藤(清)〕

【參考】百錬抄○明月記○皇帝紀抄○源家長日記○愚管抄○六代勝事記○天王寺舊記○簾中抄○鹽尻○百人一首一夕話○扶桑名畫傳(七)○尊卑分脈○大日本史料(四ノ八)

義經新高館 よしつねしんたかだち 淨瑠璃 五段 時代物【作者】紀海音【興行】享保四年正月二十日初日、豐竹座。【諸本】東京帝大國語研究室藏七行七十七丁本。紀海音淨瑠璃集(續帝國文庫)・紀海音並木宗輔淨瑠璃集(帝國文庫)所收。

【題材】「義經記卷八に見え、更に幸若舞曲の「いづみが城」(別項)、同名の古淨瑠璃などに描かれた義經の沒落を表面の題材とし、暗に大阪落城を描いた作である。

【梗概】〔一段〕(鎌倉殿中)義經謀反の風說が立つたので、奥州から秀衡の後家正貞尼、繼信の母佐藤の局、權の頭兼房が義經の使者として伺向、畠山重忠・文覺上人に會うてその虚說なる事を辯ずる。重忠は、高館の城を開くか、一外樣大名となるか、京の君を人質とするかの三條件の一を選ばしめるので、兼房は獨斷を以て人質の件を承認する。正貞尼等はこれを難詰するが、重忠に追ひ歸される。(和泉三郎館)兩女が歸國して次第を報ずると、和泉三郎の兄で、豫て兼房を憎める錦戸太郎・伊達次郎は、義經に讒してこれを殺さうと計る。片岡八郎・龜井六郎はこれと爭ふが、義經は肯じない。(奥州芭蕉ケ辻)鎌倉より歸國する兼房を錦戸の軍勢が襲ふが却つて破られる。片岡八郎が駈つけ自殺せんとする兼房を留め、頼朝・義經和睦の院宣を申受けよと敎へ、東西に別れる。〔二段〕(和泉三郎庵室)三郎は父秀衡の墓前に庵を結んで喪に服し、武事に遠ざかつてゐるが、三郎鎌倉に內通との世評あるを知つて高館に駈けつける。(和泉が城)押し寄せた鎌倉勢を三郎は影武者を出沒せしめて惱ます。「軍配團」の節事。兼房が歸國して法皇の院宣をうけた由を報ずるので戰は休止され、衣川が埋められる。〔三段〕(頼朝陣所)龜井六郎は唯一人、頼朝の陣所へ兄弟和解の神文を請取りに來る。豫てより頼朝に預けられ開戰と共に親子の緣を切られた和泉三郎の一子大助を頼朝は龜井の弟分として連れ歸らせる。(高館)義經は三郎等の祝詞をうけ、名所づくしの屏風をその妻花卷に與へ、京の君はその繪解をする。「屏風八景」の節事。龜井は大助を伴うて歸城するが、和泉三郎は勘當を許さない。京の君の計らひで、義經は龜井と花卷の妹青柳とに祝言の盃をさせようとすると、大助は未だ念者の盃も濟まぬにと怨じ、青柳は又龜井の衆道沙汰に嫉妬する。龜井は頼朝の命に依つて大助と兄弟となつた仲なればとて青柳との祝言を拒むので義經は立腹するが、和泉三郎の取なしで漸く盃をする事になり、一同は奥に入る。大助は頼朝にも親にも見放され、龜井にも亦捨てられた身をかこち、母花卷の介錯で自刄して果てる。龜井・青柳はこれを知つて刺し違へようとするが、三郎・花卷に諭され、青柳は大助の亡骸と龜井とに兄弟分の盃をさせる。和泉三郎は、この度の和解がやがて破れる事を洞察し、且つ大助をその父の許に歸らしめたのは、三郎を味方に引入れようとする頼朝の下心である事をも見破つてゐたので、强ひて勘當を許さなかつたのだと泣いて我が子の屍の前に述懷する。〔四段〕(重忠陣所)重忠が諸士を激勵してゐる所へ、佐々木盛綱が密書を隱し持つた敵の間者を曳いて來る。重忠はそれが和泉三郎の反間苦肉の策である事を見破る。(和泉城中)兄の錦戸・伊達の返り忠で落城が迫つてゐる。京の君を護つて佐藤局・花卷・青柳等が最後の宴を張つてゐる所へ、和泉三郎の母正貞尼が駈けつける。姑(しうとめ)を助けようと花卷は開門を肯んじないが、佐藤局の計らひで尼は請じ入れられ、「軍物語」の節事。〔五段〕(戰場)片岡・龜井はそれ〴〵勇戰して討死。高館も落城するので、和泉三郎は從容として自刄する。

【脚色】片岡八郎が後藤基次、龜井六郎が木村重成、和泉三郎が眞田幸村であることは、「後藤味噌」「後藤が目貫」「長門櫛」「長門印籠」「眞田紐」などの言葉を執拗に繰り返して暗示してゐる外、所謂眞田の影武者や九度山閑居(二段)、重成の血判取り(三段)や、名香をたきしめて出陣した逸話(四・五段)を到る處に匂はせ、その他、片桐の苦忠、冬の陣休戰の條件、大阪城の濠埋め、道明寺の戰など、有名な史實を露骨に取入れた大膽極まる脚色である。兼房が且元、大助が眞田幸昌、義經が秀頼であるのは勿論、頼朝が家康である事をも「武隈の松平かに治りて」と明示してゐる。恐らく公儀の干渉を受けたであらうが、證すべきものはない。三段の高館が全曲の山であつて、主從・親子・夫婦の義理の外、他に衆道の義理を加へた所が珍らしい。全體としては、概念的・敍述的で情味に乏しい海音の弱點を著しく示して居り、佳作とは言ひ難い。【影響】大阪冬・夏の陣を「義經記」の世界に採つた最初の作と言はれ、「南鐵鐵後藤目貫」(別項)「義經新含狀」「義經腰越狀」等を貫く一群の作品を胚胎したものとしての史的重要性を有する。「近江源氏先陣館」の八つ目「盛綱陣屋」に於ける小三郎切腹の趣向は、本曲の三段に負ふ所が多い。

【參考】紀海音並木宗輔淨瑠璃集解題 黑木勘藏 ○近世邦樂年表 〔近藤〕

義經新含狀 よしつねしんふくみじやう 「南鐵鐵後藤目貫」を見よ。

義經千本櫻 よしつねせんぼんざくら 淨瑠璃 五段 時代物【作者】竹田出雲・三好松洛・並木千柳【名稱】角書に大物船矢倉吉野花矢倉とある。二段目の「碇知盛」の件と、四段目の「狐忠信」の件とを利かせたのである。【興行】延享四年十一月十六日初日、竹本座。【諸本】七行本。名作淨瑠璃集(舊帝國文庫)・海音・半二・出雲・宗輔傑作集(有朋堂文庫)・淨瑠璃名作集下卷(名著全集)・名作淨瑠璃集上卷(近代日本文學大系)等に收む。又歌舞伎臺帳としては、時代狂言傑作集第一卷・日本戲曲全集(義太夫狂言時代物集)等所收。【題材】義經傳說中、堀川夜討・大物浦・吉野落の三つの事件を骨子とし、それに三段目の「鮓屋」を點じて、知盛と維盛と敎經との平家の將を史實の裏を行つて生存させ、これを主要人物として、佐藤忠信・靜御前と共に活躍せしめてゐる。

【梗概】〔初段〕(大內)兄のために腰越から追歸された義經は、院に召されて八島合戰の物語をするが、兄弟を離間せんと企らむ左大將藤原朝方は、豫て義經が院に所望する初音の鼓を與へ、院宣と僞つて頼朝を討てと暗示する。(北嵯峨草庵)小松三位維盛の御臺若葉內

侍は若君六代御前と共に草庵に隱れて夫の安否を氣づかつてゐる所へ、朝方の臣猪熊大之進が討手に向ふが、折から菅笠賣にやつして訪ねて來た主馬小金吾は二人を荷底に隱して維盛のゐると言ふ高野に赴く。(堀川御所)頼朝の臣川越太郎が使者として來り、義經が差出した維盛・知盛・敎經の首級が贋首であつた中納言知盛で、女房は典侍の局、娘は安德帝であり、相模五郎は部下の船頭であつた。銀平は義經を亡す時節到來を喜び、亡靈の裝ひで沖に向ふ。やがて舟戰は平氏が敗戰し、知盛は深傷を負うて立ち歸る。總ての企みを見拔いてゐた義經は、帝を守護する事を誓ひ、典侍の局は自害し、知盛は碇を負つて入水する。

〔三段〕(吉野下市茶店)落人の吉兵衛と小に祝言をさせる事になつてゐるのであるが、偶々訪ねて來た內侍と彌助との話から、お里は一切を知つて恨み嘆く。梶原が來るとの報せに彌左衞門は維盛・若葉を落すと、權太はこれを捕へようと空桶を抱へて跡を追ふ。梶原からの强談に彌左衞門は隱し切れず維盛を討つたと稱して首を入れた桶を差出さうとするが、偶々訪ねて來た內侍と彌助との話から、お里は一切を知つて恨み嘆く。梶原が來るとの報せに彌左衞門は維盛・若葉を落すと、權太はこれを捕へようと空桶を抱へて跡を追ふ。梶原は深傷を負うて立ち歸る。總ての企みを見拔いてゐた義經は、帝を守護する事を誓ひ、典侍の局は自害し、知盛は碇を負つて入水する。

〔三段〕(吉野下市茶店)落人の吉兵衛と小

かれた義經の沒落を表面の題材とし、暗に大阪落城を描いた作である。

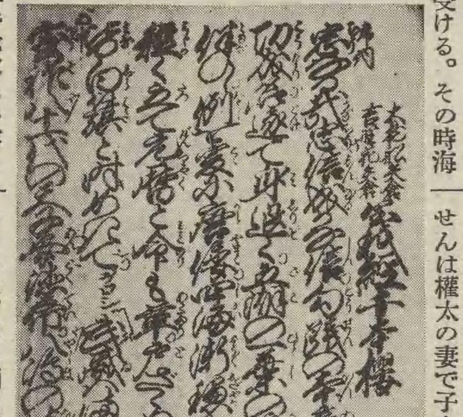
【梗概】〔一段〕(鎌倉殿中)義經謀反の風説が立つたので、奥州から秀衡の後家正貞尼、繼信の母佐藤の局、權の頭兼房が義經の使者として伺向、畠山重忠・文覺上人に會うてその虚説なる事を辯ずる。重忠は、高館の城を開くか、一外様大名となるか、京の君を人質とするかの三條件の一を選ばしめるので、兼房は獨斷を以て人質の件を承認する。正貞尼等はこれを難詰するが、重忠に迫ひ歸される。(和泉三郎館)兩女が歸國して次第を報ずると、和泉三郎の兄で、豫て兼房を憎める錦戸太郎・伊達次郎は、義經に讒してこれを殺さうと計る。片岡八郎・龜井六郎はこれと爭ふが、義經は肯

大助を伴うて歸城するが、和泉三郎は勘當を許さない。京の君の計らひで、義經は龜井と花卷の妹青柳とに祝言の盃をさせようとすると、大助は未だ念者の盃も濟まぬにと怨じ、青柳は又龜井の衆道沙汰に嫉妬する。龜井は頼朝の命に依つて大助と兄弟となつた仲なればとて青柳との祝言を拒むので義經は立腹するが、和泉三郎の取なしで漸く盃をする事になり、一同は奥に入る。大助は頼朝にも親にも見放され、龜井にも亦捨てられた身をかこち、母花卷の介錯で自刄して果てる。龜井・青柳はこれを知つて刺し違へようとするが、三郎・花卷に諭され、青柳は大助の亡骸と龜井とに兄弟分の盃をさせる。和泉三郎は、この度の和解がやがて破れる事を洞察し、且つ大助

田紐」などの言葉を執拗に繰り返して暗示してゐる外、所謂眞田の影武者や九度山閑居(二段)、重成の血判取り(三段)や、名香をたきしめて出陣した逸話(四・五段)を到る處に匂はせ、その他、片桐の苦忠、冬の陣休戰の條件、大阪城の濠埋め、道明寺の戰など、有名な史實を露骨に取入れた大膽極まる脚色である。兼房が且元、大助が眞田幸昌、義經が秀頼であるのは勿論、頼朝が家康である事をも「武隈の松平かに治りて」と明示してゐる。恐らく公儀の干渉を受けたであらうが、證すべきものはない。三段の高館が全曲の山であつて、主從・親子・夫婦の義理の外、他に衆道の義理を加へた所が珍らしい。全體としては、概念的・叙述的で情味に乏しい海音の弱點を著しく示して居

よしつね

侍は若君六代御前と共に草庵に隠れて夫の安否を氣づかつてゐる所へ、朝方の臣猪熊大之進が討手に向ふが、折から菅笠賣にやつして訪ねて來た主馬小金吾は二人を荷厩に隠して維盛のゐると言ふ高野に赴く。(堀川御所)頼朝の臣川越太郎が使者として來り、義經が差出した維盛・知盛・敦經の首級が贋首であつた點と、初音の鼓を賜つて頼朝を討たうとした點と、平時忠の娘卿の君を妾とせる點の三個條を詰問する。卿の君は川越太郎の實子で時忠の養女であつたが、義經の窮地を救ふために自刄して父太郎の介錯を受ける。その時海



義經千本櫻(正本)

中納言知盛で、女房は典侍の局、娘は安德帝であり、相模五郎は部下の船頭であつた。銀平は義經を亡す時節到來を喜び、亡靈の裝ひで沖に向ふ。やがて舟戰は平氏が敗戰し、知盛は深傷を負うて立ち歸る。總ての企みを見抜いてゐた義經は、帝を守護する事を誓ひ、典侍の局は自害し、知盛は碇を負つて入水する。〔三段〕(吉野下市茶店)落人の若葉内侍と小金吾は若君の慰みに、木の實を拾つてゐる所へ、無頼漢いがみの權太が現はれて故意に荷物を取違へて金を強請り取る。茶店の女房小せんは權太の妻で子まであるが、夫の不身持

に祝言をさせる事になつてゐるのであるが、偶々訪ねて來た内侍と彌助との話から、お里は一切を知つて恨み嘆く。梶原が來るとの報せに彌左衛門は維盛・若葉を落すと、權太はこれを捕へようと空桶を抱へて跡を追ふ。梶原からの強談に彌左衛門は隠し切れず維盛を討つたと稱して首を入れた桶を差出さうとすると、女房は先に夫に内證の三貫目をそれに隠してゐるので狼狽してこれを遮る。そこへ權太は内侍若君を生捕り、維盛の首を鮓桶に入れて現はれる。梶原は恩賞の質として頼朝の陣羽織を與へて去る。彌左衛門は憤つて權太を刺す。彼は既に悔悟して三貫目を路銀として維盛に與へようと追ひかけたが、首桶と取違へてゐた爲め已が女房と子供とに繩を掛け首と共に差出した。苦しい息で一文笛を吹くと眞の維盛・内侍・若君が立出ちでる。豫讓の故事に倣ひ、梶原が權太に與へた頼朝の陣羽織を刺させようとすると、中から袈裟衣と珠數とが現はれるので、維盛を助けようとの頼朝の下心が判り、欺き歸したと思つた梶原も總てを知つてゐたのであつた。彌左衛門は内侍・若君を護つて高尾の文覺の許へ、維盛は髻を斷つて高野へ赴くこととになる。〔四段〕(道行初音の旅)靜と忠信とは花の吉野に辿り着く。(藏王堂)鞍馬山の東光坊の弟子で、今は吉野一山の檢校職たる河連法眼は、山科の荒法橋や横川覺範その他と會して義經を隠まふべきか、鎌倉の命に從ひこれを討つべきかを評議する。法眼がただ一人義經隠まふべからずと主張して去つた跡で覺範は法眼の底意を暴露し、諸僧と共に夜討の軍議を廻らす。(河連館)靜の供をして來た忠信と郷國から馳せ參じた忠信との二人の忠信が現はれるので、

義經は靜に詮議を命じると、都から附き添つて來た忠信は、初音の鼓の皮となつた老狐の子であつたので、義經はこれに鼓を與へる。狐はその恩を謝し、今宵夜討の企てある事を報じ、荒法師どもを通力を以て誘ひ寄せて盡く捕へしめる。義經は横川覺範實は能登守教經と見破り、安德帝をこれに託し、再會を約して去らせる。〔五段〕藤原朝方が川越太郎に捕へられて來るので、覺範はこれを斬り、忠信は又覺範と力戰して兄繼信の仇を報じる。

【解説】本曲は前年延享三年の「菅原傳授手習鑑」及び翌年寛延元年の「假名手本忠臣藏」(各別項)と相並んで、竹本座極盛期の、從つて又操劇最盛期の作品を代表する傑作である。全篇の山は、二段目の中・切「渡海屋」「大物浦船戰」(碇知盛)と、三段目の切「鮓屋」と、四段目の中・切「河連館」(狐忠信)とであつて知盛・維盛・敦經をその各々の中心として史實の裏をねらつてをり、特に二段目では諸曲「船辨慶」を巧みに利用し、三段目ではいがみの權太なる人物を活躍せしめて身代りや贋首など、この時期の操劇獨特の裏に裏ある複雜な脚色を見せてをり、四段目では二段目以來の忠信の底を割つて見せ、始めて眞の忠信を出現せしめて狐忠信との對比の妙を示してゐる。享保以後寶曆以前の操劇の特質としての脚色主義が殆どその極大限の段階を示してゐる作である。なほ「淨瑠璃譜」は本曲の初演に關して次の如く述べてゐる。「此時吉田文三郎役、渡海屋銀平・鮓屋彌左衛門・佐藤忠信三役なり。源九郎狐の人形廣袖にて、是に源氏車の模様だんだらの丸紋、人形頭素襖鳴にて、此時はじめて耳の働く仕掛を思ひつきしなり。源九郎ゆゑ源氏車の模様を付けしにはあらず。此趣向最初

淨瑠璃集上卷(近代日本文學大系)等に收む。又歌舞伎臺帳としては、時代狂言傑作集第一卷・日本戲曲全集(義太夫狂言時代物集)等所收。【題材】義經傳説中、堀川夜討・大物浦・吉野落の三つの事件を骨子とし、それに三段目の「鮓屋」を點じて、知盛と維盛と敦經との平家の將を史實の裏を行つて生存させ、これを主要人物として、佐藤忠信・靜御前と共に活躍せしめてゐる。

【梗概】〔初段〕(大内)兄のために腰越から追歸された義經は、院に召されて八島合戰の物語をするが、兄弟を離間せんと企らむ左大將藤原朝方は、豫て義經が院に所望する初音の鼓を與へ、院宣と僞つて頼朝を討てと暗示する。(北嵯峨草庵)小松三位維盛の御臺若葉内

より狐と見せざる事故玉もつけられず。色々に工夫をなし、右狐場を勤むる政太夫の紋所源氏車ゆゑ、源氏のゆかりにて源氏車の模様つけし故、今も歌舞伎などには、長上下にて仕れど、どこぞのはずみでは此姿にならねば源九郎狐めかず、是も三代前吉田文三郎仕始めて何國でも此姿でなければ源九郎狐は出來ぬ〳〵」。なほ又源九郎狐並に彌助・彌左衞門の名については、黒木勘藏氏は近松の「天鼓」にその原據を求めてゐる（名著全集解說）。

【影響】本曲は直ちに歌舞伎にも移され（寛延元年正月・伊勢芝居、同年五月・江戸中村座、同年六月、江戸森田座、同年八月・大阪中座等）、今日もなほ、種々の洗練を經て、二段目の「鳥居前の忠信」「渡海屋」、三段目の「木の實」「鮓屋」、四段目の「道行」「河連館」は屢々上演される。「道行」は常磐津の「道行初音旅」、富本の「幾菊蝶初音道行」が、從來行はれたものの中の主なるものであるが、今日では後者を移調した同名の淸元が專ら用ひられ、稀に義太夫との掛合でも行はれる。

【參考】淨瑠璃名作集解題黒木勘藏（名著全集）○菅原及び千本櫻の作者問題（歌舞伎研究四）○渡海屋小宮豐隆（演劇評論）○義經千本櫻小山内薫（演劇新潮）○鮓屋に就いて・吉右衞門の權太三宅周太郎（演劇評話）○すしや讃美　三宅周太郎（文樂の研究）○劇壇祕史無線電話　田村成義○歌舞伎細見飯塚友一郎○千本櫻の濫觴關根只誠（歌舞伎新報二一七）○歌舞伎（舊刊）（九六・一〇四號）○演藝畫報（大正五ノ九・同九ノ一一・同一二ノ四・同一五ノ一〇等）○新演藝（大正五ノ九・同八ノ一一・同一三ノ六等）○瑠璃天狗（卷之二）　【近藤】

義經風流鑑　よしつねふうりうかがみ　浮世草子　横本五册　【作者】八文字自笑　【刊行】正德五年、八文字屋八左衞門板。【解說】八文字屋板出板の時代物としては、夙く正德二年の「賴朝三代鎌倉記」、同三年の「百姓盛衰記」（各別項）があるが、この「義經風流鑑」は同じく五年の制作であるから、これ等に次ぐ初期の時代物である。序中に「日記書傳を考、今も尤とうなづく斗をあつめ、新義經記といはんも新にありし事にあらず、心にまかせ筆の行まゝに、何となく詞をつゞけ侍るにぞ、風流鑑と唱ンも更におかし」と云つてゐるに依つて、その作意は明瞭である。內容を見るに、判官義經の一代記と謂ふべきで、義經が賴朝の擧兵を聞き、奥州發足より始まつて木曾義仲の討伐、梶原景時との逆艫の爭論、一の谷・屋島・壇の浦の戰に於て平家滅亡のことを敍し、次いで義經上洛中、景時の讒言に依つて堀川の夜討に遭ひ、辨慶以下の郎黨を供にして奥州へ落ちるまでを敍してある。その間義仲の妾巴及びその妹山吹を和田・佐々木に與へることや、義經難波の廓に遊興するなどの插話が幾つか織りこまれてゐるのは、八文字屋作家の常套手段である。この作品には享保二十年出板の「風流西海硯」（別項）の內容と一致する部分が多少あるのは注意すべきである。

【參考】八文字屋物研究水谷不倒（日本文學講座）　【吉田】

義俊　よしとし　○新撰列傳體小說史　同上

善成　よしなり　學者　【姓名】四辻氏。本姓は源。【別名】松嚴寺左大臣、又淸閑寺とも號した。「河海抄」には「源氏物語」中の惟充・良淸の人と爲りを慕ひ、その文字を取つて惟良と云ふ作名を用ひてゐる。【法號】常勝【生歿】嘉曆元年に生れ、應永九年（一四〇二）九月三日薨ず。享年七十七。【家系】順德帝より出で、その子善統親王初めて四辻宮と號され、その嫡子尊雅王を經て善成に至つた。【學統】宮內卿丹波忠守に「源氏物語」を學び、その學統を受け繼いだ。【閱歷】康永二年三月六日叙爵し、文和五年正月六日從三位に叙せられ、同日源氏の姓を賜はつた。至德四年十二月八日には從一位に叙せられ、應永二年七月二十日には左大臣に任ぜられたが、これを辭して同年八月二十九日に出家した。善成のすぐれたる歌人であつたことは、「風雅集」に一首、「新千載集」に二首、「新拾遺集」に一首、「新後拾遺集」に四首、「新續古今集」に七首が載つてゐることに依つても想像されるが、善成の名を不朽ならしめたものは、「河海抄」二十卷の著述である。「河海抄」以外に、善成の「源氏物語」の講義を、平井相助と稱する連歌師が筆記しておき、應永二十六年三月下旬に大內持世に進めた「千鳥抄」があつて、それによると、至德三年七月二十六日より嘉慶二年十一月三十日までの間、「源氏物語」の講筵を開いたことが知られる。【著書】河海抄（別項）。その他講義の聞書千鳥抄（別名、「源氏談義」「相助聞書」「源註」）がある。　【池田】

吉野吉水院樂書　よしのきつすゐゐんがくしよ　音樂書　一卷　【編者】未詳　【名稱】吉野の吉水院に傳へられた樂書の意、略して「吉野樂書」「吉水院樂書」などともいふ。【成立】治承三年頃。「還城樂」の相承に、「治承三年二月日注之」と記してゐる（「催馬樂師傳相承」に附載せる還城樂相承）。この書の中に記せることは、大抵治承よりも以前のことと認めて差支ないから、この時に成つたものと見てよい。但し終りの方に至つて、建久六年乃至安貞二年に至る「御遊次第」や「常樂會日記」が揭げてあるのは、先人の著書に後人が書き加へて行つたものであらう。又「幹按」として明德五年常樂會記を引いた極めて後世の書入もある。【諸本】延寶九年二月に寫した寫本がある。又寬永二年に太秦員倫の寫した本の轉寫が、續群書類從管絃部に入つて流布されてゐる。【解說】音樂の雜說を書き記したもので、舞樂に關する逸事が最も多い。歌謠の研究上には、神樂・催馬樂・風俗・朗詠類より足柄等の雜藝に至るまで種々の說を揭げてゐる所が甚だ參考になる。例へば風俗や催馬樂の相承血脈を載せてゐるのは、他の血脈類（「文机談」にあり、また催馬樂相承次第」や「神樂血脈」の類が存する）と相參考するに足り、「朗詠九十首抄」が知足院忠實の撰と云ふ說は「文机談」に記されてゐるところと同じく、別に忠實の弟子妙音院師長の撰なる六句の朗詠百餘首のあることを示して居り、次に「功德林ヲナス」の朗詠を初め五首ばかりは北院御室（後白河法皇の皇子で、音樂郢曲に堪能なる北院守覺法親王）の仰せで、木工入道（木工權頭藤原孝道）が博士を付けたと云ふ說を記してゐるのは、「朗詠要抄」に「功德林ヲナス」の朗詠に註して「此句ハ依二御室仰一孝道朝臣始付二博士一ト云々」と云へると符合し、且つ同抄に「自首ニノゾムデ」の朗詠に同じく註して「此句者依二御室仰一木工入道付二博士一」とあるのも、本書の所謂五首の中の一つと見える。又本書に「花下ニ歸ラン事ヲ忘ルルハ、靑鸞眉カイテ、此二首ハ天王寺松四郎慥ニ妙音院ニ習ト參ラセタルヲ傳畢云々」とあるのは、「朗詠要抄」に、此の二首の朗詠を記した後に、「已上二句自ニ妙音院殿一天王寺松四郎慥給所也、自二四郎一昇蓮慱之」と註してゐるのと全く符合し、この

樂書の記す所の古く且つ信憑すべき事が察せられる。この外、弓立や宮人や舞樂の庶人三台の詠を揭げてゐる事などが、歌謠研究上甚だ參考となる。　【藤田】

吉野作造　よしのさくざう　評論家　【生歿】明治十一年一月二十九日宮城縣志田郡古川町に生れ、昭和八年三月十八日神奈川縣逗子町湘南サナトリアムで歿す。享年五十六。【閱歷】

の満元が專ら用ひられ、稀に義太夫との掛合でも行はれる。

【參考】淨瑠璃名作集解題黑木勘藏（名著全集）○菅原及び千本櫻の作者問民夫（歌舞伎研究四）○渡海屋小宮豐隆（演劇評論）○義經千本櫻小山内薫（演劇新潮）○鮓屋に就いて・吉右衛門の權太三宅周太郎（演劇評話）○すしや讃美 三宅周太郎（文樂の研究）○劇壇祕史無線電話 田村成義○歌舞伎細見飯塚友一郎○千本櫻の濫觴關根只誠（歌舞伎新報一二七）○歌舞伎（舊刊）（九六・一〇四號）○演藝畫報（大正五ノ九・同九ノ一一・同一二ノ四・同一五ノ一〇等）○新演藝（大正五ノ九・同八ノ一一・同一三ノ六等）○瑠璃天狗（巻之二）

〔近藤〕

義經風流鑑（よしつねふうりうかがみ）　浮世草子　横

びその妹山吹を和田・佐々木に與へることや、義經難波の廓に遊興するなどの插話が幾つか織りこまれてゐるのは、八文字屋作家の常套手段である。この作品には享保二十年出板の「風流西海硯」（別項）の内容と一致する部分が多少あるのは注意すべきである。

【參考】八文字屋物研究水谷不倒（日本文學講座）○新撰列傳體小說史 同上

〔吉田〕

義俊（よしとし）「南嶺」を見よ。

善成（よしなり）　學者　【姓名】四辻氏。本姓は源。【別名】松巖寺左大臣、又清閑寺とも號した。「河海抄」には「源氏物語」中の惟充・良清の人と爲りを慕ひ、その文字を取つて惟良と云ふ作名を用ひてゐる。【法號】常勝【生歿】嘉暦元年に生れ、應永九年（一三〇二）九月三日

樂書の記す所の古く且つ信憑すべき事が察せられる。この外、弓立や宮人や舞樂の庶人三台の詠を掲げてゐる事などが、歌謡研究上甚だ參考となる。

〔藤田〕

吉野作造

吉野作造（よしのさくざう）　評論家　【生歿】明治十一年一月二十九日宮城縣志田郡古川町に生れ、昭和八年三月十八日神奈川縣逗子町湘南サナトリアムで歿す。享年五十六。【閲歴】明治三十七年東京帝大法科大學を卒業。小學校より大學まで首席で通した。同三十九年清國直隷總督の招聘に應じて天津に赴き、北洋法政專門學堂教習となつた。四十一年歸朝。四十三年政治學研究のため、獨・英・米に留學、大正二年歸朝、翌年母校法科大學の教授拜命、同四年法學博士の學位を受けた。留學中に得た蘊蓄を傾けて大に筆陣を張り、大正四年から八年に亙る間、デモクラシーの提唱によつて日本の思想界を風靡した。その抱懷する民本主義を危險思想と見る浪人會から立會演説を申込まれ、大正七年十一月神田の南明クラブでそれが實行された。この會が機緣となつて民本主義を基調とする黎明會が生れ、福田徳三博士と共にその中心となり、思想的先驅者として新思想のために健闘した。相次いで、帝大内に彼を中心とする新人會が一部帝大生及び出身者の一團によつて昭和七年十二月に結成され、この會から幾多の社會運動家・新思想家を各方面に送り出した。大正十三年軍部攻撃の論文が禍して教授の職を辭し、同年二月、東京朝日新聞社に入つて社説を擔任し、同じく五月退社、再び帝大法學部講師として晩年まで學生の指導に努力する一方、同年十一月尾佐竹猛博士等と明治文化研究會を興し、明治期の文獻を復活せしめた。【著作】主なものを擧げる。○ヘーゲル法律哲學の基礎○歐洲動亂史論○日支交涉論○普通選擧論○現代政治學講話○主張と閑談（第一輯「新井白石とヨワンシロテ」、第二輯「露國歸還の漂流民幸太郎」、第三輯「斯く信じ斯く語る」、第四輯「公人の常識」、第五輯「問題と解決」）○現代政局の研究等。

【業績】政治史・政治學研究家としては、斯界の鴻學者として知られてゐるが、特に大正八九年頃から新思想デモクラシーの旗幟を掲げて當時の評論壇を席捲したことは、日本の政治運動史上に特筆さるべきことである。その後も「中央公論」誌上に於て妥當な時評を試みたが、社會思想の重心が左傾した時代との關係もあつて彼の論鋒は昔時ほどの生彩を缺いてゐた。その他、彼はまた支那問題についても造詣甚だ深く、更にデモクラシー全盛時代が過ぎ去ると、彼の興味はより多く懐古的方面に向ひ、明治文化の研究家として同志との協力になる雜誌「明治文化研究」及び「明治文化全集」（別項）二十四巻を殘したことは大きな業績である。

〔千葉・柳田（泉）〕

吉野靜（よしのしづか）「靜物の諧曲」を見よ。

吉野拾遺（よしのふるひ）　説話集　【作者】傳藤原吉房【成立】正平十三年【諸本】本書の傳本には群書類從本等の二巻本と、貞享四年刊行の三巻本とが普通傳はつてゐる。三巻本の方は二巻本よりも説話數が多い。この外、一巻本と四巻本とがある由、尾崎雅嘉の「群書一覽」に見えてゐるけれども、その所傳は不明。

國文大觀・國文叢書・百萬塔・日本文學大系等所收。【内容】延元元年、後醍醐天皇が吉野に御遷幸遊ばされてから、後村上天皇の正平十三年までの二十三年間餘、南朝を中心として現はれた出來事、説話・逸事を見聞したまゝに集錄したもので、編年體や列傳體の史書とは考へられない。その内容の大體を二巻本に依つて具體的に云へば、後醍醐帝の吉野に於て遊ばされた御製を初めとして、右少辨俊基の娘辨内侍の秀句、或は高階師直が内侍に戀慕して策動し、正行のために見出されて内侍は救はれ、正行の室とならうとしたが、正行は「かりの契をいかで結ばん」の有名な歌を以てこれを辭した説話を以て繼ぎ、新待賢門院の伊賀の局が化物に逢ひ、或は師直の吉野襲撃に怪力を示して難を避ける時代相を寫す説話がある。北畠顯家の戰死、中納言藤房の遁世談、藏王權現の靈驗と正行の出陣等、南北朝時代を如實に示すものである。殊に注意を引くものは、楠正儀を主君と父との敵としてねらふくま王が、正儀の恩義にほだされ、討ち得ずして出家遁世する正寬法師や、行繼の石堂丸形の悲話の如きがある。この外、怪鳥・怪木・化物等が南朝に關聯して記され、或は狂歌趣味の落書をのせてゐる。歴史書として見るよりも南朝關係の逸話を載せたものである。

【參考】參考吉野拾遺小山田孚理○吉野拾遺詳解中村秋香○國文評釋本居豐穎（國學院雜誌一ノ七）○吉野拾遺詳解 三栖幸一

〔高島〕

吉野忠信（よしのただのぶ）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】近松門左衞門【興行】明和板「外題年鑑」に、寶永四年正月二十日よりとしてあるが、竹本義太夫の正本があるから、その初演は義太夫が受領して筑後掾と稱した元祿十四年五月以前と見るべきである。【諸本】九行四十四丁本、奥付缺（竹本義太夫正本）。十・十一行三十丁本、奥付缺（竹本義太夫正本）。十行三十六丁本、本屋仁兵衞板。十行三十丁本、山本九兵衞板。七行二十六丁本、奥付缺。近松世話淨瑠璃（帝國文庫）・諸種の近松全集所收。

【題材】「義經記」に據つて潤色したもの。

【梗概】〔第一〕義經が九條の遊女若紫の色に溺れ、放埒の行跡頼朝の耳に入り、三保谷四郎を討手として向けられた由聞えたので、隨從の面々が諫めるが聽き入れない。忠信は苦計を廻らし、若紫を揚詰にして義經の座敷に出さないやうにする。討手に上つた三保谷も亦九條に通ひ、全盛の若紫を招かうとしてゆくりなく三人顔を合せる。三保谷は義經と戀の鞘當をして力比べを申し出るが、片岡のために散々の目に會はされて逃げ去る。義經は忠信が若紫を揚詰にしたことを知つて大の不興で、若紫を見限り、忠信には勘當を申し渡して歸る。その途中、三保谷が數十騎を引具し義經を待ち伏して討取らうとするが、却つて辨慶・片岡のために首を捲切られる。〔第二〕頼朝は重ねて北條時政・梶原景早を討手として都に上らしめる。堀河の館ではこの度こそ一同討死と覺悟を極めてゐる所へ、若紫の許より一つの箱が屆けられる。開いて見ると圖らずも中から時政が立ち現はれ、義經に向つて謀反の實否を糺した上、西國落を勸める。かくて義經は一同と都を開く事となつたが、辨慶一人途中から引き返し、禁中を守護せる梶原景早の番所に到り、その股肱の臣小早川彌藤六を殺す。〔第三〕忠信の忍び妻花紫は久しく夫が訪れぬので氣遣つてゐたところ、忠信が若紫北院御室（後白河法皇の皇子で、音樂部曲に堪能なる北院守覺法親王）の仰せで、木工入道（木工權頭藤原孝道）が博士を付けたと云ふ説を記してゐるのは、「朗詠要抄」に「功德林ヲナス」の朗詠に註して「此句ハ依ニ御室仰一孝道朝臣始付ニ博士一ト云々」と云へると符合し、且つ同抄に「自首ニノゾムデ」の朗詠に同じく註して「此句者依ニ御室仰一木工入道付ニ博士一」とあるのも、本書の所謂五首の中の一つと見える。又本書に「花下ニ歸ラン事ヲ忘ルルハ、青黛眉カイテ、此二首ハ天王寺松四郎慥ニ妙音院ニ習ヒ參ラセタルヲ傳畢云々」とあるのは、「朗詠要抄」に、此の二首の朗詠を記した後に、「已上二句自ニ妙音院殿一天王寺松四郎慥給所也、自ニ四郎一昇蓮傳レ之」と註してゐるのと全く符合し、この時に成つたものと見てよい。但し終りの方に至つて、建久六年乃至安貞二年に至る「御

の事で主の勘氣を蒙り行方が知れぬと聞き、さては若紫の許に忍びゐるに違ひないと尋ね行く途中で忠信に行き逢ふ。そこへ今は貞順尼と姿をかへ四國行脚を志す若紫が來合せるが、折からの闇夜に忠信はそれとも知らず、妻の甘心を貫ふために遊女の惡態を散々に言ひちらし、貞順尼に油を絞られる可笑味がある。折から景阜の一行が大和路へ落ち行く義經を追つて馳せ來るのを、忠信が立ち出で景阜の首を打落し、單身義經の跡を追ふ。續いて貞順尼・花紫も亦その後を慕ひ「若紫・花紫道行」となる。〔第四〕義經は吉野で辨慶の諫に從ひ初音の鼓を形見として靜を都に送り歸す。靜は附添の雜色に棄てられ、路に迷ひ辿り着いた山中の御堂で貞順尼・花紫と廻り逢ひ、互に憂ひを語り合ふ。そこへ山の大衆達が入り來り、三人を怪しむが、貞順尼の機轉で三人を九條の遊女なりと稱し、「女郎名寄」を讀み上げ、疑ひを釋いて危い所を助かる。一方、義經の一行は中院谷まで落ちのびたが、それからは急流のため立ち煩うてゐる所に、向う岸に忠信が立ち現はれ、藤葛を鏃に結び此方に向つて射放てば、一同これに力を得、藤葛を手繰つて無事向う岸に渡る。〔第五〕忠信は義經の甲冑を着して一人踏み止まり、折から押寄せた大衆達に九郎判官と名乘つて斬つて入り、散々に目覺ましき働きをして、遂に大將横川の覺範法師の首を落す。

【解說】遊里味豐富の標本作であるが、筋は平板に過ぎて傑作とは言へない。四段目の「女郎名寄」は、言ふまでもなく謠曲「安宅」の摸倣であつて、「世繼曾我」〔別項〕の「傾城請狀」以來近松の慣用である。正德五年正月二十日より豐竹座興行の「吉野忠信錦着長」は本作の外題替である。

【參考】大近松全集第六卷解說木谷蓬吟〇近松全集第八卷解題藤井乙男　〔高野(正)〕

吉野天人（よしのてんにん）「天人物の謠曲」を見よ。

吉野都女楠（よしのみやこをんなくすのき）淨瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衞門　【興行】明和板「外題年鑑」に正德元年九月十日からとしてあるが、寶曆板「外題年鑑」の叙には「寶永七年庚寅の年、竹本筑後掾の語られし吉野都女楠」とある。後者に信を置くべきであらう。【諸本】七行九十丁本、山本九兵衞板。十・十一行

六段本神通女楠（東大圖書館藏）

三十三丁本、奥付缺。六・七行九十丁本、正本屋仁兵衞板。十行三十五丁本、山本九兵衞板。八行六十七丁本、奥付缺。續近松淨瑠璃集（續帝國文庫）・近松淨瑠璃集中（有朋堂文庫）・近松門左衞門集上（近代日本文學大系）・近松名作集下（日本名著全集）、諸種の近松全集所收。

【題材】「太平記」に基いて脚色したもの。

【梗概】〔第一〕（大序、禁中）建武三年五月十五日足利高氏が九州から攻め上つて來た旨新田義貞から注進があつたので、後醍醐天皇は正成にその誅伐を命ずる。正成は敵を京都に誘導して討ち滅すべき謀を奏上するが、坊門の宰相清忠のために斥けられる。（中、櫻井の宿）正成は出陣の途上、義貞の妻勾當の內侍が夫の留守中に宰相清忠のために、豫て內侍に戀慕せる敵將大森彦七の許に無理無體に送り届けられるのを救ふ。かくて正成は一子正行に別れを告げ、將來の教訓を授け湊川に向ふ。（切、湊川）正成は奮戰の後、一族郎黨等と潔く自刃する。そこへ大森彦七が大勢を引具し來り、正成等の首を掻き落し、拔かぬ太刀の功名と喜ぶ。〔第二〕（口、西の宮義貞陣）義貞は青麥を盜んだ廉により引立てられて來た足利家の浪人小山田太郎高家の妻に召替への鎧並に太刀を贈り、夫高家をして明日の合戰に功名を立て主家への復歸を叶はしめよと言つて放免する。（切、求塚）義貞の情義に感激せる高家は自ら義貞と名乘つて大森彦七の手勢の手に討死し、義貞の危急を救ふ。〔第三〕（口、東寺）高氏は彦七が獲た義貞の首を疑ひ、その實否を糺すことを高家の父前司高春に任せる。高春は老の眼にもその首を十八年以前勤當した我が子高家とはつと胸にこたへたが、さあらぬ體にて、兎に角獄門にかけて諸人の噂をうかゞふべしとて、その首を持ち去る。（切、一條大路）高家の妻は足利方を欺くため、勾當の內侍と稱して獄門に到り、狂亂の態にて嘆き悲しむが、そこへ眞の勾當の內侍が物狂ひの姿で立ち現はれた爲め、忽ち前司にその正體を看破される。前司は高家の妻から我が子の討死の顚末を聞き、主君高氏に申譯なしとて自ら首を刎ねる。〔第四〕（口、坊門の宰相下屋敷）宰相清忠は高氏と內通し、天皇を己が下屋敷に押籠め奉る。そこへ高家の妻が歌比丘尼となつて姿を現はし、同じく酒賣と身を窶して附近を徘徊する名和長年と力を協せ、番の者共を蕩して醉ひ潰し、その隙に天皇を奪ひ去る。（中、天皇徒歩路の御幸）天皇は賤の神詣と姿を窶し給ひ、長年一人の御供で大和路さして落ちられる。（切、天神森）天皇は途中で圖らずも正行母子に迎へられる。折柄追手の軍勢一千餘騎が背後に迫るが、正行は奇略を用ひ、長年と共にこれを退け、天皇を吉野に入れ奉る。〔第五〕（大切、三輪の里）勾當の內侍が三種の神寶を奉じ、高家の妻がその供をして吉野に向ふ途中、坊門の宰相がこれを奪はうとし、彦七も亦狙ひ寄るが、神寶の靈驗によつて宰相は和田新發意のために討たれ、彦七は寶劍に首を刺貫かれる。そこへ義貞と高氏とが來合せるが、兩寶童子神勅を傳へ、こゝに兩將和睦し、南北の兩朝合一する。

【解說】抒情味及び滑稽味に乏しく、隨つて全體が窮屈で單調なものになつてゐる。材料まけのした作品といふべく、筆にも力が足らない全くの愚作である。寶曆板「外題年鑑」の叙によると本作の時より初めて大字七行の正本を板行したとある。歌舞伎では正德三年三月三日より京の龜屋座で「女楠」を出したが、本作との詳しい關係は不明。明治二十五年三月歌舞伎座興行の福地櫻痴居士作「求女塚身替新田」は本作の改作である。淨瑠璃の改作物には、明和二年二月九日より竹本座上場の「蘭奢待新田系圖」〔別項〕があり、又正德五年正月江戸から板行された六段本「神通女楠」は本作

を讀物風に改めたものである。

【參考】大近松全集第四卷解說木谷蓬吟〇近松全集第九卷解題藤井乙男　〇近松名作集下解題黑木勘藏　〇京阪歌舞伎年代記伊原敏郎（「歌舞伎」連載）〇續々歌舞伎年代記　〔高野(正)〕

能宣（よしのぶ）歌人（三十六歌仙の一）【姓】大中臣【生歿】延喜二十一年に生れ、正曆二

その歌には「後撰集」の一般的傾向である情趣主義ではなく、却つて表現を重んずるところがある。併し「古今集」に見えるやうな動きには乏しく、形式を大切に守つてゐるといふ點が見える。

【參考】歌仙傳〇袋草紙〇大日本史二百十九〇國文學全史平安朝篇藤岡作太郎　〔西下〕

良基（よしもと）歌學者・連歌作者【姓】二條。

【閱歷】遠江國橫須賀の人。同國の夏目甕麻呂の門に學んだ。甕麻呂は本居宣長門下の巨擘で、古學に精しかつた人である。弘化四年、四十歲の時に、「長歌私編」を作つた。これは「萬葉集」の長歌の全部を四つの類型に分類したものである。　〔窪田〕

由平（よしひら）俳人【姓名】前川氏。本名不

遺二十六、勅撰集に入つた歌、詞花八、新古今十一、その他拾遺五十九、後拾遺に漏れたもの多い。能宣の歌で本集に漏れたのは一首。

二十、合計凡そ百二十四首。後撰集には一首もない。

【批評】彼は天才でなく努力した歌人である。

○勅撰集所収。能宣集系統で、歌は八十首前後。

【著作】能宣朝臣集　群書一五〇・三十六歌仙のひとり。

【経歴】清原元輔・紀時文・源順・坂上望城らと共に後撰集の撰者となつた。所謂梨壺の五人の一人。

【参考】大中臣能宣　伊勢大輔集　後拾遺集

【系図】大中臣頼基―能宣―清原元輔―清少納言

【親族】父頼基は神祇大副で、祭主となつた。兄輔親は伊勢大輔の父。

【交友】源順・紀時文・清原元輔・坂上望城・平兼盛・壬生忠見・中務・中臣祐茂・藤原仲文・源重之・藤原元真・藤原元輔・藤原元真・藤原元輔・藤原元輔・藤原元輔

する外、「九條家車圖」（丹鶴叢書所收）「西園寺家車圖」（同上）、「立車記」（續群書類從九三四）「車服制度總體手記」（新井白石全集六）等があるが、に就いて記したものには、松平定信の「輿車圖考及び附圖」（別項）、近くは關根正直の「宮殿調度圖解」附錄の車輿圖解がある。又大塚嘉樹の著に「輦車圖解」（輪池叢書一六）がある。牛車に駕する牛に就いて記したものには、「駿牛繪詞」（群書類從四九三）、「國牛十圖」（同上）、黒澤定幸の「驪黃物色圖說」等がある。

輿車圖考（よしやずかう）　有職　卷子本　十六卷

【著者】松平定信　【畫工】渡邊廣輝（故實叢書本は石本秋園の摸寫）　【成立・由來】文化元年七月の自序・自跋に據ると、享和三年夏の半頃から着手し、翌文化元年七月下旬に成つたもので、初め著者が「平家物語」の書圖を企てて車制の知りがたいのに動かされて、稻村行敎に車の故實を問ひ、渡邊廣輝に書かせ、縉紳家橋本經亮・屋代弘賢等の敎示を仰いだものである。【諸本】原本は、各項目のもとに圖書を挿入したもの、松平子爵家藏。故實叢書本は圖のみを集めて、附圖として別本二帖としてあるが、增訂本は附圖を卷頭に、圖考をその後に載せ洋裝一卷とした。【內容】輿及び車に關して、舊記・古書を擧げて論證したもので、上卷には輿車起原・鳳輦・葱花輦・腰輿・小輿等輿に關する二十項、下卷は唐車・輦車等の車に關したもの、屋形・上葺等車の製作に關したもの、乘車法・途中の禮・神輿・佛輿・餝車等特殊の輿車に關したものなど八十五項を載せてある。附圖は甲乙二帖に分れてゐて、甲帖は鳳輦・葱花輦以下十一葉、乙帖は雨眉車・檳榔庇車以下十二葉を收め、別に叢書本には參考として、帝室博物館陳列の寬政度御再興鳳輦、東大寺八幡宮所藏鳳輦、敎王護國寺所藏傳弘仁帝輦、南禪寺所藏傳龜山上皇御腰輿、妙心寺所藏傳後奈良帝輿、住吉神社所藏車の六圖を追加してある。【價値】輿車の制に於ては、他にこの書に優るものはない。　〔石村〕

餘情（よじやう）「歌論」を見よ。

吉原細見（よしはらさいけん）　案內書　【解說】所謂吉原物の中の一類で、遊女の數、揚屋の軒數、遊女の位付、揚代などを記した吉原の案內書である。勿論細見と同性質のものは吉原だけのものではなく、京阪をはじめ各地の遊里にも存したが、吉原の如く百五十餘年も繼續したものは外に類を見ないので、細見といへば吉原細見を指すやうになつた。體裁は最初は細見圖と稱して一枚刷のものであつたが、披見に不便なので、橫本の冊子に改められ、後半截の竪本となつた。併し何れの體裁のものも、卷頭に必ず五丁町の地圖を出すのが細見圖以來の傳統で、細見の最も著しい特徵の一つとなつた。評判記などでこれを摸倣したものも少くない。表題は細見圖時代にはあるのもないのもあつたが、橫本になつてからは、每板名前を巻へるのが例になつた（秋の蝶・みつの始・嗚呼お江戶等）。ところが、竪本になつて間もなく、天明頃から替らなくなり、單に新版吉原細見と稱するものが出た。又享保以後、地本問屋の蔦重が板元となるに及んで、四方山人・朱樂菅江・山東京傳・朋誠堂喜三二等の文人が序文を執筆したので、これが評判になつた。元來細見は、賣い意味では評判記（別項）の中に包括し得るもので、細見の役者評判記（別項）に與へた影響は甚だ大きい。また文學方面では黃表紙・洒落本（各別項）と密接な關係があり、殊に洒落本中には、その性質上甚だ似通つたものがある。

【沿革】最初は遊女の紋所を集めた紋盡し、或は遊女の名寄せであつたらしい。寬文・天和頃の諸書にこれが散見する（好色一代男・淋敷座之慰等）。柳亭種彥も「高尾年代記」に、「寬永十九年開板の吾妻物語、元吉原の遊女名寄、後代の細見の類なり」と書いてゐる。これに續いて出たのが新吉原細見圖で、これは「東海道中細見圖」「長崎道中細見圖」に倣つたものと思ふ。何時頃から細見圖が紋づくしに代つたか不明だが、この細見圖の方は享保の末まで行はれ、（元文元年）版の細見圖をも見たことがあるので、一枚圖と册子本とが暫くの間は並行してゐたのであらう。降つて安永頃には橫本が竪本に變つた。そしてこの竪本は引續いて行はれ、明治時代の初めに及んでゐる。〔三田村〕

吉原十二時（よしはらじふにとき）「北里十二時」（ほくりじふにとき）を見よ。

吉原雀（よしはらすずめ）　所作事　【名稱】元來葭原雀の異名であるが、また吉原の地名に因んで、廓情調を出してゐるので、この名がある。【諸本】原本は引繼ぎ、日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集（日本名著全集）所收。〔題材〕奥州攻の世界の顔見世狂言の一齣として、再演の天明元年二月同座で所演された時は、この一場を曾我の世界に改作され、現行では全く鳥賣の踊だけに直された。【解說】八幡太郎義家（九代市村羽左衛門）は、宗任女房善知鳥實は出羽國平賀の鷹の精靈（二代吾妻藤蔵）の女鳥賣と共に鳥賣小笹の左次兵衛とやつし、放生會の由來から遊女と客に准へた廓の諸譯（ことわけ）の所作があり、左次兵衛が危難に遭ふのを女鳥賣が救ひ、次に鳥賣の守袋を怪しみ、詮議せんと拍子舞になる。曲は明和年間を代表する名作の一で、當時の廓の情調を髣髴せしめ、「文の便り」の踊地の如き、艷な中に一味の哀感もあり、至妙ともいふべきである。〔備考〕現行の內容は吉原仲の町に夫婦の鳥賣が放生會の由來を語つてゐる所へ、鳥刺し男が出て搦み、後に鳥賣は雌雄の雀の精と姿を顯はし、鳥刺男が刺さうとして立ち廻りになる。長唄の「吉原雀」を應用した新所作事と稱してもよい位である。又單に鳥賣二人だけの踊で終る場合もあり、これに對問などの搦む事もある。

【雀花手向橋】（かたみのはなかしのたむけのはし）　變化物　〔初演〕文政七年二月十三日初日、江戶市村座「假名曾我當逢萊」第二番目大切〔作詞〕本屋宗七〔曲節〕清元節〔太夫〕清元延壽太夫〔作曲〕清元齋兵衛〔振附〕松本五郎市〔傳來〕曲は傳存。振は廢滅。〔諸本〕日本歌謠集成卷十・歌謠音曲集（日本名著全集）所收。〔題材〕長唄の「吉原雀」を借りて、當時の好尙に向くやうに改作したもの。〔解說〕吉原の大門口に放鳥賣おしづ（岩井紫若）と同七兵衛（七代市川團十郎）とが、放生會の故事から遊女と客の仕方話の所作があ

り、後、引抜いて七兵衛は地廻り團十郎の吉、おしづは局女郎下駄長屋のお政と變り、同じ廓でも下級な河岸見世の情調を見せた振になる。前半は長唄の借物であるが、後半の新內模樣が當時の嗜好や風俗を覗はせる所に本作の興味がある。〔備考〕四代市村竹之丞百年忌追善の所作事として上演されたもので、市五郷の關係を脫化したのである。各項目を狂歌の題詠に擬してあるのは、從來の洒落本になかつた所である。

【梗概】客遊系は金に詰つてせかれ、みすぼらしい姿で格子先に立つ。馴染の遊女春風ひそかに逢ふ。遊系は勘當の身になつてゐるから田舍に行かねばならぬ、一二年逢はれぬかも知れぬと告げる。春風も名

するものを實現せしめたものである。〔山崎〕

吉原俄（よしはらにはか）　演劇　【名稱】江戶の新吉原遊廓に發達した俄狂言（別項）をいふ。【沿革】廓內には早くより新町（後の京町二丁目）に九郎助稻荷、江戶町に榎木稻荷、伏見町に明石稻荷、京町一丁目に愛敬稻荷、五十間に吉德稻荷の五ケ所の稻荷明神を勸請したが、享保十九年に九郎助稻荷が正一位を受領された

第一編・近代日本文學大系・洒落本大系等に所收。【題材】吉原楊枝の精が、遊女買ひの極意を語ると云ふ筋は、本書にも說いてある如く、楊枝の古きを折らずそのまゝ捨つる時は、必ず怪ありと云ふ民間信仰に據つたのである。江戶から現今に傳承してゐる童話に、古楊枝の怪が人妻ひとり留守番をしてゐる夜、「おかみさんおひとりか、お獨りなあら踊りませう

【読本】原本は各項目のもとに図書を挿入したもの、松平子爵家蔵。故實叢書本は圖のみを集めて、附圖として別本二帖としてあるが、増訂本は附圖を巻頭に、圖考をその後に載せ洋裝一巻とした。【内容】輿及び車に關して、舊記・古畫を擧げて論證したもので、上巻には輿車起原・鳳輦・葱花輦・腰輿・小輿等輿に關する二十項、下巻は唐車・輦車等の車に關したもの、屋形・上葺等車の製作に關したもの、乘車法・途中の禮・神輿・佛輿・儛車等特殊の輿車に關したものなど八十五項を載せてある。附圖は甲乙二帖に分れてゐて、甲帖は鳳輦・葱花輦以下十一葉、乙帖は雨眉車・檳榔庇車以下十二葉を收め、別に叢書本には參考として、帝室博物館陳列の寛政度御再興鳳輦、東大寺八幡

教草吉原雀（長唄正本）

り、後、引抜いて七兵衛は地廻り團十郎の吉、おしづは局女郎下駄長屋のお政と變り、同じ廓でも下級な河岸見世の情調を見せた振になる。前半は長唄の借物であるが、後半の新内模様が當時の嗜好や風俗を覗はせる所に本作の興味がある。【備考】四代市村竹之丞百年忌追善の所作事として上演されたもので、市村家の藝である大津繪の鬼の念佛と座頭及び山王猿の神靈の踊とが、本作に組み合されてゐるが、「吉原雀」とは何等の關係もない。また本曲以前に別曲「其川竹廓雀」（文化十三年十一月中村座）があつた。【秋葉】

【參考】近世邦樂年表（長唄・清元）○江戸長唄（俗曲評釋第一編）○清元研究（註釋篇）○忍頂寺務

吉原談語 よしはらだんご　洒落本　一册　【作者】十返舍一九【畫工】自畫【名稱】内題には「青樓吉原團子」とあり、又一本には「滑稽吉原談語」とある。吉原團子のもぢり。【刊行】享和二年【題材】「大和物語」の生田川説話、一女を二男が爭ふ趣向を採つたと發端に斷つてあるが、實は田螺金魚作「契情買虎之卷」（安永七年）（別項）の松田屋瀬川對生駒幸次郎、通人五郷の關係を脫化したのである。各項目を狂歌の題詠に擬してあるのは、從來の洒落本になかつた所である。

【梗概】客遊糸は金に詰つてせかれ、みすぼらしい姿で格子先に立つ。馴染の遊女春風ひそかに逢ふ。遊糸は勘當の身になつてゐるから田舍に行かねばならぬ、一二年逢はれぬかも知れぬと告げる。春風も名殘を惜しみ明晩是非來てくれと約束しつつも別れた。それから時は空しく經過した。最初のうちは、田舍の遊糸の許から消息があつたが、いつとはなく絶え、春風は日々案じ暮してゐる。すると大勢で上つた客の一人七三郎と云ふのが、珍らしくも遊糸の手紙を託されて來た。七三郎は春風の妹女郎、振袖新造の花山の客である。春風は深く感謝したが、彼が遊糸に似てゐるのでいつか戀をする。七三郎が來る毎に嬉しがるので朋輩になぶられ、遂には深く契りを結ぶに至つた。客長兵衛と云ふ老人が來て、春風をしんみり戒しめた。春風も涙を流して七とも切れると口には云つたが、胸の中では今更切れられぬと迷ふ。

【解説】本書一本に滑稽と冠したのは少しく變であるが、これは洒落の義らしく、別に「滑稽遊冶郎」（享和二年）の作がある。作者の滑稽本に於ける名聲が揚つてからの再摺本ではない。【影響】本書の後編を「吉原談語後編夜團行燈」（一名吉機吉原談語二編）と云ひ文化年間に刊行された。作者は桃猿舍犬雉、本書の卷末廣告に存するものを實現せしめたものである。【山崎】

吉原俄 よしはらにはか　演劇　【名稱】江戸の新吉原遊廓に發達した俄狂言（別項）をいふ。【沿革】廓内には早くより新町（後の京町二丁目）に九郎助稻荷、江戸町に榎木稻荷、伏見町に明石稻荷、京町一丁目に愛敬稻荷、五十間に吉德稻荷の五ケ所の稻荷明神を勸請したが、享保十九年に九郎助稻荷が正一位を受領されたのを機會に、盛んな稻荷祭を催し、廓内の男女の練物・假裝の趣向を競つたのが、吉原俄の濫觴と傳へられてゐるが、これは住吉祭や祇園會のそれと撰を一にするものと想像される。この時は一時限りの催しであつたが、やがて吉例の年中行事として、夜櫻・玉菊燈籠と並んで俄が新吉原三大景物の一として確立したのは、明和四年の秋からである。その後安永元年の火災に廓が類燒して一時中絶したが、安永四年から、また盛大に再興された。その當時の模様は「明月餘情」に明細な繪解がある。やがてそれは每年八月朔日から一ケ月間の廓の人寄せの年中行事となり、一方江戸の大祭たる山王祭や明神祭の催物にも影響を及ぼして、江戸に於ける祭禮俄の發展を促し、一方素人狂言の流行を刺戟した。そして江戸の俄は素人狂言として終始し、明治末期まで吉原の藝妓幇間等の手中にあつてその名殘を止めてゐた。【飯塚】

吉原楊枝 よしはらやうじ　洒落本　一册　【作者】山東京傳【畫工】政演（京傳）【名稱】吉原楊枝は齒磨楊枝の一種。楊柳木の一端を房の如くした所謂房楊枝の特に房の長いものを稱する。その吉原楊枝の精が、吉原傾城買ひの極意を語ると云ふので附けた書名である。【刊行】天明八年【諸本】江戸時代文藝資料

吉原十二時 よしはらじふにとき　「北里十二時」を見よ。

吉原雀 よしはらすずめ　所作事　【名稱】元來葭切の異名であるが、また吉原の地名に因んで廓を流す素見ぞめきの客をいひ、轉じて鳥賣と廓情調を出してゐるので、この名がある。【種目】長唄と清元とで數種あるが、代表作で且つ現行のものは左の二種がある。

【教草吉原雀】拍子舞物　【初演】明和五年一月一日初日、江戸市村座「男山弓勢競」第二番目【作詞】櫻田治助【曲節】長唄、【唄】富士田吉治【作曲】富士田吉治・杵屋作十郎、但し「浮寢の鳥」の條は原武太夫の手附と傳へる。【振附】二代西川扇藏【傳來】曲は傳存。振は廢滅。但し現行の振は明治以降新に附けられたもので二三種ある。【諸本】日本歌謠集

つとなつた。評判記などでこれを摸倣したものも少くない。表題は細見圖時代にはあるのもないのもあつたが、横本になつてからは、每板名前を替へるのが例になつた（秋の蝶・みつの始・嗚呼お江戸等）。ところが、竪本になつて問もなく、天明頃から替らなくなり、單に新版吉原細見と稱するものが出た。又享保以後、地本問屋の蔦重が板元となるに及んで、四方山人・朱樂菅江・山東京傳・朋誠堂喜三二等の文人が序文を執筆したので、これが評判になつた。元來細見は、廣い意味では評判記（別項）の中に包括し得るもので、細見の役者評判記（別項）に與へた影響は甚だ大きい。また文學方面では黄表紙・洒落本（各別項）と密接な關係があり、殊に洒落本中には、その性質上甚だ

切の異名であるが、また吉原の地名に因んで廓を流す素見ぞめきの客をいひ、轉じて鳥賣と廓情調を出してゐるので、この名がある。【種目】長唄と清元とで數種あるが、代表作で且つ現行のものは左の二種がある。

【教草吉原雀】拍子舞物　【初演】明和五年一月一日初日、江戸市村座「男山弓勢競」第二番目【作詞】櫻田治助【曲節】長唄、【唄】富士田吉治【作曲】富士田吉治・杵屋作十郎、但し「浮寢の鳥」の條は原武太夫の手附と傳へる。【振附】二代西川扇藏【傳來】曲は傳存。振は廢滅。但し現行の振は明治以降新に附けられたもので二三種ある。【諸本】日本歌謠集

として立ち廻りになる。長唄の「吉原雀」を應用した新所作事と稱してもよい位である。又單に鳥賣二人だけの踊で終る場合もあり、これに幇間などの搦む事もある。

【笹花手向橋】變化物　【初演】文政七年二月十三日初日、江戸市村座「假名會我當逢葵」第二番目大切【作詞】本屋宗七【曲節】清元節々【太夫】清元延壽太夫【作曲】清元齋兵衛【振附】松本五郎市【傳來】曲は傳存。振は廢滅。【諸本】日本歌謠集成卷十・歌謠音曲集（日本名著全集）所收。【題材】長唄の「吉原雀」を借りて、當時の好尚に向くやうに改作したもの。【解説】吉原の大門口に放鳥賣おしづ（岩井紫若）と同七兵衛（七代市川團十郎）とが、放生會の故事から遊女と客の仕方話の所作があ

れて行く者、女郎に惚れられに行く者これである。又客に缺點知りと譯知りと二種ある。遊女の地位心中の見せ方には約十二種ある。遊女の地位によつて客の種類も異なる事等、皆具體的の例をあげて説明する。磁石は餘りの卓論に感じ入り、先生の身の上を尋ねた。先生、「實は吉原楊枝の精である」と名乘るかと見れば本體を現はした。磁石は茫然としてゐたが、不圖心づけば、庵室も客も女も皆消え失せ、身は依然として柳橋の別莊にゐた。

【構想】洒落本の一種に遊里の寫實ではなく、遊客の心得、案内を説いたものがあるが、これはその一種である。遊蕩を體驗した作者の事とて、戀愛の實際問題を可なり鋭く道破してゐる。ただ當時の通人の一人として遊里を以て飽くまで風情を樂しむ場所と見ての淺い諦めの見えるのは、時代の都會人としては已むを得ぬ態度である。篇中の穿ちは同じ作者の「令子部屋」（別項）の續編と見ることが出來る。「品川楊枝」（寛政十一年）は、この書の書名を摸しただけのものであるが、内容は品川遊里の寫實であつて、單に書名のみの關係に過ぎない。

【山崎】

吉原流行小歌惣まくり

【名稱】江戸吉原の流行歌を集めたる意。寛政版は「新吉原繁栄草紙」（又「壽繁榮草紙」とも記す）と書名を附したと云ふ。【刊行】江戸堺丁中島屋伊左衞門板。刊年不詳。萬治三年刊、寛文二年再板と云ふは延寶頃の刊行であらう。【諸本】寛政五年に改刻、これには別に序を加へた。文政二年には大石千引の序、琢玉齋主人の跋を加へて覆刻した。この本は文字の誤があり、挿繪も甚だ古風を失してゐる。原本には師宣風の古雅な挿繪見開き五圖を入れてゐる。珍書保存會複製本、稀書複製會複製本があり、いづれも寛政版に據つてゐる。俚謡（近世文藝叢書）・日本歌謡集成巻六・小歌吾聞久爲志（近代歌謡集）・上田敏選註小唄・近代歌謡集（有朋堂文庫）（終りの三書には註あり）等所收。何れも文政二年版に據つてゐる。延寶の原本と思はれるものは甚だ稀本であるが、光瀬文庫・甘露堂文庫等に藏せられる。【内容】内容は次の如くである。

看端歌づくし（十四首）、近江替りぶし（一首）、れんぼの替り（二首）、一節切（三首）、夢の通ひ路平九くづし（一首）、細りづくし（三首）、れんぼの砧（長篇一首）、砧の巻歌淨瑠璃（長篇一首）、替り伊勢節（一首）、秘曲（八首）、鈴蟲（一首）、葛の葉（一首）、人目の關（一首）、坊の津（二首）、片撥替り節（十三首）、雲井の弄齋（十三首）、吉原替り名寄忠度（長篇一首）、替り美人揃（長篇一首）、かぶろおもはく踊（六首）、替りぬめり歌（十四首）。

初めに、「大門口衣紋坂五拾間道の事」「土堤の道哲の事」「所々より吉原迄駄賃附の事」を附す、これのない本もある。「所々より吉原迄駄賃附の事」の前に「萬治三年」の年號があり（文政版では「萬治二年」に誤る）、これによつて、萬治三年刊と云ふ説も生じたのである。諸本とも中間に錯簡、又は補入と思はれる所があり、雲井弄齋の十三首が中斷せられてゐる。丁付が追丁の形式になつてゐるところを見ると、もと丁數の少いものから、次第に增加せられたものであらう。これは歌本に常に見る現象である。挿繪五圖のうち四圖は、上欄に歌詞が記されてゐるが、一圖は全面繪である。【價値】江戸に於ける歌本刊行の嚆矢とも云ふべきもので、歌謡研究上重要なるのみならず、風俗研究上また貴重なる資料である。よつて古來名高く、大にもてはやされた。

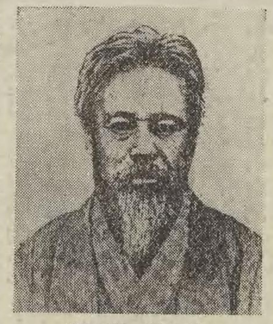
【參考】吉原書籍目錄　柳亭種彦　○稀書解説第二編○吉原流行小唄惣まくり私考○同拾遺　鳴弦齋（東京新誌一ノ一・三）○甘露堂文庫稀覯本攷覽　尾崎久彌　【藤田】

化粧六歌仙

「六歌仙」を見よ。

依田學海

演劇評論家【名】百川。字は朝宗、通稱七郎。【生歿】天保四年十一月二十四日江戸に生れ、明治四十二年十一月十七日（或は十二月二十七日）歿す。享年七十七。【墓所】淺草金藏寺【閲歷】下總佐倉藩士依田貞剛の二男として生れた。幼少時代藩の學校に漢學を修め、長じて（二十歳前後―安政元年頃）藤森弘庵の塾に學ぶ。數年後、歸藩して中小姓に召されたが、ついで儒官となり、文久三年、代官役を歷任し、慶應三年には江戸邸留守役の要職に補せられた。明治元年京都に上り、諸藩の間に周旋し、老臣等と共に屢々太政官に出頭して、勤王・開港論の立場より國事を陳説した。明治新政となるや、佐倉藩の權大參事となり、廢藩後の明治九年には修史局の編輯官として出仕し、十一年頃には木戸參議（孝允）の下に隷屬して地方官會議の書記官となつた。十四年文部權少書記官となり、少書記官に昇進したが、十八年非職となり、正六位に叙せられた。その後は、著述したり漫遊したりして晩年をおくつた。



依田學海

【業績】趣味として演劇を好み、地方官會議書記官當時、伊藤博文等政府要路の大官に、團十郎・菊五郎その他の俳優を紹介會見せしめ、引いては當時劇界改革を企圖してゐた守田勘彌や、寫實主義的な歷史劇に精進してゐた市川團十郎の懇請に依り、彼は直接稽古場へ臨んで、俳優を指導し監督した。爾來劇界との關係深く、十九年には脚本「吉野拾遺名歌譬」を執筆、この脚本は演劇改良會で改良意見の具體的標本として本讀みされた。（これは川尻寶岑と合作せるものと稱されてゐるが、一説には寶岑一個人の作品を添削したものであるとも言ふ）。演劇改良會及びその延長である演藝矯風會（明治二十一年七月）及び日本演藝協會（二十二年九月）にも關係し、演劇改革のために種々畫策したが、改良論が餘りにも急激なる爲め次第に疎外さるゝに至つた。その後、川上音二郎・伊井蓉峰等の新派劇團にも關係し、自作「政黨美談淑女操」を上演したこともある。要するに、その意見はやゝ見當外れの嫌ひがあつたが、演劇改良の必要なることを識者に認めしめた功績はこれを推稱すべきである。

【參考】梨園の落葉　坪内逍遙　○逍遙劇談　同上○柿の蔕同上○明治文學史　岩城準太郎○明治劇壇五十年史　關根默庵　【尾澤】

よだれかけ

假名草子　六巻四册【作者】楳條軒（傳未詳）【名稱】古人の誕を嘗めるの意味で、江流の序文にある。【成立】柳亭種彦の「好色本目錄」（新群書類從第七書目所收）にもあるが、二巻までが慶安元年に成り、三・四巻が同二年、五・六巻が承應二年との三度に成つて、その度毎に年號及び楳條軒の記名があり、これを寛文三年に、洛下隱士江流が一部に編成して書肆に與へ、寛文五年に刊行した。【諸本】初版は寛文五年二月、京五條寺町上ル中野太郎左衞門刊行繪入本四册。元祿九年「たから箱」と改題し、盧舟作として本屋利兵衞、菊屋七郎兵衞合版で刊行。江戸時代文藝資料第四所收。【解説】本書は六巻のうち、一・二と三・四とが合册となつて全四册。一巻の首に洛下隱士江流の序があり、三巻の初めに楳條軒の序、五巻に同人の和漢二樣の序がある。江流の序に由ると、友人の反故を貫つて後、生捕られて賴朝の御前に引かれ、訊問を受けた後、死罪に決つて引出される（「曾我物語」に殆ど同じい）。（中）その後賴朝は、この度供せし諸國の侍達を華やかに裝束させ、射止めた鳥獸を次第に名告らせて見物し、新開荒四郎を奉行として帳に記させる（こゝは景事で、十行本には、「狩場の高名」と題してある）。（切）その際、新

る。「品川楊枝」(寛政十一年)は、この書の書名を摸しただけのものであるが、内容は品川遊里の寫實であつて、單に書名のみの關係に過ぎない。

吉原流行小歌惣まくり

よしはらはやりこうたそうまくり

【山崎】

歌謠書　一册【名稱】江戸吉原の流行歌を集めたる意。寛政版は「新吉原繁栄草紙」(又「壽繁榮草紙」とも記す)と書名を附したと云ふ。【刊行】江戸堺丁中島屋伊左衞門板。刊年不詳。萬治三年刊、寛文二年再板と云ふは延寶頃の刊行であらう。【諸本】寛政五年に改刻、これには別に序を加へた。文政二年には大石千引の序、琢玉齋主人の跋を加へて覆刻した。この本は文字の誤があり、插繪も甚だ古風を失してゐる。原本には師宣風の古雅

道哲の事」「所々より吉原迄駄賃附の事」を附す、これのない本もある。「所々より吉原迄駄賃附の事」の前に「萬治三年」の年號があり(文政版では「萬治二年」に誤る)、これによつて、萬治三年刊と云ふ説も生じたのである。諸本とも中間に錯簡、又は補入と思はれる所があり、雲井弄齋の十三首が中斷せられてゐる。丁付が追丁の形式になつてゐるところを見ると、もと丁數の少いものから、次第に增加せられたものであらう。これは歌本に常に見る現象である。插繪五圖のうち四圖は、上欄に歌詞が記されてゐるが、一圖は全面繪である。【價値】江戸に於ける歌本刊行の嚆矢とも云ふべきもので、歌謠研究上重要なるのみならず、風俗研究上また貴重なる資料である。よつて

で儒官となり、文久三年、代官役を歷任し、慶應三年には江戸邸留守役の要職に補せられた。明治元年京都に上り、諸藩の間に周旋し、老臣等と共に屢々太政官に出頭して、勤王・開港論の立場より國事を陳說した。明治新政となるや、佐倉藩の權大參事となり、廢藩後の明治九年には修史局の編輯官として出仕し、十一年頃には木戸參議(孝允)の下に隷屬して地方官會議の書記官となつた。十四年文部權少書記官となり、少書記官に昇進したが、十八年非職となり、正六位に叙せられた。その後は、著述したり漫遊したりして晚年をおくつた。

【業績】趣味として演劇を好み、地方官會議書

たが、つい

【作者】近松門左衞門(「鸚鵡が袖」の序)【興行】天和三年九月、宇治加賀掾座。又貞享二年竹本座創立の際、義太夫によつて語られた(外題年鑑・操年代記)。【諸本】八行五十六丁本、天和三年九月山本九兵衞板(宇治加賀掾正本)。十行三十丁本、正本屋六兵衞板。十行三十二丁本、

大屋かたつぎ曾我

上ル中野太郎左衞門刊行繪入本四册。元祿九年「たから箱」と改題し、盧舟作として本屋利兵衞、菊屋七郎兵衞合版で刊行。江戸時代文藝資料第四所收。【解說】本書は六卷のうち、一・二と三・四とが合册となつて全四册。一卷の首に洛下隱士江流の序があり、三卷の初めに楳條軒の序、五卷に同人の和漢二樣の序がある。江流の序に由ると、友人の反故を貰つたうちから、この草稿が出たやうに記してゐるが多分假託であらう。楳條軒も江流も月日干支等に異名の難しい字を使ふ癖のある所を見ると、作も序もすべて同じ人と思はれる。兎に角作者は、和漢學・佛典にも、可なり造詣の深い人である。右の如く度々書いたものであるから別に主題はなく、謂はゆる隨筆的のもので、第一册(一・二の卷)には、はじめに手工坊卽ち傀儡師、人形遣の起原、和漢の故事、來歷を述べ、次に茶に關する事、淨瑠璃の由來、碁のはじまり等を記し、第二册(三・四の卷)は、酒に關する記事で全部を占め、酒造の起原、酒と名付けた理由、酒の異名、もろこしの學者みな酒が好きであつた事、佛も酒はゆるした事、酒の利害得失、その他いろ〳〵酒に關する話題を以て充たし、第三・四册には、主道(衆道)の事、卽ち男色關係の記述で、天神七代より主道のあつた事、主道の五常、天竺の話、漢朝寶珠兒の始、異朝若衆の名寄、若衆の金襴銀衣、同じく白粉紅彩の始、若衆の心得、惡しき念者の戒、若衆歌舞妓、若衆の異名等說述頗る精細にして、引證該博、著者の學力を示し、興味ある說話に富んでゐる。中にも人形や淨瑠璃、男色に關する事實は、風俗研究の好資料である。

【水谷】

世繼曾我

よつぎそが

淨瑠璃　五段　時代物

て後、生捕られて賴朝の御前に引かれ、訊問を受けた後、死罪に決つて引出される(「曾我物語」に殆ど同じい)。(中)その後賴朝は、この度供せし諸國の侍達を華やかに裝束させ、射止めた鳥獸を次第に名告らせて見物し、新開荒四郎を奉行として帳に記させる(こゝは景事で、十行本には、「狩場の高名」と題してある)。(切)その際、新開が時宗を生捕つた御所五郎丸事元服して荒井ノ藤太を殊功と記したので、曾我の緣者なる朝比奈ノ三郎は時宗を鳥獸扱ひにするかと怒つて、曾我の敵は荒井・新開だと宣言する。〔二段〕(序)曾我の郎黨鬼王・團三郎の兄弟は、敵討の供を許されず、形見の品を携へ、駒の口を取つて曾我の里へ歸る途中、朝比奈の使が走り來つて書狀を渡す。曾我兄弟の相果てし顚末や、その敵は荒井・新開と書いてあつたので、兄弟は各々敵討を己に任せよと爭つて讓らず、遂に喧嘩別れとなる。(中)化粧坂の少將は、折から訪ね來つた大磯の虎と共に、深い契を交した五郎・十郎からの音信のない恨やら、勤の身の憂さ辛さなどを語り、且つ慰め合ふ(こゝは節事で、十行本には、「けはひざか」と題してある)。(切)そこへ突然荒井と新開がやつて來る。彼等は朝比奈の言葉に怯えた結果、先づ虎・少將を口說いて、曾我の所緣の

山本九兵衞板。繪入十七行十六丁半本。諸種の近松全集。武藏屋本・近松名作集(日本名著全集)所收。【題材】「曾我物語」(別項)から暗示を得て脚色せるもの。場面や文章がその儘用ひられてゐる所がある。

【梗概】〔初段〕(大序)五郎時宗は、敵を討つ

者を尋ね出さうといふのである。併し虎・少將は、全く相手にしないので、荒井等は怒つて兩人を引据ゑる。そこへ折よく鬼王が來合せ、この體を見て二人を打伏せるので、彼等は這々の體で逃げ去る。鬼王は虎・少將に曾我兄弟が討死の次第を告げ、且つ自分はこれより敵の荒井・新開を討取りに行く故、形見の品々及び駒を曾我へ屆けてくれと賴む。これを聞いて虎・少將は、今のがその二人よと告げるので、鬼王は躍り上つて駈け出す。〔三段〕(序)「虎少將道行」、虎御前と少將は兄弟の形見の駒の口を取つて曾我の里へと急ぐ。(中)虎・少將は取次の二の宮の姉に己が名を告げ、且つ兄弟が討死の次第を語り、母君に會ひ度しと請ふ。折柄、母は重き病に臥して居つたので、姉は兄弟の死を告げるに忍びない。そこで一策を案じ、虎・少將に兄弟の形見の烏帽子直垂を着せて病床に伴ひ、兄弟が敵を討つて歸つて來たと告げる。母は喜んで敵討の次第を語り聞かせよと望む。景事「虎少將十番斬」虎・少將は母の所望に任せ、夜討の有樣を舞ひながら語る(十番斬は「曾我物語」に殆ど同じい)。(切)母は虎・少將の物語により、始めて兄弟の死を知つて悲しむが、虎の腹に祐若といふ十郎の忘れ形見のある事を聞き、急ぎ召寄せ掻き抱いて喜ぶ。〔四段〕(序)鬼王は朝比奈から新開・荒井の兩人が、鶴が岡で笠懸を射るといふ事を聞き、急ぎ裸馬に跨つて馳せつけて見ると、既に團三郎も馬に乘つて來てゐる。そこで先陣爭ひとなり、機に團三郎は馬から落ちて息が絶える。これを見て鬼王は馬より飛び下り、色々と看護するので、我にかへつた團三郎は始めて兄の心情を知り、兄弟は和解する。(切)新開・荒井は虎の腹に十郎の子が

良の必要なることを識者に認めしめた功績はこれを推稱すべきである。

【參考】梨園の落葉　坪内逍遙　○逍遙劇談　同上○柿の蔕　同上○明治文學史　岩城準太郎○明治劇壇五十年史　關根黙庵

【尾澤】

よだれかけ

假名草子　六卷四册【作者】楳條軒(傳未詳)【名稱】古人の誕を嘗めるの意味で、江流の序文にある。【成立】柳亭種彦の「好色本目錄」(新群書類從第七書目所收)にもあるが、二卷までが慶安元年に成り、三・四卷が同二年、五・六卷が承應二年との三度に成つて、その度毎に年號及び楳條軒の記名があり、これを寛文三年に、洛下隱士江流が一部に編成して書肆に與へ、寛文五年に刊行した。【諸本】初版は寛文五年二月、京五條寺町

あるといふ事を聞き、虎・少將の庵を訪れ、上意と僞つて祐若を召捕らうとする。虎・少將は愕いて様々宥めるので、新開等は虎・少將の色香に迷つてその儘そこに寛ぐ。しかし彼等が鬼王等の來るのを虞れて落ちつかない様子を見た少將等は、彼等を置してやると欺いて唐櫃の中に入れる。そこへ訪ねて來た朝比奈は大石を櫃の上に置く。荒井は始めて瞞された事を知つて口惜しがり、大力にまかせて内から箱を押破つた爲め、大石に碎かれてその儘息絶える。〔五段目〕(序)朝比奈は祐若・虎・少將・鬼王兄弟等と共に賴朝の御前に至り、荒井・新開等が上意と僞りし次第を申上げて、かの唐櫃と死骸を引出せば、賴朝は新開等が罪を憎み、且つ朝比奈等の振舞に感じ、祐若に曾我の本領宇佐美・久須美・河津の庄を賜ふ。(切)景事「風流の舞」、虎・少將は賴朝の御臺の所望により、御所の前に町づくりをしつらへ、數多の遊君を集めて廓の風俗を舞ふ。

【構想】曾我兄弟の復讐を題材としながら、巧みに廓情調を取り入れて抒情味を豊かならしめ、且つ景事・節事の舞踊的要素や門説經・小唄の節を綴り込んで作全體を變化に富ましめてゐる。文章も婉麗である。【影響】土佐少掾橘正勝の段物集「色竹蘭曲後撰集」に本作二段目の「虎御前まつよひのうらみ」。三段目の「虎少將の道行」、並に「虎少將しかた十ばんぎり」が大體その儘とられてゐる。元祿十年都萬太夫座盆狂言の近松作「大名曾我」、寶永三年五月江戸市村座上演の「大屋形世繼曾我」は共に改作。明治四十四年十月帝國劇場上演の「世繼曾我」は原作に據つたものである。【史的地位】本作は當代の遊里味を加へた最初の淨瑠璃として注意すべきである。また「外題年鑑」の宇治加賀掾の條に、「此淨るりの時朝比奈の人形に足を付初しより諸流共に立物人形に足を付たり」とある。(高野(正))

【參考】近松名作集上解題 黒木勘藏(日本名著全集)○近松全集第二卷解題 藤井乙男○大近松全集第六卷解説 木谷蓬吟 ○近松著作年代考 高橋宏(國文學踏査第一輯)○宇治加賀掾高橋宏(演劇史研究第一輯)○近松曾我物考 高野正巳(國語と國文學一〇八〇色竹蘭曲後撰集(日本歌謠集成卷十一所收)○演藝書報(五ノ一一)

四谷怪談 よつやくわいだん 「東海道四谷怪談」を見よ。

淀川 よどがは 俳諧集 一册【著者】松永貞德【名義】自跋に「山崎のそばをとをりて、行末は海にいづれば、此本は淀川と名付侍。一笑」とあるが如く、山崎宗鑑の「犬筑波」(別項)の末書なることを利かしたものである。【刊行】寛永二十年【諸本】芭蕉以前俳諧集(俳諧文庫)・貞門俳諧集(俳書大系)所收。【解説】本書は單行本として出版されたのではなく、貞德の「新增犬筑波」(別項)の上卷が「油糟」(別項)下卷が本書である。「犬筑波」の二句附のものに、貞德が三句目を附けて三句の渉りの行き様を示し、傍ら自己の附意を解し、貞德一流の俳諧の主義及び式目の方から、「犬筑波」に於ける附句の無誹言・用付・同意、一句に理なし、一句に正體なし等の點を指摘したものである。「油糟」は「犬筑波」の前句に貞德が附句を試みたものとして、本書は「犬筑波」の附句の評論と三句目の附け方として、これ等二書によつて貞德の俳諧に對する見解がほぼ窺はれる。(新增犬筑波參照)【萩原】

淀鯉出世瀧徳 よどこひしゆつせのたきのぼり 淨瑠璃 二段 世話物【作者】近松門左衞門【名稱】淀川の鯉の瀧上りに因んで淀屋の前途を祝したのであらう。【興行】竹本座。明和板「外題年鑑」に、元祿十三年四月八日が初日となつてゐるが、下之卷の勝二郎の詞に、「此なつこゝ(奈良)のしばゐへ竹本の弟子がくだつて重いづつ(寶永四年末初演)をかたつた」とあり、又「坂田藤十郎が夕ぎりをま一ど見たひ」とあるが、前者は明和板「外題年鑑」の寶永五年の條に「當夏奈良伊勢へ行」とあるのに符合し、後者は寶永五年十月に坂田藤十郎(寶永六年十一月一日歿)が一世一代として演じた夕霧の狂言を當込んだ句と見られる事等から考へて、寶永五年冬の興行と推定される。【諸本】八行四十丁本、山本九兵衞板。諸種の近松淨瑠璃所收。【題材】大阪北濱の富豪淀屋辰五郎が驕奢を極め、手代が金策のために謀判した罪に坐して寶永二年五月闕所を命ぜられた事件を仕組んだもので、實說は「元正間記」や「攝陽奇觀」に詳しい。この事件が世上の噂に上るや既に寶永二年正月二の替りに、京の都萬太夫座で「けいせい金淀鯉」、同龜屋座で「けいせい蓮の糸」、その他各座で淀屋の狂言が興行され、また同年刊行の浮世草子「棠大門屋敷」(別項)や「長者機嬢袋」に取入れられた。辰五郎は寶永六年に赦免願のために江戸に下つたが、本作はその噂が立つや、豫め淀屋の前途を祝した際物と考へられる。

【梗概】〔上之卷〕(新町橋橋詰)城州八幡の富豪江戸屋勝二郎は大阪新町茨木屋の吾妻に溺れて贅の限りを盡し、遂にこれを身請する事となる。舊手代の新七夫婦が廓から戻る勝二郎の駕籠を待ちうけて苦諫するが、勝二郎は却つて彼等を罵つた上、土足にかける。(京街道)吾妻は揚屋井筒屋の亭主を初め朋輩の太夫天神や遣手等に送られて華々しく八幡に向ふ途中、勝二郎の草履取佐五介が走つて來て惡手代の惣兵衞が主人の遊蕩に耽るに乘じ、私腹を肥さうとして某公卿の袖判を贋判した事が露顯し、勝二郎はその責を負はされ、地所家財一切を沒收された上追放にせられた事を告げる。吾妻は井筒屋が請合つて來たのであつたが、井筒屋は吾妻が勝二郎を思ふ眞情に動かされて茨木屋の方を請け合ふ。そこへ勝二郎が數多の役人に追拂はれて來るが、吾妻は勝二郎に伴はれ、一同に暇乞をして奈良街道を下る。こゝが道行の「勝二郎初もめん」〔下之卷〕(木辻吉田屋)吾妻は井筒屋への義理を果すため奈良木辻の山城屋へ中年の四年を二百兩で身を沈めて全盛を極めてゐたが、三年目に吉田屋を定宿とする龍田の藤といふ男に身請をされる事になる。勝二郎と別れなければならなくなつた吾妻は、思案に窮した結果、身請の前夜に醉ひ倒れてゐる藤を刺し殺して了ふ。物音に家中の騒ぎとなり、やがて勝二郎も入り來り、それと知つて同罪にしてくれと嘆き悲しむ。折から知らせによつて藤の兄が馳せつけるが、見ればそれは、思ひもよらぬ舊手代の新七である。彼等兄弟は密かに圖つて勝二郎のために吾妻を身請したのであつた。かくて皆々相擁して淚に暮れてゐる所へ突然八幡の神主より早飛脚があり、勝二郎の赦免を知らせるので一同悦んで躍り上る。

【解說】格別の趣向もなく、平凡な作である。殊に下之卷は不自然である。恐らく當時の觀客は有名な淀屋事件だといふ點にのみ興味が繫がれたのであらう。寶曆九年五月十四日より豊竹座興行の「難波丸金鶏」は本作の飜案である。(棠大門屋敷・風流曲三昧線・日本新永代藏等參照)

【參考】近松世話淨瑠璃詳解 高野辰之○近松傑作全集 卷一 解題 水谷不倒○近松名作集上解題 黒木勘藏○近松全集第八卷解題 藤井乙男○大近松全集第九卷解説 木谷蓬吟 ○芝居ばなし第二編三田村鳶魚○京阪歌舞伎年代記 伊原敏郎(歌舞伎連載)【高野(正)】

淀屋形金鶏新話 よどやかたきんけいしんわ 讀本 十卷十册【作者】岳亭丘山【畫工】未詳。【名稱】淀屋辰五郎の金鶏の故事に據つたこと に身を任せて、巧みに金鶏が佐源太の手にあることを瀧五郎に告げ、瀧五郎は縣令に訴へて山案を攻め、賊を縛めて金鶏を取返した。かくて瀧五郎はその功によつて家を再興し、吾妻は小笹が身の汚れを恥ぢて投身した貞節に感じ、側女となして二男を產み、兄には井戸屋を、弟には吾妻屋を繼がした。【解說】前後二編各五卷五册、序に「井戸屋何がしが家なる黄金の鶏の故事をひろひて一部 て早く流布した事實を證據立てるものであらう。玄惠の作と云ふのはともかくも、古風な立衆物である。【龜田】

米澤彦八 よねざはひこはち 「彦八」を見よ。

米山鼎峨 よねやまていが 「鼎峨」を見よ。

世の是沙汰 よのこれざた 浮世草子 五册【作者】跋文の終に西樂書とあるから、西樂が作者であらう。傳未詳。【刊行】寶永三年三月、京書林板。【諸本】近世文藝叢書第四所收

天帝が彼を伴うて海邊に行き、今の洒落は皆行き過ぎで、草雙紙なども餘り洒落ると本意を失ふと示され、彌勒は天帝の依頼で、曝された人間の彩色を仕直し、衣裳を着せ變へて、洒落のない世とする。京傳が黄表紙に於ける過去時代を茶化す傾向は、本書及び「金々先生造化夢」に現はれ、「桃太郎發端話説」(寛政四年、京傳作)に愈々明瞭となり、寛政五年版京傳作の

の所望により、徒然の前に町づくりをしつらへ、數多の遊君を集めて廓の風俗を舞ふ。【構想】曾我兄弟の復讐を題材としながら、巧みに廓情調を取り入れて抒情味を豊かならしめ、且つ景事・節事の舞踊的要素や門説經・小唄の節を綴り込んで作全體を變化に富ましめてゐる。文章も婉麗である。【影響】土佐少掾橘正勝の段物集「色竹蘭曲後撰集」に本作二段目の「虎御前まつよひのうらみ」。三段目の「虎少將の道行」、並に「虎少將しかた十ばんぎり」が大體その儘とられてゐる。元祿十年都萬太夫座盆狂言の近松作「大名曾我」、寶永三年五月江戸市村座上演の「大屋形世繼曾我」は共に改作。明治四十四年十月帝國劇場上演の「世繼曾我」は原作に據つたものである。【史的地位】本作は當代の遊里味を加へた最初の淨瑠璃として注意すべきである。また「外題年

【參考】近松世話淨瑠璃詳解高野辰之〇近松傑作全集卷一解題 水谷不倒〇近松名作集上解題 黒木勘藏〇近松全集第八卷解題藤井乙男〇大近松全集第九卷解説 木谷蓬吟〇芝居ばなし第二編三田村鳶魚〇京阪歌舞伎年代記伊原敏郎(歌舞伎連載) 〔高野(正)〕

淀屋形金鷄新話 よどやかたきんけいしんわ

十卷十册 【作者】岳亭丘山 【畫工】未詳。【名稱】淀屋辰五郎の金鷄の故事に據つたことをにほはしてゐる。【刊行】天保四年。【梗概】足利尊氏以來の舊家である浪速の井戸屋瀧右衞門は、義政の銀閣寺の建立に名泉を掘り、將軍家の重寶黄金の鷄を賜はつてから頓に繁榮し、又吾妻屋東作が多くの財寶を失つた邸内の古井戸の祟りを鎭めて、巨萬の富を得たが、醫師宅原高濟が瀧右衞門の重病を癒して、娘小笹をその息瀧五郎の許婚としたのを妬んだ同業椙山古仙は、井戸屋の番頭道八と計り、瀧五郎を神崎の廓に誘ひ、これを妨げようとした。かくて瀧五郎は遊女吾妻に馴染み、その幼時の許婚であつたことを知つた。瀧五郎は實は中條時敎卿の妾腹で、幼時淀の屋形にあつて、其處の鄕士松倉文吾の娘雪兒と許婚となつたが、瀧五郎は繼母のために井戸屋に渡され、雪兒は浪速に移り、吾妻屋東作と改稱した父の悲運に身を賣つて吾妻と言つてゐたのであつた。然るに代官大瀧左門佐に仕へた浪人卯木佐源太は、道八と計つて井戸屋の重寶金鷄を奪ひ、その家財をも沒收し、瀧五郎を追放させるが、小笹は身を賣つて廓を脱れ出でた吾妻を救ひ、又道八の惡事を責めてこれを追ひ、道八は佐源太に斬られるが、佐源太・小笹は强盜小佛太郎に捕へられ、その山寨に引かれる。そこで小笹は小佛に身を任せて、巧みに金鷄が佐源太の手にあることを瀧五郎に告げ、瀧五郎は縣令に訴へて山寨を攻め、賊を縛めて金鷄を取返した。かくて瀧五郎はその功によつて家を再興し、吾妻は小笹が身の汚れを恥ぢて投身した貞節に感じ、側女となして二男を産み、兄には井戸屋を、弟には吾妻屋を繼がした。【解説】前後二編各五卷五册、序に「井戸屋何がしが家なる黄金の鷄の故事をひろひて一部の册子をつくりかく名づけた」とある。淀屋を井戸屋、辰五郎を瀧五郎として淀屋退轉の事件に有名な淀屋辰五郎を題材としてゐる。これは夙くから小説戲曲の材となり、「棠大門屋敷」「淀鯉出世瀧德」(各別項)等、最もよく知られてゐるが、それ等が辰五郎の榮華遊蕩の生活を描く趣向構想に對して、これにあつては辰五郎を主人公とし、淀屋の寶物黄金の鷄を廻る事件に、惡は亡び善は榮えるといふ勸懲の意を寓してゐる。 〔笹野〕

四人比丘尼 よにんびくに

「花の情」を見よ。

米市 よねいち

能狂言 【格式】本神文濟相傳の部(大藏流) 【解説】年の暮に、或る貧者が、嘉例の年取物を下さる人の所へ行き、米俵や小袖を貰ふ。時節柄、人が咎めたら俵藤太の御娘御、米市御寮人だと言つて歸れと敎へられる。途中、果して大勢の者に見咎められ、聞いた通りの事を言ふので、盃を戴かせて呉れと賴まれ、色々逃げるうちに押合となるが、結局米俵とわかるといふ筋。米を人に見たてた所が種である。田原藤太が龍神の仇である三上山の蜈蚣を退治して、乙姫から取れども盡きぬ米俵を貰つたとの俗傳は、お伽草子「俵藤太物語」(別項)などにも見えてゐるが、この狂言の中の言葉なども、それが民間説話として早く流布した事實を證據立てるものであらう。玄惠の作と云ふのはともかくも、古風な立衆物である。 〔龜田〕

米澤彦八 よねざわひこはち

「彦八」を見よ。

米山鼎峨 よねやまていが

「鼎峨」を見よ。

世の是沙汰 よのこれざた

浮世草子 五册 【作者】跋文の終に西樂書とあるから、西樂が作者であらう。傳未詳。【刊行】寶永三年三月、京書林板。【諸本】近世文藝叢書第四所收 【解説】卷一・三・四は各三種、卷二・五は各二種より成る端物の集である。跋に、「世にあらゆるおもしろい事、氣味のよい事、あはれなる事、かしこい事、鈍な事、うつくしい事、むさい事、この頃の取沙汰五册」と記してあるから、作者の興味をおぼえた雜話を巷説中より擇んで綴つたものであらう。人間生活の記錄、世相の描寫として、さして興を惹くに足るものもない。殊に俳文風に氣取つた文で、頗る難解なところがある。すぐれた作品とはなし難い。 〔藤村〕

世上洒落見繪圖 よのなかしゃれけんのえづ

黄表紙 三册 十五丁十八圖 【作者】山東京傳 【畫工】菊亭主人(京傳) 【刊行】寛政三年 【諸本】「洒落見繪圖」(大阪、鹿田靜七)は後摺。黄表紙二十五種(日本名著全集)所收。【解説】洒落た世の中で、芝居では役者の日常生活をその儘に見せ、寺の本尊には生きた美男美女を立たせ、惚れられる守、富籤に當る守、轉んだ所で金を拾ふ守を授ける。鸚鵡・九官鳥が聲色をつかひ、勸化には石地藏自身で出歩き、狐が獵人を騙し、人は火の見に登り、鶺鴒で雲上の蔦の貧乏禪を奪ひ、蚊は出でずして棒振蟲が人を喰ひ、山鼈が沸燒となり、男が血の道を煩ふ。京傳が黄表紙を玆まで書いて來ると、

本書は單行本として出版されたのではなく、貞德の「新增犬筑波」(別項)の上卷が「油糟」(別項)下卷が本書である。「犬筑波」の二句附のものに、貞德が三句目を附けて三句の渉りの行き樣を示し、傍ら自己の附意を解し、貞德一流の俳諧の主義及び式目の方から、「犬筑波」に於ける附句の無誹言・用付・同意、一句に理なし、一句に正體なし等の點を指摘したものである。「油糟」は「犬筑波」の前句に貞德が附句を試みたものとして、本書は「犬筑波」の附句の評論と三句目の附け方として、これ等二書によつて貞德の俳諧に對する見解がほぼ窺はれる。(新增犬筑波參照) 〔萩原〕

淀鯉出世瀧德 よどこひしゅっせのたきのぼり

淨瑠璃 二段 世話物 【作者】近松門左衞門 【名稱】淀川の鯉の瀧上りに因んで淀屋の前途を祝し

や既に寶永二年正月二の替りに、京の都萬太夫座で「けいせい金淀鯉」、同龜屋座で「けいせい蓮の糸」、その他各座で淀屋の狂言が興行され、また同年刊行の浮世草子「棠大門屋敷」(別項)や「長者機嬢袋」に取入れられた。辰五郎は寶永六年に赦免願のために江戸に下つたが、本作はその噂が立つや、豫め淀屋の前途を祝した際物と考へられる。【梗概】〔上之卷〕(新町橋橋詰)城州八幡の富豪江戸屋勝二郎は大阪新町茨木屋の吾妻に溺れて贅の限りを盡し、遂にこれを身請する事となる。舊手代の新七夫婦が廓から戻る勝二郎の駕籠を待ちうけて苦諫するが、勝二郎は却つて彼等を罵つた上、土足にかける。(京街道)吾妻は揚屋井筒屋の亭主を初め朋輩の太夫天神や遣手等に送られて華々しく八幡に向

了ふ。物音に家中の騒ぎとなり、やがて勝二郎も入り來り、それと知つて同罪にしてくれと嘆き悲しむ。折から知らせによつて藤の兄が馳せつけるが、見ればそれは、思ひもよらぬ舊手代の新七である。彼等兄弟は密かに圖つて勝二郎のために吾妻を身請したのであつた。かくて皆々相擁して淚に暮れてゐる所へ突然八幡の神主より早飛脚があり、勝二郎の赦免を知らせるので一同悦んで躍り上る。【解説】格別の趣向もなく、平凡な作である。殊に下之卷は不自然である。恐らく當時の觀客は有名な淀屋事件だといふ點にのみ興味が繫がれたのであらう。寶曆九年五月十四日より豐竹座興行の「難波丸金鷄」は本作の飜案である。(棠大門屋敷・鳳流曲三味線・日本新永代藏等參照)

【構想】全六册に亙る小説的な脚色であるが、獨創的なものでない。それは作者も、自序で正直に告白してゐる如く、西鶴の浮世草子によつたものである。斷片的な材料を强ひて長篇の體裁たらしめようとした爲め、「貧福の差は運にあり」との見地には立つてゐるが、一貫した構想は認められない。殊にそれに教訓的な意義を與へようとしながらも、内容には可なり卑猥なものがあり、教訓に副はない矛盾を生じて來てゐる。上方の出來事を江戸風にし、江戸を鎌倉に仕立てて、兎も角一篇の小説たらしめてゐる。【小柴】

讀歌（よみうた）　歌謠【名稱】讀むが如く朗誦したのによる名であらう。【出典】「古事記」允恭の條に二首。「琴歌譜」に「正月元日余美歌」一首。【解説】雅樂寮で教習した大歌の一つで、「琴歌譜」に、正月元日余美歌とあるのは、平安時代に正月元日の宴會節會にこの歌を奏した祝歌なのであらう。「古事記」の歌と共に、同樣の節で朗誦したものと思はれる。それは歌ひ節ではなく、語り節に近い一種の節であらう。後世の太平記讀（別項）と云ふ語も、讀歌と云ふ語を解する參考となる。この歌は、大體に於て五言・七言を交互に重ねた長歌の形式であるが、ただ終末句が佛足石歌（別項）にも見られる五七七七と云ふ七言三句で終つてゐるのが、讀歌の著しい特徴である。玆には「琴歌譜」の歌詞を掲げる。

空見つ　大和の國は　神がらか　在りがほしき
國がらか　住みがほしき　在りがほしき國は　秋津島大和

【藤田】

よみうり　「新聞」を見よ。

詠込（よみこみ）　雜俳　【解説】又「立入り（たちいり）」ともいふ。雜俳の一種で、物の名を句中に詠みこむものをいふ。

十二支―うまいこと　こたらの巻までうつしとり
國の名―みのる田のいなばにおきしあきの露
魚の名―さけよりもこひに醉うてはさめにくい
鳥の名―傾城にすつるたからはをしからす
木の名―酒を飲みすぎりやはなしがむつかしい

【西原】

讀本（よみほん）　近世小説の一種　【名義】繪草紙のたぐひの繪を觀るのに對して、文を讀むといふ意を表はした謂ひである。八文字屋本・實錄物・人情本（各別項）等も時に讀本と呼ばれたが、これは語り本などに對した名であらう。けれどもこの二つの解釋は何れも讀本といふ特定の概念を規定するところまでいつてゐない。【範圍】讀本は初期讀本と後期讀本との二つに分れる。初期讀本に屬するものには、近路行者の「英草紙」「繁野話」、上田秋成の「雨月物語」、建部綾足の「本朝水滸傳」（以上各別項）等が擧げられ、後期讀本に屬するものは、江戸時代後期、文化文政度の江戸文學隆盛期の所産で、山東京傳の「昔話稻妻表紙」「本朝酔菩提」（各別項）、曲亭馬琴の「椿説弓張月」「南總里見八犬傳」（各別項）等がその代表作である。時代では寶曆頃から江戸末期に至る。又初期讀本は短篇集が多く、後期讀本は長篇が多い。前者は上方を中心として現はれ、後者は江戸を中心として行はれた。【區分】題材の種類によつて讀本を區分すれば、敵討物・御家騒動物・怪談物・英雄傳奇等とすることが出來、又題材の出所によつて區分すれば、巷談物・傳説物・淨瑠璃・歌舞伎物・史傳物・外國物（支那稗史小説の飜譯・飜案）等とすることが出來る。【特徴】體裁は半紙本五六卷を一篇とし、各卷口繪があり、又數葉の插畫がある。多く浮世繪師の筆に成つた。創作態度から見れば、讀本は概して理想的な小説であり、教訓的な作品である。さうして興味的に空想を交へたものが多い。當時功利主義的思想が盛んで、純文藝の價値を認めず、これに道德的教訓、時としては知識的啓蒙を加へて、その價値を認めようとしたから、教訓的傾向が文學界の一面に生じて來た。而して讀本はその最も著しいものであつた。この教訓の基礎はこれを時代の武士精神に置いて、當時の生活の社會規範であつた義理を表現し、馬琴の如きは特に儒教的道德精神を高調してゐる。それと共に一般に佛教的因果應報が强く表はされてゐるのである。これを形の上から見れば、長篇・短篇樣々であるが、敘述と描寫と相半ばするものであるから、説話の筋が讀本に於ては可なりに重要な要素である。卽ち素材の珍奇を欲してこれを空想界に探り、特に空想的な支那の稗史小説に借り來つたものの多きを見るのである。而してかくして集めた多くの素材を巧みに按排し綜合して、變化の多い複雜なもので、而もよく筋の通つた物語に構成しようとしたものである。馬琴はその素材の蒐集とその説話の構成とに長じた作家である。次にこれを文體上より見ると、和漢混淆と雅俗折衷の相混じたものといふことが出來る。理想的であり、教訓的である讀本は、莊重・威嚴と共に、柔軟性・通俗性をも必要として、かゝる文體を選んだものである。

【沿革】京阪の浮世草子（別項）が漸く衰へた寶曆・安永・天明の頃は、江戸時代後期江戸小説への過渡期であつたのであるが、その頃「當世下手談義」（寶曆二年）「和莊兵衞」（安永八年）等の教訓物及び「新著聞集」（寬延二年）「和州非人敵討實錄」（寶曆四年）「西播怪談實記」（寶曆四年）等の實錄物や怪談物が行はれた。初期の讀本は

これ等を包括するのであるが、これ等の中から次第に讀本の特異性を示して來たのは、多く支那小説の飜譯乃至飜案は、當時岡島冠山をはじめ、岡白駒・穗積以貫等が訓詁の學に慊らずして、時文の研究から、支那小説を繙讀紹介した結果、その飜譯・飜案相繼ぐの機運を生ずるに至つたのである（支那文學の影響參照）。寬延二年大阪の都賀庭鐘（近路行者）は「英草紙」を、次いで明和三年その續篇「繁野話」（各別項）を著はした。これが讀本の祖と稱せられるもので、何れも九つの短篇から成り、前代の淺井了意の「伽婢子」「狗張子」（各別項）の系統をひく奇談異聞集であるが、これが粉本となつたものは「剪燈新話」「今古奇觀」等の支那小説で、文章も亦これに倣ひて和漢混淆の新文體を成してゐる。これに次いで、明和五年上田秋成は「雨月物語」（別項）を書いた。それは「英草紙」等に摸したものであるが、作家としての秋成の奇才は、妖怪味の溢れた好箇の短篇小説を成してゐる。又明和十年建部綾足は「本朝水滸傳」（別項）を書き、江戸讀本の魁をなした。これは支那の「水滸傳」を飜案して吉野仙柘枝の傳説と惠美押勝の亂を按排した物語である。その文章は、庭鐘・秋成等に比して著しく擬古文風で、後の讀本作者に影響した。なほ綾足と同時代の平賀源内の「根なし草」「風流志道軒傳」（各別項）を目して江戸讀本の祖とする人もあるが、純粹の讀本の體はなしてゐない。次いで伊丹の椿園（別項）は安永・天明の頃「怪異談叢」「唐錦」（各別項）等を著はした。これは寧ろ飜譯と稱すべき怪異談で、「英草紙」等と同類におくべきであらう。また支那小説流行の刺戟と共に國學の勃興に伴ひ、多く國文學の事一等の著がある。

【和田】

四方眞顏（よものまがほ）　「鹿都部眞顏（しかつべのまがほ）」を見よ。

四方屋本太郎（よもやはんたらう）　「蜀山人」を見よ。

餘裕派（よゆうは）　文學流派　【名義】生活派（別項）などと對蹠的に用ひられる稱呼で、反自然主義的な徂徠趣味（別項）的な文學派の意味。漱石が盧子の小説集「雜頭」の序文中で、餘裕のある文學、餘裕ない文學の語を用ひた

素養のある者が、餘技として讀者の空想的好奇心を目標に戯作をなしてゐる。荷田在滿に「白猿物語」があり、賀茂眞淵に「由良物語」がある。ともに小説としては單純なものではあるが、これ等も讀本の先蹤をなすものであつた。これより後、暫くして曲亭馬琴は寬政七年に「高尾船字文」（別項）を、享和三年に「月氷奇緣」（別項）を出し、山東京傳は寬政十一年に「忠は今戸邊に長屋住ひをして其處で歿したといふ。【著作】嘉永四年處女出版「江戸鹿子紫草紙」以下合卷物十五六種を著はし、その他英・蘭・佛・魯の邦譯等もあるらしいが、特に初代種彦作「浮世形六枚屏風」（別項）、慶應三年の飜刻が著名である。

【石川（巖）】

【參考】狂歌人名辭書○書物の趣味（第四册）

四方の硯（よものすずり）　隨筆　三卷　【著者】畑

を奏した祝歌なのであらう。「古事記」の歌と共に、同樣の節で朗誦したものと思はれる。それは歌ひ節ではなく、語り節に近い一種の節であらう。後世の太平記讀(別項)と云ふ語も、讀歌と云ふ語を解する參考となる。この歌は、大體に於て五言・七言を交互に重ねた長歌の形式であるが、ただ終末句が佛足石歌(別項)にも見られる五七七七と云ふ七言三句で終つてゐるのが、讀歌の著しい特徴である。玆には「琴歌譜」の歌詞を掲げる。

空見つ　大和の國は　神がらか　在りがほしき
國がらか　住みがほしき　在りがほしき國は　秋津島大和

【藤田】

よみうリ　「新聞」を見よ。

詠込(よみこみ)　雜俳　【解說】又「立入り」ともいふ。雜俳の一種で、物の名を句中に詠みこなすもので、作者は讀本專門の作者の外、合卷・洒落本の作者から狂歌師・畫家・學者等に亙つてゐる。この後期讀本の盛時は文化から文政の初年頃迄であつて、天保十二年には前後二十八年を閱した馬琴の「南總里見八犬傳」が終結し、なほその後「近世說美少年錄」(別項)の續篇「新局玉石童子訓」が著はれ、「神稻水滸傳」は明治まで書き繼がれたが、他の江戸小說一般と共に、讀本も弘化以降は全く衰滅してしまつた。

【參考】讀本の本質鈴木敏也(國語と國文學昭和二ノ四)○讀本の發生、怪異小說研究、江戸文學の一事象山口剛、江戸文學研究)○讀本集解說(日本名著全集)

【藤村・笹野】

四方赤良(よものあから)　「蜀山人」を見よ。

四方歌垣(よものうたがき)　「鹿都部眞顏」を見よ。

四方梅彥(よものうめひこ)　戲作者【本名】新次【別號】文亭・柳亭・松園・柳屋・竹柴瓢藏・柴垣其文【生歿】明治二十九年十一月二十八日歿す。享年七十五。【墓所】鶉井戸普門院【閱歷】若冠の頃より著作に耽り、初代種彥(別項)の門に入つて文亭梅彥と號し、合卷物・人情本等の作がある。中年の頃、狂言師鷺傳右衞門に就いて狂言を學び、その藝上達して玄人の域に達したとのことである。晩年默阿彌(別項)に隨ひて狂言作者の補助として名を番附面に顯はし、又「歌舞伎新報」の客員となつたこともあつた。四方側に在つて狂歌を詠んだ。狂歌集としては豐芥子と合著の「近世盡狂歌合」(嘉永五年刊)一册がある。又假名垣魯文(別項)のいろは連に入つて柴垣其文とも號した。文友花笠文京(別項)は、彼を學才・藏書・記憶・閑靜・青年の五富の內、その四を有つと嘉永五年出版「造化機叢紙」の二篇に言つてゐる。晚年は今戸邊に長屋住ひをして其處で歿したといふ。【著作】嘉永四年處女出版「江戸鹿子紫草紙」以下合卷物十五六種を著はし、その他英・蘭・佛・魯の邦譯等もあるらしいが、特に初代種彥作「浮世形六枚屏風」(別項)、慶應三年の飜刻が著名である。

【參考】狂歌人名辭書○書物の趣味(第四册)

【石川(巖)】

四方の硯(よものすずり)　隨筆　三卷【著者】畑維龍【名稱】「四方の硯」といふのは、卷首に藤原俊成の「四方の海硯の水につくすとも我が思ふことの書きもやられず」とあるのを引いて發端としたことに基づいたものの由である。【成立】卷末に「享和癸亥年端午日　平安布衣畑維龍」とあるのによつて、享和三年の成稿であることが知られる。【刊行】享和四年【解說】史上に名ある文武の偉人、或は世にあらはれざる畸人・隱士の逸事を擧げ、又和漢故事の一ふしあるものを錄し、時には歌話を挿み、語義を考へる等、極めて雜駁なる中に興味少からざる隨筆で、挿圖は田中訥言・原在明・同在正の筆である。上卷(雪の卷)は四方の海ノ歌より月花ヲ賞スル國までの數十條、中卷(月の卷)は源氏物語ノ事より昔ノ菓子に至る數十條、下卷(花の卷)は明大祖ノ事より猪尾常房に至る數十條を收めてゐる。但し目次はない。墨齋の「硯田餘耕」の題字、享和二年細合方明、無年紀齋部孝義、寬政四年滄浪居士(嘯山)、無年紀伴蒿蹊の四序がある。

【著者小傳】畑維龍。字は士潛、號は鶴巢、また鶴山、阿波の人。京師に出でて和漢の學及び醫術を學び、方技を業とした。當時の文人蒿蹊・涌蓮等と親交があつた。文化十年十月八日歿す。享年八十。「脈案提要」「金匱譯注」「杏林夜話」「皇國醫林傳」「栗田日記」「朝野紀事」等の著がある。

【和田】

四方眞顏(よものまがほ)　「鹿都部眞顏」を見よ。

四方屋本太郎(よもやはんたらう)　「蜀山人」を見よ。

餘裕派(よゆうは)　文學流派　【名義】生活派(別項)などと對蹠的に用ひられる稱呼で、反自然主義的な徂徠趣味(別項)的な文學派の意味。漱石が虛子の小說集「雞頭」の序文中で、餘裕のある文學、餘裕ない文學の語を用ひたのに由來する。【解說】この派の文藝は子規に始まり、虛子を經て漱石に至つて完成したといつてよからう。子規が創始した寫生文(別項)を虛子が承け繼ぎ、それによつて書かれた虛子の「俳諧師」「凡人」「雞頭」の中の短篇などに於て、最もよくこの派の態度を示してゐる。漱石は元來、このホトトギス派の寫生文から出發したが、これに英文學趣味と東洋趣味とを盛つて渾融せる藝術を築きあげた。彼の人生觀は、與へられた或る社會、或る家庭に於て、出來るだけ趣味と娛樂とを健全に享樂するといふことにあつた。これ卽ち餘裕派の態度である。この傾向は漱石門下によつて部分的に繼承され、後に享樂主義乃至技巧主義に轉化した。この派の文學は勿論プチ・ブルジョアのものであつて、個人主義思想に觸れた惱みもなければ、生活の苦しみに根ざした味ひもないが、人生の眞實を傳へる點に於て、多少の價値を持つてゐる。更に漱石の作品に於ては、觀察が奇警であり、文章が清新であつて、且つ道德的・中庸的である點で傑れてゐる。特にこの派が文章の一つのスタイルを作つた點に於て、明治文學史上注目すべきである。なほ森鷗外の所謂「遊びの藝術」は、これとは別派のものであるが、一脈相通ずるものがある。(寫生文、徂徠趣味參照)

【宮島】

四十四（よよし）　連歌・俳諧　【名義】四十四は又世喜とも、世吉とも記す。四十四を「し」（死）の音を忌んで「しじふし」と讀まず、「よそし」と讀み得るのを、音の近似から、めでたく「よよし」（世吉し）と讀んで、世の太平をことほぐ意に取りなしたのである。【解説】四十四句から成る長篇の連歌・俳諧の巻式（別項）の一つで、百韻の二・三の二折を抜いた形式のものである。室町時代の中頃に起つたものか、享祿三年のものも現存してゐる。法式上の定めとしては、連歌に於ては、賦物（別項）は百韻と同じとする説があり（連歌髄腦）、百韻に四つのものは、二つにても宜しといふ説があり（連歌百談）、その時の宗匠家の意見に任すべしといふ説もある。古くは追善にも用ひられたが、後には多く祝賀の連歌に用ひられるやうになつた。御城連歌は大抵この形式を用ひた。俳諧に於ても稀に行はれた。【福井】

豫樂院流（よらくゐんりう）　「書道」を見よ。

賴家（よりいへ）　「六人黨」を見よ。

賴實（よりさね）　「六人黨」を見よ。

賴朝鎌倉實記（よりともかまくらじつき）　浮世草子五冊　【作者】序に作者其磧・作者自笑の署名がある。但し八文字屋本の他の例にも見るが如く、眞の作者は知り難い。【刊行】享保十二年、京都八文字屋開板。【諸本】「互先碁盤忠信」と題する再板本がある。この「碁盤忠信」は百萬塔第二に收めてある。【解説】序に「所から梅の匂ひをふくみ聲、鶯もはだしと難波のよしあしをいはず、頭をふつて稽古する節の直なる竹本の一流世上に弘まり貴賤の耳を悦ばしむ、義太夫があやつり人形の働き見ぬ往古の賴朝義經其外の名高き勇士を今目の前に見る心地せし鎌倉實記のおもしろき趣向を五册に綴りて童男の心をいさましむるものなり」とある通り、享保九年十一月竹本座興行の淨瑠璃「右大將鎌倉實記」（作者竹田出雲）を、八文字屋本傳奇物風に書き直したものである。その話の梗概は、源行家義經の愛妾靜御前に戀慕し、謀を設けて靜を離別させようとする。義經は兄賴朝と不和のために京を落つることとなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義經といふもののために廓に討たれる。圍碁の指南をしてゐる小柴文内の娘安督は佐藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は梶原景時の家來に捕はれたが、北條時政のために赦免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義經と同名の九郎義經や、佐藤四郎兵衞忠信と同音の名の砂糖四郎兵衞を設け、事の行違ひ等を生ぜしめて說話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の淨瑠璃書直し物の一つで、人情・性格の描寫よりは、說話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物である。【藤村】

賴朝三代鎌倉記（よりともさんだいかまくらき）　浮世草子　大本五册　【作者】無署名。おそらく八文字屋附の作者か。【刊行】正德二年辰之初春、八文字屋八左衞門板か。【解説】本作は八文字屋板の時代物、長篇物としては最も初期の作に屬する。その内容を見るに、鎌倉二代將軍賴家卿の酒色生活より畠山・和田・大江等の重臣の忠勤振りを描き、比企の判官能員の陰謀、それが露顯して北條氏のために滅され、時政これより勢力を得る。賴家卿歿後は一子實朝卿の世となり、實權全く北條氏に歸するといふ筋である。篇中源家の重臣が交互に描き出されてゐる點に、何となく後來の「鎌倉諸藝袖日記」（別項）を連想せしめるものがある。但し筋は全然異る。【吉田】

賴朝七騎落（よりともしちきおち）　「源氏移徙悦」（わたましのよろこび）を見よ。

賴朝の最後（よりともののさいご）　御伽草子風　一卷　【作者】不詳　【別名】賴朝最期物語　【成立】文中龍宮へ往つて四百年になるとの記述あるより逆算すると慶長年間となる。「近古小說解題」には、なほ少し古い作かとも思はれると言つてある。【諸本】古板本なし。もと繪詞。完本ではないやうである。不忍叢書第十一册所收。大正三年伴信友舊藏本を國史叢書中に收めて刊行（「賴朝最期物語」と題す）。【題材】賴朝薨去に關する傳說と畠山六郎龍宮行の傳說とが結合したもの。賴朝の死因に關しては諸說があり、相模川の橋供養に落馬して病を獲たとする正傳（相模川參照）、能登守教經に斬られた說（眞俗雜錄）等があるが、本書の所傳は白衣の人が室に入るのを、留守を守る盛長が捕へて刺したとする最後の說と人名を異にするだけでほぼ一致する。また六郎の龍宮行は謠曲「九穴」に見え、舞曲「九穴の貝」（別項）も間接に關係がある。由井ケ濱で逢萊を飾つての酒宴は、舞曲「濱出」（別項）の影響か。江島辨財天の本地傳說に關聯して辨天から大覺禪師へ善財童子が給仕に遣られたことが、謠曲「江島童子」にも語られてゐる。【梗概】建久十年正月五日の夜、女房の姿にやつして他所から歸館した賴朝は、御所の番に當つてゐた畠山六郎に怪しみ刺されて落命した。年五十三。相續した二代の將軍賴家は奇を好む性とて、建長寺の大覺禪師の許で酒宴した席に、天女の姿で魚を捧げて歸り去つた江島辨財天の美に心を動かし、重ねて本地の御姿を拜まうと請ふと、忽ち腥い風が吹いて龍と現じ、一座を驚倒せしめた。賴朝の死因は政子が深く祕した爲めに世には眞相を知る者がなかつたが、御所の女房頭周防内侍の十五歲になる娘が六郎を戀して死に、悲歎に昏れた母が六郎の武藏から鎌倉に通ふ道に堂を建て、娘の繪像・木像を据ゑて僧を住ませ、火災をも戒めて置くと、其處を過る毎に風雨に遭ひ、落馬するのを怒つた六郎が、堂に火を懸け、剩へ堂守が取出したその像を奪つて焚いてしまつたので、内侍は怨んで賴家に、六郎こそ賴朝を害した者と密告した。賴家は六郎を討たんとして屢々招かうとし、或は由井ケ濱の宴に託して決行しようとしても、六郎の運強くて機を得ないうち、六郎は遁れ得ざる天譴を恐れて海中に入り、龍宮の弟姬と契つた。爾來四百年になるが遂に歸らぬ。【影響】眞山青果作「傀儡船」（くぐつぶね）（新小說大正七ノ九所載、翌年十一月明治座初演）は、「傀儡子記」（別項）と本書とから取材して脚色したもので、馬琴の「朝夷巡島記」（第六編卷之五）に、賴家が賊に欺かれて天女の影向を拜する構想も、或は間接に本書の素材の傳說に關係があるかも知れぬ。

賴長（よりなが）　【姓名】藤原氏。幼名菖蒲若（あやめわか）。【島津】世に宇治左大臣、また惡左府と呼ばれた。【生歿】保元元年（一一五六）歿。享年三十七。【家系】忠實の二子、忠通の弟。【閲歷】長承中正二位に叙し、權大納言となり、保延元年右大將を兼ね、二年内大臣に任じ、五年皇太子傅を兼ね、左大將に轉じた。賴長は藤原通憲を師とし、又源師賴・藤原成佐に學び、傍ら因明を僧惠曉に受け、その學才は兄に越えてゐた。よつて父忠實は特にこれを寵愛した。康治二年初めて易を學び、更に筮儀を通憲に受けた。

久安三年詔して一の上となし、五年左大臣に拜し、從一位に叙し、六年養女多子（藤原公能の女）を納れて近衞天皇の女御となした。この時兄忠通、又藤原伊通の女呈子を養ひ、皇后となさんとした。こゝに於て兄弟相和せず、互に確執し、加ふるに忠實は又忠通を疎んじ、その授くる所の朱器臺盤を奪つて賴長に授け、氏長者となし、七年文書内覽の宣旨を蒙つた。華寺【家系】仲政の子、仲綱・二條院讃岐の父【閲歷】初め白河院の判官代に任じ、保延二年藏人に補したが、間もなく五位に叙して殿上を降り、久壽二年兵庫頭に任じた。保元の亂には後白河天皇が鳥羽院の御遺誡によつて召された武將十人のうちに加へられた。保元三年十二月二條天皇御即位の日、禁裡に亂入する狂人を捕へた功によつて院の昇殿を聽され政家集」。○勅撰集に入る歌は詞花一、千載十四、新古今四、新勅撰集以下十三代集に亙つて凡そ四十首、合計凡そ五十九首。○私撰集に入るものは後葉集二、續詞花集四、今撰集六、月詣集四。

【歌人として】　久安五年の右衞門督家歌合以下數度の歌合の作者となつてゐるが、判者となつたことはない。俊惠も俊成も彼の力量を本（小二册）等があるが、何れも同系統のものである。殊に寬文の刊本及び繪入本には同樣の奥書がある。即ち（一）元曆元年右近衞權少將藤原（成經か）が左丞相（經宗か）自筆本に依つて書寫した旨を記したもの。（二）この二帖は濃州山縣郡蓮華寺の所藏とするために、靑陽軒昌慶が書寫したものである旨を延德三年法眼紹永の記したもの。（三）明應二年蓮華寺住

豫樂院流（よらくゐんりう）「書道」を見よ。

賴家（よりいへ）「六人黨」を見よ。

賴實（よりさね）「六人黨」を見よ。

賴朝鎌倉實記（よりとものかまくらじつき）　浮世草子　五冊　【作者】序に作者其磧・作者自笑の署名がある。但し八文字屋本の他の例にも見るが如く、眞の作者は知り難い。【刊行】享保十二年、京都八文字屋開板。【諸本】「互先碁盤忠信」と題する再板本がある。この「碁盤忠信」は百萬塔第二に收めてある。【解說】序に「所から梅の匂ひをふくみ鶯もはだしと難波のよしあしをいはず、頭をふつて稽古する節の直なる竹本の一流世上に弘まり貴賤の耳を悦ばしむ、義太夫があやつり人形の働き見ぬ往古の賴朝義經其外の名高き勇士を今目の前に見る心地せし鎌倉實記のおもしろき趣向を格の描寫よりは、說話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物である。【藤村】

賴朝三代鎌倉記（よりとものさんだいかまくらき）　浮世草子　大本五册　【作者】無署名。おそらく八文字屋附の作者か。【刊行】正德二年辰之初春、八文字屋八左衞門板か。【解說】本作は八文字屋板の時代物、長篇物としては最も初期の作に屬する。その內容を見るに、鎌倉二代將軍賴家卿の酒色生活より畠山・和田・大江等の重臣の忠勤振りを描き、比企の判官能員の陰謀、それが露顯して北條氏のために滅され、時政これより勢力を得る。賴家卿歿後は一子實朝卿の世となり、實權全く北條氏に歸するといふ筋である。篇中源家の重臣が交互に描き出されてゐる點に、何となく後來の「鎌倉諸藝袖日記」（別項）を連想せしめるものがあつて刺したとする最後の說と人名を異にするだけでほぼ一致する。また六郎の龍宮行は謠曲「九穴」に見え、舞曲「九穴の貝」（別項）も間接に關係がある。由井ケ濱で蓬萊を飾つての酒宴は、舞曲「濱出」（別項）の影響か。江島辨財天の本地傳說に關聯して辨天から大覺禪師へ善財童子が給仕に送られたことが、謠曲「江島童子」にも語られてゐる。

【梗概】建久十年正月五日の夜、女房の姿にやつして他所から歸館した賴朝は、御所の番に當つてゐた畠山六郎に怪しみ刺されて落命した。年五十三。相續した二代の將軍賴家は奇を好む性とて、建長寺の大覺禪師の許で酒宴した席に、天女の姿で魚を捧げて歸り去つた江島辨財天の美に心を動かし、重ねて本地の御姿を拜まうと請ふと、忽ち腥い風が吹いて久安三年詔して一の上となし、五年左大臣に拜し、從一位に叙し、六年養女多子（藤原公能の女）を納れて近衞天皇の女御となした。この時兄忠通、又藤原伊通の女呈子を養ひ、皇后となさんとした。こゝに於て兄弟相和せず、互に確執し、加ふるに忠實は又忠通を疎んじ、その授くる所の朱器臺盤を奪つて賴長に授け、氏長者となし、七年文書內覽の宣旨を蒙つた。かくて賴長の威勢日に加はり、忠通との確執愈々深刻となり、遂に保元の變亂を惹起したが、事志と違ひ戰歿した。高倉天皇の治承元年詔して正一位太政大臣を贈られた。賴長は容貌美麗であつたが、人と爲り嚴厲深刻、時人呼んで惡左府といつた。併しながら平素好んで經傳を講究し、强記人に過ぎ、その藏書はその權勢と共に群を拔いてゐた。天養二年書庫を新築し、その屋根は瓦葺とし、四方の板には石灰を塗り、戶には蠣殼をぬり、四方に芝垣を築き、その外に堀をめぐらし、その外側に竹を植ゑ、更に普通の築垣をめぐらして防火に心を用ひた。書庫の中には棚を設け、東の棚を陽棚、西の棚を陰棚と名づけ、經・史・雜記・本朝の四部に分つてこれを納めた。この文庫を「大炊亭藏文庫」とも呼ぶ。【著作】台記二十卷○台記別記三十五卷○康治大賞會記一卷○婚記一卷。

【參考】台記（天養二年四月二日の條）　【植松】

依平（よりひら）「柳園詠草」を見よ。

賴政（よりまさ）「源氏物の諷曲」を見よ。

賴政（よりまさ）　歌人【姓名】源氏。世に源三位賴政と稱す。【法號】賴圓又は眞蓮、或は賴圓眞蓮か。【別號】蓮華寺殿　【生歿】長治元年に生れ、治承四年（一一八〇）五月宇治平等院に自盡す。享年七十七　【墓所】濃州山縣郡蓮華寺【家系】仲政の子、仲綱・二條院讃岐の父　【閱歷】初め白河院の判官代に任じ、保延二年藏人に補したが、間もなく五位に叙して殿上を降り、久壽二年兵庫頭に任じた。保元の亂には後白河天皇が鳥羽院の御遺誡によつて召された武將十人のうちに加へられた。保元三年十二月二條天皇御卽位の日、禁裡に亂入する狂人を捕へた功によつて院の昇殿を聽された。平治の亂には一旦義朝に與することを約したが、偶々六條河原にて義平から挑戰せられたので、遂に義朝を捨てて淸盛に從つた。仁安元年正四位に叙し、內の昇殿を聽されたが、それまでは地下にて大內守護に任じてゐた。大內守護の事は「公卿補任」に見えないから、恐らくは平治の亂に朝廷を守護し奉つたことの延長で、定まつた官職ではあるまい。嘗て二條院が里內裏から南殿の櫻見に行幸になつて、去年の花と今年のと如何であるかと問はせ給ふにつけて、「よそにのみ思ふ雲井の花なれば」とよみ奉り、秋の行幸には宿直所に隱れて月を眺め、「人知れず大內山の山守は木がくれてのみ月をみるかな」とよみ奉つた。なほ三位を望み、「よるべなき便なき身は木の下に椎（四位）を拾ひて世を渡るかな」と詠じ、淸盛の奏請もあつて治承二年從三位に叙して望を達し、翌年入道した。然るに淸盛の專橫が日に募るので、遂に以仁王を動かして治承四年平家討伐の令旨を四方に發した。謀が洩れたので王を奉じて圓城寺に走つたが、計畫が齟齬したので、奈良に走らうとして途に宇治橋を引いて對陣したが、戰敗れて遂に自盡した。又宇治に戰死せずして鹽原に遁れたといふ傳說があり、鵺退治、僧兵の懷柔等興味ある說話が傳へられてゐる。【作品】家集「賴政家集」。○勅撰集に入る歌は詞花一、千載十四、新古今四、新勅撰集以下十三代集に亙つて凡そ四十首、合計凡そ五十九首。○私撰集に入るものは後葉集二、續詞花集四、今撰集六、月詣集四。

【歌人として】久安五年の右衞門督家歌合以下數度の歌合の作者となつてゐるが、判者となつたことはない。俊惠も俊成も彼の力量を稱し、彼と同座することを窮屈に思つた（無名抄）。地下であつた頃、度々宮中から歌を召され、大內守護の間、南殿の櫻を見に來る人々と贈答してゐる。基房が閑院を造營し、初めて作文和歌の會を催した時、召されて歌をよみ、又和歌所に召されて連歌した。承安二年には淸輔の催した尙齒會に列し、俊成の家にも遊んだ。小侍從とは戀愛關係があつたが、關係が絕えても歌の贈答はあつた（以上家集）。彼の歌は題詠と生活を詠んだものとに二分される。題詠には豐富な想像力が見えるが、銳さや强さは見えない。しかし俊惠が「心の底まで歌になり」（無名抄）と歎じてゐるのはこの方面であらう。後者は小侍從を初め、或る宮腹の女房などとの贈答や、位階の昇進を喜び、昇殿の聽されぬ事を歎じたものが主となつてゐるが、その態度は消極的である。概して彼の歌は個性や時代性が極めて不明瞭である。

【參考】大日本史百六十○公卿補任○尊卑分脈○平治物語○平家物語○謠曲賴政○同鵺○長明無名抄　【西下】

賴政扇子芝（よりまさあふぎのしば）「賴政追善芝」を見よ。

賴政家集（よりまさかしふ）　歌集　一卷二册　【著者】源賴政　【名稱】「源三位賴政家集」「從三位賴政卿集」とも。【諸本】群書類從二四六所載本、寬文元年刊本（中二册）、刊年未詳の繪入本（小二册）等があるが、何れも同系統のものである。殊に寬文の刊本及び繪入本には同樣の奧書がある。卽ち（一）元曆元年右近衞權少將藤原（成經か）が左丞相（經宗か）自筆本に依つて書寫した旨を記したもの。（二）この二帖は濃州山縣郡蓮華寺の所藏とするために、靑陽軒昌慶が書寫したものである旨を延德三年法眼紹永の記したもの。（三）明應二年蓮華寺住山昌桂以下が、門外不出を衆議した旨を記したもの。（四）元龜二年某が陸奧岩城郡飯野平重隆入道明徹の本を以て書寫した旨を記したもの。（五）永享三年惟肖得巖が、密嚴院の所藏なる賴政像に記した贊等である。最初の筆者が成經であるならば鬼界島から赦されて歸つた後になる。繪入本は上下各九葉の繪を挿入してゐる。【解說】部類を春・夏・秋・冬・賀・別・旅・哀傷・戀・雜の十に分け、短歌六百八十七首を收めてゐる。歌は歌合の歌と生活を詠じたものとに明瞭に二分される。戀歌には普通の贈答の外、「知る人にせん」といふ關係や、「やさしきかたにはあらで申し語らふ」といふ關係の贈答がある。有名な「人しれず大內山の山守は」は雜の部に、「み山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり」は春の部に見えるが、「よるべなき便なき身は」「埋木の花さくことも」は集中に見えない。　【西下】

賴政追善芝（よりまさついぜんのしば）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】西澤一鳳・田中千柳【初演】享保九年二月一日より豐竹座（寶曆板「外題年鑑」）【刊行】七行九十丁本、西澤九左衞門板。【題材】賴政を扱つた淨瑠璃で最も古いと思はれるものは、寬文五年五月板行の「よりまさ」（新群書類從第九所收）で、これは「平家物語」卷第四を五段に組合せたものに過ぎない。次は加賀

據の正本「源三位頼政」（近松全集第二巻所收）で、これは別外題を「扇の芝」といひ、筑後據の奥付ある正本もあつて、謠曲「頼政」に基づいた作である。また享保四年十月板行の富松薩摩の正本「宇治頼政歌道扇」（作者伊藤流枝・清水三郎兵衛）は、「源三位頼政」に據つたと認められる節もあるが、頼政は全く姿を現はさずに、仲綱と九條の遊女金山との情事を中心としたもので、その初段には近松の「平家女護島」を殆どそのまゝ借用してゐる。以上の諸作は總て頼政の謀叛を經としたものであるが、橘土佐少據の正本「艶色萬歳頼政」（新群書類從第五所收）のみは、全くの荒唐無稽な作である。「頼政追善芝」は「源三位頼政」の三段目迄の改作。なほ歌舞伎では元祿十四年（推定）に、江戸山村座で「頼政萬年曆」（元祿歌舞伎傑作集上卷所收）、寶永四年正月同じく江戸山村座で、津打治兵衛・樋口半右衛門作の「頼政五葉松」（同上）が上演されたが、本作との關係はない。

【梗概】〔第一〕（大序、大内山）安徳天皇御即位の大禮に當つて内侍所が紛失したので、後白河法皇はこの御即位を以て神意に添はざるものと做し、大禮の中止を宣して座を立たれる。（中、高倉通）伊豆守仲綱は途上で平家の侍田原又太郎忠綱に逢ひ、高倉宮が仲綱の許嫁なる忠綱の妹唐國に横戀慕して居られる由を聞かされる。（切、清盛館）清盛は安徳天皇の御即位延引と聞いて大に怒り、後白河法皇を鳥羽の離宮に押籠め奉らうと敦圀くところへ、法皇よりの御使として頼政の妻菖蒲の前が來て清盛を宥める。〔第二〕（口、御室）唐國と母との花見の席へ高倉宮が闖入し、無體にも唐國を引立てようとする。折から傍の幕の中で花見をして居つた頼政が見かねて、次男源太夫判官兼綱をして宮を制せしめる。その際頼政は宮が内侍所を御身に添へ持ち、且つ御謀叛の下心あるを看破し、御味方の契約をする。（切、水野御牧）仲綱が野馬狩をしてゐるところへ宗盛が來合せ、種々妨害を加へた上、仲綱が猪の早太に命じて生捕らせて木の下と名づけた荒馬の額に仲綱といふ烙印などするのを、猪の早太が怒つて追ひ散らす。併し猪の早太は宗盛に對して無禮を働いたといふので、仲綱の勘當を受ける。〔第三〕（口、五郎作店先）千本通の傘屋五郎作は、法皇が宗盛のために鳥羽の離宮に押籠められんとするのを憤り、走り出て御幸の牛車を遮り、警固の侍主馬判官盛久に捕へられる。（切、六波羅）六波羅に引かれた五郎作は、宗盛に向つて自分がその實父なる事を名乘り、彼の無道惡逆を責めて自害する。〔第四〕（口、頼政館）高倉宮の御謀叛顯はれ、田原又太郎の父又左衛門俊綱が討手の一方の大將を承る。又左衛門は豫て頼政が宮方なることを知つてゐたが、武士の盟約を重んじ、宮の御所に押寄せるに先立ち、頼政に迫つて娘唐國を仲綱に嫁入らせる。（切、平等院）又左衛門は堵仲綱に最後の功名をさせようと、己が顔に墨を塗り、仲綱に討たれる。頼政はこれを知つて大に感激し、己も亦又太郎が宇治川に先陣して到るを待つて自害し、又太郎はこゝで飜然と平家を見限る。〔第五〕（口）「菖蒲の前道行」菖蒲の前は、夫や子の行方を慕ひ、狂亂の態で宇治の方へ迷ひ行く。（中、宇治八景）菖蒲の前は宇治川を曳舟して溯る船頭夫婦と道づれになり、道々の宇治の名所についていろ〳〵と尋ねる。ところがこの船頭夫婦は圖らずも舊の家來猪の早太夫婦であつた。（大切、扇の芝）菖蒲の前と猪の早太夫婦が平等院に到り、頼政親子の菩提を弔つてゐると、菖蒲の前は夢現の間に、彼等の亡靈に逢ふ。そこへ又太郎が唐國を連れて尋ね來り、こゝに一同邂逅を喜んで共に再擧を圖る。

【解說】登場の主要人物には、情によつて動くものが絶無で、節義の傀儡に過ぎぬもののみが多いため、活動が皆理詰めであるのは聊か窮屈な感がある。文章も滑稽や洒落に乏しく味がない。佳作とは稱し難いものである。本作は同年三月三日より大阪松島座で歌舞伎に移された。寛延四年七月十五日より豐竹座興行の「頼政扇子芝」は本作の外題替。

【參考】近世邦樂年表　○近松全集第二巻解題（源三位頼政）藤井乙男　○京阪歌舞伎年代記伊原敏郎（歌舞伎連載）　〔高野（正）〕

頼基（よりもと）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】大中臣【歿年】天暦十年（一六一六）歿す（一說天德二年）。享年七十三。【閲歷】天慶八年神祇大副に任じ、天暦五年從四位下に敍した。延喜七年九月十日大井川行幸に供奉して歌を上り、承平四年中宮四十賀の歌を詠み、天德元年、師輔五十賀の歌をよんだ。曾て歌に慢心する能宣（別項）を打擲して叱責した事がある。【作品】家集「頼基朝臣集」（歌の數、群書類從二四八所載本は二十三首、歌仙歌集本は三十首補遺一首にて前者は大井川行幸歌が三首あるに對し、後者は八首がある）。勅撰集に入る歌は、拾遺集その他凡そ十首。「古今集」に入つてゐないが、入つてゐるものよりも知名であると、「袋草紙」に說いてゐる。

（一說岡良の子）
岡良―輔道―頼基―能宣―輔親―伊勢大輔

【參考】歌仙傳○中臣氏系圖　〔西下〕

夜と朝（よるとあさ）　飜譯小說　【譯者】益田克德【原作】英國リットン卿作、「ナイト・エンド・モーニング」。【刊行】明治二十二年九月より六月に亙つて分册刊行（十二册）。二十六年十月一册に合して再刊。十二册本は四六判假裝、繪表紙、各册二葉の插繪（木彫）がある。畫は龜井至一の筆といふ。一册本は菊判假裝、彩色した口繪があるだけで插繪はない。

【梗概】必夫（ヒリップ）・彪甫（ヒューフォルド）は貴族の叔父の大財産を相續して間もなく落馬して死ぬ。遺言狀も結婚證書の寫しも見當らなかつたので、財産は弟呂辨（ロバート）のものになり、妻葛素倫（カソリン）は二子必夫（シドニイ）と志兒を抱へて大に困難する。そして必夫を奉公に出し、志兒を兄に託したまゝ怨を呑んで死ぬ。必夫は剛度（ゴードレー）といふ俠盜の助力によつて佛蘭西に渡り、盜賊の名を貰つたり、美人の戀を得たり、種々數奇な運命を經て軍人として名を揚げる。英國に歸つて叔父に母の怨を報い、身代を取返さうとして機會を狙つてゐる。この間必夫は剛度の敵たる貴族李甫（リルボン）と知つたり、志兒は呂辨の娘華羅（ケラ）と戀仲になつたり、人生の錯綜纏綿が種々ある。結局剛度の養女（實は李甫の血緣の孫）たる豐稔（ホーネ）が、何も知らぬ好色奸惡の李甫に苦しめられてゐるのを助けたお蔭で、ふとした事から父母の結婚の寫しが手に入り、訴訟に勝つて身代を取り返す。だが呂辨の子安曹（アルバ）が母に優しくしてくれたのを思つて呂辨一家を好遇する。志兒は華羅と婚し、自分は豐稔と婚して一家が榮えるといふ。夜が明けて朝になつたところで物語を結んである。

【解說】この譯書に森田思軒の序文があるが、これは明治初期飜譯文藝史を研究する人には大切な文獻である。この譯書自身としても、第一全篇が言文一致である點、第二速記を用ひてゐる點、第三涙香式の飜譯振りである點などで、この時代の飜譯物の轉回點に立つものとして注目される。

【譯者小傳】益田克德は、男爵益田孝の弟。父は益田鳳。嘉永五年正月、佐渡相川町に生れた。初名亞作（やさく）。安政元年江戸に出で翌年函館に移る。萬延元年江戸に歸つて英漢の學を修慕する。（十二）蝦夷の貨幣の昆布・數の子を日本のあらめ・さがらめ・ごまめ等に取替へて通用させる。（下册）（十三）蝦夷に呉服店がはじまり、（十四）遊里新蘆原が開かれる。（十五）「だんかん」は昆布・數の子の取替に私利を營んだが、（十六）義經の計略にかゝつて昆布・數の子はもとより、衣服までも剝ぎ取られる。

以外は短篇である。理想的寫實主義から享樂的寫實主義へ傾いて行つたこの作者の前期と過渡期の作風を代表する選集で、卽ち「老人」（明治四十四年二月）から「范の犯罪」（大正二年九月）までの九篇は前期、「城ケ崎にて」（同六年四月）から「和解」（同年九月）までの五篇は過渡期の作に屬する。この二組の作品群の間には、可なり顯著な心理の相異が認められる。そこな着色畫で畫いてある。　〔石村〕

悦贔屓蝦夷押領（よろこんぶひいきのえぞおさえ）　黄表紙　三册　十五丁十八圖【作者】戀川春町【畫工】北尾政美【名稱】義經の蝦夷征伐を判官贔屓・お目出度・昆布・繪雙紙等にかけた命名である。【刊行】天明八年蔦屋刊【諸本】黄表紙百種（續帝國文庫）・黄表紙集（近代日本文學大系）・黄表紙名作集（關根默庵編）

されたが、本作との關係はない。

【梗概】〔第一〕(大序、大内山) 安徳天皇御即位の大禮に當つて内侍所が紛失したので、後白河法皇はこの御即位を以て神意に添はざるものと做し、大禮の中止を宣して座を立たれる。(中、高倉通) 伊豆守仲綱は途上で平家の侍田原又太郎忠綱に逢ひ、高倉宮が仲綱の許嫁なる忠綱の妹唐國に横戀慕して居られる由を聞かされる。(切、清盛館) 清盛は安徳天皇の御即位延引と聞いて大に怒り、後白河法皇を鳥羽の離宮に押籠め奉らうと敦圀くところへ、法皇よりの御使として頼政の妻菖蒲の前が來て清盛を宥める。〔第二〕(口、御室) 唐國と母との花見の席へ高倉宮が闖入し、無體にも唐國を引立てようとする。折から傍の幕の中で花見をして居つた頼政が見かねて、次第一全篇が言文一致である點、第二速記を用ひてゐる點、第三涙香式の飜譯振りである點などで、この時代の飜譯物の轉回點に立つものとして注目される。

【譯者小傳】益田克徳は、男爵益田孝の弟。父は益田鳳。嘉永五年正月、佐渡相川町に生れた。初名韮作。安政元年江戸に出で翌年函館に移る。萬延元年江戸に歸つて英漢の學を修めたが、才學によつて英學者名村又八郎の養子となり、一時名村一郎と稱した。次いで横濱に赴いて英學を修めた。慶應中幕府の海軍修業生となり、維新の際には榎本武揚の部下となつて函館に脱走せんとしたが、難船して捕はれ、禁錮に處された。明治の初め、赦されて益田莊作に復り、慶應義塾に入つて勉學した。明治四年高松に赴いて英學を教授したが、同五年司法省に出仕して檢事となり、司法卿山田顯義に從つて歐米を巡察した(この前後より克徳と名乗る)。同七年驛遞總監前島密を助けて海上保險條例を編成した。後、自由民權論に共鳴して民間に下り、嚶鳴社派の民間政論家として奔走すること數年、その間東京海上保險會社の支配人として貢獻するところあり、後政界を捨てて實業界に入り、各會社の重役として活動した。明治三十四年四月八日病歿した。享年五十二。〔柳田(泉)〕

夜の光 よるのひかり 小説集 【著者】志賀直哉 【刊行】大正七年一月、新潮社。後縮刷、又增補されて新潮文庫に收められた。【解説】「老人」「襖」「母の死と新しい母」「憶ひ出した事」「クローディアスの日記」「正義派」「出來事」「清兵衛と瓢箪」「范の犯罪」「城ケ崎にて」「佐佐木の場合」「好人物の夫婦」「赤西蠣太」「和解」(別項)の十四篇が收められてゐる。「和解」以外は短篇である。理想的寫實主義から享樂的寫實主義へ傾いて行つたこの作者の前期と過渡期の作風を代表する選集で、即ち「老人」(明治四十四年二月)から「范の犯罪」(大正二年九月)までの九篇は前期、「城ケ崎にて」(同六年四月)から「和解」(同年九月)までの五篇は過渡期の作に屬する。この二組の作品群の間には、可なり顯著な心理の相異が認められる。そこにこの作者の心境の推移を端的に覗ひ得るものとして、又極めて複雑豐富な作者の稟質のいろ〳〵な方面を、殊に優れた表現技巧を窺ひ得る點に於て、最も恰好な選集であるといふことが出來る。〔志賀直哉參照〕〔片岡〕

鎧着用次第 よろひちやくようしだい 故實一帖 【著者】伊勢貞丈 【成立】安永九年五月五日 【刊行】明治三十三年 【諸本】貞丈自筆本に據つた寫本がある。【解説】鎧着用の順序を書にかいて示したもので、初めに「左中將義貞記鎧可レ着次第之事」として鎧着用の次第書を載せ、その終りに、「貞丈按、一條兼良公鴉鷺物語幷に樂人豐原家之祕書、體源抄等に載する所の義家朝臣鎧着用之次第、右之義貞朝臣の記に少しも違ふ所なし。古傳信ずべきものなり」と記して、「義貞記」の信據すべきことを述べ、その次第のまゝに畫いてある。先づ初めに、有文直垂烏帽子着用の主人、無文布直垂侍烏帽子の家臣、無文水干垂髪の童の三人が鎧櫃の前に坐せる圖を掲げ、それより一番浴衣、二番小袖、三番大口、四番亂髪、五番鉢卷、六番弓懸、七番鎧直垂、八番脛巾、九番括、十番鬚當、十一番頬貫、十二番脇立、十三番手蓋、十四番鎧、十五番刀、十六番太刀、十七番征矢、十八番弓と順次に着用して、終りに武裝全く成る樣が細密な着色畫で畫いてある。〔石村〕

悦贔屭蝦夷押領 よろこんぶひいきのえぞおし 黄表紙 三册 十五丁十八圖 【作者】戀川春町 【畫工】北尾政美 【名稱】義經の蝦夷征伐を判官贔屭・お目出度・昆布・繪雙紙等にかけた命名である。【刊行】天明八年蔦屋刊 【諸本】黄表紙百種(續帝國文庫)・黄表紙集(近代日本文學大系)・黄表紙名作集(關根默庵編)等に本文のみを收む。【題材】「殘太平記」(南宗茂著、十二卷)などに記載せる義經島渡りの傳説に據る。

【梗概】〔上册〕「大言」として草雙紙の六義を説く。(一)義經が兄頼朝と不和と言ふは表面だけで、實は秀衡を頼つて、遂にはその領地を奪ふ心であるが、秀衡もさる者、この計畫を悟つて、義經に蝦夷征伐をすゝめる。(二)抜け穴を通過して蝦夷の地に渡り、「だんかん」と言ふ人物を捕へて案内者とし、(三)鞍馬の僧正坊の加護で、「いうもんの瀧」を登り、(四)奥蝦夷の地に到着する。(五)義經は鮒を澤山に燒いて貯へさせ、又米の磨汁をも貯へさせる。〔中册〕(六)「しうれん大王」の數の子で作つた城を、米の磨汁で柔かにし、昆布卷のやうに箸で挟み切る。(八)「しうれん大王」の娘「くわいらん夫人」と義經は契り、蝦夷の主となる。辨慶は女帝「しうれん大王」と契る。(九)「だんかん」は功績によつて龜井・片岡・伊勢・駿河等と同列の臣になる。(十)「だんかん」は陰謀を企て、(十一)「くわいらん夫人」に戀慕する。(十二)蝦夷の貨幣の昆布・數の子を日本のあらめ・さがらめ・ごまめ等に取替へて通用させる。〔下册〕(十三)蝦夷に吳服店がはじまり、(十四)遊里新蘆原が開かれる。(十五)「だんかん」は昆布・數の子の取替に私利を營んだが、(十六)義經の計略にかゝつて昆布・數の子はもとより、衣服までも剝ぎ取られる。(十七)義經は僧正坊の力で、巨額の昆布・數の子の俵の上に、「くわいらん夫人」その他の家來と共に乘つて、(十八)鎌倉に歸つた處、頼朝も大喜びで、その昆布・數の子を淺草の市で賣つて莫大の金を儲け、兄弟で山分けにする。

【解説】天明六・七と二ヶ年間黄表紙の創作を休んだ作者は、天明八年に「鎌倉太平序」と

悦贔屭蝦夷押領

俊綱が討手の一方の大將を承る。又左衛門は豫て頼政が宮方なることを知つてゐたが、武士の盟約を重んじ、宮の御所に押寄せるに先立ち、頼政に迫つて娘唐國を仲綱に嫁入らせる。(切、平等院) 又左衛門は堵仲綱に最後の功名をさせようと、己が顔に墨を塗り、仲綱に討たれる。頼政はこれを知つて大に感激し、己も亦又太郎が宇治川に先陣して到るを待つて自害し、又太郎に首を討たせる。併し又太郎はこゝで飜然と平家を見限る。〔第五〕(口)「菖蒲の前道行」菖蒲の前は、夫や子の行方を慕ひ、狂亂の態で宇治の方へ迷ひ行く。(中、宇治八景) 菖蒲の前は宇治川を曳舟して溯る船頭夫婦と道づれになり、道々の宇治の名所についていろ〳〵と尋ねる。ところがこの船頭夫婦は圖らずも舊の家來猪の早太夫婦であ

天德二年)。享年七十三。【閲歴】天慶八年神祇大副に任じ、天曆五年從四位下に敍した。延喜七年九月十日大井川行幸に供奉して歌を上り、承平四年中宮四十賀の歌を詠み、天德元年、師輔五十賀の歌をよんだ。曾て歌に慢心する能宣(別項)を打擲して叱責した事がある。【作品】家集「頼基朝臣集」(歌の數、群書類從二四八所載本は二十三首、歌仙歌集本は三十首補遺一首にて前者は大井川行幸歌が三首あるに對し、後者は八首がある)。勅撰集に入る歌は、拾遺集その他凡そ十首。「古今集」に入つてゐないが、入つてゐるものよりも知名であると「袋草紙」に説いてゐる。

岡良―輔道―頼基―能宣―輔親―伊勢大輔
(一説河良の子)

【参考】歌仙傳○中臣氏系圖 〔西下〕

報い、身代を取返さうとして機會を狙つてゐる。この間必夫は剛度の敵たる貴族季甫と知つたり、志兒は呂辨の娘華羅と戀仲になつたり、人生の錯綜纏綿が種々ある。結局剛度の養女(實は李甫の血緣の孫)たる豐稔が、何も知らぬ好色奸惡の李甫に苦しめられてゐるのを助けたお蔭で、ふとした事から父母の結婚の寫しが手に入り、訴訟に勝つて身代を取り返す。だが呂辨の子安曹が母に優しくしてくれたのを思つて呂辨一家を好遇する。志兒は華羅と婚し、自分は豐稔と婚して一家が榮えるといふ。夜が明けて朝になつたところで物語を結んでゐる。

【解説】この譯書に森田思軒の序文があるが、これは明治初期飜譯文藝史を研究する人には大切な文獻である。この譯書自身としても、

本書とを創作し、等しく義經を題材としてゐる。「鎌倉太平序」が大田南畝や、實在の人物を暗示するに引かへ、本書は、專ら判官贔屓の精神を以てし、異境の樣子を誇張して想像する。寒國で土用中だけ暖かなる故寒暑が混在する事、昆布を火燵蒲團にするなどの可笑味から、當時の家庭で洗濯や料理に應用する事々を利用する滑稽、金銀の貨幣の無い世界の不便さなどから、判官の悲慘の末路をお目出度にするなど相當に努力のあとが見える。米價の高かつた天明七年に、或は昆布・數の子等の大量を淺草で廉賣した事實があり、それにヒントを得たのではないかとも疑はれる。草鞋紙の六義は、「毛詩」の序や「古今集」の眞名序の風・賦・比・興・雅・頌等になぞらへたもので、極めてかすかながら黃表紙の本質に觸れんとする態度が見え、かゝる點は、後年山東京傳の「作者胎内十月圖」（別項）などで克明に考察されてゐる。三馬は本書を黃表紙名作二十三部中に置くが、作品としては劣り、文章も巧みではない。

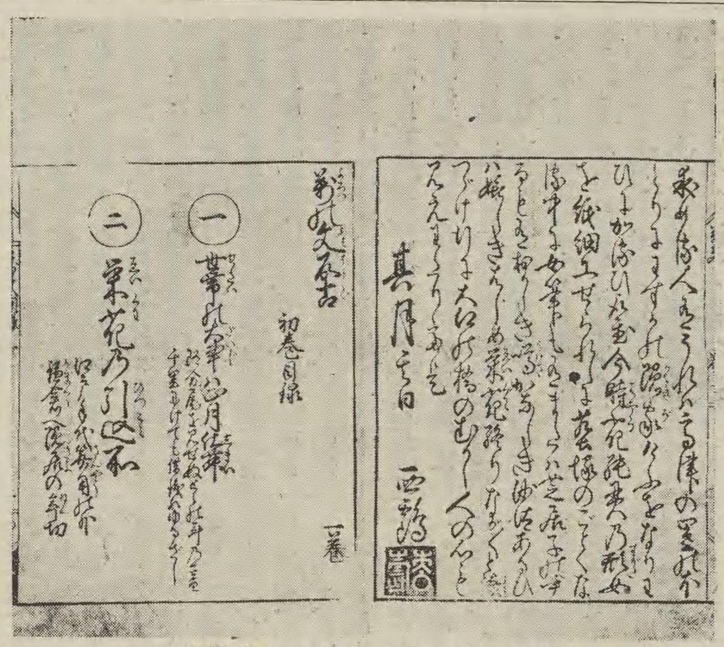
【小池】

萬の文反古 よろづのふみほうぐ 浮世草子 五册

【作者】西鶴か、序には西鶴の署名と松壽の印がある。【刊行】元祿九年。奥附に「元祿九年子ノ正月吉日、江戸萬屋淸兵衞　大坂雁金庄兵衞、京上村平左衞門板」とある。再版本は、奥附に、「正德二壬辰歲九月吉旦　大坂眞齋橋筋呉服町池田屋三良右衞門開板」とある。【名稱】内題には「萬の文反古」とあるが、題簽には「西鶴文反古」とし、その下左に「世話文章」とやゝ小さく書してある。【諸本】西鶴全集（帝國文庫）・西鶴文集（有朋堂文庫）・西鶴名作集（日本名著全集）等所收。

【梗概】卷一・五は各四章、その他は各三章、都合二十章より成り、各章皆書翰の體を取つてゐる。【卷一】（一）播州に商用で行つてゐる父の許から、大阪なる留守居の伜の許へ、差迫つた大晦日の處置に就いて指圖をしてやつた手紙。（二）江戸の或る豪家の手代九人連名を以て、若き當主の奢侈を訴へて整理をつける間、鎌倉に隱居するやう計らはれたいと、その娘の嫁入支度を賴まれた京の弟から、その贅澤を誡めてやつた手紙。（二）父の讐を探してゐる武士の兄弟があつて、弟が或る日讐を見かけたが、欺かれて見逃したのを遺憾とし、單身その搜索に行方をくらましたことを兄より知人に知らせた手紙。（三）故郷仙臺に妻を置き去りにして京に出た男が、京で屢々妻を持ち替へ、その入費のために貧に落ちたことを故郷の知人に知らせた手紙。【卷二】（一）京の花時の雜沓を嫌つて九州熊本に行つてゐる道心者から、熊本で得た男色の戀を京の知人に知らせた手紙。（二）大津の富者が死んで、その遺書を開いて見ると、分配する遺産といふのは悉く手形で、現金はただ僅少であつたこと、並にその寡婦が豫ねて小錢を盜み貯へて長持に入れて置いたところ、それが露見したことを知らせた手紙。（三）主人の銀を遺失した武士の財布を拾得して返さなかつた町人が、そのために自殺した武士の怨念に祟られて、死に勝る苦患を受くるのを懺悔し、出家した弟に送つた代筆の手紙。【卷四】（一）旅に出て久しく歸らなかつた養子を死んだものと信じて、養父母がその弟を迎へて娘と夫婦とした所、その後男が歸つたので、兄弟は熊野の山中で果し合うて死に、妻は行方不明となつたことを知らせた手紙。（二）京の從兄弟の許から、江戸に下りたいといふ意をいつてよこしたものに對して、若し十分に勤儉をなす覺悟があらば、旅費を送るから來いと、勤儉に關する覺書を示してやつた手紙。（三）放蕩のために飛驒の山中に追はれた男が、異腹の兄弟の許へ、京に殘した借金の始末等について賴み、又隱居が密に庭中に埋めて置かれた銀を掘り出して、費消した祕密を告白してやつた手紙。【卷五】（一）故郷を出奔して江戸で成功した男から自分の成功の原因を記して知らせた手紙。（二）姦通の上、本夫を殺害して出奔した男に、死人の靈がつき纏ふので、男は途中から故郷に引返して自殺したことを知らせ、且つその遺子の盲目なるものの行末を賴んでやつた老婆の手紙。（三）秋風立てたお客へ、遊女から薄情の怨みを述べ、且つ遊女の意氣地を以て自殺する旨をいひやつた手紙。（四）吉野に引籠つた僧の許から、京の知人の許へ、夜伽の少年を一人世話してくれと賴んでやつた手紙。

【解說】序・本文とも版下の筆蹟が西鶴のに酷似してゐる。但し序には「其月其日」と曖昧に記して成立年月の明記がない。この事と、これ程の完成した佳作が遺稿として出版されたこととは、本書の西鶴の眞作であるかどうかを疑はしめたが、未だ何れとも定論がない。各書翰の內容は一定してゐないが、大體は町人物に近い。併し中には「安立町の隱家」の如き武家物に類するもの、「御恨みを傳へまいらせ候」の如き好色物に類するもの、「京都の花嫁ひ」「櫻よし野山難義の冬」の如き、男色物に類するものもある。抑々本書第一の特徵は、書翰體を擇んだ形の上に在る。書翰體は、既に本書以前に於て、「滿雪物語」「錦木」（以上假名草子）、「好色三島曆」「好色文傳授」（以上浮世草子）（別項）などがあるが、要するにこれ等は戀愛好色の範圍を出でない。それを本書に於ては上述の如く、廣く生活の各方面に亙つて、更に深く精しく人性を穿ち、生活の相を描き出してゐる。この點に於て、江戸時代書翰體文學の中の白眉である。但し各書翰の終りに附した解說の短文は、文學としては全く蛇足であるばかりでなく、寧ろ興味を殺ぐもので



萬の文反古（東大圖書館藏）

折から攝津・河內・和泉の國司陰山中納言信之がそこへ通りかゝり、雙方の爭論を聽き、俊德丸の證據物件たる馬印を割つてその中より通俊の讓狀を發見し、俊德丸の家督たるべきを裁許する。繼室は無念遣る方なく、夜陰に乘じただ一人密かに忍び出で、墓原に到り、とある松が枝に一百三十六本の釘を打ち、俊德丸に癩相を授け、その命を取つて給はれと呪詛嘗て信濃守の時受けた善光寺の印文を取出して與ふれば、衰へ果てし姿も忽ち兩眼開けて麗しい男となつた。【第四】かくてその後、俊德丸夫婦は中光夫婦とも再會し、打連れて姬の父國司の許に到れば、中納言夫婦の悅び一方ならず、俊德丸を壻にとり、元服して名を高安權の左衞門信好と改めさせる。一方般若五郎廣景は御臺並に乙若次郎丸を追放して高安中村座初演。最初は「鏡山」の二番目であつたが、一番目の評惡しく、二番目が好評なので、漸次書き足して通し狂言とした。

【役割】伊豆屋下男忠助・八丁礫の喜平次・觀音久次（市川小團次）、赤間源左衞門・井澄屋多左衞門（三代關三十郎）、藍屋娘お鶴（中村歌女之丞）、伊豆屋與五郎（市川猿藏）、海松杭の松・番頭藤八（中山市藏）、山鹿毛平馬・鼈甲屋金五郎・蝙蝠安（中村

に考察されてゐる。三馬は本書を黄表紙名作二十三部中に置くが、作品としては劣り、文章も巧みではない。【小池】

萬の文反古　よろづのふみほうぐ　浮世草子　五册

【作者】西鶴か、序には西鶴の署名と松壽の印がある。【刊行】元祿九年。奥附に「元祿九年子ノ正月吉日、江戸萬屋清兵衛　大坂雁金庄兵衛、京上村平左衛門板」とある。再版本は、奥附に、「正德二壬辰歳九月吉旦　大坂眞齋橋筋吳服町池田屋三良右衛門開板」とある。【名稱】内題には「萬の文反古」とあるが、題簽には「西鶴文反古」とし、その下左に「世話文章」とやゝ小さく書してある。【諸本】西鶴全集(帝國文庫)・西鶴文集(有朋堂文庫)・西鶴名作集(日本名著全集)等所收。

【梗概】卷一・五は各四章、その他は各三章、草子)(別項)などがあるが、要するにこれ等は戀愛好色の範圍を出でない。それを本書に於ては上述の如く、廣く生活の各方面に亙つて、更に深く精しく人性を穿ち、生活の相を描き出してゐる。この點に於て、江戸時代書翰體文學の中の白眉である。但し各書翰の終りに附した解説の短文は、文學としては全く蛇足であるばかりでなく、寧ろ興味を殺ぐものである。【藤村】

弱法師　よろぼし　「繼子物(まゝこもの)の謡曲」を見よ。

弱法師　よろぼし　淨瑠璃　五段　時代物

【作者】未詳。「柳亭淨瑠璃本目錄」には、「近松作といひつたふ」とある。【興行】「壽福年代記大成」元祿七年の條に、「六月二十四日より十月まで洛東眞如堂におゐてしなのゝ國善光寺の如來かいちやう。それより大坂天王寺にて又かいちやう」とあり、作中にも五段目に、「此度ふしぎに御本尊並にしやか佛ねはんのそんざう、善光善佐やよひの御影、天王寺へらいりん有諸人におがまれ給ふよし、」とか「げに長月の、中の五日のくもはれて、」等の句があるから、元祿七年九月の上演と推定される。【諸本】八行五十丁本、山本九兵衛板(竹本義太夫正本)。繪入細字十七行本、板元缺(同上)。近松全集第四卷所收。【題材】謡曲「弱法師」「天王寺物狂」、説經淨瑠璃の「しんとく丸」(別項)等。「外題年鑑」の宇治加賀掾の語物中にも「弱法師」と見えてゐるが未見。

【梗概】【第一】河内國高安の長者左衛門尉通俊の葬儀に當り、侯臣般若五郎廣景が長男俊德丸を差措いて二男次郎丸を先に燒香せしめんとするや、家の執權柳井中光は繼室並に廣景等の陰謀を看破し、俊德丸が先づ燒香すべき事を主張し、互に拔き合せての爭ひとなる。折から攝津・河内・和泉の國司陰山中納言信之がそこへ通りかゝり、雙方の爭論を聽き、俊德丸の證據物件たる馬印を割つてその中より通俊の讓狀を發見し、俊德丸の家督たるべきを裁許する。繼室は無念遣る方なく、夜陰に乘じただ一人密かに忍び出で、墓原に到り、とある松が枝に一百三十六本の釘を打ち、俊德丸に癩相を授け、その命を取つて給はれと呪詛する。【第二】俊德丸は豫て言ひ交せる陰山中納言の息女露の前に會はんために、中光と共に草紙賣親子に身を窶して中納言の館を訪れる。こゝで俊德丸が姫の母上の求めに應じて書物の物語をする草紙盡しの節事がある。かくて姫と深き契を交した俊德丸は、深更に及んで別れを惜しみながら歸館の途につく。豫てから俊德丸を亡きものにせんと機會を狙つてゐた廣景がこれを知り、一味を引連れ途上に要して打つてかゝるが、中光の計略により主從は無事に逃れる。【第三】中光夫婦は若君を伴ひ或る片里に身を隱し時節を窺つてゐる中、俊德丸は繼母の呪詛のため惡疾に罹り、終に盲目となる。貧苦の中にも中光夫婦が種々と介抱するうち或る夜若君の藥鍋を覆した野良犬を打懲さうとして中光が過つて我が子の國若を撲ち殺す。夫婦の悲嘆も我が身よりと俊德丸は業病は諸人に面をさらせば本復すると聞けば、所詮この家を去るに如かずと、密かに家を脫れる。(露のまへ道行)露の前は俊德丸が失踪せる事を聞き、その行方を尋ねるため家を出て、諸所の神社・佛閣を拜み廻れる末天王寺に來り、こゝで多くの異形異類の乞食非人共に施行する。その際後れて來た弱法師と綽名せられた乞食に國所を聞き糺して、圖らずも俊德丸なりし事を知り、守袋より父が嘗て信濃守の時受けた善光寺の印文を取出して與ふれば、衰へ果てし姿も忽ち兩眼開けて麗しい男となつた。【第四】かくてその後、俊德丸夫婦は中光夫婦とも再會し、打連れて姫の父國司の許に到れば、中納言夫婦の悦び一方ならず、俊德丸を堵にとり、元服して名を高安權の左衛門信好と改めさせる。一方般若五郎廣景は御臺並に乙若次郎丸を追放して高安を押領したが、これを知つた左衛門信好は、養父に後援を請ひ、和泉・河内の勢を催して廣景を攻めこれを走らせる。【第五】信好は豫て病氣平癒の禮參りに信濃善光寺へ詣でたく思つてゐた折柄、御本尊並に釋迦涅槃の尊像、善光・善佐・彌生の御影が天王寺へ來臨ありしを幸ひに參詣せんと志し、且つ自分並に中光は、樂人掃部の門弟なれば聖靈會の音樂を勸めんと言へば、中納言夫婦も贊同し、當日は一家打連れて參詣する。さて既に舞曲も終つて信好・中光が舞臺を下りようとするところへ、群集の中より廣景等の一味が躍り出て打つてかゝるが、佛力・人力によつて目出度く搦め捕へられる。

【解説】手際が幼稚であつて、特に第一・二段に於てこの感が著しい。この兩段には蛇足と思はれる如き場面も尠くなく、到底近松の作と見做すことは出來ない。なほ本作の系統は後に「攝州合邦辻」(別項)と展開して行つた。

【參考】近世邦樂年表(義太夫節之部)○近松全集第四卷解題　藤井乙男　【高野(正)】

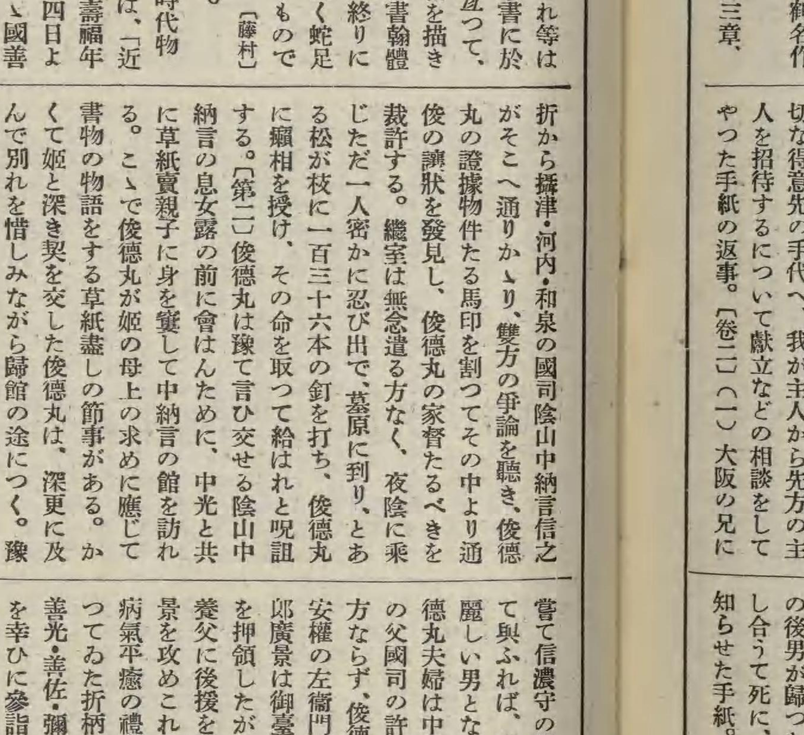
與話情浮名横櫛　よはなさけうきなのよこぐし　脚本

【名稱】主人公與三郎の與を取つて世に替へ、お富の婀娜名横櫛で結んだ。【通稱】切られ與三【與行】嘉永六年三月十四日初日、江戸中村座初演。最初は「鏡山」の二番目であつたが、一番目の評惡しく、二番目が好評なので、漸次書き足して通し狂言とした。

【役割】伊豆屋下男忠助・八丁礫の喜平次・觀音久次(市川小團次)、赤間源左衛門・井澄屋多左衛門(三代關三十郎)、藍屋娘お鶴(中村歌女之丞)、伊豆屋與五郎(市川猿藏)、海松杭の松・番頭藤八(中山市藏)、山鹿毛平馬・鑓甲屋金五郎・蝙蝠安(中村鶴藏)、隼人妻小笹(中村歌六)、横櫛のお富・女護の島梅薫女(尾上梅幸)、伊豆屋與三郎後に向疵の與三・御曹子爲朝・本田次郎親常(八代市川團十郎)。

【諸本】脚本集(有朋堂文庫)下卷に所收【題材】長唄の唄ひ手四代芳村伊三郎が素人の時代、木更津で博奕打の妾と密通し、顯はれて無慘な斬られ方をしたが、不思議に命が助かつて江戸へ出た。その實話を元に乾坤坊良齋が講釋に脚色し、高座の流行讀物となつてゐたので、如皐が歌舞伎に仕組んだもの。

【梗概】【序幕】(木更津汐干狩)赤間源左衛門の妾お富、子分を伴ひ汐干狩に來る。江戸伊豆屋の息子與三郎、放埒の結果この地に預けられ、鰹甲屋金五郎に意見される。(海岸)お富と與三郎は通りかゝつて互に見染め合ふ。【二幕】(源左衛門別莊)源左衛門と一味して穗積隼人を亡き者にせんと企てる山鹿毛平馬は、盜んだ眞鶴の香爐を井澄屋の手代松兵衛に渡して百五十兩受取る。源左衛門鎌倉へ出立。落語家相生を媒介に心を明かし合つたお富與三郎の文は、子分海松杭の松に拾はれる。(裏手)源左衛門は、松の密告に旅立ちを中止する。(別莊座敷)與三郎お富密會の場へ源左衛門と子分の者に踏み込まれる。(海岸)お富は逃げ出し、松に追はれて遂に海中へ投身する。(元の座敷)源左衛門等は與三郎を散々に



初卷冒頭

圖書館藏)

親類の老人に宛てて賴んでやつた手紙。(三)大阪を出奔して江戸に下つた男から、貧窮のあまり再び大阪に歸ることを思ひ立つたが、旅費がないから十匁與へてくれと大阪の兄へ賴んでやつた手紙。(四)吳服屋の手代から大切な得意先の手代へ、我が主人から先方の主人を招待するについて獻立などの相談をしてやつた手紙の返事。【卷二】(一)大阪の兄に現金はただ僅少であつたこと、並にその寡婦が豫ねて小錢を盜み貯へて長持に入れて置いたところ、それが露見したことを知らせた手紙。(三)主人の銀を遺失した武士の財布を拾得して返さなかつた町人が、そのために自殺した武士の怨念に祟られて、死に勝る苦患を受くるのを懺悔し、出家した弟に送つた代筆の手紙。【卷四】(一)旅に出て久しく歸らなかつた養子を死んだものと信じて、養父母がその弟を迎へて娘と夫婦とした所、その後男が歸つたので、兄弟は熊野の山中で果し合うて死に、妻は行方不明となつたことを知らせた手紙。(二)京の從兄弟の許から、江戸年を一人世話してくれと賴んでやつた手紙。【解説】序・本文とも版下の筆蹟が西鶴のに酷似してゐる。但し序には「其月其日」と曖昧に記して成立年月の明記がない。この事と、これ程の完成した佳作が遺稿として出版されたこととは、本書の西鶴の眞作であるかどうかを疑はしめたが、未だ何れとも定論がない。各書翰の内容は一定してゐないが、大體は町人物に近い。併し中には「安立町の隱家」の如き武家物に類するもの、「御恨みを傳へまいらせ候」の如き好色物に類するもの、「京都の花嫁ひ」「櫻よし野山雜義の冬」の如き、男色物に類するものもある。抑々本書第一の特徴は、書翰體を擇んだ形の上に在る。書翰體は、既に本書以前に於て、「滿雪物語」「錦木」(以上假名草子)、「好色三島暦」「好色文傳授」(以上浮世

斬り苛(さいな)み、虫の息の體を俵へ入れて藍屋へ送る。(船中)井澄屋番頭多左衞門、お富を助け上げる。〔三幕〕(吾妻明神)藍屋娘お鶴と伊豆屋與五郎の戀。平馬、お鶴に横戀慕するのを隼人の妻小笹が支へ、平馬が質入れした香爐の手形を拾ふ。(源氏店)平馬と番頭藤八の密談。多左衞門の妾となつてゐたお富は雨宿りした藤八を内へ伴ふ。(妾宅座敷)藤八、お富へ戀慕。與三郎は向疵といふ諢名の惡者になり、蝙蝠安に連れられて強請に來り、圖らずお富に逢ひ、心變りを責めるうち多左衞門歸り扱ふ。多左衞門再び出た後、與三郎入り込んでお富と情を溫め、藤八を駕籠へ入れる。〔四幕〕(雪の下井澄屋)お鶴と與五郎へ多左衞門が意見。(店先)お富與三郎は、藤八を入れた駕籠を質に持ち込み、眞鶴の香爐を請け出さんとして平馬と爭ひになる。多左衞門仲裁。小笹出て香爐を質請け。與三郎は小笹を實母と知り驚く。多左衞門はお富と兄妹の名乘り、お富と與三郎は金を貰つて悄然と立ち退く。(野陣ケ原)源左衞門・平馬、小笹を殺して香爐を奪ふ。(稻瀨川三昧)お富・與三郎を捕人が追ふ。(野陣ケ原)兩人通りかゝり、小笹殺しの嫌疑にて捕へられる。〔五幕〕(女護島)御曹子爲朝、女護島へ渡つて梅薰女と色模樣。八丁礫喜平次の注進。常磐津淨瑠璃「島廻色爲朝」。(海中孤島)捕へられて島へ送られた與三郎、島拔けをして辿りついた島に一睡の夢を結ぶのが前場である。海中に流れ寄つた惡人の密書を手に入れる。〔六幕〕(飛鳥山)與五郎、左近の妻關路に逢つて穗積家滅亡の事を聞く。(辨天道)惡人達、お鶴を奪はんとす。(山下)非人にやつした與三郎、源左衞門が來る事を聞く。(辻堂)久次、關路を斬つて金を奪ふ。(山下)與三郎、源左衞門を斬らんとして失敗。(山上)巡檢中の本田親常、與五郎を助けて平馬等の惡事を知る(この幕遂に上場を見ず)。〔七幕〕(元山町伊豆屋)伊豆屋喜兵衞は伜與三郎の忌日を弔ふ。(夜番小屋)下男忠助は夜番に出て與三郎に逢ひ、詮議の嚴しい事を告げる。與三郎は名乘つて親を助けんと云ふを忠助が意見する。(伊豆屋表口)與三郎は忠助の情にて、それとなく父に逢ふ。〔大詰〕(觀音久次内)お富、久次の世話になつてゐる。與三郎、偶然二人に逢ひ、一宿。(裏手)海松杭の松、香爐を盜む。(久次内)久次は切腹して血汐に祕藥を合せて與三郎に服させる。與三郎の病ひが癒える。久次は穗積の家來筋である。成川民部の計ひで與三郎次郎が裁判で解決をつげる腹案であつたが、大入りなのでこの場で終つた。

【脚色】この作者の癖で、無理に冗漫に墮せしめた嫌ひはあるが、主役を團十郎の柄に見立てたのが巧く、筋も入り込まず、無理がなく運んである。源氏店の場は、幕末江戸市井の描寫が巧みに、役々の性格も面白く書き分けてあるので、盛んに上場されてゐる。初演が大當りで、その影響で度々舞臺に上るのも、主役の俳優の人氣が强かつた爲めであるが、脚色者の巧緻も勿論、否むことは出來ない。

【備考】河竹默阿彌はこの狂言を增補して「八幡祭小望月賑(やはたまつりよみやのにぎはひ)」(別項)として縮屋新助と連絡させ、又「若葉梅浮名横櫛」「月宴升毬栗(つきのえますのいがぐり)」等の書き替へも作つた。

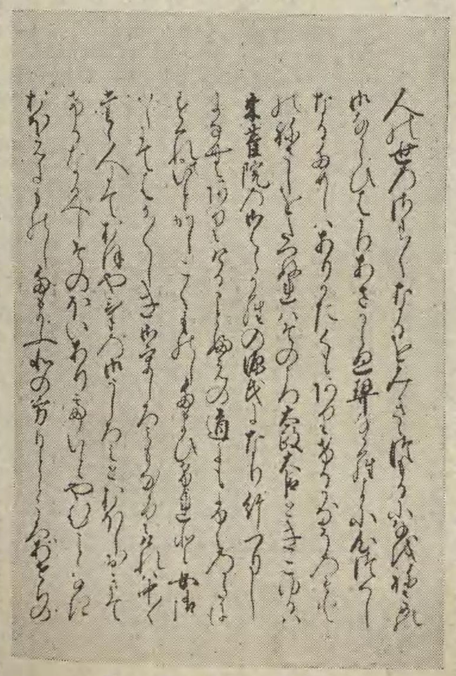
【參考】演藝書報(大正四ノ五・六、大正五ノ一一)○歌舞伎(一七・七六・九八・一〇一)〔溫美〕

夜半の寢覺(よはのねざめ) 物語 五卷(一本は三卷に分つ)

【作者】未詳。傳說によれば「更級日記」の著者で、且つ「濱松中納言物語」(別項)の作者でもあると稱せられる菅原孝標女とされてゐる。【名稱】「無名草子」に「夜半の寢覺」とある。併し、東北帝國大學圖書館藏舊狩野文庫本・靜嘉堂文庫藏本・佐佐木信綱氏藏本・帝國圖書館藏本には「夜の禰覺」とあり、又前田侯爵家藏本には單に「寢覺」とのみ書かれてある(何れも外題。內題はない)。現存諸本の間にはさして異同はないが、卷序は諸本不同になつてゐる。今その卷序を示せば次の通りである。卽ちこのうち、前田家本の卷一は、東北帝國大學藏舊狩野文庫本の卷一及び卷三に、その卷二は、卷二及び卷四の第三十四枚目オ五行までに、その卷三は、右卷四の殘部及び卷五に各々相當してゐる。靜嘉堂本・帝國圖書館本の卷序は佐佐木氏本と同じである。而してその卷序は、物語の內容から推して前田家本が最も正しきものと考へ得られるが故に、東北帝國大學藏舊狩野文庫本以下の四本を、その正しき順序に改めれば、東北狩野本一・三・二・四・五、佐佐木氏本・靜嘉堂本・帝國圖書館本、五・四・一・二・三となる理である。なほ東北狩野本での卷三の冒頭は勿論、前田家本では、東北狩野本の卷一に當るものの後に、行も改めず、續けて書かれて一册になつて居り、第二册・第三册も同樣である。これ等の諸本は何れも中間に數卷、終りに一卷ばかりの缺卷があるとされてゐる。別に、「國文學全史平安朝篇」には、中村秋香氏

前田家本	東北大學狩野本	佐佐木氏本
一、人の世の	一、人の世の	一、なになり袖の
二、なになり袖の	二、なになり袖の	二、御むかへに
三、たいの御方	三、たいの御方	三、かしこには
四、御むかへに	四、御むかへに	四、たいの御方
五、かしこには	五、かしこには	五、人の世の
三、五月二十日の月		

結尾が「後の世をだにいかでと思ふを、さすがにすが〳〵しく思ひたつべくもあらぬほだしがちになりまさるこそ、心うけれと、夜の寢覺絶ゆるまなくとぞ」となつてゐることより推して、或は「夜の禰覺」を、最も安當な題號と見るべきであらう。【成立】作者を孝標女とする傳說に從へば、大略後冷泉帝の時代か。【諸本】所傳本は極めて稀で、しかも何れも完本ではない。現存の寫本としては、佐佐木信綱氏・靜嘉堂文庫・東北帝國大學圖書館・帝國圖書館(各五册)・前田侯爵家(上中下三册)の各藏本があり、何れも藤岡作太郎(國文學全史平安朝篇)によつて紹介せられた黑川本(五册)の系統本である。現存諸本



前田家本 夜半の寢覺

藏本(五卷)といふものが說かれてゐる。この本は現存本の系統とは全く文章を異にした後世の書きなほし本のやうである。なほこの外に、原富太郎氏の所藏にこの物語の繪卷一卷がある。數節の殘闕にすぎないが、遲くも鎌倉時代初期の製作に成り、その繪詞は缺卷の部分に當ると想像される。この物語の刊本は各時代を通じて全くない。但し繪卷は大正八年にコロタイプ版で出版されてゐる。

將と僞る。中の君は中納言を宮の中將と信じたまゝで別れるが、再び中納言が訪れて來た時は、最早其處にはゐなかつた。中納言は中の君の姉大君と結婚を濟ますが、僧都の家の一夜を忘れ難く、妹の中宮に奬めて僧都の姪を出仕させてから思ひを達せんともくろむ。一夜とのゐ所で宮の中將と色々の女の噂などをして、ことさら僧都の姪の話などを持ち出す。やがて召されて僧都の姪が中宮の許に出

汰、大臣の出家したこと等のために、廣澤を訪れる。入道は後事をすべて中納言に賴み、中の君のことは事情を知らないので殊に深く後見して呉れるやうに賴む。中納言も後めたく思ふが、萬事引受ける。やがて生れた姫君は中納言が自分の父の家に託し、中の君は廣澤へ行つて父の入道と會見し、そのいたく變り果てた姿に驚く。その間にも中納言は戀し

遂に成らずして中の君は左大將に嫁し、男子を生む。これは實は中納言の子供であつた。中の君は左大將の愛にひかれて、忠實な妻として勤める。中納言は悲歎の極、中務卿の姫君や朱雀院の女一宮と絶望的な戀をする。これが原因で大君は產褥で死ぬ。中務卿の姫君も女一宮も幸福を中納言には與へなかつた。左大將は先妻の娘を中納言に與へようとする

藏本（五卷）といふものが說かれてゐる。この本は現存本の系統とは全く文章を異にした後世の書きなほし本のやうである。なほこの外に、原富太郎氏の所藏にこの物語の繪卷一卷がある。數節の殘闕にすぎないが、遲くも鎌倉時代初期の製作に成り、その繪詞は缺卷の部分に當ると想像される。この物語の刊本は各時代を通じて全くない。但し繪卷は大正八年にコロタイプ版で出版されてゐる。

【梗概】（五卷本の區劃に從つて說くことにする）。〔卷一〕朱雀院の御兄弟である源氏のおとどには四人の子供があつた。大君・左衞門督・中の君・宰相中將である。その中で、中の君は容貌ことに美しく、父の才能を享け繼いで音樂に巧みであつたが、父の繪詞は缺卷の部分に當ると想像される。この物語の刊本は各時代を通じて全くない。但し繪卷は大正八年にコロタイプ版で出版されてゐる。

【梗概】（五卷本の區劃に從つて說くことにする）。〔卷一〕朱雀院の御兄弟である源氏のおとどには四人の子供があつた。大君・左衞門督・中の君・宰相中將である。その中で、中の君は容貌ことに美しく、父の才能を享け繼いで音樂に巧みであつたが、その幼い頃の夢に天女があらはれ、その天女から琴の祕曲を授けられ、且つ將來數奇な運命に弄ばれる事を豫言された事があつた。當時左大臣が關白をしてゐたが、その女は春宮を生み中宮となつてゐた。中宮には中納言の兄があつたが、衆望を一身に集めた貴公子であつて、娘持つ親達は無上の幸運として中納言との緣組を望まぬ者はなかつた。源氏のおとどは順序として長女大君を中納言に嫁する事として支度するが、丁度中君が御年當りのためにこれを親類の僧都の家に四十五日の方違へに預けた。その時偶々中納言は、病のために退いて治療してゐる乳母を見舞に來るが、乳母の家は丁度この僧都の家の隣であつた。こゝで中納言は、中の君が月を眺めながら彈いてゐる琴の音に誘はれて、その美しさに驚き、遂に紛れ込んで契を結んでしまふ。ところが案內人の話から中納言は中の君を僧都の姪と誤信し、當座の便宜から自分をその女の情人である式部卿宮の中將と僞る。中の君は中納言を宮の中將と信じたまゝで別れるが、再び中納言が訪れて來た時は、最早其處にはゐなかつた。中納言は中の君の姉大君と結婚を濟ますが、僧都の家の一夜を忘れ難く、妹の中宮に奬めて僧都の姪を出仕させてから思ひを達せんともくろむ。一夜とのゐ所で宮の中將と色々の女の噂などをして、ことさら僧都の姪の話などを持ち出す。やがて召されて僧都の姪が中宮の許に出仕する。美しいが全く別人で當夜の姬君とは比較にならない。しかしこの女は、かの夜傍に琵琶を彈いてゐた人らしいので、遂にその口からあの夜の女が現在自分の妻の妹であつたことを知り、大に驚く。一方中の君は一夜の契に懷姙し、しかも姉君の夫である中納言の聲咳がその人であつたことを知り、中の君の驚きと悲みは一倍と甚しかつた。思ひ切れぬ二人は奇しき運命に泣きながらそれ以後中納言は人目を忍んでは中の君を訪れる。中の君の女房や僧都の計らひで九條の僧都の家で對面したりする。女房は中の君の兄の宰相中將にも打ち明け、中納言は妹の中宮に總てを語る。この二人は後まで、何かにつけて力を添へてくれる。〔卷二〕中の君は日を經ても悲しみと懷姙のために、病氣となる。理由を知らぬ人達は處を變へてはと一條の別邸に移轉させる。父のおとどは心痛のあまり自分も病み付き、この機に、日頃の出家の本意を遂げ、廣澤の池の傍に隱居して佛事に勤めることになる。中の君の出產も近づくので、宰相中將の乳人が石山にゐる緣で其處へ行つて、密に產を濟ませることにする。中納言も訪れて來て色々に慰める。やがて女子出產。中納言は石山のことも氣になるが、大君への無沙汰、大臣の出家したこと等のために、廣澤を訪れる。入道は後事をすべて中納言に賴み、中の君のことは事情を知らないので殊に深く後見して呉れるやうに賴む。中納言も後めたく思ふが、萬事引受ける。やがて生れた姬君は中納言が自分の父の家に託し、中の君は廣澤へ行つて父の入道と會見し、そのいたく變り果てた姿に驚く。その間にも中納言は戀しさに堪へかねて、歌を贈つたり、中の君の部屋の格子を訪れたりするので、口喧しい女房等に見つけられるやうなこともあり、それが自然と大君の耳にも入り、此處でまた中納言とその妻と中の君の苦しみが續けられる。大君と同腹の兄なる左衞門督は、大君に同情して中納言と中の君との關係を父の入道に告げる。入道は宰相中將を詰問するが、中將は否定する。中納言夫妻の仲は益々面白くなく、中の君はその立場に苦しんで、遂に廣澤に逃れてしまふ。或る冬の夜、中納言は降りしきる雪を冒して、密かに廣澤に訪ねて來るが、遂に中の君に逢へずに歸らうとする時、矢張り大雪を冒して宮の中將がやつて來るのを見て嫉妬に苦しんだりする。明けて翌年の正月、中納言は廣澤に入道を訪ねて、よもやまの物語をして果しもなかつた（以上で卷二は終るが、現存寫本の卷二と卷三との間には、藤岡作太郎博士の言の如く大きな闕卷があつて、三卷以後の意味は非常にとり難い。今、同博士の紹介した中村本の梗概に依つて、この闕卷の部分を補つて置く）。こゝに中納言の有力な二人の競爭者が現はれる。叔父の左大將と帝とであつた。遂に左大將が勝利を得て中の君との婚約が成立つ。その間にも中納言は、侍女や宰相中將の案內で中の君と逢ふ。何とかしてこれを隱さうとするが、遂に成らずして中の君は左大將に嫁し、男子を生む。これは實は中納言の子供であつた。中の君は左大將の愛にひかれて、忠實な妻として勤める。中納言は悲歎の極、中務卿の姬君や朱雀院の女一宮と絕望的な戀をする。これが原因で大君は產褥で死ぬ。中務卿の姬君も女一宮も幸福を中納言には與へなかつた。左大將は先妻の娘を中納言に與へようとするが、中納言はこれを拒絕する。その中に左大將は、中納言に北の方中の君のことを託して歿くなる。昔から中の君を思つてゐた帝は、左大將の歿後中の君を尙侍にしようとなさるが、中の君はその第一の繼女を自分の代りにおすゝめする（繼女の參內の支度をしてゐる所から現存の諸本の卷三は始まるのであるが、この脫落部分は、上述の中村本と必ずしも一致はしてゐないらしく、中納言と中の君との間の子女は、中村本では二人であるが、現存の諸本では卷三の初めに於て既に男一人女二人の三人である。又朱雀院の女一宮は現存の諸本の卷三では中納言の妻であるが、中村本の梗概では二人の緣組は不成立に終つてゐる。その他細部の插話にもかなりの相違があつたらしい）。〔卷三〕尙侍は參內して藤花殿に入る。繼母の中の君と中納言の後見が總て立派で、故左大將の知人達は喜ぶし、帝の御覺えもめでたかつた。中の君は尙侍に從つて參內し、局や衣服等の世話をしたが、帝はこの機に何とかして中の君と逢つて多年の心の內を述べたいと御考へになる。朱雀院の大皇宮と云ふ方が居られ、自分の娘女一宮は中納言の妻であるが、中納言は中の君に惹かれて宮を愛さないので、中の君と帝とを結びつけて我が女の幸を計らうとして、中納言と中の君との間を妨げる。中納言は帝が中の君の寢所に忍んで來られ

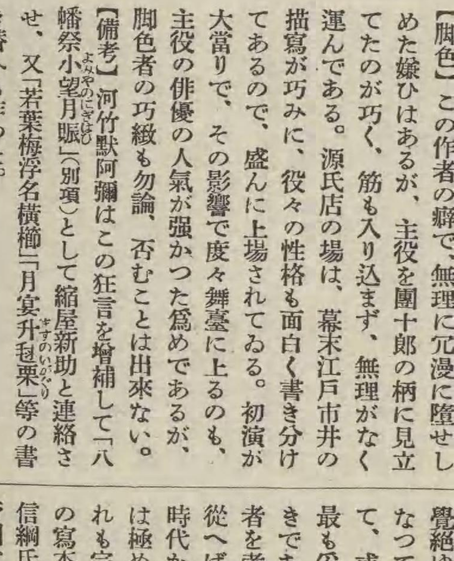
【脚色】この作者の癖で、無理に冗漫に墮せしめた嫌ひはあるが、主役を圍十郎の柄に見立てたのが巧く、筋も入り込まず、無理がなく運んである。源氏店の場は、幕末江戸市井の描寫が巧みに、役々の性格も面白く書き分けてあるので、盛んに上場されてゐる。初演が大當りで、その影響で度々舞臺に上るのも、主役の俳優の人氣が强かつた爲めであるが、脚色者の巧緻も勿論、否むことは出來ない。

【備考】河竹默阿彌はこの狂言を增補して「八幡祭小望月賑（よみやのにぎはひ）」（別項）として縮屋新助と連絡させ、又「若葉梅浮名横櫛」「月宴升毬栗（すのいがくり）」等の書き替へも作つた。

【參考】演藝畫報（大正四ノ五・六、大正五ノ一一）○歌舞伎（一七・七六・九八・一〇二）〔還美〕

夜半の寢覺（よはのねざめ）物語　五卷（一本

覺絕ゆるまなくとぞ」となつてゐることより推して、或は「夜の禰覺」を、最も妥當な題號と見るべきであらう。【成立】作者を孝標女とする傳說に從へば、大略後冷泉帝の時代か。【諸本】所傳本は極めて稀で、しかも何れも完本ではない。現存の寫本としては、佐佐木信綱氏・靜嘉堂文庫・東北帝國大學圖書館・帝國圖書館（各五册）・前田侯爵家（上中下三册）の各藏本があり、何れも藤岡作太郎（國文學全史平安朝篇）によつて紹介せられた黑川本（五册）の系統本である。現存諸本



前田家本　夜半の寢覺

れて一册になつて居り、第二册・第三册も同樣である。これ等の諸本は何れも中間に數卷、終りに一卷ばかりの缺卷があるとされてゐる。別に、「國文學全史平安朝篇」には、中村秋香氏

のを惱みながら、子女達のことを哀れと思はれるなら、我を思せと中の君に迫る。中の君は數奇な自分の運命に歎きながら、父入道・故左大將への思惑、子女への愛、帝の求愛等に惱んで、いつそ出家でもしてしまつたらと考へながらも、一刻も早く內裏を退出したいと思ふ。帝は中の君の自分に靡かないのは、中納言のあるためである。中の君を得るためには御位を投げ捨てても構はないと御考へになる。〔卷四〕帝は中の君が靡かぬので、中の君と中納言との間の男の子まさこを、せめて忍ぶ草と思ひながら寵愛する。中の君は遂に勅許を得て內裏を退出し、故左大將の邸に歸つて、繼子や自分の實子などと昔を追懷したりして靜かに暮してゐる。この間にも、帝は尙侍とまさこを寵愛しながら、なほ中の君を思ひ切れず時々御消息がある。中納言も度々訪れ、二人の間に最初生れた長女を伴つて來たりして樣々に言葉を盡すが、未だ中の君は打解けない。一方、中納言と女一宮との仲は相變らず面白くなく、宮は重患にかゝり氣を失つたりすることもあつた。中納言は益々心を千々に碎く。中の君は、遂に京を避けて廣澤に退いてしまふ。これを聞いた中納言は驚き恨みながら、入道殿の御機嫌伺ひに名を藉りて尋ねて來たりする。〔卷五〕中の君は、遂に病に罹り、三四月經つても一向はかばかしくない。そして豫てからの望の通り、出家して憂き世を離れてしまはうと決心する。入道は大に案じて初めの中はこれに反對するが、遂には同意する。このことが尙侍と中納言の許に洩れる。中納言も最後の決心をして、若君・姫君等を伴つて廣澤を訪づれ、中の君に諄々と口說き、翌日は入道に一切を告白して許しを願ふ。入道も驚くが、過去のことは致し方なしと許し、二人の間の子女達をも愛し慈しむ。中の君は折角思ひ立つた出家のことも果さず、又懷妊の兆があり、前世の罪の深さを思つて鬱々として樂しまない。やがて賑かに別れの宴を終へて中納言の一行は京に歸る。帝は尙侍を愛しはしたが、未だ中の君のことを思ひ切れず、遂に讓位の決心をなさる。尙侍は懷妊され、中の君も、尙侍も共に男子を生む。女一宮と中納言との間は相變らず面白くなく、帝は又度々中の君へ御消息がある。中の君は、自分の過去を追懷して罪業の深さに歎きながら、來世にはと考へる（現存の諸本はこゝで終つてゐるが、「無名草子」「拾遺百番歌合」「風葉和歌集」等及び中村本によると、未だ後一卷位の記事があつたらしく、入道殿の七十賀、中納言が關白となること、帝の讓位、春宮の卽位、中納言の大君の入內、主人公夫妻の相愛等物語があつたらしい。恐らく最後の一卷も闕けて失はれたのであらう）。

【解說】この物語の構想は、平安末期の物語の常として、「源氏物語」に得るところが少くない。單に取材の方面に關してさう言へるのみでなく、作中の人物の性格及び特にそれを中心として展開される全體としての事象の色調までが、「源氏物語」のそれに影響されてゐることは爭はれない。例へばこの物語の主人公である中納言のまめやかさと宮の中將の色好みとは、「源氏物語」に於ける源氏と頭中將、薰大將と匂宮との對比に等しく、女主人公の中の君が年長の左大將に嫁し繼女三人を後見するのは、玉鬘と髭黑の大將及びその子女との關係に類してゐる。また卷一に扱はれてゐる兩主人公が、はからざる一夜の契に、爾後內的及び外的事情のため絕えず懊惱し、苦悶する構想は、源氏と藤壺との關係に等しい。同卷の宿直所に於て、中納言と宮の中將とが、色々の女の噂をして故意に僧都の姪の話等を持ち出す趣向は、また「源氏物語」の雨夜の品定めの摸倣と見るべきであらう。この物語に就いて注意すべきことは、その全體としてのムードの上に、前代の物語に見ることを得なかつた或る新鮮な氣分の認められることである。それはこの物語が、一方、平板な自然主義的な人生寫實の物語から離れて、物語製作上に相當意識した構想の變化をねらつてゐる傾向を有するためであると同時に、一方、卷三以下に於て、帝の位といふものが戀愛の前には全く無力なものとして描かれてゐる一例によつても分るやうに、現實的な榮位や權力よりも、より神祕的な內面的な深みのある或るものを欣求してやまぬ作者の性向、並に平安朝末期の浪漫的な時代性に因ると云つてよいであらう。

【參考】國文學全史平安朝篇藤岡作太郎○夜寢覺物語窓のともしび（系圖年立の研究書）橫山由清（帝國圖書館藏）○日本繪卷物集成第五卷解說田中一松○校本夜半の寢覺橋本佳○よはのねざめ藤田德太郎・增淵恒吉○濱松中納言物語末卷略考松尾聰（國語と國文學昭和六ノ四）○菅原孝標女その作品夜半の寢覺の形態に就いて同上（岩波講座日本文學）○寢覺物語繪卷に就いて增淵恒吉（同上）○現存夜半の寢覺は果して改竄本なるか橋本佳（思想昭和六ノ四）

【池田】

楊牙兒奇獄（よんげるきどく）

飜譯小說 【譯者】神田孝平 【原作】未詳 【成立・刊行】文久元年譯述（推定）。明治十年九月より十一年二月まで「花月新誌」に連載、明治十九年單行。

【由來】初め譯者は、和蘭政法の整備してゐることを語る實例として、同國の訟獄の奇案を輯錄した書册から「ヨンケル・ファン・ロデレイキ一件」と「靑騎兵並右家族共吟味一件」といふ二篇を抄出譯述して「和蘭美政錄」と題した。この稿本を友人成島柳北が借覽し、あまり面白いので將軍家茂に見せたが、江戶城炎上の折燒失してしまつた。ところが、その後「ヨンケル」の方の寫本だけが柳北の手に入つたので、彼はその文を省略修飾し、「楊牙兒奇獄」と題して自分の主宰する「花月新誌」に揭載した。そして「花月新誌」所載の分を編輯したものが坊間稀に見る單行本となつたのである。原本の「美政錄」は譯者の校訂を經て明治二十五年頃雜誌「日本之法律」に發表されたといふ。別に最近「ヨンケル」の方は吉野作造博士の苦心により譯者の手稿のまゝ明治文化全集第十四卷に採錄され、「靑騎兵」の方は、雜誌「明治文化」（昭和四ノ九・一〇）に發表されて、漸く完本となるに至つた。

【梗概】ゲ府大學の學生にヨンケル・ロデレイキといふ少年があつた。富貴の家の一人息子で、秀才であり、殊に戲曲を作るに巧みであつた。或る年の冬、學期終の親睦會で演じられた彼の喜劇（笑狂言）は殊に傑作と稱された。この冬彼は鄕里に歸るといつて學校を出たが、幾日經つても歸らない。父親は心配して百方搜索したが、その結果三週間ばかり經つて彼の死骸が道中の河の中から出て來た。それは見るも無殘な慘殺死體であつた。警察では下手人の探偵にかゝつたがどうしても知れない。いろ〳〵な人間を嫌疑者として拘引するが、際どいところになつて、皆さうでないことが分り、事件は迷宮に入る。然るに一年半ばか

り經つた頃、ヨンケルの學友の一人が役人になつてこの地方に來た。或る日用事があつて通行の途中一旅舍に休息した。その時物を書

天明二年二月一日生れ、安政五年（一八五八）六月二十七日歿す。享年七十七。【墓所】廣島城南長久寺【家系】寬政八年、十五歲で矢口家を嗣いだ。養祖父八郎平は小吏より譜代の格に昇進し、又養祖母は孝行の廉を以て褒賞され、小身ではあるが名譽の家柄であつた。彼の妻仲子は林氏の女、

楊牙兒奇

外には前例のないことで、廣島心學の權威と興隆との反映でもあり、基調でもあつた。【門下】廣島心學者には、實に人材が多かつた。增原丈四郎・林左仲太・久米道柳・安藤左文次・栗原如心・萬代又郎右衞門・宮本愚翁など一々枚擧するに遑がない。女流にはその妻仲子を

錄するところ、「樂記」は河間の獻王の作と云ふ。陳壽祺に據れば、漢の文帝の博士の作つた王制篇は、巡守封禪等の事を論じたものであることが「史記」封禪書に見えてゐるが、今の王制篇は恐らく別であらう。また「月令」は「周書」七十一篇中の第五十三篇で、呂不韋・淮南子等の本づくところで、呂不韋の作ではない。「樂記」は或は公孫尼子の作と云ひ史記樂

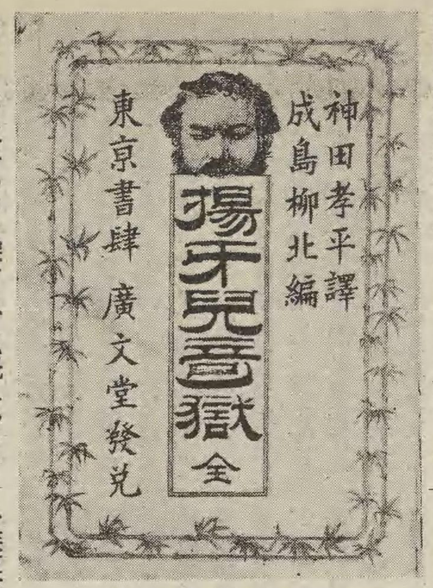
りして様々に言葉を盡すが、未だ中の君は打解けない。一方、中納言と女一宮との仲は相變らず面白くなく、宮は重患にかゝり氣を失つたりすることもあつた。中納言は益々心を千々に碎く。中の君は、遂に京を避けて廣澤に退いてしまふ。これを聞いた中納言は驚き恨みながら、入道殿の御機嫌伺ひに名を藉りて尋ねて來たりする。〔巻五〕中の君は、遂に病に罹り、三四月經つても一向はかゞしくない。そして豫てからの望の通り、出家して憂き世を離れてしまはうと決心する。入道は大に案じて初めの中はこれに反對するが、遂には同意する。このことが尚侍と中納言の許に洩れる。中納言も最後の決心をして、若君・姫君等を伴つて廣澤を訪づれ、中の君に諄々と口説き、翌日は入道に一切を告白して許し恐らく最後の一巻も闕けて失はれたのであらう。

【解説】この物語の構想は、平安末期の物語の常として、「源氏物語」に得るところが少くない。單に取材の方面に關してさう言へるのみでなく、作中の人物の性格及び特にそれを中心として展開される全體としての事象の色調までが、「源氏物語」のそれに影響されてゐることは爭はれない。例へばこの物語の主人公である中納言のまめやかさと宮の中將の色好みとは、「源氏物語」に於ける源氏と頭中將、薫大將と匂宮との對比に等しく、女主人公の中の君が年長の左大將に嫁し繼女三人を後見するのは、玉鬘と髭黒の大將及びその子女との關係に類してゐる。また巻一に扱はれてゐる兩主人公が、はからざる一夜の契に、爾後内的及び外的事情のため絶えず懊惱し、苦悶すいであらう。

【參考】國文學全史平安朝篇藤岡作太郎○夜寢覺物語窓のともしび（系圖年立の研究書）横山由清（帝國圖書館藏）○日本繪巻物集成第五巻解説田中一松○校本夜半の寢覺橋本佳○よはのねざめ藤田徳太郎・増淵恒吉○濱松中納言物語末巻略考松尾聰（國語と國文學昭和六ノ四）○菅原孝標女その作品夜半の寢覺の形態に就いて同上（岩波講座日本文學）○寢覺物語繪巻に就いて増淵恒吉（同上）○現存夜半の寢覺は果して改竄本なるか橋本佳（思想昭和六ノ四）

【池田】

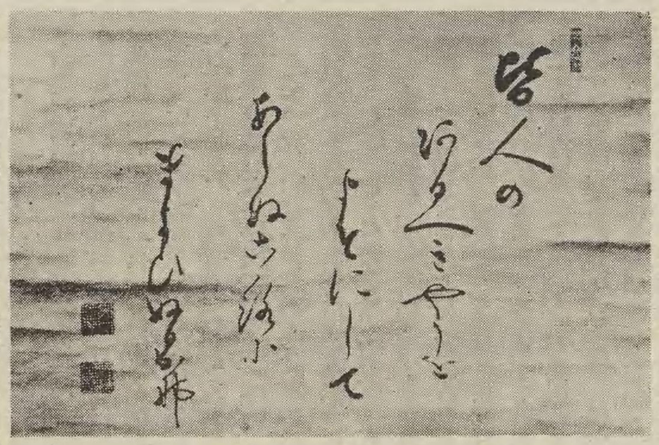
楊牙兒奇獄（やんげるきごく）　飜譯小說　【譯者】神田孝平【原作】未詳【成立・刊行】文久元年譯述（推定）。明治十年九月より十一年二月まで「花月新誌」に連載、明治十九年單行。



楊牙兒奇獄（初版）

天明二年二月一日生れ、安政五年（一八五八）六月二十七日歿す。享年七十七。【墓所】廣島城南長久寺【家系】寛政八年、十五歳で矢口家を嗣いだ。養祖父八郎平は小吏より譜代の格に昇進し、又養祖母は孝行の廉を以て褒賞され、小身ではあるが名譽の家柄であつた。彼の妻仲子は林氏の女、彼によつて心學の門に入り、遂に初入善導の免許を得た。増原丈四郎・林左仲太等も、三舍印鑑を授けられた程の立派な心學者となつたが、廣島心學は來應を開祖とし、且つ棟梁として、その一族道友によつて隆興したと見るべきであらう。【閲歴】京都心學・江戸心學と鼎立して、日本心學の三大勢力の一大要素となつたものは廣島心學で、來應はその指導者であつた。彼は文化十一甲戌年、伊豫松山の心學者田中一如に就いて心學修行の手引を受けたことが「矢口先生事跡書試」には記されてゐるが、その實、彼は享和以來屢々盡營舍の講筵に列してゐた。即ち大島有隣（別項）に導かれて心學の堂に上つたのであつた。文政元年には京都から三舍印鑑を授けられたが、翌二年二月に歡心舍に對立して提携する新講舍を建營する目的を以て敬信舍の舍號を京都から受けた。敬信舍は容易に設立の運びに至らず、二十五年を經た天保十三年正月に至つて漸く假講舍が出來上り、彼を舍主として舍開きの式を擧げ得た。彼の業績中最も特筆すべきは、斷書を豫め京都から預つて置いて、自からの認定によつて自由に下附し得る特權を明倫舍から獲得したことである。これは江戸の參前舍以外には前例のないことで、廣島心學の權威と興隆との反映でもあり、基調でもあつた。【門下】廣島心學者には、實に人材が多かつた。増原丈四郎・林左仲太・久米道柳・安藤左文次・栗原如心・萬代又郎右衞門・宮本愚翁など一々枚擧するに遑がない。女流にはその妻仲子を初めとして、萬代紐子・田上田鶴子の如き俊英があつた。わけても奥田頼杖・中村德水（各別項）が出たことは特筆に値する。

【石川（謙）】



矢口來應筆蹟

禮記（らいき）　經書　二十巻四十九篇【名義】禮の記錄の意。慣用的にライキと讀む。【著者】「漢書」藝文志には、「七十子後學者所レ記」と云ふ。周末漢初の儒家の手に成つたと思はれるものも少くない。孔穎達の「正義」には、「中庸」は子思、「緇衣」は公孫尼子の作、「月令」は鄭玄の説を引いて呂不韋の修むるところ、「王制」は盧植の説に據つて漢の文帝の博士の「明治文化」（昭和四ノ九・一〇）に發表されて、漸く完本となるに至つた。

【梗概】ゲ府大學の學生にヨンケル・ロデレイキといふ少年があつた。富貴の家の一人息子で、秀才であり、殊に戯曲を作るに巧みであつた。或る年の冬、學期終の親睦會で演じられた彼の喜劇（笑狂言）は殊に傑作と稱された。この冬彼は郷里に歸るといつて學校を出たが、幾日經つても歸らない。父親は心配して百方搜索したが、その結果三週間ばかり經つて彼の死骸が道中の河の中から出て來た。それは見るも無殘な慘殺死體であつた。警察では下手人の探偵にかゝつたがどうしても知れない。いろ〳〵な人間を嫌疑者として拘引するが、際どいところになつて、皆さうでないことが分り、事件は迷宮に入る。然るに一年半ばか

賴圓（らいえん）「賴政（よりまさ）」を見よ。

來應（らいおう）　心學者　【姓名】矢口直方。本姓增原氏。通稱八郎平、幼名幸次郎。【生歿】

ら

「賴政」を見よ。

錄するところ、「樂記」は河間の獻王の作と云ふ。陳壽祺に據れば、漢の文帝の博士の作つた王制篇は、巡守封禪等の事を論じたものであることが「史記」封禪書に見えてゐるが、今の王制篇は恐らく別であらう。また「月令」は「周書」七十一篇中の第五十三篇で、呂不韋・淮南子等の本づくところで、呂不韋の作ではない。「樂記」は或は公孫尼子の作と云ひ史記樂書正義・宋羅璧）、或は子貢と云ひ（宋胡寅）、或は荀子とも云ふ（元何異孫）。「檀弓」は子游の門人（陳澔禮記集説引劉氏説）、「禮運」は子游（宋胡寅・清姚鼐）、「仲尼閒居」は子夏の徒（姚鼐）、「坊記」「表記」二篇は子思の作と云ふ（宋羅璧）。その他の諸篇は皆作者を詳かにしない（大學・中庸二篇その項參照）。【成立】戰國時代――漢代初期。

【由來】秦火の後、漢の武帝の代、魯の共王が孔子の舊宅を毀つて他の諸經と共に「禮記」を得、河間獻王も亦諸儒をして遺經を蒐集せしめてこれを得たと云ふ（漢書）。而して「漢書」藝文志には、記百三十一篇（六藝略禮類）とあるが、共王・獻王の傳には共に篇數を闕くので、二王の得たところに果して幾許の異同があつたかは詳かでないが、「隋書」經籍志には鄭玄の「六藝論」を引いて、河間獻王が記百三十一篇を得たと云ひ、唐の陸德明の「經典釋文」も亦この説に從ふ。而して「漢書」藝文志の禮家には、「禮記」の外に、「明堂陰陽記」三十三篇、「孔子三朝記」七篇、「王史氏」二十一篇、「樂記」二十三篇、都合四種八十四篇を擧げ、即ち「禮記」の類は凡て二百十五篇となる。然るに「經典釋文」には劉向の「別錄」を引いて、古文記二百四篇と云ふ。その出入如何は今これを知ることが出來ない。漢初、禮を説く者に高堂生及び徐生の二派があつた。徐生は禮經を用ひ

ず、專ら禮容を敎授し、高堂生は儀禮十七篇を以て敎授した。高堂生の學が數傳して后倉（蒼）に至り、その門に、聞人通漢・戴德・戴聖・慶普の四人があり、後の三者は各々禮を以て家に名づけた。戴德を大戴、戴聖を小戴と云ふ。大戴は當時存在した「禮記」百三十一篇、「明堂陰陽」三十三篇等のうち八十五篇を撰んで禮を說き、これを「大戴禮記（だいたいらいき）」と云ふ。小戴は更にその要を取つて四十九篇とし、これを「小戴禮記」と云ふ。卽ち今の「禮記」である。今本の「大戴禮記」三十六篇は、八十五篇中「禮記」四十九篇を除いたもの。錢大昕の「漢書考異」には、「小戴禮記」の中、曲禮・檀弓・雜記は長篇であるために分つて上下としたので、實は四十六篇に過ぎず、これを大戴の八十五篇と合すれば、正に「漢書」の記百三十一篇の數に合ふと云ひ、甚だ巧な說の如くであるが、臆斷に過ぎぬ。又「隋書」經籍志に、戴聖本はもと四十六篇で、後漢の馬融が更に呂氏春秋月令・明堂位及び樂記の三篇を加へて四十九篇としたと云ひ、後人も亦往々これに左祖してゐるが（宋晁公武、明劉績等）、その誤であることは、先人の旣に論じたところである（經典釋文序錄・四庫提要・戴東原等）。劉向等の「七略」及びこれに據つた「漢書」藝文志に、二戴の「禮記」を收錄してゐないのは、二戴の記の取材が、所謂「禮」の記百三十一篇等の外に出なかつたがためであらう。【傳來】漢の宣帝の甘露三年（皇紀六一〇）詔して大小戴博士を立てた（「漢書」宣帝紀・儒林傳・藝文志）二戴の記は、各々取捨を異にし、自ら一家の學を成したが、後漢に入つて小戴の學が獨り盛んに、「大戴記」は漢代には一の註家もなく、後周の盧辨が註したのを嚆矢とする。かく二戴の學の盛衰が同じくないのは、その材料の取捨に優劣があつたからであらう。南北朝の學界には、鄭・王の二學が相對立して爭つたが、唐代に孔穎達等が勅を奉じて「五經正義」を撰ぶに當り、「小戴記」を取つて「大戴記」を用ひず、爾後「小戴禮記」は單に「禮記」と稱せられ、「大戴禮記」のみが舊名を存することとなつた。孔穎達の「正義」は、鄭玄系の梁の皇侃の疏を本とし、周の熊安生の說を以て補つたもので、太宗がこれを天下に頒布して、學者の敎科書となさしめて以來、鄭註が獨り行はれ、王肅の註は遂に亡佚した。前述の如く「禮記」は元來普通名詞であつたものが變じて固有名詞になつたばかりでなく、「禮經」に對する記に過ぎなかつたものが、遂に上つて「禮經」の地位を占めるに至つたものであるが、もと七十子後學者の筆に成つたものから取り、且つその篇次も小戴の定めたもので、後學の中にはその篇次を改め、或は改竄を加へんとした者もある。魏の孫炎の「禮記注」、唐の魏徵の「類禮」二十篇、元の吳澄の「禮記纂言」三十六卷等がこれである。

【內容】本書の諸篇中には、「儀禮」の註釋と見るべきものが頗る多い。例へば冠儀は士冠禮、少儀は士相見禮、射義は鄕射禮及び大射禮、燕義は燕禮、聘禮は聘禮、喪服小記・冠禮・大傳等は公食大夫禮・覲禮・喪禮等、喪大記・奔喪・檀弓・曾子問等は士喪禮・旣夕禮・士虞禮等、或は祭義・祭統等は特牲饋食禮・少牢饋食禮・有司徹等の註脚として見るべきが如き、これである。その他の諸篇は上述の如く諸學者の雜記で、必ずしも正統の儒家思想のみではなく、戰國末期から漢初にかけて勃興した道家思想の混入した所も亦少くないので、これを儒家の經典として見る場合には、宜しく取捨する所がなければならぬ。今重要な諸篇の要旨を述ぶれば、曲禮・內則は童幼を主として一家の禮則を記し、王制・文王世子は封建の制度を記し、月令・明堂位・祭統等は祭祀その他の曲禮を記した年中行事の如く、學記は學を爲（さだ）め敎を立つる事を記して、當時の敎育制度及び敎育法を察するに足り、禮器は禮の效果を、樂記は音樂の理論及び效用を述べ、經解・儒行は儒家發展の迹を記し、禮運は五帝三王以來の治法を引いて、文化發展の理法を敍べてゐる。（別に表章せられた「大學」及び「中庸」の二篇に就いては各々の項を參照）

【註釋書】禮記集說一百六十卷 宋衞湜 ○禮記集說三十卷 元陳澔 ○續禮記集說一百卷 清杭世駿 【參考書】禮書一百五十卷 宋陳祥道 ○三禮義疏一百七十八卷 清乾隆敕撰 ○五禮通考二百六十二卷 清秦蕙田

【宇野・木多】

賴豪阿闍梨恠鼠傳 らいがうあじやりくわいそでん 讀本

八卷十冊 【作者】曲亭馬琴 【畫工】葛飾北齋 【名稱】題材の一部に賴豪說話を取つてゐるのに據つたものである。【刊行】文化五年【諸本】曲亭馬琴翁叢書（野村銀次郎編）・馬琴傑作集（帝國文庫）・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）等所收。【題材】三井寺の賴豪阿闍梨が皇子降誕の祈禱に成功し、戒壇を許されんことを朝廷に願つて聽かれず、怨鬱鼠と化してこれを妨げ、延曆寺の經文を喰ひ破つたといふ傳說。これは夙く「源平盛衰記」「平家物語」に見えてゐるが、更にそれ等に軍記物語にある木曾義高や猫間中納言の事に基き、西行の猫の說話、晉の豫讓の故事、盲景淸の說話を配合して結構されたものである。

【梗概】源賴朝は、木曾義仲の勢盛んなるを怖れてゐたが、偶々一條忠賴の讒言により義仲の子義高を鎌倉に人質とした。義仲平家を討つて征夷大將軍を請ひ、容（い）れられずして白河院の使者猫間中納言光隆を辱しめ、家臣竹川正忠を捕へた。光隆はこれを償ふに家寶の金の猫を以てして憤死する。かくて義仲は賴朝の軍に攻められ、粟津の一戰に石田爲久に討たれる。さて鎌倉に在つた義高も賴朝に討たれんとするが、大姬の情によつて危きを逃れ、粟津に父を弔ひ、嘗て義仲が賴豪院の通力を賴みて願文を奉つた緣により、賴豪阿闍梨から妖鼠の術を授かり、石田爲久を箱根に討つて父の仇を報い、なほも賴朝に復讐しようと圖る。こゝに猫間光實は兄光隆の復讐を志してゐたが、義仲が戰死したので、その子義高を討たんとし、由井ケ濱で義高と邂逅するが、その妖術に本意を遂げず、義高が鎌倉を狙ふこともあらうと秩父庄司重忠に身を寄せた。然るに重忠は大姬が深く義高を追慕するので、義高を誘つて大姬を配した。かくて義高は旣に僞はつてこゝに在る乳母唐絲と諜し合せて賴朝の寢所に入るが、賴朝の手に渡つてゐた金の猫によりかの妖術は破れ、猫間光實とわたり合ふ。重忠二人をおし止めて訓戒し、義高には賴朝の狩衣を、光實には義仲の兜を與へた。狩衣には大姬、兜には唐絲の首があつた。大姬は孝と貞とに自害し、唐絲は事の成らざるを見て死んだのである。重忠の明智に服し、各々これを刺して豫讓の例にならひ、光實は猫間家を再興し、義高は目をくり拔いて粟津で行ひすました。

【構想】木曾義仲の子義高が源賴朝に對する復讐の企圖と、義仲に辱しめられて亡びた猫間光隆の弟光實の義高に對する復讐を中心としたもので、賴豪說話と猫間家の金の猫との

布置の上に、猫と鼠との因果關係によつてその葛藤を描いてゐる。また義高・光實が、十分同情をもつて扱はれてゐるのは、史實をも不公平不滿足なものとし、善惡が因果應報の理によつて嚴しく支配されてゐる人生に引直さうとする作者の見解によるものである。【史的地位】京傳と競爭的に活躍した時代のもので、文化三年に刊行された京傳の「昔話稻妻表

卷、三・四段目を中卷、以下を下卷とし、三段目馬の段などを省き、多少語句の補修等を加ふ）竹本筑後掾正本八行三十丁本がある。これは（校註）淨瑠璃稀本集（藤井博士編）所收。【題材】金平淨瑠璃の型を襲つたまでであるが、これより早い寬文三年版播磨掾正本「賴義金剛山合戰」に負ふ所が多く、部分的には謠曲「羅生門」や「融」などが加はつた。【鹽竈の段】はやはり播磨掾正

案で、鹽竈の景を見せる事となつた。この時、熊野の別當が賴親の賴光調伏の印を持つて訴へ出た。賴光は怒り泣いて、わが死後は必ず賴親の首を佛前に供へよと言ひ遺した。（紅葉の殿、鹽竈の段）賴光はこの殿にゐながら、鹽竈の景を樂しむ。美しい蜑少女の汐汲む風情の中に、しほじの翁がまじつて賴光の萬歲を祝つた。【五段】（賴光館）賴光は遂に五十

筑後掾によつて「古播磨風筑後丸」に收められた。本曲の流行は、改作と見られる「多田院開帳」（近松門左衞門作か。元祿八年三月。竹本座）や、後編と見られる「文武五人男」（同人作か。元祿中竹本座上演か）などを生じた。又改作の形式を追つた新作「賴光新跡目論」（別項）の發生も注意される。江戶歌舞伎の元祿年中の傑作「源平雷傳記」（別項）も本曲に負ふ所が多い。

と四十六篇で、後漢の馬融が更に呂氏春秋月令・明堂位及び樂記の三篇を加へて四十九篇としたと云ひ、後人も亦往々これに左袒してゐるが(宋衷公武、明劉績等)、その誤であることは、先人の既に論じたところである(經典釋文序錄・四庫提要・戴東原等)。劉向等の「七略」及びこれに據つた「漢書」藝文志に、二戴の「禮記」を收錄してゐないのは、二戴の記の取材が、所謂「禮」の記百三十一篇等の外に出なかつたがためであらう。【傳來】漢の宣帝の甘露三年(皇紀六一〇)詔して大小戴博士を立てた(「漢書」宣帝紀・儒林傳・藝文志)二戴の記は、各々取捨を異にし、自ら一家の學を成したが、後漢に入つて小戴の學が獨り盛んに、「大戴記」は漢代には一の註家もなく、後周の盧辨が註したのを嚆矢とする。かく二戴の學の盛衰が同じくない

寶を加へんとした者もある。魏の孫炎の「禮記注」、唐の魏徵の「類禮」二十篇、元の吳澄の「禮記纂言」三十六卷等がこれである。

【內容】本書の諸篇中には、「儀禮」の註釋と見るべきものが頗る多い。例へば冠儀は士冠禮、少儀は士相見禮、射義は鄕射禮及び大射禮、燕義は燕禮、聘禮は聘禮、喪服小記・冠禮・大傳等は公食大夫禮・覲禮・喪禮等、喪大記・奔喪・檀弓・曾子問等は士喪禮・既夕禮・士虞禮等、或は祭義・祭統等は特牲饋食禮・少牢饋食禮・有司徹等の註脚として見るべきが如き、これである。その他の諸篇は上述の如く諸學者の雜記で、必ずしも正統の儒家思想のみではなく、戰國末期から漢初にかけて勃興した道家思想の混入した所も亦少くないので、これを儒家の經典として見る場合には、宜しく取

本 八卷十册 【作者】曲亭馬琴 【畫工】葛飾北齋 【名稱】題材の一部に賴豪說話を取つてゐるのに據つたものである。【刊行】文化五年【諸本】曲亭馬琴翁叢書(野村銀次郎編)・馬琴傑作集(帝國文庫)・曲亭馬琴集(近代日本文學大系)等所收。【題材】三井寺の賴豪阿闍梨が皇子降誕の祈禱に成功し、戒壇を許されんことを朝廷に願つて聽かれず、怨靈鼠と化してこれを妨げ、延曆寺の經文を喰ひ破つたといふ傳說。これは夙く「源平盛衰記」「平家物語」に見えてゐるが、更にそれ等に軍記物語にある木曾義高や猫間中納言の事に基き、西行の猫の說話、晉の豫讓の故事、盲景淸の說話を配合して結構されたものである。

【梗概】源賴朝は、木曾義仲の勢盛んなるを怖れてゐたが、偶々一條忠賴の讒言により義仲

義高を誘つて大姬を配した。かくて義高は既に僞はつてこゝに在る乳母唐絲と謀し合せて賴朝の寢所に入るが、賴朝の手に渡つてゐた金の猫によりかの妖術は破れ、猫間光實とわたり合ふ。重忠二人をおし止めて訓戒し、義高には賴朝の狩衣を、光實には義仲の兜を與へた。狩衣には大姬、兜には唐絲の首があつた。大姬は孝と貞とに自害し、唐絲は事の成らざるを見て死んだのである。重忠の明智に服し、各々これを刺して豫讓の例にならひ、光實は猫間家を再興し、義高は目をくり拔いて粟津で行ひすました。

【構想】木曾義仲の子義高が源賴朝に對する復讐の企圖と、義仲に辱しめられて亡びた猫間光隆の弟光實の義高に對する復讐を中心としたもので、賴豪說話と猫間家の金の猫との

布置の上に、猫と鼠との因果關係によつてその葛藤を描いてゐる。また義高・光實が、十分同情をもつて扱はれてゐるのは、史實をも不公平不滿足なものとし、善惡が因果應報の理によつて嚴しく支配されてゐる人生に引直さうとする作者の見解によるものである。【史的地位】京傳と競爭的に活躍した時代のもので、文化三年に刊行された京傳の「昔話稻妻表紙」(別項)に用ひた題材に據り、又同年の刊行に係る京傳の「善知鳥安方忠義傳」(別項)の主人公木曾義高をもこれに移してゐる。而も京傳は賴豪說話を「本朝醉菩提」(別項)「濡燕子宿傘」(文化十一年)に用ひてゐるのを見ると、兩者の競爭心が見られる。この作は文化五年十一月大阪の大西の芝居に、「軍法富士見西行」の名題で興行された。當時流行した作品の一つであらう。【價値】事件の發展と變化に富み、首尾照應して巧妙を極めた趣向と云へる。とにかく說話構成上に非凡な能力が見られる。併しそれは、彼自ら趣向の苦心を門人魁蕾癡叟の名によつて讀者に告げてゐるやうに、結構のための結構である嫌ひがある。又引用群書要語の項を設けて、語彙の典據を擧げてゐるやうに、知識のための知識を誇つて、共に不自然さを增した觀がある。【笹野】

【參考】曲亭馬琴傑作集解說

賴光跡目論 らいくわうしあとめろん

淨瑠璃 五段又は三段 時代物【名稱】序に綴られた源賴光の跡目爭論の條による。【作者】未詳【成立】寬文末か【諸本】延寶五年版井上播磨掾正本繪入十七行十三丁本が現存の最も古いものかと思はれるが、その初版は寬文末頃にはあつたらしい。これは新群書類從第五歌曲に收められた。別に三段に收めた(原四の序ニ段を上

卷、三・四段目を中卷、以下を下卷とし、三段目馬の段などを省き、多少語句の補修等を加ふ)竹本筑後掾正本八行三十丁本がある。これは校註淨瑠璃稀本集(藤井博士編)所收。【題材】金平淨瑠璃の型を襲つたまでであるが、これより早い寬文三年版播磨掾正本「賴義金剛山合戰」に負ふ所が多く、部分的には謠曲「羅生門」や「融」などが加はつた。「鹽竈の段」はやはり播磨掾正本明曆四年刊「紅葉狩」から得たものである。【梗概】〔序段〕(賴光館)源賴光の病勢思はしからぬため、子息賴親を初め武藏守渡邊の綱・播磨守平井保昌・三河守坂田金時・遠江守碓井定光、駿河守卜部季武等の四天王と渡邊の弟三田の源太廣綱その他諸大名が詰めてゐる所へ、朝廷から跡目を奏上せよとの勅使が下つた。四天王は酒色に耽る賴親を排し、賴光の弟賴信にすべき意見に一致したが、廣綱獨り賴親方で、論爭となり、終に廣綱は諸國修行に名をかりて、髻を切つてその場を立ち去る。〔二段〕(賴親館)賴親はこれを耳にして、乳人杉田平八と語らひ反旗を飜して上洛する。(越前杣山)都からは、わうまう二年五月二十六日、坂田金時を將として五千餘騎を以て攻め上つたが、賴親方は頑強に戰ひ、その將二の瀨源六は都方の勇士七人まで首を拔いた。併し八人目に出た大將金時のために首を落された。〔三段〕(杣山)賴親方が崩れ立つや、平八は數へて城に火を放たせ落してやつた。金時は、これを豫知して逃したのであつた。(賴光館)凱陣の上、病氣の賴光の慰めにもと、櫻の馬場に於て將士の勇姿を見せる。(馬之段)賴光はこれを一々點檢する。〔四段〕(賴光館)典藥は賴光の病氣回復には心氣を晴らすやうにと申上げる。四天王が考へた末、渡邊綱の

案で、鹽竈の景を見せる事となつた。この時、熊野の別當が賴親の賴光調伏の印を持つて訴へ出た。賴光は怒り泣いて、わが死後は必ず賴親の首を佛前に供へよと言ひ遺した。(紅葉の殿、鹽竈の段)賴光はこの殿にゐながら、鹽竈の景を樂しむ。美しい蜑少女の汐汲む風情の中に、しほじの翁がまじつて賴光の萬歲を祝つた。〔五段〕(賴光館)賴光は遂に五十四歲で歿したが、その初七日の通夜に當り、賴親は和泉の國吹井の浦で再擧をはかつた。(戰場)これに向つた四天王は、賴親の强弓に射すくめられる。金時が勇に逸つて立ち向ふのを抑へた綱は、謀つて賴親と組み、終に生捕つて都に上つた。

【解說】金平淨瑠璃(別項)の影響が上方に及んだ產物であるが、金平淨瑠璃としては相當人情も加味して後期に屬する脚色となる。但し金時が勇を代表し、綱が智を代表する所は、やはり金平淨瑠璃の型を襲つたものである。金平淨瑠璃としての見せ場は、二段目の越前杣山の場であらう。鹽竈之段は「紅葉狩」からとつたのであるが、挿入の筋としては「紅葉狩」よりも自然である。馬之段と鹽竈之段と節事を二箇所に入れたことが、やゝ煩瑣の感を與へぬでもないが、當時としては、播磨掾としての最も努力し、又成功した方面であるから、却つて舞臺の成功は想像せられるのである。播磨掾の淨瑠璃の效果は、節事の外に機巧によるのを特徵としてゐるが、本曲は後者にあまり力が注がれて居らぬ。而も場面の照應と所謂愁ひと修羅とを巧みに容れた音曲的成功とは、本作を以て彼の語り物中、傑作の一と推されると思ふ。鹽竈之段と馬之段とは彼の筋事の代表となつた。又後者は「馬ぞろへ」として

筑後掾によつて「古播磨風筑後丸」に收められた。本曲の流行は、改作と見られる「多田院開帳」(近松門左衞門作か。元祿八年三月。竹本座)や、後編と見られる「文武五人男」(同人作か。元祿中竹本座上演か)などを生じた。又改作の形式を追つた新作「賴光新跡目論」(別項)の發生も注意される。江戶歌舞伎の元祿年中の傑作「源平雷傳記」(別項)も本曲に負ふ所が多い。

【參考】繪入淨瑠璃史 水谷不倒 ○古淨瑠璃研究 同上(日本文學講座) ○校註淨瑠璃稀本集 解說 藤井乙男 【守隨】

賴光新跡目論 らいくわうしんあとめろん

淨瑠璃 五段 時代物【名稱】賴光跡目論による新作の義。【作者】紀海音【興行】寶永七年正月二日豐竹座興行(明和版「外題年鑑」)【諸本】七行八十一丁本・紀海音淨瑠璃集(續帝國文庫)所收。【題材】「賴光跡目論」(別項)に據つたものであるが、關ケ原合戰を脚色してゐる。源賴光・賴親は秀吉・秀賴であり、賴信が家康である。松名兵左衞門は石田三成、幾島左近が島左近である。

【梗概】〔序〕(源賴光館)賴光の病篤しと聞いた弟賴信は、見舞として四天王等を同道したが、賴光の病疫を察して皆喪服を着けたのを、病中身近に仕へた松名兵左衞門道成がこれを咎める。坂田金時は憤つて御簾を切落すと、そこには三日前に死んだ賴光が常服で端坐してゐる。兵左衞門は賴信の上洛を待ち、若君賴親をして將軍宣下をうけて後、披露せよとの遺言であつた故と報ずる。賴信等は兵左衞門の心事を訝かる。(松名兵左衞門下屋敷)賴親の後見役たる侯人の幾島左近が兵左衞門を訪ねて、乾先生の子主稅之助が當代の軍學家故、一味に入れるやう進言する。恰もこの屋